# 異世界への人材派遣

双静寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

**注意事項**

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界への人材派遣

【Ｎコード】
Ｎ２２５７Ｔ

【作者名】
双静寺

【あらすじ】
人の枠から外れつつある一人の男。彼は今居る世界での自分の役割はもう終わったと悟り、この世界から去る事を決断する。
仲間と共に旅に出ようとした矢先、見慣れぬ扉が彼の目の前に現れた。
「これは新しい世界へのご招待と言う事なんだろうか……」
ちょっと不思議な生い立ちの男が異世界で生活して行く物語。

多種多様な仕事や種族が存在する世界で、自分が派遣された理由を考えて生きて行く。

※１０月３日　第四章スタートしました。

## プロローグ「世界と世界意思と」（前書き）

ご都合主義や独自設定も多くあり、色々と読むに耐えないかもしれません（汗）

主人公の一人称視点がメインとなります、また主人公の性格が大きく途中でかわったりもします

# プロローグ「世界と世界意思と」

《世界》とはどの程度の規模の事を指すのだろうか？
それは大陸であったり星であったり、はたまた小さな村であったり、その基準は非常に曖昧ではあるのだが。
ここで言う《世界》とは、その《次元》に生きる物が暮らす全ての場所を指すと思ってくれると判りやすいだろう。

そして《世界》には問題も生まれる。
その最たる物として上げられるのは、長い年月を経て、知能を持った種同士の争いだ。

知能がある故に戦は広がり《世界》へも深刻な傷跡を残すことへと繋がって行く。

そんな問題を解決するのは《世界の意思》と呼ばれる物である。
それは時に全ての文明が滅びるような自然災害であったり、時と共に人々の心が変化し平和へと向かって行くなど。

あるいは“英雄”と呼ばれるような者が生まれ、争いを終結させたりと多種多様であるが、どのような過程を経てどのような結果になるのかは誰にも判らない。
それこそ《世界の意思》次第である。

だがそんな絶対的な意思も、時と共に疲弊し消えて行き、自分の力だけでは解決出来なくなって行く。
それはまるで、老いた生物が自分の力だけでは生きて行けなくな

るように……。

ではそうなってしまった《世界》はどうするのか？

## 第一話「異世界への誘い」（前書き）

本当に実際に物語を書いて行くのは難しいですが、書いてる時間がとても楽しいのまた事実です。

表現の加筆、誤字や文法の修正をしました。

# 第一話「異世界への誘い」

世界には“英雄”が存在する。
未曾有の災厄や大きな戦争、そういった物を解決する“役者”
役者に選ばれるのはその世界の住人であり、観客やエキストラが
その役に付く事は出来ない。
エキストラとして世界と言う舞台に立ち、自分の役を演じきった
一人の男が今、その舞台を降りようとしていた。

男の名は「カノン・シュテルン」少々長く生き過ぎた、人の身に
は過ぎた力を持った人物。

「ふぅ、こんなものか」

俺は一人呟き、長年過ごした自分の部屋を眺める。
生活観が失われた自分の部屋を見ると、少し“寂しい”という思
いが芽生え、僅かに苦笑いを浮かべ「らしくないな感傷に浸るなん
て」と思わず呟いてしまう。

改めて自分の手荷物の少なさと、部屋に残された多くの思い出の
詰まった品々を見比べ、

「本当に割り切った性格をしているな」とまたぼやく。

この世界での役目は終わったのだ。もう此処に自分の力は必要はないし、余りに長く留まり過ぎると、今度は自分自身がこの世界の問題に成りかねない。

強い力というのは云わば“強力な薬”
併用し過ぎて、副作用で悪影響を及ぼす。なんて事も起き得るのだから。

ならば人知れず此処から去るしかないだろう。隠居して誰とも関わらず暮らす、という手もあるが、仲間達にまでそんな不自由な生活をさせたくは無い。
だから此処を去るのが一番だと決断したのだ。

「よし、じゃあ行くかな」

そう、一人誰も居ない部屋へ最後に別れを告げるように言い、住み慣れた自分の世界に背を向けた――――が。

「なんだコレは？」

目の前には本来あるべき外へと続く扉ではなく、白い石造りの、どこか厳かな雰囲気の扉。
それを見て思わず呟く。

「これは新しい世界へのご招待と言う事なんだろうか……」

これまでの経験上無い話しじゃないが、俺一人を呼び出している

のか？　コレは。

とりあえず仲間に連絡入れておいた方がいいな……。

通信機を手に取り、目当ての相手に連絡を入れ、２コールの後通信機の向こうから声が聞こえてくる。

『もしもしカノンですか？　どうかしましたか？　もう皆船に待機して、後は貴方が到着したら出発出来るのですが』

通信機の向こうの、少し急かすような声色に思わず苦笑いを浮かべながら用件を伝える。

「ああ、すまないルシ。どうやら俺への御指名のようだ。少し出かけてくるが、どれ位時間が掛かるか検討もつかないんだ。だから皆にはもう少しこの世界でバカンスでも楽しんでるように伝えてくれないか？」

長年連れ添った相棒へ簡潔に用件を伝える。彼ならこの言葉の意味する事も瞬時に理解出来ただろう。

『御指名……また一人で行ってしまうのですか。それキャンセルしてこちらにこれませんか？』

中々無茶な要求して来るなコイツ。

「いや無理だな、外に出る為の扉が変わっちまってるんだ。つまり『いいから来い』って事なんだろう」

『しょうがないですね、どうせそっちでいくら時間が掛かってもこちらに戻って来るのは今と然程変わらないタイミングなのでしょう

？　精々バカンスを楽しむ事にしますよ、ではお気をつけて』

そう言われ通信を切られてしまった。

まあ実際時間にどの程度のズレが出来るかは俺にも分からないんだが。

「通信終了っと、それじゃあ行ってみますかね」

考えても仕方が無い、少し気合を入れ直す。

出来れば今度の世界では余り殺伐とした仕事はしたくないのだが……。

そう心の中で淡い希望を持ちながら、白い扉へと向かう。

扉を潜るとそこは真っ白な世界だった。

天井も無ければ地面も無く、ただ白い空間。

にも関わらず、確かに其処に立っている、という感触を足の裏に感じる。

そして目の前には人の形をした光のモヤみたいな物。

なんだ、案内人か？　出来ればもう少し親しみやすい姿で来て貰いたいんだが。

「これが今出来る精一杯の姿なんだけどね？」

「む、人の考えを読むな失礼な」

思わず言い返したが、気分を害したらマズイかもしれない。

「まあこの程度で怒ったりはしないし、君と僕の仲じゃない？　気楽に行こうよ」

「いや、こんな人間離れした知り合いは……居ない事もないが少なくとも貴方とは初対面だと思うのですが」

記憶を遡っても覚えが無い、声は聞いたような気もするが……？

「まぁいいや、君を呼んだのはちょっとお願いがあってなんだ」

だろうな、じゃなきゃ呼ばないよな。

「で？　どんなお願いですかモヤモヤさん」

とりあえず気楽にと言うので親しみを込めてあだ名を考えてみたのだが。

「モヤモヤさん……まぁいいや。君のその経験と力を最大限に発揮出来る世界があるんだ、興味はないかい？」

俺のネーミングはお気に召さなかったようだ。

しかし……また怪しい団体やら如何わしい事業団体みたいな誘い文句だなこれは。

「また怪しい団体やら如何わしい事業団体みたいな誘い文句ですねソレは」

「君、それ語尾が変わってるだけで思った事と口に出したこと同じ

だよね？　正直は美徳だけどさ」

余計なお世話だ。実際そんな甘い話に釣られて酷い目に合うなんて話しは掃いて捨てる程あるのだから。

「で、具体的にはどういった世界なんですか？　そこは」

するとモヤモヤさんは、今までの何処か飄々とした様子を潜ませ真剣な様子で言う。

「そこはね、世界の意思が朽ちてしまっているんだ。だから英雄も生まれないし、時が癒してくれる事もない。ゆっくりとだけど、確実に終わりに向かっている世界なんだ」

英雄の生まれない世界、新たな時代へと繋がらない世界。そんな世界に俺が行って何をすればいいんだ？

「そこで俺はどう動けばいいのですか？　どんな問題が待ってるんですか？」

「それは僕にも分からない。ただその世界からお願いされてね、だから君みたいな“人間”を派遣しようって事」

人間……か。

こんな俺でも、まだ人間と呼んでくれるのか、このモヤモヤさん……いや神様は。

「お、やっと分かった？　神って言ってもそこまでの力は無いんだけどね。でどう、行ってくれる？」

まあ元よりそのつもりで来たんだ、覚悟は等に出来ている。

しかし随分軽いノリだな神様。

「構いません、しかしただ行けば良いという物でもないのでしょう？　何か決まり事等はないのですか？」

「うん、それなんだけどね。君の力は少々その世界には毒なんだ、強すぎる。だからこっちから制約をかけさせて貰うけどいいかい？　あと敬語はいらないよ、頭の中の言葉と同じで構わない。なんかムズムズするし」

「それもそうか。制約については構わない、ただ出来ればこの身体で居たいんだが構わないだろうか？」

「それは大丈夫だよ、純粋に“人としての君の力と経験”はそのまま引き継がれる。それと問題が解決するまで君は不老不死でいてもらうからね？　まぁ外見年齢は多少操作できるようにするけど。それと今から行く世界に持っていける荷物も明らかなオーバーテクノロジーと判断した物はこっちで預からせてもらうからね？」

どうやらその世界は先程まで居た世界に比べて文明レベルが低いらしい。

しかし困ったな、いきなり全裸の男が現れたらパニックだろうし、丸腰じゃ危険だろ絶対。

「あ、服くらいはいいよ？　地味めの奴適当に着せておくから。後その世界でも再現可能な物なら持ち込めるから安心してよ」

そうか、それを聞いて安心した。

全裸で転送なんてされたら下手したらスタート地点にすら立てないからな。

「では武器は金属製の物ならいいか？　後この“カラーチェンジャー”も出来れば持って行きたいのだが」
“カラーチェンジャー“とは文字通り色を変えるツールだ。
身に着けている物や肌の色、体毛の色、瞳の色を任意で変更する小型装置。まぁオシャレに気を使う人間の知恵の結晶と云った所だが、色々と便利だから是非持って行きたいのだが……。

「武器はいいとして、うーん、まぁ髪は染めれるし目も道具とか魔術とかで誤魔化せるしギリギリ……あ、でも肌の色はアウト。その機能だけは封印させて貰うよ？」

ふむ、まぁその程度なら別にいいか。しかし肌の色が制約対象とは、人種問題でもあるのだろうか……ん？　待てよ今
「魔術？　その世界にも魔法のような物があるのか？　なら今俺が習得してる魔法も使用可能なのか？」
これはちょっと嬉しい誤算だ。魔法が一切ない世界だと色々行動が制限されてやり辛い。

「あるよ、ただその世界の魔術理論から著しく離れた魔法は封印させて貰うよ？　飛行魔法とか」

まあ飛行魔法は無くてもいいか、あまり使ったことが無いのだし。
「分かった。じゃあ条件はこれで全部って事でいいか？」
「うん、じゃあそろそろいいかな？　半径3キロには知的生命体が居ない所に転移させるけど問題ないよね」

誰かに見られないのなら良いだろう。ただ出来れば一日歩いた距離に町や村がある場所が望ましいが……あ、言葉とか通じるのかこれ。

「大丈夫ちゃんと通じるよ。言語も一部の少数民族や異形の言葉以外は全部統一されてるから、一番使用率の高い言語を使えるようにしておくよ」

「分かったじゃあ始めてくれ」

さて、今度はどんな世界だろう？　出来ればおいしい食べ物があって平和な世界ならいいが、そんな平和な世界ならそもそも助けなんて呼ばないよな。

「ま、君ならなんとかやって行けると思うよ。じゃあ頑張ってね、見守ったりは出来ないけど期待はしてるんだからさ」

その言葉を聴きながら次第に意識が遠くなって行くのを感じる。最後に一瞬だけ、神の姿をはっきり見たような気がした。

## 閑話「仲間達」（前書き）

たまにこういった閑話を挟んで行く方針です。

追記　加筆や文法の修正や誤字の修正しました。

## 閑話「仲間達」

「ルシフェルさーん！　みんな搭乗し終わりましたよー！　後はカノンさんとルシフェルさんだけですー！」

おや、もう皆乗り込んでしまいましたか。
しかし遅いですね。カノンは何をしているのでしょうか。

こんな事なら荷造りの手伝いに誰か向かわせるべきでしたね……。
『ピピピ　ピピピ』
おや？　通信ですか。カノンからみたいですね。

「もしもしカノンですか？　どうかしましたか？　もう皆船に待機して後は貴方が到着したら出発出来るのですが」
まだ私は乗っていませんし、皆搭乗したばかりですがこう言って急かしてみましょう。

『ああ、すまないルシ。どうやら俺への御指名のようだ。少し出かけてくるが、どれ位時間が掛かるか検討もつかないんだ。だから皆にはもう少しこの世界でバカンスでも楽しんでるように伝えてくれないか？』

彼はちょっと出張にでも行くような軽い口調で告げてきます。
そして彼の言う“御指名”
彼は時折姿を消すことがあります。
何処に言ってたのか聞くと「ちょっと異世界で冒険してきた」やら「とても平和な世界で料理の鉄人になった」等とふざけた事を言いますが、紛れもない事実なんでしょうね。

消えて戻って来る度に、私達の知らない技術や魔法、それを裏付けるようなお土産を持って帰ってくるのですから。

以前『たった二三日で何が出来るのですか』と聞いた所『いやな、四十年以上そこで暮らしていたんだ』と答えられた事もあります。

時空の乱れ？　私にはよく分かりませんが、なんとも都合の良い事で……。

「御指名……また一人で行ってしまうのですか。それキャンセルしてこちらにこれませんか？」

正直に言うと、彼が一人で何か大変な問題に首を突っ込んでいると思うと、心配であると同時に少し悔しいという思いもあるのです。

私では力不足なのか？　何故一緒に行くことは出来ないのか？そういった思い。

『いや無理だな、外に出る為の扉が変わっちまってるんだ。つまり『いいから来い』って事なんだろう』

何故彼だけがそんな見えざる何者かに連れられて行くのか、納得は出来ませんが私ではそれを止める権利も方法もありませんし、潔く送り出しておきましょう。

「しょうがないですね、どうせそっちでいくら時間が掛かってもこっちに戻って来るのは今と然程変わらないタイミングなのでしょう？　精々バカンスを楽しむ事にしますよ、ではお気をつけて」

そう告げて、少々八つ当たり気味に通信を切る。
我ながら格好悪いですね、まぁたまには息抜きもいいでしょう。
さて――皆にはどう説明したらいいものでしょうか。

「申し訳ありません、皆さんちょっと集まって下さいませんか？」
始めにそう皆に告げ、会議室に集合して貰い説明を始める。

「皆揃いましたね？　先ほどカノンから連絡が入り、緊急の仕事が入った為出発を見送るそうです」
彼の事情を知らないメンバーもいますから、適当に仕事と言っておきましょう。
やはり突然の予定変更に戸惑うメンバー達『またかあの人は……』なんて顔をした者が大半なのですが――

「えー！　何よソレ、こっちは職場も友人関係も清算して、後は旅立つだけって状態なのよ！？」

と一人怒り出したのは、髪は黒と云うよりは濃い紫のショートボブ、意思の強そうな碧眼を持ち、女性としては背が高く１７０ｃｍ程あり、そして女性的で男性なら釘付けになるような見事な肢体の持ち主。このメンバーの古株であるレナです。
まぁ彼女の言い分も最もですし、どう説得するべきでしょうか。

「落ち着けレナ。今に始まった事じゃないだろう。それにどうせ一週間もかからないのだろう？」

そう怒り出したレナを宥めつつ、私に問いかける彼女はレナとは対照的に、銀と云うよりも白と呼ぶべき腰まである長い髪を持ち、身長は１５０ちょっとといった所。
少し小柄でスレンダーな体格。
小柄な体型とは対照的に、空色の鋭い眼差しを持ち、少々厳しい印象を相手に与える女性。
私と同じくこのメンバーの最古参で、彼の姉でもあるユエです。

「ええ、恐らく二三日で戻って来ると思うんですが、その間は自由行動でいいと言っていました。折角ですから行ってみたい所や見てみたい物があれば、自由に散策してもいいと思いますよ？」
と言う言葉に、戸惑いつつも嬉しそうな表情を浮かべる面々。

これまで働き詰めでしたし、皆もしたい事の一つや二つはあるでしょうしね。私もこの世界の娯楽には疎いですし、この機会に色々と体験して見るのもいいかもしれません。

「む～ユエもルシもそう言うならいいけどさ、でもどうしよう？私達一応もうここには居ないはずの人間なんだよ？　下手に動いて見つかったら色々面倒だと思うんだけど」

たしかに彼女の言う事にも一理あります、まあ変装して過ごすしかないでしょう。
「カラーチェンジャーで変装でもするしかないでしょうね、後なるべく以前の知り合いの居る場所に近づかない事。後はそうですね…出来るだけ目立つ行動を控える事です、特にレナ貴方はね」

「何よ～まるで私がいつも問題起こしてるみたいじゃないのよ～」
そう彼女に注意をすると、まるで子供のように頬を膨らませ不満

そうな顔を私に向けてくる。
「事実そうでしょう？　くれぐれも暴れたりしないようにお願いしますよ」
「何で私だけ……」

まだブツブツとぼやいていますが、まぁいいでしょう。
ユエも恐らく一緒に行動してくれるでしょうし。
「ユエ、レナのお目付け役は頼みましたよ」
「分かっている、それと後で説明してくれるのだろう？」

彼女もまた彼の事情を知っている人物なのですが、彼女にも彼から直接連絡を入れるべきだとは思うのですけど。
「いつものアレですよ、それ以外は特に説明のしようがありません」
「そうか、まぁカノンなら大丈夫だとは思うんだけどな」

彼女も自分の弟を信頼しているのか、それとも放任しているのか、アッサリと引き下がる。
「ええ、お土産でも期待していましょう」

まさかそのお土産でまた一波乱あるとは、この時は思いもしませんでしたが……。

## 閑話「仲間達」（後書き）

カノンの通信の相手と、その他の仲間達の御話でした。
本編には余り関わりはありません。

## 第一話「三つ目が通りかかる?」（前書き）

初の戦闘描写になりますが、本当に一瞬で終わるので臨場感も緊張感もありません（汗）

文法の修正、表現や描写の加筆をしました。

# 第一話「三つ目が通りかかる？」

気が付くと草原の真っ只中に居た。

久しく味わっていなかった自然の香りが、風に乗って鼻腔を擽る。
そして見上げると、青くどこまでも澄んだ空が広がっていて、その眩しさに思わず目を細めてしまう。少なくともこの世界にも太陽はあるようだ。

とりあえず現状の把握とこれからの行動について考える。

「まずは持ち物と装備の確認をするか」

足元には大きめの皮袋が置いてり、どうやら俺の荷物はこの中に入っている様だ。
中には想像通り、俺が白い部屋に入る直前まで持っていた荷物の一部が入っていた。
武器は刀剣等の接近用の物しか入っていない事から、どうやらこの世界には魔法や科学の力を利用した銃器は存在しないようだ。

そして次は自分の服装。
先程まで俺は、私服の上から丈の長いコートを羽織っていたのだが、今の服装は“いかにも旅人”といった具合だ。

下半身は丈夫そうな生地で作られた“カーゴパンツ”と呼ばれる、ゆったりと余裕があり、ポケットが多めの物を履いており、上半身は恐らく綿のような植物性の綿毛から紡がれたであろう、柔らかなシャツ。そしてその上から少々ゴワゴワしているが、丈夫そうな革製のジャケットを羽織っている。

これは硬化処理を施してあるのか、皮鎧のような効果も期待出来そうだ。

「とりあえず一本は武器を持っていた方がいいよな」

取り出したのは昔から愛用していた“刀”と呼ばれる片刃の剣。
少々特殊な素材で作られていた為、魔法的な付与効果があった筈だが、ここではただの黒みがかった刀になっていた。
それでもちょっとやちょっとじゃ刃こぼれしたり、折れたりしないと信じたいが……。

ちなみに元々は接近戦の際には両刃の片手剣を愛用していたのだが、姉が使っていたのを見て憧れた為に使い始めた。
今では一番のお気に入りの武器だ。

他にも幾つか使っていた武器が入っているが、今は必要ないだろうと刀のみを腰のベルトに差込み紐で結びつける。

“カラーチェンジャー”は宣言されていたように肌の色以外は自由に変更出来るようだ。
これで変装などして行動の幅を増やす事が出来る。
それに服にも適用出来るようなので、後でキチンと試して見よう。

次はこれからの行動方針を決める。
まずはこの世界情勢や時代背景を探る為、必要な事象をピックアップして行く。

大陸は幾つあるのか？

国家は存在するのか？
複数存在するのか？
お互いに敵対してるのか？

等だ。

そして探るに当たっての身分も必要だ。
一般人のままでは得られる情報も限りがあるだろうし、広く見聞を広めようとしてもある程度自由に行動できる身分がないと何かと不便だろう。

何よりも、国家があるとしたらその中枢に入り込む事も将来的には考えないといけないかもしれない。

まずはこんな物だろう。
そして最後に、この世界でどんな人間として生きて良くか考えねばいけないが……そうだな、肩肘張るのはやめて好青年として生きるのもいいかもしれない。

人当たりが良い方が何かと動きやすいだろう。それにあたって生い立ちの設定や人格、そして容姿なども考えないと。

一時間程考えて、髪の色や瞳の色はこの世界の一般的な色を調べてから変える事にした。
自前の色だと少々人の記憶に残りやすい上に、冷たい印象を与えかねない為だ。

髪の色は灰色と呼ぶには些か艶があり過ぎて、銀と呼ぶには少々色素が多すぎる、云わば灰銀とでも言えばいいだろうか？

鈍い金属のような光沢を持つこの色は、人の記憶に残りやすいだろう。

思わぬ所で行動に支障をきたしかねない。尤も、この世界にも髪の色を染める技術はあるようだから、そこまで目立たないかもしれないのだが。

瞳も髪と同じくらい淡い灰色だ。とくにこの目の所為で怖がられる事が多い。

白目との境界が曖昧だからだ。

設定は「辺境の村から旅に出た世間知らずな剣士」と言った所だ。まぁどんな世界にも少数で暮らし、他との交流をあまり持たない集落はあるだろうし、そんな場所から世界を見たいと飛び出す若者だっているだろう。

そうと決まればまずは人の集まるところに行かなくては。

半径三キロメートルに知的生命体はいないと言っていたが……。

二十分程歩いたところでソレに遭遇した。

「まぁ、知的じゃない生命体は居てもしょうがないな」

目の前には体長1メートル程のネズミ？　のような動物がいた。

いや動物と言うよりは化け物？　魔物？　なんと呼ばれているかは分からないが、少なくとも動物のネズミには三つも目は付いてい

ないはずだし、尻尾の先に物騒なイガグリ状の球体もついていないはずだ。

敵意があるのかネズミは此方を睨みつけている。
その様子を見てこちらも戦闘態勢に入る。
まずは観察。この世界初の敵なのだからどういう行動をするのか見極めないと。

恐らく噛み付くなどの攻撃のほかに、尻尾による攻撃などを組み込んだ波状攻撃を使ってくると予想はするが、神曰く魔術なる物があるとの事なので、それも警戒して距離を取る。

すると予想通りに口を大きく開け飛び掛ってきた。
敢えて尻尾による攻撃が可能であろう範囲にサイドステップで避けると、これまた予想通りに尻尾がムチのようにしなり、先端のフレイルのように球体が襲ってきた――が。

「残念、見えてるんだよ」

そもそも予想して注視していたので、難なくその一撃も着地と同時にさらにバックステップで回避する。

ネズミのような――便宜上三つ目ネズミとでも呼ぼうか、三つ目ネズミは尻尾の攻撃も避けられるとは思っていなかったのか、全力で振るったであろう尻尾の先端の球体に体を引っ張られ体勢を崩していた。

「自分の攻撃で体勢を崩すのかコイツは」

そう思わず口に出してしまうのもしょうがないだろう。

そして腰に下げていた刀を鞘から抜き、体勢を崩した獲物に接近。
まずは攻撃範囲が広く厄介な尻尾による攻撃を封じようと、その付け根に向かって切断を意識し、刃を引くように切りつける。

すると、硬いゴムを切るような感触と共に切断された。
三つ目ネズミは「ヂュウッ」っと余り可愛くない叫び声を上げて此方を睨んできたのだが――。

「ヂュウッヂュウッ」と尻尾の断面からオレンジ色の粘度の高そうな血を流し叫びながらも、一向に起き上がろうとしてこない。

「コイツもしかして尻尾がないとバランスが取れないのか、難儀なヤツだなぁ……」

等と若干の哀れみにも似た感想を口にしてしまうが、しっかりと頭を切り落とし止めを刺す。

戦闘、と呼べる物かどうかは微妙な所だが、落ち着いた所で死体を確認してみると、驚くいた事に三つ目ネズミの体が砂のように風化していった。
ここでは生き物が死ぬとこうやって消えるのだろうか？

そして消えた死体の横を見ると、先ほど切り落とした先端にイガグリのような球体のついた尻尾が残されていた。

「コレは戦利品なのだろうか？　余り嬉しくは無いが回収しておくか」

どうやら尻尾からは血が出ていないようなので、クルクルと丸めて革袋にしまいこんだ。

残るくらいなのだから、何かに使われるのだろうが……。

## 第一話「三つ目が通りかかる?」（後書き）

次のお話しから主人公の性格が変わっていきます。

## 第二話「遭遇と誕生」（前書き）

説明回です、またこの話しから性格と共に地の文も変わります

追記　商人ギルド→「行商ギルド」に変更
　描写の追加や文法の修正を行いました。

## 第二話「遭遇と誕生」

最初の戦闘から三十分、あても無く歩き続け、途中で何度か三つ目ネズミと戦闘をこなして分かった事がある。

まず、

そのまま殺すと尻尾を含めて全て死体が消える事。

身体を両断するように倒してもその両方が消える事。

耳を切り落として倒した場合耳を含めて全て消える事。

この三つだ。

最初のように尻尾だけを切り落としてから倒した所、最初の戦闘と同じように尻尾だけが残された為、敵によって“特定の部位を本体から分断してから倒すとその部位が手に入る”と結論付けた。

七本に増えた尻尾が入った皮袋を担ぎまた歩き始めると、５０メートル程先に道があるのが見えた。

到着して確認すると、道は固く土で押し固められていて、何か車輪の跡のような物が残されている。

それを見て、ここは人が行き交う道であると当たりをつける。

恐らくここを辿れば人のいる場所にたどり着くだろう。

「でもどっちに行けばいいんだ？　折角進んでも『実は逆方向に行けばあっという間に街でした』なんてのはご免だぞ」

「まぁ歩くしかないな」と道なりに歩くこと二時間、後ろから何かの走る音が聞こえてきた。

「参ったな、まだ目も髪もかえていないのに……」

一先ず目だけでも緑にしておこう。

振り返ると、四足歩行の馬のような動物が馬車（？）を引いて走っている。

ちゃんと人も乗っているようで、御者をしている人物がこちらに気が付いたようだ。

「おーい兄さん！　こんな所を歩くなんて何考えてんだ！」

いきなり強い口調で怒られてしまった。何かあったのだろうか？

男を観察してみると、髪はこげ茶色で目は緑色、歳は四十を越えた所だろうか。

どうやら目は緑にして正解だったようだ。

とりあえずあらかじめ考えておいたキャラで受け答えをしておく。

「すみません、ここ何かあるんですか？　田舎から出てきたもので何が何やらわからないんですが……」

「おいおい！　田舎ってこの道を歩いてるのにか？　首都から出て来たのに田舎ってのはないだろう」

墓穴を掘ったみたいだ、この道は首都から続いていたのか。

おまけに首都は逆方向のようだし。

「いえ、この道に出たのはつい先程で、この平原を歩いてきた所なんですよ」

「なんだと!?　お前さんよく無事だったな。今の時期はフレイルラットの繁殖期で、この辺りは凶暴化したヤツらが多くて歩いて移動するのは危険なんだ。だからこの時期はこうしてスレイランナーの高速馬車で一気に駆け抜けないと危険なんだぞ?　しかし草原を越えてって、お前さん一体どこから来たんだ?」

ふむ、フレイルラットって言うのかあの三つ目ネズミは。それはまず置いておこう。

「小さな村なんですが、外から人が来た事が殆ど無いので言ってもわからないと思います。それよりもそんなに危険ならここで止まってるのは危ないんじゃないんですか?」

「そうだった!　おい兄さんも急いで乗ってくれ!　金はついてからでいい!」

これは好都合だ。首都にも行ってみたかったが、折角の御厚意だ無碍にはすまい。

「ありがとうございます、しかし持ち合わせがないのですが……いいでしょうか?」

「いいから乗ってくれ、街に戻ったらその分働くなり何か売ったり出来るだろう?　さぁ乗った乗った」

話しを聞くと彼はヨザークと言う行商人らしい。
本来なら荷物が揺れるこの速馬“スレイランナー”は使いたく無かったそうだが、護衛を雇おうにも騎士団がフレイルラットの討伐の依頼を冒険者ギルドに出していた為、冒険者が残っていなく護衛を頼めなかったとの事。

なのでしょうがなくスレイランナーを借りたと云う訳だ。

このスレイランナーという生き物について聞いてみた所、
『馬のような体格だが風を切り裂くような鋭い外甲を持っていて、その見た目の通り風を切り裂いて走る魔物』だそうだ。
それはさて置き、話しに出てきた『冒険者ギルド』と言う物に興味が沸いたので詳しく聞いてみた。

「兄さん冒険者じゃないのかい？　ギルドもない田舎なんて今時あるんだな、まあ言葉通り冒険を生業としてる連中を取りまとめて仕事を斡旋している組合みたいなもんだ。兄さんもその腰の剣は飾りじゃないんだろう？　それで生計立てて見たらどうだい」

「なるほど、剣には自身がありますしいいかもしれませんね！　目的も無くただ世界を見て周りたいと身ひとつで村を出たものの、何も考えていませんでした。今向かっている場所にも冒険者ギルドはありますか？」

「ははは、本当に何も知らないんだな兄さんは、おっとそういえば

名前なんてんだい？」

む、名乗り忘れていたか。しかし本名を言うよりもこの先このキャラを演じて行くのだし、このキャラに名前を付けて名乗ったほうがいいだろう。

改めて自分の人格を切り替えるように思考も変えていく。

――人へ抱く感情、心の在り方、闘争本能や感情の起伏、それら全てを新たに塗り替えて、新たな自分を生み出して行く……。

余りにも長い時を生きた俺が、自分の精神を病まないように生み出した、ある種の防衛機能でもある。

そしてまた一人、俺の中の住人が増えた。

どうしよう、肝心の名前を考えていなかった……。

ええい、適当にカノンの苗字をもじってしまえ！

「これは申し送れました！　俺の名前はシュテルといいます、家名はありません」

「はっはっは！　兄さ――いやシュテルは面白いな！　家名なんて貴族様以外にゃそうそうついてないぜ！」

「ですよね！　で、行き先の話しなんですが」

危なかった、もし苗字をもじってなかったら普通に家名つきで名

乗っていたかもしれない。

「おっとそうだった。この先の街はギルドが統治しているんだ、だから『ギルドはあるか？』なんて愚問だぜ」

「ギルドが統治？　冒険者をまとめるって話しでしたが、街に居る人全員が冒険者なんですか？」

「違う違う、ギルドってのは何も冒険者だけじゃない、いろんな職業の専門ギルドがあるんだよ。で各代表が取り仕切ってるのさ街を。それに俺も『行商ギルド』に所属してるしな」

なるほど、随分活気のありそうな所だなぁ。どんなギルドがあるのか聞いてみよう。

「そうだったんですか、すみませんとことん無知で。そうなると俺が所属するべきは冒険者ギルドですかね？　それとも他に戦いに関するギルドがあるんでしょうか？」

「いい質問だな、戦闘に関係するギルドってのはやっぱり人気でな、いくつかあるんだが大体代表的なのが『冒険者ギルド』『騎士ギルド』『魔術師ギルド』『傭兵ギルド』『教団ギルド』だな」

随分多いみたいだ、なんとなく魔術師ギルドや傭兵ギルドはどんな所か予想出来るけど。

「『冒険者ギルド』はさっき聞きましたけど、他の四つはどういう所なんですか？」

「じゃあ軽く説明ずるぞ？　『騎士ギルド』からだ。冒険よりも拠点を警護したり貴族の屋敷に派遣され屋敷の警護をしたりだ。後は犯罪者の捕縛や討伐が主な仕事だな。ここだけの話、王国騎士団からの天下りが多くてな、コネでもなけりゃそうそう入れない上、プ

ライドが高くてなぁ……。同じギルドだってのに威張り散らす奴が多いんだよ」

なるほど、他のギルドとの摩擦が大きいエリート集団といった所かな？

「で次は『魔術師ギルド』だ。まぁ想像は付くだろうが魔術を主に使う奴らで、他にも新しい魔術の開発や研究もしてるようだが、基本的には冒険者と組んで一緒に依頼を受けたりしているな。魔術師なら絶対所属してるってわけでもないから魔術師なのに冒険者ギルドに登録してる人間も多いんだ」

魔術……そういえばこっちに来てから一度も試していなかった。

ちょっと詳しく聞いておこうかな。

「魔術ですか？　それはどうすれば使えるようになるんですか？」

「魔術ってのはなんつーか祝福がないと使えないらしいが、その祝福ってのがよくわからなくてな。とりあえずギルド登録の前に職業診断所って所に行って、自分に向いてる職業の候補を診断用の魔具ってので診断してもらうんだが、そこで祝福を受けて魔術の才能が開花するってのが一般的だな。ただ人によっては魔術の師匠から才能を開花させてもらったりして、来る前から魔術が使える奴もいるんだ」

「なるほど、じゃあ俺も使えるようになるんですね！　楽しみです」

「まあ多少は誰でも使えるんだが、俺なんて精々火種を出すか暑いときに風で扇ぐくらいしか使い道が無いんだ。生まれながらの資質ってのもあるみたいなんだが、シュテルはもっと実戦的な奴が使えるといいな」

「なるほど、では次の『傭兵ギルド』なんですがこれは『冒険者ギルド』や『騎士ギルド』と何が違うんですか？」

「たしかに似てるといえば似てるが『傭兵ギルド』は他よりも殺伐としてる所だ。金さえ貰えればどんな仕事も引き受けるのが基本なんだ。ここ何十年も戦争なんて無いから大きな活躍はないが、雇われれば自分の国にも剣を向けるような連中だ。平時はよからぬ連中に用心棒として雇われる事もあるし、貴族が表沙汰には出来ないような依頼を受けたりだな」

そうか、冒険者ギルドや騎士ギルドには出せないような依頼を出す少し汚れた仕事が多いギルドなのか。

それにしても思わぬ所でいい情報が手に入った。

少なくとも国家は複数あるみたいだし、ここ何十年も戦争がないみたいだ。

て事はそこまで乱れた世の中じゃないとは思うんだけど、なんで俺はここに派遣されたんだろう？

「なるほど、かなり危ない所なんですね。関わらない方がいいかなぁ」

「いや別にギルドにいる人間が悪人ってわけじゃないぞ。ただ仕事と割り切る達観した戦士が多いんだ。中にはより危険な場所に身を置き実力をつけたいって考えてる奴もいるくらいだ」

「となると、強い人が多いんですね、じゃあ最後の『教団ギルド』と言うのは？」

「これは今ではあまり信仰は盛んじゃないが、今から三百年程前に『ヒュマリア教』

ってのが大陸で幅をきかせてたんだ。これが『亜人やエルフは人に

尽くすべき存在で人は神に最も愛された種族である』なんて抜かしてな、それが元で亜人とエルフ、そして全ては平等だって言う人間がヒュマリア教相手に戦争を起こしたんだよ。結果ヒュマリア教は滅び、今みたいにどの街でも人間以外の種族が暮らせるようになったんだよ」

過去にあった戦争と言うのはこの宗教戦争なのかな？　でもさっき『何十年も』って言っていたから、これとは別に戦争もあったと思うんだけど。

「まぁここまでは子供でも知ってる昔話しなんだが『教団ギルド』ってのはそういう種族間の根強い差別とかの問題や亜人やエルフの集落に人を派遣して暮らしを支えたりするのが主な仕事だ。他にも『神聖術』って一種の魔術を使って戦ったりするんだが、ここも他のギルドと組んで仕事をしたりするんだ。なんで『教団ギルド』なんて物々しい名前かって言うと『過去に起こした宗教団体の間違いを忘れない為、そして明確な名前をつけ新たな宗教へと発展させない為』だそうだ」

ふむふむ、この世界の時代背景も分かってきたぞ。当面の大きな問題はこの種族差別って事かな。

「差別ですか……今でもそんな事があるんですね。また戦争になんてならないといいんですが」

「シュテルは大げさだな！　差別なんていっても建物や服の規格に納得がいかないとか、食べ物の味付けや味覚に対しての偏見とかその程度だぞ？　だから小さい喧嘩が絶えないってだけだ」

え、そんなものなの？　じゃあ一体この世界の問題ってなんなんだ！

## 第二話「遭遇と誕生」（後書き）

この世界の事を少し知った回でした。

今日はここまでです、毎日の投稿は難しいのですが、最後まで完成させたいと思っています。

初めての作品ですので、至らない所も多いと思います
感想や指摘ツッコミなどお気軽に書いてくださるとこれからの参考になると同時に励みにもなりますので、よろしくお願いします。

## 第三話「尻尾の価値とてんとう虫と」（前書き）

まだもう数話は説明回となりそうです。

文法の修正と表現の加筆をしました。

## 第三話「尻尾の価値とてんとう虫と」

ヨザークさんから主な戦闘ギルドの説明を受け、その中でこの世界の情勢を知ることが出来たのはいいけど、本当に平和そのものじゃないか。

これは暫く腰を据えてこの世界で暮らして行く事を優先した方がいいかな？

それにしてもこの馬車は速いな、普通の馬車は時速１５キロも出たら上等だと思うけど、この馬車は優に３０キロは出てそうだ。

その所為でいくら踏み固めてある道でも揺れる揺れる、これじゃたしかに商人にとっては余り使いたくない移動手段なんだろうな、荷物が崩れてしまうし。

車輪は乗せて貰う時に確認したけど、どうやら金属製だ。

ショックを吸収する素材や仕掛けも無いみたいだし、こういった生活に密着してる物の技術はそれほど進んでないのかもしれない。

ギルドの話しを聞いてからは暫く、他愛も無い会話をしながら景色を眺めていたが、流れる景色は緑一色、遠くに見える山や森林以外は本当に平原しかなく、目には優しいし空気もおいしいが、さすがに飽きてきてしまった。

途中フレイルラットを何匹か見かけたが、やはりこの速度にはついてこれないのか一瞬反応し追いかけようとはするが、追いつけないと判断して大人しく戻って行く。

あ、そういえば！

「ヨザークさん、平原を渡っていた時に何度かフレイルラットに襲

われたんですよ、一応撃退はしたんですが、こんなの残していったんですけど何か役に立ちますかね？」

と入手したフレイルラットの尻尾の束を皮袋から取り出して見せた。

「ん、なんだ？　ってオイ、こりゃフレイルラットの尻尾じゃねぇか！　それもこんな根元から切られてるだと？　一体どうしたんだこれ……お前さんがやったのか！？」

うわ、凄い剣幕だ、何かやらかしてしまったか？

「す、すみません、突然襲われたのでとりあえず厄介な尻尾を切り落としてから倒そうと思って……」

「これをお前さんが……いいか、フレイルラットの尻尾ってのはとても弾力性強くてちょっとやちょっとじゃ刃が押し返されて、そうそう狙って切り落とせるものじゃないんだよ」

なるほど、たしかに切ったときに堅いゴムのような感触がした。

「先に倒しちまってから死体が消える前に尻尾を切り落とすって手もあるが、そうすると尾の先の球についてるトゲがフニャフニャになるし尻尾そのものも硬くなって価値が下がってしまうんだよ」

ふむふむ、これは結構良質なのだろうか？　これ売ったら馬車の代金くらい稼げるかな？

「これは戦闘中に先に切り落としましたから、トゲも鋭いままですし弾力も失われてませんよ？　ほら、こんなにしなりますし」

そう言いながら、ビヨンビヨンと振ってみる。

「うわっと、危ないだろ！　しかしお前さん、尻尾は根元に近い程弾力が強くて、でっけぇ戦斧や大剣じゃなきゃそう簡単に切り落とせないんだぞ？　よくそんなほっそい剣で切り落とせたな、もしかして名のある名剣か何かなのか？」

どうやら俺のこの刀はここでも通用するみたいだ。それに話しから察するに刀みたいに切断に特化した武器が余り無いのだろうか？　斧も大剣も叩き切るのがメインだし、それじゃあこういう材質の物は切り難いだろうに。

「いえ、たしかに丁寧に作られた物ですが、名剣なんてものじゃないですよ、ただ少し刃の作りと切り方が特殊なんですよ、ホラ」

そう言って刀を鞘から出して見せる。

「ほぅ、こりゃたまげた。俺は武器は専門じゃないが、それでもこんな剣は見た事がねぇ。シャムシールって剣もこの剣に似て反っちゃいるが、こんな綺麗な刃はみたことがないぞ、それに何で出来てるんだこりゃ？　こんな黒光りする金属なんてクロムタイトくらいしか知らんぞ」

ありゃ、ちょっと迂闊だったかな。

カラーチェンジャーで刀身の色を銀にでもしておくべきだったかも、まぁそのクロムタイトだって言い張っておけばいいかな？

「ええ、たしかそんな名前の鉄で作られていますよ、俺の姉さんが鍛冶職人だったんで作ってもらったんです」

とりあえず話しを合わせておかないと。ちなみに姉が作ったとい

うのは本当の事だ。

「おいおい！　やっぱり名剣じゃねぇか！　剣一本とはいえクロムタイトなんて！　はぁ、通りで尻尾の根元も切れちまうってわけだ」

む、剣が凄いだけだと思われるのは癪だ。

刀に負担をかけないように一回で切断するのってかなり難しいっていうのに、まぁここで食い下がるのもなんだか大人気ないしいいか。

それにしてもまた墓穴を掘ったようだ。

この反応を見る限り、そのクロムタイトって言うのはかなり価値のある物らしい。

「ええ、それにこれでも十年以上剣を使ってきてますしね。話を戻すんですけどこの尻尾ってどうなんですか？　話を聞く限り良質だと思うんですけど」

ちなみに剣を振って十年なんて物じゃない、正確には分からないけど数百年単位だと思う。

「そうだったな、そいつはそのまんま鞭に加工してもいいし、その長さなら紐に加工して防具の材料にもなる。今の時期は割と数が取れるがここまで良質な尻尾なんてそうそう流れてこないぜ！　七本もあるんだし一本俺に売ってくれないか？　馬車の料金を差し引いても結構な金になるぞ、どうだ？」

ふむふむ、やはり素材として使われるみたいだ。

一本で馬車の料金にもなるみたいだしここで一本売って街に着いたら残り全部換金してしまうのも手かな？

「かまいませんよ、相場がどれくらいか分かりませんけど一本くらいならどうぞ。あ、でもあんまりぼったくらないで下さいよ？　あとでちゃーんと街の市場で残りの尻尾を使って相場調べますからね」
と軽く笑いながら念を押しておく、まぁこの人になら多少ぼられても構わないかな、色々教えて貰ったのだし。

「はっはっは、シュテルは商人の才能もあるかもしれないな、わかったわかった、じゃあ馬車の代金は――そうだな、シュテルが乗ってから大体四時間ってとこか」
もうそんなに経っていたんだ、言われてみれば太陽の位置もかわっている。

「街まであと五時間ってとこだから合計九時間で一時間あたり１００メルスで９０００メルス、尻尾の値段は３００００メルスってとこで、差額の２１０００メルスでどうだ？」

はは、金銭価値もわからないからなんて答えていいかわからない。
それにしても距離じゃなくて時間換算で料金を取るのか……。
「それで構いませんけど、時間で料金取るなんてかわっていますね？」
「ああ、本来なら距離で決まっているんだが、スレイランナーの場合は時間なんだ。この先安全地帯までいったら速度を落とすつもりなんだが、コイツは全力で八時間以上は走れないからな、だから途中で速度が変わった分も金を取るってのが通例なんだ」

それって御者のさじ加減でいくらでもぼったくれるんじゃないか!?

「そ、それってヨザークさん次第じゃいくらでもお金巻き上げられるじゃないですか……」
「いや、だから先に時間を宣言しただろ？　いまから五時間走ったら付くように約束するしもし遅れてもその分の金は取らないから安心しろ」

なるほど、そういうシステムなのか
「じゃああとどれくらいで速度落とすんですか？」
「そうだな、首都から出て二時間は通常速度でその後からお前さんに会うまで全力でさらに１時間ってところだ、だからあと三時間くらいしたら速度を落とすぞ、ちょうどフレイルラットの繁殖地域も抜けられるはずだ」

ええと、通常速度が一般的な馬車の時速十五キロ全力で時速３０キロだとして、ヨザークさんが出発から１５キロで二時間走って……。

距離にすると、この計算だと丁度首都から行き先の街まで距離にして３００キロって所かな？　この世界での距離の単位や量り方は分からないけど、一応聞いてみようか。

「じゃあ首都から街まで大体３００キロくらいですかね？　キロっていうのは村で使っていた単位なんですけど」
「キロ？　こっちはケイルって言うんだが、確かにだいたいそんくらいだ、正確には３２０ケイルってとこだが……お前さん俺の話しからそこまで暗算したのか？　だとしたらたいしたもんだ、やっぱりシュテルは商人に向いてるぞ！」

凄い驚きようだ、この世界では数学等は商人を目指さない限り学んだりはしないのかな？

数字は誤差はあったけど計算方法や測り方は同じみたいだ。単位の名前が違うだけかな。

「そうですか？　もしそうなら選べる仕事の幅が増えて嬉しいかぎりです、でもヨザークさんはもう八時間も走ってるって事ですよね、疲れていないんですか？」

「そうだな、危険地帯を抜けた辺りに野営用の広場があるからそこで休憩する予定だ、まあ少し休憩した程度じゃスレイランナーの疲労は完全には抜けないだろうから休憩後も全力じゃ走れないが、問題ないだろう？」

なるほど、キチンと行商する人間や旅人の為の配慮もされているのか。

「了解です、休憩中の哨戒なら俺が引き受けますよ」

「ああ、その必要はないぞ、野営地にはちゃんと常駐してる騎士ギルドが居るし、魔物避けの結界魔法陣も刻まれているしな」

専用の騎士まで常駐しているんだ、これは本当に随分しっかりとした国みたいだ。

それに随分と便利な魔術もあるみたいだ。その割りに技術の進歩がイマイチだけど。

むしろ便利な魔術が存在するから技術力にムラがあるのかな？

まぁこれからじっくり世界を見て回るのだしそのうち分かってくるだろう。

「そういえば時間はどうやって計っているんですか？」

「ん？　そりゃ時計にきまってるだろ」

そう言ってしっかり十二分割された文字盤のある懐中時計を取り

出したヨザークさん。
本当に技術に随分ムラがあるなぁ……。

## 第三話「尻尾の価値とてんとう虫と」（後書き）

タイトルの意味はなんとなくわかったと思います

感想や指摘や批判等お待ちしております

## 第四話「野営市にて」（前書き）

まだ街には到着しません、章分けしましたがこの章は街に着くまでです。

# 第四話「野営市にて」

あれから代わり映えのしない景色を見ながら進むこと三時間、速度を落として十分程経過した所で木の柵で囲まれた場所が見えてきた。

思っていたよりもずっと大規模で、近くにある森の中まで柵は続いている。

人もたくさんいるようで、かなり賑やかな様子だ。あそこが野営地なのかな？

「あれが野営地ですか？　随分と人が沢山いるんですねー」

「そうだな、王国騎士団の出した依頼で冒険者がフレイルラット狩りをしているはずだから、それに目をつけて商売に来てる奴らも大勢来ているんだ」

そういえばそのせいで首都に冒険者が少なくて、護衛を頼めなかったって言ってたな確か。

「さらに冒険者の狩って来た素材を買い付けにくる行商人も集まって来る。だから人が人を呼んでこんなに賑わうんだよ」

なるほど、じゃあ今はちょっとした市場状態なのか、これは楽しみだ。

「じゃあ少し見て回ってきてもいいですか？　こんなに人が多いのは初めてで」

「おう、俺も仲間の行商人がいるだろうからそっちに行くぜ、後でこの馬車で落ち合おう」

速度を落とし柵の中に入って行くと、誘導係なのか鎧を着た人間が先導してくれる。
この人も騎士ギルドの人間なんだろうか？

馬車を広場に駐車し、荷台の見張りを騎士ギルドに雇われたであろう青年にお願いしたヨザークさん。
騎士は周りに何人か居たが、全て同じ鎧で統一されていた為もしかしたら騎士ギルドは警察のような役割のギルドなのかもしれない。

「じゃあちょっと見てきますねー」

そう告げて、足早に出店が立ち並ぶ方へと足を運ぶ。
近づくにつれて人の営みの織り成す音の波が大きくなって行き「ちょっとした祭りみたいでワクワクするな」なんて子供じみた事を思わず呟いてしまう。

通りを見て周っていると、武具の手入れを代行する店や軽食を販売する屋台に、武具そのものを売る人までいた。
少し離れた通りでは魔物が落とす素材の買取合戦をしているようで、威勢の良い声が聞こえてくる。

「フレイルラットの尻尾１２０００で買い取るよー！」「こっちは品質問わず五本で３００００だー！」
「ヘビーモウラスの肉一キロ３０００メルス！誰かいないかー！」
「ヘビーモウラスの肉買い取ってくれー！」「おいおい！こんな尻尾じゃ１２０００も出せないよ！」
「なんだと！どこが不満なんだ！」「お兄さんこっちなら五本そろってれば品質問わず３００００だ！」「おい誰かあと二本一緒に売

らないか！」
「アタシんとこ二本イマイチなやつのこってるよー！」「おい！メスのモウラスの肉は買い取ってないのか！？」

すごい盛り上がりだ。聞いたことない魔物の名前も聞こえてくる。
でも今聞き取れた限りじゃ俺の一本３００００っていうのは破格みたいだ、やっぱり高品質だったみたいだ。

買取合戦をしている通りを人ごみを押しのけながらなんとか抜けると、今度は冒険者と思しき集団が集まっている広場を見つけた。

妙に熱気立ってる様子だけど何かやってるのかな？

「テメェふざけんじゃねぇ！　この尻尾、針球ついてねぇじゃねぇか！！」

近づいた所で男の怒声が耳に刺さって来る。随分と気が立っている様子だ。

「何を言ってるの、針球はギルドに持っていかないと討伐証明にならないのよ？　まさか貴方、こんなしなびた尻尾を買い取るなんて針球目的だったのかしら？」

なるほど、この人だかりの正体は喧嘩と、それを見る野次馬だったようだ。
中央で対峙しているのは、白い膝丈のシスター服のような衣装の

上から、銀色の軽鎧を着た赤い髪の華奢な女性。
動きやすさを重視したような出で立ちにも関わらず、使う武器は重そうな槍斧（ハルバート）と、なんだか不思議な感じがする。

先程怒声を上げたのは、大きな鉄板のような大剣を背負い、褐色の肌の上に必要最低限の部位しか守っていない皮鎧を貼り付けたように装着した筋骨隆々の男だ。

「う、うるせぇ！　大人しく針球を渡しやがれ！」

どうやら取引上の食い違いからの喧嘩みたいだ、でも討伐証明ってなんだろう？
あの尻尾の球が何かの証明に必要なのかな？
あ、男の方が背中の大剣を抜いた！　ちょっと止めなくていいのかコレ、常駐の騎士ギルドは何してるんだ！

「あーあ、アイツ終わったな、全治二週間コースだ」「だな、穏便にすませときゃいいものを」
「骨は拾ってやるぞー！」「死ぬんじゃないわよー！」「ウホッ良い筋肉！」「おい少し開けてくれ！　見えないじゃないか」

周りも煽ったり諦めたりで止めようともしない。
話し聞いた限りじゃあの男が針球目当てで尻尾を買うって言い出して、あの女性が代金を受け取り”尻尾のみ”を引き渡した事に怒ってるみたいだ。

正直女性の方も、お金を受け取る前に言わなかったのもどうかと思うけど、印象的に男の方に非がありそうなんだよなぁ。
よし、ここは俺がちょっと止めに行こうかな、別に下心があるわけじゃないぞ！

「すみません、通して下さい、止めないとあの女性が！」

すると、前にいた冒険者の男性が非難めいた口調で。

「なんだ兄さん、ちょっと大人しく見てな」

なんだこの人、女性がピンチだと言うのに大人しく見ていろだなんて。

それに大人しく見てたらあのヒト大怪我しちゃうだろ、何故誰も助けようとしないんだ？

「ウオォォォォォォ！」

あ、もう！　男が叫びながら大剣を上段に構え女性へと向かって行ってしまった。女性の方は……あれ、斧槍を腰の後ろにまわして立っているだけだ、これじゃ防御も出来ないんじゃないか！？

最悪の光景を脳裏に浮かび、思わず声を上げてしまう。

「お姉さん避けて！」

そんな俺の声を余所に、つまらなそうな女性の呟きが聞こえて来る。

「まるでヘビーモウラスね、突っ込むだけなんて」

男の大剣が降り降ろされ始めた瞬間、彼女は腰の後ろに槍斧を回したまま、サイドステップで避けた。

まさに一瞬の出来事だった。まるで大型の馬車にでも衝突された

かのような、大きな鈍い音と共に男は四メートル程地面の上を激しく転がりながら吹っ飛んでいった。

驚いた……あのヒト随分と強いなぁ。見た感じ線が細くて華奢なのに、どこにあんな力があるんだろう？

周りの冒険者達は突然遠くまで吹き飛び地に伏してる男に驚き、口々に

「今何があったんだ？　なんでアイツ避けられただけで吹っ飛んでんだ？」

「あいつ新入りか？　アルシャに因縁つけるなんて命知らずな真似しやがって」

「”二つ名持ち”の顔くらい覚えておくのは常識だっつーの」

などと彼女の名前とおぼしき単語や”二つ名持ち”と言ってる。

それに何をしたのか見えていなかったようだ。

それにしても二つ名ってなんだろう？

「彼女って有名な人なんですか？」

「なんだ、お前も知らないのか？　教団ギルドの神聖騎士で”瞬斧のアルシャ”って二つ名をギルド連盟から拝命したエリート中のエリートだぜ？」

との事。

教団ギルドの神聖騎士……？　てっきり魔術師みたいな戦いをする人ばかりだと思ってたけど、接近職もいるのか。

それに神聖騎士って言うくらいだから、接近戦専門の集団が存在するのかな？

それに”二つ名を拝命”って拝命と云う事は名誉称号みたいな物なのかな。

この世界の実力者なんだろうか？

話しを聞いてる内に、何故か急に『戦ってみたい』という思いが湧き出てきた。

「あの人に挑戦とか出来ないですかね？　ちょっと見てたらウズウズしてきちゃって」

「やめとけやめとけ、それにあんまり騒ぐと騎士ギルドがうるせーぞ、まぁ兄さんじゃ一瞬で朝までグッスリ快眠コースってとこだと思うぜ？」

それもそうだ。不必要に騒いで迷惑を掛けるのは不本意だし、何を言い出してるんだ俺は。ちょっと冷静にならないと。

「そうですよね、俺なんかじゃ相手にもしてもらえなさそうですし」

しかし。

「私は構わないわよ、そこのお兄さん？」

先程まで吹き飛ばした男の傍で何かしていた女性が、こちらに歩

いてきた。
ヤバイ、聞かれてたみたいだ！　なんだか不敵な笑みを浮かべてこちらに歩いてきた。

しかも周りの皆が一斉に一歩下がった所為で、より一層目立ってるじゃないか俺だけ。
早く謝っておかないと……あぁ、もうなんで戦いたいなんて思ったんだよ！

「あ、あの！　すみません、つい興奮していただけなんです、遠慮しておきます！」
「そう？　お兄さん見た所、片手半剣（バスタードソード）を使うのかしら？　重量武器の使い手にそんな細い剣で挑みたいなんて言うのだから、何か秘策でもあるのかと期待していたのだけど」

たしかに片手でも両手でも扱える刀はバスタード・ソードとも言えるかもしれないな、刀はやっぱりこの世界には無いのかも知れない。

そんな事より！　マズいよ、この人こんなに綺麗で大人しそうなのに、バトル大好きオーラがすっごい出てるんですけど！

「秘策なんてそんな、冷静に考えたらそんな大きな武器持ったまま回転したり、片手で振り回すような人に勝てるわけないじゃないですか！」

頼む、これで興味を失ってくれ！　『ふん、何よこの腰抜け。拍子抜けね』とか言って見逃がしてくれないか？

そうだ、まだギルドにすら登録してない人間だって教えたら矛を

納めてくれるかも……？

「あの、俺そもそもまだギル――「へぇ……貴方私の動きが見えていたのね」――ドに登録……」

どうやらこの世界に来て以来、最大級の墓穴を掘ったみたいだ……。

## 第五話「心と体と経験そして現実」（前書き）

難しい、上手く文字に表現するのがとても難しいです。

# 第五話「心と体と経験そして現実」

今思えば彼女の動きは尋常じゃなかった。
どう軽く見積もっても彼女の持つ槍斧は十キロはあるんじゃないかな？

そんな重い武器を持ちながら、先程のような軽業師のごとく動きを見せたのだ。
その上、大怪我をさせない様ポール部分だけを背に当てる技術まで持ち合わせている。

間違いなく、彼女は強い。
恐らく先程の技にも絶対の自信があったんだと思う。
少なくとも、ここに居る人間に見破られないだろう、と思う程度には。

しかし、あろう事か俺は必死な余り何も考えずに言い当て、その上ソレを言い訳に一度口にした挑戦の言葉を取り消そうとしている。
これはもう逃げられないかも……？

近くまで歩み寄ってきた彼女の深紅の瞳を確認する。
少し楽しそうな、それでいて好戦的な色を宿している。
まるで猫のように縦長の瞳孔は『逃がしはしない』と言ってるようだ。
『目は口ほどに物を言う』とは良く言った物だよ本当に……。

「俺は森の奥深くの田舎の出で、野鳥や野うさぎを狩って生活をしていたので動体視力”だけ”は人より優れていたんです」

我ながら苦しい言い訳だ。でも視力”だけ”を強調したんだし『他はたいした事がない』と判断してくれたらあるいは……。

しかしそんな願いも空しく、今の言葉は彼女の逆鱗に触れてしまったのか、先程より激しい感情を瞳に宿し、矛を収めると云う選択肢を完全に捨てさせてしまった様だ。

「構えなさい。森で狩りをしていただけ？　眼だけは良い？　私の技はその程度の素人にも見破れるとでも言いたいのかしら？」

遠まわしに彼女を貶める発言をしてしまったようだ。

しかしもはや逃れられないであろうこの状況で、どういう訳か弁解や言い訳をするでもなく、戦いを望むかの様に意識が塗り替えられて行く。

『しょうがないもう覚悟を決めよう。良いチャンスじゃないか』

『これから先、人と戦う事なんで幾らでもあるはずだ、その予行練習だと思えば良い』

そんな心の呟きで自分を納得させると、不思議と最初に感じた『戦いたい』と云う思いが再び湧き出してきた。

「分かりました、胸を借りるつもりで全力でお相手させて頂きます！」

我ながら随分弱気だとは思う、でも負けはしないだろう。

この身体には何百年もの戦いの記憶、経験があるのだから――。

「やっとその気になったわね、名乗りなさい。私は『瞬斧のアルシ

ヤ』」

「俺の名前は『シュテル』二つ名なんて大層な物はありません」

彼女は先程のカウンターのような技を狙って来るはずだ。言い当てられた自分の一番自信のあるであろうその一撃を。

ならばその一撃、受け止めて見せよう。

そしてそこに必ず隙は生まれるはずだ。

そう彼女の戦術を推理し、どう戦うべきか頭の中で組み立てて行く。

まずは一撃、避けられるであろう一撃を放つ。そしてそのままの動きで反転し、それを受け止めて見せる！

左手で鞘を強く握り、右手で柄を強く握る、そして姿勢を低くする。

クラウチングスタートのような抜刀の構えを取る。恐らく何を仕掛けてくるか察したのだろう、彼女の表情が張り詰めた物に変わって行く。

彼女が反応出来るであろう、先程の大男より多少早い速度を意識し、そして右足で強く大地を蹴り彼女へと疾走する。そして残り二メートル『ここだ！』

左手で鞘を強く押さえつけ、刀を抜き放つ。

鞘の口金と刀身が奏でる澄んだ音色が辺りに響き渡る。

手応えは無い、だが後ろに居るのは分かっている。

抜刀の勢いのまま体を反転し、彼女の一撃に備えようとするが……。

そこで俺は腹部に強烈な衝撃を受け、余りの痛みに意識を手放した。

結果から言うと、俺は反転したまではいいが、彼女の一撃を防ぐ事は叶わなかった。

目を覚ますとヨザークさんが心配そうな顔で俺を見下ろしていた。

周囲は薄暗く、どうやらここは馬車の荷台らしい。ヨザークさんが運んでくれたのかな……。

「気が付いたかシュテル。最初に聞く、何故あんな無茶をした？」

ヨザークさんは心配そうな表情を消し、低い声で俺の行動の理由を聞いてくる。

責めるような声でもなく、ただ淡々と。

なんと答えれば良いんだろう。分からない、自分でも分からない、頭が混乱していてまともに受け答え出来そうに無い。

「俺はお前に『剣で生計を立てちゃどうだ』とは言った、だが自分の身を危険に晒して生きろって意味で言ったんじゃない。あくまで、あくまで可能性の一つを――――提示しただけだ！！」

淡々と話してはいるが、次第に語調は強くなって行き、最後には抑えきれない激情を破裂させる。

会って間もない人間に、ここまで言って貰えるとは思ってもみなかった。

不謹慎だけどヨザークさんに怒られ嬉しいと感じてしまう。

だけど、今は一人にして欲しい……。

心配してくれたのは嬉しいし、謝りたいけど。

今は自分と向き合う時間が欲しい……。

「すみません……少し、考えさせて下さい。自分でもなんであんな無茶をしたのか良く分からないんです」

「そうか……今日は予定を変更してここで一晩明かすぞ、今から出発したら街の門の前で一晩明かす事になっちまう」

どうやら思っていたよりも長時間気を失っていたようだ。

旅の予定まで狂わせて、本当に何やってるんだろう俺……。

荷台から出て空を見上げると、もう夕焼けに染まり始めていた。

どこか静かな所で考えたい。誰も居ない場所を探し足を運んで行く。

俺はトボトボと歩きながら、先程の戦いの事を思い返してみた。

『納得できない、何故だ』そんな疑問や不問が溢れてくる……。

彼女との戦い、相手の出方も正確に予想出来たしその通りの展開

だったはずだ。それなのに負けた。
彼女の力量も測り損ねたなんて事ないはずだ、それなのにどうして！

踏み込みも、抜刀のタイミングも彼女が避けられる速度に調整出来たし、次の動きへの繋ぎも完璧だったはずだ、それなのに何故防御が間に合わなかった？
やはり彼女の実力を過小評価してたでも言うのか？

フレイルラットとの戦いだってちゃんと出来た。思うように動けたし余裕もあったじゃないか。
ヨザークさんだって尻尾の根元から切った俺を凄いと言ってくれた（正確には刀がすごいと思ってるみたいだけど）

考えるのに夢中になっていたのか、気が付いたら野営地内の森を抜け川の前まで来ていた。
どうやらここも柵の中らしく、向こう岸の奥に柵が見える。ここは水場として利用されてるみたいだ。

「はぁ……少し落ち着こう、情けないな本当。負けたのがそんなにショックなのかな俺、『カノン』ならこんな事でウジウジしないはずだし、そもそも負けたりなんか……」

え？

今俺は何と言った？　『カノン』なら……？

あぁ――――なんだ、簡単な事じゃないか。

俺は『カノンじゃない』そうだ、俺はまだ生まれたばかりじゃないか。

考えてみたらフレイルラットを倒したのも俺じゃない『カノン』だ。

俺はカノンの記憶を持っているだけなんだ。俺自身の戦闘経験なんてまったく無いじゃないか。

それなのに、まるで自分が歴戦の剣豪みたいな気になって……。

何が『予行練習』だよ。

何が『戦いの経験』だよ。

ほんっと馬鹿じゃないか俺。この身体も武器も俺なんかにはもったいないよ、なんで俺なんか作ったんだよ……。

自分なんて必要ないんじゃないか？

どん底まで落ち込み、川辺にあった大きめの石の上に座り込んでしまう。

「いいかげんにしろ」

自己嫌悪に陥っている自分の耳に、聞きなれた声が飛び込んできたきた。

## 第五話「心と体と経験そして現実」（後書き）

今回彼には現実の厳しさを知ってもらうお話しでした。

誤字脱字、感想や突っ込み批判など大歓迎です。

## 第六話「シュテルとカノン」（前書き）

力不足でこんな書き方しかできませんでした、申し訳ありませんでした。

9／3　少し再編しました。

# 第六話「シュテルとカノン」

「え？」

突然聞こえて来た声に思わず気の抜けた返事を返してしまった、周りには誰もいないと思ったけど……？

「俺だ俺、自分の口に手あててみろ」
「むーむんむむむ」

なんだ？口が勝手に動いてる。

「だから俺だって、カノンだよカノン」

うわ！思ってる事と違う事勝手に喋るのって変な感じ！しかしまだ意識があったんだカノンって、てっきり問題が解決するまで寝てるもんだと思ってたけど。

「あのなぁ……まぁいい、随分派手に負けたな」

うん、正直情けなさ過ぎて表歩けないよ、実際沢山の人が見てる前で負けたんだし、顔も覚えられたかもしれないし。

「まだギルドにも入ってないだろ、素人が調子に乗って、運悪く目つけられてお灸を据えられた、そんな程度にしか思われてないだろ」

あ！　それもそうか、これから幾らでも名誉挽回のチャンスはあるんだ。

「ああ、だからってまたすぐに勝負なんて挑もうとするんじゃないぞ」

分かってるよ、でも幾ら経験が無いとは云え、なんでアッサリ負けたのか具体的にはわかる？

「ああ、それは――」

カノンの話を纏めると、俺は経験もなく身体能力だけでカノンの動きを再現しようとした。

しかし、経験と身体能力の齟齬から調整が利かず、実際には身体に使われていただけだった為らしい。

それと。

「今のこの身体は純粋な人間だ。その純粋な人間と言うのがどの程度なのかは分からないが、少なくとも人外に片足を突っ込んでいた今までよりは明らかに弱体化している筈だ。だから、お前の記憶にある最近の俺の動きを再現しようとしても無理があるって事だろう」

ああ、そういう事か！　だから予想していた力が出ていなかったって事か！

「そういう事だ。まぁ人外の力に頼りすぎていた俺にも責任はあるだろうが。まぁとにかくシュテル！」

カノンに名前を呼ばれるのってなんだか変なカンジだ。

「これからは俺の記憶を再現しようとはするな。そもそも素人が刀なんて扱えるわけないだろうが」

そういう物なのか、じゃあ別な武器を使った方がいいかな？

「ああ、片刃の剣ってのは切りつける方向が制限される、だから足捌きも、手首の返すタイミングも、握りの加減も全て計算しないと使いこなせないんだよ」

たしかに片手なら兎も角両手で使うとなると難しい、それなら両刃の剣を使えばいいのかな？

「そうだ。皮袋の中に他の剣も入ってただろ？　そっちで戦え」

そういえば入ってた気がする。あの剣って何で入ってたんだろう？　ここにあるって事はあの扉を潜る時にも持っていたって事だよな？

接近戦用の武器を2本も手元に置いておくなんて、合理的なカノンにしては違和感を感じる。

「覚えてないのか？　俺の、ある意味お前の大切な剣だぞアレは」

俺の大切な剣……？

「今のお前の人格はな、俺がまだ純粋な人間だった時代。二十三歳頃の俺がベースになってるんだよ」

なんと、そんな時代があった事がまず驚きだよ。でもそれなら、もう少し人間としての身体の動かし方が出来ても良いんじゃないか？

「いやーその、アレだ。さすがに俺もそんな昔の事なんて覚えてない」

思わず何も言えず互いに沈黙する。
ま、まぁ普通昔の身体の動かし方なんて覚えてないしな、意識して生活なんてしないし。

「そういうことだ。で話しを戻すが、あの剣は当時使いこなすようにとユエに渡された剣なんだよ」

姉さんが？　当時の思い出すら記憶にないから詳しく聞かせてくれないか。

「長くなるから簡潔に済ませるが、当時の俺は少し天狗になっていたんだ。そこでユエが一計を案じたんだ」

ああ、なぜか天狗になったカノンの様子だけが鮮明に浮かんでくるよ……。

「……まぁいい。ユエは俺に一振りの剣をくれたんだ。『今のお前に相応しい駄剣だ』と言ってな」

駄剣かよ！　それを俺に使えと言うのか。たしかに大切な思い出なのかもしれないけどさ。

「まぁ最後まで聞け。ユエは俺に『この剣を使い潰して見せろ、そしたら今度こそ私の最高傑作をやろう』ってな。だから俺は最後までその剣を使う事にしたんだ」

物で釣られるってかっこ悪いですよねー。
半ばあきれ顔になるのも仕方ないよなこれじゃ。

しかし、カノンが言うには実際に使って見ると本当にうまく戦え

なくなってしまったらしい。と言う事は、それまで余程性能の良い武器を使っていたんだろうか？

「いや、実際には普通の剣だったんだ。その剣がそこまで駄目な剣だと思ってなくてな。今まで自分が強かったのはもしかしたら武器のお陰だったんじゃないか？　なんて思うようになったんだ」

なんだか抜けてるなぁ。若者は単純で困るねまったく。

「おいおい、お前はその頃の俺がモデルなんだぞ？　自分の実力を見誤って打ちひしがれるなんてまさしく今のお前だろ」

うっ……その通りだ、ごめん調子にのってた。

でも、そこまで上手くいかないならもう武器を代えるなりすればよかったじゃないか。

「初めは武器欲しさに使ってたんだけどな。でも次第に反骨精神と言うか、この剣でユエに挑んで勝って、見返してやる！　なんて思い初めてな」

随分熱血じゃないか、今の性格からは想像出来ないよ。

「俺も若かったんだよあの頃は」

そんなお爺さんみたいな事言って。まぁ年齢的にはそうなんだろうけどさ。

あ、そうだ。一つ聞いていいかい？

「なんだ？」

まともな武器があったとして、当時の実力でユエに勝てたのか？

「無理、あいつ俺の前で本気なんて全然出してなかったんだよ、なのに勘違いして調子に乗ってたんだ」

なるほど、やっぱり俺のモデルだわ。

## 第六話「シュテルとカノン」（後書き）

まだもう少しこのやり取りが続きます

## 第七話「謝罪とこれからと」（前書き）

まもなく第一章終了です、閑話を挟んで第二章に入りたいと思います。

9／3　再編しました。

## 第七話「謝罪とこれからと」

相変わらず口で喋るのはカノン。俺は頭の中で問いかけ、聞く側に周っている。

それで、結局姉さんとはどうなったんだ？

普通の剣でも勝てないのだから、当然負けたとは思うんだけど。

「負けた、だが不思議と前に戦った時よりも善戦したんだ。当然ユエも手加減した訳じゃなく前と同じ強さだった」

あれか、弱い剣でも工夫して敵を倒す事を覚えたとか、そんな感じ？

「それもあるが、あの剣はあえて重心をずらして作られていたんだ。だから振ってると体勢を崩す事も多かったし狙いも逸れたりしたんだ。それを意識して動いていたから、今まで使っていなかった部分も鍛えられて、より正確な攻撃を出せるようになってたんだよ」

それって姉さんが狙って作ったのか？　だとしたらどんだけ俺の身体を熟知してるんだよ……。

「当然狙って作ったみたいだ。負けた後に『よくここまで戦えるようになった、今のお前に相応しい剣を贈ろう、そしてそれが私から卒業するお前への餞別とする』って言って、その剣を分解し始めたんだ。目の前で刀身を外して地面に置くと、それに向かって思いっきり自分の剣を振り下ろしたんだ。今思えば俺が始めて見たユエの本気はあれだったかもしれないな」

じゃあもし、戦闘中に姉さんが本気出してたら大変な事になってたね。

「そうだな。で、砕けたのは刀身の”外装”だけだったんだよ。中にもう一回り小さい刀身が隠れていたんだ。外装に重さの違う物質を使う事で重心を狂わせていたんだと」

また随分と手の込んだ事を……なんかそういう人形なかったか？

「前に行った世界のどっかの国の名産であったな、今は関係ないが。随分面倒な方法で渡されたプレゼントだったが『もし自分に何かあって再会出来なくても、しかるべき時に自然とお前の手に渡るように』って理由でそうしたんだとさ」

なんとまぁ、随分と大切にされてたんだな。よほど大切に思われてたんだなカノン。

……実の弟だったけど。

「一々妙な事を考えるな。まあそういう理由だからあの剣も俺の大切な武器なんだよ。幸い両刃のバスタードソードだ、少し小さめだから片手でも取り回しがしやすいから初心者向けだし、最後まで戦い抜ける一品だ、だからな……」

カノンが少しもったいぶったように間を開ける。

何を言いたいのか、なんとなく分かったよカノン。

「最後まで、戦え。どんな結末が待ってるかわからないし、俺はもう眠らせて貰う。だけどずっとお前の中にいる、自信を持て」

「お前は俺だ」

そう最後に言い残して、カノンは意識の底に消えて行った。
次に話せる時は、きっとどんな形であれ一つの答えが出た時だと思う。
だからそれまで、おやすみカノン。

「さて、久々に自分の意思で口を動かした」

意識を切り替えるように声を出し立ち上がる。
すっかり喉が渇いてしまった、それになんだかんだでもう半日程何も食べていない。
折角市場があるのだし、少し買い食いでもしようか。

「って俺まだヨザークさんから尻尾の代金もらってないじゃん！」

随分と辺りは暗くなり、黒い流れを作る川から離れ、明るい光りが溢れる市場へと、来た時とは対照的に軽快な足取りで進んでゆく。
そういえばこの明かりってなんだ？　松明のような暖かい光りじゃないし、むしろ電気の明かりってカンジだけど。

市場まで戻ってきたので早速確認をしてみると、何やらガラスの容器の中に白く発光する液体が入っている。
お店の店員さんは、茶色のくせっけを頭に巻いたスカーフで纏めてる若い娘さんだ。１９歳位だろうか。

「お姉さん、この光ってるのってなんなんですか？　地元の村には松明くらいしか光源がなかったんですけど」

黄色い果物を売っていた娘さんに聞いてみた所、これは”ブライトストーン”と言う鉱石を粉にして水に溶かした物らしい。
濃度によって光りの強さが変わり、他の物を混ぜて発光時間や光りの色を調整するようだ。

「へぇ～便利ですねぇ！　じゃあこの果物はなんて言うですか？」
「お兄さんこれも知らないの!?　これは”バルナ”って言うんだよ、食べたこと無いの？」

バルナ……聞いたことないな、でも見た目がまっすぐなバナナのようだし、名前も似てるし味もそうなのかな？　ううむ、食べてみたい。

「その様子だと食べたことないみたいね、一本どう？　２０メルスだよ！」

くっお腹も空いてるし、非常に興味もあるんだが！　金が無い！

「ご、ごめんサイフを置いてきちゃったみたいなんだ、後でまた買いに来るよ」
「そっか、早くしてね、人気あるからすぐに売れちゃうよ！」
急いで戻ってこよう、でもまずは……。
「ヨザークさんに、キチンと理由を話して、謝らないとな」

馬車の止めてある広場まで戻ると、ヨザークさんが知り合いと思われる人たちと焚き火を囲んで話しをしていた。
会話の邪魔をするようで悪いけど、これは俺なりのケジメだ、ちょっと中断して来てもらおう。
「ヨザークさん！　ちょっと、来て貰っていいですか？」
ヨザークさんは周りとの会話を中断し「おう」とぶっきらぼうに答えてこちらに歩いてきた。
「聞かせてくれるんだな？　なんであんな無茶をしたのか」
先程のように淡々した様子ではなく、まるで親に怒られた子供を諭すように聞いてきてくる。
「はい、俺は自分の力を過信していました。『自分ならやれる』そんな自惚れで、何の非も無い女性に、それも明らかに各上の相手に

剣を向けました」

尤も、最終的には彼女の方から剣を向けて来たのだが、その原因を作ったのは間違い無く自分だ、話しがややこしくなるので割合してもいいだろう。

「その結果がコレです。なんで自分が負けたのかも解らずただ悔しくて頭が混乱して、旅の予定まで狂わせてヨザークさんに迷惑を……迷惑掛けたのに謝りもせず……」

思い返すと、なんて恩知らずなんだろう。情けなくて、思わず言葉が詰まる。

「謝りもせず飛び出して……本当に申し訳ありませんでした。ごめんなさい、ヨザークさん」

思えば、この世界に来てからこの人にお世話になりっぱなしだ。それなのに俺は……。

「分かった、もう同じ無茶はしないんだな？　自分の身の丈にあった行動をすると、約束出来るな？」

「はい！　約束します！」

もう絶対に間違わない。今回相手が人間で殺し合いではなかったものの、もしこれが悪意を持った敵だったらどうなっていたか……。

この身は不老不死、だがそれがなんだと言うんだ。

『死んでも大丈夫』なんて気構えで何が出来ようか。

俺はここで生きて、この目で世界を見て周るんだ。

立ち止まっている暇なんて無いのだから！

## 第七話「謝罪とこれからと」（後書き）

なんだかこのまま打ち切りしてしまいそうな終わり方ですが、続きます。

## 第八話「黄色い果実と思い出の剣」（前書き）

食べ物の事を書いてるとお腹が減ってきます。

# 第八話「黄色い果実と思い出の剣」

なんだろう、さっきまでの暗い気持ちが嘘のようだ。
悩みや疑問が解決したのだから当然と言えば当然だけど、俺ってこんなに繊細なのか？
しかし今はそんな事よりも……。

「ヨザークさん、色々と吹っ切れたのはいいんですが、俺もう駄目かもしれません」
「おいどうした！　どこか痛むのか！？」
「色々すっきりした所為で余計腹が減って……なんか食わせてください……」

もう限界だ、胃がキュウキュウ締め付けられるようだ。
こんな時は肉だ、肉が食いたい！！

「お前、屋台でも出店でもあるんだから何か摘まんできたらよかっただろ……」

そんな可愛そうな物を見るような目で見ないで下さい、本当に限界なんです。
もう喋る気力もないです、そもそもお金が無いです……。

「ちょっとついてこい。さっき焚き火でヘビーモウラスの肉を焼くとこだったんだ」

肉？　いまヨザークさん肉って言ってたよね？　昼間市場で聞いた魔物の名前が聞こえたけど、食用みたいだし関係ない！

「肉ですか！　食います！　俺草原抜ける前から何も食ってなかったんです！」
「おいおい、食料も尽きた状態であそこを突破してきたのか？　本当に無茶が好きな奴だなシュテルは」
「途中で気がついたんですよ、それに市場で何か食べようにも、俺無一文ですし」

そうだよ、せめてこの世界の通貨くらい幾らか荷物に入れておいてくれてもよかったじゃないかモヤモヤさん。

「馬車に乗る金が無いんだと思ったが、まさか無一文だったとは……。こりゃ先に尻尾の代金渡しておいたほうがよさそうだな」

馬車に戻って代金の支払いをしようと提案してきたが、断っておく、今は一刻も早く……！

「金なんてあとでいいです。肉食いましょう肉……さぁ、早く！」

まるで戦場から逃げるような必死の形相で急かしたせいか、ヨザークさんが「しょうがない奴だな」なんて軽く苦笑いしながら先程の焚き火をしていた場所へと案内してくれた。

焚き火を囲んでる人達が此方に気付き「お、戻ったか、そっちはさっきの兄さんか」と声をかけてくるが、俺は「シュテルって言います、肉ください！」と必要最低限自己紹介で肉を要求した。
しょうがないだろう、もう肉の焼ける匂いでまともな思考が出来ないのだから……。

空腹は最高の調味料だとはよく言った物だ。軽く塩をふっただけのようだが美味い。

少々歯ごたえがあるが、噛み切れない程じゃない。

焚き火で焼いただけでこの美味さなんだから、キチンとした環境で調理をすればもっと美味いはずだ。

「美味い、美味いですよ！　本当に死ぬかと思いましたよ！」

「おい若いの、こいつも食っていいぞ」

焚き火の明かりでよく顔が見えないが、荒々しくウェーブ掛かった髪を後ろへ流し、アゴも髪と同じように伸ばして後ろへ撫で付けた男性が何かを投げてよこす。あれ？　これって。

「あ！　これバルナって言うんですよね、さっき屋台で売ってたの見て教えて貰ったんですよ！　持ち合わせがなかったので買えませんでしたが……」

やった、気になってたんだよ”バルナ”あの店員さんには悪いけど、遠慮なく頂いておこう。

手に持つと、皮もバナナのように厚みがあり、手で簡単に剥けた。すると中からこれまたバナナのような白い果肉が現れたので遠慮なく齧り付く。

一口で口の中に南国の果物特有の甘い風味が広がる。バナナのようにネットリとした食感ではなく、どちらかというと硬めに茹でたジャガイモのような、ほくほくとした食感だ。

これも美味いな、フリッターにしたら絶対さらに美味しくなるぞ！

「おいしいです！　初めて食べましたよコレ！」
「初めてって、お前一体どっから着たんだ」
「ああ、シュテルは随分外との交流の少ない田舎から出てきたばかりなんだよ。ギルドも知らなかったくらいだ」
フォローありがとうヨザークさん。
色々知識を蓄えないと、これからも人に驚かれてしまうかもしれないし。
「さっきもこのバルナを売ってたお姉さんに驚かれましたよ、本当にイモと麦と狩って来た魚や鳥しか食べた事がなくて……」
こう言って予防線を張っておけば何かと便利だろう。少なくとも食に関してはこうやって言い訳する事にしよう。
「それは俺も初耳だぞシュテル。じゃあお前本当に物流すらないとこで暮らしてたんだな。自給自足って奴か？　甘い物もほとんど食った事なかったんじゃないか？」
「ええ、森の木の実などは食べたことがありますが、名前などは知りませんし、こんなに甘い物もありませんでした」
よくもこんなに澱みなく嘘の思い出を語れるな俺。しかもなんだかみんなの視線が哀れみを含んでるような気が……。
「若いの、さっき言ってたバルナ売りはたぶん俺の娘だ、もうすぐここに戻って来るから、売れ残ったバルナがあったらジャンジャン食ってくれ！」
おおう、さっきのお姉さんのお父さんなのか、二十歳前後だと思

ったけど、この人も意外と歳いってるのかな。

「そうだったんですか、でもいいんですか？一本２０メルスですし払いますよ」

「気にするな、売れ残りなんてどうせ色や形が悪い物だ、金なんていらんぞ」

バナナって変色しやすいけど、バルナもそうなのかね？　むしろ少し変色してる奴の方甘いと思うんだけど。

バルナについて考えていたところ、誰かが近づいくる気配を感じて顔を上げてみると――

「あれま、さっきのお兄さんじゃない？　お父さんの知り合いだったの？」

お店を出していた娘さんが戻ってきた。そういえばさっき近くで話したとき思ったんだけど、この人も瞳孔が縦長だった。この世界の女性は皆そういう目をしてるんだろうか？

「さっき会ったばかりです、俺がお世話になってる商人のヨザークさんに紹介してもらいました」

「へぇ～ヨザークさんとこのお弟子さん？　世間は狭いもんね～」

どうやらヨザークさんを知ってる様子だ。

知り合いの知り合いという事で気を許したのか、少々間延びしたしゃべり方で明るく話しかけてくる。随分と明るい性格のようだ。

「いや、弟子じゃなくて街まで乗せてもらってるんだ。草原で立往生してた所を拾ってもらったんだ」

「あ、お兄さんも”ガルヴェウス”まで行くんだ。何かの依頼の帰りなの？」

街の名前かな？　今更知ったよ！

どうやら俺のことをギルドの仕事で街から出ていた冒険者か何かだと思ってるみたいだ。

「違うよ、これからギルドに所属して仕事を始めるんだ。街の名前も今知ったよ」

「あ、そっか。ブライトランプも知らないって言ってたもんね、どこのギルドに入るのか決めてるの？」

ああ……また皆の視線が集まってきたじゃないか、余計な事をー！

「お、おいシュテル、まさかブライトランプもなかったのかお前の村は！　夜はどうしてたんだ」

案の定コレだ、これから先何度こういう反応をされるのやら……。

「え、ええと、火を使ったランプや松明を使っていたのですが」

「ああ、可燃性のランプはあったのか……驚いた、もし夕暮れと共に眠るなんて言い出したら、さすがに俺もその村に行商に行こうかと思ったぞ」

さすがに、そこまで自然と共存してる所がまだ存在してるとは俺も思っていない。

どんな村だと思われてるのやら。

空腹も満たされ、ひと段落ついたのでヨザークさんに馬車の荷物に用があると告げ連れて行って貰う。どうやら馬車の持ち主以外は、

たとえ一緒に居た人間でも広場に入れて貰えないらしい。

俺の用事と言うのはもちろん尻尾の代金……ではなくて、カノンの言っていた剣を装備する為だ。

「あった、これだ」

淡い空色の鞘に納まった剣を取り、腰の刀と交換する。今の俺はコイツを下げる資格はないだろうし。

「おいシュテル、そっちの剣はもう使わないのか？　姉さんが作ったって一品だろ？」

「ええ、こっちも姉が作った剣なんです。さっきの剣は俺にはまだ使いこなせないみたいです」

尤も、いつまでも使えないままでいるつもりはないけどね！

## 第八話「黄色い果実と思い出の剣」（後書き）

ステーキが食べたいです、

指摘や突っ込み、感想や評価などいつでも歓迎です。

# 第九話「貨幣価値と金属の価値」（前書き）

今回はまた説明回です、
風呂敷広げすぎて収拾つかなくならないように気をつけないと……。

## 第九話「貨幣価値と金属の価値」

「おっと忘れてた、ほらシュテル、尻尾の代金の２１０００メルスだ」

ヨザークさんが硬貨が入った袋を渡してくれた。随分沢山入っているみたいだけど、どれが何メルスなのかわからない。

「すみません、どれが何メルスなのかも……」

また驚かれるんだろうなぁと思いつつも、聞いてみると

「はぁ、まさかとは思ったが、硬貨を見るのも初めてだったのか。それなのに数字に強いし、よく交渉の真似事も出来たな」

聞くは一時の恥じ、知らぬは一生の恥じだ！　もうこの際だから詳しく聞いてしまえ。

するとヨザークさんは自分の袋から5種類の硬貨を取り出してくれた。

「いいか、この金色の硬貨が１００００メルスだ、普通に持ち歩くならこれが一番価値のある硬貨だ」

「『持ち歩く』と云う事は普段は持ち歩かない、大きな買い物の時にしか使わない硬貨もあるって事ですか？」

「その通りだ、後で説明するからこのまま続けるぞ、コレが一枚で１０００メルスの銀貨だ」

さっきの金貨と大きさは同じだが、銀色の硬貨を見せてくれた。

さっきの金貨にも描かれていた木の模様がついている。

「さっきの金貨にも掘ってありましたけど、この木の模様ってなんなんですか？」
「こいつは神話に出てくる《世界樹》って奴なんだとさ。大昔の遺跡の壁画を参考にしたそうだ」
《世界樹》か。本当に存在したのなら、その痕跡を一度調べる必要がありそうだな……。
「次はコイツだ。これは黒鉄貨（コクテッカ）って言って、お前さんの剣にも使われていたクロムタイトに大量の鉄を加えて作られたもんだ。他の硬貨は混ぜ物なんかしてないが、クロムタイトは貴重だからな、だからお前さんもあの剣を盗まれないようにしろよ？　ちなみに１００メルスの価値がある」
見た所少し黒ずんだステンレスのような色をしている。幸い銀貨とは大きさが違うので間違えたりはしないだろうけど、それにこっちのほうが光沢があるし。
「で最後がこの二つだ。さっきの黒鉄貨と同じ大きさなのが銅貨、一回り小さいのが小銅貨だ。それぞれ１０メルスと１メルス。まあ小銅貨を使う事はそう無いと思うけどな」
一の位の買い物はめったにないのかもしれない。先程のバルナも２０メルスだったし、最低でも１０メルスの物しかないのだろうか？
「じゃあなんでそんな物があるんですか？」
「昔の名残だそうだ、昔の硬貨は全部銅で出来ていて、大きさの違いだけで価値が変わっていたんだが、三百年前の戦争で銅が大量に使われてな、小銅貨以外はほとんど溶かされてしまったんだ。それ

から徐々に他の金属が使われるようになって今に至るって訳だ。この小銅貨はその戦争の前の残りなんだよ、だから古いし使われる事も殆ど無い」

言われてみると小銅貨には何も模様がついていないし、形も微妙に歪だ。

鋳造技術が今よりも低かったのだろう。

「じゃあ最初に聞いた、特別な硬貨について教えて貰えますか？」

「ああ、俺も取引で使う場面なんて見たことないが、紅金貨（ベニキンカ）って奴だ。金貨を赤く染めたような色をしていて、一枚で１０００万メルスの価値があるんだ」

一気に１００００から位がとんだなぁ、まあたしかに金貨１０００枚なんて重くて持ち運びに苦労しそうだけど、偽造なんてされたら一大事じゃないか？

「そんなに価値があるなら、偽造されたら一大事じゃないですか」

「いや、その心配はない。材質は”アダマンタイト”っていう金属なんだが、希少価値が凄くてな、普通に生活してたら手に入らない上、鉱脈も国が管理しているんだ。それに加工にも普通の炉じゃ溶かせないから、偽造なんて実質不可能なんだ」

なるほど、それなら安心だ。

しかし何故国で採掘を管理しているのだろう？　偽造防止の為だけとは思えない。可能性として考えられるのは……。

「もしかしてアダマンタイトって武具にも使われるんですか？」

「お、なんでそう思ったんだ？」

「だって偽造防止の為とは云え、国で採掘を管理するくらいですか

ら、価値の暴落や偽造の恐れよりも、何かもっと国にとって不利益になる事情があると思ったんですが」

それにそんな価値のある貨幣、偽造しても使う場面なんて限られる。もし使ってもすぐに足もついてしまうだろうし。

「正解だ、アダマンタイトはどんな鉄や合金、錬金術で生まれた素材よりも硬く、しなやかで、魔術への抵抗も他とはケタ違いなんだ。だからそれで武具なんて大量に作られたら、世界のパワーバランスが崩れてしまうんだよ」

やはりそうか。魔術にも強く、他の物質では傷を付けられない鎧なんてどう攻略したらいいか分からない、それに剣に加工したら相手の守りを一方的に破壊出来るし、本当にバランス崩壊もいいところだ。

「よし、じゃあ説明はこれで終わりだ、戻ってさっきの場所にテントを張るぞ」

「分かりました、ありがとう御座いました」

テントに戻りながら袋の中を確認すると、金貨一枚と銀化十枚、それに黒鉄貨が十枚入っていた、この方が買い物もしやすいので助かる。

焚き火をしていた広場に戻ると、バルナ売りの娘とその父親がテントを張っていた、どうやら他の人はすでに他の場所にテントを張っていたらしく、姿を消していた。

「遅かったな、ソイツかい？　お前の用って」

そう腰に下げた剣を顎で指し示す。

「ええ、今の俺にはさっきに剣は使いこなせないみたいです」

「そうか？　俺が見た所、あの時の動きは中々のモンだったぜ、鞘からあそこまで綺麗に抜き放つ技と云い、剣速と云い、あれなら大抵の奴は受ける事は出来ないぞ？　まぁ兄さんは避けられちまったがな」

……なんてこった、この人あの時あの場所にいたなんて……。

「えっと、見られてたんですか。でもあれはただの模倣です、俺の技じゃありません。その結果がアレですからね」

「そうか、しかしあの剣を使った後じゃ物足りないんじゃないのか？　あの剣、俺も見せてもらったが相当なもんだぜ？　鍛冶ギルドの連中に見せたら大騒ぎになる事請け合いだ」

「ああ忘れてた、気絶したお前さんを運んでくれたのはソイツ、レオフィスだ、剣も急いで俺が回収したからいい物の、俺達がいなかったら盗まれていたかもしれないぞ」

とヨザークさんが教えてくれた。

そうだったのか。じゃあヨザークさんも見てたって事か……。

「そうだったんですか、レオフィスさん、ありがとう御座いました」

「気にするな、それにいいもん見せて貰ったしな、俺は武器専門の商人件冒険者なんだが、久々に血が騒いだぜ」

「え？　ギルドって掛け持ち出来たんですか？」

初耳だ、それなら活動の幅がグンと増えるかもしれないぞ！

「ああ、戦闘ギルドには一つしか入れないが、商業と職人のギルドにどっちかひとつ入れるんだ、俺は普段は街で商売してるから商人ギルドだ」

なるほど、街に行ってから各ギルドを巡ってみる必要がありそうだ。

「そうだったんですか、ますます街に行くのが楽しみになってきましたよ」

「ならしっかり寝て明日に備えておくんだな」

そう言ってレオフィスさんは娘さんが張り終えたテントに入っていった、俺もヨザークさんの手伝いをしなきゃ！

完成したテントの中で、街での生活に期待を膨らませ眠りについた。

## 第十話「砕月と蒼剣」（前書き）

やっと女の子の名前が判明します、
この小説には女性分が少ない気がします。
そしてやっと主人公っぽい性能の片鱗が。

# 第十話「砕月と蒼剣」

「う、う～ん。眩しい……もう朝か？」

深夜、慣れないテントの所為か目が覚めた。
時計を持っていないので確認出来ないが、まだそんな時間じゃないはずだ。
ではこの明るさはなんだろう？
テントの布越しに青白い光が見えるが……。

念の為剣を腰に差し、テントから出てみる、そして光の正体を発見した。

「すごい……なんだコレ！」

人が起きてしまうかもしれないが、そんな事お構いなしに思わず声を上げてしまう。
見上げるとそこには、濃紺の布に塩の結晶を撒き散らしたような星空が広がっていた。
でも俺が驚いたのはその多い尽くさんばかりの星の数ではなく……。

「これは、月なのか？」

そう、月だ。
俺の知っている月とは比べるのも馬鹿らしい位の大きな月『周りに対比する物が無い為大きく見える』なんて物じゃない、本当に巨大な月が空に浮かんでいた。
それだけではない。

”砕けている”のだ、巨大な月が大きく砕け、その周囲に破片が浮かんでいる。そしてその破片も月と一緒に、青白い少し冷たそうな、それでいて、まるで夜に生きる全ての物を慰める様な優しい光を放っている。

「これ、寝る前にはなかったよな……」

そう小さく呟いていると、誰かの近づく気配を感じた。

「あれ？　お兄さんも砕月（サイゲツ）を見に起きて来たの？」

レオフィスさんの娘さんだ。そうか、これは砕月って言うのか。さすがにこの世界に住んでるなら絶対知ってるはずだ、ボロを出さないようにしなきゃな。

「うん、そうなんだ。折角こんなに明るいんだし、月明かりの下で剣の特訓と洒落こもうかな、なんて」

我ながら上手い理由だ、剣を持ってきて正解だった。

「へ～意外とロマンチストなんだね。私は毎月“蒼月の日”になると砕月の絵を描いてるんだ」

と、彼女は手に持ったスケッチブックを示す。

という事はこれは毎日じゃなくて、一定の周期で現れるって事か。

「へぇ、絵を描くんだ、そういえばまだ名前を聞いてなかったね、俺はシュテルって言うんだ、君は？」

折角の機会だし、自己紹介しておこう

「そういえば自己紹介がまだだったね、私はスフィア、お父さんと同じ”レオネイル”族だよ」

レオネイル？　亜人がいるとは聞いていたけど、どう見ても人間にしか見えないなぁ

「亜人だったの？　全然気がつかなかったよ」

するとスフィアさんは少し唇を尖らせて「亜人って言うな～！」と軽く怒っている。何か気に触る事を言ってしまったかな……？

「ご、ごめん！　故郷には住んでいなくて！　知識としてしか知らなかったんだ、何か気に障る事言っちゃったかな、謝るよ」

「む～しょうがない、許してあげる。”亜人”って言うのはエルフと貴方達ヒュマリア以外の全てを一纏めにした呼び名で、自分の種族に誇りを持ってる私達”獣人”の前では言っちゃ駄目なんだよ」

ヨザークさんの昔話で亜人って聞いたから、そう呼んでしまったけど今は禁句みたいだ、気をつけよう。

「そうだったんだ、有り難う、教えてくれて。以後気をつけるよスフィアさん」

謝罪に誠意を感じてくれたのか「うんうん」と満足げに頷いている。

「そういえば、種族の特徴って無いのかい？　俺となんら変わらないと思うんだけど」

「あ、そういえばお父さんも髪型の所為で見え難いし私もこれつけてるしね」

そう言って、頭に付けていたバンダナを外すと、猫科の動物の様な耳がピョコっと現れた。

「おお！　猫耳だ！」

「違うよ！　私のは少し毛が短くて”キャトネイル”の耳に間違われやすいけど、れっきとしたレオネイルだよ！」

少しムキになって耳をこちらに向けて近づけてくるスフィアさん。あ、なんかいいにおいがする。

「うわっと、本当だ、たしかに耳の周りにフサフサした毛が生えてる」

という事は猫じゃなくてライオンや虎の耳なのかな、どちらにしても、可愛らしいなぁ……。

「そうでしょうそうでしょう、それに目も違うんだよ、瞳孔が丸くないでしょ？」

という事は女性だから、じゃなくて種族の特徴だったのか。レオフィスさんの目は焚き火越しだったからよく見えなかったし、となると俺と戦ったアルシャさんも？

でも耳はついてなかったと思うけど……。

「さってと、じゃあ私は絵を描くから、剣の特訓頑張ってね！」

スフィアさんは少し離れた所に組み立て式の椅子を立て、スケッ

チブックを開いて絵を描き始めた。
本当に元気な娘だなぁ、猫科だし夜行性なのかな？

さてと、俺も特訓するって言っちゃったし、この剣を実際に振ってみるのに丁度いいな。
鞘から剣を抜くと、たしかに一般的なバスタードソードより少し小ぶりで、より片手剣に近い大きさだ。

刀身はだいたい七十センチ、グリップは柄と鍔を含めて三十五センチ程で、両手で握っても少し余裕がある。

一体化してるし正確にはヒルトって言うのかな、グリップじゃなくて。

まずは両手で持ち、真っ直ぐに振り下ろしてみる。
思ったよりも軽く「ピタ」と剣先をグラつかせず綺麗に停止させる事が出来た。

それに気をよくした俺は、カノンにはもう再現はするなと言われたが、カノンの刀捌きを真似て動いてみる。

別に特訓に生かす為なら良いだろう、と袈裟懸け、逆袈裟、踏み込みと同時に切り上げ「ピタ」と、また刀身を止める。

そうして刀の型を繰り返して行く内に『この剣ならもっとこうした方がいいんじゃないか？』と少しずつ動きを修正し始める。

より早く力強く、刀のように反っていないので、全ての動きに刃を引くような動きを取り入れて行く。
真っ直ぐな刀身は切断には向いていない、だから『引いて斬る』

動きを意識する。

（もっと早く、もっとコンパクトに、もっと足を開け、身体全てをの動きを剣に連動させろ！）

次第に剣が身体の一部のように感じてくる、俺の身体を知り尽くした姉さんが、人であった頃のカノンの……即ち今の俺の身体の為に作り上げた一品。

本当に良い仕事するなぁ姉さん。

そして両手持ちから片手持ちに流れるように持ち替え、さらに動きを煮詰めていく。

（凄い、片手で持ってもまるで手に吸い付くようにフィットしてるし、剣筋もまったくぶれない）

この完成された身体に感謝をしつつ、剣を振り続ける。

1時間程剣を振り続け、少し休憩しようと手を止めて辺りを見てみると、スフィアさんがスケッチブックを閉じ、椅子をこちらに向けて座り俺を見ていた。

うわ！　見られてたか、恥ずかしい！！

「お、お粗末様でした……。そんな見ても面白いものじゃないよ、恥ずかしいなぁ。絵はもういいの？」

どうやら見入っていたのか「ハッ」と耳をピンと立てるスフィアさん、本当に猫っぽい。

「う、うん、砕月はもう見えなくなっちゃったしね、今月は四十分

しか描けなかったよ」

本当だ、いつのまにか見えなくなっている、どうやら短い時間しか光らないようだ。

「それよりもシュテルすごいね～！　まだギルドにも入ってないって云うのに！　あんなに綺麗な動き始めて見たよ～！」

「そ、そうか？　まだ物真似の粋を出ないと思うんだけど、そんなに凄かった？」

て、照れるな、そんなに凄かったかかな？　たしかに途中からは自分で考えて、最適化していったけど、まだ自信が無い、実戦で振るった事もないし。

「凄いよ～！　私もまだ冒険者になったばかりだけど、そんな綺麗な動きの剣士なんて見たことないよ～！」

あ、スフィアさんも冒険者と商人兼業してるのか、俺は何と兼業しようかな……。

「スフィアさんも商人ギルドだけじゃなくて冒険者ギルドにはいってたんだ。やっぱりお父さんのお手伝い？」

「ううん、私は職人ギルドの”芸術家ギルド”だよ。ちょっと野営で店番をするだけならギルドに入って無くてもいいんだ～」

なるほど、職人ギルドっていうのは本当になんでもありそうだ、俺も入るなら職人ギルドがいいかもしれないな。

「そうなんだ、スフィアさんも冒険者だし、俺の先輩になるって事だね」

「そうだね、それよりも”さん”付けなんてしなくていいよ～見た所シュテルのほう年上みたいだし、ムズ痒いよ」

苦笑いとも照れ笑いとも取れる顔で呼び捨てにするようにお願いされる。

「そうだね、じゃあ宜しくスフィア、ギルドに入ったら是非一緒に仕事をしてみよう」

「うん！　楽しみにしてるね～」

さてと、明日に響くしそろそろ寝直そうかな。

剣を鞘にしまおうとしたが、思わずその手が止まる。

抜いた時は、砕月の光の反射でうっすら青く見えるのだと思ってたが、どうやらこの刀身そのものがうっすらと青みを帯びているようだった、剣を見たスフィアが少し興奮した様子で。

「そういえばその剣、それってもしかして”ムーンダスト”が混ぜてあるの!?　いいな～私も欲しいな～！」

また知らない単語が出てきた。たぶん何か鉱石だと思うから、あえて聞かないで置こう、あんまり自分の無知を年下の女の子に知られるのはさすがに、なんというか、プライドが……はぁ。

「た、たぶんそうだと思う、姉さんが作ったから詳しくは分からないんだけど」

「へ～！　お姉さん鍛冶職人なんだ！　ガルヴェウスのギルドにいるの？」

「いや、故郷にいるよ、ギルドにも所属していないんだ」

この世界では職人や商人はギルドに所属するのが当たり前みたいだ、これからは言わない方がいいかもしれないな……。

「そっか～、残念。いたら私も作って貰おうと思ったのにな～」

さっきの絵と良い、彼女は本当に月が好きみたいだ、まぁ砕月なんてあんな綺麗な物が存在するのだし、気持ちは分からなくもないけどね。

「よし、じゃあ明日も早いだろうし、俺はテントに戻るよ」

「そだね、おやすみシュテル」

「ああ、おやすみ」

スフィアと挨拶を交わし、俺はテントへと戻っていった。

## 第十話「砕月と蒼剣」（後書き）

次のお話しで一章は終了です、その後閑話を挟んで次の章に行きたいと思います。

## 第十一話「ガルヴェウス」（前書き）

ようやく第一章終了です。
導入部分だったのでファンタジー要素が殆ど無くて退屈だったと思います。

この後閑話を挟んでから第二章に入りたいと思っています。

# 第十一話「ガルヴェウス」

「シュテル！　一頭そっちに行ったよ！」

こちらに敵が抜けて来たのを知らせるスフィアの声が耳に飛び込んでくる。

「分かった！　こっちは一人で何とかする！」

真っ直ぐにこちらに向かい突進してくるヘビーモウラス。剣を両手で握り直し待ち受ける。

足を肩幅ほどに開き、右足を斜め前に出し、ヘビーモウラスとの距離が残り3メートル程の所で右足を軸に身体を九十度回転し突進のコースから外れた。

そして剣を腰溜めに構え、目の前をヘビーモウラスが通過する瞬間、全力でわき腹に向かって突きを放つ。

全力で放った突きは見事にわき腹に命中し、突進を急に止めることが出来ないのか、わき腹に俺の剣が深々と突き刺さったまま数メートル進んだ後に横転した。

幸い剣の刺さってない側が下になった為、剣の回収は楽そうだ。

「シュテル～！　こっちは終わったよ～！」

スフィアが父親のレオフィスさんと共にこちらへと向かって来る、レオフィスさんは両手にゴロンとした大きな肉塊を両手で抱えている、どうやら戦利品のようだ。

「こっちも終わったよ、今から肉と角を切り取るとこだよ」

無事に倒せた事に満足し、残留部位と討伐証明部位を分断しに掛かる。

現在”ギルド自治街ガルヴェウス”まで残り十ケイル（キロメートル）地点まで進んだ所だ。

遡ること七時間前。

「そろそろ起きろ！　シュテル、今日は早めに出発するぞ」

そんな威勢の良いヨザークさんの声で、俺は目を覚ました。

昨晩は変な時間に目が覚めてしまったので、少々寝不足気味だけどしょうがない。

それにお陰で良い物見れたしスフィアとも親しくなれた。

「おはようございます、ヨザークさん」

「ああ、おはよう。水場は分かるか？　起きて直ぐで悪いが水を汲んできてくれ、俺はその間にテントを畳んじまうから」

水場……きっと川の所にあるだろう、川沿いに移動すれば確実に見つかるはずだ。

「大丈夫です、川沿いにあるんですよね？　何に汲んで来たらいい

ですか？」
「これだ、この皮袋四つ分と、後で俺も手伝うが外に台車が置いてある、そこに乗ってるタルにも汲む予定だ」
結構多いな、一袋に二リットルは汲めそうだ。
「分かりました、じゃあ行ってきます」

早朝、まだ外は少し肌寒いが、冷えた空気と朝露に濡れた芝の香りが清々しい。
気持ちいい朝だな～！　やっぱりこの世界の空気は前の世界とは比べ物にならないくらい美味しい！
思わず伸びをして、水場へと向かう。
台車に小ぶりなタルが積んであったが、この程度なら一人でも運べそうなのでついでにやってしまおうかな。

早朝なので市場にはまだ誰も居なく、屋台や出店も骨組みだけを残してガラリとしている。
誰も居ない市場を抜け、森へと入った。
芝の香りとはまた違う、木と土の優しい香りを胸いっぱいに吸い込みながら川を目指す。

途中他の商人だろうか？　同じく水を求めて向かう人たちが「おはよう、今日も一日頑張ろうな」と挨拶して来たので俺も「おはようございます、いい朝ですね、お互い頑張りましょう」と答えておく。

こういった何気ないやりとりも、全て新鮮で気持ちがウキウキしてくる。
そうこうしてる内に川が見えてきた、川原は石ばかりで台車では

進み難いので、森の中を川沿いに移動していると、人の行列が見えてきた、どうやらあそこが水場らしい。

最後尾に並んでいるとレオフィスさん親子が水の入った木製のバケツをそれぞれ両手に持ちながらこちらに歩いてきた。

「おはようございます、レオフィスさん、スフィア」
「おう、朝から精が出るな、シュテル」
「おはようシュテル、一人で大丈夫？」

と二人が俺が押してる台車を見て言う。

「大丈夫だよスフィア、これくらい朝飯前さ」
「そっか、さすが剣士、これも特訓の一環って事だね」
「そんな所だね」と二人で軽く笑いあう。

「なんだ、お前達随分仲が良さそうじゃないか」

と不思議そうな顔をするレオフィスさん、それに対してスフィアが……。

「昨日の夜にちょっとね～」と意味ありげに笑みを浮かべながら言い放つ。

ちょっと待て、そんな言い方したら……ひぃ！

「……なんだと？　おい、テメェ俺の娘に何をした？　事と次第によっちゃヨザークの連れでも容赦しねぇぞ！」

ヤバイっておい！　なんか毛が逆立って物凄いプレッシャー放ってるよ！

「待って！　レオフィスさん待って！　違う誤解ですって！」
「なんだ！　この後に及んで弁解しようってか！」
「だから、なんで彼女に俺が何かしたのが前提なんですか！　ただ昨日の夜に訓練していた時に砕月の絵を描きにきた彼女と顔を会わせただけですよ！」

スフィアがイタズラに成功した子供のように、ニヤニヤとした顔を浮かべこちらを見ている。
こうなるって分かっててワザとあんな言い方をしたなコイツ……。

「なんだ、そうだったのか。そうなら早くそう言え、しかしそうか、昨日だったのか蒼星の日は」
「そうだよ、お父さん今月も見逃したね、先週教えたじゃない」

レオフィスさんは心底残念そうだ、余り星とか眺めるタイプには見えないが……？

「あ、列進んでるよ！　進まなきゃ！」

おっと、話し込んでたらだいぶ列が進んでいる。

水を汲み終えてテントのあった場所に戻ると

「やっぱり一人で汲みにいってたか、見かけによらず力持ちなんだな」

と言われ随分と驚かれた。

昨夜の焼いた肉を炙り直し、それをモチモチとしたパンに挟みそれを朝食とした。

片手で食べられるので、食べながら台車を馬車を止めてある広場に押して行く。

少々硬いがビーフジャーキーのようで美味しかった、このパンもどうやら麦ではないようだし、思ったよりも食文化が発達してるみたいだ、これは嬉しい発見だ。

荷台にタルを積み込み、水の入った皮袋をヨザークさんに渡すと「一つはお前にやる、お前の事だ、どうせ持っていないんだろ？」と一つ渡された、さすが、よく判ってらっしゃる。

柵から出て出発しようとしたところでレオフィスさんの馬車と出くわした。

本当はもう一日いるつもりだったが、予定を変更して一日早く出発すると言う事で、一緒に行く事になった。

レオフィスさんはスレイランナーではなく、通常使われる”ロードランナー”に馬車を引かせていたので、そちらのペースにあわせて進む。

道中はレオフィス親子に魔物との戦闘で残る部分や、先日の騒動の原因にもなっていた討伐証明部位と言う物について質問した、案の定驚かれたが。

「そうか、それも知らないのか。フレイルラットで云う所の尻尾が”残留部位”って言って、戦闘後にも残る部位なんだよ。倒してか

らも切り取れるが、魔物によって時間の猶予が違ってな、アイツはすぐに消えちまうから要注意だ」

なるほど、やはり敵の種類で残す部位が違うし、死体が消えるまでの時間にも差があるのか。

「討伐証明部位っていうのはね～特定の魔物の討伐依頼で『倒しましたよ～』って証拠として提出する部位なんだ。依頼を受けていなくても自分の所属してるギルドに行って渡せば、ギルドのランクを上げるのに必要なポイントとして換算されるし、その部位の質や種類によってはお金も貰えるんだよ」

ふむ、こっちは何かの素材にするっていうより、ギルドでの仕事に必要な物なのか。

そして進むこと一時間半、街道から少し離れた位置に雄牛に似た魔物がこちらに向かって突進してきたので、レオフィス親子と俺が迎撃に向かったのだ。

「よし、角も肉も確保完了！　この残った死体はいつ消えるんですか？」

「ああ、こいつは大体二時間は残るからこのまま放置していいぞ」

結構残るんだな、でもあんまり短いと肉を切り離す前に消えちゃうからその位で丁度いいのか。

レオフィスさんは巨大な鉄槌を馬車の荷台へと積み直した、あれがレオフィスさんの得物だ。

「シュテルやっぱり強いね～！　一撃で倒しちゃったじゃない」

対するスフィアは薄い黄色のブラウスに若草色のホットパンツ、その上に皮の胸当てと肘当てを装備し、足には硬そうな皮のロングブーツを履いている。

武器は刃渡り四十センチ程のダガーを両手に持って、完全にスピード重視だ。

親子でスタイルが両極端なのは、やはり一緒に行動する事を踏まえてなんだろうか？

そしてさらに進む事一時間、遠くに巨大な建造物が見えて来た。

どうやら巨大な塔のようだ、その周りにも寄り添うように少し背の低い塔が何棟も建てられている。

こんなに離れてるのに見えるなんて、すごい高さだなぁ、建築技術は随分と発達してるって事か。

技術力にムラがあるな、とつくづく思う。

馬車はどんどんガルヴェウスに近づいて行く、そしてついに――

「で、でかい……」

眼前にガルヴェスの街壁と街門が聳え立つ。

高さ三十メートルはあろう扉が開き、人々を飲み込んで行く。

「ここが、これから俺が生活する街、この世界の事を知るためのスタート地点なのか……」

様々な思いを胸に宿し、これからの生活に俺は心躍らせるのであった。

## 第十一話「ガルヴェウス」（後書き）

ようやく第一章が終わりました。

自分で想像していたよりも長くなってしまい、やはり未熟だな～と痛感しました。

これから閑話、第二章と続きますが、これからも宜しくお願い致します。

## 閑話「行商人と不思議な青年」前編（前書き）

ヨザーク視点の物語です。

会話部分は殆ど無く、ヨザークの心理描写メインです。

## 閑話「行商人と不思議な青年」前編

「まったく、迂闊だった」

そう一人ぼやく俺は行商ギルドに所属する行商人だ。

ガルヴェウスからここ、首都である”ライズアーク”に商品を売りに来たのだが、帰りの護衛を雇おうと冒険者ギルドに行った所、受付の男に

『申し訳御座いません、現在王国騎士団からの依頼で冒険者の方々が殆ど出払っているのです。護衛の依頼を出しても三日は時間を頂く事になってしまうと思うのですが……』

との事だ。

「こんな事なら帰りの護衛も込みで首都までの護衛依頼を出しておくべきだったな」

この時期はフレイルラットが凶暴化する、だから冒険者を雇って護衛にあたらせるのが上等手段なんだが……。

本当に迂闊だ、まさか王国騎士団直々にギルドに依頼を出すなんてな。

払いの良い王国騎士団の依頼だ、皆こぞって依頼を受け討伐に向かったのだろう。

本当に大失態だ、これくらい予想出来た筈なのに。

俺はしょうがなく商人なら余り選択しないであろう手段を取る事にした。

スレイランナーをレンタルし馬車を引かせるのだ。

こうなると当然自前のロードランナーを後でガルヴェスまで輸送して貰わねばならんし、スレイランナーその物のレンタル代金もあってかなりの出費だ。

折角の儲けの二割が自分の失態で消える、儲けが減る事よりも自分の判断ミスに思わず苛立つ。

「俺は一体何年行商をやっているんだ！」と。

「そろそろ危険区域に入るな」

時計を見てスレイランナーの速度を上げる。

こいつは速いのはいいが、その分車輪が跳ねるので荷台が大きく揺れるのだ。

今回は商品を何も仕入れなかったからいいが、もし積んでいたらと思うとゾっとする。

「発明ギルドの偏屈共も、もっとこういう所を改善する努力をしろってんだ」

思わずガルヴェウスにいる変人集団と名高いギルドへ悪態をついた。

速度を上げ街道を進んでいると、街道をのんびり歩いてる人影が見えて来た。

「アイツ！　一人で何考えてんだ！」

いや、でもこれはチャンスかもしれないな。
乗車させて料金を払って貰えば、少しは損を取り戻せるかもしれない。
俺はそんな打算も含み声をかけた。

馬車に乗せた男は少しくすんだ銀髪で、目は俺と同じ緑色の青年だった。

その鋭い眼差しと風貌に一瞬怯みそうになったが、口調は随分と丁寧だ、しかし若干こちらを警戒しているようでぎこちない。
会話の中で名前を聞いてみた所、まるで別人のような柔和な雰囲気に変わった。
お互い自己紹介を済ませた為警戒を解いたのだろう。

話しを聞くと、随分と辺境の田舎から出てきたらしい、何せギルドも知らないと言うのだ。
だからに都会に住む人間を警戒していたのだろうか？

本当に何も知らないらしく、俺の知るギルドの知識を披露すると、とても真剣な様子で聞いてくれたので思わず説明にも熱が入る。
ちょっと教師にでもなったような気分だ。

先程この青年に冒険者となる道を勧めて見たが、果たしてこの青年はやっていけるだろうか？
風貌こそ強そうにも見えるが、見た所装備も細身の剣を腰に差しているだけで、他はちょっと丈夫そうな革のベストを着ている以外身を守るような防具も付けていないようだ。

そう思っていると、荷台に乗った青年が声を掛けてある物を自分の荷物から取り出した。
なんとフレイルラットの尻尾の束だった。
一体どうしたのかと聞いてみると、なんとこの青年、シュテルが切り落としたと言う。
正直信じられなかったが、彼の剣を見せてもらった所、非常に高純度のクロムタイト合金で出来ているようだ。
しかも自分の姉が作ったと言っていたが、一体何者だろうかこの青年は。

俺は青年に尻尾を一本譲って貰えないか聞いてみた、無論金は払うつもりだ。
ここまで良質の尻尾には滅多にお目にかかれない、うまく職人ギルドに売り込めばさらに損を取り戻せるかもしれない。

（案外最初の失態も、よかったかもしれないな）
そんな事を思いながら、この青年、シュテルとの出会いを評した。

## 閑話「行商人と不思議な青年」中編

特にトラブルもなく、シュテルとの会話を楽しみながら街道を進む。

途中シュテルが俺との会話からの断片的な情報だけで、ライズアークからガルヴェウスまでの距離を計算して答えると云う、ちょっとした驚きはあったのだが。

荷台から顔を出して景色を見ていたシュテルが野営地点を発見し、興奮気味に指差して「あそこが野営地点ですか？」と聞いてくる。

やはり人が大勢いるのが珍しいのだろう、この様子じゃガルヴェウスに到着したらどうなる事やら。

俺はその時の反応を想像し、一人微笑ましくシュテルを観察していた。

シュテルは本当に不思議な奴だ、高い教養を持ち合わせているのは会話の中から窺うことが出来るが、この世界の常識と云う物を殆ど知らない。

それに魔物の知識も余り無いようだ。

辺境の村ならば、それこそ自衛に必要な知識を学ばせる事に力を入れてると思うんだが……。

野営地点で馬車を騎士ギルドに預け、シュテルと別行動を取る。

俺は知り合いがいるかもしれないので探してみるつもりだ、シュテルはやはり珍しいのか、嬉しそうに市場の方へと向かって行った。

俺は屋台等の出店を管理する”ガルアーク街道野営本部”に顔を

出すと、案の定俺の古い友人を発見した。
行商人と冒険者という二束の草鞋を見事に履きこなし、ついにはガルヴェウスに自分の店を持ち、行商ギルドから商人ギルドに移った男。

”ハイアニマリア”（上位獣人）とされるレオネイル族のレオフィスだ。

「よう！　レオフィス、珍しいなお前が野営地に来てるなんて」
「ヨザークか、奇遇だな。もうすぐ蒼月の日だからな、今月こそムーンダストが墜落するかもしれないからこうして街から出てきたんだ」

この男は未だに諦めていないのか……あんなもの何時何処に落ちるか誰も予想出来ないってのに。

「お前がアレに御執心なのは今に始まった事じゃないが、店はしめてきたのか？」
「いや、女房に任せてきた。今回は娘が護衛もかねて一緒に来てる」
「そんなに蒼光武器が欲しいのなら、もう大人しくムーンダストを買って作ってもらえばいいだろ？」
「何言ってんだ、自分で見つけた素材を使う事にこそ意味があるんだろうが」
「そんなもんかね、まぁお前さんもそろそろ冒険者を引退して、商売一本に絞ってもいいんじゃないか？　大方自分で使うんじゃ無くてスフィアちゃんに蒼光武器を贈るってのが本当の目的なんだろ？」
「チッ　バレてたか、スフィアには言うんじゃねぇぞ」

なんだかんだで娘を溺愛してるからな、あの娘自身砕月を見るの

が大好きみたいだしな。

レオフィスとお互いの近況報告をしていると、近くの広場が騒がしくなってきた。

この男はこう云った騒ぎが好きな奴で、あっという間に見物に行ってしまう。

俺は（大方また戦闘ギルドの連中が揉めてるんだろう）と特に気にも留めなかったのだが、レオフィスが「オイ！　なんか面白そうな展開になって来たぜ！　もう少し傍で一緒に見物と行こうや」と、年甲斐も無くはしゃぐので、思わず苦笑いを浮かべながらその集団へと近づいていく。

「神聖騎士に喧嘩を売った馬鹿が伸されたんだ、でそれを見てた若い奴がその神聖騎士を挑発してこれから決闘するんだとよ！」

「なんだと？　そりゃ随分と身の程知らずな奴だな」

本当に若さってのは厄介だ、自分を過大評価しすぎ、そして散って行く奴が後を絶たない。

（俺の馬鹿息子も今頃何処で何をしているのやら……）

何年も連絡を寄こさない息子の事を考え、そして今日出会った息子と歳がそう変わらないであろう青年の事を思い出した。

そういえばシュテルにも、つい冒険者を勧めちまったが大丈夫だ

ろうか？
しっかりしているようだが、世間知らずな所もあるからな……。

「おい！　若いのが何か仕掛けるぞ！」

おっと、すっかり物思いに耽っていた様だ。
どれ、その無謀な若者の結末でも見させて貰うとするかね。
そう思った瞬間、耳に聞きなれない音色が入ってきた「なんだ？」
とそちらに顔向ける。

そんな俺の目に映ったのは、剣を弾き飛ばされ、腹に槍斧の柄を
受けて崩れ落ちる、息子に良く似た目をした青年。

シュテルだった。

## 閑話「行商人と不思議な青年」後編（前書き）

ヨザーク視点はここで終了です。

## 閑話「行商人と不思議な青年」後編

自分でも血の気が引いたのが判る。
なんでアイツはあんな所に居る？
なぜあそこで倒れている？

「シュテル！　おいシュテル！」

俺は一瞬止まった思考を無理やり働かせ、倒れたシュテルの元に駆けつる。
途中で弾き飛ばされたシュテルの剣を拾い「コイツ随分良い剣使ってやがるな！」と笑っている三人組から剣を掠め取り、シュテルの腰の鞘に戻す。

三人組がこちらを睨んでいたが、いつの間にか側に居たレオフィスを見て急いで逃げていった。
レオフィスの武具店は冒険者から人気があり、レオフィス自身も少しは名の通った冒険者だからな。

「おいヨザーク、コイツはお前が雇った護衛か何かか？」
「違う、たまたま街道で拾ったんだが……」

事情を説明しようとしたが、誰かが近づく気配を感じ顔を向ける。

「貴方達、そのお兄さんの連れかしら？」

シュテルの相手をした神聖騎士の女がこちらに声を掛けてきた。

「ああそうだ、もう勝負はついただろ、これ以上コイツに構わないでくれ！」
「おいよせヨザーク、別に危害を加えに来たわけじゃない。そうなんだろ？”瞬斧のアルシャ”」
二つ名持ちだったのかこの女。なのに……！
「お前さん、二つ名持ちの癖に大人気ないとは思わないのか！？コイツはまだ冒険者にもなってないんだぞ！　それを……！」
「やめろ、お互い合意の上だったんだ、責めるのは筋違いだ」
くっ、分かってる！　だが！
「嘘……彼が冒険者にもなって居ない……？」
俺の葛藤を余所に、信じられないと云った様子で呟いているアルシャ。
「本当だ！　コイツはこれから、これから冒険者になるんだって……それなのに！」
ああ、落ち着かないとな、何聞き分けの無い子供みたいに喚いているんだ俺は。
俺は怒りを強引に押さえ込みアルシャと応対する。
「いや、もういい、少し取り乱した。でなんの用だい」
「え、ええ……私のしでかした事だもの、せめて治癒の神聖術を掛

けようと思って」

そうか、神聖騎士と呼ばれるだけの事はあるようだ……。

「これで身体に痛みは残らないはずよ、本当に彼には申し訳ない事をしたわ……」

「いや、同意の上だったんだろ？　ならこうして治療してくれただけで十分だ。レオフィス、俺の馬車まで運んでくれないか？」

そうアルシャに告げ、レオフィスに搬送を頼む。アルシャはもう一度頭を下げ去っていった。

「おう、任せてくれ」

シュテルを馬車の荷台に寝かせてから三時間程経った。

俺は様子を見に荷台へと登って行くと、シュテルが呻き声を上げている。

直ぐに顔を覗きこんでみると、丁度目を覚ました。

……俺はつい、体の調子を聞くよりも先に、シュテルに先程の戦闘の理由を聞いしまった。

しかしシュテルは自分でもまだ整理がつかないのか、俯いたままだ。

そんなシュテルに俺はつい、つい感情的に怒鳴り散らしてしまった……。

もしかしたら自分が冒険者を勧めた所為で、こうなったのかもしれない。
もしかしたらここで挫折して自信を無くし、駄目になってしまうかもしれない。

一番辛い時にかけるべき言葉が見つからず、そのまま飛び出していったしまった息子とシュテルの姿が重なる。
だからつい、息子に言えなかった思いも一緒に、シュテルにぶつけてしまったのだ。

シュテルは「少し考えさせて下さい」と告げ、何処かに行ってしまった。
シュテルが飛び出した後、俺は焚き火を囲んでいる仲間達の所で事情を説明した。

レオフィスは「何、こういう時は少し一人で考えさせるのが一番だ、俺達年寄りは必要とされた時に手を差し伸ばしてやればいいんだよ」と言う。

そうなのかもしれない、だが俺は必要とされた時に手を差し伸ばせてやる事が出来なかった経験がある所為で、楽観的に考える事が出来ない。

「まったく、お前が他人にそこまで執着するなんてな。戻って来た時にそんなツラしてたら向こうも言い出しにくいだろ、ドカっと大きく構えて待ってりゃいいんだよ」

そう云うもんかもしれないな。
俺はなんとか自分を納得させ、仲間達と談笑し過ごす事にした。

それからさらに二時間、そろそろ腹が減って来た頃合だ。
今日冒険者から大量のヘビーモウラスの肉を仕入れた仲間が皆にふるまってくれる事になった。

そういえば、シュテルも腹を空かせてるかもしれないな。
そんな事を考えていた時、背後からシュテルの声が掛かる。
声の様子から察するに、どうやら考えが纏まったようだ。

シュテルは自分の間違いを認め、そして俺への謝罪をした。
泣きそうな顔で所々言葉を詰まらせる様子に、思わず俺まで泣きそうになるが、グっと堪えた。

これから先、もうコイツは無謀な真似はしないだろう。
そして挫折を味わった者しか手に入れることの出来ない強さを胸に、こいつは自分の道を歩んでいくのだと思う。

飛び出していった自分の息子も、もしかしたら自分だけの道を見つけたのかもしれない。
今度ギルドの方に息子の安否を確認して、こちらから会いにいこうか。

久々に自分の息子に会いたくなった俺は、そんな事を考えていた。

## 閑話「行商人と不思議な青年」後編（後書き）

次回はカノンの仲間のその後に少し触れてから第二章に入りたいと思います。

## 閑話「その後の仲間達」（前書き）

割と平和な仲間達。
こんなカンジでちょこちょこっとこれからも触れて行きます。

## 閑話「その後の仲間達」

「ふうむ『貴方の分身となるキャラクターを設定して下さい』ですか」

そう自室で呟いている私は、今この世界の娯楽の一つである『ぶいあーるえむえむおーあーるぴーじー』なるゲームを起動しているところです。

この世界に来てから一人で遊ぶ事なんてありませんでしたから、仲間の”リオ”に何か暇つぶしになりそうな遊びありませんか？と聞いて勧められるがままに。

リオは昔いた世界で、戸籍上カノンの妹にあたる少女です。
もっとも、身寄りのない彼女が自由に生きて行く為にそうしたに過ぎないのですけどね。

「ルシ兄ー早く作っちゃいなよー！　そんなの適当にルシ兄の容姿いじって作っちゃえばいいんだからさー」

むう、そういう物ですかね？　しかしゲームの中でくらい別な自分になりきるというのも面白いと思ったのですが。

そう考えていたその時！　私は天啓の如く素晴らしい発想が浮かびました！

そうです！　カノンのような剣士になると云うのも面白いかもしれませんね！

そうと決まれば、あとはそれっぽく作るだけですね――その筈だったのですが……。

「リオ、これはどうやって作ればいいんですか？　私が作ろうとしても醜悪な容姿の大男にしかならないんですけど」
「え？　ルシ兄どんなイメージでキャラクターを作ろうとしたの？　これプレイヤーのイメージを元にある程度自動で作ってくれるはずだよ？　ルシ兄怪物にでもなりたいの？」
「そんな事はありません！　ただこう、最前線で戦う剣士を想像したつもりだったのですが」
「ルシ兄前衛の皆の事そんな風に思ってたの？　皆に言いつけちゃうよ？」

とニヤニヤしてるリオ。この子はまったく。

「違います、ちょっと待ってください。今イメージを練り直しますから」

おかしいですね、前衛の仲間にこんな人物はいないのですが？

おお！　今度は黒い甲冑を着込んだ騎士風の人物が出来上がりました！　これですよこれ、こういうキャラクターがよかったんですよ！

「ふふ、どうですリオ、私のイメージ力も大した物でしょう？　このキャラでプレイする事にします」
「ねえルシ兄、これって前にカノ兄がコスプレで着てた甲冑じゃない？」

……言われて見ればそうですね、しかしいいんじゃないでしょうかもうコレで。

「まぁいいでしょう、いかにも前衛って感じしますし、私はこれでプレイしますよ」

「おっけー、じゃあ私も自分の部屋からつなぐから、一緒にあそぼー」

設定した画面を閉じ、少し大きめのゴーグルを頭に装着する。

これが仮想空間での出来事を、本当に体験してるように感じる為の装置だそうです。

訓練施設にも似たような物がありましたが、その応用なのかもしれませんね。

私の休日はこのゲームに費やされる事になるようです。

「ふむ、贈られてきた荷物はこれだけか」

私は船内にある転送装置に送られてきたカノンの荷物を整理している。

カノンの装備は既に大半が送られてきたいたので、残りは生活用

品や衣類、常に側に置いておく”お気に入りの装備”だけのはずなのだが。

どうやらカノンは、今度の世界には私の作った二振りの剣を持っていったようだな。

「私の剣を持って行ってくれるのは、随分と、嬉しいというか……光栄だな」

離れていても私を感じていたいとか、そういうアレなんだろうか？　そうだとしたら嬉しいな。

いかんいかん、思わず頬が緩んでしまった。

「なーに一人でニヤニヤしてるのよ、しかもカノンのコートなんて持って」

「！　レナか、驚かせるんじゃない。カノンの送ってきた荷物の整理をしていただけだ」

見、見られてた！　しかも丁度コートを持っている時に。これではまるで私がカノンの服を見てニヤニヤ笑う変態のようではないか！

「整理ねぇ……あれ？　これで荷物全部なの？」

「そうだ、生活用品に衣類、後は通信機と、クラインストランサーだな」

クラインストランサーと言うのは一種の”四次元発生装置”だ。

早い話しが『物がいっぱい入る便利なヤツ』って事だな。

「カラーチェンジャーがないじゃない、もしかして今回のカノンの仕事って潜入捜査とかなの？」

「私も詳しくは分からないが、カノンが必要と判断したんだろう」

今度の世界で何をするつもりかは分からないが、まぁ今度のお土産も期待しよう。

出来ればいつもみたいに武器のサンプルや鉱物のサンプルだけじゃなくて、こう、なんというか、もっと女らしい物が欲しいな、アクセサリーみたいな。

はぁ、カノンが帰ってくるまで暇だな。少し街でも出かけようか。

「レナ、後で一緒に街まで行こう。どこか暇を潰せる場所へ案内してくれ」

「いいわよ、珍しいわねユエから誘ってくれるなんて、これはお姉さんイロイロ期待しちゃってもいいかな!?」

そう抱きついてくるレナ。彼女はどうやら男も好きだが女も好きらしい、私は遠慮するが。

「放せ、いいから支度でもしててくれ。私も此処を片付けて着替えるから」

「はーい、じゃあロビーで待ってるね」

私の休日はどうなるんだろうか、なるべくレナと一緒に行動してお目付けをしないといけないが。

## 閑話「その後の仲間達」（後書き）

次回ようやく第二章に入ります。

なんだか全然ファンタジーっぽくないですね今の所。

## 第一話「一時の別れと新たな生活」（前書き）

第二章スタートです、やっと戦闘の機会が増える章に入れました。
とは言っても説明回や寄り道はさんでしまうんですけどね。

# 第一話「一時の別れと新たな生活」

何時までも見上げてるわけにも行かず、ヨザークさんやレオフィス親子と共に門を潜る。
少し緊張してきた……。
これからここで生活して行くんだ、自分の力で。

「さて、シュテル。俺はこのまま行商ギルドにいって事後処理や尻尾の取引を済ませてくるんだが、その後またすぐ旅に出なきゃいけないんだ」

「なんだヨザーク、今度は何処まで行くんだ？」
「今度は少し長旅になる予定だ、”フォール大陸”まで足を伸ばす」

そうか、ヨザークさんは随分遠くへ行ってしまうのか。寂しいな……。

「ヨザークさん、今度は何時頃会えますか？」
「そうだな、向こうで滞在して、年末の祭りで一儲けするつもりだ。だから最低でも来年までは戻ってこれそうにないな。でも安心しろ、逆にお前が年末の祭りの時に遊びに来い」

随分と長いなぁ、でもきっと別な大陸だし行くのにも大変なんだろう、なら一回行ったら用が済むまで居たほうがいいのかもしれない。

「分かりました、絶対遊びに行きます！」
「おう、じゃあ一旦ここでお別れだな、すまんがスフィアちゃん、

シュテルの事頼んでいいか？」

もうここでお別れなのか。見送りとかしなくてもいいのかな。

「まかせてよ～！　私は先輩になるんだもん、しっかり案内してあげる！」

スフィアはすっかり先輩気取りで快諾してる。まぁありがたいけど。

「あの、見送りとかしなくてもいいんですか？　出来ればしたかったんですけど」

「いやぁ、とてもじゃないがそんな余裕お前にはないぞ？」

「そうだな、スフィアがついていけるのは診断所の受け付けまでだしな」

なんだ？　二人共随分ニヤニヤしてる。何かあるのか？

「あの……なんでそんなに笑ってるんです？　何かあるんですか？」

二人揃って「「いやぁ？　それはお楽しみって奴よ」」なんて息ピッタリでもったいつける。

嫌な予感しかしない……。

ヨザークさんもレオフィスさんも、自分のギルド本部に行ってしまった為、スフィアに街の案内をしてもらっている。

はっきり言って前の世界の街と比べてもかなり大きく、もうひと

つの国なんじゃないか？

「で、この大通りの先が”ギルド連盟中央本部”で、本部から東西南北に四本の大通りが続いてるの、私達が今歩いてるのは南の大通りで、”ガルアーク通り”って言うのね、まあ続いてる街道と同じ名前だし覚えやすいでしょ？」

街の構造は、本部から四方向に伸びた大通りが、隣の大通りと何本かの通りで繋がっているという構造だ。

随分綺麗に区分けされて整備もされているから、最初から計算して作られたみたいだ。

「じゃあこのまま本部にある職業診断所にまで行くのかな？」
「そっ、でも覚悟してた方いいよ～シュテル優秀そうだもん」

スフィアまでニヤニヤしている。優秀だと何かあるのか？

「余り怖がらせないでくれよ、都会ってだけでもうビビってるんだぞこっちは……」
「ごめんごめん、でも心の準備だけはしておいた方がいいよ～？」

そこまで言うなら、少し気合を入れるか。

「高いなーこれ何メートルあるんだ？」

ギルド連盟本部はいくつもの塔が密集してる場所だった、外から

見えた建物全てが本部の施設だったようだ。

「わかんないや、でも１００メイルはありそうだね～」

メイル？　ここではそう言うのか、似てたから気が付かれなかったようだ。

「で、どの建物に入ればいいか分かる？　直接入れそうなのは三つあるけど」

「真ん中はギルドのトップの人とか理事の人たちが会議したり、職員の人が仕事をしてる所だから入る機会なんてそうそうないよ、私達はあっち」

そう言って右の道を指す、一番人の流れが多い建物だ。

「了解、じゃあ行こうかスフィア」

「うん、あ～楽しみだな～」

一体何が楽しみなんだろうか……？

「ようこそ、職業診断所へ！　本日はどのようなご用件でしょうか？」

愛想の良い受け付けのお姉さんが応対する、何って言えばいいのかな？

「今日はこのお兄さんを職業診断してもらいに来たの、聞いて聞いて、このお兄さんまだ一度もギルドに所属した事のない完全な新人

さんだよ！」

スフィアが代わりに用件を伝えてくれた、しかしなんだ？　周囲の様子が……。

「それは本当ですか！？　でしたら診断室の方に人を集めないといけませんね！」

「え、ええと……ただちょっと診断してもらって魔術を使うための加護を開花してもらおうと思っただけなんですが」

「いけません！　貴方にどんな才能が隠れているかしっかりと判断しなければ！　宝の持ち腐れなんて事にならないよう、しっかりと！」

なんだ？　随分を大事になって来たぞ？

「ではこちらでお待ちください」

俺は一人、大きめのホール、むしろここで今から裁判を行うって言われたほうがしっくり来るような場所につれてこられた。しかも中心のイスに座らせられた。

「ほう！　まだ若いし教え甲斐がありそうだ！」「ふむ、剣を下げているな、剣士か」

「剣士か～でも魔剣士なんて道もあるし！」「ありゃどこの剣だ？印がついていねぇし誰の作だ」

「随分と凛々しいお姿をしている、さぞや法衣が似合うでしょうね」

「ウホッいい男！」
「変わった髪をしている、希少属性持ちかもしれないぞ！」「あの服随分と無骨ね」

周りに沢山の人たちが座ってる、しかも皆こちらを観察して口々に感想を漏らしている。
こういう事か……。

「静粛に！　皆久しぶりの外部からの審査希望者じゃ！　騒ぎたくなるのも分かるが、暫し我慢をしてくれ！」

どうやらあの人が責任者みたいだ。しかしこの騒ぎようはなんなのだろう？

「突然の事で驚いたであろう？　普段は他の街や村で、簡単に調べてそこでギルドに所属するんじゃ。だから完全な新人が本部で診断するなんて滅多に無いのじゃよ。本部では高位の魔具で診断するからの、望む職種の適正だけでなく、全ての診断を一度にしてくれるのじゃ、だからこうして皆集まる」

なるほど、通常は最初から所属したいギルドに行き、そこでそのギルドの適正のみを計るのか。

「分かりました、診断はどのように行うのですか？」
「それは、今から始めるからすぐに分かる、そこで大人しく座っていてくれい」

そう告げられた瞬間、イスの周りが光につつまれ、俺の身体を何かが通り抜けて行った気配がした。

## 第二話「才能と勧誘」（前書き）

また主人公のちょっとしたチートさの片鱗を見ることになりますが。
余り生かされる事の無い物ばかりです。

## 第二話「才能と勧誘」

な、なんだ！？　今何か身体の中を通ったぞ！？

「い、今のは？」

「ほっほ、驚かせてしまったようじゃな、今のは診断する為に必要な事だったんじゃよ」

「そうだったんですか、驚きました」

心の準備とかさせてくれよ。ああビックリした。

「さて、結果が出るまで少し時間がかかるからの、すこし評価ランクの説明でもしておこう。評価はＦ～Ｓまでなんじゃが、ＡやＳは既に似たような仕事で結果を出した人間が転職でもする時じゃない限り、そうそう出ないんじゃ。各ランクの目安を簡単に説明するとじゃな」

Ｆ　才能無し、止めておきましょう。

Ｅ　努力しても他人より劣ります。

Ｄ　素人ならこの程度でしょう、これから頑張ってください。

Ｃ　向いているようです、磨けば光ります。

Ｂ　貴方の特技と言ってもいいでしょう。

Ａ　百人に一人の逸材です、きっと一流になれるでしょう。

S　貴方は歴史に名を残すでしょう。

「これはあくまで現段階の才能を表す物じゃ、これから先開花する事もありえるでの。評価が悪くても諦めんようにな」

というか文字が目の前の何もない空間に浮かび上がっている。なんだこれ？　魔具って奴かな？

「これは、魔具ですか？　便利ですね何もない所に文字が浮かぶなんて」

空間展開型モニターみたいで便利だな、科学換算すれば前にいた世界並の技術じゃないか？

「ふむ、魔具の一種じゃが、見たことなかったようじゃな。おっと結果が出たようじゃ、皆の集！　いよいよじゃぞ！」

何故煽るんだ何故！　しかも結果が晒されるなんて本当に見世物扱いじゃないか。

「では発表するぞ！　それい！」

先程の用な文字が、今度は更に高い位置に大きく表示される、その内容は――

戦闘技能評価

| | |
|---|---|
| 接近戦評価 | A |
| 射撃評価 | B |
| 魔術適正 | A |
| 神聖術評価 | B |
| 商業適正評価 | |
| 数計算 | C |
| 心理掌握 | B |
| 商才 | C |
| カンの良さ | S |
| 腹黒さ | B |
| 職人適正評価 | |
| 鍛冶職人 | A |
| 錬金術師 | C |
| 発明家 | S |

料理人　S
薬師　D
芸術家　B
服飾職人　B
魔術属性
風　鉄

……なんだこれ？　D以下が一つしかないぞ！　しかもなんだカンの良さSと料理人Sって！
ここは戦闘技能Sじゃないのか？　しかも腹黒さが商人に必要って！
まぁ発明がSなのは此処以外の世界を知っているから当然と言えば当然だけど……。
それに魔術属性の風はまぁ理解できるけど、鉄っていうのはなんだろう？

「なんじゃ、この結果は……！　これは魔具の調子が悪いんじゃろうか？」

む、やっぱりこの結果は異常なようだ。
俺も戦闘は納得出切るが、その他の結果はちょっとわからない。

「議長、魔具の故障はないようです。紛れも無くこの方の才能のよ

うです」

「料理人Sだ！　これはうちのギルドで決定だな！」「何言ってんだ！　伸び代ののある俺の所に寄こしやがれ！」「発明じゃ！　その才能をわし等と共に！」「薬師の才能は平凡……しかしこれからいくらでも貴方なら！」「芸術は爆発だ！」「随分といいセンスをもってるみたいねぇ」

うわぁ、これって皆職人ギルドの人だよな。

商業と戦闘の人は思ったより落ち着いて――

「アイツ……商人にしたらマズいな」「下手をしたら市場を荒らされかねん」「しかし上手く取り込めれば」「しかし逆にこちらが……」

……聞きたくなかったです。めっちゃ警戒されてるじゃないですか。

「ふむ、剣なら我が騎士ギルドが一番適しているしているだろう」「何を言ってる、お行儀がいいだけじゃあんなランクを育てられないぞ？」「あのお兄さんは魔術と剣を融合させ、新たな可能性を……」「すばらしい！　やはりあの方は我が教団ギルドに」

こっちも似たような物だった。

「すみません、診断が終わったのならそろそろ帰ってもいいでしょ

うか」

もう帰りたい、スフィアも待ってるだろうし。それに自分の事でこうも盛り上がられるのは落ち着かない。

「そうじゃったな、これにて診断終了じゃ！　君のこれからの活躍、大いに期待しておるぞ！」

逃げるようにロビーを退出し、スフィアと合流しようとするのだが――

「青年よ！　お主の名前を聞かせてはくれまいか！　これから我が騎士ギルドの仲間となる者の名前を知っておかねばならんからな！」

騎士ギルドのスカウトだろうか？　まさか各ギルドの代表がこんなイベントにわざわざ来るとは思えないし。

しっかし本当に感じ悪いなぁ、もう入るのが決定みたいな物言いじゃないか。

「申し訳ありません、戦闘ギルドはもう冒険者ギルドに入ると心に決めているんです」

「なんだと！　その才能を持ちながら、冒険者風情に身を置くと言うのか！？」

冒険者風情？　ああ、駄目だこの人、騎士ギルドの人間が皆こうだと思うと嫌になってくる。

「俺によくしてくれた人も、大切な友人もその冒険者です。そうや

って自分以外のギルドを見下したりする人間の居る所、絶対に入りません！」

俺は有無を言わさず言いたい事を言い、スフィアを探しにその場を離れた。

これ以上絡まれるのはご免だ、スフィアを見つけて早いとこここから出よう、スフィアは……居た。

「スフィア、冒険者ギルドに案内してくれないか？　ここに居ると面倒な事になりそうで」

「う、うん。あのさ、大切な友人って？」

「スフィアに決まってるじゃないか、他にまだ友達なんて居ないし」

「えへへ、照れるね～、でもありがとうね」

そう言って少し顔を赤らめているスフィア、耳も嬉しそうにピクピクしている。

実に可愛らしい、眼福眼福。

外に出るとまたギルドの関係者と思われる集団に出くわした。

また勧誘か？　さっきの人みたいな感じじゃなければいいんだけど。

そう身構えていたのだが。

「お兄さん、冒険者になるってもう決めてたんだね。残念だけどさっきの騎士ギルドへの言葉スカっとしたよ」

「まったくだ、君みたいな人間が来てくれるなんて、これから面白くなりそうだ」
「教団ギルドは、いつでも貴方を待っていますよ」「いい加減諦めたらどうだ！」
「私は勧誘はしない、だがもしその手を汚してまで力を得る覚悟があるのならば、いつでも扉を叩くといい」

どうやら他の戦闘ギルドの面々のようだ、若干諦めきれていない人も居るみたいだけど。

「聞いてたんですか、いやお恥ずかしい。でも最初から騎士ギルドの事は聞いてましたから」
「そっか。あ、そうだお兄さん、私は魔術師ギルドの人間なんだけど、魔術の説明や講習も請け負ってるから、後で来るといいよ」

なるほど、入らなくても魔術については教えてくれるのか

「分かりました、では先に冒険者ギルドで手続きを受けてから、講習を受けに行きますね」

そう告げて、スフィアと冒険者ギルドを目指すのであった。

## 第二話「才能と勧誘」（後書き）

徐々にファンタジーらしさを出していけたらいいと思っています。

感想や指摘批判誤字報告、評価などして頂けると幸いです。

## 第三話「食と発展」

「シュテル、冒険者ギルドに行く前にどこかでご飯食べない？　もうお昼過ぎちゃってるし」

冒険者ギルドを目指していると、前を歩くスフィアがそんな提案をした。

たしかにそろそろお腹が空いたな、朝に食べたのパンと肉だけだったし、それにこの世界の食事情も知っておきたいし。

「そうだね、じゃあどこかオススメのお店があれば案内してくれるかい？」

「お二人さん、俺も一緒につれてってくれないか？」

そう話しかけてきたのは、先程冒険者ギルドの代表として来ていた男性。

「あ、グレンダルさん！　いいの？　ギルドに報告に行かなくて」

どうやらスフィアはこの人を知っているみたいだ、まぁ冒険者ギルドの代表を任せられるくらいの人物だし当然と言えば当然かな。

「構わないだろう、どうせ今言ってもマスターは不在だろうしな。それにシュテルと言ったか、君とも話しをしてみたいからな」

これからお世話になる可能性もあるんだし、交流を深めるのは願ってもない。

「もちろんですよ、一緒に行きましょう」
「そうか、では店はスフィアにお願いしよう。俺はいつも同じ所だからいい機会だ」
「う～ん、まぁとりあえず”ラスエル通り”に行こっか、料理人ギルドの人間の大半はあそこでお店を出してるから、すっごい種類のお店があるんだ～」

ほほう、それは楽しみだ！　でもそれだと競合して潰しあいになったりしないんだろうか？

ラスエル通りの入り口まで来て、先程の心配は杞憂だった事が分かった。
人が溢れ店に入れなく、別な店に移動する客すらいるのだ。

これなら客の取り合いにはならなさそうだな……。
にしたって本当に凄い量の店だ、何処に入ればいいか検討もつかないや。

「ここは通称”ラスエル満腹通り”って言うんだよ～お店は沢山あるけど、当然ハズレもあるから慎重に選ぶよ～に！」
「ハズレって、そんなにマズイ店もあるんだ」
「ふむ、俺がいつも行く店は可も無く不可も無くって所だな、安さと量を優先させているからな」

グレンダルさんは食事をエネルギーの補給としか見ていないようだ、これは関心出来ない。

「駄目ですよグレンダルさん、食事とは人生を豊かにする大切な要

素なんです。ただ低価格で量を食べエネルギーを補充するだけなんてもっての他です。余裕がある時や、疲れた時なんかは美味しい料理を食べて体だけでなく心にエネルギーを補充するんです。そもそも一箇所の店にしか行かないという考えがまずいけないんです、新しい店を開拓していく精神、フロンティアスピリットというのは冒険者にもきっと必要な……ｅｔｃ．」

見た所熟練した戦士のグレンダルさん、なのに食の大切さがまるでわかっていないなんて……。

しかし、俺の食事への情熱が伝わったのか。

「わ、わかった。今度から気をつけよう」と納得してくれたようだ。

「シュテルってそんなに食べるのが好きなんだ？　ちょっと意外だな～」

通りを歩いてみると、各店の前に本日のオススメメニューが表示された魔具が設置されている。

例の空間展開型モニタのような奴だ。

……駄目だ、どれがどんな料理なのか名前だけじゃサッパリわからない。

”ムニエル”とか”リゾット”とか”パスタ”と馴染みのある料理名はあるけど、”○○の”とかの○○の部分の食材がどんなものなのか検討もつかない。

「うーん、食材の名前がわからないから、どこがどんなお店かよくわからない、スフィアのおすすめはどんな料理？」

「そうだね～私は山の幸が好きかな～、あと鳥のお肉も」
「俺は量の多い料理が好みだな」
「なるほど、山の幸か。じゃあスフィアがよく行く店につれてってくれないかな？」
「いいよ～たぶん混んでると思うから、少し待つと思うけど」

今日はスフィアの好みの料理を食べる事にしよう、グレンダルさんが何か言っていたが俺には聞こえなかった。全然聞こえない。

そのお店を目指して歩いていると、やはり戦闘ギルドの人間が目立つ。
見ていると色んな装備をした人が目に入ってくる、それに恐らく獣人と思われる人や、エルフらしき耳の尖った人もちらほらと。

「戦闘ギルドの人が多いみたいだけど、一般の人や他のギルドの人はどうしてるんですか？」
「ああ、彼らは我々とは食事をとる時間が違うんだ、大体3時頃だな、彼らが食事を取るのは」

なるほど、料理人の人達も一段落して食事を取るならその時間がいいのかもしれないし、それに合わせて他のギルドの人も一緒に食べるって所かな？

「着いたよ～案の定ものすごく混んでるけど、どうする？　これじゃ一時間はかかりそうだよ？」

お、到着したみたいだ、”ワイスラーの台所”か。誰かの名前だ

ろうか？

「スフィア、ワイスラーって誰かの名前なのかな？」
「ううん、これは山の名前だよ、いかにも山の幸のお店ってカンジでしょ？」

山の名前だったのか、それならたしかに山の幸が豊富そうだ。
しかし結構時間がかかりそうだな。

「スフィア、シュテル。向こうの店が空いている様だが、向こうに行ってみないか？　さすがに一時間も待つのは簡便願いたい、それにどうやらあの店も山の幸を使うようだぞ」

どれどれ？　……すっごい空いてるんだけど、それって人気がないってことじゃ？

「あ、本当だ～！　でもあそこにお店なんてあったっけ？　新しく出来たのかな？」
「分からないが、店の名前が”オボロ山の里”と言うくらいだ、きっと山の幸なのだろう」

どうやらあの店で決定したようだ。

「ねぇ、これってどんな料理だかわかる？　グレンダルさん」
「俺に聞かないでくれ。食材の名前はわかるが、料理名は聞いたことがない……」

入った店のメニューに困惑してる二人、だけど俺は別の理由で困惑していた。

わ、和食だ、和食だこれ！　この世界に和食の文化があるのか！？　今までの世界で和食があったのは一箇所だけだったのに！

メニューには”ダイングレイブとサンクのおみそしる”　”イシアの一夜干し”と言った名前がある。

さらには”シーモウラスの刺身”なんてのもある。

刺身だぞ刺身！　あの世界で味わった最高の文化。

主食はパンとライスが選べるみたいだ、ライスも選べるなんてわかってるじゃないか……。

「店員さん、シーモウラスの刺身とダイングレイブとサンクの味噌汁、あとイシアの一夜干し、ライス大盛りでお願いします」

俺は澱みなく一気に注文する。

「シュテル、この料理わかるの？　私初めて見たんだけど」

「俺もだ、ところで大盛りが可能なのかライスは、俺も頼もう」

グレンダルさんはそればっかりだなぁ……。

それにしても和食（と呼ぶかどうかはわからないが）は知名度が低いみたいだ、もしかしてどこか交流の少ない国の料理なんだろうか？

「昔この名前の料理を食べたことがあったんだ、たぶん同じ物だと思ったから頼んだんだけど」

二人にとりあえず、おみそしるや一夜干しなどの意味を教えて行く。

「なるほど～じゃあこれはスープみたいなもので、こっちが焼き魚で、おさしみっていうのはマリネみたいなものなんだね？　山じゃなくて海の幸が多いけど、たまにはいいかな～」

「なるほど、スープはライスと一緒だと腹が膨らむな。では俺も頼もう」

結局三人共同じ物を頼むことにした。あとグレンダルさんの事はもう諦めた。

十分程して三人分の料理が全てテーブルに並んだ。

「では、”いただきます”」

俺はこの料理を食べた世界での作法に習い、手を合わせてこの言葉を言った。

「なんだ？　随分と畏まって」

「シュテルのふるさとの作法なの？」

「いや、これはこの料理を出す所の作法なんだ。なんでも、食材や料理を作った人に対して敬意や感謝を表す言葉だそうです」

「へ～変わってるね、作った人はともかく食材にまで感謝を表するなんて」

「ふむ、俺は少し理解出来るな。食材だって生きていたのだ、命を糧にする以上感謝するのは当然かもしれんな」

今、俺の中でグレンダルさんの株が急上昇した。この人は食の本質を理解しているみたいだ。

「じゃあもう一度一緒に「「「いただきます」」」」

俺に習って二人も一緒に手を合わせた。

さて、改めて料理を見てみる……ライスが御粥みたいなんだけど。そして刺身に火が通っているし、一夜干しとお味噌汁は見た感じ大丈夫そうだけど、嫌な予感がする。

「うぇ～！　シュテル～このスープしょっぱいよ～！へんなにおいもするし！」

「この魚随分と歯ごたえがあるな。まるで干し肉のようだ」

うげっこの味噌汁、味噌の味しかしない！　具は大根とネギみたいだけど。

それになんだこの一夜干し、カッチカチじゃないか。

「あ、このおさしみっていうのはおいしい、このソースなんだろう」

「しょっぱい味付けがおおいな、これはライスを大盛りにして正解だったみたいだな。そうか、これは沢山ライスを食べさせるための料理なのだな、なるほど」

嗚呼……駄目だこの店。グレンダルさんも変な方向に納得してる。

結局なんとか食べきった俺達は、少々高いとされる代金を払い店を後にした。
まぁ、和食の材料があるとわかっただけでも良しとしようか。もっとこの材料が広く使われれば、和食文化も発展すると思うんだけどなぁ。

「あんまりいいお店じゃなかったね」
「俺はまぁ値段が少し高い意外はとくに不満はなかったがな」

せっかくの食事が、この世界で最初の料理店がハズレだなんて。
いや、いつかあのお店に話を聞きに行こう、そしてなんとか改善してもらわねば。

段々と目的がズレてきているような気もするけど、こればっかりは譲れないな。

## 第三話「食と発展」（後書き）

また気が付いたら寄り道してたりします。
この先も食べ物の話が紛れ込んでくる予感が……

突っ込みや指摘、感想や批判など気軽に書いてくださると助かります。

## 第四話「ギルドと戦闘ランク」（前書き）

本当に戦闘描写が難しいです。
イメージを文字にするのって大変ですね……

# 第四話「ギルドと戦闘ランク」

三人で余り満足とは言えない食事を済ませ（グレンダルさんは満足してるけど）冒険者ギルドへと向かう。

ギルドはまるで大きな銀行のような建物だった。

扉を開けると、本当に銀行のような内装で、多数の受け付け窓口が並んでいる。

ちょっとした休憩スペースや、もう見慣れてしまった文字の浮かぶ魔具の巨大化した物が設置されているコーナーもある。

「じゃあ俺はマスターがいるか問い合わせて来る。シュテルはあそこ、一番左のカウンターで手続きを済ませてくれ」

「わかりました、有り難う御座いましたグレンダルさん」

「まぁまたすぐに顔を会わせる事になると思うがな」

それもそうか、これから此処に通うことになるのだし。

「じゃあシュテル、私もちょっとお父さんの護衛依頼の終了報告してくるからまた後でね～説明が終わったらここの休憩所で待っててね」

そうか、そういえばスフィアは護衛としてレオフィスさんに着いて来てたんだったな。

スフィアとも別れ、一番左の窓口へと向かった。

「ようこそ冒険者ギルドガルヴェウス本部へ、本日は新規冒険者登録と云う事で宜しいですか？」

黒いスーツのような制服を着た男性が、受付の中から声をかけてきた。

ここは新規登録以外の用がある人が来ないのか、最初からこちらの用件を把握してる様だ。

「はい、冒険者登録に来ました」

「そうですか、我が冒険者ギルドは貴方を歓迎致します。まずはこちらの用紙に質問事項が書いてありますので、答えを記入して下さい」

なになに……『過去に戦闘ギルドに所属していた事はありますか？』これは「いいえ」だな。

『戦闘経験はありますか？』これは問題ない「はい」

質問は他に『魔術の使用経験』や『主な使用武器』など戦闘に関する物が多岐に渡り書いてあった。

一通り書き終え、受付の男性に提出する。

「たしかに受け取りました。今から職業診断所での審査結果やこれから行う戦闘技能の実技テストの結果を考慮し、貴方の戦闘ランクを決め、正式なギルドカードを発行致します」

ふむ、ギルドカードと言うのは身分証明書のような物だろうか？
それに実技テストもするのか。

「実技テストと言うのは何をすればいいんですか？　それとギルドカードについても詳しく教えて頂けますか？」
「実技テストは担当の人間との模擬戦をして貰います。ギルドのシステムについてはカード発行後に専用窓口にてご説明致しますので、そちらでお尋ね下さい」

随分事務的な人だなぁ、いや別にそれが悪いって事じゃないけど。

「担当の人間の準備が出来たとの連絡がありました。こちらから見て左の通路の先へお進みください」

おっと、じゃあ今から模擬戦だし気を引き締めないと。

通路の先は外へと続いていた。木製の人型などが設置してある大きなグランドのような広場。
恐らくここは訓練用のスペースなのだろう、遠くの方で訓練している人間の姿もちらほら見える。
そして、そこで待っていたのは――

「お、来たなシュテル」
「あれ？　グレンダルさんが相手なんですか？」
「ああ、普段からこういう仕事は俺みたいな人間が担当してるんだよ。今回はお前が来るのが分かっていたから俺が名乗り出たって訳

だ」

なるほど、すぐに顔を会わせる事になるってこういう事だったのか。

「じゃあお手合わせお願いします！」

そう言って俺は剣を抜こうとしたのだが――

「待て待て、真剣でやるんじゃない、これを使うんだ」

グレンダルさんは何やら白い棒を取り出した。あれで打ち合うのだろうか？

「これはミラージュウェポンっていう魔具でな、こうやって使うんだ」

そう言ってグレンダルさんは片手剣を取り出し、それを右手に持ち、左手でミラージュウェポンに触れた、すると――

「！　同じ形になった！？」

「ああ、これはまったく同じ重さ、形にかわる魔具でな。相手にあてても傷がつかないから練習や模擬戦、闘技大会で使われる」

なるほど、本当に便利な物が沢山ある世界だ。

俺も自分の分のミラージュウェポンを受け取り、剣を持ちながら触れる。

「これで準備完了です、ルールの説明をお願いします」

「とくにルールは決まっていない、実力を測る為だからな。まぁ今

回は武器を手放すか降参するまでって事でいいな？」
「了解です、では行きます！」

完全に再現された鞘から剣を抜き、両手で持つ。正眼ではなく身体を斜めにして剣を向ける。
油断せず、相手が攻撃できる箇所を限らせ、まずは受けに回る為の構え。

「そっちからは攻めないのか、ならばお望み通りこちらから行かせてもらう！」

片手で剣を持ち、走ってきた勢いを乗せた一撃を放ってくる。
どうやら相手も様子見の一撃のようだ。俺はその一撃をかわさず、全力の打ち込みで返す。

激しい衝突音と共にグレンダルさんの右腕は大きく後ろへと下がる、その隙を見逃さず畳み掛けるように反す剣で首筋を狙う。

「っく、いきなり攻めに切り替えるなんて少々大人気ないんじゃないかシュテル！」

そう言いながらも咄嗟に身体を反らし避け、そのまま距離を取る。

「ここで全力を見せて少しでも良い評価を頂こうかと思いまして！」

言葉を返し、こちらも左手だけで剣を持ち距離を詰める。

「こりゃ片手剣で相手をしたのは失敗だったかもしれんな」
「でしょうね、随分不慣れだとお見受けします！」

急接近から急停止、その慣性を利用した一撃を更にグレンダルさんの剣へと向ける。

「く、片手での扱いもそちらの方が上のようだ！」

片手剣の腹に左手を添え、この一撃にも耐えたようだ。

攻撃をこういった完全な防御姿勢で受けるこの瞬間を待っていた。
俺は立ち止まっているのでしっかりと力を込める事が出来る。攻撃を受けたグレンダルさんよりも有利だ。

全力の右足のミドルキックで手で支えてる側の剣の腹を蹴る。
突然自分が受けていた力とは逆方向の力を入れられ、完全に体勢を崩されたグレンダルさんは、こちらを見ずに「降参だ」とアッサリと認めた。

「有り難う御座いました」
「ああ、こちらこそ有り難う、良い刺激になった」

よく見るとグレンダルさんは息も乱していない。少しは冷や汗を掻かす事が出来たと思ったのに。

「しかし剣術だけじゃなくて、接近戦その物が得意なようだな。あんな鋭い蹴りが飛んでくるとは思ってもみなかった」
「あれはグレンダルさんが慣れない剣であんな防ぎ方をしたせいですよ、注意がそちらに向きすぎていたんです」
「そのようだ、つい潰されぬように意識をそちらに向けすぎてしまったようだ」

「本来なら大剣、それもかなり大型の物を使うんですよね？　咄嗟にあんな防ぎ方をするんですから」

そう、あれは片手剣のような小型の剣で受ける型じゃない。本来は大型の武器で、その武器の重量を乗せて弾き返す型のはずだ。

「ほう、よくわかったな。たしかに俺の本来の得物は特注のクレイモアだ。思わずああやって防いだが、それがアダになったようだな、見事な観察眼と戦術だったぞ」

「有り難う御座います、ではギルドに戻って報告すれば手続き完了なんですよね？」

「ああ、俺からも推薦しておこう、お前ならそこそこのランクから始まると思う」

ミラージュウェポンを手放すと、すぐに元の形に戻る。それをグレンダルさんが回収して何処かへ持っていった。

建物に戻る最中、俺は自分のランクがどうなるのか、それを考え笑顔を浮かべていた。

## 第四話「ギルドと戦闘ランク」（後書き）

気が付いたら総合累計ＰＶが７０００を越えていました。
それに総合累計ユニークも１０００を超えて……

こんなに沢山の方に見てもらって驚きが隠せません。
今みたいなペースで更新出来なくなる日もいずれ来ると思いますが、
これからも宜しくお願い致します。

## 第五話「結果発表とギルドカード」（前書き）

今回も説明回になってしまいます。

# 第五話「結果発表とギルドカード」

受け付けに戻ると、先程の男性が「ギルドシステムの案内はここから右に三つ隣に行った所です」と教えてくれた。

言われた通りに進むと、今度は《ギルド案内受付》とある。

ここの受付は随分と若い娘だ。

「ようこそ冒険者ギルドへ！　本日はどのようなご用件でしょうか？」

「ええと、今日ギルドに登録する為に来て、さっき実技テストを終わらせたんだけど」

「そうでしたか、ではお名前を伺っても宜しいですか？」

「シュテルと言います、先程グレンダルさんという方に実技テストの相手をして貰いました」

念の為グレンダルさんの名前も出しておこう、詳しい情報があるほうが分かりやすいだろうし。

「シュテル様ですね？　ええと……あ、ありました！　診断所の評価と実技テストの結果、あとグレンダルさんからの推薦もあるなんて凄いですねシュテル様。最終的なシュテル様の冒険者ランクは……」

いよいよだ、全部でランクがいくつあるのかは分からないけど、少しでも高いとこれから楽だろうし緊張してきた。

きっと学校への入学試験を受けた学生と云うのもこんな心境なのかもしれないな。

「シュテル様の初期ランクはDです！　すごいですね！　一気に七つもランクを飛ばすなんて！」
「Dで七つも飛んでるんですか？　一番低いランクって何なんです？」
Dと聞いて一瞬落胆したのだが、この反応を見る限り相当高いようだ。
「あ、その説明もこれからしますのでご安心を。ランクはF－から始まりS＋まであるんです。まったくの素人でもなければF－から始まるなんて事はないのですが、大抵はF＋辺りから始まるんですよ」
なるほど、アルファベットに＋と－、そして何も付かないランクが存在するようだ。
「ランクは通常、F－～F＋ならFランクの依頼をこなしていけばF＋まで上がることが出来ます、しかしさらに上のE－になるにはEランクの任務をこなすしか上げる方法はありません」
なるほど、依頼には－や＋がついた依頼はないって事か。
「さらにこの方法で上げる事が出来るのはAランクまでです。A＋からはギルドからの勅命や重要な任務を成功させ、ギルドからの推薦を受けなければ上がる事が出来ません」
ふむ、これはギルドの幹部になれる器を持つ人間を選定する意味もあるのかな？。

「最後にSランクですが、これはギルドへの特別な働きをした人に贈られる名誉称号みたいな物です」

特別な働きってなんだろう？　ただ依頼をこなしたりするだけじゃ成れないような口ぶりだ。

「特別な働きってなんですか？　A＋のように特殊な依頼を受けるだけじゃないんですか？」

少し気になったので、聞き返す。すると受付の娘は少し、申し訳なさそうな声で答える。

「残念ですがその質問にはお答え出来ません、ただ名を上げる行為がそれに結びつく。とだけしか……」

「分かりました、すみません根掘り葉掘り聞いてしまって」

「いえ、この先シュテル様のランクが上がれば、詳しい話を聞く事もあると思います」

「では最後に、ギルドカードの発行と使用方法のご説明をさせて貰います。こちらがシュテル様のカードです」

そう渡されたのは、金属製のカードだ。とくに何も書いてないみたいだけど、これでいいのかな？

「そのカードを手に持ち、頭の中で『情報表示』と念じて頂ければ、内蔵された魔具によりウィンドウが展開されます」

「どれどれ『情報表示』おお！　出てきた出てきた」

あの空間に文字が出る魔具だ、これは本当に生活に密着してる技

術みたいだな。
俺の反応に受付の娘が少しおかしそうに笑っている。
表示されたデータには。

氏名　　シュテル
戦闘ランク　　D
所属　　冒険者ギルド
所属クラン　　なし
ホームタウン　　ガルヴェウス
使用武器種類　　片手半剣
武器名　　共に歩みし追憶の剣
二つ名　　なし
登録者　　0人

とある。
また見慣れない言葉だ。それに武器名の『共に歩みし追憶の剣』と云うのも初めて聞いた。
「すみません、この所属クランと言うのとホームタウンと云うのは？　それに武器の名前なんてついてなかったと思うんですけど、これに勝手に名前がついてるんですが……」
「一つ一つご説明して行きますから少し落ち着いてくださいね」
つい解らない事が多すぎて質問攻めにしてしまった『しょうがない人ですね』みたいな微笑みを浮かべている。恥ずかしい！
「氏名と戦闘ランク、所属ギルドの説明は必要ありませんよね？
所属クランと云うのは個人がギルドへと申請して作る集団、大人数

の固定パーティーと思ってくれて構いません。ホームタウンは現在拠点にしてる街です。シュテル様の場合ここでギルドの加入したので自動的にガルヴェウスとなっておりますが、他の場所のギルドに行った際に、そこを拠点にしたくなったらそのギルドで更新をする事が出来ます」

なるほど、チームを組むみたいな物かな。入るメリットはあるのかな？

「クランに入るメリットってあるんですか？　あと入らないデメリットも」

「クランに入る事が出来れば、一緒に依頼を受ける相手に困りませんし、仕事上の行き違いによるトラブルも起き難くなるでしょう。それに上のランクの仕事を受ける時に、同クランに所属してる上のランクの仲間に手伝って貰う事も出来ますしね」

初心者はクランに入った方が何かと便利って事か、面倒見の良い所ばかりとは限らないと思うけど。

「逆にデメリットとしては、自分の力以上の仕事もこなせてしまうので、ランクと実力に差が生まれてしまう可能性がある事ですね、それにクランによっては毎月のクラン維持費を全員から徴収する事もありますし」

負担を強いる事もあるって事か、難しいものだなぁ。

「有り難う御座いました。次の使用武器種類はわかります、ただ武器の名前が気になるんですけど」

「武器の名前は作った人間がギルドに所属しているのならその登録名が表示されますが、他の場所で作られた武器だと表示されません。

またギルドに所属してる人間による一本限りの高品質の武器や、遺跡などの外で手に入る古くから残る名品は等は”ユニークウェポン”とされ、特別な名前がつく事があるんです」

「じゃあ俺の剣もユニークウェポンになるんですね」

まぁこの世界で作られた剣じゃないし、当然と云えば当然だけど。

「本当にシュテル様には驚かされますね。ユニーク武器なんて高ランクの方もそうそう持っていないんですよ？」

ううむ、これは段々他の冒険者の人たちに申し訳なくなってきたな……。

「では次の二つ名についてです。二つ名は冒険者ランクとは関係無く、ギルド連盟と呼ばれるこの街の理事を任せられている方達から贈られる名誉称号です。秀でた使い手や、大きな働きをした人に贈られる物で、A＋ランクの人間でも二つ名持ちは滅多にいないので大変な名誉なんですよ」

やっぱり名誉称号みたいな物だったのか。そんな人によく勝負なんて挑めたな我ながら……。

「最後の登録者数と云うのは、ギルドカードの情報を交換した相手の数です。情報交換をした人間同士じゃないとパーティーは組めなくなっています。あと登録した人間への伝言等をギルドウィンドウを通して送る事が出来ます。伝言は他の街のギルドウィンドウからも確認出来るので、離れた相手とやり取りするのにも重宝しますよ」

なんてこった、そんな便利な機能ならヨザークさんとも交換したかったのに。

まぁ時間もなかったし、戦闘ギルドに登録していない人と交換出来るかもわからないけど。

「分かりました、これで説明は全て終了ですか？」

「いえ、最後に注意事項を幾つか。依頼を受ける際の注意点なんですが、他のギルドの方と一緒に受けるのを禁止してる依頼もあるのでその点の注意と、自分のランクより下の依頼を受けても、ランクアップに必要なポイントは加算されません。報酬は受け取る事が出来ますが、あまり格下ばかり受けているとランクダウンに繋がりますのでお気をつけて。最後に討伐証明部位によるポイント交換なんですが、討伐から日が経ちすぎて劣化した部位ではポイント交換は出来ませんのでご注意ください」

結構色々あるんだな、というか他の戦闘ギルドと一緒に依頼を受ける事も出来るのか。

あと格下の依頼ばかりこなすのはさすがに新人への嫌がらせになりかねないし当然の仕様だろう。

あ！　そうだ討伐証明部位！

「あの、冒険者に登録する前に手に入れた討伐証明部位があるんですけど、ポイント換算できますか？」

「日にちが経ちすぎていないなら可能ですよ。隣に部位証明鑑定所がありますから、そちらで見てもらうといいですよ」

「そうですか、ではそちらにいってみますね」

そう言って立ち去ろうとしたのだが。

「待ってください、最後に大事な説明が残っています！」

おっと！　まだなにかあるのか

「宿泊施設についてのご説明です」

あ、そうか。宿とか取らなきゃいけないのか。

## 第五話「結果発表とギルドカード」（後書き）

次回の更新は少し遅れてしまうかもしれません。
申し訳御座いません。

## 第六話「休息の鞘とお金の使い道」

そうか、生活して行く上で宿は必要不可欠だよな当然。
しかし困ったな、今手元にあるのは尻尾を売った代金からさっきの余り美味しくない料理の代金を引いた２０１００メルスしかない。

宿の相場は分からないが、生活に必要な物を買ったり、食事の代金も考えると常にその日の生活費を稼いでいかないといけないかもしれない、まさに自転車営業になりそうだ。

「すみません、宿の相場ってどれくらいですか？　俺余り持ち合わせがないので出来れば安いところがいいんですけど」
「そうですね、相場は朝と夜に食事が付いて一日４０００メルスといった所ですね。ただ食事抜きで最低限の設備しかない宿となりますと、２０００メルスに抑える事は出来るとと思いますが」

２０００か……なんとか自炊出来るようにして、一日の生活費を３０００に抑えることが出来ればなんとかなるか？

そう、これからの節制生活のプランを組んでいたのだが。

「ですから、安定した収入を得られない駆け出しの冒険者の為の宿泊施設”休息の鞘”についてのご説明をしようとしたのですが」

なんと！　それならそうと早く言ってくれればいいのに。

「そんな事まで面倒見てくれるんですか！　助かります」
「ええ、余裕のある方なら個人で宿屋と長期契約を結ぶ方もいます

が、大半の方は休息の鞘と契約をしていますよ」

契約、という事はやはり多少は金を取られるのか、まぁ当然と言えば当然だ。

「基本的に一部屋に三人で住んでもらっているんです。食事はつきませんが、部屋にはしっかりとしたベッドもありますし共同入浴場もあります。さらに料金は一月４００００メルスと大変お安くなっております」

至れり尽くせりじゃないか、宿屋の商売あがったりじゃないかな？

「そんな好条件でいいんですか？　月４００００なんて破格すぎると思うんですが」

「ええ、ですから幾つか条件もあるんです。まず一つ目なんですが、利用する場合は毎月十五件以上の依頼を達成しなければなりません。次に休息の鞘に居られるのはＣランクの方までです。Ｃになられる頃には収入も安定しているはずですし、基本的には退去して頂いております」

なるほど、初心者にノルマを与えて経験を積まさせるのが目的みたいだ。

「という事はある程度そこに住んでいれば、いずれはランクが上がってそこを卒業しなきゃいけないって事ですよね？」

「ええ、そうですね。ただ例外の方も居るんですけどね。ランクを上げないように調整してる方とか」

なんと物好きな。

「それと、Ｃにならなくてもｃ－になった方にはギルドの方で管理してる長屋や空家と契約する権利が与えられますので、早い段階で休息の鞘を卒業する方も多いんですよ」

ほほう、自分の家を持てるのか！　個人的にはそっちの方が魅力的だなぁ。

「なるほど、じゃあ今日から俺は休息の鞘で生活するんですね？　契約の方はどうすれば？」

「こちらの魔具にギルドカードをかざして下さい。今日は四月二十二日ですので、シュテル様の今月の料金は１０１４０メルスとなります」

安いな本当に、そして月や日にちがあるのを今知った。

後で図書館みたいな所探してこの世界の一般常識を身につけないとだなぁ。

「ええと、今払えばいいんですか？」

「いえ、来月の頭に徴収しますので今は必要ありません。施設はギルドを出て左に小さな道がありますので、その先になっています」

「分かりました、じゃあ部位の換金を済ませたら行ってみます、説明ありがとう御座いました」

受付にお礼を言い、立ち去ろうとした所で誰かにぶつかってしまった。

後ろに人が並んでいたみたいだ。

「すみません」

「……チッ」

随分と不機嫌そうだな、長々と待たせてしまったか？　しかしこの態度はないだろう。
まぁ事を荒立てる必要もないのだし、そのまま無視して部位証明鑑定所へと向かった。

結果は上々、尻尾から切り離した針球を七つもって行き、ヘビーモウラスの角も一組渡したところ、針球の状態がいいとのことでポイントを多目に貰えた。

尻尾の方はギルドでも買取をしていたのだが『これなら商人ギルドに持って行った方が高く買い取って貰えるぞ』との事なので後で持っていく事にした。

ギルドポイントの確認もギルドカードから行えるようで、確認してみた所

シュテル　D　8／200

とあった。全然もらえないなぁと思ったら『アンタもうDランクなんだからEランクの討伐部位じゃ貰えるポイントも少なくなるのも当然だ』との事。

内訳は針球が本来ならば2ポイントで、今回は状態がいいので一

つ3ポイント。

ヘビーモウラスの角は一組で3、針球七つと合わせて２４ポイントになるはずなのだが、俺のランクが一つ上のDなので1／3になってしまったようだ。

しかし針球の状態がよかったのおかげで、ひとつにつき２０００メルス、合計で１４０００メルスにもなった。

この後尻尾6本も換金して、一本３００００とまでいかなくとも、２００００では買い取ってくれるはずだ。

だから今の持ち金３４１００メルスにさらに１２００００メルス！　合計して１５４１００メルスになる計算だ！

これはちょっとした大金ではないだろうか？　まだ全て買い取って貰えるとは限らないし、もっと安く買われてしまうかもしれないので、ある意味『とらぬなんとかの皮算用』状態なんだけど。

でも今月と来月の宿代を払っても１００００メルス以上も残るんだ、色んな店を周ってみるのもいいかもしれないし、ちょっと奮発して高いお店の料理を食べてみるのもいいかもしれない。

それだけじゃない、服だってそうだ。普段着を何着か買わないと、それに装備もこのジャケットじゃ心許ないし。ああ！　鍛冶ギルドでオーダーメイドっていうのもいいかもしれない！　どんな装備にしようかなぁ。

自分の財産が増える事を想像し、ついこれからのお金の使い道を考えたりして、だらしない笑みを浮かべていたようだ。

「なにニヤニヤしてるのよ～もう受け付けはおわったの？　結果聞かせてよ！」

スフィアに声をかけられて我に帰る。

見られた！　さっきから自爆ばかりのような気がする。

「いやね、結果が思いのほかよくてつい顔にでちゃってさ」

「おお～やったね！　シュテルならいい結果がでるって思ってたよ～」

俺のギルドカード情報を見せると

と少し拗ねてしまった。でも耳はピンと立っているので本気ですねてるわけじゃないんだろう。

「すごい！　私冒険者になってからまだ４ヶ月だけど、さっきの依頼終了手続きでやっとＥ＋になったところなのに！　ちょっとずるいよ～！」

「まぁスフィアとそこまで差があるわけじゃないみたいだし、一緒に仕事がしやすいと思えばいいじゃないか」

「そっか、たしかにそうだね！　じゃあ私がＤランクの依頼受ける時は手伝ってくれる？」

ああ、そういえば上のランクの人が手伝うのもＯＫだったはずだし、丁度いい。

「もちろん！　スフィアにはこれから色々お世話になるかもしれないからね、当然こっちも恩返しはさせてもらうさ。まあ恩なんてな

くてもスフィアを手伝うのは当然だけど」
「シュテルはたまにサラっと凄い事言うよね、ある意味シュテルの将来が心配だよ」

急に呆れたような顔をされてしまった、何か気にさわってしまったのかな？
謝ろうとした所『気にしないで、独り言みたいな物だから～』とはぐらかされてしまった。

なんだったのだろう？

# 第七話「共同生活とルームメイト」（前書き）

シュテルの懐が潤う回です

# 第七話「共同生活とルームメイト」

その後、スフィアにギルドウィンドウの詳しい使い方を教えてもらいギルドカード情報をお互いに交換した。

スフィアはレオフィスさんのお店の奥にある居住スペースに住んでいるらしく、そこから通っている為宿の心配はないらしい。

だが本人は『C一になったら自分の家を買うんだ～！』とお金を稼ぎつつランクアップの為に毎日依頼を受けているようだ。

俺は商人ギルドへ尻尾の買取をしてもらう為、スフィアとは一旦別れるつもりだったけど、商人ギルドはレオフィスさんのお店と同じくガルアーク通りにあるとの事なので、入り口まで案内して貰った。

「じゃあシュテル、明日は九時に冒険者ギルドの休憩所でね！　早速Dランクの任務うけちゃおう！」

「了解、でもその日の内に終わる依頼だけにしてくれよ？　俺近いうちに魔術師ギルドの方で魔術について学ぶつもりだから」

「そういえばまだ魔術使えないんだっけ、じゃあ簡単な依頼がなかったら明日の内に講習受けに行ってもいいからね～」

スフィアと別れて商人ギルドへと入る。中は冒険者ギルドとほぼ同じような作りになっていたが、そこに居る人種がまったく違った。

所々で固まってる人達もみんな値段交渉や情報交換をしているようで、一種の戦場みたいだ。

受け付けの職員も何か書類を見つめて難しそうな顔をしている、

ちょっと声を掛けづらいなぁ。

「す、すみません。残留部位の買取をしていると聞いたのですが」
「ん？　ああスマンな、気が付かなかった。買取はたしかにここでもやっているが、本部に直接売りに来るなんてよっぽどの品なんだろうな？」

うわぁ、凄いギラギラしてるよこの人の目、そんなハードル上げられると困るんだけどなぁ。

「期待に添えないようで申し訳ないのですが、フレイルラットの尻尾なんです」
「なんだ、ならわざわざここまで持ってこなくても組合の商店にでもいけばよかっただろうに」

そうか、この通りにあるお店は殆どがここのギルドに所属してるんだったな。忙しいのに邪魔しちゃったかな？

「すみません、まだこの街に来たばかりで。全部で六本あるんですが、いくらになりますかね？」
「六本もか、結構頑張ったな。どれ見せてみろ」

時間が経つと劣化するって聞いたけど、これは大丈夫だろうか？

「ふむ、もしかして兄さんシュテルって名前じゃないか？」
「え？　なんで知ってるんですか？」
「今日最高品質の尻尾を持ってきた行商ギルドの奴がいてな、ソイツから話を聞いていた。『シュテルって若い冒険者がまだ持っている、もしかしたら此処に売りに来るかもしれない』とな」
「ヨザークさんがきてたんですか、じゃあ買い取って貰えるんです

よね？」
「ああ、お前さんには誤魔化しも効かないらしいからな。一本２５０００で買い取ろう」
おお！　思ってたよりも断然いい値段じゃないか！　もう尻尾だけで生活出来るんじゃないかな？
「お前さん本当に運がいいな、もうじきラットの繁殖期も終わるし、そろそろ尻尾の質も下がってくる頃合だ。だからこの時期にこんな品質のが出回る事は滅多にない、だから少し色をつけさせてもらった」
それでもヨザークさんは３００００で買い取ってくれたのになぁ、ちょっと欲が出てしまう。
「大方『もっと高く買い取って貰えたのに』なんて思っているんだろう？　相場ってのは生き物なんだ。それに行商ギルドに所属してる人間以外からはそこまで高い金は払えないんだ、まぁそれでも十分な額だ、これで満足してくれ」
なるほど、こっちの考えなんてお見通しか。
「分かりました、正直ここまで高く買い取って貰えるとは思ってなかったので、つい欲が出てしまいました、すみません」
「若い内は欲をむき出しているくらいのほうが丁度いい、まぁこれから先もご贔屓にしてくれよ」

俺は商人ギルドをホクホク顔で出た。
時刻はもう夕方だ、オレンジ色に照らされた通りが、昼間とはまた違った街の表情を演出している。

それにしてもこれは凄い。一気に残金が１８００００を越えてしまったのだからしょうがないだろう。
しかし今度は逆に持ち歩くのが怖くなってきたな。それに袋がパンパンだ。
金貨を分ける袋も買わないといけないな。

最寄の店に入り、お金を入れるのに丁度良い皮の小袋を一つ買った。
新しく買った袋に金貨を十枚を入れ、背負っていた大きな皮袋に仕舞った。
出来ればリュックタイプの荷物を沢山入れられる袋が欲しいけど、売っていなかったので諦めよう。

そして冒険者ギルドのある”ガルエルム通り”まで戻って来た。
たしかこの近くに道があるはずだ、その先に休息の鞘があるはずなんだけど……あった！

道の先には、随分と年季の入った四階建ての建物があった。
レンガ作りで所々レンガが欠けていたりもするが、よく手入れを

されているのかツタがまとわりついてるでもなく、綺麗な赤レンガ色だ。

まるで古い学校みたいで、なんとなく懐かしい気分になる。もっともこんな学校に通った経験などないはずなのだが。

入り口の受付にギルドカードを提示する。

受付に座っていたのは年齢は三十代後半程の体格の良い女性で、いかにも肝っ玉母さんといった風貌だ。

「おや、アンタ今日冒険者になったばかりなのかい？　随分と有望株みたいだねぇ。アンタは東の三階の一番奥、３１９番の部屋だよ。ちょっと面倒な奴が室長だけどね、悪い奴じゃないから安心しとくれ」

「そうなんですか？　あ、申し送れました、俺はシュテルと言います、これからお世話になります」

「こりゃ語丁寧にどうも、でもカードにアンタの情報は載ってたんだけどねぇ？」

とクスクスと笑っている、そうだった、カードには全部のってるんだった。

「そうでしたね、でも自分の口で言うに越したことは無いですよ」

「それもそうだね、じゃあ私も自己紹介と行こうか。あたしゃ休息の鞘の管理人をしてるオリーエって言うんだ、アンタのランクじゃ此処を卒業するのも早そうだけどね、宜しく頼むよ」

オリーエさんとの挨拶を済ませ、三階へと向かう。
東の三階と言っていたが、西は女性しか立ち入り出来ないそうだ。
まぁ女性の冒険者だって同じくらい多いのだから、当然と言えば当然だ。

そして一番奥の扉、３１９と書いてあるその部屋の前へとたどり着いた。

「失礼します」

ノックをして扉を開ける。

「ん？　なんだぁ？　まさかテメェも新入りなんて言うんじゃねぇだろうな？」

部屋の中に居たのは、少々ガラの悪そうな中年の男性と、

「……なんでお前みたいなのがいるんだ？」

冒険者ギルドでぶつかった青年だった。

# 第八話「いわれなき中傷と決闘」

この人、ギルドでぶつかった人だったはずだ。まだ根に持ってるんだろうか？

いきなりご挨拶だとは思うけど、まぁとりあえず自己紹介と行こうか。

「今日からこの部屋で一緒に暮らす事になりました。シュテルと言います、宜しくお願いします」

「やっぱりか。今日一日で新入りが二人も入ってくるなんてついてねぇぜ、折角一人でのびのびと暮らしてたのによ。まぁ礼儀のなってる奴は嫌いじゃないぜ、宜しく頼むわ」

どうやらそっちの青年も今日ここに来たみたいだ。俺と同じで今日登録したばかりなのかな？

「そいじゃこっちの奴にも説明したとこだが、しょうがねぇ、もう一度説明してやる」

「ここで暮らす上での取り決めみたいな物ですか？　是非教えてください」

「ああ、まずこの部屋の鍵だが、お前にも渡しておく。俺とコイツ、アルヴァスって言ったか？　三人で一つずつ持つんだ。まぁこの部屋そのものが貴重品を預ける金庫みたいなもんだと思ってくれればいい。それと共同入浴場は夜八時から十二時と朝五時から朝十時までだ。それと貴重品や金はそこの奥にあるロッカーに入れるように。鍵はこの部屋の鍵と共有だ」

なるほど、防犯対策もしてあるのか。まぁ盗まれても同じ部屋の人間が疑われるようなシステムだし盗難の心配はなさそうだ。

「分かりました、それとここの室長ですよね？　よければ名前を教えてくれませんか？」
「ああ、俺はダルベストだ。まぁ年功序列ってわけじゃないが、一応俺のランクはＣ－だ。それなりに敬えよ？」
なんて冗談めかして笑っている。アレ？　でもＣ－からは長屋や空家と契約できるって言っていたような？
「ちなみに俺はここが安いから居座ってる。ちょいと金がいるんだよ俺は」
なるほど、もしかしたら例外の人ってダルベストさんの事なのかもしれないな。
「ところで、そっちに君はアルヴァスって言うのかな？　これから一緒に暮らすんだ、宜しくお願いするよ」
とりあえず第一印象？　と言っていいのか分からないが、良い印象を持たれていないようなのでそれを払拭すべくなるべくフレンドリーに挨拶をしたのだが――
「お前みたいに金やコネに物を言わせるようなボンボンと馴れ合うつもりはないんだよ、気安く話しかけるんじゃねぇ」
え？　なんでこんな事になってんの？
「いや、何の話しだいそれ？　金なんて……少しは持ってるけど、

コネもなにも無いんだけど」
「お前の後ろで全部聞いてたんだよ。推薦？　評価？　あげくに初期ランクがDだ？　それにその剣だってどうせ金積んで買ってもらったんじゃないのか？　どうせ貴族かなんかなんだろお前」
なるほど、後ろで全部聞かれてたのか。それだけで勝手に判断されるのは気にいらないけど。
「金があるんなら宿にでもいけばいいだろ？　ここは本気で冒険者になる為の場所なんだよ、お遊び感覚でこられても迷惑なんだよ！」
何でここまで言われなきゃいけないのだろう？　誤解を解く気も失せて来るなぁ。
大人気ないとは思うけど、少しだけカノン的思考に切り替えて対応してやろうか……。
「へぇ、立ち聞きしてたのか。随分といい趣味じゃないか？　評価も推薦も実力で勝ち取った物なんだが、何勝手にコネと決め付けているんだ？　ギルドがそんな腐敗した組織だと思っているのか？　どんな妄想だ、それとも嫉妬か？」
言い過ぎたかもしれないが、ここはハッキリさせておこう。
自分の実力（？）を評価してくれた全ての人への為にも。
「なんだと？　お前みたいな駆け出しに何が出来るってんだよ！？　あれか？　良い武器持って気がデカくなってんのか？　バッカじゃねぇの、お前なんて棒っきれでも振り回してろ」
……この感情はたぶん俺だけの物じゃないな。寝てる癖にこうい

う事になると意識が流れ込んでくるみたいだ。

「もういい、外に出てくれ。現実を思い知らせてやるよ」
「上等だ、負けたらとっとと尻尾巻いてこっから出ていくんだな」
「おいお前ら、騒ぐならこっから離れた所にしてくれよ？　この敷地内で騒がれちゃ室長の俺の責任になっちまうんだからよ」

しまった、ダルベストさんの事忘れてた。

「はい、直ぐ終わらせて戻ってきますので、先に休んでいて下さい」

辺りはすっかり暗くなっており、通りでは街路樹のように設置された街灯が白い光を放っている。
あれもブライトランプの一種なんだろうか？

先を歩くアルヴァスに続いて行く。どうやらギルドの裏手の訓練場へと向かっているようだ。

「勝手に使っても構わないのか？　一応ギルドの施設だろう」
「今更ビビってんのかよ？　意地張ってないでとっとと謝れば許してやるぜ？　おぼっちゃま」

なんて嫌味な笑みを浮かべてこちらに顔を向ける。
ああ、面倒な奴だな本当に。

「よし、じゃあ後悔しないんだな？　ルールはない、相手に勝てばそれでいい」

訓練場には誰も居なかった。丁度グレンダルさんと手合わせをした場所でお互いに向かい合う。

「武器はこのままでいいのかい？　もし大怪我しても自己責任って事になるけど」
「ああ、自己責任だ。じゃあいいんだな？　俺が今からこの鞘を投げる、それが地面に付いたら戦闘開始だ」

アルヴァスは片手剣を右手に持ち、左腕に固定するタイプの小型の盾をつけている。
あれはバックラーという奴だったはずだ。

そして、投げられた鞘が空中でゆっくりと回転し、そのまま地面に到達した。

「剣も満足に抜けないのかよ！」

そう走り寄って来たアルヴァス。速度は並、スフィアよりも遅いくらいだ。

素早く繰り出してきた突きを剣も抜かずただ避ける。
一瞬驚いたようだが、すぐさま突きを横なぎに変化させて俺の左

腹を狙う、それを俺は。

「抜くまでもないってだけなんだけどな」

そう聞こえるように呟き、鞘ごと剣を上にずらし防ぐ。

「ナメるの大概にしろよ！　まともに剣も抜けない腰抜けが！」

今度は身体を回転させてのなぎ払い、それなりに剣を扱えるようだけど、そんな速度じゃこちらに隙を見せてるだけだ。

しゃがんでその回転なぎ払いを回避し、回転で少しもたついていた足へ足払い決める。

大きくバランスを崩したが、手で地面を強く押し、その反動で一気に立ち上がり距離を取る。

今の身体捌きを見た限り、相当戦いなれているみたいだ。安易に他人を見下すくらい増長する程。

なんだかちょっと前に似たような事して痛い目を見た人が居たなー誰だったかなー……。

――――俺だよ！

これは一種の同族嫌悪になるんだろうか？

でもまぁ、後腐れの無いようにしっかりと決着をつけるべきだ。

「くっ！　いい加減に剣を抜きやがれ！」

「自分で抜かさせてみるといい、それと君は敵にお願いをして言う

事聞いてもらえると思ってるのかな？」

俺、実に悪役である。

でもこっちだって結構怒ってるんだ、俺にだってそれなりのプライドがあるんだ。

「クソ！　やってやるよ！」

お、今度は何か作戦があるのかな？　左手の盾を顔にかざし始めた。

でもこれって相手に攻撃してくださいって言ってるような物じゃないのか？

誘っているのなら、こちらから攻めるのもいいだろう。

すぐに剣を抜けるように、先程ずらした鞘を元の位置に戻し、相手へ緩い弧を描くように走り接近する。

そして、まずはかざしている腕の肘に向かい掌底を放つ、さすがにこれには反応し、バックステップで避けられた。

「かかったな、食らえ！」

そして着地と同時に左腕を振るい、直径十五センチ程の火の玉を放ってきた。

周囲の空気を巻き込み、熱風と共に掌底を放ち一瞬硬直した俺の身体へと向かって来る。

これはさすがにマズいか、魔術を使われる可能性を完全に失念していた。

「ハッ！」

気合と共に抜き放った剣で炎を切り裂いた。
ただの炎なら剣風でかき消すことが出来ると思ってやってみたが、やれば出来るもんだなぁ。

「なんだと！？　くそ！」

今の魔術で完全に勝負は決まったと思っていたのだろう、慌てて剣を構え直すが……剣技で負ける気はこれっぽっちもない。

アルヴァスの右手の剣を切り上げで弾き、反す剣で咄嗟に防御した左腕の盾を全力で叩く。
そしてバランスを崩し下げた頭に向かって膝蹴りを決めた。一瞬の三連撃だ。

「ガァ！！！」

どうやら脳を揺らされたのか、その場で倒れ込んでしまった。
本当なら目が覚めるまでついているか、誰かに連絡した方がいいのだろうけど、正直この相手にそこまでする気にはなれなかった。

「まぁ、ギルドの人が見つけてくれるだろうし、ここなら誰かに襲われる事もないだろ」

## 第八話「いわれなき中傷と決闘」（後書き）

本当に戦闘描写が難しいです。

ご意見や感想、批判や誤字報告など歓迎です。

それと評価していただけると今後の励みになります

## 第九話「朝風呂とにんじんと」

結局アルヴァスをそのまま放置して自室に戻り、ダルベストさんに事の端末を話した。

「ハッハッハ！　案外容赦ねぇんだな。まぁ訓練場なら問題ないだろ、あそこでぶっ倒れるなんて日常茶飯事だしな！」

その後俺は、金貨が十枚入った小袋と、今は使う予定の無い刀をロッカーに保管して眠りに付いた。

あー汗かいたから風呂に入ればよかったなぁ、それに晩御飯も食べてないし。

よく朝目が覚めると、ダルベストさんが自分の装備を身に着けている最中だった。

「起きたか、結局アイツ昨日は戻ってこなかったみたいだぜ？　まぁあんだけ啖呵切って負けたんだ、そうそう戻ってこれねぇだろうよ」

なんて小馬鹿にしたような声で教えてくれた。

「ああ、たしかにそうかもしれません。でも俺にはなんの非も無いと思うんですけど」

「まぁな、田舎から出てきた冒険者ってのは妙に強気な奴が多いからな、遅かれ早かれこうはなってたと思うぜ？」

彼みたいな人は珍しくないのだろうか？　でも貴族と間違われるとは思ってもみなかったな。

貴族って言うと、こうヒラヒラした襟とか、金色の刺繍があったりとか、そんな服着たイメージなんだけど。

ダルベストさんとの会話を切り上げ、共同入浴所で朝風呂を頂く事にした。

共同入浴所は当然、男と女に施設が分かれていて、脱いだ服や貴重品を保管する鍵つきのロッカーも完備されている。

割り振られた部屋といい、随分とセキュリティが厳重だ。まぁ見張りの人間の人件費を考えてこうしたのかもしれないけど。

貸し出しているタオルを腰に巻き浴場へと向かうと、壁一面にシャワーがズラリと設置されており、何人もの人間が一度に体を洗えるようになっていた。

さらにシャワーだけでなく、人がのびのびと二十人は入れそうな大きな浴槽まで用意してある。

この世界に来てから身体を洗っていなかったので、隅々まで洗い、たっぷりとお湯で満たされた浴槽に肩まで浸かる。

「あ〜いい気持ちだ……それに誰も居ないし貸切じゃないか」

本当に気持ちがいい。昨日は久々のベッドだったが、それでも硬い地面で寝ていた影響が残っていたようだ。

伸びをすると背骨や肩の骨がボキボキと音を鳴らす。

体から疲れと言う名の老廃物が溶け出していくような、そんな感覚を覚える。

風呂から上がり、部屋へ戻るとダルベストさんは既に居なくなっ

ていた。
案外仕事熱心な人なのかもしれないなぁ、まだ六時になったばかりなのに。
この部屋には柱時計が設置されており、カレンダーも壁にかけてあったので非常に助かっている。

とりあえず朝食を食べにいかないと、今日こそはちゃんとした料理を食べたい。
昨日行きそびれたスフィアおすすめの店”ワイスラーの台所”へと向かった。

朝早いというのにもう大通りは人で賑わっている、それに他の小さな通りでも出店の準備を始めてる人や、自分の店に商品を陳列し始めてる人もいる。
ラスエル通りに入ると朝食を求めてやってきた人間で溢れかえっていた。
これじゃまた一時間待ちとかになりそうだなぁ。

思った通りワイスラーの台所には列が出来ていたが、そこまで人は多くなく、これなら待ってもいいかもしれないと最後尾に並ぶ。
十五分程で列は進み、「相席となりますが宜しいでしょうか？」と淡いベージュのエプロンをつけた店員さんに聞かれたので「構いません」と答え案内してもらった。

「おはよう、相席させて貰うよ」

ボックス席に座っていたのは、頭の上に長い兎のような耳を生やした獣人の女性と、彼女弟だろうか？　同じ耳を生やした十歳くらいの男の子が座っていた。

「はい、おはようございます」「おはようございます！」

男の子の方は随分と元気が良い。女性の方も、とても優しそうな笑みで答える。

獣人や他の種族の事も近いうちに勉強しないとなぁ。

さて、じゃあメニューを見てみようかな。

……しまった、メニューは読めるけどどんな料理なのか見当がつかない。

「キャロンのパンケーキとキャロンのステーキとキャロンサラダ、あとキャロンジュースを二つずつ下さいな」

向かいに座る女性が自分と弟の分の料理を注文した。キャロンと言う名前が沢山出てきたけど、この店の看板メニューか何かなのかな？

とりあえずよく分からないので俺も同じ物にしよう。

「すみません、俺も同じものをお願いします」

「かしこまりました、少々お待ちください」

店員が戻っていくと、少年の方に話しかけられた。

「お兄ちゃんもキャロンすきなの？　お耳がないのにバニテイルなの？」

む、何の話かサッパリわからない。バニテイルというのは彼らの種族名なんだろうか？

「実はそうなんだ、でもお兄さんの耳は今日部屋に忘れてきちゃったんだ」

はは、つい口が滑ってしまった。子供がとても驚いた顔をしている。

「ええ!?　大丈夫？　いたくない!?」

「こら、変な事言わないの。ごめんなさい剣士さん」

「いえ、俺の方こそ変な事言ってしまいました。ただキャロンとバニテイルに何の関係があるのですか？」

「ああ、私達バニテイルはキャロンが大好物なんですよ。そこまで好きじゃないって人もいますけど、私達は大好きなんです。ヒュマリアの方がキャロンの料理ばかり頼むのが珍しくてついこの子が変な事を言ったみたいで……」

なるほど、という事はこのお店の名物なんじゃなくて、純粋に種族の趣向って事なのかな。

「おまたせしました、キャロンのパンケーキ三人前とキャロンのサラダ三人前です、残りのメニューはまもなく運ばれてきますので少々お待ちください」

おっと、きたきた。オレンジ色のパンケーキがほのかな甘い香りを上げている。サラダの方もオレンジ色の短冊切りの野菜が乗っている。

「じゃあまだ全部揃っていませんが、俺は先に食べさせてもらいますね」

パンケーキは甘さが控えめで、料理の付けあわせとしての意味合いが強いようだ。それにこの風味は……次にサラダの上に乗っているキャロンを人ひとかじり、うん間違いない。

キャロンっていうのはキャロット、即ちにんじんの事みたいだ。たしかに兎はニンジンが好きだって言うしなぁ、納得だ。

昨日の出来事をすっかり忘れ、おいしい料理に舌鼓を打つのであった。

その後運ばれてきたキャロンのステーキと言うのはニンジンのグラッセ風の料理だ。

〆のキャロンジュースも柑橘系の果汁を加えていたようで、非常にサッパリとした味だった。

「ご馳走様でした、それじゃあ俺はお先に失礼しますね」
「はい、またどこかで会う事があれば」「またねーおにいちゃん！」

料金は四品で７００メルスと意外と安く済んだ。この味でこの値段なら人気が出るのも頷ける。

ギルドに戻る途中で、先日入った”オボロ山の里”を覗いてみたが、相変わらず閑古鳥がないてる様だった。

ギルドに到着したが、まだ八時で約束の九時までまだ時間がある。なのでちょっとどんな依頼があるのか覗いてみることにした。

『クロムツリーの樹液の採取三リットル』『メイルラント城砦までの護衛』『発明ギルドで新作のカラクリの実験代』
『イセリアルホークの討伐と肉の入手』『ピグル十五頭の討伐』

依頼と言っても随分バリエーションに富んでるみたいだなぁ。
討伐や護衛は想像通りだけど、肉の入手や何かの材料の採取みたいな物まである。
それに実験代って何だ？　ある意味一番危険そうな依頼じゃないか。

ギルドウィンドウには魔物についてのデータも閲覧出来るようになっていたので、スフィアが来るまで魔物の知識を蓄える事にした。

## 第十話「依頼探しとポイント稼ぎ」（前書き）

今回も少し説明になってしまいます。
我ながら話が進むのが遅いとは思うのですが……。

# 第十話「依頼探しとポイント稼ぎ」

ウィンドウのデータベースを閲覧したお陰で、この辺りに生息する魔物の知識をある程度覚える事が出来た。
ガルヴェウス周辺だけでF～Bランクの魔物が出現するようで、俺が来たガルアーク街道は一番ランクの低い魔物が出る場所だったようだ。

と言う事は、Dランクが主に活動するのは北へと伸びている”ガルラス街道”方面と言う事になりそうだ。
ガルラス街道は”港街アクラス”へと続く街道で、出現する魔物がE～Dランクなのでここで暫く討伐証明部位を稼いでランクを上げたりすればいいんだろう。

と、今後の活動方針を考えている内に約束していたスフィアが来たようだ。

「シュテルおはよ～！　早いね、待った～？」
「おはようスフィア。大丈夫、ちょっとギルドウィンドウで魔物について調べたくて早く来てただけだから」
「そういえば余り詳しくなかったよね、どう？　Dランクの依頼でよさそうなのあった？」

そういえばDランク依頼はまだ見てなかったな。依頼はランクと種類でソートされていて、ウィンドウで条件を絞り込んで検索が出来るみたいだ。
本当に便利だなぁコレ、コンピューターみたいな物なんだろうか？　メッセージのやり取りもメールみたいだし。

「Dランクミッションって言っても色々あるんだね。日帰りできるのは討伐か採取系の依頼だと思うんだけどどうかな？」
「う～ん、Dランクの魔物をわざわざ討伐対象に出す事は稀だよ～？　部位目的で希少種の討伐ならあるかもだけど、何日も探す羽目になると思うし」
「む、そうなのか。ここにあるイセリアルホークっていうのもDランク討伐対象だけど、これも滅多に見つからないのかな？」
「それは希少種ってわけじゃないけど、生息してる場所が山の頂上付近なんだよ～だから移動だけで二日はかかるから、討伐依頼で日帰りは難しいと思うな～。B以降なら街道の治安維持で結構依頼が多いし簡単に遭遇できるけど、倒すのは難しいからね～私達じゃ」

Dランクは微妙に不自由な仕事しかないみたいだな、これは日帰りの任務探すのが大変そうだ。
そう考え込んでいたら、スフィアが耳をヘタリと折って申し訳なさそうな顔でこちらを見つめていた。

「う～ごめんね、考えてみたらシュテルはまだここに来たばかりなのに、我がまま言っちゃって。大人しくE＋の上限いっぱいまで今まで通り一人で簡単な依頼こなしておくね」

どうやら気を使わせてしまったみたいだ、でも出来ればスフィアの力にもなってあげたいんだけど、何かいい方法は無いんだろうか。

あ、そういえば。

「スフィア、依頼じゃなくて、普通にDランクの魔物を倒して討伐部位を集めるっていうのはどうだろう？　この方法じゃDランクになれない？」
「あ！　それいいかもしれないね～D－になる時にはDランクの依

頼うけないといけないけど、E＋の上限までポイント溜めるのには効率いいかも！　私まだE＋だからDランクの魔物の討伐で貰えるポイント多目だし！」

「よし、じゃあ決まりだ！　ガルラス街道方面にいけばいいんだろう？」

「うん、そうなんだけど、やっぱりシュテル今日講習受けてきなよ。Dランクの相手って事はシュテルと同格って事なんだから、少しでも戦略の幅を増やしてからの方が安心だと思うんだ。それに効率もよくなると思うよ？」

む、さすがに四ヶ月も冒険者をやってるだけはあるようだ。

考えてみたらスフィアの言うとおりだ。昨日はお互いに舞い上がってた所為か冷静な判断が出来なかったみたいだ。

「そうだね、じゃあ悪いけど明日からでいいかな？　スフィアは今日はどうする？」

「う～ん、適当にEランクの依頼を何か受けよっかな～、それとも絵画の方進めるのもいいかも。考えてみたら一昨日の砕月のスケッチそのまんまだったし。アレを元にして油絵に仕上げていくんだよ～」

「へぇ、油絵にするんだ。あの綺麗な青を絵画で表現するのか……完成したら是非見せて欲しいな」

「へへ～いいよいいよ！　見せてあげる！　私の書いた砕月の絵って結構売れるんだよ～毎月一枚しか仕上げられないけど、貴族様からも買いの注文がくるんだよ！」

本当に砕月が好きなんだなぁ、とても誇らしげに胸を張っている。

それに貴族からも注文って凄い事だと思う。

あと結構スタイルいいんだなぁスフィア。ブラウスのサイズが大

きいせいか気が付かなかったけど。

「よし、じゃあそうと決まれば今日は魔術師ギルドに行くことにするよ、終わってもし時間があったら一緒にご飯でも食べに行こう。今日朝はワイスラーの台所に行ったんだよ俺」

「あ、そうなの？　いいな～私朝は自分の家で食べる事多いんだ～じゃあ夜はワイスラーの台所で一緒に食べようね～、夜にはお父さんのお店にいると思うから迎えに来てね」

スフィアと晩御飯を一緒に食べる約束もしたし、それに今日一緒にいけなかったせめてものお詫びにご馳走するとしようかな、幸い懐に余裕があるし。

そしてスフィアと冒険者ギルドで別れ、魔術師ギルドのある”ガルラント通り”に向かう事にした。

## 第十話「依頼探しとポイント稼ぎ」（後書き）

更新が段々と遅れてきてしまいました、まことに申し訳ありません。

# 第十一話「魔術と神聖術」

魔術師ギルドは”ガルラント通り”にあるとの事なので、中央から東へと伸びている大通りへと向かう。

ガルラント通りは他の通りと比べて、立派な建物が多いようだ。お店も店頭に品を並べたりせずに、ショーウィンドウ越しに展示してる店ばかりだ。

心なしか、通りを歩く人間もどこか気品があるように見える。それに実際に俺が想像した『いかにも貴族』といった感じの服を着た人が、護衛とおぼしき騎士をつれて歩いていたりもする。

そして……。

「ここか、なんだか入り辛いなぁ」

到着したギルドの門構えが、まるで貴族や裕福な人間が好きそうな屋敷風なのだ。

白い石をから削り出したような門に、門番のように設置してある銀色の羽の生えた悪魔のような像。

門を潜り建物内に入ると、他のギルドとは違い全体的に明るくゆったりとくつろげそうなソファーが沢山設置してあり、豪華絢爛といった様子で、一流ホテルのロビーの様だ。

そしてローブを着た魔術師風の人たちがそこに座って歓談している。

なんとも豪勢なギルドだなぁ、魔術師ギルドっていうのは随分と懐が暖かい所のようだ。

「魔術師ギルドへようこそ、本日はどのような御用件でしょうか？」

まず受け付けにいかないと始まらない。受け付けをしているのは耳の長い女性だ、エルフだろうか？

「今日は魔術の講習を受けようと思って来ました。予約とかしなくても大丈夫でしょうか？」

「魔術講習の参加希望ですね？　ギルドカードの提示をお願いします」

言われた通りカードを提示する。こうやって一瞬で情報を読み取ることの出来る身分証明書は本当に便利だ。魔具というのは本当に便利だなぁ、他の種類の魔具も是非見てみたいものだ。

「冒険者ギルド所属のシュテル様ですね？　本日の講習は午後二時より行いますので、時間になりましたら再びこの受付まで来てください。こちらが許可証になります」

おっと、そんな事考えてる内に受け付けが完了したようだ。

「午後二時からですね？　わかりました」

講習開始までまだ時間があるな、今は午前十時半程だし、どうやって時間を潰そうか。

そういえばここにもギルドウィンドウはあるんだった、ならもここでもウィンドウで色々調べてみよう。

ギルドウィンドウにある依頼は冒険者ギルドにある物と同じだった。

これは情報を共有していると言う事なのかな？　でも微妙に内容の違う物や見たことのない依頼もある。

それにデータベースには魔物の種類だけでなく、魔術の基本的な事も書いてあるので目を通してみた。

これによると、魔術と言うのはこの世界のどこにでもある魔素という物質を変換して様々な現象を起こす物らしい。

それに神聖術と言うのは、元々魔術の系統の一つだった物の名前が変わったもので、本質は一緒だとか。

神聖術は基本的に身体の内側に作用する物ばかりで、身体能力を向上させたり、新陳代謝を活性化させて疲れを取ったりする物らしい。

外傷を治すものは神聖術ではなくて、水属性の魔術の領分だそうだ。

魔術には”放出系”、”操作系”、”召喚系”と呼ばれる三つの種類があるらしい。

詳しいことは書いてなかったので、これは後で聞いてみる事にしよう。

一通り読み終わった所で軽い眠気に襲われた。

今日は早く起きた所為か少し眠い、まだ時間もあるし軽くここで居眠りしてしまっても大丈夫だろうか？　ちょうどフカフカのソフ

ァーに座っているのだし……。

「すみません、もしかして貴方、冒険者の方ですか？」

目をつぶりかけたところで誰かに声をかけられてしまった。折角いい感じに眠れそうだったのに。

「はい、冒険者ギルドに所属していますが、何か御用でしょうか？」

「やっぱり！　すみません、もし宜しければ私達と一緒に依頼を受けてもらえないでしょうか？」

よくみると彼女の後ろにも二人、魔術師風の格好の少年と少女がいる。

「え～と、二時から魔術講習を受ける予定なんですが」

「そうだったんですか。あの、Ｆランクの簡単な依頼ですぐ終わるのですが……」

ふむ、簡単な依頼で時間までに終わるならちょうどいいかもしれないなぁ。

「二時までに終わりそうならご一緒しますよ、ただその前に依頼の内容を教えて欲しいのですが」

「本当ですか！　実はこの子達を引率して簡単な任務を受けようと思ったのですが、一緒に行く予定の騎士ギルドの方が仕事をキャンセルしてしまい、前衛の方が居ないと学園の方から依頼を受ける許可を貰えないので、これから冒険者ギルドに行こうと思っていた所なんです」

学園と言うのはなんだろう？　この街の施設なんだろうか？
引率を言うのだし、学生の為の課外授業みたいな物なのかな？

「依頼の内容なんですが、街のすぐ外、ガルアーク街道方面に出現する”ピグル”三頭の討伐になるのですが、宜しいでしょうか？」

ガルアーク、なるほど、たしかに初心者向けならそっち方面がいいのだろう。
断る理由もないし、受けておこうか。

「分かりました。ではパーティーを組む為に代表の方とカード情報を交換したいんですけどいいですか？」
「わかりました。代表は私です、どうぞ」

お互いのカードをかざし合い、『情報交換』と念じる。

「先に名乗っておくべきでしたが、私の名前はレストと言います。”雛鳥の学び舎”で、初等部の子の引率の仕事をよく引き受けているんです。ほら、二人共ご挨拶して」

「僕はコシュア、まぁ規則なら仕方ないけど、お兄さんはついてくるだけでいいよ。僕達がすぐに終わらせてあげるから安心しなよ」
「始めまして、ネイスと言います。何があるかわかりませんから、もしもの時はお願いします。コシュアはこんなだからさ……」

ふむ、随分対照的な二人だな、女の子の方は妙に落ち着いてるし、男の子の方は自信まんまんだ。
雛鳥の学び舎と言うのは学園の名前だろうか？　引率の仕事を受けているという事は、教師ではないと思うけど。

「じゃあ今度は俺だ。俺はシュテル、冒険者になったのは昨日だ！どうだ、少し不安になって来ただろう」

思わずイタズラ心を刺激されてしまった。
どうも小さい子供を見るとからかったり遊んだりしてしまうんだよなぁ。カノンの癖なのかこれ？

俺の思わぬ発言に、固まったのは子供達ではなく、レストさんだった。

「ええ！？　そうなんですか？　でも、ピグルくらいなら大丈夫ですよね？　ね？」

随分とうろたえている、引率がしっかりしないでどうするんだろう。

「はは、大丈夫ですよ、カードの情報よくみて下さいよ」

ピグルと言うのはFランクの魔物で、草食性だ。
見た目は豚によく似ていて、街の外に畑を持つ人の悩みの種らしい。
討伐証明部位は両耳で、残留部位はヘビーモウラスと同じで肉だ。

「あれ？　Dランク？　もう、からかわないで下さいよ！　驚いたじゃないですか。本当に昨日なったばかりの人だったら、引率しなきゃいけない人が増えるだけじゃないですかもう」
「いやいや、冒険者になったのは本当に昨日なんですけど。カードに書いてますよ」　「あれ？　ああ……そういうことですか」

ふむ、どうやら察してくれたみたいだ。とりあえず子供達は余り

反応してくれなかったけど、思わぬ人が反応してくれたから良しとしよう。

## 第十一話「魔術と神聖術」（後書き）

投稿が一週間置きになってきてしまいました。
なるべく早く投稿したいとは思っているのですが、中々まとまった時間がとれなくて申し訳ありません。

## 第十二話「初めての依頼と魔術師と」（前書き）

段々更新のペースが落ちてきてますね、申し訳ありません。

# 第十二話「初めての依頼と魔術師と」

“ガルアーク街門”

この街門をこちら側から見るのは初めてだ。つい先日ここから街に入ったばかりだと言うのに、随分前の出来事のように感じる。
まぁそれだけこの街での一日が濃密だったって事だろうか？

「では、ここから街壁沿いに西門方面に進みます。途中で農家の方がいたら話を聞いて、ピグルの主な生息地を調べようと思います。二人共。準備はいいですか？」
「大丈夫だよレストさん！　ぱぱっと片付けちゃおうよ！」
「情報収集も任務の内と言う事なんですね。わかりました」

レストさんは引率してる二人に、これからの流れを説明している。先程聞いたのだが、農家と言うのはギルドが関与している物ではなく、一般の人間の主な仕事らしい。
ここガルヴェウスでは農家の人間は西門の近くに住んでいて、街の外に畑を持つのが一般的だそうだ。
もちろん街の外壁の内側に住んでいるのだが、中には外に家を建てている人もいると言う。

「俺はピグルの出現までは大人しく後ろについていたほうがいいですよね？」
「そうですね、今回は子供達に依頼の基本を教える事が目的ですが、なるべく自分達の力だけでこなして貰おうと思っているんですよ。その方が将来の為になると思いますし」

たしかに一から十まで人に頼りっきりでは成長は出来ない。レス

トさんは人を育てるという事を正しく理解しているみたいだ。

「レストさんは良い先生になれそうですね、見た所学園の職員ではなく、外部協力者のようですが」

「良い先生だなんてそんな、私は学園の卒業生なんですよ。教える立場になるにはまだまだ実力不足で……でもそう言って貰えるのは嬉しいです。周りの人間は『子供達に何かあったらどうするんだ！』なんて外に出すのを嫌がる人ばかりですから。だから課外授業に参加する子も滅多に居ないんですが、あの二人は興味を持ってくれたみたいで嬉しいです」

ふうむ、割と閉鎖的というか、頭が固いというか、そんな教師が多いんだろうか？

外壁沿いに歩いていくと、木の柵に囲まれた畑が見えてきた。農家と思われる人が木の柵を一生懸命直しているようだ。

「ほら、二人共。ちゃんと事情を聞いてくるんですよ？　失礼のないようにね」

「わかってますよ！　よし、ネイス行くぞ！」

「わかった、じゃあ先に聞いてきますねシュテルさん、レストさん」

二人が農家の人から話を聞いている、様子から察するにとくに問題もなく聞く事が出来ているようだ。

「ただいま戻りました！　やっぱりここ最近ピグルが街の側まで頻繁に来るようになったみたいだったよ！」
「あの畑の柵も壊されて、育てていたダイングレイブを根こそぎ食べられてしまったみたい。でも農家の人は『この時期にあいつらが活発になるなんて今までなかった』って言っていました。もしかしたら何か原因があるのかもしれません」

「なるほど、二人共ちゃんと話を聞けてきたようですね。じゃあどういった対策を取るべきですか？」

　このネイスと言う少女は随分と優秀なようだ。
　まだ十歳くらいに見えるのだが、もしかして発育が悪いだけ？
いや、でもコシュアは歳相応といった感じだし、ううむ。

「やっぱり近くに巣があるんじゃないんですか？　そこ潰せばいいんじゃないかな？　な、ネイス」
「たしかに近くにピグルの群れが移動して来てるのは確実だと思います。ただ、ここ数日の被害から見て、近くに拠点があるのは確実だと思うんですが、畑の荒らされ方を見た限り、一匹や二匹でなく、群れ単位で行動してる可能性があります。正直私達だけでは対処できるかどうか」

「うんうん、二人共正解ね、それにネイスちゃんは随分と観察力があるわね。じゃあ今回の依頼を達成する条件の三匹をどうやって討伐するか考えましょうか」
「生息地はガルアーク街道付近の森だと思います、ですが群れから都合よく三匹だけ出てきてくれるなんて事はないと思うんですが」
「やっぱり群れ全部倒すしかないんじゃないんですか？」

　三人で作戦を練っているようだ。本当に俺はついてきてるだけで

いいみたいだけど、なんとなく悲しい。
作戦会議だけなら俺も参加してもいいじゃないか。

「シュテルさん、少し宜しいですか？」

俺が少しいじけている所に、レストさんが声をかけてきてくれた。
この人は毎度絶妙なタイミングで声をかけてきてくれるなぁ。

「はい？　どうかしましたか？」
「今、群れからピグル三匹だけをどうやって討伐するか考えているんですが、何かアイディアはありませんか？」

どうやら三匹だけなんとか群れから引き離す方向になったようだ。

「そうですね、群れで行動すると言っても、拠点が近くにある以上何匹かはそこに残ると思います。動きの鈍い子供なんかは親が餌を持ってきてくるのを待ってるかもしれませんしね」
「では、他の大多数が畑を襲っている間に、森にいる子供を討伐すると言う事ですか？」

む、心なしかレストさんの機嫌が悪くなっているようだ。たしかにこの方法は卑怯だし、農家へのダメージを完全に無視してしまっているからなぁ。
とりあえず三匹だけって言われたからこう答えたのに……美人に睨まれるのは辛い。

「あくまで三匹だけという条件なら、これが一番確実だからこの作戦を提示しただけですよ。俺としては群れごと討伐したいんですけどね」

「あ、そうですよね。群れから三匹だけ引き離すのは難しいですよね。ごめんなさい、ちょっとシュテルさんが冷酷な人みたいに思ってしまいました」
「いやいや、群れを皆殺しにするのも十分冷酷じゃないですか？」
「あ……そ、そうですよね！　私ったら何言ってるんでしょう。でも実際群れとなると二十匹前後になりますよ？　いくらFランクの魔物でも、辛いと思うんですが……」
「そうですねぇ、まぁ罠を仕掛けて一網打尽にするのが常套手段だとは思うんですが、そうなると準備にも時間がかかってしまいますからね。あ、そうだあの二人をこちらに呼んでもらえませんか？」

ネストさんに二人を呼んでもらった。二人共俺が用があると聞いて怪訝な顔をしているが。

「二人の得意な魔術を聞いておきたいんだ。やはり作戦は群れそのものを討伐する方向になったから、罠をしかけようと思ってね」
「お！　シュテルさんも群れを討伐する方に賛成なんだね！　ほら見ろネイス、やっぱり農家の人の為にもここで徹底的に叩いたほうがいいんだよ！」
「たしかに心情的には私だってそう。でも実際に可能かどうか考えたら、依頼達成を優先したほうがいいと思ったの。シュテルさん、作戦はあるんですか？」
「それを今からみんなで考えるんだ、だからまずはみんなの手札を見せてもらわないとね」

「僕は土の操作系が得意なんだ！　だからピグルの腹の下から石の槍でも出して一気にケリをつける事が出来ると思うよ！」
「へぇ、それは頼もしいな、ならちょっとそれを見せてくれないかな？」
「お安い御用さ《アースグレイブ》！」

コシュアは腰に挿していた長さ1メイル程の木製の杖を構え、呪文名と思われる単語を口にしながら杖を振り上げた。
すると杖の動きにあわせる様に、少し離れた場所から鋭い岩が突き出してきた。

「おお！　魔術って始めて見たよ！　どれどれ」

そう言って出現した鋭い岩を触ってみるのだが――

「これじゃあ刺さらないんじゃないか？　ほら、手で簡単に折れちゃうじゃないか」
「違うよシュテルさん、これは出た瞬間だけ硬度を上げてるんだよ。魔術の事なにもわかってないんだなーもう」

なんて呆れられてしまった。

「はは、ごめんごめん。じゃあ他にも出したり出来るのかな？」
「まあ操作が得意だから、ある程度自由に形を変えたりも出来るよ、こんなのとかさ」

すると今度は高さ二メイル程の小さな山が出来た。
なるほど、これならいい作戦が練れそうだ。

## 第十三話「作戦開始と落とし穴」（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

突っ込みどころ満載かもしれません。

# 第十三話「作戦開始と落とし穴」

コシュアの土の操作魔術を見せて貰い、大まかな作戦の骨組みが見えてきたが、まだ決定打に欠ける。
ネイスの得意分野も聞いてからさらに作戦を練らないと。
最悪の場合、レストさんの魔術にも頼る事になりそうだが。

「じゃあネイスの得意魔術を教えてくれないかな？」
「私は水の派生属性の氷を使います。得意なのはコシュアと同じで操作系ですが、コシュアのように大量の魔力を持っていないので、大掛かりな魔法を使う事は出来ないんです」

魔力？　大気中に存在する魔素っていうのを操作するのが魔術だとギルドウィンドウで見たけど、それとはまた違う物なんだろうか？

「魔力っていうのはなんだい？　魔素ならわかるんだけど」

また年端もいかない子供に自分の無知を晒すハメになるなんて…
…いや、もう考えるのはやめよう。

「そういえば、余り魔術の事を知らないって言ってましたね。魔術を行使する上で魔素を取り込むのですが、放出するには自分の持ってる魔力に乗せないと放出出来ないんです。簡単に言うと井戸の呼び水みたいな物とでも言えばいいんでしょうか」

なるほど、直接取り込むことは出来ても、放出するには魔力が必要って事か。じゃあ魔力量が魔術の威力や規模を決めるって事なんだろうか。

「先程言いましたけど、私は魔力量が少ないので大規模な展開が苦手なんです。なのでピンポイントで相手の急所を狙ったり、行動の阻害をして仲間のサポートにまわるのが得意なんです」
「なるほど、氷を召喚して、コシュアみたいに突き刺したり、相手を凍らせたりできるんだね？」
「はい。とは言っても精々足を地面に貼り付けるくらいしかできないんですけどね」

随分と自嘲気味に話しているが、この歳でここまで冷静に自分の実力を評することが出来るのは、正直驚嘆に値する。
それにピンポイントで無駄なく魔術を使うのは、大規模な魔術を行使するよりよっぽど神経を使いそうだと思うんだけどなぁ。

「じゃあネイスもちょっと氷を出してみてくれないかい？」
「わかりました。《アイスクラスター》」

彼女もコシュアと同じように、下から上に向けて、これまたコシュアと同じ杖を振り上げた。
もしかしたらこの下から上への動きも魔術の発動に関係あるのかもしれない。

「あれ？　これはこのまま残ったままなの？」

地面から上へ向かって放射状に飛び出した氷の剣山。しかし近くで触れてみてもくずれたりせず、そのままの硬度を保っているようだ。

「はい、これは氷を作っただけですから。だから溶けるまではこのままですよ」

ふむ、コシュアの魔法と似てはいるが、活用の幅を考えればこちらのほうが遥かに上だな。

コシュアの地形操作とこの氷の剣山があれば、原始的だが立派な罠が作れそうだ。

「よし、作戦が決まったぞ！　みんなちょっと集まってくれ」

「シュテルさん、農家の方も了承してくれましたよ。ただしやるからには確実に成功させて欲しいそうです」

「了解、じゃあ早速仕掛け作りに入ろうか。ピグル達がここに来るのはいつも正午あたりらしいから余り時間はない。コシュア、さっき言った通りに地形を変化させてくれ」

俺が考えた罠はズバリ落とし穴だ。正確には穴ではなく、ちょっとした崖を作るだけだが。

まだ残ってる畑がこの辺りには一箇所しかないので、そこを襲って来ると読み、そこに到る道を緩やかな坂道にするのだ。

そしてその道を途中で崖にする。

ピグルは集団で行動する時は全力疾走をする性質があるので、そのまま崖から落ちるはずだ。

とはいっても精々高さは3メイル程なのだが。

そして崖の下にはネイスのアイスクラスターの魔法で大量の氷の

剣山を作っておく、これで落ちたピグルにダメージを与えるという寸法だ。

コシュアの魔法は長時間維持する事は出来ないので、設置型の罠には向いてないので今回はこんな役割分担にしたが、ネイスからは『魔法の持続が役に立つとは思いもしなかった』と驚かれた。

長時間存在するのはむしろ邪魔になると思っていたようだ。まあたしかに乱戦中に大きな障害物が留まり続けるのは邪魔にはなるが、それも活用次第だろう。

俺の考えをネイスに話したところ『シュテルさんは面白いですね。今度からこういうアプローチの仕方も考えて見ます』と感謝された。

今回の作戦はいわば畑を囮に使うわけだから、万が一という事もあるので農家の人に許可を求めていたのだ、そして少しでもピグルがこちらに来るように、先程直していた柵も一部借り受けたのだ。

「シュテルさん、坂道はこんな感じで大丈夫かな？　一応３０メイルも使って緩やかに作ったんだけど」

「ああ、これならピグルも気が付かないだろう、あとは柵を各所に配置して坂からそれないようにしたら完成だ！」

「私のほうも氷の設置が終わりました。魔力の限界で隙間無く埋める事は出来ませんでしたが、崖の近くには集中して設置できたので効果はあると思います」

二人も無事を終了したようだ、あとは俺が柵を設置したら完成だ。

時間はレストさんに聞いたところ正午五分前だそうだ、もうそろそろピグルが現れる時間だ。

俺は柵を等間隔で設置し、崖へと誘い込むようにした、あとは待つだけだ。

「シュテルさん凄いですね、短時間でこんな作戦を思いつくなんて」

レストさんが称賛してくれるが、そんなにたいしたことはしてないつもりだ。今回の作戦が実行できたのも、ひとえにコシュアとネイスの魔術があったおかげなんだし。

そう言ったのだが。

「そんな事はありません。魔術で罠を作るなんて発想がそもそもありませんでしたから。シュテルさんは魔術には詳しくないと仰っていましたが、戦術的な魔術師の使い方が上手なんですね……」

何故か後半、消え入るような、少し悲しそうな様子だったのは何故だろうか？　何か思うところがあるのだろうか？

「あの、どうかしましたか？　こんな風に魔術を使うのってもしかして失礼でしたか？」

「いえ！　そんな事ありませんよ！　あの、えと、そういえばこの罠にかからなかったピグルはどうしますか？　私が魔術で倒す事も出来ると思いますが」

あからさまに話しを逸らされてしまった。まあ根堀葉堀聞くのも失礼だろうし、ここは引き下がっておこうかな。

「そこは俺に任せて下さい。しっかり護衛の役割をまっとうして見せますよ」

自身まんまんに告げると、レストさんも楽しそうに微笑み返してくれた。

これから戦闘に入るかもしれないのに随分とこの人も余裕がある

みたいだ、引率を率先して引き受けるだけはあるっていう事かな。

そうレストさんを評している所にネイスの声が届いてきた。

「来ました！　この坂にむかって走ってきます！」

さて、上手く行くといいんだけど、どうなるかな？

## 第十四話「戦いと命の価値」（前書き）

タイトルが何やら仰々しいですが、
実際はたいした事ない内容です

# 第十四話「戦いと命の価値」

遠くの方に、砂煙が上がっているのが見える。
『群で移動する時は集団で全力疾走する』と言うギルドウィンドウで見た記述に偽りはなかったようだ。
そしてそれは、この作戦がうまく行く可能性が高まった、と言う事でもある。

俺たちは崖の下の、それも氷の密集してる地点からさらに後ろに下がった場所でピグルを待ち構えている。

コシュアとネイスの二人は、杖を構え緊張した面持ちでピグルが落ちてくるのを今か今かと待ち構えている。
レストさんは戦いに慣れているせいか、冷静に生徒二人の横で「大丈夫、打ちもらしても、シュテルさんが倒してくれますからね。私達も彼の邪魔にならないように、援護に徹しましょう」と声をかけてあげている。

そう言われてしまっては、頑張らない訳にはいかないじゃないか。
まぁ元より打ち漏らしを彼女達の方まで通す気はサラサラ無いんだけどね！

「ピギュゥゥゥゥゥ！　ピグゥゥゥゥゥ！」

ピグル達の、まるで絶叫のような鳴き声が段々とこちらへと近づいてくる。恐らくもうそろそろ第一陣が到達するはずだ。

俺は腰の剣を抜き放ち、氷の密集地帯へと少しずつ近づいていく。
そして――

「シュテルさん、来ました！」

ここよりも離れた場所で、崖の上に目を凝らしていたネイスが報告してくる。
やはり彼女は後衛の役割をキチンと理解しているようだ。

第一陣、落ちてきたピグルは四頭。
そのまま氷の剣山に貫かれ、四頭はその動きを止めた。

第一陣の後は警戒して落ちてこない可能性もあったが、急に止まることはできないのか、それとも後に続くピグルに押し出されたのか、先程よりも暴れながらさらに三頭落下してきた。

その内二頭はまた氷によって戦闘不能に陥ったのだが、残りの一頭は先に落ちたピグルの死体の上に落ちたらしく、まだ動けるようだ。

何が起きたのがまだ理解していないのか、動かなくなった仲間の側で右往左往としているピグル。

それに俺は容赦なく剣を振り下ろす。
俺の接近に気が付いていなかったピグルは、あっさりと頭部を切り落とされ、地面に血溜まりを作っている。
するとそこへ――

「シュテルさん！　危ない！」

と、ネイスの叫びが聞こえてくる。

止めを刺すためとはいえ、少々崖の下へと近づきすぎたようだ。
上を見る余裕はないと感じ、ほとんど反射的に氷が余り密集していない地点へと飛び込む。
そしてその瞬間、今までいた場所へと残りのピグル全てであろうか？　七頭ものピグルが雪崩れ込んでくる。

思ったよりもピグル達は密集して動いていたのか、崖下の一部にしか落ちてこなかった。
そのせいで、思いのほかピグルを氷で仕留める事が出来なかった。
とは言え、一度に雪崩れ込んだ所為でいくらかは怪我をし自由に動き回れないはずだけど。

「ネイス！　氷を俺の後ろの空きに敷き詰めろ！　コシュアも土操作で隙間を埋めるんだ！」

「わ、わかった！」「わかりました！」

二人に俺の退路と同時に、ピグル達の先へすすむ道を封鎖させる。
これも一応考えていた作戦だ。

背後に崖、目の前には俺、そしてその後ろは土と氷に塞がれ、横は自分の仲間が氷に貫かれたオブジェで阻まれている。
簡易的だが、四方を取り取り囲んだ即席の闘技場の完成だ。

「シュテルさん！　どういうことです！　これではシュテルさんが！」

レストさんが俺の身を案じて叫んでいる、だが護衛として一緒に任務を引き受けた以上、必要以上に護衛対象に危険を及ばせるわけにはいかない。

まあ納得してくれるかはわからないけど、しかしこの程度の相手に遅れを取るつもりはないのだし、無傷で此処を切り抜けられれば許してくれるだろう。

まぁ、また慢心して痛い目を見るかもしれないのだし、今回は本当に慎重に、全力でいかせてもらうけど。

困惑し、仲間と鳴き声で相談でもしていたのだろうか？　ピグル達に動きがなかったのだが、それが一斉に駆け出してきた。

俺もろとも壁を打ち破るつもりだろうか？

俺はピグルの突進を、背後の氷の壁を使い三角とびで避ける。

氷の壁は木の柵とは違い、奴らの突進程度じゃ崩れない。

俺が後ろに着地したのに気が付いていないのか、俺は無防備なピグルの背後から、後ろ足めがけて剣をなぎ払う。

一瞬骨に当たる感触がしたが、さすがに姉さんが作った剣はそんな抵抗程度で切れ味を鈍らせることは無く、一度に二頭分の後ろ足を切り払った。

まずはこれで二頭戦闘離脱だ。

切り払われたピグルの悲鳴で、初めて俺が後ろにいる事に気が付いたであろう残りの五頭は、さすがに俺の危険度を理解したのか、二頭は動けなくなった仲間の後ろに待機し、残りの三頭がこちらへと慎重に進んでくる。

「プギイ！　プギュアアア！！！」

今度こそ本当の絶叫を上げ、三頭が波状攻撃の如く距離を詰めてくる。

最初の二頭を避けた所に、止めと言わんばかりに残りの一頭が飛び掛ってくる。

その下を潜るように、身を低くし剣を真上へと突き上げ、飛び掛った一頭の腹を裂く。

これで残り四頭だ、このまま行けば無事おわりそうだ。

そう思った時、動けないピグルの後ろにいた残りの二頭が、先にしかけた二頭と共に、いつのまにか四方向から俺へと向かい駆け込んでくる。

想像以上に頭が良いピグル、ここにきてやっぱり俺は油断してたみたいだ。

しかしそんな泣き言を考えてる場合じゃない、咄嗟に高くジャンプし、なんとか四方向からの突進をかわそうと思ったのだが――

「プグアアアア！！」

ジャンプした下から、また絶叫が聞こえる。

一頭の上に着地して、その絶叫の理由を理解した。

「頭がいいと思った矢先にこれかよ！」

四頭は互いに頭をぶつけあい、フラフラとその動きを鈍いものとしていた。

このチャンスを逃すわけもなく、消化試合のような気持ちで四頭の足を切断し、戦闘不能にした。

その後一息ついて、足を失いながらも絶叫してるピグル全ての首を落とし絶命させる。

なんだかんだで無傷で倒す事が出来た。早くみんなに報告しようと外に意識を向けると――

「シュテルさん！　ねえシュテルさん！　返事を！　返事を……」

段々と消え入るような、レストさんの悲痛な叫びが聞こえてきた。

ヤバイ、戦闘に夢中でまったく聞こえていなかった。ずっと叫んでいたのだろうか？

随分と心配をかけたようだ。

「レストさん、大丈夫だってば！　あのお兄さん強いんでしょ？だからきっと大丈夫だから」

「あの人はきっと大丈夫です。レストさんだって、あの人は元「みんなー！　俺は無事ですー！　自分じゃ出られないので、壁を戻してくれないかー？」

生徒二人に慰められていたようだ、レストさんはもっと冷静だと思ってたんだけどなぁ。

「無事で何よりです！　いくら自分よりランクが低いといって、あんな狭い場所で集団で襲われたらどうなるかわからないシュテルさんではないでしょう！？」

心配するのか、怒るのかどちかにして欲しいよレストさん。反応に困ってしまうじゃないですか。

「申し訳ありません、ですが、少しでも皆さんに危険が及ばないようにと思いまして……それにあの程度の相手なら、大丈夫だと自身もありましたし」

「だからと言って！　事前に話しておいてくれてもいいではありませんか！　ああ、本当によかったシュテルさん」

ぬぅぅ。涙まで目に溜められたら、もう俺に勝ち目なんてないじゃないか。

「申し訳ありませんでした……」

「シュテルさん、レストさん。死体が消えてしまう前に討伐証明部位と残留部位の回収をした方がいいと思うのですが」

ナイスタイミングだネイスちゃん！！！　君は本当に優秀だ！！

「ネイス！　すごいぞ！　氷の刺さった奴以外は全部頭と足を切り落とされてる！」

「機動力を奪ってから、確実に命を絶つ。とても合理的で、無駄の

無い戦い方ですね。出来ればその様子を見たかったです、シュテルさん」

二人の反応にどう答えていいのやら、命を奪うことに関しての無頓着さに苦言を呈すればいいのか、ほめて貰った事に礼を言えばいいのか。

「二人共、その前にキチンと魔物への追悼の祈りをささげないといけませんよ。間接的にとはいえ、この魔物の命を奪ったのは紛れもなく、私達全員なんですから」

うん、レストさんは本当にいつも、最適なタイミングで声をかけてくれるな。

この世界は魔物のような危険な生物と背中合わせの生活だから、もしかしたらこういった事に無頓着なのかもしれないと思ったが、この様子だとそんな事はないみたいだ。

もしかしたら、二人もその事を忘れたくて無理に明るく振舞っていたのかもしれないな。

落とした頭から耳を切り離す作業は、さすがに子供達にやらせるわけにはいかず、俺が頭を全て回収し十四対の耳を先日買った皮袋へと詰める。

ただ、このレストさんが風の魔術で切り離した、大量の肉はどうすればいいのだろうか？

「討伐証明部位のポイント換算は、全てシュテルさんにお任せします。ただ、このお肉なんですが……」
「農家の人たちに配りましょうか。野菜を食べられた足しにでもしてもらえるといいのですが」
うん、こんな大量の肉、運ぶのも面倒だし、その方がいいだろう。
ただし、少しだけ俺も分けて貰ったのだが。

その後、ピグルの耳は俺とレストさんとで半分づつ貰う事にした。
コシュアとネイスの二人は正式な冒険者ではないので必要ないからだ。

尤も、俺のランクはDなので、Fランクの討伐部位程度ではポイントの足しにはなりそうにないし、依頼そのものは護衛依頼ではなく、ただ単に一緒にFランクの依頼を受けただけだ。
なので今回の依頼はポイントを稼ぐのではなくて、少しの依頼料と、時間を潰す目的、そしてこの三人と知り合えた事が成果だろう。

もっとも、この後ちょっとした騒ぎになってしまうのだが。

## 閑話「女魔術師と元騎士ギルド？」（前書き）

今回の閑話はレストさんの視点よりお送りさせて頂きます。

## 閑話「女魔術師と元騎士ギルド？」

「放してくれ！　私は間違った事などしてはいない！」

目の前で私の大切な友達が、騎士ギルドに連行されて行く。

彼は騎士としての本懐を果たそうとしただけなのに、それなのにあの人たちは彼を罪人と呼び蔑む。

どうして？　彼は私達を救ってくれただけだというのに。

どうして目の前で彼は傷付き、剣を向けられているのですか？

「王国騎士からわざわざ引き抜いてやったというのに、貴様には失望した！　任務を放棄し部隊からの離反！　それにギルドに通されていない依頼を勝手に受諾するなど！　お前を騎士評議会で断罪する！」

断罪？　彼が罪をおかしたと言うの？　友達のお願いを聞くのが罪になるのですか？

どうして――

「え……？　あれ、そっか」

またあの夢。

この仕事を引き受ける度にこの夢を見るなんて、やはり私は弱いみたいです。

別に彼と死別したわけじゃないと言うのに。それに彼自身もあの事件をもう気にせず、自由に生きていると言うのに。

「さてと、準備してあの子達を迎えにいきましょう」

「レスト様、騎士ギルドの方から連絡が入っております。ギルドウィンドウにて確認をお願いします」

雛鳥の学び舎から二人の生徒を引き受け、魔術師ギルドまでやって来ました。

二人はギルドの建物に入るのが始めてらしく、興味深そうに見回しているようです。

私も卒業して魔術師ギルドに入った頃はこうでしたね、この子達も沢山外の事を学んでもらえるといいんですけど。

「ちょっと騎士ギルドから連絡が入ってきてるそうなので、見てきますね？　恐らく今日の護衛についてだと思いますから」

二人にそう告げて、ギルドウィンドウを確認すると、差出人は騎士ギルドの受け付けをしてる男性からでした。

そして、その内容は……。

『今回の任務は護衛という事でしたが、護衛対象が魔術師三人ではなく、一般人の、それも子供二人を含むとは聞いていませんでした。騎士ギルド内でも子守のような仕事を引き受けるつもりはない、という事ですので、今回の任務に騎士を派遣する事は出来ません。何卒ご了承下さい』

そんな、たしかに二人はまだ子供ですけど、立派な魔術師なのに！　それに一度受けた依頼を当日にキャンセルするなんて！

騎士ギルドは何年たってもかわらないのでしょうか？　どうしましょう、今日の護衛……。

「レストさん、どうしたの？　浮かない顔してるよ」

「あ、コシュア君。ちょっとした行き違いがありまして、騎士ギルドの方がこれないみたいなんです」

正直に話してしまいましょう、護衛の依頼なら冒険者ギルドにも頼めるのですし、こういうトラブルを解決することだって立派な実地訓練になります。

「そうなの！　やった！　これで僕達だけで魔物を倒せるんだね！」

あれ？　この子はどうして喜んでいるの？　護衛の、それも前衛のいない魔術師がどれほど脆いのかわかっていないのでしょうか？

「コラ、コシュア君。魔術師が「コシュア、これは遊びじゃないんだから」あら？」

私が注意しようとしたところに、もう一人の生徒、ネイスちゃんが割り込んでコシュア君に注意を促しています。

この子はコシュア君程魔術の適正は高くはないみたいです。でもそんなハンデを抱えていても、学び舎の初等部の魔術クラスで主席をキープしている努力家。

「私達はまだ実戦はしたことがないの、コシュアが得意な魔法だって走り回る相手に確実に当てる自信はある？」

「そんなの余裕さ、走っていようが当てられる！　予測して当てるなんて魔術の基本中の基本じゃないか」

「そう？　仮に当てたとしても、そのまま走りこんできたら？　確実に倒せないと即ち自分の死に直結する状況で、いつも通りにあてられるの？　私達なんてちょっと突き飛ばされるだけで骨だっておれるし、踏まれたら簡単に体がつぶれちゃうんだよ？」

驚いた。ネイスちゃんは自分の無力さをしっかりと自覚している。主席ともなれば、かならずと言っていいほど慢心が生まれるというのに、まだ子供なのにここまでそれを感じさせない子は初めて見ました。

「う、わかったよ。じゃあ護衛はどうするんですかレストさん」

「そうですね、冒険者ギルドで冒険者さんを雇う事になると思います。少し遠いですけど、大丈夫ですか？　二人共」

ここから冒険者ギルドまでは少し距離があるので、二人に念の為尋ねたのですが――

「レストさん、あそこ魔術師ではないと思われる人が座っています。腰に剣を差している事から冒険者か傭兵だと思います。騎士ギルドの人なら必ず騎士鎧を着ているはずですし」

ネイスちゃんに言われ、その人を探す。

そしてすぐに見つかった。

奥のソファーで一人、目を細めて考え事をしている剣士の男性。

銀色のような、鉄のような、たとえるなら使い込まれた剣のような髪の色。

一瞬、エルフ族かな？　と勘違いしてしまうような綺麗な顔立ち。

そして醸し出す空気が酷く冷たく、髪の色と同じような、抜き身の剣のような、そんな人。

ちょっと怖いけど、聞くだけ聞いてみましょう。

「すみません、もしかして貴方、冒険者の方ですか？」

彼は、いえ、シュテルさんは快く依頼を受けてくれました。

やはり彼は冒険者でした。

しかし、冒険者になったのは昨日だと生徒達に嘯き、おどけてみせます。

第一印象とはうってかわって、とても親しみやすい人みたいです。

それに近くで見た瞳は綺麗な緑色、私と同じ色でした。

同じなのは瞳の色だけ、私の髪は銀色ではなく、淡い金髪なので。

まぁ同じ金属系の色とは言えますけど。

本当に昨日冒険者になったばかりでは護衛の依頼は辛いかもしれないと、慌ててしまいましたが、交換したカード情報を見て下さいと言う。

彼のランクはDランク、駆け出しの冒険者がこのランクにいるはずがありません。
しかし彼は「冒険者になったのは本当に昨日」と言います。

ああ――この人も騎士ギルドにいられなくなった人なんだ。

私はなんとなく、この人が悲しい目にあったんじゃないか、そう思いました。

剣士が最初からDランク、この事から彼は、どこかのギルドを辞めて冒険者ギルドに入ったのでしょう。
傭兵ギルドや教団ギルドにも剣を使う人は沢山います。ですがこの人の雰囲気が、生粋の騎士のような、何かを守る事に命をかけるような、そんな印象を受けました。

それに騎士鎧を着たらさぞかし栄えると、思わずその様子を想像してしまいます。

しかし、冒険者になった。
シュテルさんも私の友達のように、何か辛い目にあったのでしょうか……？

## 閑話「女魔術師と元王国騎士？」（前書き）

徐々に勘違いが広がって行くレストさん。

## 閑話「女魔術師と元王国騎士？」

シュテルさんは今回の護衛の依頼の本当の意味にすぐ気が付いてくれました。

これは生徒達の自主性を尊重した実地訓練。

それをシュテルさんはすぐに見抜いたんです。

それだけではなく、私の事を「いい先生になれる」と評価してくれました。

彼は私達よりも少し後ろを歩いてきてくれます。

普通は護衛となると、前に出て露払いを意識した布陣にする所を、私達の目的の為に後ろから見守ってくれているみたいです。

そういえばシュテルさんは歳はいくつくらいなんでしょう？　始めは私より年上かな？　と思ったのですが、話してみると、妙に人懐っこいというか、若い印象を受けます。

引率していた二人は、無事に農家の男性から、最近の被害状況を聞事が出来たみたいです。

しかしこの様子だと、ピグル三頭だけと偶然遭遇する、なんて状況にはなりそうにないです。

群れで行動してるようですし、どうしたらいいんでしょう……。

コシュア君は「群ごと討伐してしまえばいい」と、意見を出しますが、正直私でも群を相手にするのは無理です。

ただ、心情的にはここで群を討伐して、付近の農家の方々を安心させたいのですが……。

そうだわ、シュテルさんにも意見を聞いてみましょう！　なんとなくですが、あの人ならきっと何か良い案を出してくれるような、そんな気がします！

早速、少し離れた場所からこちらの様子を伺っていたシュテルさんに声を掛けたのですが。

「そうですね、群れで行動すると言っても、拠点が近くにある以上何匹かはそこに残ると思います。動きの鈍い子供なんかは親が餌を持ってきてくるのを待ってるかもしれませんしね」

返ってきたのは、どこまでも冷静な、依頼を達成する為だけの答えでした。

そうでした、この人はただ雇われただけの冒険者でしたね、何か勝手に私の中で”理想の騎士”象に当てはめていたみたいです。

「では、他の大多数が畑を襲っている間に、森にいる子供を討伐すると言う事ですか？」

つい、責める様な口調になってしまいました。勝手に期待して、勝手に失望した挙句に、こんな態度まで取って、自分でも嫌になってしまいます。

そう、自己嫌悪に浸りそうになったのですが、シュテルさんが発した次の一言で、そんな気持ちが吹き飛びました。

「あくまで三匹だけという条件なら、これが一番確実だからこの作戦を提示しただけですよ。俺としては群れごと討伐したいんですけどね」

思わず、シュテルさんの顔を見つめてしまいました。

よかった、やっぱりこの人は誰かを守るのを第一とした、生粋の騎士様のようです！

あの後、シュテルさんは罠を作り、一網打尽にするという手段を取ると決めました。

コシュア君とネイスちゃんの二人と一緒に作戦会議を始めています。

たしかに、今回はあの二人に全てを任せるつもりでしたが、作戦会議なら私も参加してもいいのではないでしょうか？　ちょっぴり疎外感を感じてしまいます。

そして、作戦が決まったようです。

シュテルさんはコシュア君とネイスちゃんに指示を飛ばし、見る見るうちに畑の近くの地形がかわっていきます。

シュテルさんの作戦は、ずばり落とし穴。

でも実際には、狩りの時の追い込み猟のような方法です。

短時間では用意できないような事を、効果的に魔術を使い、作戦

を進めて行く。

その姿を見て、私の中でひとつの推論が生まれます。

魔術は使えずとも、魔術師を、延いては人を効果的に使い、大規模な作戦を成功させる。

それは、昔私の友達が王国騎士団に居た頃に見たと言う、”部隊の隊長”

そう感じました。

そう思い始めると、彼が大勢の仲間を指揮し、戦場を駆け抜ける姿を思わず幻視してしまいます。

でも、もしそんな凄い人なら、どうしてギルドで冒険者をしているのでしょうか。

もしかしたら……酷く、残酷な運命に翻弄されたのではないでしょうか？

勝手な想像ではありますが、何故かそう考えるとしっくりきます。

思えば最初に出会った時の、あの表情。

まるで何かに耐えるような、そして、疲れたような顔、あれはきっと……。

いつの間にか私の頭の中は、シュテルさんの事でいっぱいになっていました。

## 閑話「女魔術師と元王国騎士？」（後書き）

閑話は今回はここで終了です。
この後少し登場人物紹介をする予定です。
その後は少し間があくかもしれません。

追記　７月３１日　閑話の挿入タイミングがおかしいとのご指摘があったので修正しました。

## ここまでの主な登場人物（前書き）

まだ余り深く関わっていない人物の設定は簡略しています。

## ここまでの主な登場人物

カノン・シュテルン
種族　人間？（ヒュマリア？）　年齢不明

この物語の主人公。
この世界に来る前の世界で、何か大きな役目を終え、また当ての無い次元旅行へと旅立つ予定だった。
仲間と共に新たな世界へと向かうというのが本来の彼の生き方なのだが、稀に彼個人が何者かの思惑で、まったく知らない世界に飛ばされてしまう事がある。

シュテル
種族　人間？（ヒュマリア？）　年齢　２３歳（？）

この物語のもう一人の主人公。
今回の世界で、カノンが気まぐれで生み出した人格。
彼はカノン本人がまだ、純粋に歳を取り、生きていた頃の人格をベースに生み出されている。
性格は「明るく楽しい好青年」とカノンは思っていたようだが、実際には「未熟な若者」
精神的に打たれ弱い面もあり、また激情に身を任せてしまう事もある。

自分の記憶と経験に差異が存在する為、思うように力をふるう事が出来ないでいたが、カノンの助言により武器をかえ、基本から鍛え直して行こうと決意する。

使用武器は少々小ぶりなバスタードソード、武器名は「共に歩み
し追憶の剣」
この名前はギルドカードに勝手に登録された物だが、名前の由来
は不明。

ヨザーク
種族　人間（ヒュマリア）　年齢　４９歳

カノンがこの世界で最初に出会った人物。
行商ギルドに所属している行商人で、ギルド内でも評判も上々。
面倒見が良く、シュテルによくしてくれるが、それは自分の息子
と重ねた所為もあったのかもしれない。
ガルヴェウスでシュテルと別れた後、北にある”フォール大陸”
へと渡っていった。

レオフィス
種族　上位獣人　レオネイル　年齢　４７歳

ヨザークとは旧知の仲の商人ギルド所属の街商人。
元々は、冒険者をしながら、行く先々で手に入る品を売る行商人
だったのだが、結婚を期に街商人へと鞍替えし、冒険者の経験を生
かした冒険者向けの武具屋を開き成功を収める。

砕月の破片、「ムーンダスト」と呼ばれる物質で作られる「蒼光
武器」に並々ならぬ関心を持つが、それは自分のためではなく、砕
月の好きな自分の娘へのプレゼントの為である。

冒険者ギルドの面々

スフィア
種族　上位獣人　レオネイル　年齢　１９歳

レオフィスの一人娘の冒険者件芸術家。
絵画を嗜み、彼女の砕月の絵は高い評価を受けている。
レオフィスの店の関係で冒険者には顔が効き、面倒見の良さやその明るい性格から人望も厚い。

軽装を好み、使用武器も小型の剣を両手で扱うスピード重視。
シュテルと蒼星の夜に会話をして以来、よき友人となる。

上位獣人である”レオネイル”ではあるが、耳の毛が短めでよく”キャトネイル”と間違われる事が密かな悩みだったりする。

グレンダル
種族　人間（ヒュマリア）　年齢　３９歳

冒険者ギルドの熟練の戦士。
ギルドからの信頼も厚く、新人のスカウトなどの裏仕事も任されたりもする。
今回シュテルがギルド本部で適正審査を行った為、スカウトも兼

ねて冒険者ギルドから派遣された。
普段は新人冒険者の教習をしたり、新人パーティーの引率等をしている面倒見のいい男。
ちなみに独身である。

ダルベスト
種族　人間（ヒュマリア）　年齢　３９歳

冒険者ギルドの古株。
グレンダルとは同期なのだが、いまいち活躍の場に恵まれず、未だにCランクである。
冒険者ギルドの新米達の暮らす寮「休息の鞘」の代表的立場だが、本来C－からは一人用の家が用意されるのを断り、あえてここに住み続けて新人をいびる、もとい面倒を見る。

アルヴァス
種族　人間（ヒュマリア）　年齢　２１歳

ガルヴェウスの外からガルヴェウスに来た若者。
短期間でD－ランクに上がり、鳴り物入りでガルヴェウスのギルド本部にやってきた。
だが偶然居合わせたシュテルが、最初からDランクという評価をうけていたのに嫉妬して勝負を挑むが……

その他のギルドに所属している人物

アルシャ
種族　不明　　年齢　不明

教団ギルドに所属している神聖騎士。
シュテルとの勝負に勝利したものの、その技量の高さと、まだ冒険者にすらなっていない事に驚愕している。
この先彼女との再会はあるのだろうか？

レスト
種族　人間（ヒュマリア）　年齢　２２歳

魔術師ギルドに所属している女魔術師。
雛鳥の学び舎と呼ばれる、ガルヴェウスのギルド本部により運営されている、まだギルドに所属出来ない子供達が、将来ギルドに入るために様々な技術学ぶ場所で、生徒の課外授業の引率の仕事を主に引き受けている。

面倒見が良く、とても優しい性格とは裏腹に、実践主義を貫く強い女性。
だが、若干夢見がちで、思い込みが激しい。

## ここまでの主な登場人物（後書き）

感想や指摘など、いつでも歓迎しています。

# 第十五話「達成条件の重複」

農家の方々に肉を納め、柵を元の位置に戻したところで時間はもう一時を回っていた。

急いで街に戻り、最寄であった冒険者ギルドへと依頼達成の報告へ行こうと思ったのだが。

「シュテルさん、依頼の達成報告は受諾したギルドじゃないと出来ませんよ？　部位の換算は可能ですけど、先に三つ魔術師ギルドに提出しないと」

とレストさんに教えて貰った。

そして魔術師ギルドまで戻って来た所で、予約してある二時まで残り十分といった所だった。

結構ギリギリだったなぁ、と内心ホっとため息をついたのは内緒だ。

魔術師ギルドに入ると周りにいた魔術師と思われる人達や、用があって来ていたであろう他のギルドの人間も、皆一斉に俺から離れて、顔色を悪くしている。

「シュテルさん、そういえば血まみれでしたもんね」

嗚呼、そうだよそうだったよ、あんな所で戦ったらこうなるのは当たり前だよ。

迂闊だったなぁ、ジャケットは兎も角、ズボンもシャツもこれじゃあもう着れないじゃないか。
どおりで農家の皆さんや街を歩いてる人たちも顔を引きつらせてる訳だ！

「そうでしたね、もういっその事全身鎧でも着込んでしまいましょうかね？」

なんて、冗談でのつもりで言ったのだが。

「それは良い考えです！　フルプレートアーマーって言うんでしたっけ？　騎士団みたいな鎧ですよね？　良い考えだと思います！」

と、随分と食いついて来るレストさん。鎧に何か思い入れでもあるのだろうか？

「すみません、先程受けた、ピグル三頭の討伐依頼の達成報告に来たのですが」

依頼を直接受けたのはレストさんなので、手続きはレストさんに任せて、俺は生徒二人と他愛も無い会話をしていた。

「シュテルさんって本当に強いんだね！　それに作戦も完璧だったし！」
「そうだね、シュテルさんの考え方は良い刺激になりました。さすが元王「シュテルさん、すみませんちょっときてもらえませんか？」

ネイスが何か言いかけていたが、レストさんがなにやら困った声でかき消されてしまった。
何やら不安そうな顔でこちらへと戻って来た。一体どうしたんだろうか？

「今回達成したピグル三頭の討伐ですが、話しを聞いたところ群ごと討伐なされたとか。倒したピグル全ての討伐証明部位をお持ちでしょうか？」

どうやら群を倒したことに何か問題があるようだ。
言われた通りにピグルの耳を、提出した。
レストさんも最初に提出した三頭分以外も提出したのだが――

「どうやら本当に群を討伐したようですね。今回の依頼の他に『ピグルの群を殲滅させろ』という依頼も入っていたのですが、どうやらこちらの方も一緒に達成してしまっていたようですね」

なにやら達成条件が重複していたようだ、依頼を受けずに勝手に達成してしまうのは、違反行為だったんだろうか？
そう、心配したのだが。

「そんな事はありません、今回のピグル三頭の討伐は、継続して張り出しておく依頼でしたので、十四頭討伐で今回の依頼を四回達成した、という形になります。それとは別に、群を討伐したという事で、こちらの依頼も達成した、という事になりますので、合計五つの依頼を達成したという事になります」

なんと！　じゃあ暇つぶしのつもりが、結構大仕事をこなしたって事なのか！　じゃあ報酬は？

「Fランクの討伐任務四回、Eランクの討伐任務を一回、シュテル様はDランクですので、若干ポイントはさげられてしまいますが、レスト様は今回の依頼達成でE－からEランクへと昇格で御座います。ちなみにこれは全ての部位のポイントをレスト様に分配した場合になりますが」

その言葉を聞いて俺は、全てのポイントをレストさんに譲ることにした。

どの道俺が換算したところで大幅に補正をかけられてしまうのだし。

「そんな！　それではシュテルさんが」

「いいんですよ、どうせ俺が貰っても、無駄になってしまう分が多いんですし、もったいないじゃないですか」

「ですが、突然依頼して、群の討伐までさせてしまったのに……」

中々折れてくれないので、交換条件を出して見ることにした。

「じゃあ、今度俺が依頼を受ける時、一緒に行きませんか？　この辺りの事はまだ余り詳しくないんですよ俺」

「いいんですか？　いまEになったばかりですよ？　もしそれでもいいなら是非御一緒させて貰いたいのですけど」

「じゃあそれでお願いします、まだ一緒に依頼を受ける仲間が余り居なかったんですよ、助かりました」

レストさんは納得し、改めてこれからよろしく頼みますと互いに握手をして別れた。

一応依頼をこなした事によるポイント換算で、カードの数値が変動した。

シュテル　D　39／200

思っていたよりも増えているようだ、Eランク任務のおかげだろうか？　その内ランクによるポイント補正についても聞いてみないとなぁ。

ちなみに今回の依頼達成による報酬金は、Eランクの人間と、一般人を引率していた事により補正をかけられることなく、全額支払われた。

ランクを下げられる心配もいらないらしい。

という事は、高ランク者が自分より低いランクを引率して、格下の依頼を受けるというのもお互いに利益があるのかもしれない。

支払われた金額は、ピグル三頭討伐で３０００メルス、群の討伐で３５０００メルスと、微妙に計算が合わないのだが、それは群になった場合、その危険度が跳ね上がる為だそうだ。

四度達成したので合計で１２０００メルス。さらに群の討伐で３５０００メルス。実際には重複していたので、本来より少ない討伐数で済んだのだが、ここまでの大金を貰ってもいいのだろうか？

気がとがめたので、受け付けに聞いてみた所、本来はこのような事にはならないらしい。

今回は後から群討伐の依頼が入ったので、対応が遅れてしまった為の出来事だとか。

合計４７０００メルスだが、これは四人で均等に分ける事にした。

最初は受け取る事を渋っていた生徒二人も、今回の作戦の要だった事や、ポイントと違って一般人もあって困る物じゃないだろうと説得し、四人で均等に分けると相成った。

尤も、引率以外特に戦闘や準備にも参加していなかったレストさんは、最後まで渋っていたのだが、「今度ご飯でも奢ってくれたらそれでいいですよ」と行った処、アッサリと承諾してくれた。

今回の達成料を見ても、やはり尻尾の代金は破格だった事がわかった。

お陰で今の俺の持ち金は１９００００メルスを超えたのだ。

先日買った皮袋みたいな物を、もう少し買わないといけないかもしれない。

今回みたいに部位をしまう袋もこの先必要だろうし。

それに、そろそろキチンとした防具も用意しないといけないなぁ。

いつまでもこのジャケットじゃ心許ないし、それに着替えも買わないといけない。

思ったよりも出費がかさみそうだと、折角溜めたお金を崩す事に若干の戸惑いを覚える貧乏性というか、守銭奴めいた自分に対して、思わずため息が出てしまった。

## 第十六話「魔術講習と宗教勧誘？」

「二時より魔術講習を受講する方は、受付用紙を持ってこちらまでいらして下さい」

三人と別れてすぐ、受け付けの方から呼び出しがかかる。

参ったな、出来ればこの格好なんとかしたかったんだけど、時間もないしなぁ。

髪や顔にこびりついた返り血だけはギルドから借りたタオルで拭き取れはしたけど、それでもこんな格好で受講してもいいのかね？

「シュテル様、いらっしゃいませんか？　まもなく講習開始になります」

おっと、しょうがないこのまま行こう。

受け付けに行くと、用紙を発行してくれた時のエルフの女性とまた顔を合わせる事になったのだが、案の定顔を引きつらせていた。

ごめんなさい、今度から着替えやタオルを用意しますから。

通された部屋は階段状に木製の机が並び、一番下の段には教壇と、黒板のかわりだろうか？　ギルドウィンドウと同じ程度の大きさのいつもの魔具が設置されていた。

「学校の教室っていうのは、こんな感じなんだろうな」

学校という物に通ったことはないが、知識では知っていた為、思わずそんな事を呟いてしまう。

どうせならもっと若い姿で、あの二人の生徒と同じように学校に通うというのもよかったかもしれない。

他に入室する人間が居ないところ見ると、今回は俺の為だけにこの講習が開かれたのだろうか？

だとしたら、ちょっと悪い事をしたかな。

一番前の机へと向かい、備えつけられていたイスに座り講義担当の魔術師が来るのを待つ。

すると扉が開く音が聞こえ、そちらへと顔向けると――

「やぁお兄さん！　やっぱり来たね。今日か明日辺り来ると思ってたよ！」

入ってきたのは、この街に来た初日に職業診断を受けた時、魔術師ギルドから来ていた女の子だった。

肩口辺りで綺麗に整えられた、少女特有の柔らかそうな髪。

色は金色だが、レストさんよりも淡い、優しい光のような色。

瞳は気のせいだろうか？　一瞬深い闇を湛えたような漆黒だったのだが、次に気が付いた時には髪と同じ優しい金色になっていた。

そしてあの時は気が付かなかったが、この子の耳も尖っている。

と言う事はエルフなんだろうか？

見た目通りの年齢とは限らないし、敬語の方がいいだろう。

尤も、教えて貰う立場なのだから当然と言えば当然なのだが。

「ご無沙汰してます。今日の講義担当は貴方だったんですね」
「そうだよ、お兄さんみたいに最初から適正高い人なんて滅多に居ないからね。お兄さんが来たら私に回してくれるようにお願いしてたんだ」

グレンダルさんの時と一緒って訳か。
ギルドの代表としてあそこに見に来てたくらいだし、この子もギルド内での立場は高いのかもしれない。

「じゃあ早速始めよっか。って思ったんだけど。お兄さんちょっと臭うよ？　すっごい血の臭い」

うぐっ、実年齢はともあれ、小さい女の子に臭いって言われるのは結構来るものがあるな。
もちろん変な意味じゃない、俺にそんな趣味はない。

「すみません、ここに来る前にピグルの群を相手にして。それで時間がなくてこんな格好のままなんです」
「あー、そういえばさっきごたごたしてたけど、お兄さんだったんだ。やっぱり期待通りだよ、初日から色々やってるねぇ」

ニヤニヤと表情を歪めながら、楽しそうに言う少女。
今回のは不可抗力なんだけどなぁ。

「とりあえず、ちょっとこっち来てお兄さん」

言われた通り、彼女の近くまで歩み寄る。

「こういうの得意じゃないんだけど、でも少しはマシになるはずだ

よ」

そう言うと、彼女は手袋をつけた手のひらをこちらへと向けて、目を瞑った。

「むむむむ……」

そう目を瞑ったまま、可愛らしく唸りながら集中すると――

表面についていた血が、蒸気みたいな物に吸い取られて消えて行ったのだ。

「これも魔術なんですか？　凄いですね！」

「ふう、これは水魔術の操作の応用ね。こういう小さい操作とか私達エルフは苦手なんだよねー」

しみ込んでしまった所はシミになってしまったが、変色している以外は綺麗に掃除されている。

シミ程度ならカラーチェンジャーで色を消す事も出来るし、実質元通りになったような物だ。

そういえば、まだカラーチェンジャーをしっかり試してなかったな。

「有り難う御座いました。ええと……」

「そういえばまだ自己紹介してなかったよね。私はイーサ、見ての通りエルフ族だよ。こう見えても、たぶんお兄さんより年上なんだからね？」

やっぱりそうなのか、でも受け付けの女性は見た感じ大人っぽかったけど、この差はなんだろう。

「とは言っても、そもそも寿命が違うからね。人間換算だとお兄さんより年下って事になっちゃうかもだけど」

なるほど、そういう事だったのか。

「俺の名前はシュテルです。見た通りヒュマリアです」

「そっかそっか、シュテル君だね。じゃあ準備も出来たし、そろそろはじめよっか」

「じゃあまずは魔術の発動について説明するね」

「魔素と魔力って奴ですね？」

ギルドウィンドウと、先程の依頼でネイスから教わった事を言ってみる。

「ありゃ？　もしかして知ってた？　予習してくるなんて偉いねー先生見直しちゃったよ」

「はい、ギルドウィンドウと、知り合った魔術師の子に教わりました」

横槍をいれてしまって怒られてしまうかと思ったが、むしろ嬉しそうにウンウン頷いているイーサさん。

教壇の向こうから肩までしか出ていないのに、まるで教師のような仕草をする彼女が背伸びしている子供のようで、微笑ましくつい笑みがこぼれてしまう。

「今シュテル君が思ってる事は、手に取るようにわかるんだからね？　エルフの体の成長のタイミングは個人差があるの、だからしょうがないの！」

ちょっとむくれてしまった、怒らせてしまったかな？

「す、すみませんでした」

「大丈夫、そんなに怒ってないよ。よくある事だからさ、不本意だけど」

なんて照れたように笑って許してもらった。

「じゃあそうなると、属性の説明と、実際に魔術を撃ってもらう事になるんだけどー」

何やら言いよどんで、部屋の扉に目を向けている。

「実は神聖術の講習も一緒にする予定だったからさ、教団ギルドの方にも講義をして貰う予定だったんだけど、まだ来てないみたいなんだよね。先に実技訓練場に行くのもなんだし、ちょっと待ってようか。今の内に質問とかあったら言ってね」

なんと！　神聖術まで教えてくれるのか、至れり尽くせりだなぁ。

「じゃあ、診断所で出た結果に、属性が風と鉄とあったんですが、どういった物なんですか？」

「あ、そういえばシュテル君は属性二つ出たんだったね。風はまぁ、割とポピュラーな属性なんだけど、鉄っていうのは珍しいね。魔術

師ギルドに登録してる魔術師で鉄属性の人いないもん、この街じゃ」

属性については、予想通り風は一般的な属性らしい、そして鉄はどんな物か想像が出来なかった通り、希少な属性のようだ。

「属性はさ、基本属性の炎　水　風　土　の４つなんだけど、基本属性から派生する属性っていうのもあってね。水から派生する氷とか、風から派生する雷とか、こんな感じで色々あるんだけど、中には希少属性って言って、まったく関係ない属性もあるの」

なるほど、そういえばネイスは氷の事を派生属性と言っていたような気がする。

「で、シュテル君の鉄は特殊というか意見が別れてるというか、一般的には希少属性なんだけど最近じゃ『土の派生属性なんじゃないか？』って言われてるんだ。まっ、珍しい事には違いないから、余り気にしなくていいよ」

「そうなんですか。俺もどちらかと言うと、鉄は土の派生だと思いますね。金属ってある意味大地の恵みの結晶みたいな物だと思いますし」

「へー、シュテル君本当に魔術師向きみたいだね。おんなじこといってるんだよ、派生属性派の魔術師も」

その後は特に質問もなく、逆にイーサさんから質問されたり、それに四苦八苦したりして時間を過ごしていた。

「ねぇ、シュテル君って何処から来たの？」「本当にヒュマリアなの？」

「エルフの血とか混じってないの？」「彼女いる？」「じゃあ彼氏

は？」

まさに質問攻めだ、それに何か聞き捨てならない質問まで混じってるし。

若干疲れて来たところ、部屋の扉が開く音と共に高らかなよく通る声が聞こえてきた。

「さあ！　神聖術について学びましょう！　そしてこの奇跡の力の根源を、共に教団ギルドで探求していきましょう！」

振り返ると、高らかな宣誓と共に、診断所に来ていた教団ギルドの男性が、満面の笑みで此方を見つめていた。

## 第十六話「魔術講習と宗教勧誘？」（後書き）

感想、ご意見や指摘など、いつでも歓迎しております。

# 第十七話「魔術師の才能と神聖術の素晴らしさ」（前書き）

徐々にチート化していくシュテル君の話

## 第十七話「魔術師の才能と神聖術の素晴らしさ」

「待っていましたよ！　貴方が講習を受けに来るこの日を！　是非この奇跡に触れてみて下さい！　そしてもし、より深く学びたいのであれば、我が教団ギルドはいつでもあな「はいそこまで！」おや、イーサさんもいらっしゃったのですか」

まだ余り話したこともない人にこんな印象を持っていいのだろうか？　あえて一言で今の心を表すなら。

「うわぁ……」

たしか診断所の帰りでも名残惜しそうにしていて、グレンダルさんに諌められていたような。

「教団からわざわざ貴方が来るなんて、まだ諦めてないの？　しつこいと騎士ギルドのアイツの二の舞になるよ？」

「いえいえ、彼に冒険者をやめさせようなんて思ってはいませんよ、他にも方法はいくらでもあります！」

講義が再開されるのには時間が掛かりそうだ。

それから数分、やっと冷静になった教団ギルドから来た男性がこちらへとやって来て――

「自己紹介が遅れました。私は教団ギルドのオウル・キリュウスと申します。宜しければそちらのお名前も是非、ええ是非！」

「あ、えーとご丁寧にどうも。俺はシュテルと言います。冒険者ギ

ルドに所属しています」

家名がある、という事は貴族なんだろうか？
貴族が本気で勧誘して来るのなら、厄介な事になりそうだが。
まぁ厄介事の種なら、もう既に騎士ギルドの人間にあんな事言っちゃった訳だけど。

「まだ商業ギルドや職人ギルドには入っていないのですね？」

あ、そういえば戦闘以外のギルドは一つまでなら掛け持ち可能だったな。必ず入らなければいけないわけではないらしいけど、後で考えてみないといけないな。

「ええ、まだ入っていませんが」
「それならば！　是非我が教団ギルドなんていかがでしょう！　教団ギルドは戦闘以外にも治癒術師による病院のような仕事もしているのです！　そこで共に働く事も可能ですし、より本格的な神聖術を学ぶ事も出来ますよ！」
「もういい加減に諦めなよー。しつこいと嫌われて、入るどころか関わるのも止めるかもしれないよ？」

はい、その通りです。
まぁ神聖術を詳しく学べるって事は、戦闘ギルドに入らずに他のギルドのより強力な術を習得出来るって事だとは思うけど、この人なんか怖い、目が怖い。

「それはいけませんね、今日はこの辺りにしておきましょう。では講習を始めましょうか」

アッサリと引き下がった。イーサさんはこの人の扱いに慣れてい

るようだ。

「私は基本的な魔術についてはもう説明したよ。あとはそっちの基本を説明したら、実地に入ろうと思うんだけど」

「おや、少し遅れてしまったようですね私は。追っ手を撒くのに少々手間取ってしまいましたか」

今あの人なんて言った？　なんだか不安になってきたんだけど。

「では講義を始めます。先程彼女から魔術の説明を受けたと思いますが、神聖術も似たような物なのですよ。遥か古代では、神聖術も魔術も別れてはいなかったとされていますし」

それはウィンドウにも書いてあった。何か理由があってわけられたのだろうか？

「まあそんな昔の事なんてどうでもいいですよね？　簡単に言うと、取り入れた魔素を放出するのが魔術で、放出せずに体内で作用させるのが神聖術なんですよ。ただ一部の術は魔術と同じように外に放出するんですけどね」

なるほど、たしかに元は魔術の一種だという事がよくわかった。

「主な効果ですが、一言で言うと身体能力の向上ですね。より重い物を持ったり、戦いを有利に運ぶためだったりと。それに自分の基礎代謝を大幅に活性化させる事で、疲れや病を癒す事も出来るのです。嗚呼！　なんて素晴らしいのでしょうか神聖術！」

段々と興奮してきたみたいだ。でもたしかに、この術は凄い。

身体能力の向上なんて、戦闘においては使えるか使えないかで大

きく差が開くはずだ。

もしかしたら、あの時戦ったアルシャさんもその神聖術を使っていたのかもしれない。

「身体能力の向上と言っても、元となる自分の能力が低ければその恩恵もほとんど得られないのですけどね。尤も、貴方ならきっと素晴らしい効果を得られるでしょう！　それとどの程度向上するかは、神聖術その物の適正や熟練度にもよるのです！　鍛えれば鍛えるほど強くなる！　それがこの神聖術の素晴らしい所なのでぇぇぇぇぇぇす！！！！」

うわぁ。たしかに素晴らしいとは思うよ？　でもこのテンションには着いていけないなぁ。

「はいはい、わかったからとっとと次の実地訓練に入るよ。シュテル君もコイツの奇行に一々反応してたらキリがないよ？　無視して行こっか」

「はい、そうします」

冒険者ギルドと同じように、このギルドの裏にも訓練用の広場があった。

ただし冒険者ギルドのように野ざらしの人形やむき出しの地面ではなく、石畳を敷き詰められ、周囲の壁には何やら紋章を刻まれ光っている。

「うちの訓練所は騎士ギルドの次に豪華だからね、好きなだけ暴れても大丈夫だよ。壁にある紋章、あれは防壁の魔術と結界の魔術な

んだ」
「本当、魔術師ギルドはお金持ちで羨ましいです。私の所は万年金欠で、定期的に神聖騎士団を派遣しないとお金がたりなくなってしまうと言うのに」
「それは、基本的に無償で依頼を受けたり、無償で治療するからでしょー？　だったら少しはお金とったらいいのに」
「とんでもない！　無償の施し、いえ施しなんて立派な物ですらありません。我々が皆さんに奉仕するのは義務であり、生きがいなのです！　お金を取るなんてとんでもない！」

ううむ、色々と大変そうだなあ。
もしかしてしつこく勧誘するのにも、何か切羽詰った理由でもあるんだろうか？

「さってと！　じゃあ早速はじめよっか！　シュテル君魔術使ったことないんだよね？　発動具持ってないだろうから、これ貸してあげるね」

と渡されたのは、コシュアとネイスが使っていたような木製の杖だった。

「あの、発動の仕方もこういう道具の事もしらなかったんですけど」
「え？　てっきりこの辺のことまで分かってたと思ってたよ。ごめんごめん、でも本当に簡単だよ？　魔力と魔素があるってもう頭で理解してるなら、あとはイメージするだけだよ」

イメージ？　存在する事を頭で理解する事が必要って事か。

酸素の存在を意識して吸って吐くような気持ちで、意識を集中させる。

すると、身体の中に何か暖かい物が流れて込んで来るような感じがした。
そして今度は血液が酸素を運ぶように、またイメージして集中する。
今度はその暖かい物が身体を巡り、手に持った杖へと向って行ってるのが分かる。

「よーしよし！　じゃあそのまま杖から風が吹く所を想像して、軽くふってみてー！」

こちらの魔素の動きが分かるのか、イーサさんが指示をだしてくれる。そしてその通りに杖を軽く振って見ると――

ゴォォォォォォォ！！！！

目を開けると、杖の先から突風が吹いているのがわかる。
杖を持つ手に反動を受ける様子はないが、目の前の石畳に転がっていた砂埃や石つぶてが、まるで台風の真っ只中のような勢いで飛んで行く。

「おお！　成功しましたよ！　風です風！」

思わずはしゃいでしまったが、こんなに目に見えて実用的な魔術だとは思わなかったんだからそれも仕方ないだろう。
ヨザークさんは身体を扇ぐ程度だと言っていたので、正直風の魔術にそこまで期待はしていなかったのだ。

今度は風量を段々と抑えようと、杖へと向う流れを絞るようにイ

メージする。
　すると想像通り、段々と風が弱まり最後には無事止ませる事が出来た。
　上手く成功した事を報告しようと、横で控えていた二人へと顔を向けると――
「……え？」
「ほう、これはこれは」
　二人共、ポカンとした表情でこちらを見ている。
　思ったよりもうまくいった事に関心している、って訳でもなさそうだ。
「シュテル君シュテル君、やっぱり君エルフの血とか混ざってない？　ダークエルフとかハイエルフとか、先祖にいたりしない？」
「そうですねぇ、私もただのヒュマリアでここまで大規模な風を起こす魔術師など、ここ何十年も見た事がありませんね。もしかしたら彼みたいな、先祖返りかもしれません」
　ええと、結構凄い事した所為で、疑惑を向けられてるって事でいいんだろうか？
「ええと、すみません。心当たりがないのですが、もしかして今の風って結構凄かったりします？」
「凄いも何も、まだ”ワード”も効果も決めてない風で、あんな勢いになるなんてヒュマリアじゃ信じられないよ？」
　ありゃ、また知らない単語が出てきたぞ。

「すみません、ワードって？」
「あ、そうだったそうだった。まあ一旦今の事は忘れて続きいこっか。ワードっていうのは、どんな効果を出したいか自分でイメージして言葉にするの。それで、その言葉を唱えるか頭で念じながら、その効果をイメージしやすい動きで発動体を動かすんだ」
なるほど、じゃあコシュアもネイスも、地表から上へと向って発生させるから杖を振り上げていたのか。
「たとえば、風ならカマイタチを発生させて目標を切り裂くとか、風をまとって早く動くとか。中には武器に風を纏わせて切れ味をあげたり、矢を遠くまで飛ばす、なんて人もいるんだ。シュテル君は見た所放出系が得意みたいだから、たぶん細かい操作は苦手だと思うんだけど」
なるほど、操作の方が凡庸性が高くてよさそうだなあ、俺も出来ればいいのに。
ちょっと足の裏に風を纏うイメージをしてみる。
風を噴出させるような、ホバークラフトのような感じだ。
「あれ？　出来ましたよ？」
地表から僅かに浮いた感じがする、そのまま片足に力を込めて蹴り、前へと進む。
思ったよりも速度が出て、スイーっと滑ったと思ったら、そのまま２０メイル程勢いが衰えず、止め方も解らずに――
「うがあ！」
壁に衝突してしまった。

「あ、それ楽しそう。いいなー！　私も少し操作の練習しようかなー」

イーサさん、出来れば助けてください。起き上がろうにも滑って立ち上げれません。

## 第十八話「神聖術と剣士」

どうやら俺は、魔術師としても十分やっていける才能があるようだ。

放出系が得意な魔術師は大抵細かい操作が苦手との事だが、俺はその両方が十分出来ているらしい。

「操作の方は練習して慣れていくしかないけど、それでも初めてでこれなら上出来だね。　後は放出系のワードとイメージ、それと動きを組み合わせて自分だけの魔術を作っていけば完璧だね」

「でもあくまで俺は剣士ですから、杖を持ち歩くのはちょっと不便かもしれないなぁ」

「あーそっか。シュテル君はどれくらい剣が使えるの？　才能は確認済みだけど、実際にどこまで使えるかはわからないしさ。もしそんなに得意じゃないなら、いっその事魔術師としてやってくのも一つの手だよ？」

たしかに、これなら魔術師としても十分やっていけるだろう、しかしやはり俺は剣士だ。

「剣の扱いは自分でも中々の物だと自負してますから、剣を置く事は出来ませんねー」

するとそこへ、先程までの沈黙を破る高らかなオウルさんの声が――

「ふふふふふ！　でしたら、接近戦との相性の良い神聖術こそシュテルさんには相応しいようですね！　さあ、次は神聖術をお試し下さい！　魔術と同じように、今度は流れが発動体へと流動するのを

抑えるようにして、身体の中を駆け巡り自分を強化するようなイメージです！」

テンションはともかく、言ってる事は的を得ているオウルさん。
黙っていれば威厳もありそうだし、カッコいい司教様に見えるんだけどなぁ。

今度は杖をイーサさんに一旦預けて、先程と同じように集中する。
杖を手放したのは、先程勝手に杖へと向ったような気がした為だ。

身体全体へと暖かい物が廻り、力がみなぎってくる様な満たされた感覚。

「さあ、その状態で動いて見てください！」

言われた通り、軽く腕を振るってみる。
すると軽く力を入れたつもりが、全力で剣を振った時のような重さと速さを備えた動きになった。

それに気をよくして、先程風の操作で移動した時のように、軽く地面を蹴ってステップするかのように移動してみると――

「うわ、凄いですね！　さっきの風よりも早いです！　それにこんなに遠くまで！」

たったワンステップだけで、一気に五メイル程移動したのだ。それにあくまで自分の力加減で距離をかえられるので、風の操作よりも幾分楽だ。

「そうでしょうそうでしょう！　高く飛ぶことも、早く走ることも！　まさに自由自在です！　ただし余り長時間使用しますと、疲労が溜まって動けなくなってしまいますけどね」

ついつい楽しくなって、全力で走り回って見たり、空中でアクロバティックな動きをしてみたりして身体を慣らしていく。

剣を抜き放ち、剣の型を繰り出して見る。

いつも以上のキレのある動きに、一撃一撃の重みも増しているようだ。

これなら、そうそう敵に後れを取るような事もなさそうだ！

「これは楽しいですね！　今ならどんな敵だって倒せそうで――」

調子にのって動き続けていたら、急激な疲労感が襲ってきて、思わず膝をついてしまった。

「はは、言ったでしょう？　余り長時間続けると動けなくなると。しかし驚きましたね、神聖術の効果が高いのか、それとも貴方の地力が凄いのかはわかりませんが、あそこまで動けるとは思いませんでしたよ」

ううむ、思ったよりも疲れるぞこれは。筋肉痛とまではいかないが、それでも暫く動けそうにないくらい疲れている。

「しかし！　その疲労も自分で回復出来てしまうのがこの神聖術！　さあ、丁度いいですから、こちらも試して見ましょう！」

疲れてるから、今はその高すぎるテンションをどうにかしてください。

「では、今度は先程と同じように身体に魔素を廻らせつつ、身体の疲れがとれるようなイメージをして下さい。そうですね、お風呂に入った時や、寝る時のような感じでリラックスして」

「どれどれ」

今度は筋肉に溜まった乳酸が溶け出すような、じんわりと身体を温めるようなイメージをする。

すると、本当に疲れが徐々に取れ始めた。先程までの動くのも辛いような疲労ではなく、精々軽く走った程度の疲労へと変わる。

そしてそのまま更に、今度はほてった身体をクールダウンさせるようなイメージに切り替える。

すると今度こそ、本当に完全に疲れが取れた。

「おやおや？　シュテルさんはイメージが上手なようですね？　あっという間に元通りになってしまいましたね」

「そうみたいです、もうピンピンですよ！　でもこれだと実質永遠に強化出来るんじゃないですか？」

そう質問したのだが、イーサさんも側にやってきて、オウルさんと二人で苦笑いをしている。

「シュテル君、魔力は有限だよ？　使えばその分減っちゃうから、魔力がなくなったら魔素を取り込んでも何も出来なくなっちゃうよ。魔力は薬品か自然治癒で回復するしかないから、有限にきまってるでしょ？」

「あ、そういえばそうでした。魔力って増えたりしないんですかね

？」

「そうだね、一応長年魔術を使っていけば総量は増えていくよ。それでも急激に増えるわけじゃないからね、ペース配分考えて使うように慣れていくのが一番大事だよ」

「そうですね、ですがシュテルさんは総量も中々豊富なようですね。それこそエルフ族並に」

おっと、そこで最初に戻るのか。量が多いのは、カノンがこれまで生きてきた影響だとは思うんだけど、正直に言う訳にもいかないしなぁ。

「そうそうソレ！　シュテル君の髪ってダークエルフによく見られる銀色に近いからさ、最初教室に入った時少し探知の魔術かけてみたんだけど、弾かれちゃったんだよね。抗魔性の高さから言ってもヒュマリアとは思えないんだけど、実際心当たりもないみたいだし、うんっと大昔の祖先にいたのかもね」

なるほど、最初に瞳の色に違和感を感じたのは何か魔術を使っていた為か。

まてよ？　て事は、最初から目をつけられていたって事か？

「私としては、その美しい髪も、その面差しも含めて是非教団ギルドの星として、人々の注目を集めてもらいたかったんですけどね……お布施が増えるかもしれませんし」

それが本音か！　お布施で賄ってるギルドっていうのもどうなんだ。

「うーん、本当に心当たりがないんですよね。それより、俺の戦闘

スタイルはどうしましょう？　神聖術で強化して戦うっていうのがベターだと思うんですけど」
「えー！　折角あんなに魔術使えるんだし、もったいないよ！　杖で殴ればいいじゃん！」

杖で殴る……ルシがまさしくそれだったな。でもせっかく剣も持ってるのに。
あ、そういえば！

「でもイーサさんは杖なしで魔術使ってませんでしたか？　ほら、服の汚れをとってくれた時」
「あ、あれね。コレ、この手袋が発動体なんだよ。魔術媒体として優れている魔物の皮で作った一品なんだよ！」

杖型だけじゃないのか、ならいくらでもやりようはあると思うんだけど。

「じゃあ俺も手袋にして、それで剣を持てばいいんじゃないですか？」
「そう考える魔術師は結構多いんだけどね？　でも実際にそうすると、持ってる剣がダメになっちゃうんだよね。まあ片手で剣を持って、もう片方の手袋で、っていうのならやれない事もないけど」

そうか、そうなると剣に魔法があたってしまうか。

「じゃあ剣その物を発動媒体にすると言うのは？」
「それも何人もの武器職人が挑戦したよ。でも魔術伝導率が高い物質で剣なんて作ると、剣として使うとあっさり折れちゃうんだよね。丈夫な伝導率の高い物なんて、龍種の骨とか、アダマンタイトっていうのもあるけど、そんな貴重な物で武器を作ろうとしたら、その

お金で国ひとつ買えちゃうんだよねー」

たしか紅金貨の材料だったかな？　たしかにそれじゃ作れそうにないなぁ。

でも作り方次第で何とか成りそうな感じはするんだけどなぁ。

「我が教団でも、シュテルさんと同じ発想の元試行錯誤を繰り返しているのですが、一応完成させる事は出来ても、連続して使用するとなると耐久面に難があるのですよ、それに――」

「うん、剣術と魔術の同時運用っていう行為その物の難しさでしょ？　接近戦が得意な魔術師っていうのは余り居ないし、そもそもそんな戦い方しようとする人、滅多にいないからね」

なるほど、そういう事か。でもカノンは前いた世界でもそういう戦いをしていたし、俺自身のベースになった大昔のカノン。あの時点で既にそういう戦いが当たり前になってたような気がする。

これが世界の違いなんだろうか？　それとも魔術の発動までの手順の違いなのか。

「決めました。俺の今後の方針として、まずは発動具の作成と、魔術による戦闘に慣れる為に訓練しようと思います」

そう、まずは何にしても慣れないといけない。これから暫くは魔術主体で戦って、少しでも慣れる様にしよう。

「そっか、じゃあさっきの杖あげるよ。どうせ教材用の簡単な作りだし、そのまま使っていいよ」

木製の節くれだった杖を貰い、これからの戦い方をシュミレーションしようと思ったのだが――

「そういえば、鉄属性の魔術はためさないの？」

あ、すっかり忘れてた。

## 第十八話「神聖術と剣士」（後書き）

段々と剣士から遠ざかってきているシュテル君……

# 第十九話「鉄の魔術」

そうだったすっかり忘れてた。
風が思っていたよりも強力だった所為か、すっかりもう一つ属性があるという事が頭から抜け落ちていたようだ。

「鉄の場合はどうイメージすればいいんですか？　正直想像もつかないんですけど」
「う～ん、私も鉄の魔術なんて見たことないんだよね。土の派生って説もあるくらいだから、とりあえず土の魔術みたいに、地面から突き上げる感じでやってみたらいいんじゃない？　一般的なワードは”アースグレイブ”で、動きはこう、杖を振り上げる感じで」

なるほど、これはコシュアが使っていた魔術だな。
一度実物を見たことがあるから、イメージも容易だ。

「では、”アースグレイブ！”」

木製の杖を片手で持ち、剣で切り上げるように振り上げる。
しかし――

「あれ？　うまくいきませんでしたよイーサさん」
「それは当たり前でしょー！　土じゃなくて鉄なんだから、鉄のイメージで、ワードもアレンジしなくちゃ！」

あ、そうか。コシュアの魔術のまんまのイメージじゃうまくいく訳ないか。
しかしワードのアレンジか、なんだか恥ずかしいなぁ。
頭の中で念じてもいいとの事だし、頭の中だけでやってみよう。

「じゃあ改めまして。（アイアングレイブ！）」

頭の中で、アース（土）の部分をアイアン（鉄）に変えて詠唱する。

すると――

「慣れない内は念じるよりも、詠唱したほうがうまくいくよ？　こんなんじゃ役に立たないよ」

と、苦笑いをしているイーサさん。その視線の先を見ると。

二メイルと短い距離を置いて、地面から赤褐色の錆色の細い、槍の先のような物が生えていた。

「うっ、これじゃ全然ダメダメですね。精々踏んだら痛いって程度かな？」

近づいて触れてみても、脆く、刃先と思しき先端もすぐに崩壊してしまった。

刃先といっても実際には形だけで、刃なんてありもしないのだが。

「シュテルさん、貴方の心を！　そしてイメージを言葉に乗せるのです！　そして高らかに――「はい少し静にしようねー集中出来なくなるから」――申し訳ありません」

ナイスキャンセルだイーサさん。

「では、今度こそ！　”アイアングレイブ！”」

今度は3メイル程離れた地点から先程と同じ錆色だが、高さ1.5メイル程の騎乗槍のような円錐のトゲが地面から飛び出した。

「おー！　おめでとうシュテル君！　これは一応操作じゃなくて、召喚系になるのかな？　ここの石畳が変質した様子もないし」

召喚系……たしかに操作でも放出でもないよなこれ。

「ふむ、たしかにそのようですね。ですがシュテルさん、”アイアン”とはなんでしょうか？　この錆色の物の名前でしょうか？　造形も発動速度も申し分ないと思いますが、石と同じ程度の硬度だと思うのですが」

召喚した鉄の槍は、今度こそ崩壊する事なく留まったのだが、触って見るとたしかにそこまで純度の高い鉄ではないようだ。

それにアイアンとは鉄の事なのだが、ここでは通じないようだし。

「えーと、俺の住んでたところでは、鉄分の多い鉱石の事をそう呼んでいたんです。じゃあ今度はもっと別なイメージでやってみますね」

金属の名前か。たしかヨザークさんが言っていた、クロムタイトに鉄を混ぜた物。黒鉄貨だったかな？　これの材質名を聞いてみよう。

「すみません。黒鉄貨の材質の名前って何て言うんですか？　それで試して見ようと思うんですが」

「えーと、クロムタイトの合金だね。一般的にはスティルハウムっ

て言うね。シュテル君の名前に似てると思わない？」

あ、たしかに似てる。

「でも、多少とは言えクロムを召喚なんて想像できないよ、結構希少だよ？」

「そういえば、この召喚したのっていつまでも残るんですか？」

もし残るなら、かなり便利だと思ったのだが――

「残念でした。これは魔素で構成された一時的な物だよ。時間が経つか自分で念じたら消えちゃうよ」

ですよね、下手したら億万長者になりかねないもんなぁ消えなかったら。

じゃあ改めてワードを考えよう。

想像するのはさっきのような槍じゃなく、黒い鉄、鋭い鉄。そう、例えるならあの刀のように……。

あの鋭い刃による斬撃を。もしこれが成功したら大幅な戦力アップだ。

脳裏に刀を振るう動きをイメージして、考えたワードと共に杖を振るう。

「”スティルスレイ”」

杖を両手で持ち、まるで刀で切り上げるように、手首のスナップを利かせて踏み込みながら杖を振るう。

すると、今度は杖のすぐ先に、黒光りする薄く鋭い鉄が現れ、杖の動きに追随するかのように疾走した。

「やった！　成功した！」

これなら魔術でも接近戦も出来そうだ！　頭の中でこの先どう発展させて行くか、どう戦うかが急速に構築されて行く。

自分の成長を実感し、新たな力を得たという感覚が強まっていく。

先程の神聖術や、風魔術の時よりも嬉しい。

だって自分だけのオリジナルの技なのだから、嬉しくないはずがない。

「どうでしたか！？　今のは完璧じゃありませんでしたか！？」

思わず興奮してイーサさんへと近寄るが、今度も最初に風を起こした時のような様子で、二人が思案顔でこちらを見ている。

「凄い、今の魔術だよね？　凄く速くて、一瞬何かが光ったくらいしかわからなかったよ」

「今のは、まるで剣による一閃のようでしたね。シュテルさんには先程から驚かされてばかりです」

おお、良い感触だ！

「ちょっと向こうにある的に向ってやって見てよシュテル君！　実際の威力も見てみないと！」

「わかりました、じゃあちょっと」

さっきの風魔術による移動で、４０メイル程はなれた的の近くへ

と移動する。
横着してるわけじゃなく、あくまで慣れの為なので勘違いしないで欲しい。

今度は無事に、激突することもなく移動する事が出来た。

「じゃあ早速やってみますね。〝スティルスレイ！〟」

すると、杖の先が的を掠めると、間髪入れずに黒い光が走り、的を一刀両断にした。
若干杖の動きから刃が召喚されるまでタイムラグがあるが、これはこれで使えると思う。

「うん、これは完全に実用可能レベルの魔術だね。これってどういうイメージでやったの？」
「ええと、薄く鋭い剣で、相手を切り裂くような、そんな感じですかね」
「魔術のイメージで接近戦の想像するんだ……面白いね。これは鉄属性の新魔術として、魔術師ギルドに登録する気はない？　一応優秀な新魔術を登録してくれたら、謝礼としてお金が入ってくるんだけど」

おお、特許みたいな物かな？　貰える物はもらっておこう！

「ええ、構いませんよ。どうぞ登録して下さい」
「本当？　じゃあ後で報告するね。よーし、じゃあ魔術講習はここまでって事でいいかな？」
「そうですね、私ももう基本は教えましたし、これでお開きという事で」

魔術講習はこれで終わりのようだ。とても有意義な時間だったなぁ。

これから先、どんどん新しい戦い方が出来る、どんどん強くなれる。

そんな気持ちで心が満たされ、この世界での生活がより楽しくなる予感に胸を躍らせる俺だった。

「あ、でもさっきの魔術、後日魔術師評議会で発表してもらうからね」

なんだろう、職業診断所の時のような騒ぎになりそうな気がする。

## 第二十話「職人通りでショッピング」（前書き）

暫く日常的な話が続きます。
考えてみれば、まだこの街に着てから一日しかたってないんですよね彼。

## 第二十話「職人通りでショッピング」

講習を終え、イーサさんに服などの日用品や発動体の製作をしている通りの場所を教えて貰った。

ガルアーク通りとガルエルム通りを結ぶ、一回り小さい”アークエルム職人通り”と呼ばれる場所だ。

そこで替えの下着や普段着を数点購入する予定だ。

それに冒険用の装備を常に着ているというのも余り宜しくないだろう。今夜だって食事に行くのに、血の臭いが染み付いた服では失礼だ。

そして職人通りと言うだけあって、一般の武具店に並ぶよりも高品質の装備も手に入るらしいが、大抵はオーダーメイドや冒険者などから仕入れた特殊な素材で作る物が多く、今の俺の持ち金ではどうにもならないだろう。

それでも、今後の課題である発動体と剣の融合のヒントが転がってるかもしれないので、今度時間がある時に通りに点在する工房にも顔を出して見るつもりだ。

アークエルム通りは西に伸びるガルエルム通りから、ラスエル満腹通りへと伸びる道と対面していた。

職人の通りだけあって、用のある人間はいずれもどこかのギルドへ所属しているであろう魔術師や、ラスエル通りで見かける冒険者や傭兵よりも質のよさそうな武具を装備している人間が多かった。

自分のようないかにも駆け出しといった風貌でここを歩くのが、なんだか場違いで少し居心地が悪い。
それでも、服の注文で来る人間だっているはずなのだし、余り目立ってはいないんだろうけど。

通りからは金を打つ音や、時折爆発音のような物まで聞こえてくる。
建物の煙突から煙があがってるのは鍛冶ギルドに所属してる人の工房だろう。
ひとまず俺は着替えや新しい服を求め、武具工房ではないであろう建物を探して歩く。

少し歩くと、ショーウィンドウにマネキンのような木製の人形が置かれ、それに服を着させているバニテイルの女性を見つけ声をかける。

「すみません、ここって服を取り扱ってお店であっていますか？」

すると女性は作業を一旦中断して、こちらへ振り向いたのだが――

「はい、ここは服の修繕や買取、それと販売もしていますよ。あら？　今朝一緒にご飯を食べた剣士さんではありませんか？」

正直顔は余り覚えていなかったのだが、恐らく間違いないだろう。
今朝相席したバニテイルの姉弟の姉のほうだった。

「ああ、今朝はどうも。ちょっと普段着や着替えなどを購入しようとお店を探していた所だったんですよ。もしかして今は準備中でしたか？」
「いえ、ただ展示してる服を交換しようと思いまして。開店中です

ので先に入って見ていて下さって結構ですよ」

お言葉に甘え先に店へと入る。中は二階へと続く階段が中央に存在し、建物のスペースを余す事なく使っているようだ。

壁には展示用に見やすく広げられた服が数点かけられており、それがその付近にどんな種類の服を売っているのかの目印のようだった。

「だけど、さすがにこれはないだろう……」

目印とはいえ、さすがに壁に女性物の下着を堂々と展示してるのは、なんというか、ねぇ？

しかもかなり扇情的というか、色っぽいというか。まあ簡単に言うとエロい下着って事なんだけど。

ひとまずそこから目を離し、目当ての品のある場所を探すのだが――

「お待たせしました。男性向けの商品は二階の方になっていますよ」

外にいた店員が戻って来たようだ。そして一階は女性用の商品しかないのか、どうりで見つからないわけだ。

「そうでしたか、ありがとうございます」

階段を上ると、今度は一変して無骨なコートや頑丈そうなベストに、旅で役立ちそうなマントなどが展示されていた。

ひとまず下着類を見つけ、数枚ほど手に取ろうと思ったのだが。

「あれ？　これってもしかして共通規格なのかな？」

全ての商品にタグがついてあり、そこに数字が書いてあった。
手に持って比べて見ると、数字が大きい程サイズが大きいようだった。

まぁこれだけ衣類の技術が発展しているのだし、共通規格が広まっていても不思議ではないかな。
これならオーダーメイドで作ってもらうなんて手間もかからないし、すぐに買って帰れるので正直助かった。
シャツを三枚とトランクスタイプのパンツを三枚見繕い、近くに置いてあった買い物に使うためのカゴにいれる。

「さて、あとは普段着とか買わないといけないなぁ」

今着てる服はどれも黒系統で、正直よごれも目立ちにくく好都合ではあるのだが、これはきっと無意識にカノンの好みが反映されて着せられたんだろうな、と予想した。

「俺は出来れば、もう少し明るい服がいいなぁ」

カラーチェンジャーで色をかえればいいのだが、この服を見慣れた人からすれば、急に色がかわったと思われ不思議がられるかもしれない。

「何かお探しですか？」

一人悶々と悩んでいた所に、先程の店員さんがやって来た。丁度いいので俺の求めている服のおおまかなイメージを伝える。

「それでしたら、中古になってしまいますが、何点か御座いますよ。中古と言いましても状態のいい物をさらに修繕して、染め直し等もしていますので、ご満足頂けるかと思います」

案内されたコーナーで、やっと気に入った品物を見つけた。

俺が欲しかったのは、七部丈程のコート状の服だ。

今見つけた服は、配色は基本は白で襟が薄い水色。留め具には丈夫そうな白い木製のボタンが綺麗に磨かれてとりつけられていた。

ただ、コートにしては少々生地が薄めで、身体のラインに沿った作りだった。

留め具もセンターではなく、少しサイドよりに付けてある。

まぁ動きやすくていいとは思うけど。

「そちらは、服と言うよりもクロースアーマーですね。その上から胸当てや肘当て、中にはショルダーアーマーをつける方もいますよ。ですが単品ですと少々丈夫な服でしかありませんから、当店でも取り扱っております」

なるほど、どうりで他の服に比べて作りがしっかりしていたのか。

値段の方は中古とは言っても他の商品に比べてやや割高だったが、それでも新品でこういう服を買おうとしたらもっと高くなりそうだし、これに決める事にした。

「じゃあこれを買います。サイズはたぶん大丈夫だと思うんですが、試着とか出来ませんか？」

「可能ですよ。そちらのスペースでお着替え下さい。細部の調整が必要かもしれませんし」

カーテンで区切られたボックス状の個室へと入り、ベストを脱い

で着替える。
まるで俺の為に仕立てられたかのようなフィット感だった。
店員さんも調整が必要ない程の仕上がり具合に驚いていた。

「これは私の兄が昔使っていたクロースアーマーなんですよ。アーマー部分は武具店の方に売却してしまったので手元にはないのですが」
「そうだったんですか。お兄さんも冒険者かなにかなんですか？」
「はい。ですが兄はもういませんので、こうして装備を全て処分したのです」

うっ、地雷踏んだかこれは？　遺品って奴だろうか？　いやまぁそれが嫌だとは思わないけど。

「いいんですか？　思い出やら何やらあるでしょうに」
「いいんですよ、着られなくなって捨てられるより、また剣士さんのような人に着て貰われた方がその服も喜びます」

その後、この服の他にも何点か、無難な普段着用のカッターシャツや布製のベスト、それに先程の服に色を合わせた薄い青色のカーゴパンツを購入した。
どの服もポケットが多目についた物を選んだのだが、きっと役に立ってくれるだろう。

代金は全てあわせて２５５００メルスだった。思っていたよりも安く済んだのは、偏に共通規格が浸透していたお陰だろうか。
それに先程の店も随分と良い店のようだ。商品をカゴにいれ、清算の為一階へと戻ると、女性客が所狭しと服を物色していた。
きっと人気の店なのだろう。尤も、男性客は俺しかいなかったのだが。

雑貨を扱う店に途中でより、生活に必要になりそうな物を数点と、それを入れるおけるリュックサックを買い、一先ず休息の鞘に戻る事にした。

## 第二十話「職人通りでショッピング」（後書き）

感想やご指摘、ご意見等お気軽にお申し付け下さい。

## 第二十一話「刻まれた歴史」

休息の鞘に戻った俺は、一先ず自分の持ち金の内十万メルスを先程買った小さめの小箱に移し、刀と一緒にロッカーにしまい鍵をかけた。

服の汚れは粗方落として貰ったものの、しっかり洗濯をしないといけないだろうと思い管理人のオーリエさんに聞いたところ、服は風呂に入る時にカゴにいれて渡せば洗濯してもらえるらしい。

俺は着替え用の下着と先程買ったカッターシャツとカーゴパンツを持って風呂場へと向った。

「これこれ、風呂は今の時間は使えんぞい。身体を洗いたいなら裏の井戸を使ってくれい」

風呂場へと向ったところ掃除のおじさん、というよりはおじいさんに怒られてしまった。

そういえば風呂は朝五時から午前十時までで、午後は夜八時からだったなぁ。血の匂いがついてるだろうし、髪も若干ガサついてきているので、言われた通り裏手の井戸へと向う。

今は四月ということだが、そこまで気温は低くなく、服を脱いでもさほど寒いとは感じなかった。

建物の裏手には井戸が複数用意されてあり、身体を洗う為の流しのような石造りのスペースが幾つも点在していた。

そこの用意されていたカゴに服を脱ぎ入れ、汲み上げた水で身体を流し始める。

井戸は簡単な汲み上げ式で、滑車を使ってロープで引き上げる構

造だった。生活に密着した技術が余り発達していないこの世界では、もしかしたらポンプ式の汲み上げ機構がないのかもしれない。

井戸の水はやはり冷たく、いくら気温が低くなくとも中々堪える物がある。

水では固まった血などは中々落ちてくれないので、自分で買ったタオルで身体を強く擦る。

強く擦る摩擦で少しでも寒さを和らげたい、なんて思惑もあるのだが、そんな効果は現れてはくれなかった。

全身の毛穴が縮むような思いをしつつも、なんとか身体を擦り終える事が出来た。

……洗いながら、改めて自分の身体を良く見る。

そして、その刻まれた傷の数に今更ながら気が付いた。

カノンは『自分の身体でいたい』とあの場所で願った。という事は、これはカノンが生きてきた証、戦いの歴史なのだろう。

普通の人間の一生ではつかないであろう傷の量に思わず顔をしかめてしまうが、これは俺が使わせてもらっている大切な身体なのだし、この傷一つ一つが勲章のような物だろうと考えを改める。

きっと、これまで何度も死ぬような目に遭ってきたのだろう。心を抉られるような事だって、きっと有っただろう。

俺には余り深い所の記憶を覗く事は出来ない、それでも心の底にある何か強い思いを感じ取ることが出来る。

それが何なのかは分からない、それでもこの身体に、心に恥じない生き方を出来たらいい、そう思った。

しかし、洗っていた気が付いたのだが、左腕だけは一切の傷がなく、生まれたての赤ん坊のように綺麗な肌をしていた。とは言っても、筋肉の量や骨格はれっきとした戦士のソレであるのだが。

『人としての身体』というあの白い部屋での言葉を思い出し、これは新たに授けられた腕なのだろうと察したが、一体どうしてこの腕だけが人ではなくなったのかは、最後まで思い出す事が出来なかった。

髪も洗い、タオルで水気を良くふき取り、パンツを履いた所で誰かの気配を感じた。

振り返るとそこには、先日の一件以来部屋へ戻っていなかったアルヴァスの姿がある。

一瞬俺を見て、怒りとも驚きとも、そして戸惑いとも取れる奇妙な表情をし、そして何も言わずに通り過ぎて行く。

彼も身体を洗いに来たのだろうか？　部屋へと戻ってきてないと言うし、身体も洗えていなかったのかもしれない。

今はきっと何も言わないほうが良いだろうと思い、俺は足早に建物内へと戻っていった。

オーリエさんに脱いだ服とタオルを預け、部屋へと戻る。アルヴァスが戻る前に俺も用を済ませて外へ出てしまうつもりだ。

俺がこんな風に気を使うのも変な感じだけど、今思えば俺も少々熱くなりすぎていたかもしれない。

カッターシャツの上から先程のクロースアーマーを着ようと思ったのだが、その前にカラーチェンジャーを試すことにした。

白と青の配色だったが、折角なのでもう少し青の割合を増やそうと思ったのだ。

カラーチェンジャーの画面に服の箇所名が表示され、その部分に現在の色が表示されている。

俺はその項目から裾の部分を選択し、襟と同じ薄い青へと変更する。裾の部分は裂けたりしないようにと、頑丈の裏布が当てられており、布を折り返すように細かく頑丈に縫われていたので、その部分を青くした。

それと同じように、袖の裾やボタンの留め合わせの周りも青く変更して行く。まるで青で服の縁取りをしているかのようだ。

最後の仕上げに付いているボタンの色を、ワンポイントとして金色に近い黄色へと変えていった。

綺麗に磨き上げられたボタンは、まるで金のように輝き、アクセントとしては申し分のない色合いだ。

将来的にはこの服に合うプレストプレートやガントレット等を上から着込み、戦闘用に使おうと思う。

部屋に備え付けられていた時計はもう五時を回っているので、少々早いが部屋を出る事にする。

買った財布に、先程しまった金の残りの五万メルス程を入れ、念のため剣を腰に差し部屋を後にした。

休息の鞘の敷地内から外へと出たはいいが、さすがにこの時間ではまだスフィアは家へ戻っていないだろうと思い、一先ず冒険者ギルドへと向う。新規の依頼が入っているかもしれないからだ。

ギルド内は相変わらず人で溢れている。夜になる前に軽い依頼をもう少し受けようと思って来る人間が多いそうだ。

ギルドは基本的に二十四時間営業だが、やはり人が少ない時間はあるようで、昼前にはほとんど人がいないらしい。

皆朝の内に今日の仕事を見つけ、夜までかかる人もいれば、昼頃に終わり昼食を摂ってからまた仕事を請けに来る人が多いと言う。

ギルドウィンドウで依頼を見ていても新規の依頼は殆どなく、Ｄランクで短時間で終わる依頼は存在していなかった。

とはいっても、もう予定はないのだし時間のかかる依頼でも問題ないと気づき、改めて依頼を眺める。

『フランムパインの実５キロ採取』『ヘビーモウラス五頭の討伐、並び肉１０キロ納品』

『ガルラス街道に出現したヘビーフレイルの討伐』

今見つけることが出来た新規依頼はこの三つだった。

このフランムパインと言うのはなんだろうか？　パインの実というだけあって食べ物だと思うんだけど。

ヘビーモウラス肉の１０キロはさすがに運ぶのが大変そうだけど、このパインなら二人でもなんとかなりそうだ。

そして最後の、ヘビーフレイルの討伐と言うのもいいかもしれな

い。後でスフィアと一緒に考えてみよう。

時間はまだ六時にもならないので、少し時間を潰そうと休憩スペースに座り、剣の手入れを始める。

血や脂は身体を洗うときに一緒に流したのだが、それでも念のため、磨くための皮製の道具や研磨剤を取り出し、手入れを始める。

皮を何枚も重ねて作られた固い束子のような道具に、ビンに入った研磨剤を垂らす。液体とも、細かい粒子とも感じられる不思議な感触だった。

その皮束子で刀身をゆっくりとこすり上げていく。サビなどはないし刃こぼれもしてはいないのだが、それでも僅かに残っている汚れが原因で駄目になってしまうかもしれないので丁寧に磨いていく。

邪魔にならないように奥の席で黙々と作業を続けながら辺りを見ると、俺と同じように装備の点検をしている人間がチラホラと目に入る。

「あれ？　ダルベストさんじゃないですか？」

点検をしていた人の中に見知った顔を発見し、声を掛ける。

ダルベストさんは自分の斧を整備していたようで、黒光りする斧はその刃の部分の色が薄くなり、長年磨ぎ使われていた事を物語っている。

今は丁度グリップに巻かれている皮ひもを取り替えている所だったようだ。

「お、おめぇか。お前もこれから今日最後の依頼でも受けるのか？

俺はこれからちょっと野営地まで護衛の任務で今日は帰らねぇが」
「いえ、俺は今日の夜に予定が入っていますので、明日受ける依頼に丁度いい物はないか探していた所ですよ」

思っていたよりも仕事熱心なダルベストさん。それに武器を大事に扱っているのがよくわかる。
伊達にCランクにはなっていないという事だろう。でもいっそランクを上げて、もっと見入りの良い仕事を請ければいいと思うんだけど。

「中々熱心じゃねぇか。今日はどんな仕事したんだ？」
「今日はピグルの群の討伐ですね。とは言っても本来は三頭の討伐だったんですが、偶然群に当たってしまって」
「ははは、おめぇも運が悪いな。それでも無事達成出来たんだろ？その様子じゃあ」
「ええ、その後魔術の講習も受けましたし、充実した一日でしたよ」

その後も暫く会話を続け、最後にダルベストさんに「今後も頑張れや」と激励の言葉を貰い、そこで別れた。
彼は本当は面倒見の良い人なんだろうな、と評価を改めて、また一人イスに座り時間を潰す事にした。

## 第二十二話「武具の良し悪し、容姿の良し悪し」

剣の整備も終え、改めてギルド内の眺める。
そしてこの世界には、様々な種族が居ることを改めて思い知らされた。

スフィアのような耳を持つ人。これはきっとキャトネイルと呼ばれる人達だろう。スフィアが良く間違えられると言っていたはずだ。
他にも、人の耳と同じ位置からフサフサした垂れた耳が生えてる人や、バニテイルと同じように頭の上に丸い大きな耳が生えてる種族までいる。

そうして眺めていると、バニテイルと丸い大きな耳、そしてスフィアのような耳の三人組みの女性が、何やら会話をしながら歩いているのが見えてきた。

「今日は私はここで抜けるね～」
「何？　もう一稼ぎしとかないの？　珍しいわね守銭奴のアンタが」
「私には分かる。スフィアはきっとこれからデートなのだ」
「ち、ちがうよ～！　ちょっと食事に行くだけだよ～！」

ああ、本当にスフィアだったようだ。という事は他の二人は今日一緒に依頼を受けた仲間だろうか？
折角だし声を掛けてみようか。

「こんばんは、お三方。そしてお疲れ様」

後ろから声を掛けられた三人は、一瞬自分達に声を掛けられたと

は思わなかったのか、キョトンとしていたのだが。

「あ、シュテルだ！　やっほ～今依頼終わった所だよ～」

「え、誰？　スフィアの知り合い？」

「私には分かる。彼がスフィアのデートの相手なのだ……」

丸耳のこの子は、なんだか変わった子だなぁ。髪と耳が灰色で、こう言っては失礼かもしれないが、ネズミに似ているような気がする。あくまで色の話であって、彼女自身は小柄でかわいらしいのだが。

もう一人のバニテイルの子は服屋の店員さんとは違い、耳の毛が黒色で、ややつり目気味でハキハキとした感じの喋り方をする子だ。

「うん、私の友達だよ。今晩のご飯一緒に食べる約束してたんだ～」

「へぇ、随分良い男じゃない？　何時の間に捕まえたのよ」

「この辺りでは見かけたことはなかった。きっと街の外から来たはず」

三人はとても仲がいいようだ。いつも一緒に仕事をしているんだろう。それにスフィアも含め三人とも中々に人の目を引く容姿をしている。

今だって周りの冒険者達がこちらにチラチラと視線を送ってくる。

「正解。俺は昨日この街に来て冒険者になったんだよ。スフィアには旅の途中で会って、ここの事を教えて貰ったりとよくして貰ってたんだ」

「何？　じゃあ新人ってわけなんだ。こんな後輩が出来たなんて先輩冒険者としては嬉しい限りね。スフィア、独り占めなんてしないで私達にも指導させなさいよ、色々とね？」

「私には分かる、彼は私達なんかより強い」

この丸耳の子、本当に変わってるなぁ、しかもさっきから妙に鋭いというかなんというか。まぁデートっていうのは残念ながらハズレだけど。

「そうだよ～シュテルは初期判定でDランクを叩き出したエリート中のエリートなんだから！」

あ、コラ。そんな大きな声で言うんじゃ……！

「うそ!?　たしかに雰囲気あるけど、本当に強いの？」

「そうだよー！　実際に戦ってる所も見たもん。ヘビーモウラスなんて一撃で沈めちゃったし！」

う～ん、あれは急所を突けば誰でも簡単に倒せそうな物だけどなぁ。まっすぐ走るだけだし。

「やっぱり強い。今日の私のカンはいつもより冴え渡ってるわ」

この子はこの子で「うふふふうふふふ」なんて不気味に笑い満足そうだ。ちょっと怖いぞ。

「というわけで、私は今日はここでお先に上がらせて貰うね～。二人はどうするの？」

「そうね、ちょっと外の畑の修繕の依頼でも受けようかしら。なんでも今日、ピグルの群が討伐されたらしくて、本格的な復旧が開始されたそうよ」

「この仕事は晩御飯も出る。私には分かる、今日はきっとピグルの肉も出されるのだと」

凄い、この子超能力者か何かか？　たしかに大量の肉を農家の人に分けたよ俺。

「へ～やっぱりこの辺りに群が来てたんだ！　この辺りにイセリアルホークが来てたから、たぶん逃げてきたんだろうね」

ああ、そういえばそんな依頼があったような気がする。じゃあのピグル達は元の住処から逃げて来たって事だったのか。

別に同情するわけではないけどさ、こっちに被害が出てたのだし。

「じゃあ私達はここで失礼するわね。シュテルだっけ？　今度一緒に仕事でもしてみましょう」

「私も優秀な前衛の知り合いが増えるのは歓迎。私の為に犠牲になるのだ……」

「あ、ああ。是非一緒に」

「なんだか面白い友達だったね」

「でしょー？　ってあ！　あの二人自分の名前言ってない！　まあ明日にでも一緒に仕事請けてみよっか？　その時改めて紹介するから」

今は二人と別れ、スフィアの実家である武具屋『レオフィス武具店』へと向っている。

店の名前を聞いたとき「名前そのまんまだなぁ、レオフィスさん

らしいけど」と感想を述べた所「それ、お父さんの前で言っちゃ駄目だからね？　本人も内心気にしてるんだから」との事。

ガルアーク通り側の職人通り入り口のすぐ近く。そこがレオフィスさんの店であり、スフィアの実家がある場所だった。

店構えは立派で、看板には鉄で出来た剣と斧のシンボルが飾られてある。

見た所店は三階建てで、生活スペースはこの建物とは別に奥に家があるそうだ。

中々繁盛しているようで、周りの店よりも明らかに規模が大きい、そして店の中には今もお客がひしめいている。

「ただいま～今帰ったよ～」

家ではなく、店の入り口から堂々と入っていくスフィア。常連客もこれがいつもの光景だと分かっているのか「おう、お帰りお嬢」なんて気楽に声をかけている。

「おうスフィア、戻ったか。お？　後ろにいるのはシュテルじゃねぇか。なんだか服装が変わって印象が違って見えるな」

「こんばんはレオフィスさん。診断所では大変な目に遭いましたよ？」

「くくっ、そうだろうそうだろう？　俺も見に行きたかったくらいだぜ。今日は武具の見繕いにでも来たのか？」

「いえ、今日は「今からシュテルとデートに行くんだよお父さん！」え、ちょスフィア！」

やられた。またよこの展開。どうせこの次は……。

「そうか。シュテルよ、どうやらお前は本当に前から俺の娘を狙っ

ていたみてぇだな……」

そう、これだ。

「違います！　今朝一緒に依頼を受ける予定でしたが、こちらの予定でその約束を守ることが出来なかったのでその埋め合わせに食事に行くだけです！」

「なんだ、なら早いとこ仕度をした方がいいぞスフィア、そろそろ店が込む時間だ」

「はいはーい。でも汗流したりするから少しかかるかも。シュテルはうちの店でも見学しておいて～」

スフィアを見送り、レオフィスさんと対面する。

「レオフィスさん半分わかっててスフィアの冗談に乗ってますよね？　結構心臓に悪いんですけど」

「まぁな、振られたら乗るのが礼儀ってもんだろう。しかし中々質の良いクロースアーマーだな。どこぞの私兵団や騎士だって言っても信じちまいそうだ。何ならそれに合う様な鎧でも買ってくか？」

やはりこれは質が良いようだ。それに見栄えも中々いいみたいだ。まぁ中身が良いから何を着ても似合う……とまでは言わないけど、俺の容姿はそこそこ見られる物のようだし。

「そうですね、この服に合って、尚且つ防御力が高い物となると、胸当て（ブレストプレート）タイプの鎧と、腕を全て覆う小手やアームガードですかね？　今は持ち合わせがありませんが、どんな物があるか見せてもらっても？」

「ああ、好きに見ていってくれ。鎧はこの階で、二階が剣各種で三

階が冒険に必要な薬やら道具やらを取り扱っている」

とりあえず胸当てを物色し始める。色は銀に近い鉄色から、段々と黒ずんで行くにつれて値段が高くなっている。

棚の文字を見ると”スティルシリーズ”とある。黒鉄貨と同じ材質のようだ。

「黒い程クロムタイトの比率が高いんだ。硬度もそれにつれて上がる。他にも何種類かあるが、大抵はスティルハウム製だな」

「なるほど。出来れば銀や青い素材の物が欲しいところなんですが、ありますか？」

「おいおい、銀はともかく青なんてあるわけないだろ？　ムーンダストの武具なんて一般の店に出回ったりしねぇぞ」

ああ、青い金属と言ったわけではなかったのだけど、そう取られてしまったようだ。

「銀ならあるんですか？　どこにありますか？」

「あるにはあるが、結構高いぞ？　シルヴァタイトと魔鉱石の合金で作った魔術付加がされた一品だ。装飾にはさらに月光石を使っている。半分展示用に仕入れたが、高すぎて誰も買いやしねぇ」

そう言われ、専用のガラスケースが置いてある棚へと目を向ける。そこには見事としか言いようのない、白銀に輝く胸当てが飾られてある。あのアルシャと言う神聖騎士が身に着けていたのも、こんな感じの軽鎧だったはずだ。

「１２０万メルス！？　これは手の出しようがないですねぇ。まあ金属製じゃなくてもいいんですけどね。ブリガンディタイプで表面を染め上げた物とかあればよかったのですが」

ブリガンディと言うのは、鉄板を皮や丈夫な布で挟み、何層かになっている鎧の事だ。
作りの丁寧さや素材次第では、金属オンリーで出来た鎧よりも遥かに強度が高く、コストもかからない。

「ブリガンディ？　ああ、あれか！　結構マイナーなモン知ってるんだな。たしかにあれなら染めればいいし、割と値段も手ごろだな。うちでは今は扱っていないが、今度知り合いの職人に頼んでみるか？」
「あ、いえ。だったら自分で作ろうかと思いますので」

決めた、職人ギルドには鍛冶ギルドに入ることにしよう。考えてみれば、発動体の研究をするにしても鍛冶ギルドに入るのは都合が良いし、武具の作成は多少は出来る。

「お、お前鍛冶ギルドに入るのか！　じゃあいつか俺の店に作品を置いてやるぞ！」
「その時はお願いします。まぁ暫くは自分の装備を作るので手一杯になりそうですけど」

そうこうしてる内にスフィアの仕度が済んだようだ。スフィアは若草色のブラウスに黄色とオレンジのチェックのスカートと、女の子らしい格好をしている。
頭には以前つけていたようなスカーフを、今度は耳が隠れないように結び付けている。

「おまたせ～。今からでもお店入れるかな？」
「なんだスフィア、随分と気合の入った格好してるじゃないか」
「まぁね～シュテルと一緒だし、少しは釣り合う様に、なんてね～」

いやいや、十分過ぎる程だと思う。きっと引く手数多だろうなぁ。

「釣り合うなんて、むしろ俺の方が釣り合うか不安なくらいだよ」

「お世辞でも嬉しいよ。じゃあ行こっか」

「朝帰りなんて許さないからな！　シュテルもわかってんだろうな？」

「わかってますって！　いい加減にそのネタやめてくださいよ！」

少し腰に下げた剣が無粋かもしれないが、店を出て、二人でラスエル満腹通りへと向って行った。

## 第二十三話「空腹時は短気になりやすい」

「若造。連れの前だからって強気に出るこたぁねぇんだぜ？　大人しく詫びを入れてくれりゃあ俺達だって大事にゃしねぇ」
「へへ、そうだぜ？　街中での抜剣はご法度ってだけで、戦闘行為そのものが禁止ってわけじゃないんだぜ？」

目の前には五人の傭兵ギルドの男が、圧倒的優位に立っているかのような下卑た笑みを浮かべこちらの出方を窺っている。
思えば今日は予定外な事だらけだったなぁ。
そう思いながら、こんな事になった原因を思い返す。

スフィアと共に、だいぶ暗くなった道を歩きラスエル通りを目指す。
街路樹のように設置されているランプに、丁度ブライトストーンの混合液を注入している作業員がいる。
てっきり時限式の仕掛けか何かがあると思っていたのだが、一本一本手作業だったようだ。
頂点のガラスの水槽が混合液で満たされ、その波のうねりと共に揺らめく光が、辺りを優しく照らし出している。

スフィアが店番をしていた屋台よりも弱く、白く淡い、優しい星

の光のようだ。

「あの街灯って綺麗な光だね。俺も自分用のを欲しいけど、どこに行けば売ってるんだい？」

「あれは一応魔具に分類されるから、錬金術師のお店か、工房で手に入るよ。基本は混合液の販売しかしてないから、入れるための容器は別に自分で用意するんだよ」

なるほど。錬金術師という職業もあったけど、こういう魔具の作成を専門としているのか。

「そっか。じゃああとで適当なビンでも買わないと」

会話をしながら夜の町並みを見渡す。疲れて歩いている仕事帰りの冒険者や、これから打ち上げでもしに行くのか、少々浮かれ気味の一団などが通りを歩いている。

ラスエル通りに差し掛かると、一変して辺りの雰囲気が変わった。街灯の明かりは他の場所よりも明るく輝いており、店先にもブライトストーンを利用した看板が色鮮やかに輝いていて、いかにも夜の街といった風貌だ。

今回もスフィアはワイスラーの台所に行くつもりらしく、いつも通り道を進んでいくのだが、周りの店とは裏腹にワイスラーの台所には明かりがついていなく、人も誰もいない。

「あっちゃ～！　今週は夜の営業なしだったんだ～！」

「今週は？　やらない日もあるんだ？」

「そうなんだ～。お店って朝昼だけしか営業しないお店と、夜専門

のお店があるんだけど、ここはローテーションで営業時間が代わるんだ～。てっきり今週は夜もやってるものだと思ってたよ～」

なるほど、これもお客が満遍なく色んなお店に入るための策なんだろうか？

「じゃあどうしようか？　他に行きたいお店とかオススメのお店があるならそこに行くよ」

「じゃあ、前にお父さんと一緒に言った居酒屋に行こっか。客層も悪くないし、料理もおいしいし」

居酒屋か。そういえばこの世界のお酒にも興味があるし、居酒屋のメニューと言うのは普通のお店の料理よりも食欲をそそる物が多いだろうし、好都合だ。

「よし、じゃあそこにしようか。案内はまかせた！」

「おっけ～！」

着いた店の名前は”月夜香”と、こ洒落た看板を掲げているひっそりとした店構えだった。

テラスも用意されており、用意されたイスに座って星空を眺めながらお酒を飲み、料理を食べる。

そんな楽しみ方をしている人が何人か居て、いかにも”大人の店”と言った雰囲気だ。無論、大人の店と言っても如何わしい意味ではない。

「マスター久しぶり～。二人なんだけど席あいてる～？」

「ほう、レオフィスの娘じゃないか。久しいな、お前ももうすっかり大人になったようだな。男を連れて歩くんだから」

マスターはスフィアの顔を覚えていたらしく、軽い冗談を交えた再開の言葉を交わしている。

俺とよくにた髪の色に、綺麗に刈り込まれた顎髭。鋭いが、どこか優しそうな光を宿している蒼い瞳。

まさにマスターという称号に相応しい、大人の魅力溢れた男性だった。

だが、見た所ヒゲさえなければ俺とそうかわらない歳のように見えるのだが、彼も獣人なのだろうか？

「もう、マスターまでからかって！　彼はシュテル。昨日冒険者になったばかりの私の友達だよ」

「始めまして、シュテルと言います。いいお店ですね、落ち着いてお酒を飲むのにピッタリだ」

「気に入って貰えたかな？　私の名前はロウヒだ、ここのマスターをしている。君は……いや、なんでもない。スフィアとは彼女がまだ冒険者になる前からの顔見知りでね、レオフィスがよくここにつれてきていたんだ」

なるほど、レオフィスさんの行きつけの店だったのか。いい趣味してるなぁ、こういうのを『隠れ家的名店』って言うんだろう。

「席なら丁度ボックス席が一つ空いている。本当ならテラスをオススメしたいが、生憎と満席でね。また次の機会に案内しよう」

案内されたのは店の一番奥のボックス席だった。店の雰囲気も相まって、まるでプライベートルームのようだと錯覚してしまう程、落ち着いた空間だ。

「じゃあメニューを……ごめんスフィア、食材の名前がわからない。

どんな食材か教えてくれないかな？」
「あはは、そういえば食材の名前がわからないんだったね。どれが知りたいの？」
ああ、食材の知識だけでも最優先で仕入れるべきだった。これは死活問題じゃないか。
「ええと、この”コッカの胸肉のソテー、フルルビネガーのソース添え”と言うのと”クラドルのゆりかご”っていう料理なんだけど」
「コッカは家畜として飼われている鳥の魔物だよ。フルルは紫の房状になっている果物で、お酒の材料にもなるの。クラドルのゆりかごっていうのは料理名で、ベビークラドルっていう野菜で、細かく切った他の野菜を包んでスープで煮た料理ね」
なるほど。要するに”鶏肉のソテーワインビネガーソース”と“野菜だけのロールキャベツ”ってところだろうか？
「じゃあ俺はこの二つにしようかな」
「いいね、私も同じのにしよっと。お酒はどうする？　私は飲めるけど、シュテルは？」
「俺も大丈夫だよ。お酒はスフィアのおすすめでお願いするよ」
注文が決まり、店員に伝え、後は待つだけだ。
今朝の食事だって十分おいしかったのだが、やはり少し物足りなかった。だからここの料理を早く食べたく、気が競ってしまう。
「でも本当に客層もお洒落な人が多いね。この服装で正解だったよ」
「そうだね～私もお洒落してきて正解だったかな～」
どのテーブルでも優雅に食事を取っている人ばかりで、中には俺

達のような男女の二人組みも見受けられる。
とは言っても、向こうの様にロマンチックな空気ではなく、こちらは和気藹々、といった感じだけど。

「なんだか恋人同士で来ている人も多いね？　もしかしたらこっちもそう思われて足りしてね？」
「え？　も、もう何言ってるの～？　安易にそういう事言ってると将来痛い目見るよ？」

ううむ、スフィアはしっかりしてるなぁ。これなら悪い男にもひっかからないだろう。
他のメニューの食材の名前などを聞きながら、料理を待っていた時、それは起きた。

「なんでぇ！　居酒屋ってわりには辛気臭ぇとこだなぁ？　まぁいい！　おい店主！　五人空いてねぇか？」

声を聞いただけで、どんな人相をしているのか安易に想像出来てしまいそうな声が聞こえてくる。
入り口の方を伺うと、やはり想像通りのガラの悪い一団だった。

「ふむ、すまないな。丁度さっき満席になってしまったんだ。待ってもらうか、他を当たるかになるが、どうするかね？」
「ああん？　どう見てもガラガラに空いてるじゃねぇか！　おいお前ら！　もうちょっと詰めて座れや！」

そう言って、俺達のような二人組みでボックス席に座っている人たちに睨みを聞かせる一団。

「やめないか！　ここは酒と料理だけでなく、空間を満喫してもら

う為の店だ。無粋な真似はよしてもらおうか」
「空間だ？　こっちはその空間を最大限に利用できるように言ってやってるにすぎねぇだろうよ？　なぁそうだよな？」
「その通りだぜ！」「こんな無駄にスペースあけて馬鹿じゃねぇのかぁ？」「きどってんじゃねぇよ！」
空気が読めないのか、頭が悪いのか。どう考えてもお前らみたいなのに見合う店じゃないだろう此処は。
人が折角気持ちよく過ごしていたというのに、とんだ邪魔が入った。
「お客様、お料理が出来たのですが、この状況では……もう少しお待ち頂いても宜しいでしょうか？」
先程メニューを取りに来た女性店員が、声を潜めて言う。
だが、その様子があの一行の目にとまったらしく――
「おいおい、こんな広い席も二人っきりで貸切かぁ？　お前ら空気よんで席を立つとかできないのか？　ったくよぉ。常識をしらねぇおぼっちゃんは困るぜぇ」
「こっちの娘は中々べっぴんじゃねぇか。残って俺達の相手してくれてもいいぜぇ？」
あろう事かこちらに絡んでくる一団。さらにリーダー格の男がスフィアの頭へと手を伸ばし――
「勝手に人の友達に手を出さないで貰えるかな？　折角めかしこんだのに、汚れてしまうじゃないか」

その手を掴み取る。
そして思わず口が滑ってしまう。いや、この場合は滑らせた、か。
「なんだテメェ？　貴族様かぁ？　こんな所で獣人の女でも買おうってか？」

一瞬、その言葉の意味を正しく理解できなかった。だが、次の瞬間目に飛び込んできたスフィアの顔を見て――

「おい、表出ろクズ。　ここじゃ迷惑になる」

この世界に来て二度目のブチギレタイム。いや、アルヴァスとの一件とは比べ物にならない怒りが俺を満たして行く。

## 第二十三話「空腹時は短気になりやすい」（後書き）

今日はここまでです。
次回の更新もまた少し空いてしまうかもしれません。

## 第二十四話「ガルヴェウスの剣士」（前書き）

若干残酷な表現等があります。

# 第二十四話「ガルヴェウスの剣士」

「いい度胸じゃねぇか、逃げるんじゃねぇぞ？」

こちらの挑発に乗り、仲間を引き連れ出て行く一団。

先程の言葉は、女性を貶める最低の言葉だった。

スフィアが今にも泣き出しそうな顔で俯いているのを見て、感情の歯止めが効かなくなった。

まだ出会って間もないが、それでも彼女は俺の最初の友達で、大切な仲間だ。その仲間が侮辱され悲しんでいるのに、何もしないなんて事は絶対に出来ない。

「そういう事だから、ちょっと行ってくる。マスター、お騒がせしてすみませんでした」

「駄目だよ！　あいつら傭兵ギルドの連中だよ！　私達よりも絶対強いよ！」

「そうだな。君は昨日冒険者になったばかりなんだろう？　腕に自信があるようだが、ここは引いた方がいい。店の裏口から二人で逃げるんだ。既に店員に人を呼ばせに行ったから此処は大丈夫だから安心してくれ」

二人が真剣に引きとめようとしてくれるが、こればっかりは引く訳にはいかない。

ギルドが管理していると言っても、組織の末端なんて所詮こんな物なのだ。どんな場所にもクズは存在するし、争いだって起きる。

だったらここで俺が奴らを罰しても何の問題もないはずだ。

だから――

「二人には悪いけど、ここは絶対に引けない。それに今日は魔術も神聖術も覚えてきたんだ、絶対に後れは取らない」
「そうか……そこまで言うのなら一つ忠告だ。神聖術はともかく、殺傷能力の高い放出系魔術も抜剣と同じで処罰の対象になる。気をつけてくれ」
「ご忠告ありがとうございます。じゃあスフィア、行ってくるよ」

回想終了。
早い話が、失礼な相手に俺が喧嘩を売ったってだけなんだけど、喧嘩で済ます気も段々と薄れて来る。

「それじゃあさっさと終わらせて、俺達が替わりに買って楽しんでやるよ！　オメェら手出すんじゃねぇぞ、店の方見張っとけ！」

どこまで人を怒らせれば気が済むんだこいつらは。
頭に血が上りすぎて、冷静に戦えなくなっては事を仕損じてしまう。
冷静に、確実にこいつらを……倒す。

「何突っ立ってんだよオラ！」

等々痺れを切らした男が、右腕を大きく振りかぶりながらこちらへと疾走してくる。

傭兵ギルドは腕の立つ人間が多いと聞いていたので、こちらも様子見してたのだが、この動きを見る限り大したことはないように見える。

大振りなまま、愚直に振るわれた拳を難なく避け、相手の懐に潜り込む。

そして――

「何アンタ？　超弱いんですけど」

感情が高ぶり、口調が乱れてしまう。無意識かどうかはわからなかったが、神聖術で強化して拳を握る。

そして丁度中指と人差し指の間接が相手の急所、すなわち鳩尾にめり込むように――――全力で打ち込んだ。

相手の勢いや体重、そして自分の足の裏から伝わる地面を踏み込んだ大地の力。これらを全て一点に集中して解き放った。

「ぐぶぅお！！！！」

息を吐き出したのか、胃液を吐き出したのか判別出来ない湿った音を漏らしながら、男は地面から2メイル程浮き上がり、そしてそのまま受身を取る事も出来ず地面に墜落した。

どうやら今の一撃で完全に肺の活動が止まったのか、そのまま呼吸困難に陥ったようだ。

「ヒュー……ヒュゥ……グッグッ……ヒュー……」

「なんだ、何か言いたいことでもあるのか？　ああ、謝ってくれるのか。いいぞ、今すぐ謝るならこれで簡便してやる」

まだ気が治まらない俺は、喋ることが出来ないのを承知の上で残酷な提案をする。

「早く謝れよ。店の客全員と俺の友達に。それとも謝る気が無いなら……」

地面で背中を丸めうずくまり、口から涎と乱れた呼吸を垂れ流し続ける男に向けて、足を振り上げる。

「何してくれてんだてめぇ！」

男に止めといわんばかりに追い討ちをかけようとしたその時、周りの四人が一斉にこちらへと向ってくる。

「手を出すなって言われてただろ。犬でも待てくらい出来るだろ？」

まだ足りない、丁度良かった。消化不良気味だった所だ。

まぁ実際には消化不良どころか、食事を中断させられてお腹がペコペコ状態ではあるんだけど。

「運動した後のご飯は格別おいしいって言うからな」

四人の内三人がこちらへと向ってくる。残りの一人が後方で、何やら自分の腰をまさぐっているのが見える。

何か仕掛けてくる気だと察し、三人の影になるように移動する。

向ってきた男達の攻撃をいなしつつ、少しずつ距離をとる。

「ちょっと実戦で試してみるか」

そう呟き、念のため剣と一緒に腰に差していた杖を手に取り、足に風を纏う。

そして地面を滑るように一気に後方へと下がり距離をとる。

「クソ！　こいつ魔術師だ！　早く撃て！」

『早く撃て』という言葉を聴き、向こうの狙いが読めた。

後ろに残っていたはずの男が、いつのまにかこちらの死角に移動し、弓を引き絞り狙いを定めていたのだ。

矢が放たれるよりも一瞬早く反応できたおかげで、身体を逸らして避ける事が出来、そのまま風を使った移動で射撃手へと接近、その勢いのまま風を纏った蹴りが、相手の首へと吸い込まれて行く。

本来スキの出来やすいハイキックではあるが、風のおかげで驚異的な速度で放たれたソレは、相手が反応する前に意識を刈り取るには十分だった。

「ひい！　なんだこいつ！　魔術師じゃないのかよ！？　逃げるぞおい！」

残された三人は、仲間を見捨てる選択をしたようだ。

最初のリーダー格の男は呼吸がままならず、そのまま気を失っている。

まぁ、誰も逃がさないし、誰も助けるつもりはないのだけど……。

こちらに背を向け逃げる三人へと、風による高速移動で接近。そして今度は杖を両手で持ち、無防備にこちらへと向けられた首に向けてなぎ払った――――しかし。

何かが破裂するような激しい衝突音と共に、俺の杖が何者かの、鞘に納まったままの剣に阻まれていた。

「そこまでだ。事の端末は聞いたが、さすがに殺しを見過ごすことは出来ぬ」

「エ……エンザンの旦那！　たすけてくれ！　こいつにアニキと仲間がやられたんだ！」

エンザンと呼ばれた黒髪黒目の男性。よく見れば、初日に傭兵ギルドの代表として来ていた人だった。

「殺すなんて、この程度じゃ死にませんよ。それにこいつらは報いを受けるべきだ。三人だけ罰を受けずにいられると思ってるのか？　オイ」

後ろで腰を抜かし、エンザンさんの陰へと隠れる傭兵達に、低く、怒気を滲ませた声をかける。

「ふむ、納得はしても貰えぬか。ならば此処は、これで引いてくれぬか？」

そう呟いた次の瞬間。
彼がもう一方の手で鞘を掴んだと思うと、目の前を一瞬青い光が駆け抜けた。

「「「ギャアアアアアアアアアアアア！！！！」」」

聞こえてきたのは、喉が裂けんばかりの絶叫の三重奏。
そして、気がつくと後ろにいた三人が、それぞれ右腕を切り裂かれていた。

この人、今一瞬で三人を斬ったよね……？　かろうじで光が見えたけど、どうやって斬ったのかまるでわからない。
彼はずっとこちらに身体を向けていた筈、しかし現に後ろにいた男三人の右腕だけを的確に切り裂いたのだ。

「こやつらの戦士生命を断ち切った。これにてこの場は手打ちとしてもらえぬだろうか？」

顔色一つ変えずにどこまでも冷静に、それでいて苛烈な罰を下すエンザンさん。
その姿を見て、血が上りオーバーヒートを起こしていた頭が徐々に冷えてくる。

「すみません。少し熱くなり過ぎていました。しかし、さすがにやりすぎじゃないですか？」

結果的にさっきの攻撃を止めていなければ、三人は首の骨を折って死んでいたかもしれない。それでも利き腕を深く、容赦なく切り裂くと言う判断を下したエンザンさんに若干の恐怖を覚える。

「この者達は最近私達の傘下に下った人間だが、少々素行が悪くてな。近々処断する手はずになっていた。故に貴公が気に病む事は無い」

なるほど。ギルド内の管理も思っていたよりも厳しいようだ。

「この場は私が預かる。貴公はそのまま店に戻ると良い。マスターには『世話をかけた』と、私が詫びていたと伝えておいてはくれまいか」

その言葉に俺は頷き、その場から離れる事にした。

店へと戻ると、暴れるスフィアがマスターと店員さんに席へと押し留められていた。

「シュテルを助けにいくの！　マスターも店員さんも早くどいて！　さっきの悲鳴聞こえたでしょ！？」

いやぁ、俺はあんな下品な悲鳴出したりはしないんだけどなぁ。ちょっと心外だったので、軽いイタズラをしてみる。

「大変だスフィア！　外で俺が斬られて泣き叫んでいるぞ！」

こんな状況でもふざけてしまう俺をどうか許してください。

「そんな！　本当なのシュテル！！！！！」

「本当だ！　だけどここは大人しく隠れておくんだ！　あ、店員さん料理運んできてください」

気が動転しているのか、頭がしっかりと回っていない様子のスフィア。

「君は……もう済んだかい？　見た所無傷なようだが」
「ええ。それに傭兵ギルドからあいつらを引き取りに来てくれた人もいましたから。エンザンと言う人が『世話をかけた』と謝っていましたよ」
「ほう。アイツがわざわざ出向いてきたのか」
「ギルドの代表で職業診断所にも来ていましたし、有名な人なんですか？」

マスターが若干そのポーカーフェイスを崩し驚いていたので、ひょっとしたら知り合いか、それとも有名人なのかもしれない。

「エンザンは、現在このガルヴェウスにおいて”最強の剣士”と名高い男だ。二つ名”蒼光”を授かった凄腕だ」

……なるほど、道理で強いはずだ。
それにただ強いだけじゃない。

”心を乱さずに人を斬る”

これはただ技術だけでたどり着ける境地ではない。己を殺し、心を殺す事が出来る人間だけがたどり着ける境地だ。
彼はいるのだろう。その戦う者としての一つの終着点に。

無感情に殺戮をする狂った人間ではなく、感情を律した状態でそれを行えるのは、並大抵の事じゃぁない。
まさに”最強”にふさわしい人だ。

「あれ？　でも抜剣してましたよ？　あの人。罰を与えられるんじゃ？」

「なに、誰もその瞬間を目に収める事は出来なかっただろう。それなら罰しようがないし、そもそも二つ名持ちにはある程度の特権が与えられる、だから心配はいらないさ」

同じ二つ名持ちでも、アルシャさんとはさらに別格の強さを持つエンザンさん。そんな強い人間がこの世界にもいる事に、嬉しさ半分と不安半分。

有事の際にはそんな強い相手と戦わなければいけないかもしれないという不安と、どこまで通用するか試したいと言う好奇心がせめぎ合う。

まぁ、さすがにアルシャさんの時のような無謀な真似はするつもりはないけど、それでもこれからの特訓メニューを練り直さないといけないな。

本当にこの世界は退屈させてくれない。

これからの生活が楽しみで仕方がないよ本当に。

「なんでこんな時にふざけるかな～！！！！　心配したんだからね！」

「いやぁ、まさか乾杯するまで気がつかないとは思ってもみなかったよ」

その後、料理が運ばれてくるまでの間もソワソワと立ち上がろうとしていたスフィアをなだめ、料理と一緒に運ばれてきたロゼワインのようなお酒を乾杯したところで、ようやく乾杯の相手が俺だと気づいたスフィアであった。

## 第二十四話「ガルヴェウスの剣士」（後書き）

気が付くとお気に入り件数が１５０件を超えていて、とても驚いています。
拙い文、遅い展開と退屈かもしれませんが、これからもどうか宜しくお願い致します。

## 第二十五話「早朝訓練」（前書き）

前回チートの片鱗を見せたシュテル君。
これから一気に主人公最強物に……！

# 第二十五話「早朝訓練」

スフィアとの食事から一夜明け、今日は試したい事も有り昨日よりも早く起きた。
現在の時刻は午前四時を少し過ぎた所だ。当然ダルベストさんはまだ戻っていなく、代わりに意外にも戻っていたアルヴァスは、自分のベッドの上でまだ夢の世界にいるようだ。

昨日俺が寝てる間に戻って来たんだろうか？

カッターシャツと、その上からいつもの黒いベストに着替え、杖と剣を持ち部屋を後にする。
目的地はギルドの訓練場だ。

部屋の外の廊下は、朝特有の冷えた空気と早朝故の静まり返った空間の所為か、一歩あるくごとに「ギシ……ギシ……」と床が軋む音が廊下に響き渡る。

時折、誰かの部屋からいびきや寝言が洩れ出てくるが、その内容に意識を向ける事無く外へと向かう。
受け付けにもまだ誰も居らず、そのまま素通りしてギルドを目指した。

ギルドへと続く小道を進み、訓練所へと直接続くフェンスの扉を開け、誰も居ない訓練所に入っていく。
今日の訓練はなるべく人に見られたくない。だからこそこんな朝早くに来たわけだ。

昨日の夜、半ば暴走状態とは言え、訓練時以上の出力を出した魔術と神聖術。
そして完全に制御しきれていたコントロール。その感覚を忘れない内に、もう一度試すのが目的だ。

「集中……集中……」

目を閉じ、体内に魔素を行き渡らせる。
昨日、あの時俺は一瞬で高密度の術を”局地的に発動”させていたのだ。

地面を踏みしめた足と、握り込んだ拳。この二つを真っ直ぐに結びつけるかのように、だ。
そのお陰で、最低限の魔力と一瞬の時間で、最大限の一撃を繰り出せた。と結論付けたのだ。

「ハッ！！！」

拳を握り込み、あの時と同じように低い大勢から、斜め上に拳を突き出すが、あの時の様な足と拳の一体感、大地の力を感じる事は出来なかった。

「う～ん……やっぱり火事場の馬鹿力みたいな物だったのかねぇ？
しっかりモノに出来れば、魔力の節約にもなると思ったんだけど」

その後も体術のみの型を一通り、神聖術による局地的な強化を意識しながら行ってみたが、これといった手応えを感じる事が出来なかった。

神聖術を一旦諦め、今度は風の魔術による移動と、風を纏わせた蹴りを再現出来ないか試してみる。

発動体である杖を手に持ち、意識を集中する。

魔力と魔素の指向性は、意識しないと勝手に発動体の法へと向ってしまうようだ。

しかし、発動体を通して初めて外へ放出されるようなので、大人しくその流れに任せる。

今度は放出された風の力を足へと向かわせる。

一度体外へと出てしまった力を操作するのは、神聖術のように体内で魔力を操作するのとは段違いの難易度なのだが、これも難なくこなす事が出来る。

「よし。んじゃとりあえず移動から試そうか」

いきなり昨日のような速度を出すのはさすがに怖いので、徐々に速度を上昇させて行く。

昨日は一瞬で２０メイル程離れた射撃手へと到達した。その事を考えれば、この程度の速さではなかっただろう。

段々と調子を上げて行き、遂には５０メイル程の距離を三秒で駆け抜ける事に成功した……のだが。

「と、止まらない！」

あの時のように急に止まることが出来ず、急遽進路を曲げ広場を何周もし、その速度が弱まるのを待つ。
まるでブレーキの無い自転車を全力で扱いだかのようだ。
ようやく通常の走る速度程度になった所で、風を逆方向に放出して動きを止める。

「駄目だ、制動距離をゼロになんて出来そうにないぞコレは……昨日は一体どうやったんだ？」

今度も急加速、急停止の制御を諦め、風を纏った蹴りの再現にシフトチェンジする。
さっきから諦めてばかりだなぁ俺。

「たしかこう、足が追い風に乗った感じで……うわ！」

今度は付いた勢いが強すぎ、そのまま身体がフィギュアスケートの技のように回転しながら、地面へと激突してしまった。

「イテテテ……なんだよ、全然駄目じゃないか」

やはり完全な制御なんて一朝一夕では身に付くものではないらしい。一度は出来てたんだから、もう少し糸口が掴めてもいいんだけどなぁ。

等々魔術の訓練も中止し、平常通りの剣の訓練に移行する。

「ハッ、セイッ、ハッ！」

掛け声と共に、両手で持った剣を、袈裟切りから腕を引いてから

の突き、そして踏み込んでからの切り上げと、三連撃の反復練習を行う。

俺は基本、三つの連動した動きを組み合わせて一つの攻撃としている。

どの動きから、どの動きに派生させるか常に考え、最善の三連撃を繰り出す。それが俺の戦い方だ。

時には途中で体術に切り替えたり、回避や防御に切り替えたりもだ。

ある程度剣を振った所で、ちょっと昨日から試そうと思っていた事があり、今度は剣と一緒に杖も構える。

この世界の魔術は発動体が無いと発動する事が出来ず、文字通り”発動”体なのだ。

「やっぱり杖じゃ両手で剣を持ってる時咄嗟に使えないし、どうしようかなぁ」

今思い返せば、アルヴァスも杖無しで魔術を使っていた。あの時手を翳していた事から、ガントレットか盾が発動体だったのだろう。

接近職の人間は杖以外の発動体を持つのが一般的なようだ。

「とりあえず、片手で剣と杖を持ってなんちゃって二刀流でもしてみようかねー」

適当に言ってみたが、これは実用的ではないだろうなぁ。

「スティルスレイ！」

ワードを放ちながら、杖と剣を同時に振るう。
交差するように振るわれたのだが、やはり魔術による斬撃は一瞬後れ、剣と杖が通り過ぎた後に発動した。

「これはこれで、波状攻撃になるからいいんだけどねぇ」

一見するとこの二刀流は中々良い様に思えるのだが、それは一撃だけに限った話だ。

今度は杖と剣を同時ではなく、連撃のように交互に繰り出す。すると――

ガキン！

「ほらやっぱり」

耳を劈くような金属音が、静まり返った訓練所に響き渡る。
一瞬遅れて現れた鉄の一撃が、自分で振るう剣に衝突した音だ。

やはりこの方法では無駄が多く、余計な事に意識を傾ける割合が多くなってしまう。
やはり剣そのものを発動体にしないと解決は出来そうにない。

もし剣を発動体に出来たのなら、自分の太刀筋の後に追順するもう一つの斬撃となる。
自分の太刀筋なら忘れる事もないし、無意識でも術と剣が衝突する事なく上手く戦う事が出来るはずだ。

それに、風の魔術を直接剣に纏わす事だって容易に出来るようになるだろうし、さらに剣から風の斬撃だって飛ばせるようになるか

もしれない。

「本当、夢のようじゃないか」

もしこれがカノンなら、自分の力だけでそんな戦いを再現出来てしまう事を俺は知っている。

今の俺の実力……いやそれ以前にこの身体ではそんな事は出来そうにない。だから別な方法でそれに近い攻撃を再現しようとしているのだ。

あくまでこれは模倣ではなく、戦術の、技の開発だ。

訓練ではこういう技を考える時が一番楽しいと思うんだよね、うん。

今日の訓練の最後のメは神聖術を使いながらの剣の訓練だ。

今度は型や連撃の練習ではなく、実戦を想定した動きを意識した訓練だ。

頭の中に仮想敵を思い浮かべ、戦闘を開始する。相手は当然カノンだ。

自分が一番よく知る人物だからこそ、その動きを頭で想像する事が容易い。

想像の中でも、自分との差を明確に理解させられる。

「今日こそ一撃入れる！」

そう自分に活を入れ、本日最後のメニューへと取り掛かった。

## 第二十五話「早朝訓練」（後書き）

……になんて当分なりそうにありません。

スタートラインが人より前なんだから、少しは苦労をた方が良いと思います。

感想や指摘などありましたら、お気軽にお願いします。

## 閑話「慢心と嫉妬」（前書き）

今回からアルヴァス視点の話を少しだけ。

## 閑話「慢心と嫉妬」

「決めたぜ、俺はそろそろガルヴェウスに活動拠点を移す！」

自分の村を出て、ワイエルムの町で冒険者になって早三ヶ月。
俺は近辺に出没する山賊や、山に住む魔物の討伐を繰り返し、異例の速さでＤ－ランクまで上り詰めた。

今ではこの町じゃちょっとは名の知れた冒険者だ。俺を慕う奴らも何人か出来、ここでこのままクランでも作るのもいいかもしれないと思っていた。
だがあの日、ガルヴェウスから大規模な山賊狩りの任務でやって来た剣士に出会い、俺の認識はかわった。

俺よりも強く、多くの山賊を狩り、そして冷静に任務をこなす中年の男。
一見パっとしないが、きっと名のある剣士なんだろう。

俺は、ガルヴェウスにはこんな凄い剣士が居ると知り、より高みを目指すために町を出る決意をする。

「って訳だから、今日でアンタと顔を会わせるのも最後だな」

ギルドの受け付けのオッサンに俺の考えを伝えた。

だが、返ってきた答は、快く送り出す言葉では無く……。

「俺はやめておいた方がいいと思うがねぇ。大方この間の合同任務

で触発されたんだろうが、正直あそこはこの町とは格が違うぞ？勢いづいてるお前みたいな連中が何人もこの町から旅立ったが、一旗上げた奴なんて数えるくらいしかいねぇ」

「何言ってんだよ！　たった三ヶ月でここまでのし上がったんだぜ？　向こうでも通用するって！　なんつったって俺は町一番の有望株なんだからな！」

このオッサンは少し老婆心が過ぎるんだよな。まぁこの人の助言が役に立った事もあったかもしれないが。

俺はその小言を聞き流し、意気揚々と旅支度の為に宿屋へと戻る事にした。

「お前みたいなのが、何人も山賊に成り下がって戻ってきてるから言ってるんだよ……」

ガルヴェウスまでは護衛の依頼を受けて向かう事にした。ただ行くだけじゃなく、こういう所に頭が回るのが成功者の秘訣って事だ

な。

道中現れたピグルも難なく倒し、逸れてしまったのか、本来こっちの街道にはいないはずの、発情期で凶暴化したフレイルラットも撃退させる事にも成功した。

本来Eランクの魔物だが、この時期は危険度が増しDランクに格上げされている奴だ。

今の俺じゃ護衛しながら倒すのは難しい。それに折角倒しても、証明部位の扱いがEのままで割に合わない。

だから軽く魔術で威嚇して、そのまま馬車で突っ切ったのだ。

冒険者に一番大切な事、それはズバリ！”リスク管理”だ。

無謀な真似して大怪我するなんて馬鹿な真似、俺はするつもりはこれっぽっちもないからな。

その後は何事もなく、三日かけてガルヴェウスまで無事到着し、護衛の任務を達成した。

「そんじゃな！　俺はこれからこっちで活動するからよ、護衛の依頼こっちで出すならまた俺が請け負ってやるよー！」

行商人にそう告げ、ガルエルム街門で別れた。

俺は一先ず冒険者ギルドを探す。さすがに王国以上の面積を誇り、裏では”ギルド国家”とも呼ばれているガルヴェウス。

道行く人の多さはワイエルムの町とは比べるのもおこがましく、故郷の村と比べた日には、まさに”砕月とスポーン”と言った具合

だ。

着いた建物は、さすがに本部だけあって町のギルドの比じゃないデカさだった。

そこへ入っていく冒険者も皆、歴戦の強者のように見えてくる。

「すげぇな……全身金属鎧着てる奴までいるし……うお！　あの獣人すっげぇ！　あんな武器つかえんのかよ!?」

これじゃまるでオノボリさんみたいだが、まぁ事実そうなのだから仕方ないっちゃ仕方ない。

まぁいつまでも見とれてるわけにもいかないし、とっとと受け付けを済ませるか。

ギルド案内受付に行くと、タッチの差で俺の前に背の高い男が並んでしまった。

見た所随分質のよさそうなレザージャケットを着ている。そしてまだ新品のようだ。

差し詰め、なりたてホヤホヤの新人って所か？

受付のやり取りを聞くに、先程実技テストを済ませたばかりだったようだ。

これからこいつの初期ランクが決まり、冒険者になるんだな。こりゃめでたい場面に遭遇したな。

ちなみに俺の初期ランクはＥ－だったっけ。あの時は随分騒がれたもんだ。

だが、俺のそんな思いは、次の言葉で打ち砕かれた。

「シュテル様の初期ランクはDです！　すごいですね！　一気に7つもランクを飛ばすなんて！」

……は？　今この受付なんつった？　初期ランクがDだと？　俺が3ヶ月以上必死に山賊狩りをして、魔物を倒して、それでD一だぞ？　それをコイツは最初からDだ？

どうなってやがる！？　推薦とかさっき言ってたよな、どういう事だ？

まるで意味が理解出来ない。どういう事だ？　推薦ってなんだよ！？

解らないことだらけで混乱している俺に、止めを刺すような言葉が聞こえてくる。

「本当にシュテル様には驚かされますね、ユニーク武器（ウェポン）なんて高ランクの方もそうそう持っていないんですよ？」

ユニークウェポンだと！？　職人による一本限りの名品や、宝物級の掘り出し物じゃねぇか！

なんで新人がそんなモンもってんだよ！？

納得出来ない事だらけだ。こいつは何なんだ？　誰かが便宜を図っているようにしか思えない。

質のいい装備に、推薦と言う言葉。さらには買えば数百万単位の

武器。
これらから導き出される答えなんざ……。

そんな時、俺の肩に軽い衝撃が加わる。顔を上げれば、先程までその後姿しか見る事が出来なかった長身の男だった。
ぶつかった事を謝罪するソイツの顔は随分と得意げで……。

俺は反射的に舌打ちをした。
一瞬不服そうな顔をしたが、そのまま何事もなかったかのように去って行く。
この腰抜けが！

俺の番になり、受付嬢にさっきの男の事を聞いた所、なんでもこのギルドでも上位の人間が直々に実技テストを買って出たらしく、その人間が彼を強く推薦したそうだ。

その答えを聞いて、俺はより一層アイツが権力者か何かとコネがあるんじゃないかと言う思いを強めた。

手持ちの少ない俺は、ギルドが運営する施設に入居する事になった。
早速そこへと向かおうとすると、休憩スペースでさっきの男が、キャトネイルの女に声をかけている所だった。

ふざけやがって！　いきなり冒険者の女をナンパか？　いっぱしの冒険者にでもなったつもりかよ！？

デカイ街だけあって、上の方は随分とドス黒そうじゃねぇか、ク

ソ
！

## 閑話「慢心と嫉妬」（後書き）

こうして書くと、本当にシュテルは恵まれた環境に居る事がわかりますね。

## 閑話「敗北、そして失意の果てに」

胸糞悪い。まさか初日にこんな事があるなんて思っても見なかった。

この街は一万人以上の人が暮らしていて、その七割以上が戦いに命を賭け生きている。

それなのに、中にはお遊び感覚で現れ優遇される権力者が居る。

そんな事、到底納得する事が出来なかった。

鞘に着いた俺は、受付のおばさんから部屋の場所を聞き、そこへ向かう。

部屋に居たのはガラの悪そうな中年の冒険者で、こんな歳で未だに鞘から出ていない男を内心蔑んだ。

やっぱりどんな場所にもうだつの上がらない奴ってのはいるんだよな。

俺の親父だって、村じゃ全然目立たない駄目な奴だった。

「なんだぁ？　いきなり入ってきて挨拶もなしか？　何の用だおめぇ」

「ああ、今日からこの部屋に住むことになったんだよ。アンタここ”長い”んだろ？　決まり事とかあったら教えてくれよ」

「……まぁ良い。大事なモンは備え付けのロッカーにしまっとけ。鍵は部屋の鍵と共有で全員が持つ。間違っても他人のロッカーを開けようなんて思うんじゃねぇぞ？　犯人なんざこの部屋の人間に限られるんだ、すぐにバレて除名追放だ」

なるほどな、むしろこの男がやらかしそうで心配なくらいだ。貴重品は自分で持ち歩く事にするか。

そんな事を思っていた時、ノックの音が部屋に響いた。
そして入ってきたのは――――

なんで此処にコイツが来た？　貴族様が遊び半分で住むような所じゃねぇんだよ！
そして気安く俺の名前を口にして、馴れ馴れしく握手まで求めてくる。
俺はついに怒りを抑えきれず、男に罵声を浴びせた。

だがコイツはそんな俺を、心の底からあざ笑うかのように反論する。
「これは自分の力で勝ち取った物だ」遠まわしにそう言ってきたのだ。

俺は遂には男の全てを否定したくなり、分不相応な装備の事を口にした。
それが奴の琴線に触ったのか、奴も等々我慢の限界が来たらしい。
俺に決闘を申し込んできたのだ。

これはチャンスだ。いけすかないギルドの腐敗の一端を、今ここで叩きのめす事が出来るのだ。

本来なら貴族に盾突くなんて、即自分の破滅に繋がるが、相手からの正式な決闘だ。
それにギルド与りの街での出来事、これならなんの心配も無く合法的にぶちのめす事が出来る。
俺は、その決闘を受ける事にした。

決闘は自分の得物を使う実戦形式だ。お互いにどんな事になっても自己責任だと確認を取り、開始の合図として俺は剣の鞘を空中へと放り投げる。
そして地面へとついた瞬間、奴に向かう。
奴はまだ剣を鞘から抜いておらず、こちらの動きをただ見ているだけだった。

「剣も満足に抜けないのかよ！」

俺は容赦なく、一撃で決めるつもりで剣を振るう。
大怪我したって構う物か。お遊び感覚でこの世界に足を突っ込んだ自分を呪うんだな！

しかし俺の攻撃は、まるでなんでもないかのように易々といなされて行き、遂には……。

今思えば、俺が行ってきたのはリスク管理などでは無く、ただ自分には出来ない事から逃げていただけだった。
本当の危険を、格上の相手かどうかを対面しても図りきれない、自分の愚かさを嘆く結果に終わった。

俺は魔術の行使までさせられたが、あいつは最後の最後に剣を抜いただけで、止めもただの蹴りだった。
俺の攻撃はかすりもせず、魔術までもが剣の一振りでかき消されてしまった。
生まれて二十一年。村にいた頃からどんな相手にも負けた事のなかった俺は、その日始めて、圧倒的な、絶対的な強者の前に敗北を喫した。

瞼の向こうに強い光を感じ、意識が覚醒してくる。
目を開けると辺りはもうすっかり明るくなっていた。
そんな明るい空とは対照的に、俺の心は暗く、星のない夜のように暗く沈んでいた。

ギルドの職員が仰向けのまま寝転び空を眺めていた俺を見つけ「こんな所で何してるんですか？　風邪引きますよ」と苦言を呈してきたが、それに返事をするでもなく、無言でこの場所から立ち去る。

何もする気力が出ず、無意味に時間を過ごしてしまう俺。
何故負けたのかを考えても、答えはすぐに出てきてしまう。
ただ単純に、俺より強かったからだ。

それでもその事実を受け入れる事が出来ず、アイツの粗を探すような事ばかり考えていた。

魔術を切り裂くなんて真似が出来るわけが無い。

きっと魔具の一種か何かを剣に仕込んでいた。

こっちを怒らせたり動揺させただけの卑怯者。

そんな事を考えても、俺の心は納得出来ずにいる。
だって――

「なんでだよ、あいつ剣を抜く前から、俺より全然強かったじゃねぇかよ……」

本当、意味分かんねぇよ……。

ただ漠然と時間が過ぎるのに耐え切れなくなり、とりあえず手ごろな依頼でも無いか探しにギルドへと向かう事にした。

既に時間は昼を過ぎており、一仕事終え手続きに戻って来た冒険者で溢れかえっていた。

俺は昨日の夜から何も食っていなかったが、空腹よりも先にこの心のモヤモヤをどうにかしたく、何か発散できるような討伐依頼を探す事にした。

見つけた依頼は『ピグル３頭の討伐』断続依頼に分類されるコイツは、狩れば狩るほどその報酬も増えていく。

慢性的に被害をもたらす魔物の討伐は常にウィンドウで募集しており、よほどの事が無ければ依頼一覧から消える事はない。

その筈なのだが――

「申し訳ありません。こちらの依頼は先程取り消されてしまいました。なんでも、ここ最近の被害の原因である群が討伐されたらしく、しばらくは被害の心配がないんです。ですが、街道で出現するピグルを見つけ出して肉や耳を納品する分には問題ありませんが、どう

しますか？」

チッ、タイミングが悪いな。俺のランクで手ごろな依頼はどれもこれも単独じゃキツイものしかない。

今は誰かと一緒に仕事をする気分でもないし、格下の依頼でストレス発散したかったってのに。

「んじゃ止めとくわ。邪魔したな」

丁度良い依頼も無く、俺はまた訓練所に行き八つ当たりのように鎧を着せられた木製の訓練用人形相手に剣を振るった。

「クソッ！　クソッ！　クソォ！！！！」

独学で覚えた剣はいつもよりも荒々しく振り回され、デタラメに人形の鎧を凹ませていく。

打ち鳴らす鎧の音が、まるで頭痛のようにガンガンと頭に響いてくる。

そして、その仮想の痛みが俺の脳裏に、昨日の出来事を鮮明に思い出させて行く。

思えば俺は、何故あいつに敵意を剥き出しにした？

ギルドの評価が高いのは誰かの差し金だと、誰が言った？

相手も知らずに俺は、何を言った？

ああ――全部俺の空回りで、ただただ嫉妬していただけだったのか。

そうだよな。田舎者の俺よりも、ずっと強い奴なんてごまんと居るに決まってるじゃねぇか。

この街の依頼をさっき見たが、依頼の難易度設定が俺のいたギルドとまるで違っていた。

俺がやってきた依頼なんて、この街の人間からしたら、素人でも簡単に出来る類の物だったのだ。

盗賊の討伐だって、俺は必ず何人かで組んで、圧倒的な数の差で押し切るだけだった。

それを、自分の才能だなんだと勘違いして、天狗になって。

本当の才能ってのを目の当たりにした俺は、失意の中、鞘への道を歩いていた……。

## 閑話「敗北、そして失意の果てに」（後書き）

今回でアルヴァス視点も一端終了です。
次回からはまた、シュテル視点に戻ります。

## 第二十六話「寡黙な戦士と騒がしい魔術師」（前書き）

新たな仲間との出会い。

## 第二十六話「寡黙な戦士と騒がしい魔術師」

「やっぱり掠りもしないなー。昨日みたいな動きが出来る前提なら、一撃くらい入れられそうなんだけど」

イメージトレーニング、もとい一種のシャドーボクシングのような物だろうか？

仮想敵との訓練も終え、一息ついた所だ。

想像上ですら、カノンに一撃入れる事は叶わなかった。というかむしろ、倒す所か一撃入れる姿すら想像出来ない。

「まぁ実際に相対する事なんてないだろうけど、それでも悔しいんだよなぁ」

日も段々と昇り、チラホラと人の姿も見えるようになって来た所で訓練を切り上げ、鞘へと戻ることにした。

鞘に戻ると既にオーリエさんが受付に居て、昨日出しておいた洗濯物を渡してくれた。

丁度いいのでこれを着替えとして持って、そのまま朝風呂を頂く事にした。

今日も俺が一番のようで、浴場には誰もいなかった。

シャワーで軽く汗を流してから、並々とお湯で満たされた浴槽へと浸かる。

浸かった瞬間浴槽からお湯が溢れるこの音は、一番風呂の特権だ

ろうなぁ。

「でも、なんか風情が足りないんだよなぁ」

浴場そのものは長い間使われてきたのか、清潔に保たれているものの、古く、歴史を感じさせるのだが、心に染み渡るような何かが足りない。

記憶の中にある、ここことは別な異世界。

その世界でも指折りの平和な国で暮らしていた時の記憶の映像が脳裏に浮かぶ。

入浴行為をとても大事にしていたそこでは、自然と一体化した浴場や、浴場に美しい絵が描かれていたりと、心身ともに疲れを癒す事に重点を置いていたように感じた。

「大きな窓でも設置して、そこから自然を眺める――なんてここじゃ無理だよなぁ」

そんな事を考えていた時、浴室のドアが開く音と共に、人の足音が聞こえてきた。

「ふひー！　早く水でも浴びねぇとやってらんねぇぜー！」

「お前朝からとばしすぎなんだよ。　どこの世界に特訓でぶっ倒れるまで魔術ぶっぱなすアホがいるんだ」

二人組みの青年が、何やら軽い言い合いをしながらシャワーへと向かって行く。どうやらこちらには気がついていないようだ。

「ひゃーつっめてぇなぁ！　気持ちいぜ、オイ！」
「うるさいぞ。浴室に響いて叫わん！」
「別にいいだろー！　どうせ一番乗りなんだ、気にするこたぁねぇよ！」

残念！　一番風呂の栄誉はこのシュテルが頂いた！

「まぁたしかにそうかもしれないが……って、人がいるじゃないか。すまなかった、朝から騒がせてしまって。五月蝿かっただろう」
「お？　俺達がいつもなら一番乗りなんだけど、アンタも朝練か何かか？」

二人組みの内の一人がこちらに気がつき、それにつられてもう一人の、やたら元気の良い青年もこちらへ声をかけてくる。

「その通り、さっき戻って来た所なんだ。聞く限りじゃ君達二人も朝練帰りみたいだね？」
「おうよ！　魔術の練習でちょっと街の外にいってきたんだ。俺らのギルドの訓練所じゃ魔術の訓練は禁止されてるからな！」
「だからってなんで俺までつき合わされなきゃならんのだ。おかげでこっちは魔力切れのお前を運ぶハメになったんだぞ」

え？　魔術ってあそこで使ったらダメだったのか？

「それ本当か？　俺今朝訓練所で魔術の訓練しちゃったんだけど！」
「おいおい、そりゃヤバイぜ？　前俺がやったらギルドの方から罰則が来て、ランクポイントの削減か罰金かの二択を選ばされたぞ？」

そんな、こりゃ来てそうそうマズい事になったぞ……。

「違うだろ。あれはお前が放出系の魔術で訓練所の機材をぶっとばしたからだろ。　すまんな、脅かせてしまって。別に操作系や、周りに被害だ出ない限り罰則なんてないから安心してくれ」

そうか、危なかったかもしれない。

「そうなのか、いやぁ驚いた。来て早々罰則なんて食らったら目もあてられないからなぁ」

「へぇーアンタ最近この街に来たのか。どっから来たんだ？」

二人組みが、話しながら浴槽へと向かってくる。

テンションの高い方の青年はオレンジ色に艶めく赤茶の髪を短く刈り込んでいて、活発そうな印象に良く合う姿をしている。

もう一人の苦労してそうな彼は、青灰色（スレートグレー）の髪を伸ばし、深い青色の輝きを静かにその瞳に湛えている、全体的に落ち着いた雰囲気だ。

「ただの辺鄙な田舎の村からさ。冒険者になったのだってこの街に来てからなんだ」

参ったな、出身地の事はなるべく突っ込んで聞いてもらいたくなかったんだけど。

「珍しいな。この街に来るのは大抵、他の街でギルドに入った後に来る物なんだが。結構ハードル高いんだよこの街。　任務の難易度なども地方とこことじゃ雲泥の差だしな」

「へぇー、それは知らなかったよ。まぁ慣れるまでは身の丈にあった依頼を受けるようにするよ」

「なぁなぁ！　よかったら俺たちと一緒に依頼受けてみねぇ？　昼には終わる短い奴で何か！」

おっと、これは嬉しいお誘いだ。現状一緒に依頼を受ける人間が数えるくらいしかいないし、丁度いい。

「お、いいね。まだ知り合いが少ないから願ったり叶ったりだよ。遅くなったけど俺の名前はシュテルって言うんだ。宜しく」

「また勝手にお前は……まぁ不服があるわけじゃないから構わないがな、俺も。俺の名前はガーラント。戦士だ」

「俺はファルクス。魔術師だ！　宜しくなシュテル！」

気持ちの良い二人組みだ。見た感じ年齢も俺とそう代わらなさそうだ。

あ、スフィアとも今日もしかしたら依頼を一緒に受ける事になるのかもしれなかった……午後からでもいいか聞いてみないといけないな。

「と言う訳で、スフィアが起きたら伝えておいて貰えませんか？」

風呂から上がり、用事があるからと二人と一端別れ、レオフィスさんの店までやって来た俺。

スフィアはまだ寝ているらしく、店番をしていたスフィアのお母さんに伝言を頼んだのだ。

「はいはい、ちゃんと伝えておくわね。シュテル君だっけ？　これからもスフィアを宜しくね」

「もちろんです。どちらかと言えばこっちがお世話になる事が多くなりそうですけどね」

スフィアから俺の事を多少聞いていたらしく、短い会話を交わし店を後にした。

「お待たせ。早速だけどパーティー申請してもいいかい？」

「お、戻ってきたな。こっちの方で手ごろな依頼を幾つか候補に上げてたから一緒に決めようぜ」

ギルドに戻り、ギルドウィンドウの前で二人と落ち合う。

「その前に、シュテルの戦闘ランクとタイプを確認させてくれ。それによってどの依頼を受諾するか変わってくるだろう」

ガーラントは冷静にこちらの戦力を聞き、それを念頭に入れて依頼を決めようとしている――ん？

「あれ？　ガーラントって獣人だったのか？　さっきは気がつかなかった」

ガーラントの耳は、人と同じ位置から柔らかそうな、髪と同じ色の体毛に覆われた耳が垂れ下がっている。

「ああ、シャワーで流された髪に隠れてたか。見ての通り俺はワウファングだ。ちなみにファルクスも獣人だぞ？」

誘導尋問成功。無事種族の名前を聞き出すことに成功した。だが、また新たな問題発生。

「え？　でもそうは見えないけど」

「へっへっへ、やぱり気がつかなかったか！　俺は何を隠そうハーフケイルなんだよ！　正確には獣人っていうより、竜人だな。さらに言うと半竜人だけどな」

また、新しい言葉だ。なんとかして覚えきらないとマズいよなぁ。

「コイツの種族の特徴なんて、瞳孔の形と首の後ろの鱗くらいだからな。気がつかないのも無理はない」

「なるほど。どれどれ」

確認の為、ファルクスの瞳を覗き込もうと顔を近づける。

若干俺の方が背が高いので、軽く顔を上に向かせる。

髪のように燃えるような色では無く、鮮血を思わせるような真紅

の瞳。

そしてその瞳孔はスフィアのソレよりもさらに細く、縦長だ。

どこかでこの瞳を見たような気がするな。

暫くその瞳を見つめながら考え込んでいる所に、周りから囁く様な、若干色めいたような黄色い声が聞こえてくる。

「キャッ！　見て、あの二人……」「いけ！　あと少し！　勇気を出して！」

……は！　見ようによっては、まるで今から……。

「バッカ！　やめろって！」

ファルクスが急いで顔を離し、周りへと弁解をしている。

「なんだ、私はてっきり……」「でも何か事故でも起きたらそのまま……」

「朝から良い物を見させて頂きました……今日も一日頑張れそうです」

……腐ってやがる！　顔が近すぎたんだ！

周りの誤解も解け、改めてカード情報の確認をし合う。二人は俺と同じDランクで、中々のやり手のようだった。

「お、シュテルもDランクなのか！　ん、あれ？　お前最近冒険者になったばかりなんだよな？　昔何かしてたのか？」
「あ、ああ、ええと。そこの所は余りつっこまないでくれると助かるんだけど」
「ふむ、剣士なら俺と同じで前衛だな。俺はサポートにも回れるから、基本は中距離から二人の援護に徹する事にするが、問題ないよな？」

二人は余り深くは考えず、何事も無く作戦を決め始める。
助かった、もしかしたら訳ありの冒険者っていうのも結構多いのかもしれない。
しかし、今回の陣形に俺は異を唱える。

「あ、すまない！　俺を中距離にまわしてくれないか？　魔術の実地訓練もしたいんだ。少しでも魔術になれておきたいんだけど、ダメかな？」
「ああ、そういえば訓練所で魔術を練習してたんだったな。今回は一応Dランクの魔物を相手にする事になると思うんだが……やれるか？　それで」

ガーラントは真剣な表情でこちらの意思を確認してくる。それに対して俺は――

「大丈夫だ。やれる！」
「そうか。じゃあ後ろは任せたぞ？　あともう一人の後ろ！　俺たち巻き込んで魔術ぶっぱなすんじゃないぞ？」
「だから大丈夫だって！　何のために訓練してると思ってるんだよ、いつまでも範囲魔術馬鹿だなんて言わせないからな！」

基本陣形は決まった。受ける依頼は、珍しくウィンドウに表示されていたDランクの討伐任務。

『クリムゾーンホーンの討伐』だ。本来北の街道に生息する魔物だが、逸れてしまったのか、西のガルエルム街道で目撃されたそうだ。

あの辺りで活動している冒険者達には荷が重く、今回討伐の依頼が出されたようだ。

「よし、今は八時過ぎだな。そろそろ向かうとするか。昼までに終わらせるぞ二人共！」

「おうよ！　シュテルもなんか用事あるんだろ？　ちゃちゃっと終わらせようぜ！」

「ああ。でも油断は禁物だからな、気を引き締めて行こう」

やはり、男同士のパーティーっていうのも良いものだ。

久々の熱い戦いになりそうな予感のせいか、それともこの二人の熱意に絆されたのか、俺のテンションもいつもよりも上昇中だ！

## 第二十六話「寡黙な戦士と騒がしい魔術師」（後書き）

続きは金曜日以降になります。

感想や指摘など、気楽に書いてくださって結構です。
作者のこれからの励みにもなります。

## 第二十七話「Dランク任務」（前書き）

早いもので、もう５０部目になりました。
終わる頃には何部まで行ってしまうのか、想像も出来ません。

## 第二十七話「Dランク任務」

「そういえば、ガルアーク以外の街門通るのって初めてだよ俺」

三人でガルエルム通りを通過し、ガルエルム街道へと続く巨大な街門を前にして言葉を漏らす。

「へー、て事は王都か首都の方から来たのかシュテルは。あっちは強い魔物はすぐに騎士団に討伐されるから、弱い奴しかいないし退屈だったろ？」

「そういえば、ちょっと前までラット狩りで賑わっていたな。今回は俺達も稼がせて貰ったが、もうそろそろ時期も終わりだな」

三人で街道を歩きながら、この辺りの事情について雑談をする。ガルアーク街道の魔物が弱いのにもちゃんと事情があったみたいだ。

「しっかし誰もいないな、この道」

「それはそうだろう。この街道を狩場にしてる連中じゃクリムゾンホーンは少々手に余る。討伐されるまでは低ランクの人間は近づけないだろう」

「なるほど。じゃあその人達の為にも早く倒さないといけないな。二人はその魔物の特徴とか判ってるのかい？」

ギルドウィンドウで調べる時間がなかったので、俺は敵がどんな姿をしているのか判らない。二人なら恐らく知っていると思うのだが。

「あれだろ？　ヘビーモウラスの赤い奴。大きさはかわらないらしいけどな」

「不正確な情報を自信満々に教えるんじゃない。　クリムゾンホーンは名前の通り、通常のヘビーモウラスの角が赤く変色した変異種だ。決して全身が赤い姿なんてしていないから、気をつけてくれ」
「了解。て事は証明部位も同じ角って事でいいのかな？　あと残留部位も肉って事で？」

初めて食べた肉が確かヘビーモウラスの肉だった。今度はキチンと調理して食べて見たかったんだけど……。

「残念ながら肉じゃないんだ。あいつの肉も一応入手可能だが、食えたもんじゃない。買い取って貰えるのは皮の方だけだ。丈夫で伸縮性に優れているそうだが」
「なんだ、ちょっと残念だなぁ……あ！！　どうしよう！」
「ん？　どうした、何か問題でもあったのか？」

肉で思い出した……部屋に置いてきた皮袋に、昨日の戦利品のピグルの肉を入れっぱなしにしてたんだった！

「――――って訳なんだ。もったいない事したな……あとで捨てておかないと」
「何言ってんだ？　そんな早く悪くなるわけないだろ？　魔物の部位なんて二三日じゃ劣化なんてしないって」
「そ、そうなのか？　普通冷たい所で保存でもしてなきゃ肉ってダメにならないか？」
「それは魔物以外の肉などの食材の話じゃないのか？　あんな姿でも一応魔物なんだ、まだ大丈夫のはずだが……」

まーた無知から来る失言だよ。そろそろ本格的に勉強しないとマズいなぁ。

「あ、そうか。あんまり家畜みたいで忘れていたよ」

とりあえず、誤魔化しておく。

「ひっでぇな、あんなんでも一応魔物だぜー？　おっと、そろそろ目撃報告があった地点だぞ」

「たしか、ここのヘビーモウラスを襲っていたとの情報だったが……」

辺りを見渡してみると、草原の所々に土を掘り返したような足跡が刻まれている。

「随分暴れてたみたいだね。一応同じモウラス種なんだし、仲良くしてればいいのに」

「恐らく群のボスが喧嘩を売ったんだろう。今はクリムゾンホーンがリーダーになっている可能性もあるな……」

「マジかよ。じゃあ取り巻きにヘビーモウラスもいるかもしれないって事か？　３人で来たのは失敗だったかもしれねぇな」

ピグルの時もそうだったけど、俺は魔物の群と縁でもあるのか？

一頭だけなら簡単に倒す自信はあるけど、複数相手となるとちょっと厄介かもしれない。

「いや、あくまで単独で行動しているはずだ。いくら元は同じ種でも、異種族は異種族だ。特殊な例を除けば共に行動するなんて事はないと思うが」

「なるほど。でも念のため見つけてもすぐ攻撃を仕掛けないで、辺りに取り巻きが居ないか確認するよ」

それからさらに三十分程街道沿いに進み、そこで馬車の荷台の残骸を発見した。

モウラス種は、早く動く馬車を巨大な魔物と勘違いして、突進をしてくるという困った習性があるのだ。

恐らくこれもその被害にあったのだろう。

「荷台を捨てて逃げたって所か？　ギルドに報告がきてねぇし、まだ襲われてから時間がたってないっぽいな」

「ああ、恐らくまだこの付近に居る可能性が高い……」

二人はそろそろ遭遇する可能性が高まってきた為か、表情を引き締めお互いの得物を取り出した。

ファルクスは黒塗りのスラリとした、細身のステッキのような杖を持ち、ガーラントはポールの両端に刃の付いた短槍を構える。

俺は今回は魔術を主体に戦うつもりだったので、貰った杖を腰から抜く。

辺りを警戒しながら、壊れた馬車の荷台周辺を捜索する。そして街道から少し外れ、草原を進んでいる所でソイツを発見した。

「居たぞ、クリムゾンホーンだ。取り巻きは……チッ、珍しいな、二匹いる。まぁそれ程数は多くないし、何とかなるだろう」

「そんじゃ作戦はどうする？　俺は後ろで隙を狙って魔術を打ち込むが、一人で三匹引き付けるのは辛くないか？」

「それなら、俺も剣を持って一緒に……ちょっと待て！　よく見てみろ！」

取り巻きのヘビーモウラス――いや、取り巻きだと思われた残りの二頭もまた、その角を真紅に染めていたのだ。

「な！　三頭だと！？　まさか群ごと移動してきたのとでも言うのか……？　いや、それはないか。しかしまいったな」
「なぁなぁ、ぶっちゃけヘビーモウラスじゃなくても大差ないんじゃね？　ちょっと力が強くて打たれ強くなっただけだろ？」

たしかに、ファルクスの言う事も一理あると思う。以前戦った時のように、寸での所で進路から逸れ、一気に脇腹を突き刺せば……。

「お前は魔術師だからそう思うかもしれんが、奴らの突進は厄介なんだぞ？　途中で進路を変える事も出来るようになっている上、皮膚が丈夫で思うように傷を与えられない」
「ゲッ、そうなのか？　じゃあ進路上に魔術ぶっぱなしてハイおしまい、なんて事も出来ないのか」

なるほど、そう簡単にはいかないって訳か……なら。

「じゃあ、こういうのはどうだろう――――」

「それだとシュテルが危ないんじゃないか？　俺としては有り難いけどよ」
「たしかに、それが可能ならば最善と言えなくも無いが、こいつの魔術の範囲は馬鹿に出来ないぞ？」
「大丈夫大丈夫。一応神聖術も使えるし、ガーラントも水の魔術で治療出来るだろ？」

ガーラントは多少だが水の魔術の適正があり、多少の外傷なら癒す事が可能だそうだ。
前衛もサポートも出来るなんて、ちょっと羨ましいくらいだ。

「あくまで軽い怪我だけだからな？　しかし随分奇抜な作戦を考えたな」
「だな。でも面白そうじゃねぇか！　うまく行けば一網打尽って奴だ！」
「じゃあ早速準備に取り掛かろうか」

「うおおおおおお！　思ってたよりも重いいいい

れを俺が引っ張っているのだ。

もうすぐ先程の三頭が居た場所の近くだ。そろそろ引き返す用意をしないと……

「「「ブモオオォォォォォォ！！！！」」」

「よし、釣れた！」

ここから二人が隠れている場所まで逃げ切って、そこで決着を付ける！

果たして上手く行くか……！

## 第二十八話「一モウ打尽」（前書き）

今回も、やや残酷な表現があります。
でも実際には、この時期なら誰でもやっている事かもしれません。

## 第二十八話「一モウ打尽」

強く地面を蹴り、その勢いで滑るように移動する。
スケートのように一定間隔で加速し、荷台を引いて街道を進む。
応急処置しか施していない車輪が大地を転がる。
軸がブレてしまっているのか、強く引く度にガタガタと荷台を揺らし、荷台を引くために取り付けられている、本来ならスレイランナーやロードランナーに取り付ける鎖を通じて、腕に強い振動が伝わってくる。

「そろそろ手の感覚が無くなってきたぞ……でももう少しだ！」

鎖を掴む手が振動の所為か血の巡りが悪くなり、青白くなって来ている。
だが、もうすぐ二人が待ち伏せしている地点だ。

今回の作戦は、荷台である程度引き付けたら速度を落とし、そこに三頭を突進させる。
そして、そこへ待ち受けていたファルクスが、荷台ごと炎の魔術で焼き払うと言う物だ。

幾ら方向転換が可能で、運動性能や耐久面も優れてるとは言え、獲物に突っ込んでる最中にその獲物ごと吹き飛ばせばひとたまりもないだろう。
そう思っての作戦なのだが、問題は俺がその魔術に巻き込まれないか、という点だ。

ファルクスは大規模な魔術が得意な反面、細かいコントロールを苦手とし、もしかしたら俺が安全圏内へと退避するのが間に合わな

いかもしれないと危惧していたのだが、俺の移動速度を見て「これなら大丈夫そうだな、んじゃあ全力でぶっぱなさせて貰うぜ！」と嬉しそうに『ニカッ』という擬音が聞こえてきそうな笑みを浮かべていた。

街道沿いの茂みに伏せている二人を見つけ、合図を送る。

「そろそろ速度を落とすぞー！　準備してくれー！」

風の魔術の出力を弱め、段々と速度が落ち、手にかかる負担も大きくなって来た。

手に食い込む鎖の痛みに顔を歪め、そろそろ手を離して離れようとしたその時、後ろから激しい衝突音と荷台の破片が同時に襲ってきた。

「いよっしゃ！　”ブレイズアースフレア”」

痛みに一瞬怯んだが、聞こえてきたファルクスのワードに反応し、疲労の溜まった足を鞭打ち強引に大地を蹴る。

そして再び風を纏い、一気にそこから距離を取る。

その刹那、落雷を思わせる轟音と共に激しい熱風が吹き荒れる。

振り返ると、荷台のあった地点を中心に、直径１０メイル程の範囲がドーム状の爆炎に包まれていた。正直これに巻き込まれていたらと思うとゾっとする。

「シュテル、怪我はなかったか？」

ファルクスの魔術のデタラメさに冷や汗を流しつつ、作戦の成功を確信し一息ついた所にガーラントがやって来た。

「魔術の影響はないんだけど、荷台の破片が背中に当たったと思うんだ。見てくれないか？」
「そっちの可能性を忘れていたな。どれ、見せてみ――――！」
俺を心配する声が突然途絶え、息を呑む音が聞こえる。
「どうしたんだ？　そんなに酷いのか？」
「お前、痛みを感じないのか……？　いや、見えていないからか……ちょっとまってろ！」
どうやら思ったよりも酷い怪我だったらしい。そう言われてみると、背中が妙に熱い。
背中を雫が伝う感触もしていたが、どうやらこれは汗ではなく血だったようだ。
そして怪我だと自覚した途端、強烈な痛みを感じ始める。
逆プラシーボ効果って奴なのかな？　気が付かなきゃよかった……。
「今から外傷に魔術を当てる、お前は神聖術で内部から治療をしてくれ！　痛むと思うが、我慢してくれよ――！」
痛みに掻き回される思考を気力で押さえ込み、目をつぶり意識を体内へと向ける。
魔素が背中に行くように、細胞が活性化するように。
細胞分裂を加速させるような、そんなイメージをしながら意識を研ぎ澄ませて行く。
すると同時に、外からも暖かいような、冷たい清流のような、矛盾しているようだが、心地よい流れを感じ始めた。
これが治癒の魔術なのか？

「傷の治りが割りと早いな。神聖術の適正が高いのか？　これなら俺でもなんとかなりそうだ」

神聖術と治癒魔術の併用は期待以上の効果を出してくれたのか、ガーラントの声色もいつものような落ち着きの色を取り戻し始める。

「有り難うガーラント。そういえばファルクスはどうしたんだ？　戻って来る様子がないけど」

「ああ、張り切ってたからな。朝に使った魔力も回復しきっていないのにあんな大技かましたんだ、恐らくまたぶっ倒れてるんだろ」

徐々に身体の調子を取り戻し、背中の違和感も余り感じなくなったので、今度は疲れた身体全体を癒すようにイメージを切り替える。

ふう、一時はどうなるかと思ったが、無事依頼を達成できたみたいだ。

そういえば、爆炎で証明部位やら残留部位やらオジャンになってなければいいんだけど。

一息ついて草の上で足を伸ばす。身体の筋が緊張していたのか、足や背中を伸ばすと心地良い痛みと言えばいいのだろか？　気持ちの良い刺激が五体を駆け巡る。

まだ荷台は炎に包まれており、燃え広がる前になんとか消火しないといけないなー等と考えていた。

「ブモアアア

そいつは、憎しみと怒りを振りまきながら、近くにいた獲物に――気を失い、街道の脇に倒れているファルクスに向かい――

「ファルクスーーーーーー！！！！」

俺と同じくその存在に気が付いたガーラント。しかし俺の治療の為に大量の魔力を失い、足元がフラついている。

そんな姿を見ながら、俺は咄嗟に行使していた神聖術を治療から強化にベクトルを変更。

地面に付けていた左手を極限まで強化し、その手で大地を強く押し込んだ。

反動で一気に地面スレスレを飛び、空中で体勢を整え足でさらに大地を蹴る。

そして、なんとかファルクスの前へと体を滑り込ませる事に成功するのだが、もう目の前まで、焼け爛れ、赤黒い角を生やした悪魔のような頭が近づいてきていた。

「くっ！　間に合わない！」

ファルクスを非難させる時間もなく、咄嗟に俺は剣を抜き放ち、角と角の間へと向かって突きを放つ。

「止まれえええええええ！！！！」

瀕死とは思えない猛烈な力に、徐々に押され始めているのか、クリムゾンホーンの身体がジワリジワリとこちらへと近づいてくる。

燃えていたのだし、火事場の馬鹿力か？　それとも、蝋燭は最後の瞬間に大きく燃えると言うし、そっちか？
どちらにしても、火に関係している事が皮肉だな！

ついに角がこちらの肩まで到達し、革のベストを貫き皮膚に当たる。肉に突き刺さる痛みに備えようと、身体を強張らせたのだが――

「もう、終わった。こいつはもう死んでいる」

いつの間にか隣にいたガーラントが、既に敵が事切れている事を告げる。
よく見ると、俺の身体が押されていたのではなく、刀身が頭に吸い込まれて行くのを無視してまで、こちらへと近づいて来ていたようだ。
刀身の半分以上が、その赤い悪魔の頭に飲み込まれてしまっていた。

「まったく！　後先考えずに使った結果がコレだ！　戦場で意識を失うなんて、死ぬことと同義なんだぞ！」
「張り切るのはいいけど、少しはフォローする人間の事も考えてくれ！　パーティーなんだからそこの所を考えてくれないと困る！」

今回ばかりはガーラントと共に、俺もファルクスへと説教をする。

「わ、悪い……シュテルにだけ身体張らせるのがなんか悪いと思っ

てさ、俺も全身全霊でやろうと思って……」
「その結果、打ち漏らして自分の身を危険に晒すなんて言語道断だ！　反省しろ！」
「そうだ！　反省して今回の討伐部位のポイント、俺に寄こせ！」
あ、口が滑った。
「ちょちょちょ！　ちょっと待てよ！　それはいくらなんでもねーよ！　一応俺だって作戦の立役者だぜ？」
「あ、今のは冗談だから。まぁ、今回の事も気絶したファルクスをそのままにしたこっちにも責任があるし、死体を確認せずに油断した所為もある。そして、俺が大きなダメージを受けた事も原因だと思うんだ」
今回は、俺の見通しの甘さもあったのだ、それに気絶した彼を放置したガーラントにだって責任はある。俺達3人の責任だ。
「だから、今回は3人の連帯責任だよ。あえて罰を与えるとしたら、これからの朝練に俺も混ぜて、いつもより厳しくやるって所かな？」
やっぱり誰かと一緒に訓練するのは楽しいし、身の入り方も違って来る。
「そ、それはいいけどよ……ガーラントもいいのか？」
「俺としても馬鹿を見張る人間が増えるのは歓迎だ。それに、戦士としてもシュテルのような特訓相手が増えるのは大歓迎だし異論は無い」
「んじゃそれで決まりって事で。これからも宜しく頼むよ二人共」
この街に来てから三人目、四人目の仲間が出来た事が何よりも嬉

しく、先程までの危機を忘れて笑みを浮かべてしまう。
そんな俺を見て、二人も笑みを浮かべ、手を差し出してくる。
三人でガッシリと握手を交わし、出会いを喜び合うのであった。

「そういえば残り二頭の討伐部位ってどうなったんだろ？　ていうか焦げてても判別出来るのかね、これ」
「「あ゛」」

## 第二十八話「一モウ打尽」（後書き）

丸焼き三頭分を作り上げるお話でした。

策を練るばかりで、主人公らしい戦いをイマイチできていな気がしてなりませんが、これでも主人公です。

## 第二十九話「空腹は最高のスパイス。なら元から美味しい物ならどうなるの？」

個人的に、美味しい物をおなかが減っている時に食べると、胃袋の限界を超えてしまうと思います。

食べ物の話を書くのは好きなのですが、その書いてる時間次第だとある種の拷問のようにも感じてしまいます。

## 第二十九話「空腹は最高のスパイス。なら元から美味しい物ならどうなるの？」

焦げてしまってはいたが、三頭全ての角を回収し、無事ギルドでのポイント交換も完了した。

今回はギルド側の調査に不備があった事も踏まえて、依頼達成のポイントにも色をつけてくれた。

証明部位は一人一組の分配となり、合計で３５ポイントも貰うことが出来た。

カードを見ると『シュテル　Ｄ　７４／２００』とあった。

危険度の割りに少ない気がしなくもないが、前回のは一度に五回の依頼を、それも一般人や低ランクの人間を連れていた為の補正もあったからであって、通常の依頼ならこんな物らしい。

「おっしゃ！　あと三回くらい討伐依頼をこなせばＤ＋になれそうだぜ！」

「俺は後一回、首都までの護衛依頼をこなせば上がりそうだな。シュテルの方はどうだ？」

二人共、Ｄランクになってから既に何度も依頼をこなしてきたのか、あと少しで次のランクに上がるらしい。

若干置いていかれるような、取り残されるような感じがしたが、年季が違うのだ、当然だろう。それにこれから付いていけるように努力すればいい話だ。

「俺はまだ半分にも満たないよ。もう暫くこの街の事とか、色々勉強したいから、それまではボチボチやって行くつもりだよ」

「そうか、それもいいだろうな。俺たちも実はまだこの街に来て半

年も経っていないんだ」
「そそ、俺らラシア共和国からここまで転々としてきたんだよ。暫くはこの街に留まるつもりだ。なんつったってここの依頼は他より難易度が高いからな、ポイントもたんまりだ」
「まぁ、その分危険も付きまとうがな。一応俺達の方がここが長いんだ、もし気になる事があったら気軽に聞いてくれ」

二人とはそこで別れる事となった。二人はこのまま、護衛の依頼を探すそうだ。
次に会う頃には、ガーラントだけでもD＋にランクアップしているかもしれない。

まもなく正午を周るので、何か胃に入れたかったのだが、スフィアもきっと依頼を済ませてギルドに来るだろうと思い、入れ違いにならない用ラスエル通りまで行かず、近くの屋台で軽食を取る事にした。

さすがに冒険者が多いだけあり、この時間になるとこの通りまで出張で屋台を出す店も多い。
俺は袋状の薄い生地の中に、濃い目に味付けされた麺と野菜、それと鳥の肉だろうか？　柔らかく、程よく脂の乗った肉が詰め込まれている物を２つ購入した。
値段は一つ１２０メルスと中々に良心的で、一つでパンの様な生地と麺の両方が取れて腹が膨らみそうだ。
これはピナタと言う料理らしい。

「おお！　これウスターソースだ！　鶏肉の焼きソバって所かな？　生地も思ったよりもしっかりしてるし」

これでもし、薄い生地ではなく柔らかなパンにはさまっていれば、そのまんま焼きそばパンだ。

でも実際に食べた事は無いんだよなぁ、今度作ってみようか。

生地は小麦でなく、トウモロコシの粉で作ったかのような物だった。

スパイスの効いたソースと鶏の脂がお互いの旨みを引き出しあい、麺は表面が少しカリっとするまで良く焼かれ、食感にも変化があり味覚以外も刺激してくる。

屋台の前であっと言う間に食べ終わり、店員のおじいさんに礼を言う。

「おじいさん、これすっごいおいしかったよ！　これいつもはどこで食べられる？」

「ラスエル通りにある、シンチョウ亭と言う店じゃよ。今週は夜の営業もしておるから、また来ておくれ。それに、お前さんにはむしろ礼を言いたいくらいじゃ。あんまりおいしそうに食べるもんじゃから、釣られて買う客が、ほれ」

食べるのに夢中になっていて気が付かなかったが、屋台の周りには俺と同じようにピナタをほお張っている人達が大勢いた。

もしかして、食べてる最中そんなに顔に出てただろうか？

非常に満足の行く昼食を取り終え、再びギルド内でスフィアを待

つ事にする。
　待つ事十分。昨日と同じバニテイルの女の子とスフィアがギルドに入って来たのを確認した。
　しかし、昨日一緒に居たネズミのような少女は一緒ではないようだ。

「お疲れ様、二人共。今日はあの子は一緒じゃないんだね」
「あら？　ええと、そうシュテル！　昨日ぶりね。　ミステは今日の午前中は別行動よ」
「ただいま～。二人だったから、疲れた～お腹減った～」

　ふむ、あの子はミステって言うのか。

「そういえば、君の名前まだ聞いてなかったよ。教えてくれないかい？」
「あ、言ってなかった？　私はセラよ。さっき言ったかもしれないけど、あの子はミステ」
「そうそう、二人共昨日は自分の名前名乗らなかったもんね。シュテルは今日は誰かと一緒に依頼受けたの？」
「今日は鞘で知り合った人と一緒にDランクの討伐依頼に行って来たよ。クリムゾンホーンって魔物だった」

　今言った依頼内容に、二人が反応を示す。

「あら！　貴方が倒してくれたの？　ギルドの方からE＋以下の冒険者は討伐が終わるまで、あの街道での戦闘行為は禁止されていたのよ。助かったわ、ありがとね」
「お～！　早速Dランクの依頼受けてみたんだ！　どうだった？　やっぱり強かった？」

スフィアはもうじき自分も戦う事になるかもしれない、Dランク以上の魔物に興味があるらしく、身を乗り出す勢いで話を聞きたそうにしている。

「話の前に、依頼の達成報告をしてくるといいよ。それにおなか減って無い？　二人共。どこかお店に入る？」

「あ、そうだったね。じゃあ行こっかセラ。ちょっと待っててね～」

達成報告を終えたスフィアは「報酬がケチられた～」と不機嫌そうに耳をピンと立て、セラは「アンタが部位を砕いたからでしょ！」と、宥めているのか責めているのか、と言った具合だ。

「待たせたわね。どこかおすすめのお店知ってる？　スフィアと一緒だといつも同じ所に連れて行かれるのよね」

「なによ～。『ワイスラーの台所』の料理は天下一品だよ！　それにキャロンの料理だって沢山あるじゃない」

「私は別に、特別キャロンが好きってわけじゃないの！　ただ、あるのならそれを選んでるだけであって……」

サラは少し言葉を濁し、スフィアの言葉を否定するが、それって普通は好きだって言わないか？

「それじゃ今日は俺、行きたい店があるんだけどいいかな？」

「え？　まさかまた『オボロ山の里』？　出来れば遠慮したいかな～……なんて」

スフィアは俺が他の店を知っていると思っていないのか、以前行ったあのハズレの店を思い出し、嫌そうな声を上げる。

「違うよ、さっきギルドの前においしい屋台があってさ、そこの本店に行こうと思うんだ」
「へ～！　私達が来た時にはもう何もなかったけど、シュテルがおいしいって言うなら期待できそうだね！」
行き先も決まり、早速3人で目的の店へと向かう事にした。
「そういえばシュテル。貴方もう食べたのに、大丈夫なの？」
え？　そんなの余裕に決まってるじゃないか。あれならもう五個でも十個でも食べられそうだ。
まださっきの味を忘れられる事が出来ず、他にはどんな料理があるのか舌なめずりをしながら先行する。
そんな様子を、二人に笑われてしまうのであった。

## 第二十九話「空腹は最高のスパイス。なら元から美味しい物ならどうなるの？」

活動報告にも書きましたが、この度のランク入りは皆さんのおかげです。
本当にありがとうございました。

## 第三十話「前衛泣かせの霧使い」

「ずるい。私は一人お腹を空かせていたと言うのに、三人は仲良く食事だなんて……まさかこの私自らが犠牲になるとは……！」

昼食を取り終わり、再びギルドへと戻る俺達。
あの後無事に店を見つけ、早速俺はピナタを三個注文した。

二人も俺が頼んだのを見て、同じく三個ずつ注文したのだが、一つ一つの大きさが想像以上だったのか――

「え！？　こんなにおっきいの！？　食べ切れないよ～！」
「ちょっと、貴方が三つも注文するから私達まで！」

きっと、一口サイズの物だと思っていたのだろう。
無論、二人は一つずつ食べて満足し、俺は自分の分も含めて、合計七個をペロリと完食した。やっぱりコレ美味しいなぁー癖になってしまう。
俺は他にも、根菜と思われるホクホクした野菜が沢山入ったスープも頂いた、スープはサッパリめで、女性陣にも好評のようだった。

ギルドに戻ってみると、休憩スペースに既にミステが来ていた。
ご飯を食べて来た事を伝えると、酷くショックを受けたのか、ガックリと項垂れながら、冒頭の言葉を呪詛のように呟き始めたのだ。

「おい、ミステがヤバいぞ……」「やっべぇ、今日はあいつに近づかないほうがいいぞ！」
「あの男、剣士だよな？　スフィア嬢はともかく、あいつやべぇんじゃねぇか？」「怖い怖い、またアイツに前衛が泣かされるぞ！」
「前衛泣かせのミステなんて、ある意味二つ名みてぇなもんだよな」
「くわばらくわばら」

周囲に居た冒険者達が、口々にこちらの様子を見て、恐怖のような、半分楽しんでいるかのような言葉を並べる。
この子、有名人なのか？

「あはは～。ミステ機嫌悪くなっちゃった！　ごめんね～シュテルがどうしてもお腹空いたって言うから～」
「そうそう、だから今度シュテルに何かおごって貰いなさいよ」

お、おい！　二人共！

「そう、じゃあ今日の犠牲は……名前、もう一回教えて」

テーブルから顔を上げ、若干邪悪な笑みをこちらに向けるミステ。
そして、俺の名前をもう忘れたらしい。

「シュ、シュテルだよ。宜しく……」
「そう、シュシュテル。宜しくシュシュ」
「や、シュテル「宜しくねシュシュ」はい、宜しく」

邪悪な笑みがより一層深まり、その勢いと迫力に思わず頷いてし

まう。
　まぁ、アダ名だと思えばなんとか……。
「ぷくく……シュシュだって～。髪でも結ぶのかな～？」
「笑っちゃダメよ、そう、犠牲よ。シュシュは今日の犠牲なんだから」

　チクショウ！

「へぇ、学者ギルドなんてあるんだ。診断所じゃ聞かなかったけど」
「そう。学者ギルドは商業にも職人にも属さない、孤高の存在。ひたすらに知識を求め、研究する崇高な職業なのだ……」

　あの後なんとかミステを宥め、今回の依頼を決めた。
　依頼はEランクの討伐依頼で、ガルアーク街道付近の森で大量に発生した”スタンプビー”と言う魔物の討伐だ。
　この魔物は少々特殊で、討伐部位を持っていってもポイントにしてもらえず、その巣を持っていって始めてポイントに換算してもら

えると言う。

「じゃあさ、図書館みたいな施設もあるのかい？　ちょっと勉強不足で、調べ物をしたいんだけど」

「さあ、シュシュも知識への探求にその身を捧げるのだ……書物の閲覧は、半日で１０メルスとなっております。レンタルには身分証を提示し、情報を登録してもらう事となりますが、今なら入会金無料と大変お得になっております。さらにギルドメンバーは自由に閲覧する権利も与えられますので、この機会に是非貴方も学者ギルドに――」

突然、人が変わったような眩しい笑顔でこちらを見上げ、いつものような腹の底から響いてくるような声ではなく、容姿に見合ったかわいらしい声でハキハキと喋り始めるミステ。

この豹変ぶりは一体！

「――という感じで、受付の仕事をしたりもする。どう……？　学者ギルドに入る気になった？」

「や、やめておくよ……」

「セールストークまでさせておいて……また私が無駄な労力を使わされただと……！？」

……この子面白いなー疲れるけど。

「ミステ、随分なついてるわね。髪の色が似ているからかしら？」

「違うよ、きっといじり甲斐があるからだよ」

「そんな事言ってないで、もっと近くに来てくれよ！　なんか疲れる！」

そんな俺の助けを呼ぶ声を聞き、また邪悪そうな笑みをうかべる

小柄な少女。
いつもなら、小さい子をからかうのは俺なのに！

森の入り口へと到着し、入る前に打ち合わせをする。

「いい？　私は基本、後方から二人を襲うビーを打ち落とすから、二人は巣の捜索をお願い。打ち漏らしも出ちゃうと思うから、少しは警戒もして欲しいけど、大丈夫？」
「問題ないよ。巣は木の枝になってるんだろう？」
「ええ、すごく大きいから、すぐにわかるはずよ。巣を見つけたら無理に攻撃しないでミステに任せて。下手に近づいたり攻撃したら、一気にビー達が襲ってくるから」

どうやら巨大なハチの魔物らしいが、針の代わりにスタンプの様な器官がついているとの事。
刺される事はないかわりに、触れると強烈なかゆみに襲われるという、厄介な相手だ。
それがもし、何十匹と同時に襲ってきたと思うと……。

「私は巣を見つけるまでは暇ね……シュシュ、私が襲われないようにしっかり盾になるのだ……」
「守りはするけど、盾になるのは簡便願いたい。そういえばミステはどんな魔術を使うんだい？」
「水の放出と土の放出。後は分かるな……？」

いや、何を分かれと。

「じゃあ入るわよ。先導は任せたわ」

「おっけ～。シュテルもいつまでも遊んでないの！　ほら、行くよ！」

えーなんで俺こんな扱いなの？

森に入ってすぐ、四匹のハチ型の魔物が現れた。大きさは通常のハチとは比べるまでもなく、裕に十センチを超えている。

「増援がどっちから来るのかよく見て！　近くに巣がある筈だから！」

「了解！　スフィア、行ける？」

「大丈夫だ――よっと！」

早速襲ってきたスタンプビーを、スフィアは逆手に持ったダガーで両断する。

間近でスフィアの戦う姿を見るのは何気に初めてだ。ダンスを踊るような軽やかなステップで攻撃をかわし、そして流れるように振るわれた刀身が煌めき、増援のビーを次々に落としていく。

見事としか言いようが無い戦いぶりだ。これは俺も負けてられない。

午前の依頼で魔力を消費していたので、まだ余力はあるだろうが、念の為剣で戦う。

最初の四匹は等の昔にスフィアとセラの攻撃と落とされ、俺は次々と現れる増援を相手にする。

「俺が引き付ける！　スフィアはあっちの方を見てくれ！」

先程から増援が向かってくる方向を指し、こちらは着ていたベス

トを脱ぎ、振り回し始める。
ハチなら黒い物を標的にするし、早く動く物にも敵対心を向ける。
なんだか今日は囮役ばかりだが、そんな日もあるだろう、うん。

視覚的刺激により、こちらを標的と定めて襲い掛かる無数のビー。
剣での一閃で、直線状に並んでいた三匹を一度に両断し、そのままバックステップをしながら剣を反す。
離れる俺を追いかけてきたビー達は、返す刃を避けられずそのまま更にその数を減らす。

何度かそうして数を減らしている内に、スフィアの声が森に響き渡る。

「あったよ～！　こっちこっち！　二つもある！」

声のする方向へと向かうと、既に事が済んでいたようだ。
背の高い木の上には、直径3メイルはあるだろう巣が、まるで歪な果実のようにぶらさがっていた。
そして巣の周りには、オレンジ色の煙のような物がまとわり付いていて、上から次々とビーが落下してくる。

「私の魔術は霧。大地のガスと水を合成して使う。小型の魔物ならこれで解決するという便利な魔術……」

なるほど。殺虫剤のような物なんだろうか？　これなら巣の中に残っていたのも一網打尽だ。

巣から落下してくるビーもいなくなり、風を纏わせた矢を放つセラ。破壊力の増した矢は、見事に巣と枝の接着面を打ち抜き――

「ナイスキャッチ！　結構軽いねコレ」

そして下で待ち受けていた俺がキャッチする。

見た目よりも遥かに軽いが、両手が塞がるし前が見えない。

巣を地面に置き、念のため巣を剣で突付き、ビーが残って居ないか確認する。

すると突然、巣の中に残っていた煙が噴出してきて……。

「うぇっ！　ぺっぺっ！　目が！　いててててて！」

余りの強烈な刺激に、目から涙が流れ始める。急いで腰に挿していた杖を引き抜き、顔の周りの霧を風で吹き飛ばす。

「な！　私の霧から逃れるとは……大人しく、犠牲になるのだ！」

俺が魔術から逃れたのが面白くないのか、もう魔物は討伐したと言うのに魔術を放つミステ。

「目がみえないー！　前衛泣かせってこういう事かー！」

## 第三十一話「シュテルズレポート」（前書き）

ようやく、この世界で起きた出来事の片鱗を知るシュテル。

## 第三十一話「シュテルズレポート」

「こちらが閲覧許可証になっています。時間は今から八時間、午後四時までとなっておりますのでごゆっくりどうぞ。……私は六時上がり。その後ごはんにつれてけ」

受付嬢、というかミステは案内が終わると、急に素に戻り食事を奢れと言い放った。

先日、魔術から俺が逃れた事をまだ根に持っているらしく、俺達が食べた店へと連れて行くまで許さないと言うのだ。

「わかったから、そろそろ機嫌治してくれよ。ちゃんとお腹いっぱい食べさせるから」

「もう怒ってない、冗談だよ。じゃあ何か分からない事があれば聞きに来て、ここにいるから」

「え？　普通に喋れたのか！」

「静かにして。一応仕事中」

セールストークでも、いつものような邪悪な声でもない普通の声で普通に話すミステ。

その姿に驚かされたが、これも計算の内だったらしく「また驚いた、計算通り……」と、といつもの表情に戻っている。

本当に愉快な子だなぁ。標的が俺じゃなければ純粋にそう思えるんだけど。

さてと、ようやくこの世界の事を調べられるな。

歴史についての文献はどこかなー。

この世界は、どうやら植物の生態系が以前行った世界とよく似ているという事がわかった。
前々からその片鱗を感じる事はあったのだが、この書物の記述を見て、その推測を確信へと変える。

「すごい！　この世界の柑橘類は成熟の度合いで、ユズやオレンジやレモンの味にかわるのか……！」

え？　歴史はどうしたって？　いやだって『食べられる果物』なんて本があったら、そりゃ開いちゃうでしょ？

「こっちは、土壌の違いで性質が変わるだって!?　これはブルーベリーとブラックベリーなのか？　毒性を持つ場合もあるなんて！」

凄い、この世界は凄い！　二回言うけど、この世界は凄い！　不思議な食材で満ち溢れている！
以前サラダに乗っていたトマトと同じ味の野菜も、どうやら果物に分類されるらしく、その名前が『ブラッドキューブ』と言う。
キューブだよキューブ！　丸いんじゃなくて、四角いトマトだよ！　どんな過程でそんな進化をしたんだろう？

キャロンだって、俺の知っているニンジンとは別な姿だった。
調理されていた時は判り様も無かったのだが、この図鑑を見るに皮は茶色で、皮を剥いて初めてあのオレンジ色が現れるそうだ。
それに、味は知っている物と同じでも、その食感がまったく違うと思われる食材もいくつかあった。バルナだってその一つだ。
本当に楽しいなぁ。この本とか、食べ物関連の書物一式借りていこうかな。

よし、そろそろ本来の目的に移ろう。

『ガルヴェウスの成り立ち』と言うタイトルを見つけ、それを手に取る。
まずは今居る場所の事を良く知る事から始めようと思ったのだ。

この本によると、ガルヴェウスという街が今の様にギルドが治めるようになったのは七十年程前らしい。
そして、以前ヨザークさんの言っていた『ここ何十年も戦争が無い』と言う言葉の意味する所でもあった。

ガルヴェウスは元々ただの商業都市で、支配していたのはこの大陸を治めている”ラピス王国”と言う所だった。

今の首都は”ライズアーク”と呼ばれているが、元々はそこが王国の場所だったそうだ。

しかしある時を境に、急激に魔術への適正を持つ人間が増加、そのパワーバランスが崩れ始めた。

それまで唯の個別の組織だった各ギルドの力が増し、特権階級にあった者達が独占していた魔術や特殊な武具、そう言った物を作り出したり、使いこなす人間が増えたりと成長して行き、遂には独立を求め反乱を起こしたのだ。

最後まで独立を認めていなかった当時の王家を打ち破り、新しい国の、世界の有り方を好しとする貴族が新たな王となったそうだ。

「この本によると、当時の王家を皆殺しにしたって訳じゃないみたいだけど、やっぱり復権を狙っていたりするのかねー？」

しかしこう言ってはなんだが、そんな問題は俺の管轄外だと思うんだよなぁ。

次はこの世界のもう一つの大陸、フォール大陸についてだ。

本のタイトルは『帝国の歴史』と言う。

フォール大陸はここから遥か北に存在する大陸で、海を越えるしか行く方法が無い。

尚、ライズ大陸とフォール大陸の間の海には無数の島が点在していて、その島々を一纏めにして”ラシア共和国”と言う。ファルク

スとガーラントはそこから来たようだ。

フォール大陸は、すべての街を首都である”サイウス帝国”が統治していて、今も昔もその体制はかわっていないらしい。

とは言え、圧制を強いている訳でも過剰な税を課してる訳でもない。ただ純粋に人間を派遣し、治めさせているだけだ。

勿論この帝国にもギルドは存在していて、そこでは一纏めにして”帝国ギルド”と呼ばれている。

こちらの多数の種類が存在するライズ大陸のギルドは、通称”連合ギルド”と向こうでは呼ばれており、交流も有り決して対立などもしていない。

また、こちらの大陸で独立戦争が起き、国力が疲弊していたにも関わらず、漁夫の利を狙うような事もせず、純粋に戦災の復興にも強力するなどと、帝国という名前の響きに反し、とても優しい気風の国のようだ。

そして、復興の際にこちらに渡って来た技術がある。それが魔具だ。

こちらが急激に魔術適正の高い人間が現れたと時同じくして、サイウス帝国でも急激に技術が発展を遂げたのだ。

これまで過去の遺跡などで手に入れるしかなかった魔具だが、その機能を生かす事も出来ずに骨董品扱いをされてきた品々。

だがその解析が突然進展し始め、遂には自分達で再現する事も出来るようになったと言う。

これまで技術力にムラがあると感じていたのは、こういった事情

があった為なのだろう。
たしかに、文明の発達が遅い場所に突然完成品が現れても、そこに到る過程の品々が無ければこうなってしまうのも頷ける。

この二つの大陸に共通している点。
それは、どちらも急激に時代が動き、それが同時期に起きたという事。

そしてその動きの切っ掛けになったのは、魔具と魔術。
この二つに関係する物と言えば、それは魔素だ。
恐らく、その時期に魔素に何かが起きたと見るのが妥当だろう。

だがこれは、果たして問題になりえるのだろうか？
人の技術が発展して行けば、いつかは大きな争いが生まれる事だってあるだろう。
だがそれは、本当に悪い事なのか？

進歩する事を放棄するなんて、出来はしない。それは知能を持ち、文化を持ち暮らす者が自分達を否定する事になる。

そもそも『世界意思が尽きる』とはどういう事なんだろう。

大きな転換期を迎えたのはつい最近のようだし、転換に取り残された人達や文化圏だってまだ存在するはずだ。
やはりここだけじゃなく、いずれは世界中を見て周る必要がありそうだ。

俺は、どうしてこの世界に呼ばれたのか、何をしたら良いのか、まだその答を見つける事が出来そうにない。

「おっと、借りて行く本選ばないと」

歴史書よりも、料理関連の書籍が多かったのはご愛嬌。

## 第三十一話「シュテルズレポート」（後書き）

結局、具体的な事はわからずじまいですが、どうか長い目でみて下さると助かります。

思いのほか第二章が長くなってしまいましたが、まもなくそれも終わりです。

# 第三十二話「警告」（前書き）

割と平和な日常を過ごすシュテル。
それでも、多少の危険は誰にでも付きまとう物です。

# 第三十二話「警告」

初めて学者ギルドを訪問してから早三日。
ここ三日間は、簡単なEランク依頼をスフィア達とこなしつつ、午後は学者ギルドで知識を蓄える、という生活を続けて居た。

以前のDランク依頼でレザージャケットが大きく破れてしまったので、名残惜しいが新しく革鎧を買う事にした。
なので今では依頼を受ける時は、クロースアーマーの上から灰色に染め上げられた革製の胸当てを装着し、手には鉄板を仕込んだ、これまた革製のガントレットを装備している。勿論同じく灰色だ。

どちらもレオフィスさんの店で購入した物だが、色は購入した時のままだ。
さすがに知ってる人の店で買った物を、すぐ色を変えてしまったら色々と都合が悪いだろう。
まぁ変えずとも白に近いこの色ならば、このクロースアーマーにも合うと思うけど。

そして今日も依頼を終わらせ、学者ギルドへと向かっていた。

「シュテルじゃないか。こんな所で会うとは奇遇だな」

声を掛けて来たのは、実技試験以来顔を会わせていなかったグレンダルさんだった。そして――

「貴公か、五日ぶりと言った所か。その節はこちらの対応の遅さ故、面倒をかけてしまったな」

一緒に居たのは、傭兵ギルドの代表格の剣士。最強の剣士と名高い男、エンザンさんだ。

「お二人ともご無沙汰しています。本部には学者ギルドの書物を読む為に最近通っているんですよ」

そう、学者ギルドは街の中央に位置する、ギルド連盟中央本部の敷地内にあるのだ。

以前入った右側の塔ではなく、左側の建物がそれにあたる。

なんと学者ギルドは、コシュアやネイスが通う”雛鳥の学び舎”の管理もしており、教員の殆どが学者ギルドの人間なのだ。

もちろん校舎も学者ギルド内にあり、ギルドの後ろに連なる複数の塔が、校舎であったり資料保管庫であったりとするのだ。

「そうか、知識を得る事も立派な修行になるからな。余り根を詰め過ぎないように気をつけるんだぞ、期待の新人！」

「はい、お気遣い有り難う御座います」

社交辞令か本心かは判らないが、楽しそうに話すグレンダルさん。

二人は中央の建物に用事があるのか、そちらへと歩みを再開したが

――

「どうした、エンザン。立ち止まったりして」

「いや、少々そこの彼に話があるのでな、先に行っては貰えないか」

俺に話？　もしかして、先日の一件についてだろうか？

「先日の件、奴らの沙汰が言い渡されてな。その事について貴公の耳に入れて置こうと思ったのだ」

やっぱりそうか。それにしても古風な喋り方をする人だなぁ。歳はまだ三十にも満たないように見えるけど、それで最強の剣士とまで謳われるなんて、凄い人だ。

「五人は全員除名処分となり、街への出入りを禁止となったのだが、少々気がかりな事がある」

「気がかりな事、ですか？」

「うむ。五人の内二人が、どうやら以前から貴公の事を知っている風な様子だったのだ。その二人はあの事件の数日前に冒険者ギルドから移って来た者でな、もしかしたら冒険者ギルド内部にその二人の仲間が居る可能性があるのだ。故に、貴公には警戒を怠らぬ様にして欲しいのだ」

俺を知っている？　どこかで会った事があるって事だと思うけど、記憶に無いぞ？

「そうでしたか。ご忠告有り難う御座いますエンザンさん。そういえば、今日は二人は何故本部へ？」

「近々大規模な掃討作戦があってな、私とグレンダル殿はその作戦の指揮を任されている故、その打ち合わせに向かっていた所だったのだ」

「なるほど。俺もその作戦に参加って出来ますか？」

最強の剣士、そして本当の実力を出したグレンダルさん。

同じ剣士として、この街の上位に位置するであろう二人の戦いぶりには、非常に興味をそそられる。

「詮索するようで済まぬが、貴公の戦闘ランクはどれ程だろうか？　此度の作戦の参加資格は、Ｃ＋以上であるのが条件なのだが」

「あ、じゃあ俺は無理ですね。まだDランクなので……」

残念、しかし決まりなのだからしょうがないだろう。それに、この二人が指揮を取る位なのだから、相当危険な任務になるのだろう。

「ほう、察するに、初期ランクが高かったとお見受けする。ふむ、今年は例年よりも楽しめるかもしれぬな……」

楽しめる？　なんの話だろうか？

「あの、それってどういう「エンザン。話すのはいいが、そろそろこっちも時間が押している」っと、すみません」

少々時間が掛かり過ぎてしまったようで、グレンダルさんが建物から顔を出し、こちらへと呼びかけて来る。

「いや何、呼び止めたのは元々此方なのだ、気に病む必要などない。また機会があれば、その時にな。それでは失礼する」

背筋をスッと伸ばし、漆黒の胴衣のような服を着たその姿はとても凛をしていた。衣服の擦れる音すら立てず、一分の隙もなく歩み去って行くエンザンさん。

カッコイイなぁ……。

「ようこそ学者ギルドへ！　って、シュテルさん！？」

いつものように学者ギルドの受付へ行くと、そこで受付をしていたのはなんとレストさんだった。

「あ、久しぶりレストさん。レストさんも学者ギルドに所属していたんだ」

「いえ、私は雛鳥の学び舎のお手伝いで来ていたのですが……」

どうやら学者ギルドに所属していない様子。なら何故ここで受付なんてしているんだろう？

「昔ここの生徒だった子が学者ギルドに所属しているんですが、その子が急に居なくなってしまって、それで代わりに……」

「居なくなったって、行方不明とかですか？　捜索とかしなくてもいいんですか？」

先程の話が尾を引いている所為か、必要以上に警戒してしまう。まぁ関係無いだろうけど。

「あ、そういうのではなくて、昔から気難しい子で、何か機嫌を損ねてしまったのかどこかに行ってしまったんです」

「う～ん。学者ってだけあって、偏屈な子なのかな？　どこか心当たりはないんですか？」

「それが神出鬼没で、どこに行ったのか見当もつかないんです。誰かを待っていたらしく、しきりに『遅い。いつもならもう着ている頃なのに』とイライラした様子だったのですが」

あれ？　それってもしかして……。

「あの、その子って丸い大きな耳が付いていて、小柄な女の子ですか？」
「え？　はい、そうですけど、知っているんですか？」
「えーと、ここには何度か来ているので……」
また、機嫌を損ねてしまったか……今度は何されるんだろう。
「あの、もしその子に会うことがあったら気をつけて下さいね？良い子なんですけど、機嫌が悪いと何をするか……」
ああ、それは身を持ってよく知っていますよ……。
今日は二度も警告を受けてしまったし、厄日なんだろうか？

## 第三十三話「見習い鍛冶職人と魔術剣の作り方」（前書き）

今回は解説多目で、退屈かもしれません。

## 第三十三話「見習い鍛冶職人と魔術剣の作り方」

エンザンさんから警告を受けて以来、なるべく人通りの少ない場所への出入りも控え、依頼を受ける時もなるべくこちらから声を掛けた人と組むようにした。
一人で街の外に出るのも持ってのほかだ。

何度か冒険者ギルド内部で、一緒に依頼を受けないかと誘われる事もあったのだが、疑いたくはないが、念の為に断り続けていた。
とは言え、声を掛けて来れた人が他の人にも声をかけて居ると分かると、全て断るのも悪いと思い、こちらから以前断った人に声をかけたりもしていたのだけど。

スフィアやサラ、ミステ達とは最近は一緒に依頼を受けていない。
もしもの事があっては大変だ。
本当の理由を言う訳にもいかず「ちょっと暫く一緒に仕事をしないといけない人が出来た」と適当な理由を作っておいた。
まぁ、ミステとは学者ギルドの方で毎回顔を会わせている訳だけど。

レストさんに言われた通り、あの翌日にギルドへと行くと、今か今かと待ち受けていたかのように、受付でミステが黒い笑みを浮かべていた。
腹いせに何をさせようか考えていたらしく、その日俺は一日、膨大な量の資料の仕分けの手伝いをさせられた。

「部外者がさわってもいいのか」と聞いたが「どうせここにあるのは狂人や奇人の書いた物ばかり」との事。
たしかに資料のタイトルはどれもぶっとんだ名前だった。

「魔素革命！」「破滅する世界を救うワシの救世理論」「子供でも出来る人体実験」「神になる為のワン・ツー・スリー」

これは酷い。よく見ると、全て同じ著者のようだ。

まぁ兎に角、警告受けてから一週間ほど警戒をしていたのだが、結局何も起こらなかった。

ちなみにこの世界の一週間は五日制で、曜日の概念はない。

一ヶ月は三十五日で、〇週目の一日目、二日目、三日目といった感じだ。

今は四月の第七週の三日目。即ち四月三十三日だ。

とりあえず特に変わった事も起きて居ないし、誰かにつけられてるような気配もしない。

声を掛けて来た冒険者の人達も、毎日しつこく誘うでもなく、純粋に一緒に仕事をしてくれる人を探している様だった。

毎日一期一会を楽しむようで、知らない人と短期の依頼をこなすのも楽しくなって来たし、色んな戦い方を間近で見られ割と良い経験になった。

いつも午前中に終わる短い依頼をこなしてから調べ物をしていたのだが、今日は朝早くから学者ギルドへとやって来た。

早い時間にここに来るのは初めてだったのだが、いつもよりも遥かに人が多い事に驚いた。

周りを見ると、ほとんどのが子供だったのだ。
学校と言うのは朝早く行く物だと分かってはいたが、改めてこの様子を見て「学生は大変だなぁ」なんて思った。

よく見ると、コシュア達のような年齢の子の他にも、十三、十四歳くらいの少し背の高い子達も通っている。
初等部があると言う事は、中等部もあるって事なんだろうか？
どんな事を教わっているのか、興味が沸く。
と言うよりもむしろ――――

「学校があるって知ってたら、最初から子供として通ってれば何かと便利だったかもしれなかったなぁ……」

今となっては後の祭りではあるけど、誰かに教えて貰う事や、集団で教えを受けるなんてのも面白かったかもしれない。
ある程度肉体年齢も操作出来ると言う話だったし、今からでも不可能では無いと思うんだけど。

とりあえず、今は自分の目的を果たすことに専念しようと再びギルドへ歩き出す。
ここ最近は一般常識から始まり、魔術や発動体、さらにはこの世界に存在する武具についての知識を蓄えて居る。
どの武器がどんな使い方をされるのか、どんな間合いでどんな攻撃手段があるのか、戦いにおいて相手から読み取れる情報は多い程こちらに有利に働く為だ。
そして、相手の発動体が何なのか知ることも重要なファクターになるはずだ。
とは言え、これらは副次的な理由であって、本命は発動体と剣の

融合の為に調べていたのだけど。

そして、最近新しい友達が出来た。

「シュテルさん、今日は朝からいらしてたんですね」
「おはようベオール。今日はいよいよ設計図を書こうと思ってさ、ベオールならこの時間にも居ると思って来たんだよ」

個人で使えるスペースで、大量の本を積み重ね、熱心に本を読み、ノートに何やら書き込んでいた少年がこちらに気が付いた。

この少年、ベオールとは魔術の発動体についての本を探していた時に知り合った。

そろそろ本格的に発動体と剣の融合について着手しようと思い、まずは発動体の知識を得ようと思ったのだ。

しかし、俺が手に取った本を物欲しそうな目で見つめる少年が側に立っていて……。

ベオールは白銀の髪に褐色の肌。細長い耳エルフ特有の耳と言う典型的なダークエルフ族の特徴を持つ少年だ。

少年と言えど、生きてきた年数は外見年齢とはかけ離れているのだろう。

イーサさんエルフ達と同じで、彼らもまた長命な種族なのだ。

ベオールは鍛冶ギルドの見習いをしている。

共有工房と呼ばれる、まだ自分を引き取ってくれる師匠を持たない新人が集う工房で思い思いに鎚を振るっているのだが、今回新たな弟子を取る為の試験に出す課題の為に調べ物をしていたそうだ。

その課題と言うのが、”耐久性の高い発動具”だと言う。

それを聞いて、俺の目指している物について話した所、意気投合したと言う訳だ。

「じゃあ設計図が出来たら、それを持ってギルドの入団試験を受けに行くんですよね？」

「そのつもりだよ。たぶんこれなら行けると思うんだけど」

”発動具”とは、発動体を仕込んだ防具や小物の総称だ。杖のようなオーソドックスな物はそのまま発動体と言うのだが。

発動体とは、魔力の伝導率の高い物質を、魔力抵抗の低い物質の中に埋め込んだ物だった。

だから一見するとただの木の杖に見えた俺の発動具も、中には魔鉱石と呼ばれる鉱石を使った合金が埋め込まれているそうだ。

そして抵抗の低い物質は総じて植物性の物が多いのだが、例外となる物もあった。

それが、魔鉱石を混ぜ込んだ一部の金属や、生態素材だ。

尤も、その金属と言うのが紅金貨に使われる”アダマンタイト”なので手に入れる手段が俺にはないし、竜種の生体素材に至っては更に入手困難だ。

そこで次に目を付けたのは、錬金術の分野だ。

錬金術の中には、他の物質の特性を異なる素材を移したり、素材の特性そのものを変質させる術がある。

そしてここからが重要なのだが、特性を移された素材は消滅せずに、特性を失った物として残る。

通常なら効果を失った素材が残るのだが、希少な効果や強力な効

果を持つ素材は全ての性質を失わず、一部だけが残ると言う。
効果が弱くなる物もあれば、特性の一部を失った為、別の特性になる物まであるらしい。

例えば、魔力や魔素を蓄える事が出来る物質があるとしよう。
溜め込まれた魔力と魔素は、時間を掛けて所有者に還元されて行く。だがもし、その一部を失ったらどうなるか？
結果は一方向にだけだが、魔力や魔素が流れ出てしまう、穴の空いタンクのような物になるのだ。

そして今の例に出した特性を持つ物質は実在する。
月に一度だけ、溜め込んだ魔素と魔力を吐き出し、静かに輝く物質が。

そう、ムーンダストだ。
俺の剣はどうやら本当にムーンダストで出来ているらしい。
尤も、正確にはまったく同じ特性を持つ物質で作られているのだが。

だから、もしこの刀身を一方向にだけその特性を失わせ、内部の芯鉄の一部を伝導率の高い物質に変える事が出来れば、内部から伝導されて来た魔力と魔素を無駄なく吸収し、そして外側に向かって放出する、完全な形で魔術を放出させる剣が作れる！

「よし！　後は俺の剣の構造を図面に描いて、このレポートを添えれば完成だ」
「ですね！　でもシュテルさんの剣って変わってますよね。ヒルト部分がそのまま芯鉄に繋がってるなんて。それに簡単に取り外せるのに、全体の一体感も失われていませんし」
「たぶん、掘ってある溝がネジの役割をしてるんだよ。だから別な

素材同士でも、しっかり一体化するんだと思う」
「ネジって、あの発明ギルドでよく使われる？　そんな物を鍛冶に取り入れるなんて、凄いお姉さんですね」

剣の製作者の事は話してある。
話した時は「女性で鍛冶職人なんて珍しいですね！　それもこんな名剣を……是非会ってみたいです！」と目を輝かせていたのだが「今はもう会えないんだ。遠い、すごく遠い場所にいるから」と答えた所、狙い通りに勘違いしてくれた。
嘘は言ってないよ、嘘は。

「じゃあ、今からギルドに行きましょう！」

さて、この理論が通ればいいんだが……！

## 第三十三話「見習い鍛冶職人と魔術剣の作り方」（後書き）

ようやくシュテルの発動具作成の目処が立ってきました。
剣についての話を少し続けた後は、いよいよ2章の終わりまであと一歩です。

# 第三十四話「鍛冶ギルド」

鍛冶ギルドはアークエルム職人通りに存在する。
他にも服飾ギルド等もあるのだが、今は用事が無いので真っ直ぐに鍛冶ギルドへ向かう。

「今は皆さん仕事中だと思いますよ。二時頃には休憩時間に入ると思うんですが、それまでどうしましょう？」
「あれ？　お昼とか食べないのか？　そろそろ十二時だぞ？」
「あ、そういえばシュテルさんも冒険者でしたね。僕達職人ギルドや商業ギルドの方々は、大体二時から三時頃に食事を取るんですよ」
「あ～そう言えばそうだった。じゃあまだ少し時間があるけど、どうしようか？」

以前グレンダルさんと食事をした時の事を思い出す。たしかに今の時間じゃ戦闘ギルドの人間で溢れかえっているだろう。

「じゃあ、シュテルさん達冒険者に習って先に食べちゃいましょうか。僕実は朝ごはん食べてなくって」
「じゃあそうしようか。どこか行きつけのお店があれば、そこに行こう」

勿論どこのお店かは決めて貰う。人のオススメの店ならまずハズレはないだろうし、順調に自作のグルメマップの項目が増えていく。

「そうですねー……じゃあワイスラーの台所ってお店でいいですか？　山の幸を使った料理がおいしいんですよ」
「あ、うん。了解、そこにしようか」

作戦失敗。上手く行くとは限らない。

二人で食事を済ませ、そろそろ休憩時間に入る頃だと言うので再びアークエルム通りまで引き返す。

以前通ったときとは違い、通りを歩く沢山の職人ギルドの人々。

道行く人の割合は、一番多いのがドワーフ族、次いでバニテイル、あとはヒュマリアや各種獣人の方々だ。

ドワーフと言うのはエルフ族の仲間で、全体的にヒュマリアより身長が低く、ガッシリとした体格の人が多い。

温度を感じる能力が高く、手先が器用で筋力もあり、まさに鍛冶職人が天職のような種族だ。

バニテイルも手先が器用で、繊細な指使いや優れた美的感覚で、自分を着飾ったり綺麗な服を生み出したりと、これまた職業特化種族である。

そう言えば以前入ったお店の店員さんもバニテイルだった。

勿論、これらの知識は全てここ数日の勉強の成果だ。やっとこれで恥ずかしい思いや失言をせずに済む。

「さて、到着しましたよ。程よく人も出払っているようですし、すぐ受付出来るはずです」

到着した鍛冶ギルドは、年季を感じさせる石作りの、まるで砦の

ような建物だった。
ギルドの屋根には無数の煙突があり、ギルド本部にも工房がある事を窺わせる。

「じゃあちょっと受付に行って来るよ」
「行ってらっしゃい。僕はちょっと仲間の所に行ってきますね」

「ここは鍛冶ギルドの受付だ。武具作成の依頼の窓口はここじゃねぇ。んん？　兄さんアンタ……」

受付もドワーフ族の男性で、こげ茶のヒゲを伸ばし、同じく焦げちゃの髪を無造作に紐で纏め上げていた。
だが俺を見るなり急に黙り込み、退屈そうだった瞳が一気に少年のように輝き出し――――

「親方ァァァァァ！！！！！！　来やしたぜ！　金の卵が！　アイツが来やしたぜーーーー！！！！！」

怒号。そうとしか表現できない大声を、受付の奥に向かって放つ受付の男性。

「大声出すんじゃねぇ！　ニャンちゃんが驚いちまうだろうガァァァァァ！」

しかし返って来たのは、先程怒号と表現した俺に「本当の怒号とはこうだ！」と言わんばかりの大音量。
ギルド内に居る全ての人間を萎縮させるような、轟音だった。

「だから、来たんでさぁ！　金の卵が！」
「キン○マだぁ？　んなもんテメェにもついてるだろうが！」
「ちげぇます！！　前に言ってた奴です！　街の外から来た男！
適正Ａの金の卵！」

耳が痛い、通常の会話ですらこの音量なのかこの人達は。
それに、前から俺の事を目付けていたかのような言い方だ。

「本当かそれは！　で、そいつはどこにいんだ！」
「目の前にいまさぁ！　この兄さんがその金の卵！」

やっと俺の存在に気が付いた親方と呼ばれているドワーフ族の男性。
受付の男性より一回り大きな身体に、白髪混じりのこげ茶色の髪と髭。
立派な顎髭の先には黒い紐が結ばさってあり、髪のように一纏めにされている。

「おうおう、またせたなあんちゃん。おめぇさんここに来たってこたぁ、期待してもいいんだろうな！？」

受付の男性と同じように、彫りの深い顔と対照的な、つぶらな瞳をキラキラと輝かせている。

「はい。鍛冶ギルドに入るために今日は来ました。あと、是非見てもらいたい物が「そうかそうかそうかそうか！！！！！！！！！　おめぇら聞けぇぇぇぇ！　期待の新人を手に入れたぞぉおおおお！！！！　教団ギルドのアホが色々画策してたり、調理ギルドの連中が狙っていた奴だ！　金の卵は俺達が頂いたぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「うおおおおおお！！！　これで教団ギルドに押し付けられた面倒な仕事もおさまるぞ！」「調理ギルドの雌狐に一泡吹かせられますね！」

「あの剣だ！　あの剣を近くで見たかったんだ！」「誰の作か判らないって言ってた奴か！」

鼓膜が破れてしまう！！！　この盛り上がりはなんなんだ？　俺を狙っていたなんて話も聞こえてくるぞ？

「よしよし、おめぇら一旦静まれや。あんちゃん、鍛冶の経験はあるか？　すぐにでも誰かの下につけて修行させたい所なんだがよ」

親方さんは浮かれているのか色々と手順をすっ飛ばして、誰の下で修行させるかを考え始めた。

「親方！　俺！　おれぇ！！！！　俺んとこ今一人も見習いがいねぇんだ！」

「何を言ってるんです！　そんなむさ苦しい所ではなく、私の工房に任せるべきです！」

「あの……私の所、男の人が少なくて、その……」

また言い争いか！　今立候補した三人は、それぞれ違う種族だった。

鍛冶ギルドはてっきりドワーフ族がすべての責任者を勤めていると思っていたのだが、少なくとも二人、ここでの立場が高い人がるようだ。

一人はベオールと同じダークエルフの男性。少々神経質そうな声と、掛けている丸メガネがよく似合っている。

二人目の人は、今この建物の中にいる数少ない女性だ。ローズピンクの長い髪をポニーテールにしている。
目の横と頬の下に小さな鱗がある事から、リザケイルだと言う事がわかる。ここからでは確認出来ないが、恐らく瞳孔も縦長のはずだ。

とりあえず、こちらの話を最後まで聞いてもらわないと！

「あの、すみませんが俺、鍛冶経験どころか、自分で武具の作成経験もあります。あと、今回ここに来たもう一つの目的があるんですけど」

そう周りに聞こえるように言い放ち、持ってきた設計図とレポートを親方さんに渡す。

「なんでぇ！　お前さんもう既に同業者だったのか！　こいつはさらに都合が良い、即戦力じゃねぇか！　で、これはなんでい？」
「ええ、俺が考えた、魔術の発動体と武器の融合についてのレポートと設計図です」

瞬間、今の今まで騒がしかったギルド内が、水を打ったような静寂に包まれた。

## 第三十四話「鍛冶ギルド」（後書き）

次回の更新はまた週末になります。

## 第三十五話「老鍛冶職人の夢」

静まり返ったギルドの面々。
最初にその沈黙を破ったのは、親方と呼ばれていた責任者と思われるドワーフ族の男性。

「びっくりしちまったぜ。未だにそんな夢みてる奴が、教団ギルドの他にも居たなんてな」

どうやら、この考えは既に幾度も試行錯誤を重ねられ、もはや半ば不可能だと諦められている課題だったようだ。

「やっぱり、もうあらゆる手段を試されたんですか？　俺なりに考えてきたつもりなんですが」
「ああ、そうだな。俺が若ぇ時から何人も試した奴等がいたし、もちろん俺だって試した。だがよ、結局伝導率が高い硬質素材もアダマンタイトと龍種の骨くらいしかねぇし、抵抗率の低い硬質素材もたかが知れていたんでぇ」

「私の工房では少しでも頑丈な発動具を作る事を主題としています。しかし剣として使うのに耐えうる素材など、やはり長の言った二つしかありはしなかったのです。あの二つの代わりに成り得る素材も探しもしましたが、やはり……」

ダークエルフの工房長が、こちらのやり取りに加わってきた。ベオールが言っていた課題を出したのはこの人だったようだ。

「それでも、目を通すだけでもしてくれませんか？　ダメならそれで結構ですし」

「まぁ、折角来たんだ、今後の事についても話がしてぇ。ちょっと奥の方にいかねぇか」

言われるがまま、親方さんの後を追い建物の奥へと付き従う。

ギルドの奥からは、そのまま外の渡り廊下へと繋がっていた。外には鞘の廊下のように、いくつもの作業小屋が隣接して並んでいた。

「ここはギルドでユニークウェポンの作成を依頼された、上位鍛冶職人の専用のスペースだ。通常の工房じゃ作れねぇ武具はここで作られんだ」

開け放たれた小屋を覗きながら進んで行ると、小屋の一つ一つから鎚を振るい金を叩く音が響き渡る。

その鐘のように鳴り響く音の所為か、近くにいるはずの親方さんの声すら上手く聞き取れない。

それに小屋から噴出してくる熱風で、辺りの気温も随分と上昇しているようだ。

みんなの声が大きいのも、普段からこういった環境で過ごしているからなんだろう。

「んで、ここが最深部。俺の工房件、家だ。客をもてなす様な上品な物なんてねぇが、少しは落ち着いて話せるだろうよ」

「あ、はい。しかしなんでまたこんな奥で話そう何て？」

受付の奥には、ちゃんとした応接室だって用意されていたのだが、親方さんはそこを素通りしてまっすぐここへと連れてきた。

「あんちゃん。あんた、何かやらかすような気がしてならねぇんだ。誰かに聞かれたくねぇ」

「随分と高く買ってくれているみたいですね」

もし、この理論が通れば大騒動になってしまうかもしれない。それを案じての行動だったのだろう。

「そいじゃあ、早速見させて貰うぞ」

そして、神妙な顔つきで俺の渡した封筒を開封した。

読み始めて十分。視線から察するに、何度も何度も同じ部分を読み返しているようだ。

最初は戦々恐々といった具合で、その厳つい顔を不安半分緊張半分と言った様子だったのだが、次第に顔を驚愕に染まらせていく。

そして、さらに読み進める事五分。

「おめぇさん、この理論でいきゃあ上手く行く可能性もあるかもしれねぇ。だけどそりゃこの構造でちゃんとした剣を作れた場合の話だ。それに芯鉄を後から入れるなんて想像が出来ん。たしかに一般的な魔鉱石を使った合金は熱に弱い、後から入れるのは理に適ってはいる。だが芯鉄にゃ硬ぇモンを使わんとすぐ折れちまう」

当然の結果だ。そのレポートだけでは机上の空論もいい所だ。

本来剣の芯鉄は、折れず剣を支える、いわば剣の命とも言える物だ。

そこに硬度が低い合金なんて使えば、すぐにダメになると思われているのだろう。

だが、それはあくまで西洋剣の理論だ。

粘度の高い鉄が、剣の質をより高めると言う実例を、俺は知っている。

この剣も、西洋剣でありながらその性質を受け継いでいる事も知っている。

「親方さん。これが、その実例です」

俺の剣を、親方さんに渡す。

「一体どうなってやがんでぇ、本当に後から入れたのか？　それに、まるで剣の先まで神経が通ってるみたいだぞこりゃ」

俺の剣を鞘から抜き放ち、その鎧のような筋肉に物を言わせ軽々と振るう親方さん。

俺も初めて使った時に感じた”手に吸い付く”なんて感覚を超越した手応え。

剣が受ける風圧を、手のひらにヒシヒシと伝わるあの感覚を味わっているのだろう。

「こいつは紛れも無ぇムーンダストだな？　それに発掘品じゃなく、誰かがおめぇさんの為に作った。違うか？」

「その通りです。俺の為だけに作られた、一品限りの剣です」

振るっただけで、剣の目的を正確に読み取る彼の晴眼に、改めて長を務める職人の凄さを感じると同時に、そんな人にここまでの表情をさせる姉さんの鍛冶の腕に改めて畏怖の念を抱く。

「五十年だ。俺がこの世界に入って五十年、先代や先々代のギルド長の作品だって間近で見てきた。発掘されるユニークウェポンの完成度に、職人としての自尊心を傷つけられる奴だって何人も見てきた。俺だって未だに納得の行く作品を生み出せたとおもっちゃいねぇ、だが……」

いつも様な荒々しい口調ではなく、まるで祈りのような、救いを求めるような心が言葉の節々から伝わってくる。

「これは、本当の意味で”完成品”だ。こんな作品を生み出す事が出来る人間が、まだこの世界には居た！　俺達はまだ、過去に敗北したわけじゃなかった！　そういうことなんだな！？」

歓喜に打ち震える親方の言葉。この人は、全身全霊で過去の遺産に勝負を挑んで生きてきたのだろう。

こんなに喜んで貰えるとは、正直思っていなかった。

「一体誰が、これを打ったのはどんな職人なんだ！　この歳でこんな気持ちになるなんて思ってもみなかったが、俺はその人に技を

伝授してもらいてぇんだ！　ここを空ける訳にはいかねぇが、どうかその人を、その職人を呼んで貰えねぇか！」

長年見てきた夢。

その一旦を目にしたこの老練の職人の願いを叶えたいと思う、だけどそれは無理な話だ。

「それは、不可能です。この剣を打った人には、もう会えないんです……」

だから、こう言うしかなかった。

一瞬、失意の底に落とされたような顔をしたが、次の瞬間にはその瞳をギラギラと輝かせ、髭で隠れている口がこちらからでも判るくらいに大きく開き――

「そうか！　ならしょうがねぇ！　だったら俺がこの剣の製法を受け継いでやる！　頼む！　どうかこの剣を暫く預けてくれ！」

今剣を手放すのは危険かもしれない。だけど、ここで断るなんて事、俺には出来なかった。

「分かりました。ですが条件をつけても宜しいですか？」

「おう！　どんな条件でも言っみろ！　どんな条件でも飲んでみせてやらぁ！」

若干弱みに付け込むようで良心が咎めたのだが、俺は自分の願い

を全て伝える事にした。

「魔術剣の製作に必要な全ての素材を用意してくれる事。この方法をヒントに、簡易的な魔術剣の製法を研究してくれる事。その剣の芯鉄の構造だけは秘密にする事。最後に、俺に工房を下さい」

芯鉄のネジ構造と、ヒルトとの一体化だけは秘密にしてもらいたかったのだ。

芯鉄についてはベオールにも多少話してしまったが、口外しないと誓ってくれるはずだ。

「なんでぇ、殆んど条件にもならねぇ事じゃねぇか。歴史的作品を生み出すのに協力出来るってだけで満足だ。それに、この方法をヒントにしたらもっと簡単に魔術剣を作れそうだ、研究しない訳がねぇ。剣の構造だって、こいつは簡単に広めて良いモンじゃねぇって事くらい分かる。工房だって、始めは納得しねぇ奴もいるかもしれんが、お前さんの作品を見せれば納得してくれるだろうよ」

すんなりと全ての要求を呑んでくれた親方さん。

工房はたしかに、いきなり新人が一つの工房を与えられたとなると、周りの顰蹙を買うのは目に見えている。

「察するにおめぇさん、この剣の製作者に技術を叩き込まれたんじゃねぇか？　だったら俺はむしろ、あんちゃんの作品を見てみてぇ」

「いいんですか？　不肖の弟子で、何も出来ないかもしれませんよ？」

「こんな事思いつくのに何も出来ないなんてこたぁ無ぇだろうよ。すぐにでも手配させる」

思いもよらぬ展開になってしまったが、これで発動体の問題もクリア出来そうだ。
だが念のため……。

「あ、最後にもう一つだけ。この剣を預けている間、代わりの剣を貸して頂けないでしょうか？　出来れば似たような大きさのバスタードソードが良いんですけど」
「こいつの代わりだなんて、随分難しい事言ってくれるじゃねぇか。よし分かった、俺の作品の中から一番いい奴を届けさせる！　お前さん鞘に住んでるんだよな？　調整しなきゃならねぇから、二三日待ってくれると助かる。中途半端なモンを渡すわけにはいかねぇからな！」

交渉成立だ。二三日なら魔術だけでも何とかなるだろう。
完成したら、一気に戦力アップが見込めるはずだ。それまでに魔術のバリエーションを増やしておかなければいけないな！

まるでクリスマスプレゼントが届くのを約束された子供のように、楽しみな気持ちで胸が張り裂けそうになる俺であった。

## 第三十五話「老鍛冶職人の夢」（後書き）

作者が最後にクリスマスプレゼントとして次の日の朝にプレゼントを貰ったのは中学二年生の頃でした。

親がこっそり置いていると判っていても、やはりワクワクやドキドキを感じたのを今でも覚えています。

## 第三十六話「報復　それは無謀な行い」（前書き）

今回も少し残酷な表現が出てきます。
ご注意下さい。

## 第三十六話「報復　それは無謀な行い」

激しい焦燥感と怒りに、心がかき乱されていた。
だがその矛先は犯人達だけではなく、自分自身にも向いている。

何故、油断していた？　可能性を考える事は出来なかったのか？
実力差を示され、直接報復する事が出来ないなら、選ぶ手段は限られるはずだ。

鍛冶ギルドでの一件から更に三日が経ち、もう五月に入っていた。
その日俺は、代わりに送られてくるはずの剣がまだ届いていないのに少し落胆しつつも、今日も朝から依頼を受ける事にした。

四月も終わり先月分の契約金を支払った俺は、今月からはノルマ分の依頼をこなさねばならない事を思い出し、早速意気揚々とギルドウィンドウへと向かう。

ウィンドウでは最近珍しくもなくなった事だが、二人組みの冒険者に一緒に依頼を受けないかと声をかけられたが、一応始めて声を

かけて来た相手なのでその申し出を断り、以前一度組んだ事のある人と簡単なDランク依頼を受ける事にした。

何事も無く昼前には依頼を終え、疲れを癒そうと鞘へと戻る事にした。

そして裏手の井戸でまた汗を流そうと思い、着替えを取りに自室へと向かったのだが……。

「シュテル！　大変だ！」

部屋の前になにやら人だかりが出来ていた。そして部屋の中ではダルベストさんが顔色を変えて狼狽えている。

「どうしたんですかダルベストさん。それにこの人だかりは？」

「盗みだ！　誰かがこの部屋のロッカーから金品を盗みやがったんだ！」

なんだって！？　でも扉の鍵には無理にこじ開けたような痕跡は無く、慌てて確認した俺のロッカーにもそんな様子は無かった。

「これは、鍵を使ったって事ですよね？　ダルベストさん」

内心穏やかではなかったのだが、冷静に、ただ事実の確認を取る。あくまでいつも通りの口調を意識して。

「ひっ！　そ、そうだ。お、俺の鍵もここにある」

となると、残りは俺の鍵と、アルヴァスの鍵だ。
俺の鍵は肌身離さず首にかけてあり、今もしっかりここにある。
すり替えられた可能性も考慮し、念のためロッカーへと差し込むが杞憂に終わったようだ。

「アルヴァスは何処ですか？　見当たらないようですが」
「き、昨日から戻ってねぇみたいだ。で、でもよ？　まだアイツが犯人だと決まったわけじゃ……」

この状況なら、短絡的に考えればアルヴァスの仕業と考えるのが妥当だろう。
しかし、無くなったのは俺の刀と金だけではなかった。

よく見ると、俺以外の金庫も開けられており、ダルベストさんも先月分の稼ぎを根こそぎ奪われていた。
それに、アルヴァスの金庫も。

俺は、ヨザークさんの言葉を思い出す。
『俺達が居なかったら盗まれていたかもしれないぞ』

そしてもう1人の言葉。
『以前から貴公の事を知っていた風な様子』

断定は出来ないが、俺のカンがそれを真実だと訴えかけてくる。

「ダルベストさん。盗品をこの街で捌く事は可能ですか？」
「い、いや。他所の行商人ですら街の中での買い付けには細心の注意を払ってる。盗品なんて買い付けた日にゃ検問でそのまま豚箱行きだ」
そうか、なら。
「では、何処に売りに行くと思いますか？　そういった取引をしても、怪しまれない様な場所は」
「この街の外なら、どこででも可能だと思うが「メイルラント城砦じゃ」
この騒ぎを聞きつけたのか、鞘の管理人のオーリエさんと、以前浴場の掃除をしていたおじいさんがやって来た。
しかし、メイルラント城砦とは一体？
「何言ってんだ爺さん。この建物にいる冒険者なんざ、最高ランクで俺のC－だ。ガルラント街道なんて自殺行為だぞ」
「いやいや、先月末に一掃作戦が展開されたのを忘れたんかの？　定期的に行商人の為にあの街道は大規模討伐が行われる。このタイミングじゃ、間違い無く城砦の闇市で売りさばくつもりじゃろう」
このお爺さんは何者だろう？　けど、今はそんな事を詮索する暇なんてない。
「お爺さん、有り難う御座います」
廊下に集まってきた野次馬の群を押しのけ、大急ぎでガルラント街門へと向かう。

街道を一直線に進む。魔術を使い大量の砂埃を上げて疾走する俺は、文字通り風となっているだろう。
あまり速度を上げた所為で追付く頃には魔力切れ、なんて事に成りかねないので、程よく加減してはいるのだが。
今の俺の武器は杖だけなのだ、慎重にいかなければ。

もし、あの刀が二度と手に戻らない所に行ったとしたら、俺はカノンにも姉さんにも顔向けできない。
思えば、あの決闘の時だってその可能性はあったんだ。
もしヨザークさんが回収してくれなかったら……。

街道を進むこと三十分。
仮に犯人がロードランナーに乗っていたとしたら、そろそろ追付いてもおかしくない頃だ。
ダルベストさんが部屋を空けた直後の犯行だとしたら、だけど。

「居た！　数はここからじゃ判らないな」

ロードランナーが二頭、街道沿いの森で停められている。ここであの時の連中と合流するつもりだろうか？

俺は魔術を止め、気づかれないように足跡を忍ばせ、神聖術で身体を強化して木の上に飛び移った。

そこから様子を探ると、以前撃退した五人に加えさらに二人いる。
よく見るとその二人は、今朝声を掛けて来た二人組みだった。
あれは報復の為の誘いじゃなくて、俺が部屋を留守にする事を確認する為だったのか。

「無事合流できたみてぇだな。これがあの野郎の剣か？」
「ですです。前にアイツがこの剣を使ってるのを見たんでさぁ。高純度の片刃のクロムセイバーで間違いねぇです」

刀を持ってきた男が、以前気絶させたリーダー格の男に刀を手渡し、媚びへつらうかのように報告している。
ガルヴェウスから来た二人以外は全員右腕を肩からダラリとぶら下げており、まだ自由に動かせないようだ。

「だったら、今の内に片をつけるだけだ」

俺は木の上から、リーダー格の男に向かって風の刃を放つ。
あれから毎日訓練を重ね、無詠唱で発動出来る様になった魔術の一つ『エアスラッシャー』
既存の魔術にも似た物はあったのだが、効果範囲と引き換えに密度を上げた術。

将来的には、剣先から飛ばす事をイメージして作った遠距離用魔術だ。

「こいつを売り払えば暫くは遊んで暮らせるぜ？　その後は帝国

にでも高飛びと行こうぜ！」
「そいつはいいですねぇ！　あいつも自分の財産を失って一石二鳥で――――ヒィィィ！！！」
まだ気が付いてないのか？　それともエンザンさんに斬られた時に感覚も失ったのか？
「アニキィィィィ！！！！」
「どうした急に！」
「腕ぇ！　アニキの腕ぇぇぇぇ！！」
「何を今更。だからエンザンの野郎に斬られたって……あ？　あ、あぁぁぁああ！！！！」
綺麗サッパリ右肩から先が無くなった男。これでいつまでも未練たらしく無意味なモノをぶら下げずに済んだだろう。
俺はすぐさま残りの連中も片付けようと、ここからでは狙えないので枝から飛び降りた。
「アイツだ！　アイツだ！　追いかけてきやがった！！！」
俺の姿を見るや否や、以前相手をした残りの四人が片手で武器を構える。
そして両腕が無事な、今回の実行犯二人もそれぞれ槍と大剣を構えた。
「なんで、自分から命を差し出すような真似をするのかな？　折角エンザンさんに助けられたってのに」
熱くなるな、冷静になれ。
冷静に、確実にこいつらを――殺せ。

## 第三十七話「強さの片鱗　ワンサイドゲーム」（前書き）

久しぶりの「主人公強いぞ！」回です。
残酷な描写がありますので、ご注意下さい。

## 第三十七話「強さの片鱗　ワンサイドゲーム」

「もう、助けないからな。誰も助からないし、逃げられないからな？　絶対に、絶対に誰も」

以前弓を使っていた男が、今度は片手で扱えるクロスボウをこちらへと向け、射出する。

避けはしない。杖の一振りと共に、また風の刃を打ち出す。

こちらへと向かう矢じりが、ハッキリと見て取る事が出来た。

危機的状況に陥った時、スローモーション状態で景色が流れると言うが、これもその一種なんだろうか？　全てがゆっくりと流れて行く。

打ち出された矢が風の刃に切り裂かれ、そしてそのまま進行方向上に居る打ち出した男へと向かって行く。

耳障りな絶叫が聞こえたのを確認し、今度はこちらの横方向へと回り込もうとしている二人へと意識を向けた。

「今だ！　やれ！」

周り込もうとしていた二人は、どうやら囮だった様だ。

此方がその2人に気を取られてる間に、弓闘士の側に居た残りの3人が一斉にこちらへと向かってくる。

サイドの2人は端から俺と片手でやり合うつもりは無かったのか、手に持っていた小型の片手剣を此方へと投げつけてきたのだ。

それを身をよじり回避したが、その隙を狙い、更にもう一方から

も剣が飛んでくる。
剣の回避に気をとられてる間にも、前からは三人の男が迫って来ている。

「避けてみろやぁぁぁぁ！！！」

なんとか杖を振るい、二本目の剣を叩き落した所に正面からも剣が飛んでくる。
最初からこの三人は牽制役だったようだ。

「なら、避けなければ良い」
咄嗟に、いつも足に風を纏う要領で全身に竜巻のような風を纏う。
回転しながら飛んできた剣は、俺の胸へと吸い込まれる筈の軌道で飛来したのだが――

「なんだこいつ！　なんなんだよ！」
「剣士じゃなかったのかよ！」

ああ、この2人は俺が剣しか使えないと思っていた様だ。
風に阻まれた剣は、そのまま遥か上空へと弾き飛ばされて行った。

片手剣を投げつけた正面の男は、信じられない物を見たような表情でそのまま一目散に逃げて行く。
気が付けば、最初に剣を投げた2人の男の姿も見えない。

誰も逃がすつもりはなかったのだが、ここは目の前の二人に集中する。

「くっそがぁぁ！！　なんなんだよテメェはよぉ！」

大剣を振り上げ、叩き斬らんとするガタイの良い男。
大剣を上段から振り下ろすが、そんな速度では対人じゃ話にならない。

「くそ！　なにやってんだよ！」

その大振りな一撃を易々と避け、そのまま男を素通りし後ろで槍を構える男を標的に定めた。
槍を突き出してくるが、これも遅い。

放ちきった槍を片手で掴み取り、そのまま回り込むようにして位置を反転させ、大剣使いとの間に割り込ませる。
槍使いはなんとか自分の得物の自由を取り戻そうと踏ん張るが、神聖術で一気に強化した腕で全力で引く。

突然拮抗していた筈の状況が一変し、槍を掴んだまま前のめりになる男の顔に向かい、もう一方の手で持っていた杖を振り上げ――

「スティルスレイ」

呟くように、そのワードを口にした。
その気になれば無詠唱で発動できるようになった術。
だが俺は、少しでも、ほんの少しでも相手に恐怖を与えたい。その一心でワードを呟いた。

男の目の前を通過する杖。一瞬俺が杖で殴ろうとしたのを外したと思ったのか、ニヤりと笑った気がした。
確かめようと改めて顔を見るが、もう表情を確認する事は叶わなかった。

「なんだお前、今なにしたんだよ！　ソイツ、死んでんじゃねぇか！！！！」

顔を青くし、膝が震えている大剣を持つ男。
今更何を言ってるんだ？　街の外で相手を殺そうと多人数で挑んでおいて、自分達は殺される心配が無いとでも思っていたのか？

「死んだかどうかは知らないよ。でもたぶん死んだんじゃないかな？」

うつ伏せに倒れた男を足でひっくり返し、改めて顔を見る。
丁度真ん中から切られた顔は、真っ赤に染まりどんな表情をしているか窺い知る事は出来ない。
が、口に溜まった血がブクブクと泡立っている事から、息がある事を知らせてくる。

「よかったね、生きてるよまだ。じゃあ次はアンタだ」

そう宣告し、杖を構えようとしたのだが。

「いまだあああああ！　殺せえええええええええ！」

最初に剣を投げた二人が突然藪から飛び出し、俺の身体を羽交い絞めにする。
一瞬戸惑いを見せた大剣使いの男は、我を取り戻した瞬間、その剣を俺へと振り下ろしてくる。

咄嗟に動いた肘より先の手で杖を剣の軌道上に乗せ、大剣の一撃に備える。
そして、そのまま羽交い絞めにしていた男もろとも、大きく後ろ

へと吹き飛ばされたしまった。

杖を犠牲にしたお陰で致命傷には到らなかったが、胸を大きく斬られてしまった。

とは言っても、鞘で着替える前だったのが幸いし、皮鎧を大きく引き裂きクロースアーマーをも切り裂いた一撃は、俺の胸の表面に赤い筋を付けるに留まっていた。

「よ、よし！　杖も壊したし、あとはこわくねぇぞ！」

「ああ！　そのままやっちまえ！」

先に起き上がった男二人が、俺から離れて野次を送る。

大剣使いは勝利を確信し、大剣を腰溜めに構える。

俺は起き上がると同時に、神聖術を足へと掛ける。

「うおおおおおおおおお！」

突きの為、今までの攻撃より若干速度のある攻撃を放つ男。

強化された足でその剣の腹を蹴り上げると、面白いように軌道が逸れ、斜め上へと突き上がって行く。

「上に敵でも見えたか！？」

気合一閃。全力の手刀を、剣を持っている手へと振り放つ。

切り落とす事は出来ないが、それでも本来曲がらない方向に折られた手首は大剣を支える事が出来ず、切っ先を地面に下ろしてしまう。

片手では振るうことが出来ないのか、剣を手放し逃げ出そうとす

る男の首に全力の突きを放ち、行動不能にする。

今で決まらなかったのが信じられない様子の残された二人は、またも逃げ出そうと背を向ける。

今度こそ、これで終わらせる。

そう思い、追いかけようとした時、意外な人物が現れた。

「オメェ等逃がしゃしねぇよ！　おいお前！　お届けモンだ！」

走り去ろうとする二人に立ちはだかったのは、アルヴァスだった。

何故ここにいるのか？　という疑問を一先ず飲み込み、投げられた包みを受け取る。

包まれていたのは、俺の使っていた剣と良く似たバスタードソード。

すぐに鞘から剣を抜き放ち、アルヴァスが足止めしている男へと向かう。

アルヴァスも片手剣で応戦しているが、さすがに二人同時の相手は厳しいようだ。

二人は片手ながらも、予備で持っていたのか小型のナイフを構え、アルヴァスを突破しようと奮闘しているようだ。
アルヴァスも死に物狂いで向かってくる男二人に気圧されている様子。

逃げ道を遮る相手をなんとかしようと必死な二人は、俺への注意が散漫になっているようで背後に迫る俺に気が付く事はなかった。

全力の横なぎで二人を同時に斬りつける。男達の着ていた鎧に多少阻まれてしまったが、身体へと斬撃は届いたようだ。
この剣も姉さんの剣程ではないが、よく手に馴染む上、相当の切れ味だ。

崩れ落ちる二人を、侮蔑を込めた瞳で見つめるアルヴァス。
俺は崩れ落ちる二人より、何故かここに居るアルヴァスへと視線を送る。

「なんだよ、お前剣なんて無くても楽勝だったんじゃねぇか」

顔を上げ、視線が交わったアルヴァスが周囲の状況を見てポツリと呟く。

「いや、一人取り逃してしまったし、結局まだ誰も死んでいない。剣があったら確実に――」
「止めろよ！　こんな奴らを殺して自分の経歴に泥を塗るつもりかよ！」

突然声を荒げるアルヴァス。街の外での殺しにも罰が下るのだろうか？
何にせよ、こいつらをどうすればいいか考える。

「こいつらはどうすればいい？　生け捕りにしなければいけないんだろ？　連れて帰るにも距離があるし」
「ああ、それなら心配ねぇよ。討伐に出ていた部隊がもうじき戻って来る頃らしいから」
え？　じゃあもし俺が追いかけなくても、エンザンさん達がなんとかしてくれた可能性もあったって事なのか？
思いもよらない事実に、頭から冷水をぶっかけられた様に先ほどまでの怒りが静まって行く。
いや、結果論ではあるし、確実に刀が戻って来る保障があったわけじゃないけど。
あ、そうだ刀！
「これか？　ちょっと汚れちまってるけど」
アルヴァスが、最初に腕を切り落とした男の身体の下から刀を引っ張り出す。
嗚呼、それを使えば確実に殺せたかもしれない。だけど、何故それを思いつかなかったのだろうか？
何処まで言っても、あれは俺が使うべき物じゃないという思いがあるのだろうか？
「ああ、それだ。有り難うアルヴァス」
「まだ名前覚えてたのかよ」

逃げた男は諦めるとして、一先ず気絶した連中や怪我をした連中を一箇所に纏める。
腕を切り落とした男はアルヴァスが紐で縛り止血し、顔を斬られた男は思ったより傷が浅かったのか、血を吐き出させた後は特に問題はなかった。

六人をアルヴァスが持ってきたロープで木に縛りつけ、ここを通る討伐部隊を待つ事にした。

一息ついた所で、最初から感じていた疑問をアルヴァスにぶつける事にした。

「で、なんで君がここに来たんだい？」

## 第三十八話「ガルヴェウスの仲間達」（前書き）

大変長くなってしまいましたが、これにて第二章本編は終了です。

## 第三十八話「ガルヴェウスの仲間達」

俺の記憶が正しいのなら、彼は俺を嫌っていた筈だ。
元々勘違いから来た衝突ではあったが、それでも此方から勝負を持ち出したのには変わりないのだし、俺も彼に失礼な事を言ったのも事実だ。

しかし、彼は俺の為にここまで来た。誰かから借りたのであろうスレイランナーにまで乗って。

「今回の事件は俺に責任があんだよ。昨日部屋の鍵、無くしちまったんだ。それで昨日は部屋に戻れなかったんだ。そいつらが使った鍵だって、きっと俺が無くした鍵に違いねぇ」
「鍵を無くした時点でオーリエさんに報告するなり、俺達の部屋に声を掛けるなりしたらよかったじゃないか」
「んな事出来るかよ、かっこ悪ぃ……」

かっこ悪いって、そんなプライドの所為でこの事件が起こったって自覚が無いのか。

「勿論、俺が悪いのはわかってるよ！　だけど、お前らに会わせる顔なんてねぇし、ましてやお前に頼るなんて出来る訳……」

うつむき加減にぼやくアルヴァス。まぁ彼の立場で考えれば、その心情を理解出来ない訳では無い。
それに、たしかにアルヴァスにも過失はあるとしても、今回の事件の原因の大半は俺にあるのだ。

「たしかに、あんなに争った相手を頼る訳にはいかないか。まぁ

今回の事件だって元を正せば俺に責任があるんだ。ダルベストさんには迷惑をかけてしまったけど」

ちなみに、ダルベストさんの先月分の稼ぎだと思われる金貨袋は無事発見している。

つい好奇心から覗いてしまったのだが、物凄い大金だ。

「で、本題に戻るけど、どうして君が？」

「責任を感じてってのもあるけど、やっぱりちゃんとお前に謝る機会が欲しかったんだよ」

以外にも殊勝な心がけを示す彼に若干驚きはしたが、この心情の変化には俺だって理解出来た。

天狗になった自分を折られ、自分と向き合う。きっと彼もそんな状況だったのだろう。

「お前の言うとおり、俺はお前に嫉妬した。だけど、全部俺の勝手な思い込みだったって痛感したんだ」

彼は素直に自分の負の感情を認め、その事実を吐き出す。

何かキッカケがあったのかもしれないが、自分の過ちを認めた様だ。

その証拠に、彼の顔は何か憑き物が落ちた様に晴れやかな物へと変わっていた。

初めて会ったあの夜ですら、こんな元気そうな表情はしていなかった。

まぁある意味、血気盛んで生き生きとしていたかもしれないけど。

「悪かった。いや、ごめんなさい、だな」

言葉と共に、背を折り曲げしっかりと頭を下げたアルヴァス。
こちらもその謝罪に答えねばならない。

「俺の方こそ悪かった。手間を取らせた上にこんな事に巻き込んでしまって」

その後、街道を通りかかった討伐隊に発見され事情を説明しようとするも、部隊を指揮していたのがエンザンさんであった事もありすんなりと事は運んだ。
一人だけ逃走した男も彼等に拘束されており、事の端末も大筋で把握していた様だった。

「なんだエンザン。そういう事なら俺にも報告しておいてくれないと困るぞ？」
「申し訳ない。しかし其方のギルド内を疑う内容をグレンダル殿に伝えると成ると、な」

グレンダルさんは今回の事件の発端となった出来事や、ギルド内に不穏分子がいる事をエンザンさんから知らされていなかった様だ。

エンザンさんは妙に義理堅いのか、それともグレンダルさんに何か思う所でもあるのか、歯切れが悪い。苦手なんだろうか？

「おいおい、あれって蒼光のエンザンじゃないか？」

一緒にスレイランナーに乗っていたアルヴァスが、声を潜め話しかけてくる。

「そうそう。なんでも現在ガルヴェウスで最強の剣士だとか」

「だとか、じゃねーよ。ガルヴェウス所か、去年の帝国の祭りで開催された闘技大会でも三位入賞したんだぜ？　知らないのか？」

少しずつだがアルヴァスとの距離も縮まってきているようで、今も同じ馬の背に乗って普通に会話を交わす事が出来ている。

「正直昨今の情勢に疎くてさぁ。でも実際に彼が強いって事は分かってる。前に彼があの連中の腕を一瞬で切り裂いたのをこの目で見た」

「そりゃすげぇ。俺も前の町に居た時から話だけは聞いた事があったけど、実際に見てみたいぜ俺も」

「いつか肩を並べて戦う日が来ればいいんだけどなー」

「そうだな。俺も今回の事でまだまだだって痛感した。ランクが殆んどかわらないのに、シュテルみたいな奴だっているんだしな」

う～ん。俺の場合はちょっと反則的要素が多すぎると思うんだけどなぁ。

鞘へと戻り、ダルベストさんに盗まれたお金を渡し、俺も刀と金をロッカーへと再び仕舞いこんだ。
すでに部屋の前の人だかりは消えており、受付にもオーリエさんが座り通常営業へと戻っていた。
あの時助言をしてくれた清掃員のおじいさんは既に帰ったらしく、お礼を言う事が出来なかったのが心残りである。

「それで、おめぇらは和解したのか？　ここ最近部屋の居心地が悪くてしょうがなかったんだけどよ？」
「そんな事言って、殆んど泊り込みの仕事で部屋にいなかったじゃないですか」
「別に居心地悪いなんて事なかっただろ。俺だって深夜にこっそり戻ってたんだし」

二人で口々にダルベストさんを軽く批難する。
険悪な空気などではなく、俺も含めて三人とも軽い笑みを浮かべている。

「その様子ならもう大丈夫そうだな。んじゃ改めて宜しく頼むわ」
「ああ、前は悪かったな室長さん。改めて宜しく頼むぜ」
「こちらこそ宜しく、ダルベストさん、アルヴァス」

住み始めて二週間程経ったが、初めてこの部屋を自分の居場所だと心から思う事出来そうだ。
今度はアルヴァスとも是非一緒に仕事をしてみたい。

まだ来たばかりの街ではあるが、少しづつ仲間が増えていく実感。
同じ時を共有し、共に笑い合える日々がこれから始まるのなら、今は。

今だけは、この世界を満喫したっていいよな？
なぁ、カノン――――。

## 第三十八話「ガルヴェウスの仲間達」（後書き）

第三章のプロットを細かく練り直そうと思いますので、三章が開始されるまで少し時間がかかってしまうと思います。

それまでは、二章本編に入りきらなかった話を閑話として掲載して行く予定です。

## 閑話「剣聖への道」（前書き）

前回の閑話の続きとなっております。

## 閑話「剣聖への道」

陰鬱な気持ちの所為か、鞘への道のりがいつもより長く感じる。
このまま部屋に戻ったら、アイツになんて言われるか……。
それだけじゃねぇ、あのダルベストって室長にも笑われちまう。

鞘へ戻るなり俺は、一旦気持ちをリセットする事も兼ねて汗まみれの身体を井戸で流す事にした。

部屋へ着替えに取りに戻ろうとしたが、中に誰かいたら嫌だ。そんな気持ちの所為か、まるで盗人の様に耳を扉に近づけ様子を探る。

「おいお前何やってんだ？　お前そこの部屋の住人か？」

突然かけられた声に心臓が大きく脈打つ。
驚いて振り向くと、ガラの悪そうな2人組みがこちらを見ていた。

「ああ、そうだ。なんか用か？」
「いいや？　別に用なんてねぇよ、なぁ？」
「ああ、ただ俺達はちょっと気になっただけだ」

二人はそのままどこかへと去っていった。こんな一番奥の部屋まで何しに来たんだ？　あの室長の知り合いかなんかか？

「おっと、とにかくさっさと着替え持ってかねぇと」

風呂があるのに入れないのに若干納得がいかなかったが、規則なら仕方ない。
でももし、これが冬だったらどうすりゃいいんだ？
まだまだ遠い話だが、思わずそんな事を考えてしまう。
いくら気候が穏やかなこの大陸でも、さすがに冬に冷水をかぶるなんてごめんだ。

建物裏手に向かうと、水を流す音が聞こえてきた。どうやら先客が居るようだ。
裏手は当然の事だが、大きな木の柵で二つに別けられている。女の冒険者への配慮だ。

水の音が男ではなく、女の物である事を祈る。
別に、覗きたいと言う訳じゃなく、今は誰かに自分を見られたくないからだ。

まぁ、バレないなら覗きたいとは思うけどな、俺も男だし。

しかし、俺の願いは叶わず、しかもよりによって――

あの髪は間違いなくアイツだろう。どうする、出直すべきか？
しかしそれだと、俺がアイツから逃げているようで癪だ。別に声を掛けなくたっていい、そのまま通り過ぎちまえば良い。
そう思い、少しづつ水場へと向かっていったのだが。

「なんだよ、これ……？」

近づいて見えてきた奴の身体、その姿を目にし、思わず零してしまった呟き。

目の映るのは、まるで壊れかけの彫刻。

少し白い奴の肌が、彫刻と言う言葉によく合うような気がした。

そして、無数に刻まれた傷跡が、まるでひび割れたソレのようだ。

何かが炸裂したかのような火傷。

何かで穿かれたような傷跡。

無数に刻まれた裂傷痕。

どうやったらつくのか想像すら出来ないような大きなクレーターのような跡。

その部分だけが、浅黒い肌へと変色している。

なんだ、これ？　こいつなんでこんなに傷だらけなんだよ。

お前あんなに強かったじゃねぇか、なのになんだよこれ。

見た限り、昨日今日付いた傷じゃないのは判る。でも、この数は異常だ。

戦争から逃げ帰ってきた重傷の兵士でも、こんな傷が付いているかどうか疑問だ。

呆然と立ち尽くしていると、アイツがこちらへと振り返った。

思わず見つめ返してしまったが、動揺を気取られないようにすぐにその場を離れる。

気持ちをリセットするつもりが、先程よりも深い、何か得体の知れない物が心に巣食ってしまったみたいだ。

「あいつ、すっげぇ奴と何度も戦ってきたのかな……。だから、あんなに強かったのか？」

そうだ、初めから強い奴はいるだろうが、それもたかが知れている。

あいつは、きっとここに来る前から、何処かで戦って来たんだ。

俺みたいにいきなりギルドに行って、ちょっと人より評価がよかったんじゃない。

きっと、どこかで……。

水浴びを済ませ、部屋へと戻る。

既にアイツは何処かに出かけた後で、今は誰も部屋には居ない。

俺は自分のベッドに座り、荷物を漁る。

俺が冒険者に憧れを持つキッカケとなった一冊の絵本。

ありきたりだが、俺の心の奥深くに楔を打った英雄譚。

『剣聖への道』それが絵本のタイトルだ。

内容は、子供にもわかり易い簡単な物。

村を出た少年が、旅の果てに剣聖とまで謳われるまでに成長し、英雄となった物語。

一体いつ生まれたのか誰もわからない程、大昔から存在する冒険物語。

その一説に『おとこは、なんねんもねんねんもひとりでたたかいました』とある。
この簡単に済まされた『なんねんも』の間に、何があったんだろうか。

今だからこそ思う疑問。実在したのか、誰かの創作なのかもわからないただの絵本。
そんな架空の英雄がもし、実在するのなら。

アイツみたいに、傷だらけなんだろうか……？

絵本の中のそいつは、英雄と呼ばれて初めて仲間を得た。
それまではただ一人孤独の中で戦っていた。

もし、一人で戦う事が強さに繋がるのなら、俺は仲間なんて要らない。
それでもこの物語は、仲間を得た英雄が世界を救う物語。
もし、本当に孤独が強さに繋がるなら、彼は仲間と共に歩む事は無かったはず。

どっかの誰かが言ってた言葉。
『孤独は人を病に犯す。孤独はどんな強者をも殺しえる、唯一の魔術』

ここ最近までは理解出来なかったその言葉が、今ならなんとなく判る気がする。

俺は一人にもなりきれず、仲間だと心の底から呼べるような相手

もいなく、中途半端だった。

なら、最初にするべき事はやっぱりアイツに――

それから何日か経った。相変わらず顔を会わせる事があっても会話のキッカケが掴めず、俺は一人イライラと過ごしていた。

なので俺はストレス発散も兼ねた、そして最近の日課になってきている簡単な討伐依頼を受ける為ギルド向かう事にする。

今日は珍しく二人組の冒険者に誘われた。よく見ると以前俺の部屋の方に来ていた連中だ。

二人共戦士タイプなのに、さらに剣士である俺を誘うなんてバランスが悪いとも思ったが、どうしてもと言うので引き受ける。

なんだか自分が必要とされているみたいで、少し気分が良かったからだ。

依頼内容が深夜までかけての哨戒任務だったのが少し想定外だっ

たが、それでも俺の気持ちは少し晴れた気がした。
途中で何度か居眠りしかけたが、それでも無事依頼を達成出来たし、俺が居てよかったと二人は言う。

だがその良い気分も、依頼を終え部屋へと戻ろうとした所で暗雲が立ち込める。

部屋の鍵を、なくしてしまっていたのだ。
これじゃ部屋に戻れねぇ、どうすればいい？

こんな時間に管理人の部屋に呼びかけるのも迷惑かもしれない。
それに最近ダルベストは部屋を空ける事が多い。
なので今助けを求めたら、確実にアイツが出てくる。

会話のキッカケになるかもしれないが、正直それは格好悪すぎる。
だから今日の所は諦めて、大人しく適当な場所で夜を明かす事にした。

翌日、少々寝つきが悪かった所為もあり、起きるのが遅くなってしまった様だ。
目を覚ました時にはもう太陽が真上近くまで登っていた。
今なら部屋にダルベストが戻って来ているかもしれないし、管理人もいるはずだ。

だが、戻った鞘の住人達の様子が変だ。妙にざわついていると言うか、何か警戒しているような。

違和感の原因はすぐに判った。

俺の部屋の前では管理人としらない爺さん、それとダルベストが戻っていた。

そして彼らから告げられた『部屋に盗人が入った』その一言だけで、血の気が引くような気がした。

俺だ。間違い無く俺が疑われている。

だって俺はアイツにあんな態度を取っていたし、それに鍵を無くしたなんてこのタイミングで言っても誰も信じてくれないだろう。

そう思い、足元が崩れていくような錯覚に囚われる。

どの道鍵を無くした俺に責任があるんだ、罰くらい甘んじて受けてやる。

そう腹を括ったのだが、ダルベストの言葉を聞き俺は救われた。

「シュテルは端っからおめぇの事を疑っている様子はなかったぞ。すぐに犯人を捜しに行った」

何故？　何故俺が犯人じゃないと断定出来るんだ？

思いもよらない答えに戸惑う俺に、誰かの声が聞こえてくる。

声の主は鍛冶ギルドからの使いだった。何があったのかわからないが、今のアイツは剣を持っていないそうだ。

だから代わりの剣を届けに来たとの事。

アイツ何考えてんだよ！　丸腰で追いかけた？　そんな危ない真似するなんてどうかしてるんじゃないか？

そう思った時には、俺の口は勝手に動いていた。

「ソイツ、俺に届けさせてくれ！　あいつ今丸腰なんだ！　だから俺に！」

「ふむ、君は彼の友人かの？　ならばすぐに追いかけてくれ。ガルラント街道へと向かったはずじゃ、ギルドの早馬を貸そう」

爺さんが行き先を教えてくれた上、早馬まで出してくれるそうだ。

何者だこの爺さん？　だけど今はそれ所じゃねぇ、一刻も早く追付かねぇと！

そして俺はガルラント街門からスレイランナーに跨り走り出した。

アイツの為に、そして俺自身の為に。

俺の目指す”道”の為に。

## 閑話「剣聖への道」（後書き）

某有名な一文を引用しました。
死に到る病のアレです。

# 閑話「自己紹介」（前書き）

アルヴァス御披露目回です。

## 閑話「自己紹介」

今日は依頼を受けず、まもなく昼になると言うのにまだ自室でアルヴァスと雑談をしている。
既にダルベストさんは今日の依頼へと出かけた後で、部屋には俺とアルヴァスの二人しかいない。

何故男二人で部屋に篭りきりなのかと言うと、今まで話せなかった分、お互いの事を知ろうと思った為だ。
アルヴァスは想像通り、“血気盛んな若者の代表”と言った印象で、自分の生い立ちやこの街に来る前の事を少し苦い表情をしながら語っている。
やはり、これまでの自分の有り方に何か思う所がある様だ。
そしてこの後は、最近顔を会わせる事がなかったスフィア達への近況報告と、アルヴァスを皆に紹介する予定になっている。

ここ数日、俺はアルヴァスと二人で簡単な討伐依頼を受けていた。
アルヴァスは最初の内「こっちのDランク依頼の討伐なんて今の俺に出来るか不安だ」等と言っていたが、別にDランクの討伐依頼だからと言って、必ず魔物もDランクとは限らない。

群を組んだ魔物や、一定数の纏まった数を討伐する場合もDランクに分類される事があるのだ。
なので、そういった依頼をここ数日二人でこなしていた。

以前決闘した時にも感じた事なのだが、特別剣技に優れていたり、キチンとした師から教えを受けた訳ではないアルヴァスの動きは少々荒く隙が多いが、それを差し引いても有り余る戦闘センスを持ち合わせていた。

魔物とも随分戦い慣れており、一見粗いような動きの中にも常に自分のペースを保つある種の安定感さえ感じる。

基本的に片手剣によるヒット&アウェイスタイルで、さらにガントレットに固定された盾による受け流しも習得しており、典型的な守りの剣士だ。

さらに盾で保護してあるガントレットが発動体になっており、炎の魔術を扱う事も出来る。

これは以前戦った時から知っていた事ではあるが、どうやら彼は魔術の発動に時間がかかるタイプらしい。

なので防御を固めている様なポーズで相手を待ち受け、魔術を放ち奇襲を行ったりと我流ながらも様々な戦い方を習得している。

なので二人で組むときは俺が前に出て露払いをし、打ち漏らした敵をアルヴァスが受け止め、その間に俺が仕留めると言う作戦を取っている。

「それじゃ、昼はその友達との顔会わせもかねて一緒にメシ食いに行くんだな？」

「ああ、アルヴァスの行きつけの店とかないのか？　希望があるならそこにしようと思う」

当然、チャンスは有効に生かす。自分で適当な店に入ってみるのもいいのだが、少しでもお金を溜め込んでおきたいのだ。

「特にいきつけってわけじゃねーけど、故郷が山の幸を特産としてたんだ。前いったワイスラーの台所って所のメシが美味かったな。

山出身の俺ですらうまいと思ったぜ」

何故、最近は上手く行かないのだろう。

「そ、そうか。山の幸が食べられる場所希望って事でいいんだな？」

「まぁ別にそういう訳じゃねぇけど。俺が最近行ったのがそこだってだけで」

ううむ。ここは自分で新たに開拓するべきか？　個人的には海の幸を食べたい所なんだけど。

「ま、とにかくもうすぐ正午だ。後でおいおい決める事にして、そろそろ出かける用意しねぇと」

「それもそうだな。んじゃ着替えるとするか」

先日の一件で、ある種の一張羅だったクロースアーマーがダメになってしまい、今は修繕の為に購入した店に預けてある。

なので今日は普段着として買ったカーキ色のミリタリーシャツに、ジーンズのように丈夫な生地の、少しタイトなボトムスという格好だ。

いかにも『これからアウトドアしますよ』と言った風貌だ。

そういえば、海や川で自分で魚を釣って食べるって手もあるなぁ。

今度水辺に行く依頼でも探してみようか。

「やほ～シュテル！　何気に一週間ぶりかな～？　最近忙しかったみたいだね～」
「そうみたいね。知り合いの子からも貴方の話を聞いたわ、ガードが固い冒険者だって。一見さんお断りって話じゃない」
「シュシュの裏切り者め。散々私を利用した挙句鍛冶ギルドに入るなんて。学者ギルドに入り直せ」

久々に会った三人娘。相も変わらず元気な様だ。
それに、ガードが固いと噂にもなってしまっていたようだ。
そして更に、ミステは俺が鍛冶ギルドに入ったのがお気に召さない様子。

「お前すげぇな……全員こんな美人なのかよ……」

後ろに居たアルヴァスが、今日顔合わせする三人を見てそんな感想を漏らす。
彼の言う事も尤もだと思うけど、これはスフィアの交友の広さのおかげだろう。

「あら？　美人と評してくれるのは有り難いけど、貴方は誰なのかしら？」

最初に反応を示したサラは、アルヴァスを値踏みするかのようにつま先から頭のてっぺんまでまじまじと観察しはじめる。

「彼が今日紹介しようと思ってた、同室で暮らしている冒険者のアルヴァスだよ。ここ数日は彼と一緒に依頼を受けていたんだ」
「俺はアルヴァスだ。よろしく頼む」

少々気負っているのか、少し硬い挨拶をするアルヴァス。女性に

対して免疫が余り無いのだろうか？

「そう、彼と同室なのね。私はサラよ、シュテルとは何度か一緒に依頼を受けたりしたわ。これから一緒に仕事をするかもしれないし、宜しくね」

「私はスフィアって言うんだ～。シュテルとは冒険者になる前から友達だよ～！」

自己紹介を返す二人。そしてある意味一番の爆弾である彼女はと言うと。

「そう、シュシュと一緒に暮らしてるの……どっちが攻めなの」

とんでもねぇ爆弾投下しやがったよコイツ！！！！

「あん？　よくわからねぇが、どっちかと言うと俺は受けに回るのが得意だな。今までだってそうしてきたし」

「ちょっと待てアルヴァス！　これはそういう意味の質問じゃない！」

アルヴァスの答えを聞いて、まさか普通に返されると思っていなかったのかミステが見る見る内にその顔を赤く染めていく。

一矢報いたような気もするが、これじゃこちらが受けたダメージの方が遥かにデカい。

「え？　なになにどういう事？　どっちも前衛タイプじゃないの？」

「ああ、だけど俺は盾を使って相手の攻撃を受けるのが基本形だ。逆にシュテルはバリバリのアタッカータイプだと思ったけど、違うのか？」

スフィアとアルヴァスはよく分かっていないのか、そのまま戦闘についての談議を始める。
そしてサラは、一連のやり取りを見て笑うのを必死に堪えてる様子だ。

「思わぬ反撃を受けた……アルヴァスも中々手強い」

やっと戦線復帰したミステは、どうやらアルヴァスを手強い相手と認識したらしく、いつも俺に向ける黒い笑みを何も知らないアルヴァスへと向けていた。

これで、俺への風当たりも少しは弱くなってくれればいいんだけどなぁ。

「今の聞いた？　あの時の人よ……」「やっぱりあの人……イメージ通りだったわね」「前の彼とは上手くいかなかったのかしら」

耳に入る囁き声、ギルドの受付嬢達だ。
もう、大人しく業務に集中しろ！

その後、結局どの店に入るか決めかねていたらスフィアとアルヴァスから「ワイスラーの台所でいいじゃない（じゃん）」と押し切られ、いつも通りの店になってしまった。
別に味に不満がある訳じゃないけど、少し残念だ。
サラも同様に、少々不満そうにキャロン料理を注文していた。やっぱり好きなんじゃないかキャロン。

顔会わせも済ませ、今度みんなで遠くまで採取の依頼でも受けようと約束しその日は解散となった。

「なぁなぁ、本命は誰なんだよ？　やっぱりあのスフィアって娘か？」

アルヴァスもだいぶ打ち解けてくれた様なのだが、まるで思春期の子供みたいなノリになってしまった。

「お前は修学旅行夜の学生か！」

「なんだよ修学旅行って！」

## 閑話「その後の仲間達パート2」（前書き）

相変わらず平和なカノンの仲間達。
本編との温度差を感じます。

## 閑話「その後の仲間達パート2」

「どうだ、似合うか？」

レナとの買い物で最初に訪れたのは、私は余り利用した事の無い衣類専門の大型量販店。

そこの試着部屋で、私達はお互いに思い思いの服をその身に纏っている。

「んー。本来の髪の色を考えたら、青系統よりももっと淡い感じの方いいんじゃない～？」

そう言って、レナは目の前の空間に展開されているファブリックモニタの項目をいじり始める。

「そうか？　まぁたしかに言われてみれば……」

着ていた服が一瞬で別な物に変わる。そう、これは実際に着ているのではなく、商品を選んで自分の身体の表面に虚像として構築されている物。

店にある全ての服を短時間で試着する事が出来るこのシステムは、買い物をする上でとても役立つのだろう。

もっとも、私はいつも同じ様な戦闘服しか着て居ないのだが。

「じゃあ次は下着いってみようか！」

「な！　ちょっと待て！」

瞬間、ヒラヒラとしたフリルが大量に配された白い下着姿になる私。

実際には見えているこの肌も構築された虚像なのだが、それでも恥ずかしい物は恥ずかしい。

「よせ！　こんなもの着てられるか！」

慌てて自分の手元にもモニタを展開させ元に戻す。

「ハァハァ、今の保存したからね！　いいじゃない、減るものじゃないし」

「これ以上減ってたまるものか！」

思わず、露出の高い服で己の肢体を誇示するレナの一部分に目をやってしまう。

もげてしまえ！

「それにしたって、ああいうギャップで迫るのも一つの手段じゃな～い？『いつもはクールなお姉さま！　それがベッドの上では可憐な少女のような出で立ち！』嗚呼！　そんなギャップに私はメロメロになっちゃう！」

一人妄想に入るレナを無視して、私は男物の服を幾つか見繕う。

この装置の凄い所は、男物の服ですら自分に合うように構築される所だろう。

おかげで私は自分好みの服を買うのに困る事は無い。

私はいつも買うような、白を基調とした動きやすい服を選んで行く。

「そういえば、昔はカノンも白い服が好きだったな。今じゃまっくろくろになってしまったが」

遠い昔の記憶を思い出す。なんでも私の真似をしたがる可愛い弟子だった頃のカノンを。

「お前は今、どんな世界でどんな事をしているんだろうな……」

その呟きに答えてくれる人なんて居るはずもなく、誰にも聞かれぬまま虚空へと消え去って行く私の言葉。

「ユエ～戻って来～い」
「なんだ突然。ここにずっと居ただろう」

そういえば、今回持っていった私作の剣はあの二本だけだったか？
どうせなら私の作品を全て持って行ったらよかっただろうに。
私の作品に囲まれていれば、どんな場所でも寂しくないと思うんだがなぁ。

「まただよ。もう先に会計するよ～？」

「どういう事です？　これじゃいつもの私と変わらないじゃないですか。あの鎧は何処に行ってしまったんですかリオ」
「あーあれ？　きっと容姿としてじゃなく、装備として登録されちゃったんだよ。だからストーリー進めてイベントで入手できるはずだよー？」

仮想世界へと接続、いえ、ダイブと言うんでしたか。早速この”ぶいあーるえむえむおー”と言うゲーム世界に到着した私は、せっかく容姿設定で作られた漆黒の甲冑が自分の身に纏われていない事に落胆し、遅れてやってきたリオに説明を求めました。

どうやらすぐに手に入るわけでなく、少し頑張らないと手に入らない様です。

「では、早速そのストーリーとやらを進めましょうか。手伝って下さいねリオ」
「や、ストーリーは一人用だよ。すぐに終わると思うからパパっと行ってきなよ」

むぅ。どうやらそう簡単には行かないようですね。まぁ自分で苦労して入手した方が愛着も沸くでしょうし、それもいいかもしれませんね。

「そう言えば、ルシ兄の初期ジョブどうなってるー？　ある程度本人の資質に合わせて変動するんだけど」
「すみません、私にわかる言葉で話してください。こういうのに

疎いのを知らない訳ではないでしょう？」

ジョブってなんですか。頑丈さとか、そう言った物でしょうか？
たしかに騎士なら丈夫である事に越した事はないでしょうが。

「まぁとりあえず私に見せて『情報開示、対象リオ』って頭で念じてみて」

「判りました。……上手くいきましたか？」

中々便利な世界ですね、念じるだけでファブリックモニタの様な物が展開されました。
どうやら自分と許可を出した人間以外には見ることが出来ないようですし、現実世界よりも便利かもしれませんね。

「どれどれ……何コレ！　魔法使いがカンストしてる！　それに武闘家もカンスト目前じゃん！　それに上位職の魔導師まで２００超えてる！」

「だから、私に判る様にお願いします。　職業の事を言ってる様ですが、肝心の騎士の方はどうなってるのですか？」

仮にも、宮廷魔導師の頂点に立った身です。仮想世界でもそれなりの強さを持っていたとしても不思議ではないと思うのですが。

「そういえば、私も最初から魔法使いレベルが妙に高かったけど、それでもこれは異常だよ。えーと剣士じゃなくて騎士だよね？」

「そうです。剣士ではなく、騎士です。どうですか？」

私はここで騎士として満喫するつもりですから、魔法関連が高くても意味がありません。

「えーと、剣士の上位職だから、まず剣士の職業を育てないと表示されないよ。剣士レベルは４だから、２０まで上げないと騎士になれないよ」

ふむ？　と言う事は私は今すぐに騎士にはなれないと言う事でしょうか？　剣士とやらを２０まで上げるとの事ですが、それがどの程度時間がかかる物なのか、見当も付きません。

「とりあえず、意識加速レベル変更の手続きする？　結構時間かかるかもだから、申請しておけばカノ兄が帰ってくるまでの時間でも満喫出来ると思うよ？」

「現実世界との時間をずらす、と言う事ですか？　私は構いませんが、大丈夫なんですか？」

「大丈夫、ちゃんといつでも任意のタイミングで戻せるし、外の時間で２４時間以上ダイブしっぱなしも出来ないようになってるから」

なら、お願いしましょうかね。それなら短い休暇でもたっぷり楽しめるでしょう。

それに年甲斐も無く、新しい事への挑戦に対して意欲的になっていますし。

「じゃあ申請しておくねー。それじゃとりあえずストーリーすすめてきなー」

「了解です。有り難う御座いましたリオ」

さて、早くあの鎧を手に入れなければ！

## 閑話「カノンズレポート」（前書き）

今回は短いです。

## 閑話「カノンズレポート」

強い意識が流れ込んでくる。
時折、眠った俺を刺激する強烈な怒りの感情。
この時だけはシュテルの心が俺へと流れ込んでくる。

「まったく、人が大人しく寝てるのに邪魔しやがって」

気取られぬように、シュテルの心を読む。
あいつは順調にこの世界の知識を集め始めている様だ。

「それにしても、何故食べ物の知識の方が多いんだ。……まぁ悪くは無いな、でかしたシュテル」

何処まで行っても、アイツは俺だったようだ。
キレるキッカケも、興味の対象も俺とおんなじだ。
結構かけ離れた性格にしたつもりだったが、思いのほか似てしまったのかもしれない。

「あるいは、俺があの頃からそんなに変わっていなかったのかもしれないけどな」

自嘲気味に呟いた言葉が、何も無い暗闇へと吸い込まれて行く。

知識の泉と呼ぶべき、シュテルの脳内の一角。
そこで俺は、俺なりの考察をする。

こいつが疑問を持った、命の向かう場所。
人の発展が最高潮に達したときに起きるかもしれない大きな争い。
争いを収めんが為に引き起こされる何か。争いを回避する為に現れる何か。
より長く己を維持したいと思う、世界の意思。

たしかに、それは生物の本能としては正しいだろう。
だが、世界は生物であって生物ではない。
様々な命が芽吹き、それが織り成す営みによって、初めて世界となるのだ。
だから、コイツの疑問は尤もだ。

コイツはまだ、自分が英雄だと思っている。世界の問題を解決する英雄だと。

だが俺は、その道が俺達に用意されているとは思えない。
だがもし、意思が完全に尽きているのなら、こいつがここで生きていくのだとしたら……。

そして逆に、もしも完全に尽きていなかったとしたら――――？

その時まで、今は自由に生きてみると良い、シュテル。
お前は呼ばれたエキストラなのか、それともこの世界の住人として、英雄と言う名の主役になるのか。
お前の選択を、楽しみにしている。

## 閑話「カノンズレポート」（後書き）

次回も短くなる予定です。

## プロローグ「教団ギルドへの依頼」（前書き）

第三章のプロローグとなります。

## プロローグ「教団ギルドへの依頼」

「流行病……ですか」

執務室に拘束され、最近サボり気味で溜まっている案件に目を通している所に速達便が届いた。

内容は”港街アクラス”で急に蔓延し出した病についての報告。

今までの歴史上、あの街では時折原因不明の病が突如発生したという記述が何件かあり、今回も数十年ぶりに発生したようだ。

「私の代でこのような事が起きるとは、なんと言う幸運。私の代でこの病を完全に消し去ってみせましょう！」

「人々が苦しんでいるのに幸運とはなんと不謹慎な！　言葉を慎み下さいキュリウス様！」

控えていた神聖騎士団の副団長に諫められてしまいました。たしかに彼女の言う通りです、反省しなくては。

「では、早急に高位の治癒術師から何名か集め、治療団を編成して下さい。護衛は必要最小限で周りには気取られぬように。無用な混乱を招くわけにはいきません」

「ハッ！　直ちに治療団を選抜します。それと護衛の件なのですが、さすがに少数とは言えども、高名な人間ばかりでは余計に勘ぐられてしまうのではないでしょうか？」

ふむ、彼女の言う事も尤もですね。教団に聡い者では人員を見て何かを察してしまう可能性もありますし、外部から協力者を募るべきですかね。

「魔術師ギルドか、冒険者ギルドからそこそこの者を数名雇うという形を取ってはどうでしょうか？」
「さすがですね、私も今同じ事を考えていましたよ。最近は騎士ギルドもきな臭くなってきましたからねぇ」

となると、候補は数名に……。

「そうです！　素晴らしい名案が浮かびましたよ！　ふふふふふ、さすが私ですね！　あわよくばこのままなし崩し的に彼を我が教団に！」
「キュリウス様、少し声を抑えて下さい。それで名案とはなんでしょうか？」

また注意されてしまいました。そんなに大きな声を出していましたかね？

「少し心当たりがあるのですよ。無名でありながら、実力に申し分のない方に。少し待っていてください、今から冒険者ギルドに手紙を書きますから」
「心当たり、ですか？　何でしたら我が愚弟に協力を申し付ける事も出来ますが」
「いえいえ、彼も一応騎士ギルドの一員ですからね、どこから情報が洩れてしまうかわかりません。その点彼なら安心です」

まぁ、断られてしまったら彼女の弟君を頼ることになりそうですが。

しかし彼、シュテル殿ならまだこの街に来て日も浅く、余計なしがらみや派閥に組しているなんて事もないでしょう！

「キュリウス様がそこまで押す人物がいらっしゃるとは。一体どのような人物なのですか？」

ふふ、彼女の反応も尤もです。彼は今や、密かに各方面のギルド上層部ではちょっとした話のタネになっているのですよ。

戦闘ギルドでは冒険者ギルドにとられてしまいましたが、その他はまだこちらにも可能性も残っていますからね！

「よくぞ聞いてくれました。その人物はある日このガルヴェウスにふらりと現れ、職業診断で前代未聞の多才性披露し、あっと言う間に各ギルドの上層部にマークされると言う偉業をやってのけたのです！　さらにさらに！　我らがが神聖術の適正も高く、その面差しはエルフと見まごう程！　きっと彼ならば、我等の新たな広告塔……もとい、希望の星となってくれる事でしょう！！！」

少々やり方が汚いかもしれませんが、彼をモノにしようと動いているギルドには先制攻撃をしかけましたからね、今ならまだ何処からも声がかかっていないはずです！

「街の外……冒険者……」

何やらブツブツと呟いているようですね。彼女も彼に興味が沸いたのでしょう。

そうです！　彼女も教団きっての美貌の持ち主ですし、彼と一緒に活動すればその人気はより一層高まるでしょう！

「と言う訳で、手紙を書き終えました。これを冒険者ギルドの……そうですね、ギルド長に届けて貰えませんか？」

「ギルド長、ですか。ならば私が行くのが妥当ですね。では早速届

けに行って参ります」

佇まいを正し、教団員特有の礼をする副団長。

「ではよろしく頼みましたよ、アルシャさん」

## プロローグ「教団ギルドへの依頼」（後書き）

次回の更新まで暫く時間がかかると思います。

## 第一話「そんな毎日」（前書き）

遅れてしまって申し訳ありません。
思うように執筆時間をとる事が出来ずにいました。

構想の方は出来ていますので、これから少しずつ形にしていきたいと思っています。

# 第一話「そんな毎日」

草原を駆ける三頭の獣。ランドウルフと呼ばれる、Dランクにカテゴライズされている狼型の魔物だ。
大規模では無いにしても群れを形成して活動するコイツらは、状況によってはCランク任務に回される事もある。

「スティルラッシュ！」
左腕に装着したバングル型の発動体を使い、足止めを目的とした魔術を発動する。

小規模の斬撃を無数に繰り出すこの魔術は、最近では俺の攻撃の起点として使う事が多くなっている。

「バウア！！　ワウ！！」

最初にその攻撃に触れた一頭が吼え、それを聞き警戒する残りの二頭。
すぐさま接近し、動きの鈍くなったソイツに剣を突き刺し命を刈り取る。

この魔物の証明部位は口の中で一際発達している犬歯なので、頭さえ無事ならばどんな攻撃をしても部位が損傷する心配はない。

仲間がやられた事で冷静な判断が下せなくなったのか、残り二頭も本能のままにこちらへと向かってくる。
二頭が同時に大地を蹴り飛び掛ってきたのを確認して、こちらからも飛び掛かる。

相手の軌道を読めるので後から飛び立つ方が有利だ。そのまま剣のみ届く距離を計算して飛び掛かり、すれ違い様の横なぎ一閃。首筋から尾に掛けて横一文字に切り裂かれ、二頭目のランドウルフも絶命した。

残り一頭に意識を向け、改めて剣を構えた――のだが。

「やっぱり納得いかねぇぞオイ。どう見ても俺より強いだろシュテル」

「本当だぜ、とっととCランクになって家買えよ、それで俺も住まわせてくれよ」

振り向くと、既にランドウルフは胴の真ん中あたりで両断されていた。

そして苦笑いを浮かべる中年の男性と、額の汗を輝かせながら軽口を叩く青年。少々気だるそうな表情のダルベストさんと、剣を鞘へと戻しているアルヴァスだった。

そう、今日はダルベストさんも一緒に、同じ部屋の人間同士で依頼を受けていたのだ。

「そうだなぁ。今１２０ポイントだから、後四回位護衛の依頼をこなせばＣ一にはなれそうだよ」

今月頭にトラブルに巻き込まれはしたものの、それまではひたすら一期一会を楽しむような感覚で連日Ｄランク依頼を受けていた俺は、いつのまにかＤ＋ランクになっていたのだ。

そしてその後もアルヴァスやスフィア達とも一緒に仕事をこなし、最近では格上のCランク任務をダルベストさんと一緒に受けたりもしていたのだ。

その甲斐もあって、D＋ランクの制限いっぱいである２００ポイントまで残り半分を切っていた。

「護衛依頼なんてそうそうまわってこねぇって。知り合いに行商人でもいれば違うんだろうけどな」

「それ以前に、護衛四回なんて神経すり減らすような事をサラリと言うおめぇの考え方が恐ろしいぜ俺は」

行商人……ヨザークさんは元気にしているだろうか？　彼と別れてから今日で調度一ヶ月だ。

北の大陸に渡るには船を乗り継がねばならない上、途中の島々からなる”ラシア共和国”での入国手続き等で足止めもされるらしいので、相当時間がかかるそうだ。

今頃は共和国のどこかの島で行商をしているかもしれないなぁ。

「あくまでポイントを効率よく稼ぐ方法の話だよ。さすがに俺も護衛依頼連続は勘弁だよ」

「でもま、アタリの商隊なら悪くねぇがな」

護衛依頼も何度か受け、ガルアーク街道を首都へと向かって行軍もした。

この世界で最初に降り立った場所を横目に、最初の道を逆に進むのがなんだか不思議というか、妙にドキドキしたのを覚えている。

『久々にふるさとへと戻ってきた気恥ずかしさ』とでも言えばいいのだろうか？　とにかく不思議な感覚だった。

「でもこの前みたいな連中とは御免だぜ俺。よく我慢できたなシュテル」
「あれでもかなり危なかったけどなぁ。あと一日アイツらと一緒に居たら、魔物の群れを誘導して襲わせてたかもしれないよ」

やはり商人の中には悪徳とまでは行かずとも、強欲を絵に描いたような人間はいるようで、先日受けた依頼の主がまさにソレだった。

今月は改めて依頼の多種多様さと、ガルヴェウスに住む人々の多様さを感じる月だった。
まだ九日残っているのだが、やはり一ヶ月は三十日という意識が強いので、いまだに慣れない。

今日は五月二十六日。蒼月の日がまもなく訪れようとしている春の平凡な一日。

その平凡が、今まさに崩されようとしていたとはこの時は思ってもみなかった。

ガルヴェウスへと戻り、午後の依頼も一緒に行かないかと二人に誘われたのだが、今日は用事があると断りを入れギルドで別れてきた。

今日は俺の剣の解析が終わり戻ってくる日だ。なので鍛冶ギルドの方へと顔を出す予定だったのだ。

相変わらず職人通りの空は煙がうっすらと昇り、金を打つ音があちらこちらから聞こえてくる。

そして到着した、堅牢な砦を思わせる石造りの建物。

「こんにちは。親方さんは居ますか？　今日約束していたシュテルです」

「おう兄ちゃん！　ここ何週間も親方の機嫌がよくってなぁ、何かしらねぇか？　今日も兄ちゃんが来るのを楽しみにしてたみたいだが」

「んーやっぱり俺が将来有望な鍛冶職人だからじゃないですか？　まぁ冗談は置いておいて、何か新しい興味の対象が出来たんじゃないですかねー」

「その興味の対象が兄ちゃんってわけか。あながち間違いじゃねぇかもなぁ」

親方は今、俺の剣の鉄の構造を再現しようと躍起になっているようだった。

粘度と硬度のバランスを少しずつ変えた刀身はちょっとやちょっとで再現するのは難しいのだが、そこはさすがの一流職人を束ねる頭領。

始めこそうまくいかなかったのだが、その後に数本打つ内にどう

やらコツを掴んだらしく、打つ度にその完成度を上げていた。
そして今日、ようやく満足の行く物を作ることが出来た為、晴れて俺の剣が戻ってくる事となった。

受付のおじさんが奥へと向かっていったのを確認し、待合場の椅子に腰掛ける。

「あ、シュテルさん！　ご無沙汰しています、僕の作った発動具の調子はどうですか？」

休憩したいた所にかけられる声。
以前のトラブルで杖を失った俺に、助け舟を出してくれたベオールだった。
俺と一緒にいる内に閃いたらしいこの発動具は、バングルタイプで、それでいて相手の攻撃を受けても壊れないかなり優秀な一品となっていた。

「やぁベオール。発動具は何の問題もないし、敵の攻撃を受けても不調は見られないよ。これなら工房長に提出しても文句なしだと思う」
「クッション性の高い素材でコーティングするって発想が無かったんですよね、今までは。でもこれなら、もっといいものがこれからも沢山出来てくると思います。だから僕も気を抜かないように精進しないと」
「お互い頑張ろうな、また暫くはこっちで活動できないけど、準備か出来次第本格的に魔術剣の作成に入ろうと思ってる」
「素材がなかなか揃わないんでしたっけ？　でもすごいですよね、これが成功したら武器に革命がおきますよ！」

興奮気味に声を上げるベオール。彼はまだ若い為、新しい物に対して肯定的だ。
それに端から無理だと諦めたりせず、柔軟な発想で挑戦する強い信念も持ち合わせている。
きっと彼なら次代の職人として大成してくれる事だろう。

「兄ちゃん！　親方の用意が出来たみてぇだ、工房の方で待っててくれとよ！」
「あ、了解しました！　てわけだから、俺は自分の工房に行くよ。また今度耐久テストに付き合うよ」
「自分の工房なんてうらやましいですよー！　テストはもう大丈夫ですから、そのバングルはそのまま使ってくれていいですからね」

ベオールから発動具をそのまま譲り受けた俺は、ギルドの裏手にある工房へと向かう事にした。

## 第一話「そんな毎日」（後書き）

お気に入り件数がいつの間にか１０００件を突破している事に気がつきました。

記念に何かする所か、そもそもここまで沢山の方がお気に入り登録してくれるとは思っても見なかったので、何も考えていませんでした。

本編のストックも溜まり、ある程度安定した頃に閑話として何か掲載したいと思っています。

感謝の意を表す為のお話なので、どんな内容がいいかもしリクエストやご意見を頂ければ、それに沿いたいと思っています。

## 第二話「追憶の剣」

ギルドの裏手には鍛冶職人の工房が連なっている。
表通りにあるのはギルドでの有力者の傘下である工房が殆どで、直売や作成依頼を受けたりと商店としての面が大きいのだ。

裏手にあるのはそういった工房の下請けや、純粋に良質の武具への探求を目的とした人間、それに俺の様に自分の為に鎚を振るう人間の工房が多い。
そんな工房街の一角にある古びた建物。壁のレンガの表面に亀裂が入り、煙突のレンガやその周辺の屋根も煤で変色している。
外見こそ周りの工房に比べてくたびれているが、中はもっとくたびれていたりする。

この古びた工房こそ、長から譲り受けた俺の工房である。
最初はこんな外見だったので心配していたのだが、工房の心臓とも言える炉は健在で、長年修繕を繰り返されてきたであろう巨大な炉はそんじゃそこらの炉よりも耐火性に優れ、高い温度を保つ事も出来るそうだ。

工房へと入り、今俺が作っている作品を手に取る。
革鎧を駄目にされた後、より強力な鎧を作ろうと思い作り始めた作品。

当初の予定通り、ブリガンディと呼ばれる、革と鉄を層にして作るブレストアーマーだ。
今日はついでにコイツを完成させるつもりでもあったのだ。

以前、丈夫でしなやかさに定評のあるクリムゾンホーンの皮を台

無しにした事があったが、今になって思うとなんて勿体無い事をしたんだろうか。

今回はそのクリムゾンホーンの皮と、この世界に来て一番お世話になった魔物、フレイルラットの尾を使っている。

以前俺が売却した物が奇跡的に鍛冶ギルドに残っていたので、無理を言って割安で譲ってもらったのだ。

尾は既に皮ひもとして加工されており、それを網目状に編み上げて、皮の下に貼り付けてある。

網目を縫うように、錬金術で加工された魔鉱石を練りこまれた鉄糸をさらに編みこみ、強度と一緒に、魔力を通すことも出来るようにしてある。

本来ブリガンディは皮と皮の間に鉄板を仕込むのだが、俺が考えた機能の為、鉄板は一番下、即ち体に触れる層に仕込んである。

今日はその仕掛けの最後の仕上げにきたのだ。

早速取り掛かろうと作業机へと鎧を置き、工具を取り出した所で来客を知らせる扉の軋んだ音が工房に響き渡る。

蝶番に油を差さないといけないなぁ近いうちに。

「あんちゃんいるかー？」

いつも通りの轟音のような呼び声。今は炉に火も入れていないし、鎚を振るっている訳でもないのでそんなに音量を上げなくてもいいじゃないかと思ってしまう。

「ここにいますよー！　そんな大きな声ださなくても大丈夫ですってば。ご無沙汰しています親方」

入り口の方へと顔を出すと、布に包まれた荷物を手に満面の笑みを浮かべている親方がいた。

おそらくあれが親方の打った作品だろう。俺の剣は鞘に納まったまま、後ろに立っている人が持っている。

って、後ろの人？　一応この魔術剣は完成まで極秘扱いなのだが、あの人は何者だろうか？

濃い紫のローブを纏い、シースルーの布が取り付けられたフードで顔半分を隠すという見るからに怪しい風貌。

ローブが身体に密着しているせいで身体のラインが浮き上がり、おそらく女性であることが窺い知れる。

「あの、そちらの方は一体？」

「おっと、今日はこの人の紹介もかねてんだ。今回の魔術剣製作に協力してくれる、錬金術師のレイニーさんだ」

そうか、作成に錬金術を取り入れると言い出したのは自分だった。なら本業の人の協力を得るの当たり前だ。

すっかり失念していたが、親方はしっかりと人を用意してくれていたようだ。

「ご紹介に与りました、レイニーと申します。錬金術師ではありますが、錬金術ギルドには登録されておりません、言わばモグリと呼ばれる人種ではありますが、何卒よしなに……」

モグリ……。大丈夫なんだろうか？　親方がわざわざ紹介するくらいの人物なのだから、実力はきっとあるんだろうけども。

「モグリだなんて謙遜しねぇで下さいよ姐さん！　シュテル、この人は先代や先々代の頃から素材の加工や調合をして下さっていた大先生なんだ。今でこそギルドを引退してるが、練金術ギルドの今の

長もレイニーさんには頭があがらねぇくらいなんだ！」

なんと！　そんな人の協力を得られるとは思ってもみなかった。

しかし先々代からって、この人一体いくつなんだろう？　顔は見えないが背筋もピンと伸び、声の張りやうっすらと見て取れる身体のラインからして、どう考えても３０行くか行かないか位にしか感じられない。

「貴方はずいぶんと革命的な発想を持ち合わせていると、長が絶賛していましたよ。私も今回の件を聞き、是非協力したいと立候補してしまいましたの」

「いえ、そんな……偶々常識知らずだったお陰でたどり着いたような物ですよ。ご協力に感謝しますレイニーさん。聞いているとは思いますが、俺の名前はシュテルと言います。これから宜しくお願いします」

「んで、これが俺が打てた最高の作品だ。芯鉄の構造以外はその剣とほぼ同じ比率で硬度を変えてある。最初はどうやって違う硬度の鉄を一体化させるか悩んだんだが、これはアレだ、鉄を折ることによって違う硬度の鉄を層にしていたんだろ？」

早速包みをほどき、まだ鞘も柄も取り付けられていない刀身が姿を現す。
材質は分からないが、黒や銀ではなくうっすらと黄色みがかっている。まるで俺の知る本来の月のような色だった。

「さすがです。折り込みや叩き伸ばしで層を作るのも正解です。やっぱり自分だけで正解にたどり着きましたね親方さん」
親方は、俺からのヒントや助言を一切聞かず、自分だけでこの剣の構造に挑んだ。
さながら、正体が見えないこの剣の製作者である、姉さんに勝負を挑むかのように。

「ああ、これで俺はまた戦える。この技術は後世に伝えても構わねぇんだな？　一線を退いていたが、また俺の中の炉に火が入っちまったぜ！　やっぱりギルドの奥で踏ん反り返ってるなんて俺にゃ合わねぇ」

そう言いながら席を立ち、工房の外へと向かう親方。
心なしか、最初に会ったときよりも若々しいというか、体中からエネルギーがあふれだしているようだ。

「では次は私と少しお話してもらえませんか？　実は今回の協力する切欠は、この剣を見せて貰った事なんですの」

工房に残ったのは俺とレイニーさんだけとなった。どうやら何か俺に話しがあるようだ。
この剣の事で質問でもあるのだろうか？

「これはムーンダストですが、外に魔力や魔素を放出した様子があ

りません。普通は少しずつ持ち主へと還元される物なのですが、これはずーっと、溜め込んでいるようですわね？」

そう告げるレイニーさんの顔はフードで覆われて良く見えないが、それでも口の端が僅かにつりあがり、笑みを浮かべているのが分かる。

「恐らく、この剣の製法では外に魔力を放出させる事は出来ないのでしょう。折り返しでしたか？　何層にも重ねられた影響かと」

「きっとそうでしょうね。俺もこの剣を使ってて、そう言った何かが流れてくるような事はありませんでしたし」

聞きたい事はそれだけなんだろうか？　イマイチ話が見えてこない。

「これは、恐らく貴方の魔力や思念なども、沢山溜め込んでいるのでしょうね。ムーンダストとは本来そう言う物なのですからね」

思念も溜め込む？　それは初耳だ。

「ですから、蒼月の夜は夢見が良いと昔から言われているんですの。さてと、ここからが本題なのですけど、この剣は貴方の為だけに打たれた品だそうですね？」

「はい、それは俺の為だけに打たれた一品限りの剣です。それが何か？」

恐らく親方から既に聞いているであろう話を、改めて確認してくるレイニーさん。その穏やかな口調の中に、どこか尋問のような不穏な空気を感じるのは何故だろう？

「この剣に込められた魔力は、間違いなく貴方の物です。通常ムーンダストはその魔力を放出しきると、また溜まるまでは長が持っていたような淡い金に輝く物なのです。しかし貴方の剣は漏れ出す事がないので、いつまでも蒼く輝いたまま」

レイニーさんの話は続く。そして、先ほど親方の見せた剣を「月のようだ」と評した俺は、ある意味正解だったようだ。

尤も、月が淡い輝きを放つのは光を反射しているだけで、月そのものがそんな色をしているわけではないのだが。

「これは、紛れも無い貴方の魔力の蓄積による物。そしてこれは貴方の為に作られた剣である事は今、貴方が証言してくれました」

「証言って、まるで尋問みたいな言い方ですね。言いたいことがあるならハッキリ言ってくれると助かるのですが」

つい、語調を強めて言い返してしまった。本当にいよいよ尋問めいて来たため、つい。

「ではハッキリと申し上げます。貴方は何者なのですか？　この剣に込められた魔力量や思念。どう考えても十年二十年で蓄積される量ではありません。軽く見積もっても、そうですね、五百年分は蓄積されています。先ほど貴方はこれは自分の為に作られたと仰りましたが、どう考えてもそれはありえはしないのです。古代から伝わるユニークウェポンならありえる話ですが、貴方がそれを否定しました」

今までの穏やかな口調ではなく、問いただすような、どこか責める様な口調でまくし立てるレイニーさん。

そして、普通の人間では考えられない矛盾に気がついたレイニーさん。

「もう一度聞きます。貴方は何者ですか？　嘘をついているようにも見えませんし、恐らくこの剣は貴方の為に作られたのでしょう。それは長も認めています。ですが、私には貴方が得体の知れない何かにしか見えません」

キッパリと言い放つレイニーさんに俺は何も言い返すことが出来ず、ただ床を見つめるだけだった。

## 第二話「追憶の剣」（後書き）

少し追い詰められてしまうシュテル。

感想や御指摘等ありましたら、気軽に書き込み下さい。

閑話のリクエスト等も大歓迎です。

## 第三話「疑惑と鎧と錬金術と」

マズい、マズいぞ。
まさか自分の剣にそんな特性が隠れていたなんて思っても見なかった。
そして、そこから俺が異質な存在だと感づく人がいるなんて……。
たしかにカノンが肌身離さず常に自分の傍に置いていたなら、その思いや魔力等の力が蓄積されていてもおかしくは無い。
思念はともかく、魔力を蓄積する事は事前に分かっていたと言うのに……。

「答えてくれますか？　私は貴方が何者なのか、その事に興味があって今回協力しようと思ったんですの。言わば対価のようなものですわ」

これはもう確信している、下手に濁してうやむやになんて出来そうにない。
かと言って真実を話すなんてもっての外だ。

何か、何かこの問題を回避する方法は無いか……。

そうだ、以前指摘されたアレで誤魔化す事は出来ないだろうか。

「レイニーさん。貴方は何故、五百年以上の年月が立っていると思ったのですか？」

「ですから、先ほど申し上げたように込められている魔力の量から逆算した結果ですわ」

「その逆算の前提になっているのは？　膨大な魔力が渦巻いているような場所にずっとあったとしたらどうでしょうか」

以前、魔術講習の際に指摘された事。俺に内包されているヒュマリアでは考えられない膨大な魔力。

今度は『膨大な魔力を持つ異質な者』と見られる可能性もあるが、少なくとも『五百年もの時を生きた異質な者』よりはマシなはずだ。

「まさか聖地に安置でもしていたとでも！　いえ、そんな事は不可能なはずです……」

一瞬声の音量が大きくなりはしたが、すぐさま自分の考えを否定して考え込むレイニーさん。

「レイニーさんは、相手の魔力がどれくらい内包されているか推し量ることは可能ですか？」

「え？　突然ですね。一応魔術の心得もありますので可能ですわ」

「では、俺の内包魔力を測ってもらえませんか？」

俺の提案に一瞬思案顔をしたが、すぐにこちらへと近づいて来て――

「うわ！　ちょっとレイニーさん！」

「大人しくして下さいませ。少しでも流れを読み取りやすくする為ですので」

近づきそのまま身体を密着させてくるレイニーさん。腕を首の後ろに回され、どこから見ても抱きつかれているようにしか見えない状態。

近くに来た時に一瞬見えたフードの中の顔はやはり三十、いやそれ所か二十代後半といった程度にしか見えなかった。

「そのまま……心を落ち着かせてくださいまし。緊張されては見れる物も見れなくなりますわ」

そう、耳元で静かに囁く妖艶な色が見え隠れする声に、ますます緊張してしまう。

本当のお婆ちゃんなような人だったらこんな事にはならなかっただろうに！

極力冷静に心を落ち着かせようと葛藤する事数分。レイニーさんが少し身体を強張らせる。

「これは！　失礼しました、もう楽にして結構です」

「あ、はい。堪能させて……じゃなくてお疲れ様でした」

身体を離し椅子へと腰掛けるレイニーさんは、心なしか先ほどよりも疲労の色が濃く見える。もしかして、結構無茶なお願いだったのだろうか？

「シュテルさん、貴方はヒュマリアではなかったのですか？　もし

違ったのでしたら、私の先ほどの発言を撤回したいと思います」
「魔術の講習を受けた時にも同じような事を聞かれました。『先祖にエルフ等はいなかったか』と。正直俺は自分の出生については殆どわからないんです。だからもしかしたら、先祖にそういった種族がいたのかもしれません」
「そのようですわね。ヒュマリアにしか見えなかったのですが、貴方の魔力量はハイエルフ所かドラゴニアにまで匹敵するかもしれません。たしかに貴方ほどの人が所持していたのなら、この剣の魔力量もありえない話ではありませんわ」

どうやら納得してくれたみたいだ。しかし、それほどまでの魔力を持つカノンが五百年以上所持していたのも事実。
だったらもっと膨大な量が蓄積されている可能性もあるのだが、どういう事なのだろう？　もしかしたら蓄積できる限界があるのだろうか？

「つかぬ事をお聞きしますが、もしかして蓄える魔力にも限界と言うのはあるのでしょうか？」
「当然ありますよ。砕月も魔力保有の限界から崩壊したと言われていますのよ。もしかしたらこの剣も崩壊寸前だったかもしれませんわ」

……危なかった、これは怪我の功名かもしれない。このまま使っていたらいずれ壊れていたかもしれなかったなんて……。

「そうですわね、今日はこの剣の魔力が開放できるようにだけでもしておいた方がいいかもしれませんわね。調度もうすぐ蒼月の日ですし、その時に少しでも魔力が還元されるように」
「是非お願いします。何か用意する物はありますか？　普通の素材や道具なら一通り揃えているんですけど」

「そうですわね、”海霊水”と何か魔力伝導率の高い器があればいいのですけど、鍛冶目的の工房には恐らく置いてないかと」

ふむ、たしか錬金術で素材を変質させるのに使うのが海霊水だった筈だ。金属に柔軟性を持たせて繊維状に加工したり、素材の持つ特性を他の物質に移すのに使う液体だ。

「それならありますよ。器のほうは魔鉱合金製の物で大丈夫ですか？」

「あら、あったのですか？　もしかして錬金術も使えるのかしら？」

「いえ、ただ加工しやすいように変質させたりしか出来ませんよ。今調度それを利用した防具を作っていたんです」

容器に波々と満たされた海霊水に、俺の剣を丸ごと浸す。これからこの剣の表面の部分に、魔力が流れ出る小さな穴のような道を作るのだ。

正直自分ではどうすればいいか想像も出来なかったし、万が一でもこの剣が駄目になってしまうのが怖くて中々踏ん切りがつかなかった。

しかし、レイニーさんはこの街で屈指の腕前だと言うことは親方さんが保障してくれているし、安心だろう。

「それでは始めたいと思います。刀身全体から魔力が流れるようにすれば宜しいのでしたよね？　正直今のままは崩壊の恐れがあるとは言え、魔力を断ち切る事が出来る剣からその力を奪うのは勿体無く感じてしまいますわ」

「それでも、必要な事なんです。それに剣の性能に頼らなくてもそ

れくらい出来る人を知っていますから」

実際、この世界の上位の位置にいる人の中にはそんな逸話を残してる人がいるし、カノンもそんな事をしていた気がする。

たしかに魅力的な効果だが、それ以上に魔術剣の効果の方が俺には必要だ。

「そうですか、それでは始めますわ」

そう宣言したレイニーさんは目を閉じ、器を両手で触れ、魔力を流し込む。

海霊水の中の魔力は視覚として捉えることが出来、優しい木漏れ日のような緑の光が刀身を包み込み始める。

その幻想的な様子に目を奪われていると、今度は刀身から青い何かが溶け出すように、海霊水の色を染めていく。

「表面のムーンダストに魔力路が出来てきたようです。ムーンダストの成分と性質の一部が溶け出したのですわ」

なるほど、という事はそろそろ最終工程なのだろう。

そう思った時には既に海霊水の光は止み、うっすらと青い液体が湛えているだけとなっていた。

「完成ですわ。とは言っても、まだ発動体を埋め込んでいないので発動具として使う事はできないのですけど」

「あ、もう出来たんですか。ありがとう御座いますレイニーさん」

取り出されて剣は、加工前となんら変わりないように見えるのだが、大丈夫なんだろうか？

「これで少しずつ内包された魔力が貴方へと還元されますわ。暫くいい夢が続くかもしれませんわね」
「それはいいですね、やっぱりいい夢見れたほうが楽しいですし、寝るのが楽しみになります」

後片付けをしようと器に入った海霊水を棄てようとした所で、レイニーさんが待ったを掛けてきた。
この海霊水は多少とは言えムーンダストの特性を受け継いでいるので、武具の材料になるそうだ。

「そういえば、防具を作っていると仰っていましたね？　少し見せてもらっても？」

突然振られた防具の話題。とりあえず防具をレイニーさんに手渡す。

「これは、随分と美しい鎧ですわね。材質はなんでしょう？　裏地はスティルハウムのようですが、この表面は一体？　まるで磁器のように光沢があって綺麗な白色ですわね」
「それは、革の上から何度も何度もクロムツリーの混合液を重ね塗りしたんですよ。本来家具に使う素材なんですが、こうする事で強度を上げると同時に、魔力を流しやすくしているんです」

以前依頼で見かけた“クロムツリーの樹液”これは早い話が漆のような物の原料だったのだ。
そのまま使えばクロムタイトのような黒光りする色に仕上がるのだが、そこに様々な薬品や鉱石の粉末を混ぜて別な色に発色させる事が出来る。

俺は折角なので、修復してもらったクロースアーマーに合うように、白く仕上げたのだ。

「なるほど、これは見事な仕事ですわ。本当に面白い発想をするものですね。この表面にうっすらと刻まれているこれは、防壁の紋章ですわね？　中に発動体も仕込んでいるのかしら？」

「はい。今日はその溝を完成させて、塗装を施そうかと思っていたんです」

「そう、ならそうですわ！」

何か閃いたのか、レイニーさんは作業机から彫刻等を取り出し、紋章を完成させて行く。

そして――。

「これは今日の非礼のお詫びですわ。それにこのままでは海霊水の効果も消えてしまいますしね」

そう言って、レイニーさんは止める間もなく鎧を器に浸し、魔力を流し込み始めた。

「ちょ、レイニーさん一体何を！」

「大丈夫です、シュテルさんが損をするような事はありませんわ」

その言葉を信じ、黙って作業を見続ける。

次第に海霊水の色が薄くなっていき、最後には元の無色透明になっていた。

「完成しました。これでこの鎧にムーンダストの性質の一部が移りました。これなら身に着けているだけで魔力を溜め込み、この防壁の紋章も持続して発動させる事が出来るはずですわ」

取り出された鎧は、白く光沢がある表面に、うっすらと青いコーティングを施され、紋章の溝は他よりも若干濃い青に染まっていた。
今日はこの溝に青い樹液を塗りこむ予定だったので、手間がはぶけた、それどころか――。

「これは！　すごいですレイニーさん！　俺が想像していた仕組みよりも更に上を行っていますよコレは！　それに色だって俺の塗りたかった通りの色です！」
「ふふ、それはよかった。貴方の今着てる服の色や鎧の色に合うと思ったのですけど、喜んでもらえて何よりですわ」

完成した鎧は、革であると誰も気がつかないような光沢を放ち、淡い水色と濃い水色の紋章がまるで芸術品の様な完璧な一品となった。
物理的な防御力はもちろんのこと、魔術による強化も完全な物となり、一挙に戦力アップだ。

「それでは、今日はこれにてお暇させて頂きますわね」
「はい、俺もそろそろ鞘に戻ります。今日は有難う御座いました」
「いえいえ、こちらこそ今日は失礼いたしました。また今度、お茶でもご一緒しましょう」

そう上品に微笑むレイニーさん。最後までフードを脱ぎはしなかったものの、それでも覗かせたその表情はとても柔らかなものだった。
一時はどうなることかと思ったが、無事にやり過ごすことも出来た上、こんなプレゼントまで頂いてしまいむしろ悪い位だ。

工房の片づけをしてしっかりと鍵をかけた俺は、完成した鎧を抱

えてホクホク顔で鞘へと戻る事にした。

## 第三話「疑惑と鎧と錬金術と」（後書き）

何とか事なきを得たシュテル。
そして鎧も想像以上の物が完成して少しづつですが戦力があがりました。

## 第四話「物事の評価」（前書き）

ちょっと長めです。
最近スフィアの出番が少ない気がします。

## 第四話「物事の評価」

昨日は午後の依頼を受けなかった為疲れも溜まっていなかったのか、何時もより早く目が覚めてしまった。
剣から魔力や思念が流れるようになったと聞いたので、昨夜は剣を枕元に置いて寝たのだが、特に変わった様子もなく何時もと同じように目覚めた。やはり蒼月の夜限定なんだろうか？

アルヴァスのベッドに目をやると、どうやらまだ夢の中にいるようだ。
昨日は部屋に戻った段階ではまだダルベストさんもアルヴァスも戻ってきたおらず、恐らく夜遅くまで酒場にでも行っていたのだろう。

そしてダルベストさんもまだぐっすりと眠っているようだ。アルコールを沢山摂取した為なのか、それとも歳の所為なのかはわからないが、いびきがとても大きく時折呼吸も止まっている様子。
睡眠時無呼吸症という奴だろうか？
しかしよくこの騒音の中で寝ていられたなぁ、今から二度寝なんて出来そうにない。

時計を見るとまだ四時になったばかりで、さすがにこの時間では風呂にも入れないと思い、昨日完成した鎧の付け心地を試す事にする。
クロースアーマーを着込み、その上から鎧を装着する。

クロースアーマーの以前切り裂かれた箇所は、そんな痕跡が跡形も無く消え去り元通りの美しい仕上がりとなっていた。
そういえば修繕に持っていった時、店員に少し驚かれてしまった。
自分で少しアレンジしたのをすっかり忘れていたのだ。
金色や青色の染料は中々高価らしく、あの配色では貴族に間違えられても仕方ないとの事だった。

「よし、あまり締め付けもきつくないし動きが阻害される様子もないな」

クロースアーマーの上からブリガンディを着込んだ姿を部屋に備え付けられていた鏡を使って確認し、我ながら『まるで物語に出てくる騎士のようだな』なんて若干ナルシスト的な感想を抱いてしまう。

「とりあえず、次は実戦だ」

最近は朝早くから依頼を受ける事も増えた為、早朝訓練が出来ない日もあったのだが、今日は思う存分訓練に明け暮れる事が出来そ

うだ。
以前ガーラントとファルクスと一緒に早朝訓練をしようと約束したのだが、あの二人は首都への護衛任務の後、そのまま王都の方まで護衛を断続する事にしたそうだ。
ギルドウィンドウにはその旨が記されたメールが届いており、暫く戻れないかもしれない事を謝っていた。

なんでも、ファルクスが折角王都まで来たのだから少しその辺りの魔物と戦ってみたいと滞在日数を延ばしたそうな。
まぁ折角遠くまで行ったのだし、ゆっくり観光したい気持ちも分からなくは無いので、気にせずにゆっくりして来て構わないと返信しておいた。

「まずは適当な魔物でも狩ってみるか」

鞘から最も近いガルエルム街道へ向かうため、ガルエルム通りを進んでいく。
少し前に知ったのだが、通りや街道の名前は繋がっている主要都市の名前から来ているようだ。
最初に通った”ガルアーク”も”ガルヴェウス”と”ライズアーク”を結ぶという意味だった。

今から向かうガルエルム街道も、ガルヴェウスと”ワイエルムの町”から取った名前だ。
ワイエルムの町と言うのは山が連なるワイエルム山岳地帯の麓にある町で、アルヴァスもその町から来たそうだ。
生まれ故郷は山岳地帯の中にある小さな集落だったようだが、冒険者になって以来一度も戻っていないとか。

ガルエルム街道はガルアーク街道の次に危険度の少ない街道で、スフィアやサラ、そしてミステの三人の主な活動拠点だ。
最近では俺やアルヴァスと共にDランク依頼を受けたりしている為、少しづつではあるが三人も実力を上げ、近々北の街道”ガルラス街道”へと活動の場を移す予定らしい。

「さてと、丁度いい相手がいるみたいだし、鎧の性能を試してみようかな」

街道を進むと、草原の向こうにヘビーモウラスがいるのが見えた。
アイツの突進に対してどれくらい衝撃を緩和できるのか試す事にする。

「じゃあまずは挨拶代わりだ。”ウィンドフレア”」

殺傷能力の低い、空気を破裂させ衝撃を与える魔術を放つ。
これは牽制やかく乱の為に作った発動の楽な魔術で、剣を振りながら出す事も容易だ。
接近戦の合間に相手の近くで発生させて体勢を崩したり、注意を向けさせたり出来る凡庸性の高い魔術。

突然の衝撃と音で驚いたヘビーモウラスは、狙い通りにこちらに

気づき突進してくる。
それを確認し、鎧の強度を試すのにも自分が吹っ飛ばされては意味がないと、神聖術で身体を強化して待ち受ける。
果たしてどんな結果になるのか――――。

「これは予想外過ぎるだろ……」
目の前の光景を見て、思わず呆然とし半分呆れた様な感想を漏らしてしまう。
一直線にこちらへと向かってきたヘビーモウラスが、鎧に衝突した瞬間に大きく弾き飛ばされたのだ。
突進の瞬間こそ身体全体に衝撃が伝わった物の、肝心の腹部には痛みも何も感じなかったのだ。

「これは防具の出来以前に、紋章の効果が大きすぎるんじゃないか？」
恐らく、神聖術の発動に反応して防壁紋章も起動したのだろう。
鎧には傷一つついていない事から突進が直接鎧に触れる前に弾かれた筈だ。
それでも一瞬全身に衝撃が走ったのは、紋章で殺しきれない衝撃が伝わってきたと言う事だろうか？

「ま、まぁ何にしても鎧の性能は申し分ないみたいだし、良しとしようか」

若干、自分が頑張って作った鎧本来の力が発揮される事なく、防壁の力だけで事が片付いてしまった事に不満が残るが、今はそれで満足しておく事とする。

もし不意打ちや魔力切れを起こした時の保険と思えばいいのだし、防具に紋章の機能を持たせるのも俺のオリジナルだ。

ただ、この防壁の性能もレイニーさんのお陰の様な気もしなくは無いのだが……。

性能テストも終え、鞘で朝風呂を頂く。

あの後も暫くヘビーモウラスを狩り続け、雀の涙程とは言えポイントを稼ぎ肉も持てるだけ持って小遣い稼ぎもしたのだが、思ったよりも時間がたってしまったようで、今日は一番風呂では無いようだ。

既に浴場には先客が来ていて、何人かがシャワーを浴びていた。

そういえば最近少し気になる出来事があった。やはりこの身体に刻まれた傷跡は良い意味でも悪い意味でも目立つようで、脱衣所で脱いだ瞬間に周りの空気が凍ってしまうという事がしばしばあったのだ。

そして今日も――。

「！　あ、ああアンタか。相変わらずすごい傷だな、昔なにやってたんだよ本当」「そういえ前に一回組んだ事があったよな。あの時からランクの割に強すぎたと思ってたんだよ。もしかして傭兵上がりか何かなのか？」

と、こんな具合に聞いてくる人間も何人か居るのだ。
そして俺はいつものように。

「過去を余り詮索する物じゃありませんよ。これは口で語って聞かせる様な軽い物じゃないんです」
と、少し意味深な、そしてカノンに敬意を払った言い回しで追求から逃れる。

風呂から上がり自室へと戻ったのだが、まだ二人はベッドから起き上がれないでいた。どうやら酷い二日酔いらしく、今日の午前中いっぱい休む事にしたそうだ。

仕方ないので二人の事は放って置く事にして、俺は今日も午前の依頼を受けるためギルドへと向かった。
今日はスフィア達と一緒に依頼でも受けようか。

そう思っていたところに、タイミングよくスフィア、サラ、ミステの三人組が現れた。
今日のミステは図書館の受付の仕事は休みのようだ。

「シュテルおはよ～。今日は一人なの？　もしよかったら私たちと一緒に依頼受けない～？」
「最近ムサイ男連中とばかりでウンザリしてるんじゃない？　たまには目の保養も大事よ？」

渡りに船をはこの事で、スフィアの方から誘いが来た。
そしてサラもサラで、少々軽薄そうな声で冗談めかしながら自分の肢体を見せ付けてくる。

相変わらずの露出度の高さと相まってとても魅力的で、思わず生唾を飲んでしまう。

「はは、いやぁ俺も丁度一緒に依頼をうけようかな～なんて……イテッ」

言いかけて、突然足に走った痛みで中断してしまう。

「サラをやらしい目で見るなシュシュ。それに妙に着飾ってる、何を企んでいるの」

どうやら俺のわずかな反応と、だらしない声が気に障ったミステが俺の足を踏んづけた様だ。まぁ自分の友達がそんな目で見られれば怒るのは当然だし、気をつけないと。

「そういえば、またその服きてるんだね。それに鎧も随分綺麗なのつけてるし、新しく買ったの？」

「そういえばそうね。服は見たことがあるけど、その鎧は始めて見るわ。随分凝った意匠だし、材質も特別みたい。高かったでしょうソレ」

「服との一体感からして、専用の防具だと思う。なんで今になってそれを使おうと思ったのか、なんの狙いがあるのか白状するべき」

お、どうやらこの防具の感想を聞く限りじゃ見た目も変じゃないようだ。

それどころか一体感があるとまでミステに言わしめる事が出来たぞ。

「ああ、これは俺が作ったんだよ。言わば俺の最初の作品って訳だ。一体感も、この服に合うように作ったからね、そう言って貰えたなら大成功だ」

自分の作品をほめて貰ったのが嬉しくて、少し得意げになってしまう。まぁ誰だって自分の作品が評価されるのは嬉しい事だし仕方ないだろう。

「悔しいけど、前言撤回はしない。すごく一体化してる。というか元々鍛冶経験があったのかシュシュ」

「だよね～！　どう見たって素人の作品じゃないもん！　今度お父さんのお店にも何か作品卸してみてよ～！」

「鍛冶技術は勿論だけど、美的センスも中々あるじゃない。デザインを売り込んだりしても案外儲かるかもしれないわよ？」

三者三様の感想に、更に得意げになってしまう。デザイナーか、それでお金が貰えるならそれもいいかもしれないなぁ。

一先ず服装や鎧の話を終え、今日の依頼を吟味する。

「今日はシュシュもいるから多少難易度の高い討伐系をするべき。馬車馬の如く働いて貰う」

何やら不穏な事を言うミステをスルーし、スフィアと依頼を吟味して行く。

スフィアはどうやら少し遠出をしたいらしく、ワイスラーの台所の名前の由来にもなっている”ワイスラー山”関係の依頼を受けたいようだ。

「もうすぐ蒼月の日だからさ～、少しでも近くで見てスケッチしたいんだよね～」

「そういえば、アンタ最近芸術家ギルドによく顔だしてたわね。先月の絵は売れたの？」

なるほど。たしかに先月も大体この時期に蒼月が見れたし、そろそろベストポジションを求めて移動するのも頷ける。

街の中では様々な明かりがあって思うようにスケッチが出来ないかもしれないしな。

「売れたよ～！　さらに今月はリーズロート家から買い注文が入ったんだから！」

「へぇ！　随分大きな家から注文が来たわね。で、一体幾らになったのよー？」

二人は顔を寄せ合い、少々悪そうな顔でヒソヒソ話を始める。なんだか悪巧みをしているようで、妙に楽しそうだ。

「シュシュもやっぱり自分の作品が評価されたり、誰かに認められるのって大事だと思う？」

二人を見ていた俺に、唐突にミステが質問をしてくる。心なしかいつもより少し大人しいと言うか、何か含む所がある様な。

「ん～、まぁ評価されたら嬉しいと思うのは当然だろうさ。でもそれはあくまで自分の考えや作品と、その評価をした人間の感性や波長が合わさった結果だし、それが全てって訳じゃないと思うけどね。中には自分が死んだずーっと後に評価されるって人もいるし、そういうのって時代の流れで変わるんじゃないかな？」

誰にも評価されずに消えていく物なんて幾らでもある。かと言ってそれが本当に悪い物や、無駄な物とは限らない。

たとえ誰にも評価されずに消えたとしても、それを生み出したと

言う結果が大事だと思うのが俺の持論だ。
それがたとえ、悪い結果を生むことになったとしても、だ。

「ふ～ん。シュシュはそう思うんだ」
「む、折角真面目に答えたのにその反応はないだろー」
「ふふ、そうだね。有難うね、シュテル」
「え〝！？」

あれ、今ミステが俺の名前普通に呼ばなかったか？　それにすっごい笑顔だった。
改めて問いただそうと思ったのだが、既にミステはスフィアとサラの方へと向かっていた。一体なんだったのだろうか？

# 第五話「勅命任務」

ある程度受ける依頼を絞り込み、後は四人で決めようと集まっていた所にギルドの職員と思しき女性が近づいてきて来た。

「失礼致します。貴方はD＋ランクの剣士、シュテル様で間違いないでしょうか？」

他のギルド受付嬢とは明らかに身にまとう雰囲気や風格、そして制服も違う大人の女性。キャリアウーマンと言う単語が綺麗に当てはまる人だった。

「は、はい、間違いありません。何が御用でしょうか」

その雰囲気に圧倒され、思わず口調が固くなってしまう。

「少々お話がありますので、応接室までご足労願えませんでしょうか？」

突然の申し出に一瞬戸惑いはしたが、すぐに我に帰りちょっと席を外してもいいかとスフィア達に視線で問いかけた所……。

「い、行ってきなよシュテル」

少々言葉が硬くなっているスフィアと、驚きの表情を隠しきれないサラ、そしてミステまでが目を大きく見開いている。

何かあるのだろうか？

「分かりました、案内してくれますか？」

「勿論です。どうぞ此方へ」

ギルド内には二階へと続く階段もあるのだが、二階はクランに所属している人間のミーティングルームや、一定以上のランクの人間による作戦会議室などがあり、今の俺が足を踏み入れて良い様な場所ではなかった。

そして今回は、そんな二階から更に上、三階にある応接室に呼び出されたのだ。

「あの、連れ達が随分驚いていたみたいなんですが、どうしてでしょう？」

「それは私が階下に、二階以下に下りるのが滅多にないからではないでしょうか？」

淡々と事務的な調子で答える女性。しかしどうも腑に落ちない。

「まぁ、今は私の事など然程気にせずとも良いかと存じます」

にべもなく返され、それ以上の会話もなく静かに廊下を進んでいく。

「此方が応接室となっております。私はこの中に入るわけには参りませんので、後はお一人で御進み下さい」

目の前には見事な彫刻が施された茶色の木製の大きな扉。

とても大きな木目が幾つもある事から、相当大きな木から作られ

た事が窺い知れる。
　コンコンコンコン、と四回のノックの後、室内から聞こえてくる声。
「入りたまえ」
　失礼しますと一声かけ、扉を開け中へと入る。
　高級そうな革張りの見事なソファーと、間にあるこれまた高級そうなテーブル。
「まぁリラックスしてくれたまえ。まずは座るといい」
「はい、では失礼します」
　ソファーに座り、恐らく相当高い地位に居るであろう老人と対面する。
　あれ？
「ふふふ、君と顔を会わせるのは三度目かの。久しぶりだのうシュテル君」
「ええと、清掃のお爺さん？　いえ、違ったみたいですね、失礼しました」
　以前入浴時間で注意をしてくれたり、刀の一件で協力してくれたお爺さんだった。
　あの時のような作業服ではなく、まるで王に仕える宮宰の様な儀礼服を身にまとっている。

「いや、それも間違いではないのう。一応あそこの清掃員として登録されているんじゃよ」
「そ、そうなんですか。あの、貴方は何者なんでしょうか？」

一番気になっている事を聞いてみる。恐らくこんな事を聞いていい様な立場ではないのかもしれないが、それでも今後の会話をスムーズに進めるために、相手の立場を正確に知る必要があると思ったからだ。

「そうじゃな、まずは自己紹介からせねばなるまい。ワシの名前はガンドール。この冒険者ギルドの長を務めており、同時に休息の鞘の清掃員じゃよ」
「んなっ！　という事は俺が所属するこのギルドの最高責任者って事ですよね？　よ、宜しくお願い致します」

想像以上の大物である事に大声を上げてしまいそうになるのを押さえ込み、なんとか挨拶だけは済ませる。

「そう硬くならんでもよいぞ、清掃員でもあるんじゃからの」

悪戯が成功した少年の様な笑みを浮かべ、気さくそうに声をかけてくるガンドールさん。いや、ここは様をつけるべきだろうか？

「あ、あのガンドール様は何故清掃員を……？」
「こりゃこりゃ、様なんてつけんでもよいて。理由は簡単じゃよ、新人の中に隠れている逸材を見つける事と、現場の生の声を聞く為じゃよ。ワシの事を知っているのは一部の者達だけだからの、出来れば内密にしておくれ」

なるほど、たしかに鞘にいれば新人の素直な意見や、若い才能と

出会える可能性も高いし理に適ってはいる。

「そうでしたか。それではガンドールさん、で宜しいでしょうか？　自分を召喚した理由についてお尋ねしたいのですが」

呼び名こそさんづけではあるが、口調を目上の人の為の物へと変える。

「お爺さんと呼んでくれても良いのじゃぞ？　君を呼んだのはちょっとお願いがあっての事じゃ。まぁ簡単に言わせて貰えばギルドからの勅命任務だと思ってくれれば良い」

なんだって!?　そんな依頼Ａ以上の人間にしか来ないって話だったのに、これはどういう事だ。

一体どんな依頼をさせられるんだろう？　勅命任務を断ることなんて出来ないだろうし、ちょっと困った事になったぞ。

「そんな不安そうな顔をせんでも良い。今回はちょっと訳有りでの、依頼そのものは長距離の護衛任務じゃし、誰かに狙われてる要人の警護と言う訳でも無いんじゃ」

「そうなのですか？　ではその訳、と言うのをお聞きしても宜しいでしょうか？」

「うむ。この街から遥か北にある港町アクラスと言う所での、謎の流行り病が発生したんじゃ。その治療に教団ギルドから医療団が派遣される事になったんじゃが、余り仰々しい護衛をつけては何かあるのかと皆に勘ぐられてしまうからの。流行り病がこちらにも来るんじゃないか、等という混乱が起きる可能性も考えて少数の護衛のみをつける事になったんじゃ。もちろんその分護衛の質は高いんじゃが、今度は逆に高名過ぎる者を何人も同時につけるとそれが話題の種になる危険性も出てくる。そこで、教団外部から無名でそれな

りの実力がある者を護衛に組み込もうと言う話になったんじゃ」

状況は大体飲み込めた。たしかにまだ此処に来て間もない俺なら問題は無いだろうし、同ランク帯では恐らく俺より強い人間はこの街には居ないと思う。

ただ、多少騒ぎを起こしたりもしたので若干俺を知ってる人間もいるかもしれないけど。

「お話は分かりました。ですが、それでは医療団や護衛も感染の危険性があるのではないでしょうか？」

依頼そのものは楽かもしれないが、病にかかる危険性があるのは厄介だ。

一応不老不死と言われているが、不安な物は不安だ。

「その病は過去にも事例があっての、病そのものは神聖術で早期に治療すれば良くなるんじゃ。そして町から離れるとどう言う訳か再発もしない、だから危険性は低いとは言える。しかし町に残る人はそうもいかなくてのう。今回はその原因も突き止めるつもりのようじゃ」

話を聞くに、その地域の何かが原因となっている風土病の一種みたいだけど、そこまで危険性がないなら大丈夫かもしれない。医療団も一緒なのだし……。

「分かりました。此度の依頼、謹んでお引き受け致します。ひいては今回の依頼の詳しい概要や一緒に依頼を遂行する人員、護衛対象の詳細、並びに行軍日程などの打ち合わせをしたいのですが」

気持ちを切り替え、完全に組織の一員という色を強め対応する。

そこまで危険性は無いとはいえ、重要な任務に変わりは無いのだし。

「うむ、そう気負わなくても良い。詳しい内容は教団ギルドより使者が明日来るので、その人物と打ち合わせをして貰うつもりじゃ。今回の依頼、受けて貰い感謝する。一応今回の依頼については他言無用じゃ、なんとかごまかしてくれい。それと依頼の報酬じゃが、元は教団が無償で引き受けたものじゃから現金はそこまで期待出来んのじゃ。代わりといってはなんじゃが、ギルドポイントを割高にするのと、何かほしい物がれば可能な限り進呈しよう」

願っても無い申し出だ。お金はなんだかんだで節約しているし、毎日依頼を受けているし、残留部位の換金も頻繁に行っているから相当溜まっている。むしろポイントの方が嬉しいくらいだ。

「有難う御座います。それでは今日はこれにて失礼しても宜しいでしょうか？」

「うむ、今日は呼び出してすまんかったの。明日の夕刻にまたこちらから呼び出しが掛かると思うので、宜しく頼むぞ」

軽い敬礼な様な姿勢を取り、一礼の後に退室する。

こういう時はカノンの知識が役立つ。

外には案内をしてくれた女性の姿はなかったのだが、来た道を戻るくらいなら一人でも可能だし、そのままスフィア達の元へと向かう。

さあ、どうやって説明すればいいのやら……。

シュテルが去った応接室。
長たるガンドールの座るソファーの後ろに、いつの間にか現れた秘書の女性。
そして、交わされる密談。

「宜しかったのですか？　ガンドール様。あの様な出自不明の人間に勅命を与えてしまって」
「余り有名でなく、腕の立つ者と言うのならワシもあの若者を指名するじゃろう。構わぬよ」
「ですが、それならいっそ私が行けば良いではありませんか。あの

者の素性や出身を探らせましたが、何も出てこない所か不可解な点ばかり出てきます。もし何かあってからでは……」

「個人的にもあの若者に興味があるんじゃよ。それに最後の態度、あれは軍属した事のある者のソレじゃ。不義な真似はせんと思うんじゃよ、彼の人柄的にもの」

「軍属……帝国の人間と言う可能性もありますね。彼を送り届けた商人も、すぐに帝国へと向かったとの報告もありますし」

「何者だとしても、今は依頼を受け、真剣に取り組む一人の冒険者に過ぎぬ。そこまで警戒せずともよい」

「そこまで言うのでしたら……仰せのままに、我が主様」

警戒や疑念、そして信用と利用の狭間で揺れるそれぞれの思惑。

この先、彼を知る人物達はどの様に動くのだろうか……。

## 第五話「勅命任務」（後書き）

やっと物語が進みます。
とはいっても、足踏みや脱線も多いんですけど……。

閑話のリクエストやアイディアなどあれば、お気軽にお申し付けください。

## 第六話「教団からの使者」

結局昨日は遠出が出来ないと言う事で、近場での採取依頼を受ける事にした。
そのまま野営をして砕月が現れるのを待ったのだが、結局その日は現れる事が無かった。

一夜明け鞘へと戻り、今日は教団の使者と打ち合わせをするため一張羅であるクロースアーマーを洗濯に出した。夕刻までには仕上げてくれるそうなので、後はこれから必要になりそうな物を購入しに行く。

昨日の野営は道具一式を借りる事でなんとかなったのだが、やはり自分用の物が欲しい。
最低でもテントや火を起こす道具、それと出来れば料理に必要な機材などもだ。
という訳で、俺は冒険者向けの商品を扱う店や、鍛冶ギルドの生活用品を扱っている工房を周った。

何気に街の中の移動にも時間がかかるのだが、各通りへと向かう馬車を利用したり中には魔術で移動する人間までいる。
俺も風の魔術の訓練がてら、魔術で走って移動していた。

そうして各店を周り、大きめのテントと火打ち石、そして鍋を吊るしたり出来る金属性の三脚に大小の鍋を購入した。
出来れば大き目の折りたたみ式のテーブルなどが欲しかったのだが、どこを探しても売っていなかった。今度自分で改造して作ってみようか。

「あー、そういえば自分用の時計も欲しいなぁ。今何時だろう」

そう呟きながら空を仰ぐ。日も傾き始めた頃なので、このまま歩いてギルドに向かえば丁度良い時間になるだろう。

「その前に洗濯物引き取らなきゃだな。クロースアーマーで似たような奴も新しく買っておこうかなぁ」

なんだかんだで今日の買い物だけで2万メルス程使ってしまった。まだまだ蓄えはあるにしても、やはり少し気が咎めてしまう。

時計やクロースアーマーもきっとそこそこ値段がするだろうし、もっとお金をためないといけないなぁ。

鞘でクロースアーマーを受け取り着替え、ズボンも同じ様に薄い青のニッカボッカーズを履き、ロングブーツを履く。

レザーブーツで白や青といった色はさすがに無かったので、これはカラーチェンジャーで若干色を落とし、青灰色に仕上げている。

将来的には金属板で補強したレザーグリーブを装備したいが、今は鎧を作ったばかりで材料が足りない。

それに、先に作るなら腕防具の方を優先したい。

「よし、何処から見てもおかしな所はないし、相手に失礼にならないだろ！」

「んあー？　なんだ随分立派な装備して、何処かの貴族の警護にでも行くのか？」

昨日の二日酔いがまだ尾を引いているのか、午前の依頼の後に戻って休んでいたであろうダルベストさんが問いかけてくる。

「あ、起こしてしまいましたか？　ちょっと人と会う約束があるので礼装、と言うわけではありませんが少し身なりを整えたんですけ

ど、どうですか？」
「いいんじゃねぇか？　貴族の私兵だってそんな上等な格好してないぞ。それよりもコレか？」
いやらしい笑みを浮かべ、小指だけ立てた手でジェスチャーしてくるダルベストさん。まったく、どこの親父だこの人。
「違いますよ、仕事の打ち合わせです。それじゃあ俺は行って来ますね」
「なんだつまらん。んじゃ行って来い。戻ってアルヴァスが戻ってたら一緒に酒でも飲みに行こうや」
具合が悪そうなのに、まだ飲むのかこの人は……。
「お待ちしておりましたシュテル様。二階の第四会議室にて教団ギルドからの使者様がお待ちしております」
「もう来ていたんですか。待たせてしまったみたいですね、急ぎましょう」
昨日と同じ女性が何処からとも無く現れ、案内をしてくれる。
「失礼します。冒険者ギルド所属の剣士、シュテルと申します。遅れてしまって申し訳ありません」
扉をノックし、入ると同時に自己紹介と謝罪を済ませる。

中で待っていたのは、以前戦った神聖騎士団の女性、アルシャさんと良く似た格好している小柄な女性だった。
銀の軽鎧ではなく、白く染められたレザーアーマーを白い法衣のような服の上から装着している。
スフィアよりも少し色の濃い、栗色の髪をポニーテールにし、同じく栗色の大きな瞳で少々童顔だ。

「い、いえ！　こちらも今来たところであります！　教団ギルド神聖騎士団所属のイクシーであります！」

こちらの挨拶に、飛び上がるように椅子から立ち上がり右腕を胸に当てるイクシーさん。これが神聖騎士団の敬礼なのだろう。
「それでは、早速ですが今回の依頼の詳細について伺いたいのですが」
「了解であります！　それでは今回の護衛対象について説明させて頂きます！」

キビキビと、若干緊張している様な物言いのイクシーさん。別に上官や高位の人間じゃないのだから、もう少し気楽にして貰いたいなぁ。
「そんなに畏まらなくても良いですよ。俺なんてまだ冒険者になって一ヶ月程しか経っていない若輩者ですから」
「そ、そうなのでありますか？　とてもそうは見えないでありますが……。それに、教皇様が直々に貴方を指名したと聞き及んでいるであります。礼を尽くすのは当然であります！」
「そ、そうだったんだ。じゃあ口調は変えなくていいから、もう少しリラックスして肩の力を抜いて話そうか」

教皇様……一体いつ俺の事を知ったのだろう？　診断所の一件で耳に入ったんだろうか？

「では改めまして、今回の護衛対象についてご説明いたします！
今回我が教団から治癒術師を十二名、三つの馬車に分けて搭乗して貰います。それぞれ一台ずつ護衛をつけるでありますが、その人員は私とシュテル殿、そして当日は神聖騎士団の副団長が付くであります！」
「結構大所帯になってしまいますね。三人で不測の事態に備えられるのですか？」
「それについてはご安心を！　治癒術師は皆攻撃魔術を使う事が出来ます上、それぞれEランク程度の実力者であります！　万が一のときも足手まといにはならないであります！」

なるほど、だったら前衛一に対して魔術師の援護が四か。これなら多少の無茶だって出来そうだ。
「では次。行軍日程についてお聞きしたいのですが」
「了解であります！　ガルヴェウスを出発後、三日かけて途中にある村へと向かい、そこで逗留して疲れを癒し、その後にまた三日かけて港町アクラスへと到着する予定であります！　本来早馬で駆ければ四日で到着するでありますが、馬車な上に長旅に慣れていない教団員の事も考え、今回のような日程となりました！」
「分かりました。野営に必要な道具や食材、夜の警護についてはどうなっていますか？」

こんな具合で打ち合わせは進んでいった。イクシーさんの口調だが、どうやらこれが素の様だ。
『当日は副団長と一緒に仕事が出来る』『自分のような一般団員が抜擢されるなんて光栄』等と多少脱線するも、無事に打ち合わせは終了した。

「それじゃあ三日後の早朝、ガルラス街門の前に集合であります！」

「了解。しかしなんで三日後なのかイクシーさんはわかる？」
イクシーさんが緊張しないように、こちらも砕けた調子で会話をしていた為、割と打ち解けあう事が出来た。

「ああ、それは今日が蒼月の夜だからでありますよ。蒼月の夜以降は数日、大気中の魔素が濃くなるであります。だから魔術や神聖術の制御が少し乱れるであります。なので、念には念を入れて、であります」
「今日が蒼月の日ってわかるんだ？　何か予報みたいな物があるのかい？」
「蒼月の日は魔素が濃くなるであります。だから魔素の観測をしているギルド連盟本部から通達が来るであります。ただ、その日になるまでわからないでありますけどね」

なるほど、なら今晩はスフィアを誘ってまた外に出て見ようかな。

「では今度こそ、お疲れ様でしたシュテル殿！」
「うん、イクシーさんもお疲れ様。三日後から宜しく頼むよ」

さてと、そういえばダルベストさんに誘われていたけど、早めに抜けてスフィアに声かけにいかないとなぁ。

教団ギルド神聖騎士団宿舎。
そこに存在する執務室に報告に来る一人の騎士。

「ただいま戻りましたであります アルシャ副団長！」
「お帰りなさいイクシー。打ち合わせの相手はどんな人だったのかしら？」
「はい！　我が騎士団の団長と交換したくなるような人だったであります！」
「へ？　そ、そう。随分有能そうだって事なのかしら……？」

部下の報告を聞き、各地を放浪する団長や仕事をサボる教皇を思い浮かべ、思わずこめかみを抑えるアルシャ。

上司に恵まれない自分を呪い、一緒に任務を受ける相手の事を考えるのであった。

## 第六話「教団からの使者」（後書き）

感想やご指摘、ご意見があればお気軽にお願いします。

# 第七話「蒼月の夜」

打ち合わせを終えた俺は、鞘へと戻りダルベストさんに今日の夜の誘いは乗れないと断りを入れた。
最初は途中で抜けようかとも思ったのだが、酔った人間の厄介さはよく分かっているつもりだ。
ならば最初からいかなければいい。

「なんでぇ、割り勘にして得しようと思ったのによ」
「なんですかその理由。言って置きますけど、俺も相当酒に強いですよ？」

事実、この世界のお酒程度じゃそうそう酔いつぶれたりはしないだろう。
一応蒸留酒も存在するのだが、この辺りでは値段が高いらしく、そうガブガブと飲むことが出来ない。
それ以前に、この身体そのものが相当お酒に強いって事もあるのだけど。

ダルベストさんとの会話の後、すぐにガルアーク通りにあるレオフィス武具店へと向かう。
勿論スフィアを誘うためなのだが、もし午後の依頼を受けていたとしたらまだ戻ってきていないかもしれない。

「どうも、ご無沙汰してますレオフィスさん。スフィアは居ますか？」
「お、久しぶりだなシュテル。なんだか凄い鎧だな、まさかお前が

作ったのか？」
「そうですよ。この街に来て最初の作品です」
「こいつは想像以上だぜ。ああ、スフィアだったな。今日は蒼月の日だからって、今は仮眠を取ってる所だが、起こしてくるか？」

なるほど、スフィアも今日が蒼月の日だと知っていたのか。
砕月は何時から何時まで出るか決まっていないのだし、時間がずれ込んでも大丈夫なように仮眠を取って置いてるのだろう。

「ああ、一緒に蒼月を見に行こうと思って来ただけですから、起こさなくても大丈夫です。起きたら一緒に行きますから」
「それはつまりデートの誘いって訳かぁ？　俺の娘と付き合いたいならまず俺を……」

相変わらずだなぁレオフィスさん。でも、たしかに取りようによってはそう聞こえるかもしれない。
「昨日も蒼月が近いと思って外で野営したんですけど、結局見れませんでしたから。だからそのリベンジもかねてるんですよ」
「そういえばそうだったな。野営中娘に変なことしなかっただろうな？」
「断じてしていません！」

そのままレオフィスさんと武具の構造や種類について語り合い時間を潰した。
途中何人もお客さんが来ていた事から、お店の盛況具合が良く分かる。

「お父さんおはよ～そろそろ晩御飯だ――あれシュテル？　どうし

たの？」
「今日が蒼月の日だって聞いたからさ、スフィアを誘いに来たんだよ」
「あ、そうだったんだ。私もそれに備えて寝てた所だよ～。急いでご飯食べてくるからまってて！」
そうしている内に、店の奥からスフィアが顔を出した。
俺が居ることに驚いた様だけど、理由を聞いて納得した様だ。
急いでご飯を食べると告げすぐに奥へと引っ込んでしまったのだが――
「おい、折角だしシュテルも一緒にどうだ？　俺の嫁さんのメシはうまいぞ」
「いいんですか？　奥さんに一言聞いてみた方が……」
正直お腹が減っていたので有難い申し出なのだが、勝手に決めてしまってもいいのだろうか？
この世界に来てから何件ものお店で食事を摂ったのだが、家庭の味というのはまだ未体験だ。だから良い機会だとは思うんだけど。
「気にする事はねえ、うちの常連もたまに上がって酒盛りするくらいだぜ？」
「そうなんですか？　そういう事でしたらお邪魔しちゃいますけど」
レオフィスさんは店の鍵を閉め「只今準備中」の札を外にむけてぶら下げた。
準備中じゃなくて休憩中だとは思うんだけど、細かい事は気にしなさそうだし別にいいのだろう。

家族の団欒と言う物を身近に感じたのは何時振りだろうか？
記憶の中を探っても、カノンが一人で自分の食事を用意して食べている時の事や、どこかで外食している姿しか思い出せない。
と言うか、カノンの記憶の内、以前いた世界の事しか殆ど思い出せない様だ。

何はともあれ、スフィアの家族と一緒に楽しく食事をする事が出来た。
スフィアのお母さんに「また何時でもいらっしゃい」と言われ、社交辞令だとしてもつい「是非そうさせて貰います！」なんて意気込んで言ってしまった。

「それじゃあちょっと街の外に出てくるね～。砕月が消え次第戻ってくるけど、遅くなると思うから鍵閉めてていいからね～」
「ああ、気をつけるんだぞ。俺も屋根の上から観測だけはしてるが、もし欠片が流れる所を見たらしっかり方角を覚えておいてくれ」
「ムーンダストでしたっけ。そう簡単に落ちてきたりする物なんですか？」

レオフィスさんはムーンダストに並々ならぬ関心を持っているらしく、毎月欠片が落ちてこないか観測し、情報を集めているそうだ。
スフィアの砕月好きもレオフィスさんの影響を受けたのかもしれない。

「年に二回くらいだな。ここ十数年で落ちてくる頻度が上がったんだよ。まぁ落ちても回収出来たなんて話、滅多に聞かないけどな」

俺達が向かうのは、昨日の採取依頼で野営をした小高い丘だ。
ガルアーク街道の途中にある場所なのだが、街から歩いて三十分程とそう遠くない場所だ。
夜の街道を二人で歩き、何気ない会話を楽しむ。

「昨日の採取依頼の報酬、思ったよりも沢山貰えてよかったよね～。今月はもう絵画の買い注文も入ったし、最近順調にお金がたまっていくよ～」
「前から思ってたんだけど、スフィアはどうしてそんなにお金を稼いでいるんだい？　特に不自由して居る様にも見えないしさ」
「ほら、Ｃ－ランクから個人で家を借りられるじゃない～？　私は折角だから買い取って自分の家にしたいんだよね～」

どうやら早く自立したいという思いが強いらしく、その為に熱心に依頼を受け、お金を溜め込んでいるらしい。
実家があっても、やはり自分の家を持ちたいと思う物なんだろうなぁ。

「それに、家を改装して住居件アトリエにしたいんだよね、絵を描く時のさ。改装するにはやっぱり自分の家にしないといけないって訳なんだ～」
「なるほど納得。俺も近いうちにＣ－になれると思うけど、家については何も考えていなかったよ」

少しだけ。未来と言うには近すぎるほんの些細な事だけど、先の事を二人で語りながら星空の下進んでいく。
少し冷えた草原を渡る風が、スフィアと自分の間を流れて行った。

何事も無く丘の上までやってきたが、俺は特に準備する事も無くスフィアの様子を見ていた。
以前と同じように折りたたみ式の椅子を組み立て、キャンパスを立てかける道具を地面に固定している。
ここではあくまでデッサンだけをして、油絵として完成させるのは街に戻ってからだそうだ。
絵の具の色の調合は、この時に見た色を忘れないように今調合するらしいのだが。

「そういえば、シュテルはまた剣の特訓するの？　前に見たときとか凄い綺麗だったよ、青い光が反射してさ」
「そうだね、それもいいかもしれない。それに蒼光武具ってこの夜が一番輝くんだろ？」

本来、この日以外は余り蒼く輝かないのが蒼光武具の特性だ。
これまで俺の剣は魔素等を放出出来なかった。
その為いつまでも蒼く輝いていたのだが、調整された今ならばこの日以降は多少色が褪める筈だ。

「よーし！　後は砕月が出るのを待つだけだ～！」
「そうだね。今は何時か分かる？」
「えーと、後五分で十一時だよ～今月は長く出てくれると良いんだけど――」

そうスフィアが言いかけた時、突然目に映る景色が蒼く染まりだした。
ぼんやりとした蒼が、ジワジワと色の濃さを増していき、そして星空の下の全てを優しい色で包み込んでいく。

「凄い……」

思わず感嘆の言葉を漏らしてしまう。砕月が出る瞬間と言うのを見るのは初めてだ。

日が沈む行く時に、水平線からオレンジが伸びてくるのとは違い、眼前に広がる全ての物が等しく色を変えてゆく。

その幻想的な光景に、文字通り心を奪われてしまった。

「やった～！　今月は随分早くでた～！　たっぷり書くぞ～」

「よかったねスフィア。時間もあるみたいだし、俺は少し眺めてから訓練を始めるよ」

丘の上にある二本の木。

その片方によじ登り、太目の枝に腰掛ける。

そして眺めるのは当然この巨大な月。

あの大きな月は、何故砕けてしまったのだろう。

学者ギルドの資料や文献などを見ても、その事については一切語られていなかった。

そして、毎月光を放つあの月は、一体どれほどの魔素をその身に宿しているのだろうか……。

こんな詩的で幻想的な風景を見ながら、少し無粋かもしれないけどそんな事を考えてしまう。

思えば、この剣が同じムーンダストて出来ているのも凄い偶然だ。

もしかしたらカノンが生まれた世界でも、月は青く輝く物だったのかもしれないな。

嗚呼――本当にこの世界はなんて美しいのだろう……。

眼下ではスフィアがスケッチブックに向かい、黙々と砕月のスケッチをしている。
顔を上げて砕月を暫く眺めたと思えば、また顔を下げて書き進める。
そんなスフィアの様子がなんだか可愛くて、つい笑みを浮かべてしまう。

「スフィアは、自分の将来や目的をしっかり持っているんだろうな」
つい、そんな独り言をぼやいてしまう。

今は何も考えず、ただこの世界の事を知る為に生きて行こうと心に決めてはいるけど、やっぱり少し焦ってしまう。

……焦る？　焦るって何を？　何を言っているんだろう俺は。

「よし、そろそろ俺も始めるかな！」
「あ、シュテルも特訓始めるんだ。ちょっと見ててもいいかな～？」

少し思考の奥底に沈みそうな気がして、気分を変えるために口にしたのだが、スフィアに聞こえてしまったようだ。
邪魔してしまったかな？

少し丘を下り、鞘から剣を引き抜く。
その刀身はいつもより強く蒼い光を放ち、自分の存在を誇示しているかの様だ。
俺にはその光が『思うように使ってみせろ』と語りかけているかのように感じた。

今日は神聖術や魔術の事は考えず、ただ剣のみを振るう事にする。
何となく、何となくだけど今日は仮想敵、いつも想像上で戦うカノンと良い勝負が出来るような気がする。

「さぁ、試合開始だ」

## 第八話「月下の幻影」（前書き）

今回は少し短いです。

## 第八話「月下の幻影」

振るわれた剣が防がれる。そしてそのまま此方へと切り込んでくる剣士。
速く、鋭く、正確に放たれる斬撃は容赦なくこちらの急所へと向かって来る。
体勢を崩しなんとか回避した所に、剣を持たない手が襲い掛かる。
こちらの腕を掴もうとするそれを蹴り上げて、体勢を立て直す為に距離を取る。

一瞬の攻防だった。
同時に動いたと思っていたのだが、気がつけばこちらは後手に回り一歩引くという選択をさせられてしまう。

尤も、傍から見れば俺が一人で動いているようにしか見えないのだろうけど。

今俺は、自分自身と戦っていた。
頭の中に現れたカノンは、俺の知っている姿ではなかった。

どこか近未来的な戦闘用の白いスーツに身を包み、俺と同じ剣を構えている。
その顔はどこか楽しそうで、俺の知るカノンとは似ても似つかない。
そして思い至った結論は……。

「これが、俺の元になったカノンなんだな……もう既にこんなに強

かったのか」

まだ人であった頃のカノン。

若さ故の慢心、己の力に飲まれかけた未熟な剣士。

そんな相手にも俺は苦戦を強いられている。

ここ最近調子がよかったから勘違いしていた。俺はまだまだ弱い。

だが、ここでこんな過去の幻影に後れを取るわけには行かない！

「ちょっとこっちも本気を出すからな、ついてこられるかカノン！」

剣を振るい続けてどれ程時間が経っただろう？

まだ数分も経っていないような気もするが、もう何時間も戦っているような気もする。

また距離をとり、息を整える。

こちらはもう少し息が上がってきてると言うのに、こいつは顔色一つかえていない。

まぁ実在している訳じゃないんだから、当然と言えば当然だ。

そして、俺もどこか命の危険が無いからと気が抜けていたみたい

だ。
改めて気を引き締め、また対面する。

三度衝突。
今度は俺の攻撃を受けるではなく、避けると言う選択をしたカノン。
距離を取る為のステップにタイミングを合わせ、俺も前へと飛び込み剣を叩き込む。

地面へと着く前に攻撃を受けたカノンは、上手く着地をする事が出来ず体勢を崩してしまう。
急いでサイドロールでその場から離れようとするのだが――

「勝負有りだ」

剣を足で押さえつけ、首筋に剣をあてがう。
すると、その仮想の敵は今まで表情一つ変えなかったのだが、最後に少し此方を見つめ、少しバツが悪そうな顔をして消えて行った。

俺はそのまま立ち尽くし、乱れた呼吸が落ち着くのをただ待っていた。
そして見上げた空には、まだ巨大な砕月が堂々と鎮座していた。

まるで御前試合を眺める王の様に、雄大で、雄雄しく、それでいて優しく。

剣を鞘に収めまた丘を登っていく。
スフィアは先ほどまでの俺を見ていたのか、少し驚いた顔をしながら労いの言葉をかけてくれた。

「ねぇ、今シュテル戦ってたよね？　一体誰と？」
「あ、分かった？　俺の大切な……うん、友達だよ」

一瞬、なんと答えればいいか分からなかったのだが、最初に出てきた言葉が”友達”だった。
もしくは兄弟や師匠と言えるかもしれないのだが、同等の存在でありたい、対等でありたいと言う思いから、この言葉が出たのだろう。
友でいられる様に、これから先も強くなりたいものだ。
そう、『今よりももっと強くなりたい』そう思った。

「友達？　アルヴァスとか前に言っていた二人組みの冒険者？」
「いや、ここに来るずーっと前からの友達だよ。俺の知る限りじゃ最強の剣士かな」
「へぇ、そんな凄い友達が居たんだね～どんな人なの？」

どんな人、か……。

「そうだなぁ――――」

その後も話は続き、気がつくと砕月が光を失い始めていた。

「スフィアはもうスケッチいいの？」

「うん、今月はいつもより良い絵が書けると思うんだ～。先月の絵は完成してすぐに引き取られちゃったから、今度こそシュテルに見せる為にも早く仕上げちゃうからね～」

そうして俺達はガルヴェウスへの帰路へと着いた。

スフィアを家へと送り届け、俺も鞘を目指して道を進む。

静まり返った街は、砕月の余韻の為か、いつも以上に静まり返っている様に感じる。

随分と強い眠気に苛まれながら、なんとか鞘への路地に差し掛かる。

俺は鞘へと着くや否や、装備を外す事も出来ないまま沈むようにベッドへと倒れこんだ。

そして俺は夢を見る。

大切な時間の、過ぎ去りし過去の思い出を。

大きな出来事があった訳じゃない、ただ普通に過ぎていく日常。

だけどどこか幸せで、暖かい日々。

そんな夢を見た。

## 第八話「月下の幻影」（後書き）

感想や現段階での評価等頂けると、作者の励みになります。
もし宜しければお願いいたします。

# 第九話「再会と中間管理職」（前書き）

護衛依頼開始です。

## 第九話「再会と中間管理職」

蒼月の夜、深夜眠りについた俺が次に目を覚ましたのは、三十日の夕方だった。

俺はあの夜眠った後、まる一日以上眠っていたそうだ。

起きた時にはベッドの周囲に医者やアルヴァス、それにスフィアまで来ていたのだが、ただ眠っていただけなので何処も身体に異常は無くその時はそれでお開きとなった。

とても長い夢を見ていたような気がするのだが、余り思い出す事が出来ない。

本来夢と言うのは記憶を整理する時に引き起こされる現象で、覚え続ける事が難しい物なのだし、特に気に留めはしなかった訳だけど。

長時間ベッドの上で眠っていた所為か身体が硬くなっていた為、その日は夕方から夜まで軽く身体を動かし、明日の依頼に向けて準備をする事にした。

随分と身体が軽くなっていたが、気がつかない間に疲労が蓄積されていたのかもしれない。

明日から暫く街を空ける事は、その場に居たスフィアとアルヴァスに告げたので他の人間にも伝わるだろう。

長時間の睡眠も、それに向けて眠っていたと言う事にしておいた。

そして、当日の朝。

念には念を入れ、まだ日も昇らない内に目を覚ました俺は、薄暗

い中時計に顔を近づけ針を確認した。
時間がまだ四時だと言う事を知り、そのまま外へと出て水浴びをする。
もし自分の家を手に入れたとしたら、絶対自前の風呂を設置すると心に誓った。
共同入浴場も勿論あるのだが、二十四時間好きなときに入浴出来るというのは大きいだろう。

身支度を整えいつものクロースアーマーと鎧を装着し、リュックに着替えと念のため調理道具一式を詰め込み、まだ二人が眠る部屋を後にした。

朝靄がかかった街の中を北へと向かい進んでいく。
冷えた石畳の上は少し気温が低く、まもなく初夏だと言うのを信じさせてくれない。
それでもそろそろ気温が上がってくる時期なのだし、依頼が終わって戻る頃には夏服の事も考えなければいけないだろう。

中央にある連盟本部を外壁沿いを進み、北へと伸びるガルラス通りに差し掛かった所で馬車の一団が見えてきた。
馬車に周りには同じような白い衣装を身に纏った人間が犇めき合い、その相手をしている小柄な女性。
先に集まっていた事に内心驚きながらも、歩く速度を速めて一団へと近づく。

「おはようイクシーさん。今日から宜しく頼むよ」
「あ！　おはようございますシュテル殿！　さん付けなんて自分にはもったいないであります、イクシーとお呼び下さい！」
「そうかい？　じゃあイクシー、今日の護衛の責任者に挨拶をしておきたいんだけど、何処にいるかな？」

「それでしたら、一番前の馬車で御者の皆さんと打ち合わせ中であります！」

そうか、護衛だけじゃなくて御者もいるんだよな。なら護衛と御者含めて総勢十八人になるのか。

ちょっとしたキャラバン隊と代わらない人数だ。

「じゃあちょっと行って来るよ。治療団の皆さんも、今日はから宜しくお願いしますね」

「了解であります！」

馬車を見ると、普段街中で見かけるものよりも若干豪華な装飾を施してあり、引いているロードランナーも毛並みが良いように見える。

教団はお金が無いと言う話だったけど、周りに見える部分はそれなりに飾らないと示しがつかないんだろうなぁ。

「失礼します。本日より共に護衛任務に就く事となりました冒険者ギルド所属剣士、シュテルと申します。神聖騎士団副団長殿へ挨拶に参りました」

一番前の、他より一回り大きな馬車の客車へと声を掛ける。恐らくこの中で打ち合わせをしているのだろう。

「わざわざ来てくれて有り難う。今出るわね」

客車から聞こえてくる凛とした声。声から察するに副団長は女性の様だ。

しかし、この声どこかで聞いた様な……？

「久しぶりね、シュテルだったかしら？　前の時とは随分印象が違っていて驚いたわ」

客車から現れたのは、あの日と同じ装備、同じ姿の女性。
真紅の瞳に真っ赤なウェーブがかったロングヘアー。

”瞬斧”の二つ名を持つ女騎士、アルシャさんだった。

「あの時は悪いことをしたわ。まさか一般人だったなんて思っていなかったの。身体強化までして大人気なかったと思っているわ。身体の方に後遺症は出てないと思うんだけど……って、聞いてるのかしら？」

「え？　あ、はい、お久しぶりです」

どんな顔して話せばいいんだよーーーーー！！！！
気まずいってレベルじゃないぞコレ！
ていうか副団長だったのかアルシャさん。なんで外で依頼なんて受けてたんだろう？

「今日一緒に護衛をする相手、薄々貴方じゃないかって予想していたのよ。部下から貴方の話を聞いた時は”違ったかも？”って思ったけど、本当だったのね」
「えーと、とにかく宜しくお願いします。あの、俺はとりあえず治療団の皆さんに挨拶を……」

最初の出会いがその後の関係を決めるとよく言うけど、この場合はどうなんだろう。
アルシャさんは特に気にするような素振りを見せていないけど、問題は俺の方だ。

目上の人物だと言う事と、あの時の出来事の所為かどうも硬くなってしまう。

「それは出発の時でも構わないわ。まだ出発まで時間があるし、少し時間を潰しましょう」

「え、御者の方々との打ち合わせはいいんですか？」

「問題ないわ。私は聞くだけだから、全て終わった後に聞けば十分よ」

随分と、良く喋る人みたいだ。

その後も彼女の話は続き、俺の近況や自分の事、職場での愚痴などを聞かされた。

あの日街の外にいたのもストレス発散をかねていたらしい。

そんな時に俺が現れたので、是が非でも相手をしてもらいたかったそうだ。

「それで私の上司、団長の話になるんだけど――」

「はあ……」

上司の愚痴。

「それで、自分で直すはめになったのよ？」

「そうなんですか……」

宿舎が古い事への嘆き。

「気がつくと教皇様はいつも――」

「それはそれは……」

教団のトップがだらしないと言う愚痴。

「あら、どうやら積荷のチェックも全て完了したみたいね。そろそろどの馬車を護衛するか決めましょう」
「わ、分かりました。あの、色々苦労しているみたいですね？」
「ええ、長々とごめんなさいね。仕事前だと言うのに、こんな話」

ううむ、中間管理職と言うのはこういう物なんだろうか？　それにしては部下に対しての愚痴はなかったけど。

「アルシャ副団長、シュテル殿！　護衛陣形について打ち合わせに来たであります！」
「それじゃあ先にシュテル、貴方の戦闘スタイルについて聞きたいのだけど」

そうか、どこに配置するのか決めるのにも、戦闘スタイルは重要だろう。

「私は殿を勤めるつもりだけど、シュテルのスタイル次第ね。前に戦ったときみたいなスピード重視の剣士なら、露払いも意味でも先頭に立ってもらいたいのだけど、どうかしら？」
「ふぇ？　シュテル殿は副団長と戦ったことがあるのでありますか？」
「あ、うん。惨敗だったけどね」

今回は状況が状況だし、話されても仕方ないだろうし我慢我慢。
黒歴史とまではいかなくとも、恥ずかしい過去を人前で話されるのはちょっとなぁ。

「そんな事なかったわよ。こっちは神聖術で強化していたのに、貴方は無強化で私に一撃入れてたじゃない」
「へ？　避けられて殴られて終わったはずじゃ？」
「避けきれていなかったのよ、脚甲が切れていたわ。それに私の攻撃を受けていたじゃない」

ありゃ？　じゃあ結構良い線いってたのかな？　でも腹に一撃食らって気を失ったと思ったんだけど。

「結果として防ぎきれなかったみたいだけど、十分よ。術も無しでギルドにも入っていない人間とは思えない強さだったわ」
「そ、そんなにでありますか！　だったら当然一番前の露払いごとき、シュテル殿ではなく私が勤めるであります！　シュテル殿は真ん中でドーンと構えてるであります！」

大きな目をくりくりとさせ、若干尊敬も入った眼差しでそんな提案をするイクシー。
事実らしいけど、自分にはその実感が無いし微妙な気分だ。

「そうね、オールラウンダーとして二台目の護衛がいいわね。シュテルは魔術神聖術は扱えるのよね？」
「ええ、一応遠距離近距離両方いけます。ただ、ここ数日魔素濃度が安定していないと聞いたので、大丈夫かどうか」

一応そろそろ安定してくる頃合らしいが、実戦で何かあれば大変だ。

「それは大丈夫よ。私もさっき試したけど問題なかったわ」
「でしたら、そろそろ出発するでありますか？　治療団の皆さんの組み分けも終了しましたし、後は乗り込むだけであります」

「分かりました。じゃあ俺は真ん中の馬車の御者席の隣に座ればいいんですね？」

御者席は隣に余裕があり、もう一人乗り込めるようになっている。最近の護衛依頼は荷物と一緒に荷台に押し込まれたり、後付の小さな荷台に乗せられたりと散々だった。

なので今回大きな馬車なのはありがたい。

自分の受け持つ馬車の御者さんと治療団の四人に挨拶を済ませ、治療団一行は出発し街を後にした。

## 第十話「情け容赦無い護衛組」（前書き）

今回も少し残酷な表現があります。

# 第十話「情け容赦無い護衛組」

ガルラス街道の主な敵はEランクからDランクの魔物、そして周囲に森が多く、時折そこに潜み旅人を狙う盗賊が現れる。
とは言え、大規模な団体に突っ込んでくる魔物などそうそう居るわけが無く、例外としてたまに現れるクリムゾンホーンが単独で突っ込んでくるだけだった。

今もそのクリムゾンホーンが現れた所だったのだが、そんな例外も先頭に立つイクシーが難なく討ち取っていた。
もしかしたら、以前戦った時もあんな作戦を立てなくても各個撃破する事が出来たかもしれない。
もしくは、イクシーが見た目とは裏腹に凄く強いとか。

そう思い、一応パーティーを組むために交換したギルドカードの情報を確認して見る。

氏名　『イクシー』
所属　『教団ギルド』
所属クラン　『神聖騎士団』

あ、こういう組織ってクラン扱いだったのか。俺もどこかに所属してみようかなー。

使用武器　『フォースヒルト』
戦闘ランク　『B＋』

フォースヒルト？　聞いたことない武器だ。

さっき戦ってるのを遠目に見たときは、細身の片手剣を使っていたように思ったけど……。

「あれ、今なんか凄い物見た気がする」

もう一度カード情報を良く見て見る。

戦闘ランク　『B＋』

戦闘ランクB＋！？　俺より六つもランクが上じゃないか！

どうりで簡単に倒してるはずだ……殆ど一瞬だ。

そういえば神聖騎士団そのものがエリートだって話だし、当然イクシーもその例に漏れず、って事なのか。

ちょっぴり小柄だし、話し方を見てもそんな様には見えなかったけど、見掛けによらない物だなぁ。

なんだか先頭に立って貰ってるのが悪い気がする。

「シュテル殿ー！　一頭隠れていたみたいであります！　其方へと迎いました！」

うわ！　そんな事考えてたら一頭こっちに来た、ここで良い所見せておかないと！

御者席から飛び降り、術で身体を強化してクリムゾンホーンを迎え撃つ。

以前戦った奴よりも若干動きが鈍いみたいだし、これならなんとかなりそうだ。

こちらからも駆け出し、接触する寸前で横へと身体をスライドさせ剣を振りぬく。

「ん、妙に調子が良いぞ」

急停止から横方向へ直角に近い軌道で移動をしたのだが、身体に負担が掛かった様子もなく剣も空を切るかのように抵抗なく振りぬかれた。

そして横を見ると――

「うわ、ちょっとグロいな……」

口から肛門にかけて切断され、机の様な姿になっていた。

少し抵抗があったが、角を回収した。しかし皮を剥ぎ取るのには時間がかかりそうだったので泣く泣く断念する。

剣を見ると、やはり以前より少し色が薄くなっていたが、まだ魔素を溜め込んでいるのか蒼いままだ。

付着した血などをふき取り、馬車へと戻る。

すると同じように馬車へと戻ってきたイクシーさんが、進路を変え此方へと向かってきた。

「一撃だったであります！　一撃だったであります！　凄かったであります、目にも留まらぬ早業だったであります！」

「そ、そうかな？　でもイクシーも凄かったじゃないか、ほとんど一瞬で決着がついていたし」

凄く興奮した様子のイクシー。俺から言わせて貰えば、あんな細い剣で一瞬で終わらせるイクシーの方が凄いと思ったけど……。

「私の場合はちょっぴりズルをしているのであります。この剣、よく見るであります」

「あれ？　刀身が無い……これは一体？」
「ふふふ、見てるであります。とりゃ！」

細身の剣。レイピアだと思われたその剣には刀身が無く、ヒルトだけが存在するというよく分からない物だった。
さっきは確かに刀身があったと思ったけど。

イクシーはそれを持ち、少々気の抜ける掛け声と共に魔術を発動した。

「これがこの武器の正体であります。これを突き刺して、中でさらに形をかえるであります」
「これって氷？　魔術で刃を作って、中で変形させたって事？」
「そうであります。血も一緒に凍らせて、動きを止めてしまうであります」

可愛く言ってるけど、それって文字通り必殺の一撃だと思うんだけど……。
少々得意げで、ニコニコしながら透き通った刀身を振り回すイクシーさんに、若干薄ら寒い物を感じてしまった。

「でも、魔術抵抗のある魔物や表皮に刃が通る部分が無い相手にはめっぽう弱いのが玉に傷であります」
「そ、そうなんだ。でもこの辺りの相手なら文字通り無敵じゃないか」

ほめてもらったのがうれしかったのが、ポニーテールを揺らしながら機嫌良く戻って行った。
やっぱり神聖騎士団の人たちは只者じゃないなぁ。

その後はクリムゾンホーンが出没するエリアを抜けたのか、何事も無く平和な道中が続いた。
御者さんと世間話をしたり、時折客車の治療団の人とも話しながら和気藹々といった感じだ。
それでも気は抜かず周囲を警戒してはいるけど。

「私たちは治療団に選ばれたと言うよりは、野営要員として選ばれたみたいな物なんですよ」
「私は土の魔術に適正がありますし、彼女は火、そして彼は水に適正があるんです」
「ええ、ですから喉が渇きましたら遠慮なく仰って下さいね」

女性三人男性一人の四人組は、神聖術よりも魔術の活用性で選ばれたそうだ。
地形を変化させたり、飲み水を確保したり、火を起こしたりという事らしい。
聞けば十二人の内、半数は何かしら別な特技を持っている為選ばれたとか。
もちろん一般団員よりも神聖術や治癒術に優れているのは当然なのだが。

「そうだ、イクシーさんってどういう立場の人なんですか？」
とてもじゃないが、平団員であそこまで強いとは思えない。そこでこの人達に聞いてみる事にした。

「イクシー様は分隊長を勤めていらっしゃるのですよ。最年少で神聖騎士となられた方なのですが、人当たりもよく皆に親しまれているのですよ」

女性が言うには、一昨年に神聖騎士団に選ばれた後、たった一年で分隊長まで上り詰めたらしい。
その後も精力的に活動し『次に二つ名を得るのは彼女だろう』と噂される期待株だそうだ。

「ううむ、本当に人は見た目によらないなぁ」
「やはりそう思いますよね？」

治療団の人たちからの受けも良いし、やはり今回の任務に選ばれる事はあるようだ。

その後、昼食を取る為一旦馬車を草原に泊め、テキパキと準備をしだす教団員の皆さん。
旅に慣れていないと言う事だが、とてもそうは見えない。

「手際が良くて驚いてるようね？」
「あ、アルシャさん。旅なれていないって聞いてたんですけど」
「私たちは炊き出しや孤児院経営もしているの。だから食事の用意はお手の物よ」
「なるほど、どうりで」

見る見るうちに大きなテーブルが組み立てられ、巨大な白いテーブルクロスを掛けられ手際よく食器が並べられる。
よく見ると先ほど話していた治療団の女性が、土魔術でテーブルやイスの下の地面を慣らしているし、火の魔術を使う女性は遠くで竈に火を起こしている。

随分と野営道具が充実しているようだけど、一体何処にそんなにしまっておけたのだろう？

「あんな荷物どこにしまってたんですか？　とても馬車に納まりきれるとは思えないんですけど」

「良く見て、あのテーブルは一番大きな馬車をバラして作った物よ？　他の荷物は全部”テレスストーン”で収納していたの」

たしかに、先ほどまであった大きな馬車が今は座席と車輪を残すだけとなっている。

しかしそれよりも。

「テレストーンってなんですか？　聞いたことありませんけど」

「錬金術で作った魔具の一種よ。袋や箱といった収納用の空間に入れると、中の広さを少し広げてくれるの。結構ポピュラーな物だけど、知らなかったのかしら？」

むう、これでも本や資料はかなり見たんだけど、これは初耳だ。

もしかして本にのせるまでもないくらい身近な物だったんだろうか？　思えばブライトランプの事も本に載っていなかったし。

「すみません、田舎の出の物で。でもそれ便利ですね、俺も一つほしいなぁ」

「個人で持つつもり？　贅沢な事言うわね……教団全体で三つしかないのよコレ」

「そ、そうなんですか、うーん」

またやってしまった。でも、本当にこれ一個欲しいなぁ……。

「た、大変であります！　一大事であります！」

「何かあったの!?　報告をイクシー隊長」

突然慌しく駆け寄ってきたイクシーと、一瞬で上司としての顔になるアルシャさん。

何があったのだろう。

「調理要員がいないであります!!!」

「なんですって!?　野営に向いている人員を確保した筈よ!」

「いえ、それがどやら治療団に選ばれる為に虚偽の報告をした者がいたであります……」

ん～随分と平和な一大事だなぁ。

ここは俺が一肌脱ぐべきだな、うん。

## 第十話「情け容赦無い護衛組」（後書き）

神聖騎士団に所属する事は、それだけで実力者である証明なのでした。

## 第十一話「料理人見習いと料理バカ」（前書き）

この場をお借りして、感想を下さった方々、評価して下さった方々、そしていつも読んでくださる皆様方にお礼申し上げたいと思います。

有り難う御座いました。

# 第十一話「料理人見習いと料理バカ」

手に握られるのは名工の作りしクロガネの刃。
”ハイスティルシリーズ”と呼ばれる、一般的な品よりもクロムタイト比率が高いシリーズ物。
曇りなき刃を正確に、無慈悲に獲物へと振り下ろす。

「そっちはブラッドキューブを半分に切って下さい！　あ、違います、輪切りにする方向で半分です！」

ここは俺の第二の戦場と言っても過言じゃない。
まさかこんな大勢相手に振るう事になるとは思ってもみなかったけど。

「あ、あの、シュテルさんごめんなさい、僕のせいで……」
「そんな事は良いから手を動かす様にね、あ！　半分に切ったら中の種を取り除いて下さい！　あとでドレッシングに使いますから！」

申し訳なさそうな顔でオドオドと此方の様子を伺う少年と、手伝ってくれている治療団の皆さん。
少しは手伝える人はいるが、こんなに女性比率が多いのに料理が出来る人がいないと言うのはどうかと思うなぁ。

「シュテル殿、生き生きしてるでありますね！」
「そうね、なんだかおかしな事になってるわね」

こんな状況になった原因とも言える出来事を思い返す。とは言え、自分から言い出した事な訳だけど――

「その虚偽の報告をした者を連れてきなさい」
「了解であります！」

治療団に選ばれるというのは、やはり名誉な事なのだろうか？
そんな嘘をついてまで一緒の任務を受けようとするなんて……。

「この少年であります！　料理人ギルドに所属しているとの事でありましたが、下働きしかした事が無く、料理が作れないようであります！」
「そう。食事は行軍においてとても大切な物なのよ。それを虚偽の報告を申請し、団全体を危険に晒す。子供と言えど、それなりの罰は受けてもらうわ」
「申し訳御座いません、申し訳御座いません！　本当は少しくらいなら出来るんです、でもこんなに沢山の人相手になんて……」

連れてこられたのは、コシュアやネイスとそう変わらないであろう歳の少年だった。
戦闘以外のギルドには年齢制限が無い為、入団する事は出来るのだ。

だが、たしかにこのくらいの年齢じゃ下働きくらいしか仕事を回して貰えないだろう。
というか、戦闘ギルドにさえ入らなければ非戦闘ギルド同士の掛け持ちも出来るのか。初めて知った。

「どうして嘘の申請なんてしたんだい？　選ばれたいのは分かるけど、これは病気で苦しんでいる人達を助ける大事な任務なんだ。もし売名や名誉欲でついてこようとしたのなら、俺だって君を庇う事は出来ない」

膝を尽き、目線を少年にあわせて問いかける。
気弱そうで、今もオドオドと震えてるこの少年がそんな理由で嘘の申請をしたとは思えない。
きっと何か理由があると思うんだけど。

「僕、アクラス出身なんです。治療団結成の理由を偶然聞いてしまって、それで……」
「アクラス、今から行く町だね？　家族や知り合いがその町に今も居るんだね？」

俺の問いに、力なく頷いた少年。
何故こんな少年が親元を離れ一人ガルヴェウスに来ているのかは分からないが、故郷の家族が病気で苦しんでいるかもしれないと思い、こんな行動を取らせたのだろう……。

「そ、それでも嘘は嘘であります！　でも、少しは減刑するのもやぶさかではないであります……」
「そうね。情報の流出に、ギルド所属の確認しかせずに選抜した私にも責任があるわね。こうなったら適当になんとかするしかないみたいね」

二人も事の経緯を聞き、この少年にも情状酌量の余地有りと踏んだのか、大きな問題にする気をなくしたようだ。
そして、提案するなら今しかない！

「俺を道中の調理要員として使えば解決ですよ。この少年の罰は、俺のアシスタントとしてこき使われるって事でどうでしょう？」
「シュテル、貴方料理が出来るの？　適当に作るだけなら私達でもなんとか……なるかしら？　とにかく、なんとかするわよ？」
「そうであります！　これは私達の責任であります、シュテル殿が無理をせずとも良いであります」

遠慮しているのか、それとも料理をするように見えない所為か、二人は静止の声を掛ける。
だが俺は、自分の荷物から一振りの獲物……包丁を取り出した。

「この”共に歩みし食欲の剣”に捌けない素材などありません。俺も、この剣に使われるだけの素人じゃないって事を証明してあげます！」

回想終了。
とにかく今はひたすらこの相棒を振るうだけだ。
「鍋が沸騰したらピグルの乾燥肉を入れてください。先ほど砂糖水に漬けておいた奴です！」
「分かりました！　このブラッドキューブはどうすれば！？」
「それは少ししたら乾燥肉を取り出して、その後にそのまま入れて

下さい！　ふやけた肉も一口大に切り分けて鍋に戻すんです！」

そして俺は、周りに指示を飛ばして獲物と向かう。

幸い材料は多めに用意されており、野菜も少しとはいえ様々な物が用意されていた。

保存の利く干し肉やドライソーセージも大量に積んであり、主食となるパンも固く焼き上げられた物や、生の米など日持ちする物がたっぷり蓄えられていた。

恐るべし、テレスストーン。

ますます欲しくなった。

そして三十分後。

出来たのはブラッドキューブと言う四角いトマトと乾燥肉で出汁を取った具沢山のスープと、保存の利く硬パンをやわらかく焼き上げたフレンチトースト。

オニオンやその他の野菜のサラダにブラッドキューブの種を使って作ったドレッシングを掛けた物に、最後にメインとしてコッカと言う家畜として飼われている鳥の魔物の干し肉を柔らかく照り煮にした料理。

計四品を完成させた。

勿論、十八人全員が満足できる量をだ。

大人数を相手にするのを前提にした大きな竈や鍋、それに多少とは言え手伝う事が出来る人間が何人かいたおかげだ。

配膳は治療団の皆さんに任せて、俺は後片付けを始める。

生ごみは魔術で土に返すそうなので、専用に掘られた穴に投げ、

使い終わった調理道具を水魔術を使える治療団員の人と洗う。
なんだか「一仕事終えたー！」と、何時もの依頼以上の充実感だ。

「あ、有り難う御座いました。ええと……」
「シュテルだ。君の名前は？」
「僕はヴィンスです。シュテルさんも料理人ギルドに入っていたんですか……？　護衛としても凄く強いって皆が言ってましたけど」
「いや、俺は鍛冶ギルドに入っているんだ。料理は昔ちょっとね」

そう言うと、少し残念そうな顔したヴィンス。
どうやら俺も料理人ギルド所属のコックだと思っていたみたいだ。

「シュテルさんみたいな人が僕の先輩だったらよかったのにな……」
「そうかい？　でもヴィンスだって随分手際がよかったじゃないか。包丁も火も怖がらないし、あとは経験あるのみさ」

少なくとも、今言った二つを怖がる新人は一生下働きから抜け出す事は出来ない。
包丁を握った経験もあるようだし、今は辛いだろうけど耐えるべき時期なんだろう。

「下働きは誰もが経験する登竜門だ。戦いだってそうだ。今は辛いだろうけど、好きな事に真正面から向き合っていれば、いつか道は開けると思うぞ」
「本当ですか？　だったら、もっともっと好きになります……！」

ここで「頑張る」や「練習する」ではなく「好きになる」と答える辺り、この子の器の大きさを感じるなぁ。
なんだかんだで行動力もあるし、将来が楽しみだ。

「シュテル殿！　配膳も終わりましたし、席に着くであります！
少年も速く此方に来るであります！」

待ちきれなくなったのか、配膳が完了するや否や呼びに来たイクシー。
先ほどから視線がチラチラとテーブルの方へと向いているし、余程お腹が減っているんだろう。

既にテーブルには俺とヴィンス以外の人達が着席し、それぞれの皿に料理も盛り付けられている。
アルシャさんもイクシーも「「おいしそうね（であります）」」とまずは見た目の評価を下し、治療団の皆さんも自分たちが手伝った料理が目の前に並び、それを美味しそうだと言われ嬉しそうにしている。

「おいしいであります！　硬パンが硬くないであります！　どうやったであります！？」
「スターエッグとモウラスのミルクをしみ込ませて焼き上げたんだよ。本来なら鳥類の卵を使うんだけど、ここにはなかったからね。今回は主食として甘くはしなかったけど、砂糖を使って甘くするのが主流かな」

スターエッグと言うのは、どう言う訳か木に生る卵だ。
尤も、実際には果物に分類されるのだが、中身はどうみても生卵。
通常の卵よりアッサリとしていて、お菓子作りによく使われる品だ。

「本当、貴方には驚かされてばかりね。このスープ、今まで味わったことがないスッキリとした味ね。ブイヨンとは少し違うようだし、フォンとも違うわ」

アルシャさんはこのスープの出汁が気になっているようだ。

たしかにブイヨンもフォンもこの世界の主流だが、そこまで濃厚な出汁を取らなくても、組み合わせ次第で上質の味は出せるのだ。

植物由来の成分に、動物由来の成分。特定の成分二つが相乗効果を生み出し、短時間にも関わらず上品で旨味の強い出汁になる。

これもカノンの記憶に深く刻み込まれた知識なのだが、これもどこかの世界で経験したんだろうなぁ。

他の皆も不満は無いようで、おかわりを求める男性陣までいる。

勿論おかわりは用意してあるし、俺も食べ過ぎない様にセーブしているから問題ないはずだ。

「ああ！　もう鶏肉がなくなっています！　もう一つ食べたかったのですが……」

「あれ？　それも結構沢山作ったはずなんですが、もうなくなってしまいましたか？」

そう思った矢先に、どうやらメインの鳥の照り煮を切らしてしまったようだ。

一番手間がかかっただけに、それだけおいしかったんだろう。やはり全て食べてもらえると嬉しい。

「ああ！　イクシー様が一人であんなに……！」

「肉であります！　お肉を沢山食べるであります！」

見れば取り皿に鶏肉を山盛りに積み上げ、もくもくと食べているイクシー。

そういえばスフィアも鶏肉が好きだと言っていたし、鶏肉は女性に人気なのか？

こうして、食事の問題は無事解決したのであった。

## 第十一話「料理人見習いと料理バカ」（後書き）

活動報告の方に、再編や加筆や、閑話に関する事を記載しておりますので、一度目を通してもらえると幸いです。

# 第十二話「旅は続くよ危険は増すよ」

二日目の昼。
今日も俺は現場の指揮を取り昼食の用意する。

初日は昼食の後も滞りなく順調に進み、着々と目的地への道を走破していった。
そして夕暮れ前に野営の準備に取り掛かったのだが、ここでも教団の馬車の万能性を目の当たりにした。

三つの馬車にはそれぞれ防壁紋章が刻印されており、その三台を三角形になるように配置し、一種の結界を張ることが出来ると言う。
そのお陰で寝ずの番は俺達護衛ではなく、治療団の人達が行う事となった。

本格的な危険の際に万全の状態で俺達が臨める様にとの配慮だそうだ。
それになんと、入浴も魔術を利用してする事が出来、今までのどの護衛依頼よりも快適に過ごす事が出来た。

「出来上がりましたよー！　皆さん席について下さい」
「待っていたでありまーす！　シュテル殿のご飯はとてもとても美味しいでありますから！」

料理をテーブルへと運び、作業をしている人達に声を掛ける。
そんな中、既にイクシーはちゃっかりと席へと一人着いていた。
君は仕事をしなくていいのか。

「今日もおいしそうね。本当、ちょっと料理が得意とかそういうレベルじゃないわね」
「そうであります！　宮廷料理人にも負けない味であります！」
そう評価してくれるのは嬉しいけど、これだって皆が手伝ってくれるお陰だし、何よりも食材の質がいいのもある。
実は干し肉などの旅に必要な保存食は、ガルヴェウスの特産品でもあるのだ。
膨大な量の新鮮な魔物の肉が常時持ち寄られるガルヴェウスでは、消費しきれなくなったそれらを加工し、名産として他所に出しているのだ。
なので、干し肉と言えどもその味に不満な点などありはしない。
昼食も終わり、再び行軍を再開する一行。
思いのほか魔物の襲撃も少なく、予定よりも早く中継地点でもある村へと到着する事になるらしい。
しかし、そろそろ街道は森林地帯へと指しかかろうとしていた。
出来れば夕暮れまでにここを突破したい、さすがにこの中で夜を明かすのはリスクが高すぎるからだ。
森林は街道よりも魔物の出現に気が付きにくい上に、盗賊等の一般人や商人を襲うことを生業にしている連中が潜んでいる可能性があるからだ。
俺と同じ判断をしたであろうアルシャさんは、行軍速度を速める旨を俺に伝えに来た。
俺もすぐさまそれを先頭に立つイクシーに伝えようと前へと向か

った。

その時だった。

最後尾のアルシャさんから敵が襲ってきたと大声が届いたのは。

振り返ると、先ほど通過した森の入り口をふさぐ様に二十名程の男達が陣取り、弓を構えていた。

「馬車を止め馬を守りなさい！　守りの陣形！」

いっその事全速力で逃げ出せばいいとも思ったのだが、アルシャさんはここで守りに入り、敵と交戦する事にした様だ。

俺はすぐさま前を走る馬車へと近づき、イクシーと合流する。

「一旦アルシャさんの所へ合流しよう。ここで連中を仕留めるつもりらしい」

「了解であります！　治療団の皆さんは客車から出ないようについてくるであります！　魔術の発動の用意もして、周りを警戒して欲しいであります！」

イクシーさんの指示を聞き、俺も急いで自分の馬車へと戻る。

自分の受け持つ人達の避難を優先するべきだったか！？

しかし、俺の予想に反して治療団の皆さんは自分達で馬車をアルシャさんの馬車へと寄せ、馬を守りつつ防壁となるように客車を移動させていた。

「申し訳ありません、自分の持ち場を離れるべきではありませんでした」

「いいえ、イクシーへの伝令を優先した貴方の判断は正しかったわ。おかげで、防壁紋章も発動出来る」

その言葉の通り、御者さんが馬車を動かし紋章が発動する位置に留めた。

その瞬間辺りは薄い結界で覆われ、飛んでくる矢の勢いが若干弱まる。

「さて、とりあえずこれで前からの攻撃はやり過ごすことが出来そうね。問題は背後や横の森からの奇襲よ。恐らく有象無象だとは思うけど、こう数が多くては面倒ね」

「だったら、俺が森を移動してあいつらの更に背後を取ります。なんとか無力化しますので、その間の警戒をお願いします」

この森に乗じて奇襲の危険性があるのなら、それは向こうだって同じ筈。

仮に別働隊がいたとしても、人数から言ってあれが本隊であるのは間違いないだろう。

もし、総勢百人を超す大所帯じゃなかったら、だけど。

馬車の陰に隠れるようにして、森へと入り込む。

思いのほか鬱蒼と多い茂るその森は、日光を殆ど地面に通さず想像以上に視界が悪い。

そんな森の中で息を潜め、物音を立てないように進んでいく。

幸い腐葉土だったらしく、枯葉の落ちる季節でもない事もあり足音は殆ど聞こえない。

そのお陰で耳を澄ますと、段々と人の声が聞こえて来る。

「兄貴、奴ら随分戦いなれているみたいですわ。それにあの馬車紋

章付きと来た、狙う相手が悪かったんじゃないんですかい？」
「うるせぇ！　それならその馬車も奪っちまえば大金になるだろうが！　ここで稼ぎださねえとボスに何言われるかわかったもんじゃねえ！」

どうやらあちらさんも旗色が悪いと感じ始めている様だ。だが、兄貴と呼ばれる代表はそれがわかっていない様子。
そして、ボスという単語。
これは本当に大所帯である可能性も出てきたぞ……。

とにかく、今はこいつらを無力化する事だけを考える。
あいつ等の左背後に位置する茂みに身を潜め、様子を伺う。
弓矢を使う人間は四人しかおらず、残りは早く突撃したいのか、それぞれの獲物を手にしうずうずとしている。

「もう我慢なんねぇよ！　あんな連中突っ込んで蹂躙すりゃいいっしょ！　護衛もあの女と前の二台にのってた二人だけっぽいし！」
「だから、それがそもそもの間違いなんじゃないかって言ってるんだろ。まるで訓練されてるみたいな動きだったぞあいつら！」

等々仲間割れまでし始めた。ここらが潮時だ、ご退場願うとしよう。

神聖術と、風の魔術の同時発動で己の脚力と速度を上昇させる。
そして、まずは何時もと同じように頭の中で一つのワードを唱える。

その刹那、奴らの前方で圧縮された空気が弾け衝撃が発生する。
きっと奴らはアルシャさん達が何かをしたと思っただろう。
その動揺が収まる前に、最大出力で疾走し剣を振るう。

しかし、何かが変だ。

「え……これは一体どういう事だ？」

剣を一度振ったと思ったら、既に俺は反対側の森へと到達していた。

想像を遥かに超える速度で移動していたようで、後ろを振り向くと――

「アアアアアアアアアア！！！！！」「首が！　おめぇくぶじゅ……」

まるでカマイタチが襲い掛かったかのように、進路上にいた数名が死に身体の一部を欠損していた。

たった一振りで、この有様。

一振りが終わる前に、何人巻き込んだのだろう。

一体どんな攻撃をしたんだ俺は……。

「一体どうなってやがる！　撤退だ、撤退するぞおめぇら！」

「なんだよ一体……何かいやがるぞこの森！」

突然部下達が切り裂かれ、先ほどまで憤っていた兄貴と呼ばれるリーダーも恐れをなして撤退を始める。

一目散に逃げ出すリーダーに続こうと、他のメンバーも逃げ出す。

すでに命を落とした者や逃げる事が出来ない者を置いてだ。

俺はその様子を呆然と眺めながら佇む。

別に自分のした事を後悔もしないし、命を奪うことへも忌避感もないのだが、どうも府に落ちない。

思えば初日の戦いだって妙に身体の調子がよかったし、今だって

そうだ。

「明らかに、力が増している？」

何が原因かはわからないが、少なくとも以前より明らかに力が増している。

困ることでは無いにしても、原因不明となると気持ちが悪い。

「――ユテル――シュテル！」

「え？　あ、アルシャさん」

聞こえて来た呼びかけに顔を上げると、目の前にアルシャさんの顔があった。

どうやら深く考え込んでいた様だ。

「一体どうしたの？　とにかくお疲れ様。死傷者四名で残りは逃亡と言う事になったけど、一体何をしたのかしら？」

「いえ、まずは数を減らそうと攻撃を仕掛けたのですが、突然背後から襲われたせいか怖がって逃げたみたいです」

「そう、出来れば全員捕らえるか倒す事が出来ればよかったのだけど、今回の依頼には関係ない物ね、早く片付いて助かったわシュテル」

アルシャさんはここで野盗一味を根絶やしにしたかった様だが、たしかに今回優先すべき事ではないだろう。

それでも、俺も追撃のチャンスを棒に振ったのは確かだ。

戦場で驚いて動きを止めるなんて、馬鹿がやる事だ。今後は気をつけないといけない。

どんな不測の事態が起きたとしても、冷静に対処できるようにならなければ。

それに、強くなるに越した事はないじゃないか。
案外蒼月の夜に「強くなりたい」なんて願ったのが、砕月がかなえてくれたのかもしれない。
……あれ？　そういうのって月じゃなくて流れ星だったっけ？
まぁいいや。

「馬車へ戻りましょう。早いうちにここを抜けてしまわないと、あいつらが戻って来るかもしれないわ」
「そうですね、急いで森を抜けましょう」

折角予定よりも早く進んでいたのに、思わぬトラブルで帳尻合わせになってしまったようだ。
この後無事に村までつけばいいんだけどなぁ。

## 第十二話「旅は続くよ危険は増すよ」（後書き）

違和感を感じ始めるシュテルでした。

# 第十三話「自覚」

森を抜け、一晩明かし次の日の昼。
無事……と言えるかどうかは分からないが、村へと到着する事が出来た。
村の名前は”アクリヴァー”と言い、中々広く宿屋も多い。むしろ町と言ってもいい位の規模だった。

しかし道行く人の数が疎らで、宿屋通りも閑古鳥が鳴いている様子。
これはどう言う事なんだろう？

「やはり行商規制の影響が出ているようね。ここは本来アクラスへの買い付けやガルヴェウスへの売りつけの人たちが立ち寄る事で経済が成り立っていた村なのよ。でも今回の件で規制されていてね、理由も発表できないし突然の事でこの村には悪いとは思うのだけど……」
「そうだったんですか。逗留も最低限に抑えて早めに経ったほうがいいかもしれませんね」
「そうね……早く活気が戻るように頑張らなくちゃねいけないわ」

村の長へと挨拶に向かったアルシャさんとイクシー。
俺は治療団の皆さんを率いていこの村で一番大きな宿、そこの馬車の預かり場にて待機中だ。

「シュテル様もようやくゆっくり出来ますね。護衛だけでなく、料理や野営の準備までお世話になってしまいましたし」
「そうですわね、本当に護衛が貴方でよかったですわ。このまま私

達と教団に来て頂けたらどんなに幸せか……」

道中食事の用意を手伝ってくれていた女性達が労いの言葉をかけてくれる。

こうも女性比率が多いと色々と動きにくい訳だけど、無下には出来ないしなぁ。

総勢十八人の内、男は俺を含めて四人しかいない。勿論ヴィンスも含めてだ。

暫くすると二人が戻ってきた。

そのまま全員で宿へと入り、団体客として部屋を借り受ける。

部屋割りなのだが、馬車と同じと言うわけにもいかず、当然男は四人で固められた。

部屋に居ても特にする事も無く、俺は断りを入れてから宿を後にした。

この村には畑もあるのだが、規模からいって自分達の食べる分くらいしか作っていないのだろう。

輸出する分も無いのだろうし、このまま旅人や行商人の足が途絶えたままだと、本格的に村の存亡に関わるかもしれない。

そんな村の様子を観察しながら、俺は何処か静かで人の居ない場所を探し求めていた。

そして、村の外れにある農具などを保管する小さな小屋の傍に、ちょっとした広場を見つけた。

ここなら人の邪魔にもならないだろうと、自分の目的を果たす事にする。

そう、検証もかねての訓練だ。
やはり原因をはっきりさせないと気持ち悪いし、どれ位戦えるようになったのかも知っておきたい。
早速剣を抜き、一通り型の反復練習をする。

「神聖術を使う前ですら、前よりも身体が軽い。術の錬度が上がったって訳じゃなさそうだ」

結果、やはり以前よりも身体が良く動くという事が分かった。
以前置き抜けに身体の調子を取り戻そうと動いた時は、単に今まで疲れが溜まっていたんだと思ったのだが、どうやらあの時点で身体能力が向上していたようだ。
だが不思議と、これが異常だとは感じられない。急激に身体能力が上がったのだとしたら、当然まともにコントロール出来ない筈だ。
昨日こそ神聖術や魔術の所為で混乱してしまったが、今はなんの違和感も無く動く事が出来る。

「やっぱり、強くなったと言うよりは前が抑えられていたって感じがシックリ来るな……」
思えば、カノンは俺にこの身体を動かす為の経験がまず足りないと言っていた。
しかしそれでも、短期間でこうも変わるなんておかしい。何か切欠があった筈なんだけど。

「随分熱心ね、シュテル。折角村についたのだし、休める内に休んでおいたらどうかしら？」

突然掛けられた声に驚き顔を上げる。

考え込んでいた為か、すぐ傍まで来ていたアルシャさんに気が付くことが出来なかったようだ。

確かにこの村には休息の為に立ち寄ったのだし、アルシャさんの言う事ももっともだ。

尤もなのだが――

「そういうアルシャさんだって完全武装じゃないですか。訓練する場所でも探していたんじゃないんですか？」

「あら、バレちゃったわね。道中は殆ど貴方やイクシーに任せていたんだもの、私も鈍ったりしない様に訓練するのは当然よ」

「そうでしたか。じゃあ俺も訓練するのは当然って事で」

ちょっと冗談めいて笑みを浮かべる。

アルシャさんも気分を悪くした様子も無く、微笑み返してくる。

「そういえば貴方のその剣、以前の物と違うわね。ムーンダスト製とお見受けするけど、以前の剣はどうしたの？」

「ああ、あれは今の俺じゃ実力不足で使いこなすには至らなかったんです。なのでもう一本の剣を使う事にしたんです」

そう答えると、アルシャさんは少し表情を険しくする。

「貴方は無自覚に人を貶める癖でもあるのかしら？　貴方はあの戦いで私に冷や汗をかかせたのよ？　もう少し、自分に自信を持ちなさい、そして自分が強者である自覚を持ちなさい」

「いえ、決してそんなつもりじゃ！　それに、本当に俺はまだあの剣を使いこなす事は出来ないんです。本来の持ち主じゃない俺では……」

また、やってしまった。どうも俺は後ろ向きになりがちだし、調子にものりやすい。

このままじゃ駄目だよなぁ本当。

「私も熱くなりすぎたわ。貴方に悪気が無い事は分かっているのよ、それでも貴方がそんなんじゃ、貴方を評価している人間や、周りの人間だって気持ちいいものじゃないの。もう少し、自信を持ちなさい」

その言葉にはっとする。

今言われた言葉は、以前自分が中傷された時に自分で思った事と同じだった。

あの時はその事が腹に据えかねた為に決闘まで起こしたと言うのに、今は自分で同じ事を言っているような物じゃないか。

「そうですね、その通りです。アルシャさんの為にも、俺の為にももう少し言動を改めます」

「そ、そう。なんだか照れるわね、面と向いて言われると」

俺も、何時までもこんな頼りない性格じゃ駄目だろう。

モデルになった人格に順じているんだろうけど、そろそろそこから一歩踏み出すべきだ。

過去のカノンだって、きっと紆余曲折を経て今みたいな在り方に至った筈。

なら俺だって、自分だけの在り方を見つけられるはずだ。

「さてと、じゃあ言いたいことも言ったし、そろそろ始めましょうか」
「え？　何をですか？　ちょっと今考え事をしてたんですけど」
決意を固め改めてこれからの身の振り方を考えていた時、またアルシャさんの声が掛かる。
なんだかいつも人が考え事をしてる時に声がかかるような……。
「戦いなさい。今なら前よりも良い勝負が出来そうな気がするの、付き合ってもらうわよ？」
「ちょ、いきなり勝手な！」
槍斧を此方へと向け、前の時とは違い、好戦的と言うよりは純粋に楽しそうな表情を見せるアルシャさん。
その姿を見て、俺は。
「分かりました。その勝負、受けて立ちます」
俺が生まれてから、最初に挫折を味あわせてくれたこの人だから。
初めて俺が自分の意思で挑んだ相手だから。
その強い有様に、思わず嫉妬してしまいそうになるこの人だからこそ。
新たな一歩を踏み出す為に、この人と戦う事を決意した。
「全力で、行かせて貰う！」
「そんな顔も出来るんじゃない、いくわよ！」

これはただの試合、訓練。
それでも俺にとっては倒すべき最初の相手。
絶対に負ける事が出来ない一戦。

今だけは、貴方を越えさせて貰うぞアルシャさん。
そして俺はここから、新たなスタートを切らせてもらう！

「ハァ！」
気合一閃、以前のように避けられる事や予想を立てるなんて真似はせず、持ち得る全てを込めた攻撃。

「っ！　何よ、やっぱり貴方も熱くなりやすいんじゃない！」
「そうでもないよ、ただ負けたくないなってさ」
「そういうのを、熱くなるって言うのよっ！」

力は拮抗していた。俺も神聖術を使っていたのだが、それを受け止めたという事は向こうも使っていたのだろう。

早く鋭いアルシャさんの攻撃。
斧部分の強力な斬撃と、槍部分の早い突き。
そしてまるで棒術の様に予想外の方向から飛んでくる石突の攻撃。

まさに変幻自在。剛と柔を兼ね備えた武術の化身だ。
神聖術の錬度だって恐らく俺とは比べ物にならないだろう。
このまま戦えば、先に神聖術の限界が訪れるのは俺だ。
だとしたら、一撃勝負に持ち込み、それで雌雄を決するしか他無い。

今度は助走を付けず、動きを見ながらジリジリと近寄り相手の出方を伺う。
俺は剣を両手で持ち、腰貯めに構え集中する。
俺の様子を見て、意図する事を読めた彼女もまた槍斧を振りかぶる。

ほんの僅かな時の停止。
お互いに次の一撃を終わらせるという意思を読み取った故の均衡。

そして、先に動いたのはリーチで勝る彼女だった。遠慮なく襲い掛かる得物は、風が唸る音をさせながら襲い掛かってくる。
長物を振るう速度とは思えないが、俺もその速度をも超える一撃を与える。

遠心力を受けた一撃をも超える、全力の攻撃。
地面を確かに踏みしめて、インパクトの瞬間に局地的に身体を強化する。
あの時、街中であの傭兵連中と戦ったときの様な一撃。

剣の先端に、全ての重さや力が移ったかのような一点集中の衝撃。
それを、相手の武器の先端付近に打ち込む。

金属の衝突した音以外の、破裂音。
衝突した場所を中心に砂埃が舞い上がり、空気の波が全身を襲う。
自分の一撃を超える力を先端に受けたアルシャさんは、そのまま――

「降参するわ、試合続行不可能になる前にね」

そう言って、手の平をぶらぶらと振っている。
常人なら武器を取り落としてもおかしくないのだが、それでも少し手を痺れさせるに留めるアルシャさんに内心驚きながらも、この言葉を口にする。

「有り難う御座いました。これで俺は本当の意味でスタートを切る事が出来そうです」
「そう、なんだか分からないけど、スッキリしたみたいね？」

今はこの強さへの疑問よりも、力を使う事への疑念や戸惑いへの決別を優先させる。
俺は、思うままに自由に生きると決めたんだ。いつまでも余計なしがらみに囚われるのは止めにしよう。
この先どんな事が起きるかわからないし、どんな問題に直面するかも想像出来ない。

それでも俺はここに産み落とされた。
もしかしたら気まぐれかもしれないし、特別な理由なんて無いのかもしれない。
だが俺は自由にこの世界で生きると決めた、もう俺は一人の人間なのだから――

## 第十三話「自覚」（後書き）

この後は一旦閑話を挟みます。

# 閑話「誇り高き神聖騎士」（前書き）

アルシャ視点です。

## 閑話「誇り高き神聖騎士」

彼と始めて会ったのは、私が気分転換と、財政状況の悪い教団の為の資金集めを兼ねたある依頼を受けた時の事だ。
その日私は、余り質の良くないフレイルラットの尾をなんとか高値で売ることは出来ないかと冒険者の集まる広場で買い手を募った。

二つ名持ちの私を知る周りの人間は、私を避けるように遠巻きに見ているだけで、一向に買い手がつかないでいた。
こんな尻尾ではどのみち誰も買わないだろうと思っていたの所に、一人の男が近づいてきた。

男は私の予想よりも良い値段を提示、それを承諾して取引は無事終了……の筈だった。

結果、男はどうやら討伐証明部位である針球目当てだったらしく、尾だけを渡した事に腹立てた様だった。
本来尾と針球は買取で分けられる物なのだし、こんな事になるとは思わなかった。
針球の事を指摘すると、男は自分が証明部位を買い取ろうとした事を周りに知られたことに逆上し、私に武器を向けてきた。

正直、魔物相手では大した気分転換にはならなかったのだし、このまま勝負を受ける事にする。
周りは私の素性を知っている様で、まるで試合を見るかのように楽しんでいるようだ。
野次や声援が聞こえる中、私を心配する声も聞こえてくる。

目の前の男もそうだけど、私を知らない人間がこの近辺にいるなんて、私もまだまだなのかしらね？

案の定、目の前の男は馬鹿みたいに真っ直ぐに突っ込んでくるだけで、動体視力の優れた竜人、私達ハーフケイルやリザケイルにはただ歩いて近づいてきているようにしか見えない。

軽く身体を神聖術で強化し、得意の戦法であるカウンターを狙う。

全身を回転させた遠心力を持って相手打ち飛ばし、相手を確認する。

大きな身体に似合わずあっさりと吹き飛ばされた男は、地面と愛しそうに顔を擦り付け気絶していた。

このまま放って置く訳にもいかず、傍により神聖術を施す。

背中への打撲だけで骨には影響はなかった様だ、伊達に筋肉質ではないといった所かしら。

自分もここ最近ストレスがたまっていたとは言え、少々やりすぎな気もしてきて、罪悪感から男の傍らに針球を一つ置いておいた。

そんな時、私の耳に面白い言葉が届いてきた。

まだ若く見える青年が、私に勝負を挑みたいそうだ。

今度は手ごたえがある相手だと嬉しいんだけど、どうかしら？

だが青年は、やはり怖くなってしまったのか挑戦を取り消そうとしている。

青年の必死な様子に、此方も意地悪は止めようと、一度灯った闘争心を収めようとした。

しかし、その時青年は先ほどの私の戦いを評し、それを理由に勝負を降りると言うのだ。
正直全力ではなかったとは言え、私の動きを正確に見切れる人間がいるとは思ってもみなかった。
見たところ獣人でも竜人でも、ましてやエルフでもないヒュマリアの青年。

そして、よく見ると彼の持つ武器は”あの男”と似た物……。
私に土を付け、才能の差を痛感させたあの戦いを彷彿させる。

だから私は、少々強引な手段で戦いを強要する事にした。
きっと、この男は強いだろう、と。

勝負の決着は一瞬で付いた。が、同時に私の心に遺恨を残す結果となった。
私の目を以ってしても完全に見切る事が出来ない踏み込みと、余りの発生の早さに回避しきれず傷をつけられた教団特性のグリーブ。
もし一瞬でも判断が遅ければ、足を持っていかれていたかもしれない……そう思うと、戦いの終わった今でもぞっとする。

何よりも、彼は最初から私が避けると踏んでの攻撃を放っていたらしく、回り込んだ私を待ち構えるかのように剣を構えていた。
それがなんだか、手のひらの上で踊らされていたかのようで腹立たしくて、思わず全身全霊の一撃を放ってしまった。
結果はそれが功を成し、剣を弾き飛ばし腹部へとダメージを与え

意識を刈り取る事が出来たけど、逆に言えばそこまでしなければいけない相手だったと言う事。

そして何よりも、彼の付き添いの男性曰く、彼はまだギルドに属していない一般人だと言う事だった。

だとすれば、彼はまだ魔術や神聖術を使えなかった可能性があると言う事。

「一体何者なの……」

これが、私と彼の最初の出会いだ。

そしてその彼は私と一緒に依頼を受け、想像以上の働きを見せた。

その後立ち寄った村で今、彼は己の疲れを癒すでもなく、思いつめた様子で剣を振るっていた。

何かから逃れるように、何か吹っ切れたいと願うかのように夢中で。

道中見た彼の強さは、以前の戦いよりも遥かに強くなっていたが、同時に何処か未完成と言うか、完成された動きではなくなっていた。

勿論、彼のことを余りよく知らない私がそれをどうこう言うつもりはないのだけど。

こっそりと近づき、彼へと声を掛ける。

また考え事をしていたのか、声をかけるまで私に気が付いていな

かったようだった。

声をかけたはいいが、何を話したらいいか分からず、彼に以前使っていた武器の事を尋ねてみた。

今彼が使っている武器も相当の業物だとは見えたが、あの戦いで一瞬見せたあの剣もまた、相当な物だった。

何しろ、教団上位の者にしか与えられない最高級の一品に傷をつけたのだから。

だが帰ってきた答えは、私の心に僅かな痛みを与える物だった。

勿論それが意図したものではないと分かっているのだけど、私が一目置いている人物が自分を卑下する様な事を言うのが我慢ならなかった。

どうやら卑下したわけではなく、紛れも無い事実だったようだ。

あの剣も本来は別の人間が使っていた物だと言う。

それでも、それを使った彼、シュテルの強さは揺るがない。

だから彼に、もう少し自信を持つように叱咤した。

それを素直に聞き、態度を改めると誓うシュテル。

面と向かって「アルシャさんの為に」なんて言われると、年甲斐も無くドキっとしてしまう。

まぁヒュマリア換算で言えば、別にそんなに歳が離れているわけではないのだけど……。

そんな内心の私を他所に、また考え事を始めるシュテルがなんだか少し憎らしくって、ちょっぴりまた意地悪をしてしまう。

愛用の得物を向け、また考え事をしている彼の顔を上げさせる。

さぁ、今度こそ満足のいく戦いをさせて頂戴、シュテル！

## 閑話「動き出した心」（前書き）

今回はとても短いです。

## 閑話「動き出した心」

心の中。
様々な思いが渦巻き、時には思い出したくない出来事や、大切にしまっておきたい思い出を封印する心の深遠に、俺は自分の為のスペースを築き上げた。
何も無い闇の中、そこに簡素なイスとテーブルだけが自分の存在を主張し浮かび上がっている。
俺はそのイスに座り、ただ時が過ぎるのを感受していた。

しかしある時、俺が生み出した人格、シュテルの心が俺から少し離れたのを感じる。

初めは軽い気持ちで、自分が少し休憩する為やちょっと寄り道してやろう、なんてふざけた理由で生み出したにすぎなかった。
それでも、改めて思い返せばこの行動は正しかったと言えるだろう。

何故なら、エキストラではなくこの世界で生まれたと言う事実が出来たからだ。
この事実がどう影響するか今はまだよく分からないが、それでも俺に新たな選択肢を与えてくれたのには違いないのだから。

初めの内は俺の予想を裏切って、どこか子供っぽさが抜けず、少し期待外れだったシュテル。
だがようやくこいつの心は動き始めた。
ある意味イノセント、汚れ無き真っ白な心を持ったシュテル。

俺の思惑にも、神の気まぐれにも、世界の願いにも染まっていな

い心。
平らなテーブルの上に置かれたガラス玉のような存在。
少しのきっかけで、簡単に転がっていってしまう危うさ。
だが、テーブルの上から落ちてしまったガラス玉は、誰かが持ち上げない限り元へは戻らない。
願わくば、転がり過ぎずテーブルの上に留まっていてくれよ、シュテル――
お前が壊れてしまわない様に。

## 閑話「動き出した心」（後書き）

果たして、カノンは今どんな事を考えているのでしょう。

次回更新は少し間が空くかもしれません。

ご意見感想等、気軽に書いてくれると励みになります。

## 第十四話「途中離脱」（前書き）

この辺りの話は難産でした。
この先、無理のある箇所や納得できない展開があるかもしれません。

# 第十四話「途中離脱」

「あ、あの！　もしや貴方様は教団ギルドの騎士様ではありませんか？」

アルシャさんとの戦闘から一夜明け、予定を繰り上げて出発する事となった俺は、最後にもう一度この村を現状を目に焼き付けておこうと辺りを観察しながら歩いていた。

するとそこへ、鍬を持つ農夫が声をかけてきた。

「いえ、たしかに共に旅をしている人間ではありますが、正確には教団ギルドの所属ではありません。何か御用でしょうか？」

「いえ、その……」

俺が教団ギルドの人間ではない為か、少し言い淀む男性。

うつむき加減の顔からは、思いつめたような表情を見て取れた。

「言い難いようでしたら、代表の所までご案内致しますよ？」

「……分かりました、お願いします」

少し考えた後、意を決したように力強く頷く男性。

その様子を見て、「ああ、きっとまた事件が起きるんだろう」とこちらも覚悟を決める。

宿屋の前で出立の用意をしていた一行から、アルシャさんに話があると呼んでもらい男性を面会させた。

男性はアルシャさんに用件を告げる。
その内容は、案の定見過ごすことの出来ない事象だった。

「なるほど、話は分かったわ。つまり今この村は財政難だけでなく、盗賊にいつ襲われてもしょうがないと言う訳ね」
「そうなんです、以前は毎月一定の金を払えばそれで見逃してもらっていたんです。しかしこの状況では支払う事も出来ず……」
「でも変ね。そんな事情、村長からは一言も聞いていないわよ？」

察するに、その村長も盗賊からお零れを頂戴していたのだろう。
よくある話だ、権力者が裏で悪人と繋がっていたなんて話……。
それでも、まさかこんな平和そうな村でもそんな事が起きていたなんて。

「お願いします！　もうこんな村長の横暴や盗賊に怯える暮らしは嫌なんです！　どうか、どうか！」
「……残念だけど、今は先に急がないといけない依頼があるの。当然村の事は教団に報告するけど、今すぐ対処する事は……」

たしかに、この村を救う事も大事だ。でもそうすると、アクラスの人々が苦しむ時間を延ばす事になってしまう。
なら、依頼として動いている以上そちらを優先させるのは当然の選択だった。
だけど――

「アルシャさん、アクラスへはここから三日ですよね。道中の危険性はどういった感じですか？」
「え？　ええとそうね、暫くは川沿いに開けた道が続くわ。魔物も川辺には近づかないし、比較的安全と言ってもいいわ」

「そうですか、なら一人護衛が抜けてもなんとかなったりしませんかね？」

依頼を途中で抜ける様な事は本来したくは無い。

でももし、アルシャさんが認めてくれるのなら……。

これはれっきとした違反行為だ、簡単には許可は降りないだろうけど。

「あ、それもそうね。ならここはシュテルにお願いしてもいいかしら？」

「やっぱりそういう訳にはいきませんか……っへ？　いいんですか？」

「勿論いいわよ。たしかに依頼内容には含まれていないけれど、教団の行動理念には含まれているわ。ズバリ『困っている人がいたら、可能な方法があるなら助けましょう』よ。たしかにここからの道中なら危険性も少ないし、どうとでもなる。私とした事がうっかりしていたわ」

そう思ったのだが、意外にもアッサリと許可が下りてしまった。

さすがは教団ギルドといった所だろうか？

とにかく話は決まった、これで俺が残って盗賊を片付ければ問題ない筈だ。

そう思い、男性にその旨を報告する。

「え、ああ、貴方が残るんですか？」

少し面食らったような顔をする男性。思っていた反応とは違っていた。

俺では頼りないだろうか？

「心配しなくても彼は強いわ。私と互角に戦えるくらいにはね」
「は、はぁ……分かりました、お願い致します剣士様」
「こちらこそお願いします」

まだ何処か納得していない様子だが、たしかに神聖騎士団のネームバリューは凄いのだろう。
なら、無名の俺じゃあ少し不安なのも分かる。それでもちょっと、ねぇ？

アルシャさんは予定通り出発し、馬車を引くロードランナーの内一頭を残していってくれた。
一番大きな馬車が四頭編成だったので、その内の一頭を残してくれたのだ。
そして俺は、男性から話を聞く。

「盗賊の住処や何時来るのか、どこから来るのかは分からないのですか？」
「あ、はい。村の傍の小川の向こう、森を抜けた所に山があります。ほら、あちらです」

指差す方向にはたしかに山が見える。あの山を根城にしているの

だろうか？

「あの山の麓に、小さな洞窟があります。そこを抜けると開けた場所に出るのですが、そこが盗賊の集落になっているのです」

「場所まで分かっているんですか。それならもっと早くギルドに連絡すればよかったんじゃないですか？　この村にもギルドはあるでしょう」

「いえ、ギルドには監視がついているので……」

ギルドに監視？　この村を活動拠点にしている冒険者だっているだろうに。それとも今は居ないのだろうか？

なんだろう、何か変だ。

一先ず、俺が一時任務からを外れた事を報告するべきだろう。

そう思い、ギルドへと向かおうとしたのだが――

「ダメです！　監視がついていると言ってるでしょう！？」

「いえ、別に俺が一人で入る分には問題ないでしょう？　ちょっと本部に連絡を入れるだけですよ」

「それでもです！　お願いですから、どうか！」

凄い剣幕で俺を止める男性。どうしてもギルドに行くのを恐れている様だ。そこまで恐ろしい相手なのだろうか？　それとも――

「分かりました。では村の外れの小川まで、案内してもらっていいですか？」

「はい、こちらです」

心底ほっとしたような表情で、案内を始める男性。先ほどまでとは打って変わってその足取りは軽快な様子。

「さてと、どうなる事やら」

建物の少なくなってきた道を進みながら、辺りを見回す。
ここは恐らく昨日通った場所なのだろう。
ぽつぽつと点在する畑は、どこも新緑で溢れている。よく見れば緑の中に、赤や黄色が見え隠れする。
土壌はそんなに悪くない様だし、もっと畑を拡張してもいいと思うんだが。

「この村の畑はよく手入れがされていますね。貴方も随分と働き者みたいですし」
「え？　ああ、大変でしたよ、今日も沢山畑を耕しました」
「それはそれは、お疲れ様です」

緑が隙間無く溢れ変える畑を横目に、前を歩く鍬を担いだ男につき従う。
そろそろ村の外れなわけだが、どうするべきか……。

## 第十五話「罠」（前書き）

あくまで、自分の見聞きした話です。

# 第十五話「罠」

男性に付き従い、村の外れにある小川までたどり着いた。
少し助走をつけたら飛び越えられそうな規模の小さな流れは、恐らく水源として村に引かれた為この水量になったのだろう。

「この先の森を抜けた所に洞窟があるんです、私が先に行って様子を見てきます」
「そうですか。気をつけて下さい」

ヒョイと小川を飛び越え、森へと向かう男性。
それを俺は特に何も言わず見届け、これからどうするべきか考える。

恐らく、あの男性はただの村人では無いだろう。
そう思った根拠は一先ず置いておき、正体を考える。

まずは仮にあの男が語った言葉に真実が含まれていた場合だ。
その場合も、この男は少なくとも農夫では無いだろう。
だとすれば、村長の息のかかった人間の筈。

だが本当に村長が盗賊と結託し、甘い汁を吸っていた場合、邪魔な俺達をここに残そうとするだろうか？
答えは否だ。そんな事をするメリットが思い当たらない。

だとすると、この男性が盗賊だったとした方が引き止める理由が分かりやすい。
今のこの状況で得をする人間、得する場面を考えれば……。

「そうか、狙いは「助けてくれえええええええ！！！！」始まったか！？」

一つの結論に達した瞬間、森の奥から響いてくる男の叫び。
どう考えても罠なのは分かりきっているが、それでも俺は声の主の元へと駆け出す。

「助けてください剣士様！」
「大人しく武器を渡せ。そうすりゃこいつの命は助けてやる」

剣を喉元に押し当てられ、ガッシリとホールドされている男性。
余りにもベタな、使い古されたシチュエーションに思わず苦笑いを浮かべそうになるのを抑え、男の話に耳を向ける。

「さぁ早く武器を捨てな！　オメェら！　さっさと回り込め！」
「お願いします！　助けてください剣士様！」

男の言葉と同時に、後ろに控えていた男達が俺を取り囲み始める。
見ればその男は、先日襲ってきたグループの代表格だ。

俺は腰に差していた剣を鞘ごと抜き、左手に持つ。

「それでいい、それをこっちに放れ」

男は狙い通りに事が運ぶのを確信してか、僅かに表情を緩める。

しかし俺は、剣を投げ渡す振りをして――

「ウィンドスレイ」

左腕に付いている発動具から、空気の刃を放つ。
不可視の刃は正確に人質となっている男と、それを取り押さえていたリーダー格の足を切り裂いた。

「クソ！　なんで俺まで切りやがった！」
「テメェしくじりやがったな！？」

二人の反応で、やはり自分の予想が正しいと確信する。
万が一、いや億が一でも無関係の可能性も無くは無いので、浅く足を切り裂く程度にした訳だけど。

「もう少し農家の方々の仕事を学んでおくんだったな！　どこの世界に収穫寸前の畑を鍬で耕す奴がいるか！」

そう、広い農場ならない事は無いが、あんな狭い畑でこの時期に土に鍬を入れるなんて馬鹿がやる事だ。
根っこを傷つけたらどうするつもりだ。

俺の言葉をよく理解していないのか、頭上にクエスチョンマークでも浮かべてそうな顔をしている面々。
そんな隙を逃しはしないし、もう油断もしない。
すぐさま剣を抜き、回り込んでいた男達を次々に切り裂いていく。

「オメェら何やってる！　クソっ使えねぇ！」
「悪態をつく暇があるなら、少しは自分の身の心配でもしろ！」

近づき男の顔面に剣の柄を叩き込む。
少し鈍い嫌な音と共に崩れ落ちるリーダー格の男。
このまま放っておくわけにいかず、全員を一箇所に集める。
そのまま魔術で鋼鉄の刃を生み出し、男達を囲む様に展開した。

俺の魔力が続く限り展開していられるわけだが、今の間に奴らのアジトへと向かう。
きっとロープくらいあるだろう。

どうやらあの男が言っていた事は本当だったらしく、洞窟を抜けると開けた場所に出た。
周りを岩肌に囲まれた、小さめの集落と言った感じだ。
規模から察するに、余り大人数と言う訳ではなさそうだ。それでも、今回相手にした人数では足りない気がする。
集落には最低限の見張りがいるだけだったので、その見張りも昏倒させ、見つけたロープで縛り上げる。

再びロープを持ち外に出ると、刃で出来た牢の中でリーダー格の男が喚いている。
それを黙らせて、一人一人丁寧に木に縛り付けていく。

「クソが！　だが最後に勝つのは俺達だ！　なにせ一番厄介なおめぇを分断出来たんだからな！」
「ああ、戦力の分散が目的だったんだろ？　それくらい最初から分かってたよ」

得意そうな顔で勝利宣言をする男。しかし俺の反応が予想外だったのか、ポカンと口をあけている。

「一番厄介だと思ったのはそっちの勝手だけど、向こうに居るのは

神聖騎士団の副団長と分隊長だぞ？」
「はああ！？　なんだそりゃ！　話が違うじゃねえか！」

どんな話か分からないが、とりあえず残りの連中もアルシャさん達にかかればあっという間に片付いてしまうだろう。
そういえば、ボスとか言っていた気がしたのだが。

「そういえば、お前らのボスはこの事を知ったらどう思うかな？」
「てめぇなんでその事を！？　クソ……折角傘下に入れてもらったってのに」

素直に話すとは思えなかったので、少しカマを掛けるつもり切り出すと、アッサリ話し出す男。
どうやらこの辺り一帯の盗賊団を次々に傘下に治めている人物がいるらしく、こいつらもその傘下に加わったばかりだった様だ。
尚、村長と結託している等と言った話は全て嘘だったようだ。そんな気の聞いた話、こいつらに考えられるとは思わなかったが、近々実行に移す作戦だったようだ。これもその傘下に収めた人物の入れ知恵だとか。

「これは、報告した方がよさそうだな」

一人呟き、縛り付けた男をそのままにし、村のギルドへと向かう。
当然監視なんて物はないし、俺が応援を呼ぶのを恐れての嘘だったみたいだ。
常駐している冒険者達に状況を説明し、盗賊団の確保をお願いし、俺も本部へと連絡を入れる。
するとすぐに返事は返ってきた。身柄を確保する為にガルヴェウスから冒険者の一団が派遣されてくるらしい。
俺はすぐに治療団へと合流せよとの指令だ。

今回の事件を知った村長さんに是非お礼をと引き止められたのだが、任務の遂行中だとその申し出を断り、残されたロードランナーに跨り治療団を追いかけアクラスへと向かった。

道の先で盗賊が一団を襲った可能性があるとして、俺と一緒に数名の冒険者が付いてきてくれた。

もし既に終わっていたとしても、これなら盗賊の身柄を村まで連れ帰って貰えるだろう。

ただ、なれない馬の所為で下半身がガクガクになってしまった。

これがスレイランナーじゃなくてよかった、よくアルヴァスは平気だったな……。

## 第十五話「罠」（後書き）

理由に納得できない人もいるかもしれません。
それでも、土の見えない畑を耕す人なんていないと思うわけです。

## 第十六話「港町アクラス」

村を出て一時間程で、盗賊の残骸？　と呼べばいいのか、満身創痍の盗賊達が、ロープでぐるぐる巻きにされて街道の脇に放置してあった。

手紙も添えられており、

『もしこれを無関係の人間が見ているのなら、この盗賊の事を近くの村のギルドに連絡して貰えると助かります。事情が分かっている者ならば、この盗賊達をなんとか村まで連行してもらえないかしら？　護衛依頼を受けた者より』

との事だ。

今回はあらかじめ予測出来ていたので、同行してくれた冒険者達に身柄の連行をお願いし、そこで別れて再び皆を追う。

手紙に必要最低限の情報しか書かなかったのは、万が一の事を考えてなのだろう。恐らく書いたのはアルシャさんだし、事情が分かっている者と言うのはきっと俺の事だろう。

しかし、既に行商の規制もされている上、俺が村での一件を解決するまで時間がかかっていたとしたら、あの盗賊達は間違い無くのたれ死ぬか魔物の餌になっていたんじゃないか？

アルシャさんは犯罪者には容赦が無い様だ。思えば最初の襲撃の時だって、全員確保か皆殺し的な発言をしていたし、随分苛烈な性格だ。

今度からなるべく機嫌を損ねない様に気をつけなければ……。

その後暗くなってきても休憩を挟まず、多少ロードランナーにも無理をさせてしまうが、それでも先を目指す。

さすがにロードランナーも限界になったのか、足を止めてしまっ

た為、その日はそこで一泊する事にした。

そして、次の日も朝から食事も摂らず進み、その甲斐あってか昼前には一団と合流する事が出来た。

まずは村での一件と、背後にいる盗賊のボスの事を。そしてアルシャさん達を襲撃した盗賊の話等をお互いに報告しあう。

あの農夫を偽った男は、俺の顔をあの襲撃の時に見ていた様で、それであんな反応をしたようだ。

そして、そんな俺を『自分と互角』などと言った為、作戦の雲行きが悪くなるのを感じ、あんな態度を取ってしまったのだろう。

俺を教団の雇った用心棒か何かだと思い、その他の面々はたいしたことがないと判断し、

『引き離して人質で無力化してしまえば後は楽な仕事』そう思っていたのだろう。

「それにしても凄いわね、私ならそんな事気が付かなかったかもしれないわ。少しは農業の勉強でもしようかしら？」

「はは、それもいいかもしれませんね」

「本当にね、宿舎の裏にでも作れば少しはお金が浮くかもしれないし……」

冗談だと思ったのだが、思いつめた顔で真剣に考え始めるアルシャさんに言葉を失ってしまう。

そんなに財政難なのか教団ギルドは……。

俺の帰還に、受け持っていた馬車の面々だけではなく、全ての治療団員や御者さん、そしてイクシーも喜びの声を上げる。

聞けば俺の居ない間の食事が余りに悲惨だったらしい。
ヴィンスは勿論頑張ったのだが、俺の代わりに指揮を執り頑張ろうとしたのがアルシャさんだったらしい。
上司の悪口にあたってしまうと皆は詳細を口にしようとしなかったが、この反応を見ればどんな状況だったのか想像に容易かった。

そして翌日の昼前に、遂に俺達は港町アクラスに辿り着いたのであった。

到着して早々、一団は町にある教団ギルドへと向かう。
この町には冒険者ギルド以外の支部も存在しており、教団ギルドが運営する診療所も存在していた。
現在この診療所には、連日流行り病の症状を訴える患者が運び込まれ、治療員の手も足りずてんてこ舞いになっているそうだ。
代表への挨拶はアルシャさんが向かい、残された面々は早速現場の人間と協力し、治療に当たっている。

「シュテル殿、私達は邪魔になってしまうでありますから、一旦出ましょう」
「そうだね。外でアルシャさんを待とうか」

二人で診療所を後にし、町の様子を眺める。
アクリヴァーの村程ではないが、やはりどこか活気が少ないように見える町。
通行人だっているのだが、皆一様に布を顔に当て、足早に去っていく。

「診療所の近くだから、どうしてもこうなってしまうであります……。放っておいたら、病の蔓延よりもさらに深刻な問題に発展してしまうであります……」
「そうか、やっぱりそうなってしまうか……」
そう呟くイクシーは、悲しそうに俯きながら自分の気持ち吐き出し始める。

「誰だって、好きで病気になる訳じゃないであります。でも、どうしても差別意識のような物が生まれてしまうであります。それまで仲良しだった友達とも会えなくなったり、最後には追放や迫害なんて事にもなってしまうなんて悲しいであります」
「そうだね、ただ治療をして全てが解決なんて訳には行かない。やっぱり原因を特定して根底を潰さなければいけない」
「その通りであります！　どんなに時間がかかったとしても、絶対になんとかしてみせるであります！」

決意を新たに、拳を握り締めるイクシー。
一見どこにでもいそうな少女にも見える彼女だが、やはり分隊長を務める神聖騎士。
その姿勢は何処か人を惹きつける物がある。
本当、俺の周りには強い女性が多い。

「気合が入っているわねイクシー。でも私達に今出来ることはこの町の治安維持くらいよ。適材適所、私達は私達でこの町の為に尽力しましょう」
「アルシャ副団長！　了解であります、少しでも治療団の皆さんが仕事をしやすい様に、精一杯尽くす所存であります！」
「お帰りなさいアルシャさん。ところで俺はどうすればいいんでし

ょう？」

そう、町の治安を守るのはいいのだが、冒険者でしかない俺には何の権限も無い。

元々護衛依頼のみだったのだし、町についてからはどうすればいいのだろうか？

「そういえば、貴方は私の部下じゃなかったのよね……」

はぁ、とため息をつき、とても残念そうで、どこか恨みがましい目でこちらを見るアルシャさん。

「ねぇ、本当今からでも教団に来ない？　今の部下に不満は無いのだけど、貴方ほど優秀な部下なんて数えるくらいしか居ないのよ……」

「そうであります！　シュテル殿ならすぐに分隊長クラスにはなれるであります！」

「いや、もう勧誘は簡便して下さい。俺は今のギルドを辞めるつもりはありませんから」

「そうよね、半分冗談よ。それより貴方のこれからの行動だけど……」

うん、半分は本気なんだね。それって結構切実なお願いって事だね。

もし最初に出会ったのがアルシャさんだったら、そうなっていたかもしれないけど。

「自由にしてくれて構わないわ。どれくらい滞在する事になるか分からないのだし、暫くはここで依頼を受けるなり、休息を取るなり自由に過ごして頂戴。有事の際には連絡するから」

「自由ですか？　それはそれで何をしたらいいか困るんですけど」
「だったら私と一緒にパトロールするであります！　困った人を見つけてお助けするであります！」

イクシーも提案してくれるが、自由にしていいと言うのなら、暫くこの町の様子を見て周る事にした。
まずはギルドに顔を出してみるとしよう。

二人と一旦別れ、町の大通りへと向かう事にした。

# 第十七話「海の誘惑」

診療所から離れている為か、大通りは想像していたよりも人で溢れ活気に満ちていた。

辺りを見回せば、まだ昼を回ったばかりだと言うのに、朝の漁を終えたいかにも海の男といった風貌の団体が酒場で祝杯をあげていたり、取れたての魚を店先に並べ、威勢良く客引きの口上を述べる露天商等、病の陰りなど微塵も感じさせない賑わいを見せている。

よく見ると、道行く人の種族の割合がヒュマリアよりも獣人の方が多いように見える。

行商規制がされている筈なので、恐らく海を越えて来た人達なのだろう。

北の大陸との間にある島々からなる共和国は獣人が治める国と言うし、恐らくそちらから来た人達もここで足止めを食らっているのだろう。

活きのよさそうな海産物を見ながら、『この世界に来てから海の幸なんて殆ど食べていなかったのでこの依頼を受けたのは正解だった』なんてちょっと不謹慎とも言える事を考えてしまう。

店先の魚は鮮度が落ちないように大量の氷の上に並べられ、下の台車もどうやら魔具の一種のようだ。

という事は、冷蔵庫のような装置もあるという事なんだろうか？

「おじさん、これって氷が溶けたりとかしないんですか？」

「おう！　帝国から取り寄せた特注の魔具だ！　朝からずっとこの状態だ！」

よく見れば、氷の角も溶けて丸くなったりしてはおらず、しかも表面はうっすらと霜が付着したままだ。
かなり性能の良い冷凍機能が備わっていると見える。

「じゃあ生でも食べられるくらい新鮮って訳だね？」
「お、兄さんツウだねぇ！　こいつなんかカルパッチョにしたら舌が痺れちまうこと請け合いだ！」

持ち上げて見せた魚は回遊魚特有の引き締まった流線型で、大きさも５０センチはあろうかという中々の大きさだ。
一見すると、カツオや小ぶりなマグロの様にも見える。

「食べたいけど、料理する場所がないからなぁ」
「それならちょっと行った所に、魚持ち込みＯＫの店があるぞ。そこで料理してもらうってのはどうだい」

なるほど、会話をこの流れに持っていくのを最初から狙っていた様だ。
中々商売上手なおじさんだ。その料理屋さんもお客が入るし、業務提携でもしてるんだろうか？

「買った！　そのお店に行くんだから、少しはまけてくれると嬉しいんだけど？」
「ふっ、中々鋭いな兄ちゃん。よしわかった、９００メルスでいいぜ」

値札には１２００メルスとある。その値段で一匹丸ごと買えるのだから十分安いと思ったのだが、それでも値引きをする辺り、さすが港町の露天商だ。

朝食を抜かし、昼食もまだ食べていないのでさすがに空腹が限界まできていた。
早速そのお店まで行き、魚の調理をお願いした。

店の名前は”飛び込み魚”たしかに、ここには様々な魚が飛び込んでくるだろう。
そこでカルパッチョにしてもらった魚とサラダ、魚のすり身のパテを挟んだパンを頂き、持込の為か安い値段で満腹食べる事が出来た。
店の人間に、「あれだけの魚を一人前で持ち込む客なんて普通居ない」と驚かれたが、実質１５００メルス以下で俺が満腹食べれたのだ、滞在中はこのお店を利用する事にした。

「あー食べた食べた。でもさすがにここでもお金を稼ぐ必要はあるよなぁ」
宿は教団が用意してくれてるのだが、さすがに食費や生活費は自分で稼がなくてはならない。
依頼完了後にある程度補助金を支払うと決まってるのだが、教団の財政は想像以上に苦しそうだし、当てには出来ない。

「あー、そういえばギルドに行くんだった。この町には誘惑が多すぎるな……」
俺のその発言に、「この町にそんな店あったか？」なんて言っているが、俺にとっての誘惑は食べ物だ。
男の欲望が、色欲だけだとは思わない事だ！

大通りで一際大きな建物が群を成している区域、ここが冒険者ギルドがある場所だ。
他にも漁業組合、それを運営する商業ギルドや、船の修理を請け負う職人ギルドまである。

つくづくギルドという組織が生活に密着しているのを思い知る。

「よく来たな、ここは冒険者ギルドアクラス支部だ！　今日はどんな用件だい？」

受け付けに行くと、少々豪快な挨拶と共に日焼けした肌の女性が現れる。

暇を持て余していたのか、その手には雑誌の様な物が。

「今日から少しの間こっちで滞在する事になった、ガルヴェウスから来た冒険者なんだ。今日は挨拶と、どんな依頼があるか確認に来たんだ」

「へぇ、随分礼儀正しい冒険者もいたもんだ。本部所属ってのはアンタみたいな連中ばっかなのかい？」

挨拶に来るのが珍しいのか、少し驚いた顔をしながら受け答えする女性。

ギルドそのものはそこまで大きくは無く、全員が顔見知りといった様なアットホームな環境だったので、まずは顔見せは大事だと思ったのだが。

「おいおい、本部から来て下さった方になんて口聞きやがる！」

「ゲッ、チーフ。ちょっと堅かったからほぐしてやろうと思って……」

奥から現れた、筋骨隆々の獣人の男性。恐らくワウファングだろう。少し大きめのたれ耳が見て取れる。

見ている間に女性に振り下ろされるゲンコツ。あの体から放たれるのだ、さぞかし痛いだろうに。

「すまなかったな、こいつ本部から来た人間相手すんの慣れてないんだ。それで、依頼の確認だったな？　ギルドウィンドウにあるのが全部なんだが、その前にギルドカードの提示を頼む」
「あ、そうでしたね。どうぞ」

普段とは違う場所で依頼を受ける場合は、最初にギルドカードを提示し、身分を確認しなければならない。
初めて別の町のギルドに来たので、すっかり忘れていた。

「お、シュテルさんはまだ冒険者になりたてだったのか。それにしちゃあ随分と達成依頼の数が多いし、ランクも高いじゃないか」
「呼び捨てで構いませんよ。ギルドに入る前から剣を扱っていたお陰です、これから暫くお世話になります」

ギルドカードを見れば、その人がどんな仕事をしてきたのかすぐに分かる。
どうやら本部にアクセスして、様々な履歴を見る事が出来るらしい。

「んじゃあアレだ！　溜まってる依頼どんどん終わらせてくれよアンタ！」
「だから、もっと言葉遣いを学びやがれ！　悪いなシュテル、気を悪くしないでくれ」
「あ、別にそんな事気にしませんよ。それじゃあ今日も何か簡単な依頼でも受けるかな」

ギルド内には冒険者の姿が見当たらず、恐らく皆依頼を受けて出かけているのだろう。

「その前にシュテル、少し話を聞きたいんだが」

「どうかしましたか？」

チーフと呼ばれた男性が、少し離れた場所で手まねきをしている。
何か内密な話だろうか。

「この時期に本部から来たって事は、病の件なのか……？」
「……なるほど、ギルドの上の人間には通達がきているんですね？」
「ああ、だからここの冒険者連中は今、遠出の依頼を受けることが出来ない。全てこの町の周囲の依頼だけだ。シュテルもそこの所を踏まえて行動して貰いたい」
「了解です。外の事等を聞かれても、適当に話をはぐらかす事にします」

どうやら、規制は行商だけでなく、この町全てにかけられているようだった。

「それじゃあまずは簡単な依頼でも受けさせてもらいます」
「ああ、頼む。ここの連中、体力はあるんだが、戦闘となるとてんでダメなんだ。討伐系の依頼適当に流してくれると助かる」
「よし、だったらお前！　軽くカイルーン達を討伐してきてくれよ！」

カイルーン？　たしか亜人種の魔物で海辺に生息していた筈。
たしかCランクの魔物だから、一応ランク的には格上の相手だ。

「シュテルはD＋だな。なんとかなりそうか？　正直数が多すぎて、小船を盗まれたり襲われたり大変なんだ」
「大丈夫です、それじゃあその依頼を受けさせてもらいます」
「こいつは断続依頼だ。十対討伐すれば完了だが、可能ならどんどん倒してくれ。Cランク依頼だから、数をこなせばC－ランクにも

なれるぞ？」

Cランクの断続依頼なんてガルヴェウスには存在していなかったし、これはいい稼ぎになりそうだ。

俺は今回の依頼でC一にするつもりで、万全の状態で町を後にした。

## 第十八話「鬼人の如く」（前書き）

本日確認してみた所、総アクセス数が１００万を突破しておりました。
これも皆さんのお陰です。これからもこれを励みに頑張りたいと思います。

# 第十八話「鬼人の如く」

砂浜に打ち上げられた流木の様に、無数に転がる魔物の死体。
その数は数えるのも馬鹿らしくなる程で、これが消えてしまう前に討伐証明部位を全部回収出来るか心配になって来た。

「飛べ！」

四匹体程纏めてウィンドフレアに巻き込み、衝撃で体勢を崩す所か、体の一部が弾け飛ぶ。
そのまま剣による刺突で止めを刺し、足を止める事無く残りのカイルーンに狙いを定める。

粗方群を片付けたのか、襲撃が止んだので、すぐ様証明部位を回収する。急がないと折角倒したのに無駄になってしまうので、時間との勝負だ。
こいつの証明部位は、右腕に擬態させている触手に埋まっている水晶体だ。
一見すると有機物には見えないくらい透明で、ガラス玉のようにも見える。

「なんで戦う時間よりも部位を回収する時間の方が長いんだ……」
そう嘆きながらも手早く回収していく。
この依頼を開始してから、ずっとこうだ。

群に遭遇する、倒す、急いで部位を回収する。

この一連の流れを先ほどから幾度となく繰り返している。と言うか、さすがに繁殖しすぎだろコレは。

やはりここの冒険者の人たちは、討伐依頼を敬遠しているんだろう。

「よし終わり！　どうだ、最初に倒した奴もまだ消えてないぞ！」

このルーチンワークじみた作業で心が折れないよう、勝手に自分ルールまで作って、半ばタイムアタックでもしているかの様になっていた。

それでも、直径6センチ程しかない水晶体もさすがにかさばり始めた。念のためと持ってきていたリュックは、中身を全て宿においてきたと言うのにもうパンパンだ。

持ち上げようにも、俺以外ではそうそう持つ事すら適わない程の重さになっている。

「これ以上はリュックがダメになるだろうし、困ったな」

想像以上に楽に倒せる相手に、本気でここで一気にランクを上げてしまおうと躍起になっていたが、この辺りが潮時だろうか？

そう思い、名残惜しいが帰り支度をしはじめる俺の目に映った希望の船。

まさに、希望の船としか言いようがない。

「あれが恐らく盗まれた小船だよな……これ持って帰ったらきっと喜んでくれるだろう。ん、いい事を思いついた」

俺はすぐさま小船に駆け寄り、何処も壊れていないか確認する。

そして俺は、リュック一杯の水晶体を船の中にぶちまける。

「これに積めるだけ積めばいいな。よし、この様子ならあと半日は戦える！」

依頼開始から早４時間。疲れ知らずとも言える魔力に物を言わせた神聖術での疲労回復を行い、また得物を求めて砂浜を彷徨い始める。

ロープの先に小船を結び付け、船を引っ張り歩く今の俺の姿を見たら、周りはどう思うだろう？

なんとなく奴隷が強制労働でもしている様に見えるかもしれないし、正直人には見られたくない。

すっかり日も暮れ、星空が映る漆黒の海が、まるで自分が空高く星空の中で漂っているかのように錯覚させる。

静かに揺れる波の音と、きらめく光を眺めながら俺は――

「よーし、船の前半分は埋まったな。残り半分って所だけど、そろそろ魔物の姿が見えなくなってきたな」
ずっと戦い続けていた。
神聖術による疲労回復だが、講習の時に「永遠に戦えるんじゃないか」と俺は言ったが、自分の身体を強化さえしなければ本当に疲れ知らずでこんな長時間戦い続ける事が出来た。
慣れ始めてくると、魔力を節約する戦いでも楽に倒す事もできる様になり、最初の頃よりもハイペースで水晶体を集める事が出来た。
回収も少しでも効率よくしようと、スティルスレイを小さく発動させ一瞬で回収出来るようにもなったし、かなりの回転率だ。

船一杯にする事が出来なかった事が心残りだが、今日のところは諦めて町に帰ろう。
若干手応えを感じるロープを引き、一人夜の砂浜を歩き始める。

ずりずりずりと、砂を掻き分ける音をＢＧＭにひたすら歩く事さらに二時間、ようやく町の明かりが見えてくる。
さすがに船を引きずったまま町に入るわけにもいかず、神聖術で身体を強化して船を持ち上げる。
水晶体の重さもあり、強化していても肩にかかる負担が半端じゃない。
それでもバランスを取りながら、町の入り口へと回り込み、ギルドを目指し歩き始める。

町中で周りの視線に晒されながらも、大通りを進む。
途中

「あれって盗まれた船だよな?」「中に入ってるのはなんだ?」「アイツだぁ！　俺が見たのはアイツだぁ！」

等と耳に入ってくるが、気を抜くとバランスを崩してしまいそうなので黙って進む。
そしてようやく――

「すみませーん！　依頼完了の報告に来たのですが、手が塞がっていまして！」
「この声シュテルか？　随分と遅かったじゃない……か……」

扉を開けてくれたチーフを尻目に、船ごとギルドへと入る。
想像通りの反応だ。まさかここまで狩ってくるとは思っていなかっただろう。
俺はなるべく衝撃を与えないように小船を下ろし、チーフへと報告する。

「盗まれた小船と討伐証明部位です。数は数えてないのですが、大丈夫でしょうか？」
「あ……ああ、問題ない。おい！　手の空いてる奴はこっち来て一緒に数えてくれ！」

チーフの声に、何事かと駆け寄る職員と冒険者達。
見れば昼に応対した女性職員も、あいた口が塞がらないといった様子だ。

「なんだこれ、本部の奴らってみんなこんななのかよ！　すっげぇなぁおい！？　これ全部1人でやったのか？」

心の底から楽しそうに、興奮した様子で問う職員。その質問に答えたのは俺ではなく。

「間違いないよ！　僕達見たんだ、採取依頼の帰りに、浜辺で誰かが……」
「わ、私達怖くなってそれで……」
若い女性冒険者2人組が、顔を青くしながら震えていた。
「そ、その人が笑いながら何十匹ってカイルーンを……」
「浜辺の色が、どんどんかわっていってたんです……」
その通りだ。冷静に考えて、一心不乱に魔物を嬉々として狩ってる姿なんて、怖いに決まってる。
ああ、奴隷どころかこの子達のトラウマになりかねないぞこりゃ。
少し冷静になり、ちょっとやり過ぎたかもしれないと落ち込んでいる俺の肩に、チーフの手が置かれる。
「なに、残骸も血も何もかも、海が洗い流してくれる」
「何上手いこと言ってるんですか……」
その後、集計の済んだ証明部位の数から俺がこなした依頼回数は５９回だったそうだ。
という事は、あの水晶体は少なく見積もって５９０個あったって事だろう。
端数の分は依頼とは別に買い取ってくれるそうだ。
この部位も、証明の後は売り払う事になっていて、その売却値段の七割は俺が貰えるらしい。
何に使うのかと聞いたところ、錬金術で装飾用の飾り玉として作り変えるらしい。
それを聞き、端数の分は買い取ってもらうこと無く自分で貰う事

にした。

「それじゃほれ、今回の依頼の分の集計結果だ」

「あ、有り難う御座います」

提出したギルドカードが返却され、その情報を見て見ると。

氏名　　シュテル

戦闘ランク　　Ｃ　２５０／３００

どうやら、Ｃ一を一気に飛び越えてしまった様だ。それに残りポイントも５０と、後僅かまで来ている。

これはガルヴェウスに戻り次第、自分の家を持つ事が出来そうだ。

ここに滞在している間にどこまでランクを稼げるか、楽しみになってきた。

とは言え、ここでの生活が長引くという事は、病の原因が特定出来ないと言う事なのだ、そうそう一人で浮かれる訳にもいかない。

一応この町での厄介ごとの一つである魔物の退治が出来たのだが、病にはなんの関係もないのだ。

どうせならもっと役に立ちたいと思ってしまうのは、少し欲張りが過ぎるだろうか？

## 第十八話「鬼人の如く」（後書き）

以前も言いましたが、何か記念に閑話を作りたいと思っているのですが、どういった内容にするかリクエスト等がありましたら、気軽に書き込みしてもらえると助かります。

# 第十九話「森に住む者」

翌日、与えられた宿の一室にて目を覚ます。
ここは二人部屋で本来ならヴィンスと一緒なのだが、彼は実家の方に滞在する事になり俺一人で使わせて貰っている。

昨日ほぼ一日中潮風に晒された装備を手入れしていると、クロースアーマーもゴワゴワになってしまっている事に気が付いた。
一旦着替え、宿のご主人に洗濯出来ないかお願いしてみた所、『仮にも鎧に分類されている品を素人が手出しする事は出来ない』と断られ、近くにある手入れを代行してくれる武具店へと持って行ってくれる事になった。

何気に、鞘の管理人のオーリエさんが只者じゃない事が分かるちょっとした一幕だった。
さすが冒険者を専門に相手取るだけの事はあるようだ。

その後、自室で剣と鎧の手入れをしてる所に、ノックの音が響く。

「はい、開いていますよ」
「失礼するであります！」

意外な事に、ノックの主はイクシーだった様だ。

「イクシーじゃないか。どうしたんだい？　もしかして、何か火急の知らせかな」

少し上気した様子のイクシーの顔色を見て、もしやと思いこちらも臨戦態勢に入る。

「聞いたであります！　シュテル殿が昨日、町の皆さんを苦しめていた魔物を一斉討伐したと！」
「え？　ああ、あの事か。つい夢中になって、気が付いたら凄い量を倒していたみたいなんだ」
よかった、どうやら何か問題が起きた訳ではなさそうだ。
「私は昨日町のパトロールをしてたでありますが、途中で浜辺に凶悪な魔人種が現れたとの噂を聞き、驚いたであります！」
「魔人種って……そんな風に噂されてたのか……」
昨日の怯えた二人組みの若い女性冒険者の様子が脳裏を掠め、また少し落ち込みそうになってしまう。
「今日は私も、一緒に魔物狩りに行くであります！　だから迎えにきたであります！」
「なるほど、それで急いでたのか。じゃあちょっと待っててくれないかな、着替えるから」
イクシーは外で待っているとの事なので、俺も支度を始める。
クロースアーマーが無いので、今日は私服の上から鎧をつける事にする。
何となく色合いが悪いからと、こっそりとカッターシャツの色を青みがかった白に変更し、鎧を装備し、今日ももしものためにとリュックを持つ。
尤も、今日は昨日の様な無理をするつもりは無いので荷物は入れたままだ。
「準備完了。今日はどんな依頼を受けようか」

宿を出て、イクシーと合流する。
朝食がまだだったので、屋台で軽い軽食を買い、そのままギルドへと向かう。
イクシーは今日は教団の公務では無く、プライベートで依頼を受けるという形なので、俺と同じように私服の上から白い皮鎧を装備していた。
よく見れば、その皮鎧の表面にうっすらと光の膜が覆っていた。
さすがに分隊長に支給された装備といった所か。

「おはようございます」
「おはようございますであります！」

挨拶と共に扉を開ける、すると建物内に居た、昨日は余り見かけなかった冒険者達が一斉にこちらへと振り返る。

「よぉ兄ちゃん！　昨日は凄かったらしいじゃねぇか！　悪いな、外から来たアンタに面倒な仕事引き受けてもらっちまって」

その一団の中から、一人の大柄な男性が声を掛けてくる。
日焼けした太い二の腕を晒し、はちきれんばかりの大胸筋をタンクトップでコーティングしているかの様な大男。
冒険者と言うよりは、漁師と言った風貌だ。

「いや、つい夢中になってたらいつの間にかあんな事に。申し遅れました、先日よりここで仕事を請けさせてもらっています、シュテルです」
「同じく、今日から一緒に依頼を受ける事にしたイクシーであります！」

イクシーも、別段緊張した様子や萎縮した様子もなく、男性へと挨拶をする。

伊達に神聖騎士団に入っているわけじゃないな、普通の女の子なら少しは怖がりそうな物だけど。

そう思ったのだが、知り合いの女性でこれくらいで怖がりそうな人なんて、レストさんくらいじゃなかろうか？

「そうかそうか！　俺はこのギルドに常駐してる冒険者で、ダインってんだ。漁師との兼業だけどな」

「そうだったんですか。ここの魚は美味しいですね、昨日早速食べた所ですよ」

「そ、そうなんでありますか！？　わ、私も後で……」

一旦挨拶も終え、今日はチーフが応対している受付へと足を運ぶ。

「おはよう御座います、昨日より随分にぎやかですね」

「おうシュテル。お前の活躍に触発されたみたいだぞ？　今日は簡単な討伐依頼を受ける奴が後をたたねぇ」

「良い刺激になったみたいで何よりです。今日も何か討伐依頼を受けるつもりなんですが、何か優先して欲しい事はありますか？」

「そうだな……ん、なんだシュテル、今日は女連れか。お前も隅におけねぇな？」

後ろにいるイクシーに気が付いたチーフさんが、少し下世話な笑みを此方に向ける。

「私は今日一緒に依頼を受ける事にしたイクシーであります。ギルドカードをどうぞ」

少々硬い声でカードを提示するイクシー。もしかして気を悪くさ

せてしまったか。

「お、おお！　申し訳ありませんでした。どうぞ、ご自由に此方のギルドをご利用下さい」

「分かったであります。それと、シュテル殿に失礼な事を言わないようにして欲しいであります」

まさにプリプリと言う表現に相応しい態度で、一人ギルドウィンドウに向かうイクシー。

やはり、機嫌を損ねてしまった様だ。

「はは、俺とした事がとんでもねぇミスをしちまったぜ。まさか神聖騎士団分隊長殿とはなぁ。お前さんも凄い相手と知り合いなんだな」

「そうみたいですね。正直、ここまで影響力のある人間だとは知りませんでしたよ。俺の方からもフォローを入れておきますから」

「ああ、頼む」

気を取り直して、ギルドウィンドウへと俺も向かう。

「あの男性、シュテル殿にあんな事を言うなんて失礼であります！　シュテル殿、私の所為で嫌な思いをしてしまったでしょう、申し訳ないであります」

「いや、俺は別に何も嫌な事なんてなかったけど。それよりもイクシーこそ悪かったね、チーフさんも悪気は無いんだ、許してあげて欲しいんだけど」

「そ、それは！　了解であります、水に流す出あります」

どうやら気が晴れたイクシーと依頼を見渡す。

どれもDからCランクの討伐依頼ばかりで、他は町の中での奉仕

作業等ばかりだ。

「ここの依頼難易度じゃ、イクシーは満足出来ないかもしれないね」
「そんな事ないであります。どんな依頼でも、全力で取り組む事が大事でありますよ？」

おっと、その通りだ。俺とした事が何を言ってるんだ。

「ん、この依頼、最近追加されたみたいだ。フォレストゴブリンの討伐だって」
「なんと！　それを受けるであります！　絶対に生かしておいてはいけない魔物であります！！！」

新規依頼に含まれていた討伐依頼の事を口にしたら、イクシーが目の色をかえて食いついてきた。
まるで親の敵と言わんばかりのギラついた、いつもの様子からは想像出来ないその表情に思わずあとずさる。

「この依頼、私とシュテル殿で引き受けるであります！」
「お、おう。了解した……」

颯爽と依頼を受けにチーフの元へと向かい、カードを差し出すイクシー。
その勢いに、チーフもたじろいでいる。

「おっとちょっとまて。この依頼、今日朝一番に受けた奴がいるな。もし見かけたら手伝ってやってくれねぇか？」
「了解、どんな人ですか？」
「昨日の顔を青くしてた若い娘二人組みだよ。昨日の自分達の情け

なさに活を入れる為だとさ」
「なるほど、一応俺にも原因があるようなものですし、見かけたら手伝いますよ」

ギルドを後にして、町の外へと二人で向かう。
フォレストゴブリンは名前の通り、木の多い場所で活動をすると言う。
本来はこの町へと流れている川を伝って、山のほうまで行かなければ居ない筈なのだが、最近この付近の森に姿を現すようになったそうだ。

森へと向かい、前を歩くいつもよりやる気に満ちたイクシー。
その力の入り様が、逆になんだか不安に感じてしまうのは何故だろうか……。

## 第二十話「女の敵」

川をさかのぼる様に進み、森林地帯に差し掛かる。
山はまだまだ遠くに見えるが、森だけはここまで広がっているあたりよほど豊かな土地なのだろう。
前を歩くイクシーも少しは落ち着いたのか、いつもの調子を取り戻し軽い雑談を交えながら森を目指す。

「そこで私は言ったであります『それは枕ではなく、私の――』」
「そんな部下がいるのかい？　随分楽しそうな部隊じゃないか」

何故イクシーがあそこまでこの依頼に熱を入れているのかを聞いてみたりもしたのだが、終始言葉を濁すだけに留まっていた。
何か人に言えない事情でもあるのだろうと、そこで追求するのを止める事にした。

「そろそろ森の入り口だ、警戒を怠らないように」
「勿論であります！　奴らは賢いので、囮や奇襲も使ってくるでありますから」

森を進むこと十分。鳥の羽ばたきや草木の揺れる音ひとつにも注意を向けて進んでいたので、思ったよりも遅い進行だが、ようやく魔物の痕跡を見つける事が出来た。

「木がへし折れてるし、ヤブも踏み分けられているみたいだ。どうやら交戦した様だね」
「交戦、でありますか？　他にも討伐に来た人間がいるでありますか？」

「ああ、どうやら朝一番でここに向かった二人組みがいるみたいなんだ。見かけたら手伝ってあげて欲しいと頼まれたんだけど」

そういえばあの時、イクシーは一人で先走っていた所為で聞いていなかった様だ。

そこまで危険な魔物ではないと思うのだが、もっと早く教えておくべきだったか。

「そ、その冒険者はどんな人物なのでありますか？」

「たしかまだ若い女の子二人組みだった筈だよ」

その問いに答えた瞬間、イクシーは見る見る顔色を変え、そして――

「なぜ！　先に言わなかったでありますか！！！！　急いで下さい、早くその女性達をみつけなければ！」

「す、すまない！　分かった、急ごう！」

俺が思っていたよりも危険な相手だったと言う事なのか、必死な形相で声を荒げる。

周りの警戒など無視して魔物の痕跡を追っていくイクシー。神聖術を使っているのか、一足で数メイルもの距離を掛ける。

やがて、木が少なく開けた場所に出た。そしてその中央には、壊れた装備等が散乱していた。

血痕が無いことから、とりあえず怪我を負っては居ないのだろう。と言う事は何処かへ逃げ延びたのだろうか。

それでもだいぶ苦戦を強いられた様だ、早く合流した方がいいだろう。

「あぁ……遅かったであります……」

「いや、血痕も残っていないし、何処かへ逃げたんじゃないのかな？」

「違うであります……奴らが攫ったであります」

攫う？　何故そんな事を。まさか食料として！？

「奴らは、滅多に雌が生まれない種族なんであります。だから、自分達の繁殖には、他の種を使う事が多いであります……」

小さく呟くイクシー。

そして、俺も漸くその言葉の意味を、これまでのイクシーの反応の意味を理解した。

「ごめん、でもまだ諦めるな。巣が何処かにあるはずだし、すぐに”そう”なる訳じゃないだろう？」

「そ、そうであります！　急いで、奴らを探すであります！」

恐らく、奴らにとって他種族の雌、即ち女性は神聖なモノである筈だ。

だとしたら、何か儀式めいた事をする可能性だってある。

ただの希望的観測かもしれないけど、それでもその可能性にかける。

そして、もし儀式を行うとしたら、恐らくは夜。

全ての仲間が巣に戻る頃、即ち日暮れ。

まだ太陽は真上を過ぎたところだ、まだ猶予はあると信じたいが……！

「シュテル殿！　こっちに服の切れ端が落ちているであります！」

イクシーがどうやら女性物の服の切れ端を見つけた様で、そこから更に奴らの足取りを探る。

しかし、それ以外に痕跡らしい物を見つける事が出来ず、手詰まりになってしまった。

木々のざわめきと、風の吹く音と揺れる葉の音。

俺はダメ元で、それを頼ってみようと試す事にした。

身体強化が出来るのなら、きっと……。

目を閉じ、精神を集中する。感覚を研ぎ澄ますように、神聖術を発動。

風の魔術を少しずつ発動し、風を感じ始める。

耳に入ってくるイクシーの小さな呼吸音、自分の鼓動、葉の落ちる音、そして――

「こっちだ。こっちが一番騒がしい気がする」

「これは……五感の強化でありますか？　まさか教団外の人物がその術を使うなんて……」

咄嗟に思いついただけなのだが、どうやらこの使い方は既存の物だったようだ。

と言う事は、これが正しいという可能性が高まったと言う事。

俺はよりいっそう気合を入れて、地面を蹴り進む。

「は、速いであります、少しまってくださいでありますー！」

「一刻を争うかもしれないんだ、だから少し頑張ってくれイクシー！」

「りょ、了解であります！」

葉や枝がまるで鞭の様に身体を打つ、それでも勢いを落とすことなく駆け抜ける。
そして、他の場所よりも木が密集している場所にたどり着く。
まるで天然の要塞だ。木の隙間を埋めるように背の高い草が生い茂り、人が入れそうな箇所にフォレストゴブリンが見張りのつもりなのか、二匹立っている。

まるで、人が全身を殴られてたんこぶが全身に出来たしまったかの様な醜悪な姿をしている。
肌の色は保護色なのか、森の木々と同じように薄い緑と濃い緑が交じり合う迷彩柄の様だ。

「奴らで間違いないであります！　今すぐ助けに行くであります！」
「待ってくれイクシー。奴らは頭がいいんだろう？　人質にとられる可能性だってある。ここは外に誘き出して、数を減らしてから突入しよう」

作戦に納得したイクシーが、俺と別れて入り口に近い場所へと移動して隠れる。
後は俺がここで騒ぎを起こすだけだ。

俺はウィンドスレイを発動し、見張りの一匹の首を落とす。
もう一匹は隣で起きた惨状に気が付いていない様子だったが、首をなくした相方が音を立て倒れた事で、ようやく敵襲だと気が付いたようだ。
何やら聞きなれない言葉のような鳴き声を上げ、巣の中へと入っていく。
すると、すぐさま何匹か纏まって巣の入り口から現れた。

狭い入り口に何匹も密集している為、少々動きが鈍い。

そのモタモタしてる集団に向かい、また魔術を放つ。
奴らからしたら、突然目に見えない何かに仲間が切り裂かれている様に見えるだろう。
やがて恐慌状態に陥ったのか、デタラメに手に持つ棍棒を振り回し始める。

「ここらが潮時か」
そう呟き、茂みから姿を現す。すると奴らは襲撃の正体が俺だと分かったのか、鬼気迫る様相で向かってくる。
周りが見えていないかの様に、棍棒を振り回すゴブリン達。
その隙にイクシーは巣へと侵入するのが見える。
恐らく中にはまだ残党が残っているだろうが、イクシーの実力なら心配はないだろう。
とは言え、俺もすぐさま目の前の相手を片付けて合流するべきだろう。

逃走から一転、振り向き様の一撃で先頭の一匹を両断し、そのまま急停止でモタついている二匹目も倒す。
残りの四匹はやっと冷静になったのか、目の前で倒される仲間を見て踵を反す。
それでも、背を見せ逃げる相手を倒すのは簡単だった。

全てのフォレストゴブリンが倒れたのを確認して、急ぎ合流しようと剣を収める。
しかし、駆け出そうとしたその瞬間、背後からの絶叫。

振り返りざまに相手の首を落とす。どうやら致命傷には至っていなかった一匹が、死んだふりをして奇襲をかけてきた様だ。
「たしかに頭はいいかもしれないけど、奇襲で声あげたら意味ないだろ」

頭が良いと言われているが、あくまで魔物の中ではって事だった様だ。

ん、アレ？　今俺抜刀で攻撃したな……バスタードソードでも出来る物なのか？

その疑問は一先ず保留にしておこう。今は巣へと向かうのが先決だ。

巣の前まで来ると、中からゴブリンの断末魔が聞こえてくる。恐らくイクシーが中で奮闘しているのだろう。

俺もすぐさま中へと入る。

中は思っていたよりも広く、木が道になるように切り倒され、建物の中の様になっている。

その通路に転がる死体を辿る様にしてイクシーの足取りを追い、その姿を発見した。

「イクシー、こっちは終わったよ。あとは彼女達を見つければ……」

「そ、それがであります。どうやら奥にいるようでありますが、あいつらを倒さねば通れないようであります」

イクシーの前に立ち塞がる五匹のゴブリン。しかし、その内の一匹だけが異質な姿をしていた。

「チーフゴブリン。リーダー格で、人から奪った鎧で身を固める厄介な相手であります。それによりによってフルプレートアーマーだ

なんて……」

一匹だけ、錆が浮かぶ全身金属鎧で武装し、その手には変色した斧が握られている。

たしかにあの相手ではイクシーの戦い方じゃ辛いだろう。

「イクシー、一瞬だけ奴らを怯ませるから、その隙に向こうへ行くんだ」

「だ、大丈夫でありますか？　他のゴブリンも他のゴブリンより強いみたいであります」

たしかに、他の四匹も皮鎧や折れた剣等と言った装備で身を固めているが――

「この程度の相手に俺が遅れを取るわけがないだろう？　何も考えずに、先へ行くんだ」

「わかったであります！」

いつもより気合を入れて魔素を取り込む。

「１２３で魔術を発動させるから、いいね？」

いつの間にか、殺傷能力までついたウィンドフレア。それを全力で放てば……。

「１、２、３！」

まるで、空間が爆発したような強い衝撃がゴブリン達を襲う。

その余波はこちらまで及び、思わずたたらを踏んでしまう。それでもイクシーは足を止めず、無事やつらの向こうへと駆け抜ける事が出来たようだ。

吹き飛ばされた五匹の内、起き上がったのは一匹だけ。そう、フ

ルプレートアーマーのアイツだ。
一瞬何が起きたのか分からなかったのだろう。起き上がり、自分の足元を見回している。

足元に散乱した緑の肉片と暗緑色の血に、ようやく自分達が攻撃されたのだと理解したのか、斧を両手に襲い掛かってくる。
さすがに重量のある鎧を着こなすだけはあるのか、その豪腕で振るわれた斧は地面を深く抉り、避けた俺の脚へと土つぶてが勢いよくぶつかる。
そんな群の親玉でも、勝負は一瞬でついてしまった。

大振りの攻撃故に生まれる隙。そこへ駆け寄り、蹴りで相手を転倒させる。
いくら着こなしているとは言え、元は人間用の物だ。バランスを崩せば簡単に体勢を崩してしまう。
起き上がろうとしているその動く鎧に、全力で剣を突き立てる。

錆びた鎧は当然、俺の剣に鎧としての使命を全うすることが出来ずに穴を開けてしまい、守るべき身体に刃を届かせる。
引き抜いた鎧の穴からは、ごぼごぼと湿った鈍い音が聞こえてくる。
少し残酷だとは思うのだが、先ほどの様な事にならないようにと改めて首を落とす。
これで、完全に倒す事が出来た筈だ。

「ひ、ひぃ！　あ、あの時の……」
「も、もう倒れてる相手なのに……」

一段落がつき、息を整えている所に通路の奥から届く声。
イクシーは無事二人を見つけたようだ。

「二人とも無事発見したであります！」
「おかえり、君達も無事で何よりだ」

なるべく恐がられない様にと出来るだけ穏やかな笑顔を向ける。
が、逆に俺のほうが顔をすぐさま背ける。
一瞬見えてしまった二人の姿は、とても人様にお見せ出来るような状態ではなかった。
そういえば、服や装備が道で捨てられていたんだった。

すぐに自分のリュックを持ってきて、中に入っている折り畳みのテントの布を切り裂く。

「イクシー、これを二人に」
「あ、そうでありますね、ありがとうであります」

振り返らないようにして、二人分の切り裂いた布を手渡す。
俺は先に巣から出て、皆が出てくるのを待っていた。

「あー、そういえばさっきのだって見方次第で死体を切り裂く極悪人に見えるよなぁ」

あの時一瞬聞こえて言葉を思い出し、また一人落ち込む俺であった。

## 第二十話「女の敵」（後書き）

次回は少し時間を戻して、その時のエピソードを閑話として掲載します。
本編の方はもう少し時間がかかってしまいそうです。

申し訳有りません。

## 閑話「苺狩り」（前書き）

時系列的には五話と六話の間の話になります。

## 閑話「苺狩り」

「と言う訳で、今日は遠くまで行く依頼は受けられそうに無いんだよ」

ギルドの待合所で待っていた三人に、あらかじめ考えておいた嘘の理由を話す。

「そっか～。一応犯罪者捕縛って事になるんだもんね、色々と大変そう～」

「でも驚いたわ。あの人結構有名人なのよ？　表向きは上位陣のサポートや幹部連中の世話係って事になってるんだけど……」

「掃除屋、シャドウエッジ、宣告者とも呼ばれている。使えない人間を左遷したり、犯罪者の始末まで担当してるって噂もある人」

今回の呼び出しは、「あの一連の騒動の後始末や手続きで呼ばれた」と言う事にしたのだ。そして同時に、明日以降にも取り調べ等があるから日帰りの依頼しか受けられない、と。

「それじゃあ仕方ないね～。今日は近くの丘にいこうかな～」

「だったら丁度良い依頼があったわ、ちょっと待ってて」

ううむ、スフィアに悪いことしたなぁ。来月こそ何処か見晴らしの良い高所に付き合ってあげたいんだけど。

「これよこれ。スフィアの言ってる丘ってガルアーク街道にある場所でしょ？　だったらこの”カラーベリーの採取”なんてどうかしら？　これ採取量の指定が無いから、時間をかけてたっぷり収穫して追加報酬を大量に頂くって訳！」

サラがギルドカードに依頼データの一つをコピーして持ってきた。
彼女の言っているカラーベリーと言うのは野生の果物で、木苺の様な見た目をしている。ただ驚くことに、生えているか環境や土壌次第で果実の色が変化し、中には毒性を持つものまで有るという、結構デンジャラスな果物なのだ。

「あ、それ俺は賛成。食べてみたかったんだよねソレ。それに希少種を見つければ高値で買い取ってもらえるし」
「私もそれでいい。黒いのが好物。自分の分も採取出来るし二度おいしい」

このベリー。実は七色に輝く果実や、黄金に輝く果実など希少な物も隠れていて、うまく見つければ一攫千金とまでは行かなくても、結構まとまったお金が手に入るのだ。ただ俺の場合は自分で食べるけど。

「どう？　二人も乗り気みたいだし採取場所もあの丘のすぐ近くよ」
「そうだね～！　じゃあこの依頼にしよっか～」

「三人共、この籠はなんでしょうか」
「何って、カラーベリーの採取用の籠に決まっているじゃない」
俺に手渡されたのは、子供ならすっぽりと入ってしまいそうな巨大な籠。
トウのような植物で編まれたソレは、紐も一緒に縫い付けられておりリュックの様に背負うことも出来る新設設計だ。
ただ、その籠が俺の目の前に四つ置かれているのだ。
「だって～シュテル力持ちじゃな～い！　今は空っぽだけど、これが一杯になるまで採るつもりなんだもん」
「私は空でも背負えない」
「ああ、ミステじゃ背負っても引きずゲフゥ」
器用に鎧で守られてない首を狙うとか……。
籠を背負い、さすがに残り三つを同時に運ぶのは無理だと言う事で大人しく台車を借りる事にした。
重さ的には平気だけど、さすがにこの大きさを四つ持つには腕がもう二本は必要だ。
街道を進むこと三十分。先ほどまでは遠くに街の畑なども見えていたのだが、今は草原が広がるばかりだ。
そういえば、この草原の先には何があるんだろう？　山が見える方は当然山に付くんだろうけど。
「そういえば、シュテルって首都の近くの集落出身なんだっけ？」
「あら、そうなの？　その割には随分と垢抜けてるわね」

あ～マズいな。なんとか話題を逸らさないと。

「シュテルは繁殖期のラット生息地を一人でブラブラ歩いてたんだってさ～。そこを行商人の人に拾われたんだ～」

「命知らずな。と言う事は何匹かのラットが犠牲になったと言う事？」

「そうみたいだね～凄い上質な尻尾を何本ももってたんだよ～」

ヨザークさんから聞いたであろう事を披露しているスフィア。言われて困る事じゃないけど、これ以上話題が続くのは少し困ってしまうなぁ。

「可愛そうなラット達……我が同胞の恨みを受けてみろ！」

「へ？」

突然振り向き、台車を押している俺へと一直線に向かってくるミステ。というか我が同胞ってなんだ！？

「あ～ミステはラット系の魔物を大切にしてるもんね～。一応ご先祖様は一緒らしいけどさすがにその気持ちはわっかんないや～」

「私だって、普通にバニィ系のお肉食べるわよ？　魔物は魔物だし、獣人とは別だと思うんだけど」

そんなこんなで採取地へ到着した俺達。

さっきの騒ぎのお陰で話題が流れたので良しとしておこう。

ただちょっと足が痛い。脛ばかり蹴ってくるとか地味にやらしい

ぞミステ！

「それじゃあ各自分かれて採取開始よ！　この辺りはピグルも出るから、一応警戒はしておく事」

「了解～！　よ～し、ゴールドとレインボーのベリー探すぞー！」

「私はブラックだけ採る事にする。シュシュもブラックだけ取るんだ」

「いや、一応依頼ではブルーとレッドも必要だって書いてたから満遍なく採ろうよ皆……」

明らかに私情至上主義な二人に思わず苦言を呈す。

周りを見渡すと、膝より少し下くらいの高さの茂みがあちらこちらに見える。これがカラーベリーの木なのだ。

近くで見ると、青や赤、黒や白、黄色や緑、中には半々に分かれた色やマーブル模様の実まで木に生っている。まるでクリスマスツリーの飾りのようで綺麗だ。

ただ気をつけなければいけないのが、普通の赤よりもさらに深い赤。通称クリムゾンベリーだ。

これは強い毒性ではないものの、食べた人間の消化器官を麻痺させてしまうと言う厄介な毒を持っているのだ。

赤いベリーは一番甘く需要が高いだけに、クリムゾンベリーには気をつけなければならない。

でも、なんだか宝探しの様で楽しくなってきたぞ。数を集めるのも大切だけど、是非虹色や黄金のベリーも見つけたい。

探し始めてどれくらいの時間が経っただろう？　既に日は真上を過ぎ、そろそろ夕方になろうとしている。

俺はバランスよく色んな色を採取している所為か皆よりも早く籠が満杯になり、今は虹色と黄金を探している。

夕方になると色がハッキリとわからなくなるので、出来ればそれまでに採取を終わらせたかったんだけど。

「あった～！！！！　虹色だよ～！！！！」

「嘘！？　本当に見つけたの！？」

どうやら先にスフィアに見つけられて様だ。これじゃあ食べるのは諦めるしかないかなぁ。

「おーいミステ！　スフィアも虹色見つけたみたいだし、そろそろ夕方になるし一旦切り上げて集まろう」

遠くの茂みの前にしゃがみ込むミステに声をかけたのだが、少し肩を震わせるだけで返事が無い。

「どうしたんだミステ。そろそろ集まろうって……」

「――――ごめん」

近づいて見た所、口の周りを赤黒い果汁でベトベトにしているミステが恥ずかしそうにこちらを見上げている。
そして、籠の中身は空っぽだった。

「あーもう、とりあえず口拭いて」
持っていたタオルでミステの口の周りを拭いてやる。背が小さい所為もあってまるで小さい子供の様だ。

「結局全部自分で食べたのか？」
「一応食べつつ籠に入れつつ半々だった、けど途中で黒が見つからなくなった。それで仕方なく食べた。後悔はしていない」
「まぁ他三人でこれだけ採ったから依頼は達成出来るけど、これじゃあ報酬を四等分には出来ないぞ？」

さすがに、一つも取っていない様じゃ不公平になってしまう。今から夕方までに籠を少しでも埋める事が出来れば……。

「それについては抜かりない。本当はこっそり持ち帰るつもりだったけど、こうなってしまっては仕方ない。この子達に犠牲になってもらう」

そう言って自分のバッグから小さなビンを取り出したミステ。そしてその中に入っていたのは。

「これって一体……銀色、いや白銀？　これどうしたんだミステ」
「伊達に学者ギルドに所属してる訳じゃない。白銀種等の金属色は成長すると濁り黒になる。黒を重点的に探せば自ずと集まるのだ」
「だったら最初から皆に教えてくれればよかったじゃないか。そうすればもっと沢山取れたかもしれないのに」
「そう言う訳にもいかない。そうなると私の好きな黒が出来なくな

ってしまうし値崩れだって起きかねない。希少な物は希少だからこそ価値があるのだ。それにその木が子孫を残せなくなったら……」

遺伝の関係だろうか？　希少な種を出す木から生まれた実はまた希少な種を生む木になる可能性とか。

「今のは忘れて。とにかく、この事は秘密だシュシュ。これだけあれば籠の一つや二つの価値はあるはず」

「了解、じゃあ皆の所に行こうか」

「ええ～！？　折角今日の一番のＭＶＰになれたと思ったのに～！」

「ふふ、さすがミステね。これなら報酬もたっぷり貰えるわ」

「俺だって頑張ったんだぞ？　結局籠満杯に出来たの俺だけじゃないか」

日が暮れ始めたので、皆採取を終えてすぐ近くにある丘。スフィアが行きたいと言っていた丘にやってきた。

そこまで高くはないにしても、先ほどまで採取していた辺りを一望出来るくらいには景色が良い。

丘の頂上には二本の木が生えており、見たところ照葉樹の様だ。

四人で木の根元に腰掛け、お互いの成果を確認し合う。

「でも、考えて見たら白銀とか金銀って余り食べたくなる色じゃないわよねぇ。なんだか金属の味がしそう」

「もったいないけど、一個食べて見る～？　ちょっと怖いけど」

何、なら！

「はい！　俺、俺が食べる！　実は食べて見たかったんだ！」

実は採取の最中、初めて見る色はどれも食べて見たんだ。当然クリムゾンは見つけても回避したけど。

「じゃあシュテルに食べて貰いましょ。はい、あ～ん」

「あ～ん」

『あ～ん』なんて若干恥ずかしいけど、今はそれよりも未知の食材への好奇心の方が上だ。

「むぐむぐむぐ……」

若干他の色より歯ごたえがあり、プチプチと言うよりはブチブチといった様な強い破裂するような食感。そして味の方だが――

「これ果物だろ？　なんで魚卵の味がするんだよ……」

思わず「ウエ～」と表情を歪めてしまう。

別に魚卵そのものは好きだし、食材としてはポピュラーな類ではある。それでも頭で想像していた物と余りにかけ離れている為不味く感じてしまう。

「魚卵って、魚の卵って事～？　なんでそんな味する物が高く買い取られるの？」

「これは薬師ギルドで需要がある薬の材料。元々おいしいものじゃないのだ、金属色のベリー」

「ミステ、貴方分かってたなら止めなさいよ……あっ、なる程。食べるのが好きなシュテルならこうなるって分かってたのね？」

お……おのれミステ！

## 閑話「野営中」（前書き）

続きです。

## 閑話「野営中」

丘の上にある二本の木を利用して、大きめのテントを張る。砕月が出るとしたら深夜を過ぎた辺りなので、それまで休憩する為だ。

この場所なら明日の夕方までにギルドに戻る事も容易だし、ここで一晩明かしても大丈夫だと言う事で台車を借りる時に一緒に借りてきたのだ。

「じゃあ私とミステは少し休ませてもらうわね。たぶん三時間もすれば私は目を覚ますと思うけど、この子は一度寝たら暫く起きないから」

「出来れば砕月が出る頃には起こして。たとえどんな手段を使ってでもだ……！」

「じゃあ耳をかじってでも起こしてあげよう。安心して眠りたまえ！」

少々意地悪をして見る。これで緊張してよく眠れなくなるだろう。

たまにはこちらから攻勢に出るのも大切だ！

「責任取ってもらうけどね。じゃあおやすみ」

「シュテルも中々大胆ね？　女の子を傷物にする宣言なんて」

ぐっ、やっぱり駄目かー。

テントとセットになっていた野営道具一式の中に、調理用の鍋や金属製の三脚や網なども用意されていた。

今後の依頼でも必要になってくるかもしれないし、近い内に自分用のを一式揃えておかないといけないなぁ。

「じゃあ俺は晩御飯の準備をするよ。この辺りにはピグルもいるらしいし、なんとかなるだろ？」
「そうだね～。私は野草でも探そうかな？　あ、でも二人を放っておく訳にもいかないし」
「だったらこの辺りで生えてる場所に心当たりはないかい？　場所さえ分かれば取って来れると思うよ」
「なら採取地の反対側かな～。野生種だけどキャロンやダイングレイブも取れるよ。ただそれを狙ってピグルも来るから気をつけてね」

ピグルが出るのならむしろ好都合だ。ちなみにダイングレイブと言うのはキャロンと同じ根菜類で、見た目も味もダイコンと同じだ。調味料はスフィアが持参して来ていたし、根菜とピグルの肉で鍋にでもしようか。

無事に野菜と肉を手に入れた俺は、空っぽだったミステの籠を利用してたっぷり持ち帰る事が出来た。
後は調理を開始するだけだ。

「あ、おかえり～。随分いっぱいとってきたね？　食べきれるかな～？」
「俺が一杯食べるから安心してくれー。とりあえず場所あけてー」

折りたたみ式のテーブルを展開して、その脇に籠を置く。あとは調理をするだけなのだが……。

「まな板はあるけど、包丁が無いじゃないか。どうすればいい？」

「私の剣使っていいよ？　小さいしピッタリじゃない？」

それで良いのかスフィア……。

若干料理に対して失礼なような気もするが、サバイバルでそんな事は言ってられないし、野営でそんな事を気にしていられない。

という訳でスフィアのダガーを借りる事にした。

「シュテルって料理出来たんだね～。随分手際もいいし、故郷で料理屋でもしてたの？」

「いやー？　ただ『好きな物こそ上手なれ』精神かな？　実際食べるのも作るのも大好きだし」

「何かの格言？　凄い納得だよ～。私も絵が大好きだし、上達も早かったし」

スフィアと雑談をしながらも、手の動きを止めることなく淀みなく調理を進めていく。

後は鍋に油を引いて、肉を炒めつつ少しずつ野菜を加えて炒めていくだけだ。

水は予め持ってきているし、あとはスフィアが持参した調味料で味付けするだけなのだが……。

「あー惜しい！　味噌があれば完全に豚汁なのになぁ！」

「味噌って何～？　素材か何か？」

「いやぁ調味料なんだけどさ、ほら、”オボロ山の里”のスープに

使われていた奴。あそこのは使い方が間違っていたけど、キチンと使えばこの材料にすっごく良く合うんだよ」

そういえば、あれからあの店に行ってなかった。今度また行って話しを聞いてみたい。

調理開始から二十分弱、あとは火を弱めて煮込むだけで完成だ。結局調味料は塩と乾燥させたハーブを使い、塩風味の豚汁のような物になった。

二人がテントに入ってから二時間弱と言った所だが、一応声をかけてみようか。

「随分いい匂いさせてるじゃない、お陰で目が覚めちゃったわ」

「今度こそ、皆と一緒にご飯を食べる……」

そう思った矢先、二人がテントから出てきた。

サラは元々仮眠のつもりだった為かシャキっとした姿勢だが、ミステはまるで中々起きない子供のように、目を擦りながらフラフラと出てくる。

「おはよう二人とも。まだ砕月は出てないけど、ご飯が出来たから起こそうと思った所だよ」

「鍋料理みたいね。キャロンが入ってるみたいだけど、この近くに生えていたものね、だから入ってるのは当然よね」

「早く食べさせろ……食べればきっと目が覚めるから……」

器に皆の分をとりわけ、調理用とは別に起こした大き目の焚き火を囲み座る。

そろそろ星が出てきているが、焚き火の明かりの所為かハッキリと見えない。それでも本格的に暗くなれば、この程度の明かりを物ともしない大量の星で空が覆われる訳なんだけど。

「おいしい～！　別に変わった材料入れてるわけじゃないよね～？」
「あら、これってシュテルが作ったの？　スフィアが作るにしては美味しいと思ったけど、貴方食べるだけじゃなくて作るのも得意なのね」

料理の感想を口々に言う二人。鮮度の良い素材を使っているのだし不味くなる事は無いと思ったけど、どうやら二人には好評のようだ。
そして、いつも俺のする事に様々な反応を示すミステはと言うと――。

「むぐむぐむぐ……ずずず……もぐもぐもぐ。何見てるの、早くおかわり頂戴」

一心不乱に器の中身を口に流し込み、ズイっと器を寄越してくるミステ。
この分ならミステにも好評のようだ。

夕食を摂り終わり、器をミステの魔術で洗い片付ける。
魔術師ギルドのイーサさんも使っていた、あの小さな水流を起こす魔術だ。ここまで生活に魔術が密着していると、やはり身近な物の技術の発展は遅れてしまうのかもしれない。

「そういえば、最近シュシュも魔術のバリエーションが増えたね。ちょっと私に見せてみるのだ」

「そういえば、なんだかんだでこのメンバーの内三人も風属性がいるのよね。ミステの霧と相性がいいのよねー私たちって」
「え、スフィアも風の魔術使うんだ？　俺まだ見たことないんだけど」

サラが矢に風を纏わせて使うのは何度も見てきたけど、スフィアが魔術を使う所なんて見たことが無い。というか初耳だ。

「あれ～？　私いつも使ってるよ？　ほら」

すると、スフィアがいつものように一瞬で数十メートルの距離を移動する。一見するとただ走っているようにしか見えないんだけど、たしかに一歩一歩の距離が明らかに長い。
というか、これって俺が目指していた風の魔術による移動の効率化の最終形なんじゃないのか？

「凄いよスフィア！　俺その動きを目指していたんだよ、いつも練習してるけどうまくいかなくて、それで今みたいに滑ってるんだけど」
「え～？　これ簡単だよ？　踏み込んだらその足の裏を風で押してるだけだし」

などと簡単そうに言う。でも実際にはそんな早いペースで魔術のオンオフなんて切り替えられそうにないんだけど。

「スフィアは特別操作が上手い。魔力量さえ多ければ魔術師としてもやっていける程。シュシュも今言われた事を意識して練習すれば出来ると思う」
「私は無理ね。足に発動具でもつければ出来なくも無いけど、スフィアみたいに自由に動けそうにないわ」

ううむ、まさかこんな身近に目指すべき最終形を使いこなす人物が居たとは……。

## 閑話「野営中」（後書き）

次回はシュテルがいない間の街の仲間達のエピソードになります。
本編はもう少しかかります。

また、閑話等のリクエストはいつでも募集していますので、どうぞお気軽にコメントして貰えると嬉しいです。

## 閑話「彼の居ないガルヴェウス前編」（前書き）

今回はレスト視点となります

## 閑話「彼の居ないガルヴェウス前編」

「ふう、今日はあの夢を見なかったみたいね」

早朝、ベッドの上で目を覚ました私は、気持ちの良い朝を迎える事が出来た。

それはきっと、毎月決まって特定の日に見る夢を今日は見なかったからです。

今日は月に一度の雛鳥の学び舎の実地訓練の日。そして私はその引率の依頼を受けているのです。

先月出会った彼に、今日も仕事を依頼出来ないかと期待していた所為でしょうか？　あの夢を見なかったのは。

今日は初等部の子達では無く中等部の生徒の引率ですし、以前よりも難易度の高い依頼を受ける事になると思うのだけど、それでもシュテルさんならきっと快諾してくれると思います。

「少し、おめかしして行こうかしら……って、何言ってるのよ私」

いけないいけない、少し浮つき過ぎたみたい。

今から生徒達の安全を預かると言うのに。

改めて自分に活を入れる意味も込めて、軽く両頬をパチンと打って、気合を入れなおす。

雛鳥の学び舎へと着いた私は、今日の実地訓練の参加希望生徒と合流しました。

今日は一人だけですが、中等部にもなれば実地訓練よりも、よりいっそう知識を増やす方に力を費やす子が多いですから、仕方ないのかもしれません。

それでも今日の参加者は中等部の十四歳になる女の子。

座学の成績や、魔術の実技テストの成績はお世辞にも良いとは言えないけれど、模擬戦においては同年代の誰よりも強いという変り種です。

変り種、だなんて言うと失礼かもしれないけれど、実際彼女の戦い方は一部教師の間や生徒内でも異質とされ、しばしば奇異の目を向けられているとか。

「リーインちゃん、今日は宜しくね」

「……よろしくお願いします」

少し機嫌が悪いのか、それとも私を警戒しているのか、少々つっけんどんな態度ですが、きっとこれまでの環境の所為なのでしょう。

彼女、リーインちゃんは希少属性持ちの特徴である、一般には見られない髪と瞳の色をしています。

まるで暗闇で静かに揺れる炎の様に、グラデーションがかった紫の長い髪と瞳。

彼女は闇と炎の特性を持つ、紫炎属性を持っているのです。

入学当初こそ、その容姿や希少な属性から周囲の目を引きましたが、彼女の戦い方や考え方が独特だったので、次第に馬鹿にされたり、距離を置かれたりしていたそうです。

「今日は知り合いの冒険者さんに護衛を頼もうと思ってるの。ここから少し遠いけど、大丈夫？」

「問題ないです。冒険者ギルドには将来入るつもりだし、好都合だよ」
「あら、魔術師ギルド志望じゃないのね？」
「うん。どうせ私の戦い方じゃ入っても居心地が悪そうだし」
う～ん、たしかに話を聞く限りじゃそうかもしれませんね。

ゆっくりと話をしながら歩き、目的地へと到着しました。
相変わらず冒険者ギルドの建物は、規模だけなら何処のギルドにも負けていませんし、それに見合った量の冒険者の皆さんが今も次々に訪れています。

「こんなに近くまで、初めて来た……！」
「ふふ、それじゃあ入りましょうか」
「うん！」

道中のコミュニケーションが項を成したのでしょうか、先ほどよりも多少打ち解けることが出来たようです。
それに、今の反応も歳相応といった感じです。やはり冒険者志望と言うだけはありますね、あんなに嬉しそうに駆け出すなんて。

「申し訳ありません、シュテル様は現在任務の為ガルヴェウスから離れているのです。もし宜しければ手の空いている冒険者をご紹介致しますが」
「あ、そうなんですか……いえ、大丈夫です。自分で声をかけてみますので」

迂闊でした……迂闊すぎです。
そもそもシュテルさんが今日居るとは限らないじゃないですか。
予めアポイントを取って置くべきでした。
ただ、なんとなく連絡するのが躊躇われるというか、気恥ずかしいような……。
完全に私の落ち度ですね……。

「レスト先生、知り合いの冒険者が不在だったみたいだね。どうするの？」
「どうしようかしら、少し手の空いていそうな方に声をかけてみましょうか」

ギルドウィンドウ付近にいる、まだ依頼を決めかねている人達に声を掛けようと近づく。
その時です、聞きなれた名前が耳に入ってきたのは。

「シュテルの奴、朝早く行くなら予め言っとけってーの！」
「あはは～シュテルだって悪気はないと思うよ～？　きっとアルヴァスが朝無理して起きたりしないようにって事じゃないかな～？」

あどけなさの残るキャトネイルの女性と、シュテルさんと同じか、少し年下と言った所のヒュマリアの男性が、シュテルさんの事について話しているようでした。
彼の知り合いならば、きっと悪い人ではないと思うのですが、声をかけてみてもいい物でしょうか？

「うん？　お姉さんどうかしたの～？　もしかして邪魔だった？」

つい、ジっと見つめていてしまった様です。
ウィンドウを見る邪魔になってしまったと思ったのか、キャトネイルの女性が謝罪して来ます。

「いえ、ただ知人の名前が聞こえてきたので、もしかしてお知りかなーと」
「あ、もしかしてお姉さんシュテルの知り合いなの～？　シュテルは今日の早朝に長期任務に出ちゃったんだ～」

なるほど、長期任務についてしまったのですか……。
暫くは会えないのでしょうか？　それなら、私にも一言くらい…って、そういえば殆ど私と顔を会わせていませんでしたねシュテルさん。
もう少し、こちらから連絡を取るべきでした。

「先生、この人達にお願いしてみたらいいんじゃない？」

「そうですね。あの、ちょっと宜しいですか？」
「なになに？　もしかして仕事の依頼かな～？」

二人に、ここに来た目的や護衛依頼の事を説明しました。
そして、シュテルさんが以前受けてくれた事なども。

「そっか～、でも私は今日先約があるんだ～。ねぇ、アルヴァスはどう？　さっきから黙っちゃって」
「んうぇ！？　あ、いやいいぞ。俺は全然大丈夫だ！　ええと……」

先ほどから終始無言を貫いていた男性。この人も剣士の様ですが、少し焦っているように見えます。

「申し送れました、私は魔術師ギルド所属のレストと言います。アルヴァスさん、でしたか？　宜しければ護衛依頼を引き受けて貰いたいのですが」
「お、俺でよければ喜んで！　ええと、その護衛っていうのは貴方と……」
「私です。リーインと言います」

護衛依頼を引き受けてもらえる事となり、そこでキャトネイルの女性、スフィアさんと別れ、アルヴァスさんと共に引き受ける依頼を探しています。
それにしても、先ほどから気になっていたのですが、スフィアさんはシュテルさんとどんな関係だったのでしょうか……？
随分と親しそうな感じがしました。

「あ、あの！　これなんか丁度いいんじゃないか？　グリーンスネッグの駆除、Eランク依頼だ」

「え？　あ、はい。これなら丁度いいと思います」

実は私、シュテルさんとの依頼の後、少し自分の腕を上げる為に引率以外の依頼も積極的に受けてランクを上げていたのです。
以前なら少し不安でしたが、今の私はＤ－ランクです。格下の魔物になんて遅れは取りません。

「リーインちゃんも大丈夫？　蛇の魔物なんだけど」
「大丈夫、これなら楽勝です」
「楽勝って、Ｅランクの中じゃ結構強い方だぜ穣ちゃん」

不敵な笑みを浮かべ、愛用の杖を撫でる彼女。
果たして今回の実地訓練はどうなるのでしょう……。

## 閑話「彼の居ないガルヴェウス中編」

朝のギルドは人が多い。
一日の初めに、まずはギルドウィンドウで新規の依頼をチェックするって言うのが総じて皆の日課だからだ。

私も今日も見に来たんだけど、毎朝通うとなると、やっぱりすぐ近くの鞘に住んでる皆が少し羨ましい気もする。
でも、そこまで不便じゃないんだし、何よりもお金が勿体無いもん。
と言う訳で、今日も私は実家からギルドへと通ってるんだ。

アルヴァスも例に漏れずギルドに顔を出してたけど、起きた時にはもうシュテルが居ないことが少し気に入らない？　ううん、見送りしたかったんだと思うんだけど、とにかく不満そうだった。
随分仲がいいみたい。

それにしても、長期依頼って事はあらかじめ準備が必要だと思うんだけど、もしかして指名依頼だったのかな？
シュテルは凄く強いし、きっと今注目されているんだろうな～。

ギルドでシュテルの知り合いっていうお姉さん、レストさんに会ったんだけど、なんだかとても綺麗で、ほんわかした人だった。
やっぱり、シュテルは天然の女たらしかも？　なんてちょっと失礼な事考えちゃったけど、実際シュテルはもう少し、自分の言葉が相手にどう伝わるか考えたほうが良いと思うんだよね。
きっとこの先も苦労しそうだね。

そんな事を考えながら、いつの間にか鞘へと向かっていた私の足。

「あら、スフィアじゃない。珍しいわね鞘まで迎えに来るなんて」

「あ、おはよ～サラ。ちょっと考え事しながらぶらぶらしてたんだ～」

サラは、私が冒険者になってすぐに知り合ったバニテイルの女の子。

私より一つ年上の二十歳なんだけど、すごく大人っぽい。

それに、私じゃ出来ないようなセクシーな格好をいつもしている。

前衛の私と相性の良い後衛の弓使いの彼女とは、ほとんど毎日一緒に依頼を受けている。

「あ、そうそう。シュテルってば長期依頼で暫く街を留守にするんだって～。だから暫くは背伸びした依頼は受けられないよ～」

「あらそうなの？　じゃあ彼の分までアルヴァスにかんばって貰おうかしら？　彼は居るんでしょ？」

「ううん、今日はアルヴァスは別の依頼受けたんだ～。シュテルの知り合いの魔術師さんと、引率されてる学び舎の生徒さんの護衛」

「へぇ、という事はミステの後輩に当たるわけね」

私も小さい頃は学び舎に通おうかとも思ったんだけど、それよりもお父さんについて行ってあちこち見て回るほうが勉強になると思ったんだよね。

実際、魔術師志望でもない限り、学び舎に通っても身になる物が少ないしね。

「それじゃ、ミステを迎えに行きましょ」

「おっけ～、行こ～」

朝のガルヴェウスは、勿論ギルド以外だって人で溢れ返っている。
今日最初の依頼を受けて外に向かう戦闘ギルドの人達や、街の外に向かう行商人の馬車、それに一般の人達だって畑に向かうんだもん。

そんな人込みとぶつからない様に、少し遠回りになる道を通りながら、私達は連盟本部の近くにある住宅街へと向かう。
ミステも私と同じで実家暮らしなんだけど、今は身よりもなく一人暮らしなんだ。
本人はそんな素振りは見せないけれど、本当は早くＣ－ランクになって、冒険者達の住宅街に自分の家を持って引越したいんだと思う。
なんだかんだ言って寂しがりやだし、私達以外の人と一緒に居る所も殆ど見たことない。
最近はシュテルやアルヴァスって言う、仲間というか、遊び相手が出来てとても楽しそうだけどね。
暫く街に戻ってこないって知ったら、きっと寂しがるだろうな～……口には絶対出さないだろうけど。

案の定、ミステにその事を話すと、一瞬だけガッカリした様な表情をしたけど、すぐにいつも通りのポーカーフェイスに戻って一言。

「つまらない。折角今日も悪戯してやろうと思ったのに」
「本当、随分シュテルが気に入ったのねミステ」
「いじりがいがあるだけだよ、別にきにいってなんか……」

う～ん、いじらしいというか、素直じゃないというか。
かわいいな～ミステ。

三人でギルドに戻り、今日の依頼を決める。
今日は三人だけだし、格上の依頼はなしって事なんだけど、最近シュテル達と一緒に行動しているおかげで、私達もかなり戦いに慣れたし、ランクだって上がった。
前までは三人の中じゃ私が一番ランクが上だったんだけど、今では三人揃ってDランクまで上がった。
あと二つ上げれば念願の空家との契約を結べるようになるから、これまでよりも依頼に熱が入るっ！

「そういえば、このメンバーだけで依頼を受けるのって久しぶりね。ちょっと前まではむしろ、言い寄ってくる連中が鬱陶しいくらいだったのに、少し物足りなく感じちゃうわ」
「そうだね～最近はシュテルかアルヴァスが一緒だったもんね～」
「シュシュとアルルンは良い虫よけになった。私も害虫駆除は得意だけど、あれは無理」

今日の依頼を受け、ガルエルム街道を並んで歩く。
最近は余りこっちには来ていなかったけど、今の私達がどれくら

い強くなったのか知る、言わば試金石的な意味もかねてこの街道に来た。
前まではこの街道の敵相手でも少し苦戦したりもしてたけど、今ならきっと……。

「やっぱり少しは成長してるみたいね、私達」
「ほんとほんと～！　すごいよサラ、一発で仕留めちゃった！」

街道から外れ、最近移動してきたランドウルフって言う狼の魔物を討伐するって言う依頼だったんだけど、想像していたよりも数が多くかった。
でも、ミステの魔術でいっぺんに鼻と目を無力化、そこにサラの矢で数を減らし、私のツインダガーで残りを倒す。
この作戦が流れるように決まり、あっという間に片付いちゃった。
ミステの魔術も前よりも的確な範囲に発動出来ていたし、サラだって矢に風を付与するのが随分早くなった。
勿論、私だって前よりも早く動けるし、勿論剣の扱いだって上がった。

前にアルヴァスから聞いた、攻撃を受け流す技術。
それを、両手に持ったダガーのうち一本を使って出来るようになったし、攻撃の仕方だってシュテルに見てもらってたんだもん。

「私の魔術が二人にまで影響が出ないようになって、嬉しい」
「本当そうね、一瞬で消せるようにもなったし、もう前衛泣かしなんて呼ばれないわね」

「それはそれ、気に入らない奴相手には、これまで通り泣かす」
「ミステはあいかわらずだね～」

想像以上に早く終わったから、少し速いけどガルヴェウスまで戻る。
まだ十二時前だし、これならお店が込む前にご飯が食べれそうかな？

街のギルドまで戻って、依頼達成の手続きを済ませる。
ギルドも依頼が終わった人達で込み合う前だったから、あっという間。
休憩所の二人の所に戻ると、そこにはアルヴァスとレストさんまで来ていた。

「あ、アルヴァスも依頼おわったんだね～」
「お、おう。終わった……のか？」

なんだ歯切れが悪いと言うか、納得いってないというか、そんな様子。何かあったのかな～？

「アルヴァスさん、気を落とさないで下さい。失敗は誰にでもあるんですから……」
「あ、いやその……失敗というか、その……」
「どうしたのアルヴァス？　それに生徒の子、リーインちゃんだっけ？　あの子はどうしたの？」

もしかして、護衛失敗して大怪我させちゃったとか？

「俺、一匹グリーンスネッグって魔物を後ろに通しちまったんだよ。

急いで目の前の奴を倒して駆けつけたんだけどよ」
「あの子が先に一人で全部倒してしまったんです。それで、自分が護衛についた意味なんてないんじゃないかって。でもそんな事はないですよ、アルヴァスさん」

グリーンスネッグって、Eランクの中でも一番危険な相手じゃないっけ。
成体にもなれば2メイルを超える大きさにもなるって言うのに……。

「いや、別にそこまで落ちこんでる訳じゃねぇんだ。ただ、あの子の戦い方がな……考えさせられるんだ」
「え、ええと。あの子は特別なんです。そんなに気にしなくてもいいですよ？」
「いや、そうじゃないんだ。あの強さ、まるで……」

むむ、もしかして凄い才能の子だったのかな？
それで自分も負けられないぞ～！　みたいな感じなのかな？

「アルルン、魔術師の中には人智を超えた強者と言うのがたまに現れる。私みたいな変り種だって沢山居る。だからそんなに気にする事はないのだ」
「まぁそうなんだけどよ。何か引っかかるというか、ええと」
「シュテルがいたら、色々アドバイスももらえたかもしれないのにね～」

何気にシュテルは面倒見も良いんだよね。
何か戦いで悩みがあれば、一緒に考えてくれるし解決策だって見つけてきてくれる。
それだけじゃなくて、実際に一緒に訓練したりもしてくれるし、

人に教えるのが上手なんだよね～。

「それだ！　それだスフィア！　あの子の戦い方が、シュテルによく似てたんだよ！」

おお？　じゃあ本当に強い子なんだ！

とりあえず、私達は一緒にご飯を食べる為、皆でギルドを後にした。

## 閑話「彼の居ないガルヴェウス中編」（後書き）

最近コメントして下さる方も増え、とても嬉く思います。
なるべく誤字の無いようにしているのですが、やはりご指摘される様に見付け漏らしもあります。
申し訳ありませんでした。

## 閑話「彼の居ないガルヴェウス後編」

今日の依頼主、レストさんはすげぇ美人で、大人で、なんていうんだ？　包容力っていうのか？

とにかく、俺が今まで会ったことがあるどんな人よりも魅力的だった。

だから、今日の依頼は完璧にこなしてみせる。そう意気込んでいた。

だがしかし――

「へ～！　その子って杖を剣の形に削ってたの？」

「ああ、なんでも、支給された杖を自分で改造したらしいぜ？」

俺は依頼での出来事を簡単に説明する。

あの嬢ちゃんは魔術を使いながらも、その鋭く削られた杖で的確に相手の弱点を貫くと言う戦法を取っていた。

「リーインちゃんは魔術師以外のクラスを含めても、試合形式の授業じゃ敵無しだそうです。それに、どうやらこっそり街を抜け出して魔物を倒してるとか……」

「へぇ、ミステも心当たりがあるんじゃない？」

「私は抜け出したりしていない。堂々と討伐隊に紛れ込んだだけ」

「ふふ、ミステちゃんにも苦労させられたわよ？」

ミステも中々すげぇ事してたんだな……。でも、たしかに魔術師の中には想像できないような戦い方をする奴がいるってのは本当だ。

ミステだってあの霧の魔術で広範囲に攻撃出来るし、さっきのあの嬢ちゃんだって凄かった。
何より、この街には帝国最強の剣士を打ち破った魔術師だっているんだしな。たしか二つ名持ちだった筈だが、忘れちまった。

「それで、シュテルさんと戦い方が似ていると言うのはどう言うことなんですか？」
「レストさんはシュテルが魔術を習う前に一緒に仕事をしたんだよね～？　最近シュテルってば、攻撃の合い間に魔術を使ったりして凄いんだよ～」
そう、シュテルも最近は魔術による牽制や、相手への追い討ち、それに剣による攻撃とほぼ同時に相手の近くに衝撃波を発生させる魔術まで使っている。
俺は魔術の訓練を余りしていないから、未だに発動に時間がかかっちまう。俺も少し訓練するべきか？

「そうなんですか……以前は魔術の事なんて何も知らない様子でしたのに、凄いですね、シュテルさん」
「レストさん、だったかしら？　その依頼の時のシュテルって神聖術も魔術も使えないのに、そんなに凄かったの？」
「はい！　凄かったんですから。ピグルの群を相手に、あっという間に大きな罠を魔術師の生徒二人に指示を飛ばして作り上げたんです」

レストさんはシュテルの働きを、少しうっとりしながら話し始める。
くっ、羨ましいぞ！　俺も良い所を今度見せて……。

「そういえば、シュテルさんって何処か他の場所から来たそうですけど、どこ出身なのですか？」

「シュシュからは余りふるさとの事は聞いた事無い。スフィアはシュシュと一番付き合いが古いけど」

お、たしかにそれは俺も気になってたんだ。

少しお互いの事を話す機会はあったが、結局シュテルが俺の話を聞くだけで終わったんだよな。

「シュテルはね～首都の近くの街道を一人で歩いてる所を、お父さんの知り合いの行商人に拾って貰ったんだってさ～」

「そうそう、たしかそうだったわよね。でも、その前の事は余り話したがらないのよね。どこかの集落から来たって言ってたけど、私のカンだとそれは嘘ね」

集落？　たしかにそりゃ変だ。

あいつの装備や戦い方を見る限り、絶対に何処かで正式に修行した物だ。それに、実戦に特化した流派じゃないか？

何より、そう言う小さな集落出身の俺から見たら、シュテルはとてもじゃないがそうは見えない。

「首都の近くで……やっぱり……」

「やっぱり？　レスト先生はシュシュの素性に心当たりあり？」

「いえ、ただちょっと、シュテルさんは何処か組織に所属していたんじゃないかなと思うんです。人への指示の出し方とか、その、なんていうか雰囲気が」

「ああ、なんとなく私もそんな気がするわ。それに、なんだか少し無邪気すぎるっていうか、無理してそう振舞ってると言うか」

どうやらシュテルの考察へと話題が流れたらしい。

それに、さすが女は鋭いな。俺じゃ気がつかない事をどんどん指摘していってる。少し恐い位だ。

だけど、レストさんが言う組織に所属していたってのは俺も同意だ。だって――

「俺もレストさんの説は正しいと思うぜ。あいつの身体、凄かったからな……」

あの身体の傷、ちょっとやちょっとで付くもんじゃねぇ。酷使に酷使を重ねたモンだ。

だとしたら、どこかで”使われた”可能性だってある。

「ブフゥッ！」

「うわ！　なにすんだミステ」

突然対面して座っていたミステがサラダを噴出してきた。

なにすんだよ！

「アルルンとシュシュはやっぱりそういう関係だったのか！」

「ええ！？　そ、それはどういう事なのミステちゃん！」

なんだミステの奴。前にも言っただろ。

「だから、同じ部屋に住んでるって前も言っただろ？」

「アルヴァス、今は何も言わない方が良いわ。ミステも少し落ち着きなさい」

よくわからないが、とりあえず落ち着いたらしい。

俺は前に見た、シュテルの身体に刻まれた無数の傷の話をする。

「やっぱり、シュテルさんは何処かの騎士をしていたんじゃないでしょうか？」

「う～ん。たしかに、そう言われると納得出来る事が一杯あるんだ

よね～」

スフィア曰く、初めて会ったのは野外市の屋台らしい。
それにシュテルは、ブライトランプやバルナ事を知らなかったと言う。
そういえば、一緒にスレイランナーに乗った時も『昨今の情勢に疎い』とも言ってたな。

「上流階級やそれに順ずる人間なら、照明に魔具を使っていた可能性がある。それにシュシュは美食家」
「あ、そうだね！　シュテルって料理には詳しいけど、材料の名前とか知らないみたいだったよ～」
「やっぱり！　もしかして、どこかの貴族の出なのかもしれませんね」

おいおい、まさか俺が最初に言いがかりをつけたアレが案外的を得ていたって事かよ!?
でもまぁ、シュテルはよくいるコネや金に物を言わせるボンボンじゃないってのはよく分かってる。
あれは歴戦の剣士だ、間違いない。
まぁ何にしても――

「シュテルって謎だね～」
「シュテルって謎ね」
「シュシュは謎だらけ」
「シュテルさんは謎が多いですね」
「シュテルって何者なんだ?」

これだよな？

## 閑話「彼の居ないガルヴェウス後編」（後書き）

シュテルの居ない間に広がる名（迷）推理
次回からはまた本編に戻る予定です。
お待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。

## 第二十一話「奉仕活動」（前書き）

お待たせしました、本編再開です。

# 第二十一話「奉仕活動」

アクラスに着てから早六日。
町の周りの魔物も殆ど狩り尽くし、常駐している冒険者達も積極的に戦う様になり、一先ず俺に出来る事は全てやったつもりだ。
その甲斐あって町の住人にもある程度顔を覚えてもらったし、好意的な声もよく掛かる様になった。

ギルドの方でも今では皆と顔見知りで、一緒に依頼を受ける位だ。
依頼を多数こなした事により、戦闘ランクもC＋まで上げることが出来たし、後はBランクの依頼を一つ受ければB－に昇格出来る所まで来ている。
とは言っても、この町にBランクの依頼などありはしないので、これはガルヴェウスに戻ってからだ。

ただ、ここに来た一番の目的である流行病については進展が無く、連日新たな感染者が運ばれてくる。
主な症状は腹痛、嘔吐、下痢と言った物で、他にも衰弱や脱水症状を起こす人間もいる。
教団の方では文献をあさったり、感染経路の特定を進めているが、これと言った手がかりは無しの状態らしい。

病その物は早期治療ですぐに良くなるのだが、また別の日に同じ患者が運ばれて来るなんて事もザラで、謎は深まるばかり。
幸いまだ死者は出ていないが、治療が遅れた老人や子供が最悪のケースに陥ってしまう可能性もあるので、予断を許さない状況だ。

「やっぱり、俺も少し力になりたいけど、素人が手を出す訳にも行

かないよなぁ」

今日も一人、”飛び込み魚”で昼食を摂りながら、自分に出来る事が無いか模索していた。

「兄さん今日も浮かない顔してるね、アンタのお陰で町の連中は大助かりなんだ、そんな顔してちゃいけないよ」

「ああ、オヤジさん。ちょっとこの町の病の原因とか考えてたんですよ。何か自分に出来る事はないかと思いまして」

毎日通う内に、この店を切り盛りしているオヤジさんに顔を覚えられ、最近ではよく声をかけてくれる様になった。

聞けばやはり外の魚売りの露天と提携しているらしく、連日魚を持ち込むお客が後を絶たない。

「ご馳走様、今日もおいしかったよ」

「へへ、兄さんの目利きのお陰もあるんだけどねい」

食事を済ませ、午後の依頼を受ける為にギルドへと向かう。

大通りは相変わらず人の波で溢れ、組み立て途中の船の部品を運ぶ職人や、大きな魚を乗せた台車を引く人間、海釣りにでも出かけるのか、竿を持つ人達も楽しそうに歩いている。

「釣りか、いいなぁ。今度俺もやってみようかな」

そんな事をぼやきながらも到着した冒険者ギルド。

扉を開け、今日も受け付けにいるチーフさんと挨拶を交わす。

「こんにちは、今日は何か困った依頼とか来ていませんか？」

「おうシュテル。今日はちょっと海岸沿いにまたカイルーンが出た

って報告があってな、さっき神聖騎士の娘さんと、ほら、あの時の若い二人組みが一緒に討伐に向かったぞ」

「それなら今回は俺が出る幕はありませんね。ほかに特に無ければ適当な奉仕作業依頼でもしようと思ってるんですが」

以前、フォレストゴブリンに攫われた二人の冒険者は、その後イクシーを慕うようになり、イクシーもイクシーで彼女達の面倒を見る事にした様だ。

『この町の次代を担う冒険者を鍛える事も、立派な仕事であります！』とは彼女の弁だ。

そして、残念ながら俺はあの二人には避けられてしまっている様だった。

いや、もう気にするのは止めよう、忘れよう。

「そうだな、河口から少し上ったところの土砂の撤去作業の依頼が来ているな。去年からずっと続いてるんだが、さすがに本腰入れ始めたって所だ。とうとうこっちまで要請が来たって訳だ」

「土砂？　何かあったんですか？」

「去年の秋ごろだったか、山の方で土砂崩れがあったんだよ。んでその一部がこっちまで流れ込んじまったって訳だ。漁にも多少影響が出たんだが、今はそれほどでもない。だからあんまり緊急って訳でもないんだけどな」

この町の中心には大きな橋が架かっており、その下を大きな川が流れている。

その為、ここでは川遊びも川釣りも楽しめると言う事で、夏真っ盛りともなれば観光に来る人間も多いとか。

こんな状態じゃなければ、俺も一日中釣糸を垂らして過ごしたいものだ。

「じゃあ今日はその依頼を受ける事にします」
「おう、頼んだ。場所は川沿いに進んでいけば作業員の休憩小屋があるから、すぐに分かる筈だ」

町から少し離れた川沿いに、いくつもの小屋が点在する場所がある。恐らくここがその作業小屋なのだろう。
その内の一棟に声を掛け、ギルドから派遣されて来た旨を伝える。

「お、早速来たな。もうすぐ休憩時間も終わりだから中に入ってて待ってくれ」
「分かりました、今日は宜しくお願いします」

小屋の中は思ったよりも広く、寝泊りに必要なベッド、それに調理場までである。
かなり長期間作業を続けていたって事なんだろう。

「お、誰かと思ったらシュテルじゃねぇか！」
「あ、ダインさんじゃないですか。ダインさんもこの依頼を受けたんですね」

以前ギルドで顔を会わせた彼は、なんとヴィンスの父親だった。
ヴィンスは漁師ではなく、料理人になる為に単身ガルヴェウスまで出てきたそうだ。
そして、ヴィンスの母親と妹がは病に罹り、今はこのダインさんと二人で実家で暮らしている。

「奥さんと娘さんの容態はどうです？　たしか今日で三日目ですよね」
「ああ、かみさんはもう良くなったんだが、娘の方はもう少しかか

るみてぇだ。なに、俺の息子が治療してんだ、すぐに良くならぁ」

休憩も終わり、作業を開始する面々。

作業内容は川のあちこちに引っかかってる木や岩を撤去するというシンプルな物なのだが、その量が凄い。

まるで天然のダムの様な有様で、下手に近づこう物なら、いつ決壊して濁流に飲まれるか分かった物じゃない。

そこで、引っかかっている木にロープを掛けて、一本ずつ川の外から引っ張って撤去している。

俺とダインさんは、そのロープを引く事になった。

「そういやおめぇ、そんなナリしてるけど随分力があるんだったな。こりゃ捗りそうだ」

「そういえば、ダインさんは漁師でもありましたね。ロープを引くのはお手の物って感じですか？」

「おうよ！　いつも何百って魚が掛かった網を引いてんだ、これくらどうって事ねぇ」

お互いに神聖術で身体を強化し、直径１０センチはありそうな太いロープを引き始める。

そういえば、神聖術で身体を強化する事が出来る人間は割りと多いらしいが、身体を癒す事が出来る人間は限られているとか。

さらに言うと、神聖術による治癒を他人にかける事が出来る人間はもっと希少だそうな。

勿論、俺は自分以外にかける事は出来ない。もし出来たら俺も診療所の方で手伝いをしていただろう。

「せーの！」
「うおおおりゃあああ！！！」

二人で息を合わせ、おもいっきりロープを引く。すると、川の真ん中にあった折れた大木の一つが徐々に動き始め、今度は川に流され始める。
当然繋がっているロープにもその力は伝わってくる訳で。

「ぐぬぬぬぬぬ！　シュテル、一気に岸まで引っ張るぞ！」
「はい！」

術を更に強めて、一気にロープを手繰り寄せる。
すると大木もゆっくりと此方へと向かい、無事に引き上げる事に成功した。

その後も次々に木のダムを崩し、今日だけで十一本も引き上げる事が出来た。

「いやぁ助かりました、さすが今噂の冒険者ですね！　ダインも済まなかったな、今お前んとこの娘も大変だってのに」
「なに構わねぇよ。カミさんも戻ってきたし、明日には娘もきっと戻ってくるだろうよ」
「それじゃあ俺はこれで失礼しますね、明日以降ももしかしたら来る事になるかもしれませんし、これからも宜しくお願いします」

挨拶を済ませ、町へと戻ろうとしたのだが、ダインさんに肩を掴

まれる。

「今日は一緒に一杯やろうや！　一緒に仕事をしたら、一緒に飲む。これがここのルールってもんだ」

「そ、そういうものなんですか。それじゃあ一緒に行きましょうか」

そういえば、港町であるここなら、ガルヴェウスとはまた違った物があるかもしれないし、居酒屋メニューも違うだろう。

最近いつも一人での食事だったし、その誘いを喜んで受ける事にした。

## 第二十二話「ミルシー」

居酒屋へと入ったダインさんと俺は、早速ホビアと呼ばれる発泡酒を注文する。
木製の大きなジョッキに入れられたそれを持ち、乾杯の後喉へと一気に流し込む。

これは一種のビールだとは思うのだが、どうやらこの世界は発泡酒をキンキンに冷やす様だ。
たしかビールの発祥地では冷やすという文化はなかったみたいだが、俺としては此方の方が美味しいと思うので嬉しい誤算だった。

「プハッ重労働の後の一杯は溜まらん！　シュテルも結構いけるクチみたいじゃねぇか」
「ええ、俺も酒は好きですよ」

余りの爽快感に、つい一気に飲み干してしまった。
空になったジョッキを取り上げたダインさんはすぐさま店員へとおかわりを注文する。

「さてと、んじゃつまみにまずはミルシーだな」
「ミルシー？　なんですかそれは？」

初めて聞く単語だ。魚の一種だろうか？

「なんだと？　おめぇこの町に来てまだミルシー食ってねぇのか！？　ここの特産品だぞ、こいつは」

大げさに驚いて見せたダインさんは、運ばれてきた物を俺へと差

し出してくる。

「これは、貝ですよね？」

差し出されたのは、オイスターやカキと呼ばれる貝と良く似た物だった。

柑橘系の果物、これは黄色いカウボスの実だろう。成熟度合いで風味の変わる、不思議な果物だ。

その切り身が添えられている。

「こうやって食うんだ」

目の前でダインさんが、小瓶に入った黒い液体と添えられた実の絞り汁を貝にふりかけ、殻ごと口へと運び、チュルンと身を啜った。

それがどんな味なのか、どれほど美味しいかが否が応にも分かってしまう俺は、思わず喉を鳴らしてしまう。

「ッカーうめぇ！　ほら、お前も食ってみろ！」

「では俺も！」

香りから、どうやらこの黒い液体は魚醤である事がわかった。

ダインさんに習い、啜るように身を食べる。

すると、ツルツルとしていて、噛むと溢れる濃厚な海の味と、酸味のある果汁、そして魚醤のコクが合わさり、えも言われぬ味が口の中に広がる。

「うめぇ！！！」

「おいおい、口調がかわってるぞ？　だがそんくらいうめぇだろ？」

余りの上手さに、皿に載せられたミルシーをあっという間に平らげてしまう。

俺の知るカキよりもさらに大きく、身もふっくらと膨らんでいて、食べ応えも十分だ。

「こいつを生で食えるのはここくらいだ。　冷凍して輸出もしてるけどよ、やっぱり生に限る」

「鮮度が悪いと生じゃ食べられませんもんね。それにしても随分大きいですね」

「ああ、今年は特に豊作なんだよ。去年の土砂崩れで漁場がダメになっちまったんだが、沖のほうでも沢山取れるって分かってな。さらに例年の倍以上の大きさと来た」

ふむ、やはり土砂崩れで漁にも影響は出ているみたいだ。まあコレに関しては怪我の功名とも言えるけど。

こうして夜は更けていった。

俺はそこまで酔いはしなかった物の、俺と同じペースで飲んでいたダインさんはすっかり眠りこけてしまっていた。

家の場所が分からなかったので、とりあえずギルドへと背負って行き、チーフさんの許可も貰いロビーのソファーに休ませ、俺も宿へと戻った。

翌日、余り爽快とは言えない気分で目を覚ます。

なんだ、二日酔いか？　いや、そうじゃない。

『ギュルルル……』

耳に入ってくる不穏な音色。響き渡る不快な音。

思わず嫌な汗が噴出してくる。これは……。

「は、腹が、痛い……」

トイレに篭りながら、神聖術を自分にかけ気分が良くなるのを待つ。

まさかこんな事に術を使うハメになるなんて思いもしなかった……。

「昨日、ミルシー食べ過ぎてあたったなこりゃ」

思い当たるのはそれしかない。

カキの食中毒なんてよくある話だ、あんなに一度に食べたらそりゃ体調も崩すよなぁ。

まだ本調子ではない物の、この程度で診療所に行くのも気が引けてしまう。

今も病で苦しんでいる人達が沢山いると言うのに、食中毒にかかったので見て下さいなんて言えないよなぁ。

とりあえず、宿の主人から塩を分けてもらい、簡単な生理食塩水を作る事にした。

本当なら抗生物質も欲しいのだが、さすがに手に入らないだろう。

と言う訳で、さらにリーガルと言うニンニクと同じ効果のある野菜も分けてもらい、摩り下ろして生理食塩水と一緒に飲んでおく。

これで少しはよくなってくれればいいんだが……。

大事を取ってベッドで横になっている内に、どうやら眠ってしまったようだ。
窓から差し込む光は既に朱に染まっており、外の気温も少し下がってきている。

身体は休む前よりは多少マシにはなったのだが、それでも気だるさが抜け切っていない。
作っておいた生理食塩水をまた飲み、何か消化の良い物を宿の主人に頼むことにした。

「ご主人。何か消化の良い物を食べたいんだけど、リゾットか果物なんか大丈夫かな？」
「ん、了解した。具合が悪そうだが、大丈夫か？」

寡黙だと思っていた宿屋の主人だが、実際には口数が少ないだけで、とても親切な人だった。
なんだかんだでクロースアーマーの引き取りもこの人がやってくれていたし、今の様な突然の夕食の注文にも嫌な顔一つせずに引き受けてくれる。

「少し身体がダルくてお腹の調子が悪いんですよ。それでもだいぶ良くなったんですけどね」
「ふむ……そうか。食事は後で持って行く」

部屋へと戻り、汗を沢山かいていた事に気がつき服を脱ぐ。
軽く汗を拭いた後に着替え、また食塩水を飲む。
こういう時は脱水症状にも気をつけなければいけないし、何より

も早く悪いものを身体から追い出したい。
テーブルに載っている、残ったリーガルを一欠噛み砕き、食事が運ばれて来るまでまた少し横になる事にした。

「――れで、その症状で間違いないんですね？」
「ああ、本人は平気そうだったが、間違いなくあの症状は――」
ん？　どうやらまた少しウトウトしてしまっていた様だ。
それに、ドアの向こうから話声が聞こえてくる。この声はヴィンスか？

「あ、目を覚ましたんですね！？　身体の具合はどうですか？　今治療しますから、少し横になってて下さい」
「え？　わざわざ来てくれたのか？　今はヴィンスの妹だって大変らしいじゃないか、それなのにすまない」

扉を開け、少し焦るようにして部屋へ入ってくるヴィンス。今日は教団員として来ているのか、白い法衣を身に纏っている。
どうやら、宿の主人が心配して呼んできてくれたらしい。
本当、なんて親切な人なんだろうここのご主人は。これは今度お礼に何かしなきゃいけないな。

「本当びっくりしましたよ。まさかシュテルさんまで病に掛かって

しまうなんて……」

「何言ってるんだ、これはただの食中りだよ。本当ならこんな事で治療団の皆に迷惑なんてかけたくなかったんだけど――」

「何言ってるんですか、これは流行り病の症状そのものじゃないですか！」

「いやだから……」

待てよ。流行り病の主な症状はたしか……。

今の俺そのものじゃないか！　まさか流行り病の正体って……？

## 第二十三話「生態系の乱れ」

『先祖代々続く受け継がれし合流の水面。その恵みは海の神が分け与えた物である。
故に、決して多くを望むなかれ。欲を欠き、海の神の領域にそれを求めた時、かならずや災厄が降りかかるであろう』

「って、書いてありますよね？」
「うむ、この辺りに昔から伝わってる話だが、ただの迷信だぞこりゃ。実際皆船で海に出て魚を取ってきてるじゃねぇか」
「違うんです。これは魚の事を言ってるんじゃありません。ミルシーの事を言っていたんです」

流行り病、もとい食中毒が回復した翌日。俺はすぐ様診療所で調査をしている治療団の元に行き、過去の文献や伝承、この町の歴史について調べていた。
そして、やはり俺の予想は正しかったのだ。

過去の病の発生期と漁獲量の記憶を照らし合わせた結果、見事に今回と同じように豊作の年に病が始まっていたのだ。
そして、その豊作の原因となっているのが山の土砂崩れだ。

山の土砂崩れにより、大量の植物性プランクトンが川を伝って海に流れ込み、それを餌とする動物性プランクトン。
こんな具合に食物連鎖が活性化した結果が、今回の様な漁獲量の爆発的な伸びだったのだ。
そして、そこから導き出した俺の推論を、診療所の院長とアルシ

ャさん、そしてダインさん相手に話している所だ。

「この町は元々、ミルシーの産出で大きく成長したそうです。なので、恐らくこの話が出来た当時は漁の対象の殆どがミルシーだったと思うんです」

「そうね、たしかにその通りよ。それで、貴方の言う漁獲量の上昇と流行り病の発生時期の符合は分かったのだけど、それがどう関わっているのかしら？」

「いえ、これは病なんかじゃなかったんです。単なる食中毒だったんですよ」

そう、思えば同じ人間が短い期間で同じ病に何度も掛かるなんて本来ありえない事なのだ。

教団の治療は新陳代謝の活発化からなる物だ。だから免疫だってしっかり付く。にも関わらずまた運ばれてくる。

それに、何だかんだでこの病気が空気感染した事例も見つからず、感染経路だって見つかっていない。

それもそのはず、ただの食中毒だったのだから。

もしも汚物や吐瀉物の処理がお座なりだったのなら空気感染もありえただろう。

しかしこの世界にはしっかりとした下水が存在しており、清潔に保たれている。

「おい、食中毒ってお前、そんな鮮度の悪いモンなんてこの町の連中が手をだすわけねぇだろうが？　それに俺達だってそんな腐りかけたモンなんてとっちゃいねえ」

少し心外だと言わんばかりに異を唱えるダインさん。

たしかに、自分達の獲った物の鮮度を疑われたとなれば信用問題

だし、町の人間の誇りにも傷が付く。
しかし、今回は少し違う。

「違うんですダインさん。鮮度じゃないんです。ミルシー自体の毒性が強まったんですよ」
「お話中失礼。貴方はたしか、教団外の人間の筈、何故そこまで病や生物に関して詳しいのです？」

静かに聞いていた院長が、尤もな疑問をぶつけてくる。
正直、今はそんな事などどうでもいいとは思うのだが、やはり大勢の人の命を預かる立場だ、そうも行かないのだろう。
少し嘘をつく事になってしまうが、ここは説明しておこう。

「俺はガルヴェウスにいた時、暫くの間学者ギルドにお世話になっていたんです。そこでこう言った事について知識を得る事が出来たんです」
「なるほど、ガルヴェウスの学者ギルドで得た知識なら、信用に値しますな」

学者ギルドに通っていたのは本当だし、ギルギリセーフだと思いたい。

「ミルシーは本来、海水と川の真水が混ざり合う場所で獲られて来ました。海に比べて餌の少ない場所で育ったミルシーは今より小ぶりだった筈です」
「そうだ、今年は海で取れたから大きいって事だな？」
「そうです。ですが、貝、とくに生で食べる機会の多いミルシーの場合、それが仇となってしまうんです」

俺は、貝が溜め込む毒について説明する。

微生物に微量に含まれる毒素は、排出される事無く蓄積されて行くと言う事を。
特に海では動物性プランクトンも豊富で、より一層その危険性が高まってしまう事を。

「俄かには信じられねぇが、思い当たる節もある。思えば最初に病に掛かったのは俺達漁師だった……」
「これは、本格的に検証する必要が出てきたわね。院長、すぐに町の代表達に呼びかけて」
「了解しました。すぐにミルシーの生食を取り締まるように掛け合います」

これが絶対正しいとはまだ確信が持てない、それでも状況的に考えて、一番可能性が高いのは確かだ。
何より、咄嗟に食中毒対策として行ったリーガルと食塩水が多少とはいえ効いたのが大きな証拠だ。

「とりあえず、貴方の説を証明する方向で行きましょう。それと、専属の薬師に貴方が行った治療について話してあげて」

こんな単純な事に気が付かなかった背景には、恐らくこの町の住人達の海の幸への知識の深さに原因があったのだろう。
皆がその食べ方や鮮度の見分け方、食中毒を起き得る物や状況を熟知しているが故に、平常無害な物、町の常識に囚われていた故に起きた事なのだろう。
これから先、今回の事が伝えられていけば、もうこんな事にはならないと信じたい。

それから四日経ったある日、俺は診療所に呼び出された。
使者の顔色を見る限り、悪い知らせではないと思うのだが……。

「シュテル、貴方の説が正しい事がほぼ証明されたわ。ここ三日間新たな感染者、いえ、中毒者が運ばれる事が無くなったわ」
「それに、貴方の言う抗生物質でしたか。既存の栄養補給剤を改良した物と極めて薄い塩水を摂取させた所、回復の速度が段違いになりました」

診療所で待っていたのは、若干疲労の色が薄くなった院長と、満面の笑みを浮かべたアルシャさんだった。
どうやら俺の説が正しい事が証明された様だ。これで一件落着だろう。

「それは良かった！　これでこの町も安泰ですね」
「病はこれで解決と言っていいわね、けど」

けど？　まだ何か問題があるのだろうか？

「たしかに解決しましたが、今度はミルシーの輸出や収穫で生計を立てていた者達が困窮に陥ってしまう可能性が出てきてしまったのです。しかし、これも一時の事と、なんとか他の仕事につけるようにしましたので、どうかお気になさらず」

ああ、院長さんの言うとおり、たしかに病が治まって全て丸く収

まるなんて訳には行かない。
けど、正直そこまでは考えていなかった。たしかに一度こんな事態になってしまったら、たとえ元の状態に戻っても風評の所為で苦労するかもしれない。

「ねぇシュテル。貴方ならミルシーの有効活用する案とか出せないかしら？　生がダメでも幾らでも活用の仕方はあると思うのよ。それに、もったいないじゃない、折角沢山とれるのに」
「ええ！？　さすがにそこまで便利な人間じゃないですよ！　いやでも、う～ん」

またまた無茶な事を言い出すなぁ。干物程度ならこの町の人達だってもう作ってるだろうし、ガルヴェウスは保存食の本場だしそこまで需要もないだろう。
船での輸出にも干物は使われてるだろうが、それだって行き成り注文が増える事なんて無いと思う。
何か新しい商品でも作れと言うのかアルシャさんは……。

「あ、半分冗談だからそこまで真剣に考えなくていいわよ？　ただ、お陰でミルシーが味わえないのが少し悔しいから意地悪を言っただけだから」
「ちょっと、それはないでしょう？　火さえ通せば食べれるんですから、後で何か作りますからもう」

以外とお茶目な所もある様だけど、さすがにこの状況でそれはやめてくれよアルシャさん……。
しかも半分は本気って事じゃないか。

「あら本当？　嬉しいわ、この所診療所の篭りっ放しで禄に外食も出来なかったのよ……」

ああそうか、アルシャさんも他人への治療が行える貴重な神聖術の使い手だったんだ。

よく見れば、笑顔の下に疲労の後が見え隠れする。うっすらと隈も浮いている。

そうか、俺と違ってずっとここで働いていたんだなアルシャさんは……労いも込めて気合を入れて作るとしようか。

「じゃあ腕によりをかけて作りますから、明日の夜に呼びにきますよ」

## 第二十三話「生態系の乱れ」（後書き）

あくまで、この世界での話になります。
全てが嘘ではありませんが、あくまでフィクションです。

# 第二十四話「巧妙？　光明？」

「オヤジさん、折り入ってお願いがあるんだ。ちょっと話を聞いてもらえないかな？」
「お、なんだい兄さん。珍しいねそっちから話しかけてくるなんて」
俺は診療所を出てすぐに、”飛び込み魚”へと足を運んだ。
料理をアルシャさんに振舞うなら、調理場が必要だからだ。
無論、野営の時の様に野外で行う事も出来るのだが、それには教団の機材が必要になるのだし、個人で勝手に使う事など出来ない。
そこで、一番顔を会わせているこのお店にお願いをする事にした。
「ふむ、ウチは夜は基本店を畳んでるからねい、夜なら構わないよ。ただし、日中に店を手伝うってのが条件かね」
「いいんですか！？　それじゃあ今から少し下準備をしたいんですが」
「なんだ、随分気合が入ってるねい？　もしかして兄さんのイイヒトか何かなのかい？」
「違いますよ、ただ随分とお世話になった相手ですし、ここ最近働き詰めで疲れてるんです。だからその労いの気持ちを込めてですよ」
俺は早速市場へと向かい、少し値崩れを起こしてしまったミルシーを大量に購入する。
ミルシーを扱っている商人は皆、突然の需要の低下で困っていたのか、俺が大量に買うと目を輝かせ感謝の言葉までかけてくる。
そのお陰で、かなりおまけをしてもらい大量に手に入れる事が出来た。

「うん、これだけあれば作れそうだな」

大きな籠に崩れんばかりにミルシーを積み上げ、”飛び込み魚”へと帰還した。

翌日、約束通り朝から昼過ぎまでお店を手伝う事になっている俺は、厨房で只管魚相手に格闘していた。

持ち込まれる魚は本当に多種多様で、中には「食べられるのかこれ？」と思ってしまうような姿のものまである。

料理に使わなかった部分や、余った部位を少しつまみ食いなどして、色々と新しい味覚に出会う事が出来たのは役得といった所か。

「兄さん本当に手際がいいねい。俺んとこでこのまま働く気はないかい？」

「はは、残念ですが俺は冒険者ですからね。ガルヴェウスにも戻らなきゃいけないので」

「そうだったねい。それにしても、昨日から煮込んでるありゃなんだい？」

俺は昨日の段階で、店の裏手である物を作っていた。

さすがに何時間も店のコンロを占領するわけにも行かず、簡易コンロを店の裏に設置したのだ。

「出来てからのお楽しみですよ」

すっかり日も暮れ、空には星が瞬き始める。

下準備をある程度終わらせ、あとは仕上げにかかれば完成というところまで来ているので、厨房をオヤジさんに任せて診療所へと向かう。

途中、宿の主人にも声をかけたのだが、やはり宿を空ける訳にはいかないようで、後ほど料理を持って行くと約束した。

「失礼します、アルシャ副団長に面会をしたいのですが」

診療所に到着した俺は、受け付けの女性にそう告げる。

幾ら親しいとは言え、気軽に呼びつける事など出来ない。それに、今は治療団の代表でもあるのだから。

そもそも、一介の冒険者である俺が知り合える様な人じゃないんだよなぁ、本来なら。

現に、ここの冒険者ギルドのチーフだって、分隊長であるイクシーに対してもあそこまでの態度を取る位なのだ。

これが更に、副団長で二つ名持ちともなれば、まさに雲の上の人だろう。

だが、俺がそんな事を気にしていると言うのに、当の本人はと言うと……。

「待っていたわ、今日はお昼も抜いていたのよ。ねぇ？　イクシー」

「そうであります！　副団長だけ誘うなんてずるいであります！」

イクシーにまで話が伝わり、そして手の空いている治療団員までもが勢ぞろいで待ち構えていたのだった。

「ええと、これは全員行くって事ですよね？　当然」

「勿論よ。皆、美味しい食事に飢えているのよ。今更だけど、大丈

夫かしら？」

一応、ミルシーだって大量にあるのだし、他の魚だって買ってある。

もし足りない様なら、保管してある素材もオヤジさんに言って買い取る事も出来るだろうし……。

「はい、大丈夫ですよ。それでは行きましょう」

これは、予想以上の激戦になりそうだ。

「おいおい兄さん、こんな団体さんだなんて聞いてなかったよ？」

「すみませんオヤジさん。俺も聞いてませんでした。最悪の場合、迷惑料も追加の材料費もお支払いしますから、どうか……」

「いやいや、別に迷惑なんて事は無いさ。ただ、少し驚いただけさね。よし、それじゃおじさんも少し張り切っちゃおうかね」

やはりと言うか、突然の団体客にオヤジさんは目を丸くしている。

本来寛いでいるであろう時間に手伝ってもらうなんて、悪い事してしまった。

治療団の皆は、どうやら常駐の治療員に診療所を任せて、今回ガルヴェウスから派遣された人達は全員来ているようだ。

尤も、御者の人達はいないのだが。

「あの、シュテルさん。よかったら僕も手伝いましょうか？」

「いや、今日はヴィンスだって持て成される側なんだ、気にしないで待っていてくれ」

本音を言えば、猫の手だって借りたい状況なのだが、若干の意地と闘争心がそれを俺に言わせない。

これは、俺の戦場なのだから――

ある程度完成していたとはいえ、突然必要量が増えたのだ。

無論最初から一人分だけ作る、なんて非効率な事はしていなかったが、それでも皆に出すとなると一人頭の量は減ってしまう。

なので、簡単に作れる物から量を増やし、それを出している間に少しずつ他の料理も増やしていけばいいだろう。

言わば、コース料理の様に少量の単品料理を次々に出すと言う作戦だ。

そして、俺は最初の料理を皆に配った。

ある意味秘密兵器だったのだが、仕方ない。

コレを使えば、短時間でミルシーを楽しめる料理を大量に用意出来るのだから。

「ではまず、前菜から出したいと思います」

「なるほど、考えたわねシュテル。本当、もっと早く言っておくべきだったわ。もう、イクシー？　貴方が言いふらした結果よ？」

「面目ないであります……」

なるほど、アルシャさんからしても突然の事だって訳か。

俺はオヤジさんと一緒に、一品目を配膳して行く。これは葉物の野菜とモウラスの肉を炒めた、簡単な物だ。

尤も、ただそれだけと言う訳じゃない。

「あら？　前菜にはミルシーは使わないのね？　でも美味しそう」
「お肉であります。お肉が入っているであります」

さぁ、果たしてどんな反応をするだろうか？
皆が配り終えたのを確認し、アルシャさんが全体に労いの言葉をかける。
そして着席を合図に皆が皿に手をつけ始めた。

「！　これは、一体どう言う事なの……？　凄く濃厚な味、ミルシーの味がするわ」
「本当であります！　お肉もミルシーの味もするであります！」

どうやら、他の団員も気が付く人間は気が付くようで、不思議そうな顔をしながらも食を進めている。

「秘伝のソースみたいな物ですよ。ミルシーを使った調味料を使ったんです」
「へぇ、兄さんそんなもの作ってたんだね？　後で俺にも作り方を教えておくれよ」

勿論、今回お世話になったのだし、当然レシピは渡すつもりだ。
どうやら俺の秘密兵器は効果抜群のようで、あっという間に皿が空になっている。

おっと、こうしてはいられない。すぐに厨房に戻らないと。

「待ちなさいシュテル」

しかし、神妙なその声に俺の動きは止められてしまった。

何か気に入らない事でもあっただろうか？　それとも、料理に納得いかなかったんだろうか？

恐る恐る振り向いた先では、アルシャさんが空になった皿を、穴が開いてしまうくらい睨み付けていた。

やはり、何か怒らせるような事をしてしまったんだろうか？

「これよ！　この調味料、ここの特産に出来ないかしら！？」

## 第二十四話「巧妙？　光明？」（後書き）

正直、ここまで話が長くなるとは思いませんでした。
後でこの章のタイトルを、「主要都市」から「港町」にかえる必要があります。
申し訳ありませんでした。

# 第二十五話「特産品誕生」

商業ギルドの一室。
会議室にも似たその室内で、若干張り詰めた空気の中で俺は一人、大きな黒板の前でプレゼンテーションの様な事をさせられている。

席に付いているのは何れもこの町の有力者達だ。
突然の余所者の話にも関わらず、真剣そのものといった様子で聞き入っている。
ただ、やはり各組織を束ねる立場にいる人間だ。その眼力や威圧感、そして鋭い指摘がこの空間を飛び交っている。

「以上が今回考案した調味料です。乾物以外の加工品として、新たに特産品として売りに出せないでしょうか？」
「ふむ、先ほど君が食べさせてくれたあの味ならば、たしかに調味料としては優れているだろうし、需要は高まるだろう」
「これまでの魚醤とはまったく別な味だ。これなら料理方面でも町の活性化に一役買ってくれるとは思う。だが……」

今の発言はこの町の商業ギルドの責任者の男性と、飲食店を取りまとめているお店のオーナーだ。
手ごたえは掴めたと思ったのだが、何かひっかかている様子。

「製作効率だよ。聞けば、中々手間の掛かる物だそうじゃないか。それなのに製法そのものは簡単だし。簡単に真似されてしまうんじゃないかね？」
「それでも、時間の掛かるものが安価で購入出来れば、自分で態々作る人間は少ないと思いますよ。この町なら量産に必要な環境も整っていますし」

そう、量産が可能で、大量に流通してしまえばなんて事はないだろう。

そんな事言ったら、ガルヴェウスの保存食だって簡単に作れる物ばかりだ。

「量産可能な環境……？　たしかに海は近いが……」

「違いますよ。今この町での輸出品で一番多い物はなんですか？」

「ミルシーを抜かせばそうだな、魚醤……いや、塩だな」

そう、海に近いこの町では、当然塩を精製して大陸中に産出している。

そして、塩の精製に必要な物は……。

「なるほど、話が見えたぜ？　これは俺達大工職人の出番って訳だ」

「どういう事かね？　話が見えてこないんだが」

「おめぇ、自分で扱ってる商品がどういう所で作られているかも知らねぇのかい」

そう、塩を精製するに当たって必要な工場がこの町にある。そしてどんな施設なのかと言うと。

「そうか！　たしかないあの巨大な鍋ならば量産可能だ！　使っていない工場を改良して使えばいいのか！」

「その通りです。どちらも長時間火にかけて精製するものですし、それほど難しくないと思うんです、この町の人達の手にかかれば」

すぐに特産として売りに出す事は出来ないだろうし、完成にだって時間がかかるかもしれない。

それでも、新たな特産品が生まれる大きな可能性を示す事が出来たのだ。ミルシーに関わる人達の心に、僅かでも希望を取り戻させる事が出来れば、きっと上手く行くと信じている。

「そうと決まれば早速綿密な計画をたてなばなるまい。各ギルドの長よ、今日は各々のギルドでこの計画に相応しいチームを編成してくれぬか」

この町の町長を勤める女性。まさに女傑と呼ぶに相応しい、老いを感じさせない海の女。

どうやらこの町長にも認めてもらう事が出来た様だ。

代表者たちはもう、大きな仕事が出来るという事で夢中になり、すっかり俺の事など忘れて話し合いを始めている。

それがなんだか、身体の大きな子供の様で、つい微笑ましくて表情が緩んでしまう。

「さて、あいつらはもう仕事病にかかっちまったみたいだし、今日の会議はお開きだよ。突然教団のお偉いさんから提案された時は驚いちまったけど、会議を開いてよかったよ」

「そうみたいですね。皆さんすっかり夢中になっている様ですし。それじゃあ町長さん、俺はこれで失礼します」

「ああ、本当に何から何まで、有り難うねシュテルさん」

突然の提案で驚いたのは、俺も同じだった。

あの夜が明けた次の日、朝一番でアルシャさんに呼び出されたのだ。

『町の代表に話をつけてきたから、このソースを売り込んで来て頂戴』と。

相変わらずのワンマンっぷりだが、それだけこの町の事をどうにかしたいと考えているのだろう。

そして、その行動力のお陰で上手く事が運ぶことが出来たのだし、良しとしよう。

「お疲れ様。これでこの先の問題も未然に防げそうね。結局、今回この町の問題は殆ど貴方に解決してもらったような物ね」

「そうかもしれませんけど、実際に動いたのは教団の皆さんじゃないですか。役に立てたならそれでいいですよ」

「貴方は欲がないわね、本当。普通なら恩賞や利益の話をする所なのよ？」

あ、そうか。食中毒はともかく、新商品が成功した場合は俺にもお金が入るのか。

とは言っても、俺が考案したって訳じゃないしなぁ。

利益が出ても、別に俺はちょっと報酬がもらえればそれでいいかな。

後日、いよいよこの町を発つ日が近づいてきたので、最後に町の周りの魔物を一掃しようと思い、装備の点検をしていた。
準備も済ませ、いざ冒険者ギルドへと向おうとドアノブを手にした瞬間、反対側から人の気配を感じた。

「開いていますのでどうぞ」
「よく分かったね、失礼するよ。ふむ、本当に冒険者だったのだね君は」

一歩扉から離れ、相手へと声をかける。そして扉を開けた人物はと言うと――

「ギルド長！　どうしたんですか突然」
「もうすぐ教団がガルヴェウスに戻ると聞いてね、その前に君と話しておかねばならない事があるのだよ」

先日の会議に出席した、商業ギルドの支部長だった。
態々ギルドの長が尋ねるとは、どういう用件なのだろう。

「簡潔に言うと、今回のソースで出る利益の事なんだ。恐らく量産体勢に入るまで少し時間がかかるだろうが、少量の試作品なら完成したんだ。ラシア共和国の人間にも試して貰ったのだが、間違いなくこれは売れる」

なるほど、どうやら本当に利益関連の話が来てしまった様だ。
俺としては、そこまで多くを求めるつもりは無いのだけど。

「ガルヴェウスへもすぐに試作品を届ける予定だ。生まれる利益は膨大な物になると誰もが予想している。私達は、君にどれだけの益を配当すれば良いのか、それが気になってしょうがないんだよ」

その通りだ。商人からすれば、得体の知れない存在なのだろう俺は。

自分から利益の話もせず、一方的に上手い話を与えただけ。

タダほど高い物は無いと言う言葉もあるのだし、警戒するのは当然だろう。

「そうですね、だったら俺のお願いを幾つか聞いて貰えれば」

「お願い、か。君も中々にやり手のようだ」

ありゃ、逆に警戒を強めてしまったか？　別に、本当にお願いをするだけなんだけど。

「ええとですね、将来ここから船に乗る機会も出てくるかと思うので、客船のフリーパスとか貰えたらなぁなんて……」

「……は？　いや、続けてくれ」

「それとですね、たぶんガルヴェウスに戻ったら俺、自分の家を買う事になると思うので――」

「なるほど、頭金を用意してくれと言う訳か。優秀な物件を都合する様にこちらからも働きかけを――」

……どれだけ俺が強欲に見えるのだろう。

「いえ、家に冷蔵や冷凍の魔具が欲しいので、取り寄せてもらえないかなぁと……」

あの露天商が使っていたような大規模な物ではなく、あくまで冷蔵庫的な物が欲しいだけだ。

帝国の魔具は性能が良いらしいので、是非一台欲しいと思っていた所だ。

「……それで、次はなんだね？」

「いえ、これで終わりです」

『今にとんでもないお願いをしてくるに違いない』とでも思っていたのだろうか？　長の表情は厳しく、依然警戒の色を示している。

「そうか、では次は利益の話に移るとしよう。先ほどのお願いも出来るだけ応えよう。それでまず軌道に乗るまでの間の――」

「いえ結構です。今のお願いが俺への報酬って事でいいですよ。第一、一介の冒険者にそんな大金が入っても、する事がないでしょう？」

「なっ……君は自分で何を言っているのか判って……いや、愚問だな。本当にそれでいいのかね？　間違い無く君は成功者になれるチャンスだ」

「何が成功なのかは、人や立場によりますよ。俺はあちこち自由に見て周ったり出来る立場があればそれでいいんです」

もし、一生この世界で暮らすのなら、この提案は是が非でも受けたい物なのだろう。

しかし、俺はあくまで呼ばれただけ、派遣されただけの存在だ。

そんな地位や財産は必要ない。そう、必要ない筈だ。

「それでは、最後に何か。今欲しい物や必要な物、将来必要になる物などがあれば、いつでも言ってくれないか。これでは逆にこちらが不安になってしまう」

「それでしたら、将来お願いする事もあるかもしれませんね。俺、一応鍛冶職人でもあるんですよ。あ、後それと、もしよければ利益の数パーセントでもいいので――」

とりあえず、今必要な物、欲しい物は他にはない。

長もある程度満足したのか、ようやく安心した表情になり席を立つ。

「中々貴重な体験をさせて貰ったよ。無欲な様で、中々腹の底が見えてこない。フリーパスや魔具は用意出来次第連絡を入れよう。最後の件も、利益が上がり次第指示に沿うようにしよう」

「有り難う御座いました。それでは、商売が上手く行く事をお祈りします」

「ああ、其方もこれからの旅に幸がある事を祈っているよ」

そうお互いの成功を願い、長は自分のギルドへ、俺は冒険者ギルドへと向かう。

もうすぐこの町ともお別れだと思うと、いつもよりも町の隅々までよく目に入る。

俺は今のこの町の様子を、人々の生活を目に焼き付けながら大通りを穏やかな気持ちで進んでいった。

「誰か！　誰か助けてくれぇ！！！！」

その叫び声を聞くまでは。

## 第二十六話「戦士の誇り、騎士の誉れ」

「船が二隻沈められた！　幸い近くの船に救助されたが、奴らそのまま近くの浜へと向ってるみたいなんだ！」

大通りで大声を上げながら、半ば恐慌状態に陥ってる漁師の男性をどうにか落ち着かせ、すぐに冒険者ギルドへと連れて行ったのだが、そこで説明された話を聞き、周りの冒険者へと徐々にざわめきや混乱が感染していった。

「皆さん落ち着いて下さい、まずは誰か診療所へと向かい、治療団の代表にこの事を伝えて下さい」

「分かった！　私が行ってくる！」

まずは戦力の確保だ。あの時の受付の女性がすぐ様飛び出して行った。

これでアルシャさん達の協力を得られるだろう。

「それで、相手はどんな魔物だったんですか？」

「カイルーン……に、似ていた」

「似ていた？　違う魔物だったんですか？」

「明らかに、デカさが違う奴がいたんだ。取り巻きも見たことが無い姿をしていた」

この辺りに居たカイルーンは殆ど狩り尽くした筈、亜種が存在するのだろうか？

沖の方で襲われたのだし、恐らく別な場所から来たのだと思うのだが……。

「おいアンタ、それはこんな姿をしていなかったか？」

思案していた所に、チーフが一冊の本を開いて持ってくる。

どうやら図鑑の様なのだが、紙媒体でここまで綺麗な挿絵が付いている本は珍しい。ギルド秘蔵の貴重品だったりするのだろうか？

「こ、こいつだ！　間違いない、こいつらだ！」

「すみません、これって一体？」

「こいつらはカイルーンに縄張り争いで負けた種族だ。昔はこいつらが程よく互いを潰しあっていたんだが、ちょっと前までカイルーンが異常発生してただろ？　あいつらが消えたからなんだよ」

という事はまさか……。

「俺が、カイルーンを駆逐した所為で……戻ってきた？」

死者こそは出ていないが、今この町に危険が迫っているのは揺ぎ無い事実。

これは、本気の本気で事に当たる必要がありそうだ。

「お前さんは何も悪くねぇ。遅かれ早かれカイルーン達だって同じ様な行動を起こしていた可能性だってあるんだ」

「……そうですか。俺も全力で討伐に向かいます、誰か一緒に出動出来ませんか？」

俺が呼びかけても、不安や恐怖からか皆の反応が薄い。

なんでこの町がこんな目にあうのか、どうして悪いことばかりが続くのか、そんな声ばかりが聞こえてくる。

たしかに、立て続けに悪い事件ばかり起きた上に、元々この町の冒険者は戦いを専門としている人間も少ない。
少し、心が折れかかっているのだろう。周りを見回しても、俺と視線が合うとすぐに俯いてしまう。
ギルド全体に、重い沈黙が訪れていた……。

しかし、その沈黙を破ったのは――

「おめぇらいい加減にしやがれ！！！　たまりに溜まった討伐も、カイルーンの駆除も、全部外から来たコイツのお陰じゃねぇか！　それを急に触発されて簡単な討伐をし始めて、いっぱしの冒険者になったつもりで偉そうにしてた癖になんだ！　ここはてめぇらの町だろうが！」
「チーフさん……」

煮え切らない周りの様子に、ついにチーフさんが怒りを爆発させた。
振り下ろされた拳が、いとも簡単に受け付けテーブルを粉砕する。

「いいか、元々この町は常に山からも、海からも魔物に狙われていただろうが！　それをいっつも外から来た連中に任せてきた。今回みたいに、自分達しか居ない時には何も解決出来ないじゃ済まされねぇんだよ！」

なるほど、そういう事だったのか。
ここは港町故に、他所からの冒険者や戦闘ギルドの人間が常に多く立ち寄る場所だ。
そういう依頼は他所から来た人間に任せていたと言う事か。

「前線に出ろとは言いません、ただ一緒に来て下さい。その目で敵

を見て、そしてから判断して下さい。戦えとは言いません、ただ、そこで感じたままに行動して欲しいんです」

もし、目の前に迫る自分達の町の危機を見ても気持ちが変わらないのならば、もうこの人達に期待するのは止めよう。

それなら俺だけでも食い止めてみせる。

「一緒に、港まで行きましょう。皆さん」

足取りはどこか重いが、それでも付いてくる一同。

意外な事に、ギルドに残る人物は一人もいなかった。

港へと着くと、既に何人かの冒険者が陣取っていた。

その姿を良く見れば、怪我をした漁師を背負っているダインさんだった。

「ダインさん！　状況の説明をお願いします！」

「シュテル！　俺たちの船団が襲われたんだ。なんとか魔動船に乗って逃げてきたが、残してきた帆船は全滅だ」

海を見れば、遠くで帆が折れてしまっている船が何隻も漂っていた。

そして、その近くの海面が、白い波と、蠢く何かで脈動しているのが確認できる。

「皆さん、恐らくアイツらはそう時間もかからない内にここまで来ます。恐らく浜だけでなく、直接この町にも上陸するでしょう。俺は一番多くが上陸するであろう浜へと向います。決して町までは通しません。ですが、この港に来る奴等だけは、俺にはどうする事も出来ません」

皆、神妙な顔で俺の話に耳を向けてくれる。

不安な顔、悔しそうな顔、怒りに満ちた表情や、歯を食いしばっている冒険者達。

「ここは、皆さんの町です。この中にも、漁師を兼業している人もいるでしょう。今回襲われたのはその漁師仲間で、これから襲われるのはこの町の住人です。流行り病、いえ、食中毒の心配ももうありません。新しい事業だって、今町の盟主が協力して始めようと頑張っています」

ここで、変わらなきゃいけないのは町だけじゃない。

「これからなんです。この町はこれからなんです！　自分達に出来る事を、どうか考えて下さい」

余所者の言葉が、どれだけ伝わるだろうか。

『力があるから、そんな事を言えるんだ』と思われてしまうかもしれない。

それでも、力があるのは皆だって同じだなのだ。

この状況を、恐れているだけだ。

「わ、私達は戦うよ！」
「僕達の町だもん、おじさんたちだって、本当は戦えるじゃないか！　皆最近、少しずつだけど戦ってるじゃないか！　僕達よりも、よっぽど強いじゃないか！」

最初に声を上げたのは、一番若い二人の女の子。
イクシーに最近指導を受けているあの時の二人組み。

「おいお前等。まさかこの後に及んでまだ尻込みしようってか？　やられたのは俺らの大事な船で、俺らの子供やカミさんがいる町の一大事なんだぞ？　俺は戦うぞ、あんな連中、シーモウラスに比べたらどうって事ねぇ！」

肩を怒らせて、巨大な銛を担ぎ上げるダインさん。

「お、俺達だって、俺達だってやれる！」「そうだ、おれっちもやれる！」「あんな連中、焼いてくっちまうんだ！」

やがて、その気合が、使命感が、勇気が。
混乱や恐怖を上塗りするように伝染して行く。

場の空気が、俄かに熱を放ち始めるのを肌に感じる。
先ほどまでの暗い空気が、瞬く間に消え失せて行く。

「町の冒険者の鼓舞は完了したって訳ね」
「アルシャさん！　勝手に動いてしまい、申し訳ありません」
「いえ、貴方は一番大きな手柄を、もう既に立てたわ」
背後から聞こえて来た、聞きなれた凛々しい声。
「みんな聞いて！　住人の避難と町中の警護は教団で受け持つわ！皆は港や海に集中して！」
アルシャさんは純白の法衣と白銀の鎧を身に纏い、光り輝く己の武器を掲げてさらに士気を高めていく。
「神聖騎士団副団長、アルシャ・リーズロート。現在を持って、この町のギルドの戦闘員全ては私の指揮下に入ります！」
その威風堂々とした宣言に、さらに空気が白熱して行く。
明確な名前、権力と実力を示す肩書きは、本来こういう場所で使う物。
自分の役目を果たさんと、アルシャさんもまたこの場に来たのだろう。
「部隊編成をお願い、イクシー」
「了解であります。遠距離攻撃が可能な人物は、すぐに私の所に来るであります！」
指示を飛ばし、見る見る部隊を編成して行くイクシー。
「海岸沿いは激戦区になるわ。遊撃で少数精鋭、残りは後ろで防衛ラインを張ります」
「灯台の上に狙撃手を二名配置したであります。魔術行使が可能な

人物は、教団の人員と共に最前線で海に向って魔術を放つでありま
す」

皆が皆、自分の力を信じて動いている。
一つの意思で、団結している。
これなら、この町は大丈夫だろう。

「アルシャさん。俺は遊撃手として浜辺で戦います。許可を」
「私も一緒に戦うわ。ここの指揮は任せたわよイクシー」
「了解であります。前衛職の何名かは、二人と一緒に向うであります」

以前カイルーンと戦った海岸へと、数名の冒険者とアルシャさんを引き連れて向かう。
冒険者達は、途中の海岸へと向う道へ配置し、ここを防衛して貰う。

「あの魔物はトーパラスって言うの。固体その物はカイルーンより強いけど、絶対数が少なかった。だからカイルーンに縄張りを明け渡す事になったのね」
「でも、今見えるあの量はカイルーンよりも多いですね。それに」

次第に近づいてくるシルエット。
海の中から大量の人が浮かびあってくるようで、その異様な光景に息を呑む。

「恐らく、仲間を募っていたのね。それにあの大きな固体。差し詰め助っ人って所かしら？」

「かなり大きいですね、大きなクラーケンですねまるで」
「あら、それじゃあまたシュテルの料理が食べられるのかしら？」

軽口を叩きあいながら、二人で浜辺に立ち待ち構える。
お互いに、負けるつもりなど微塵も無ければ、気負う様子だって全く無い。

「すぐに、終わらせましょう」
「勿論です」

さぁ、掛かって来い。

# 第二十七話「二つ名持ちの実力」

浜辺に打ち寄せる波が、徐々に大きくなって行く。
先ほどまで乾いていた、自分達の立っている位置まですっかり湿ってしまっている。

「来るわ。少し下がりましょう」
「ちょっと待ってください、その前に」

以前、盗賊を拘束するのに咄嗟に思いついた、刃の檻。あれをアレンジして使えないだろうか？
思い浮かべるのは、船の上陸を阻害する杭の柵。
無数に飛び交う、鋭利なトゲ……。

「”サウザンドパイク”」
イメージを言葉にする。
そして、想像通りの光景が目の前に広がる。
波打ち際に幅５０メイル程に広がる無数の金属の槍。
これで、上陸する箇所を狭める事が出来た筈だ。

「これは、召喚魔術……貴方、希少属性持ちだったのね」
「ただ、これは俺の魔力が続く間しか維持出来ません。このまま戦う事はもちろん可能ですが」

この規模を維持し続けるのはさすがに至難だ。それでも、二時間程は持たせる事は出来そうだが。
アルシャさんも魔術を使うつもりなのか、目を閉じて集中している。

「私は魔術は使えない、それでもこの武器があるわ」

瞳を閉じたまま、武器を掲げ始める。すると、もともと銀光を放っていたそれが、より一層輝きを強めていく。

「フリューゲル、発動」

告げられた言葉に呼応するかの様に、槍が白いオーラを纏う。

これは一体なんなのだろう？　魔術ではないと言う事は、神聖術なのか？

「それは一体なんなんですか？　神聖術の一種ですか？」

「へ？　いや、貴方もユニークウェポン持ってるじゃない。ただのインヒレントスキルよ？」

生来の技能？　初めて聞いたぞ？

武器についてはかなり学者ギルドで調べた筈なのに。

「来るわよ！　あの槍の密度の薄い所は私が担当するわ。貴方は遊撃をお願い！」

「分かりました！」

今は知らない事に興味を抱いている場合じゃない。

俺も剣を抜き、神聖術を発動させる。

いつもより魔素の巡りが激しく、力が満ちてきてはいるが、それは魔術を維持してる影響だろう。

恐らく、いつもより早く効果が切れてしまう筈だ。

「オンオフを切り替えながら使う様にしないといけないな」

第一陣は、自分達の移動で起きた大きな波に乗り、その勢いに任せて一挙に雪崩れ込んできた。
しかし、そのお陰で何匹もの相手が槍の餌食となる。

それでも、柵を越えて来た魔物も何十と居る。
すぐさま砂を踏み込み走り出す。

さっきの波で砂浜全体が湿ったお陰で、多少は動きやすくなっている。
今度は踏み込みの瞬間だけ強化する様にして、目に映るトーパラスへと一直線に向う。

カイルーンと同じで軟体生物を祖に持つのか、簡単に身体に刃が通る。
なので、ひたすら隙を見せている固体を見つけては、避けられない速度での突きを頭部に放つ。

そしてまたすぐに、次の標的へと向う。
だが、そう上手く事が続くなんて事は無い。次第に離れていては危険だと分かったのか、一箇所に固まるようになる。
それだけじゃない、どうやらこいつらは魔術も使えるようだ。

聞き取れない言葉と共に、氷の飛礫が飛んできた。

「アルシャさん！　こいつら魔術も使うみたいです！」
「分かっているわ！　そっちも気をつけて！」

一瞬見えた彼女は、まさに獅子奮迅の活躍を見せていた。
一体全体、三半規管がどうなっているのかと疑問に思える程の、回転にに次ぐ回転、そして切り返しの逆回転を繰り返していた。
猛烈な回転なぎ払いが右へ左へと振るわれ、周囲の魔物が次々に細切れにされて吹き飛んでいた。

「これが……本気のアルシャさんか。負けてられないな！」

今度は、俺も魔術を使い相手の魔術を相殺する。
無数の細かい刃に邪魔された飛礫が、キラキラと光を乱反射させている。
その光景の所為か、一瞬動きを止める魔物の塊。

「スティルスレイ！」

走り抜けながらの払いを放ちながら、タイムラグを計算して魔術も発動させる。
連続で使う事は出来ないが、単発としてなら剣の邪魔にもならない。

俺の直線状に居たトーパラスが、最初のなぎ払いで身体を引き裂かれ、続いて発動したもう一つの斬撃でさらにその数を減らす。
まるで、俺の後からもう一人が駆け抜けたかの様な波状攻撃だ。

「襲撃のペースは落ちてきているわ。一旦合流しましょう！」
「はい！」

離れて戦っていたアルシャさんと一先ず合流し、数の減った海を

見渡す。
恐らく、ここでの上陸は厳しいと判断した為、群の一部が港へと向ったのだろう。
さすがに海を泳いで追いかけるわけにも行かず、大人しくここを防衛する事にした。

「最初に見えた、あの大きな固体の姿が見えないわね。港の方に行ったのなら、何か動きがある筈……」
「もしかして、俺達が居なくなるのを隠れて待っているのかもしれません」

一応、カイルーンは亜人種に分類される為、多少は知能がある。
それならば、当然そのライバルとも言えるトーパラスも同じくらいの知能があっても不思議じゃない。

「なるほど、考えられるわね。一旦、港へと戻るフリでもしてみる？」
「試す価値はありますね」

隠れる前に、一先ず今残っている残党を一掃する。
そして、さも「仕事が終わった」といった様子で町の方へと進む。

勿論、途中で近くの森へと入り込み、そこから海へと戻って様子を探る。

「考えすぎだったかもしれませんね。少し前にゴブリンと戦った所為で疑り深くなってしまっていた様です」
「……いえ、貴方の予想通りみたいよ。ほら、見て」

言われた通り、再び海へと視線を向ける。

俺にはただ、普通のトーパラスが鉄槍を掻い潜ろうとジタバタしている姿しか見えないのだが。

「沖の方よ。どうやら、また大きな波を起こすみたいね」
「本当だ、最初よりも大きいですね。あれで一気に超えて来るつもりか」

そうか、あの大きさじゃ柵の切れ目すら通れないか。
それじゃあ、ここは大人しく波に乗ってくるのを待つとしようか。

「なるほど、そういう事ね」
「ええ、動きを完全に止める事は出来なくても、ある程度自由を奪えますから、その隙に決めて下さい」

海岸沿いに展開した魔術を消し、今度は波に乗ってきたあのリーダー格に狙いを定める。
高さ5メイルはあろう大きな波を起こして、一気に乗り上げてくる。
もしこれが本当の津波だったら、今頃港も大変だっただろう。

森は少し高い位置にあるのだが、それでもここまで波が襲ってくるかもしれない。
魔術の発動に気を取られて飲み込まれないように、アルシャさんと俺は木の上へと登った。

「今です！」
「分かったわ！」

先ほどとは違う、一際大きな槍を出現させる。
魔術講習の時に始めて使った、アイアングレイブを改良した“スティルグレイブ”
狙い通り、その巨大な槍が突然砂浜から出現した為、あの大きなトーパラスは片足を砂浜に縫い留められる。
そして――

「沈みなさい」

頭上に零れ落ちてきた呟き。
どうやって移動したのか、木よりも、波よりも、相手よりも遥か上。空中に移動した彼女は、そのまま落下する速度を乗せた一撃を放つ。
鈍い爆発の様な音と、僅かに揺れる地面。そして一瞬遅れて到達した衝撃波。
周りの木々をも揺らし、濡れて重くなったはずの砂さえも衝撃で間欠泉の様に打ち上げられる。
まるで、巨人が見えざる拳でも叩きつけたのかの様な一撃だった。
本当に、この世界の人達は計り知れない……。
確認するまでも無いが、駆け寄ってアルシャさんと敵の様子を伺

う。

「大丈夫ですか？　仕留めましたか？」
「大丈夫よ。久々に本気を出せてスッキリしたわ」

縦真っ二つに両断された身体の中心から、ケロリとした様子で此方へ振り返る。
着地も完璧、狙いも完璧だった様だ。

「見て、取り巻きが海に戻っていくわ」
「倒されたのが解るんですね、あいつら」

どうやって察知したのかは解らないが、港の方からも敵が引いていくのが見える。
これで一件落着だろう。

「さて、町の様子も気掛かりだし、戻るわよ」
「あ、はい。あの、討伐証明部位とかどうしましょう？」

正式な依頼ではないが、一応ポイントになる筈。
だったら残ってる部位だけでも……いや、こんな時にハイエナみたいは真似は止めておこう。

「そうね、あの大きいのくらいは取っておきましょ。他のは回収するのも面倒だし、何より私はもうポイントなんて必要ないのだし」
「分かりました」

そう、アルシャさんはＡ＋ランクで、Ａ＋以上からはポイントではランクアップが出来ない。
ただ、ここまで強い人ですらＳでは無いなんて、一体どんな条件

が必要なのだろうか。

「無事回収できました」

「では戻りましょう。この様子だと、滞在は延びそうね」

カイルーンと同じで、腕に擬態していた触手から水晶体を取り出す。

やはり身体が大きい事もあり、その大きさも直径３０センチくらいはありそうだ。

町へと戻るため、海岸沿いを進んでいく。

「美女と浜辺を散歩」なんて言えば、随分と嬉しいシチュエーションなのだが、残念ながら周りは魔物の血液と残骸だらけだ。

なんて、ちょっと抜けた事を考えながら、町へと帰還するのであった。

## 第二十七話「二つ名持ちの実力」（後書き）

余り、強さを表現しきれていないかもしれません。
ただ言えるのは、シュテルより上はまだまだ沢山居るという事です。

## 第二十八話「帰還」（前書き）

これにて、第三章の本編は完結です。

# 第二十八話「帰還」

「先頭の馬車には出来るだけ荷物を積まないように！　個人の荷物は全て三台目に積むように！」

「それでは、帰りの馬車の組み分けは、行きと同じでいいでありますね？」

慌しく出立の準備を始める一行。

それぞれお土産なんかも買ったのだろう、行きの時よりも荷物が増えた分、積み込みが難航している様だ。

そう、今日はいよいよこの町から出発する日。

かれこれ三週間以上ここに滞在していたのだ、さすがに名残惜しい気持ちが強い。

まぁ、教団はもっと時間がかかると見ていたらしく、半年は戻れない覚悟をしていたとか。

もしそうなっていたら、俺はどうなっていたんだろう？

それと、あの魔物の侵略は、結局こちらには特に目立った被害も無く、それから再び現れる事も無かった。

恐らく、親玉を倒されて諦めたのだろう。

港の方は、その殆どが陸に上がる前に仕留められ、なんとか到達した魔物も、すぐに町の冒険者に討ち取られたそうだ。

実質的に被害は、最初に沈められた帆船二隻だけだった。

「シュテルが居なくなると、また依頼が溜まっちまうかもしれんなぁ」

「おいおいチーフ、もうそんな事言いっこなしだ。これからは俺らがしっかりこの町を守るからよ」

そして、当然の如く、見送りには町の大半の人間が駆けつけてくれた。

たしかに、病から魔物、そして仕事の問題まで全て解決されたのだし、当然の結果かもしれない。

飛び込み魚のオヤシさんまでお店を放り出して来ている始末だ。

「また来る事があったら、俺の宿に泊まると良い」

「俺の店もいつでも立ち寄っておくれ！」

普段は寡黙で、仕事一本の宿のおじさんまで来てくれている。

この二人にはオイスターソース、いやここでは”ミルシュテルソース”という名前で売り出すそうだ。

それを使ったレシピをノートに書き記して渡してある。

何気に、宿屋のおじさんも料理好きだったのだ。

と言うか、最後まで反対したのに結局その名前で販売するのか……。

なんだか、自分の名前が商品名に使われるなんて複雑な気持ちでいっぱいだ。

「イクシーせんせ～！」
「いっちゃ嫌だよ～！」
「よしよしであります。いつかもっともっと強くなって、ガルヴェウスまで二人で来るであります。そうしたら、二人はもう一人前の冒険者であります」

少し離れたところで、あの二人組みとイクシーが、師弟愛？　を表すかのような一幕を周りに披露している。
傍から見れば全員同じ背格好なので、感動的な場面の筈なのに、何処か微笑ましい。

「お父さん、僕もっともっと修行して、いつかこの町でお店を出すよ！　だから、また行ってくるね」
「おう、行って来い。お前はお前の好きな道を行け、そして究めて来い！」

親子の別れや、親しくなった友との別れ。
それぞれがそれぞれの別れを交わしている。

「シュテルさん。報酬の件だが、やはり一部を君が自由に出来る金として、我々が管理する事にしたよ。例の件なんだが、それはその金から、君が好きな額を動かすように、という事で構わないか？」
「う～ん、じゃあ名義だけは使わせて貰ってもいいですか？　何かと面倒な事になりそうな気がしますので」
「ふふ、本当に面白い人だ。それじゃあ、また何かあったらいつでも私達に連絡をするといい」

そして、町の盟主の方々。
来ているのは各ギルドの長だけで、作業員や構成員は今も新たな事業に向けて精力的に活動しているそうだ。

挨拶を終えて、皆から少し離れて住人を見渡す。
その表情は一様に笑顔で満たされていて、一部がその瞳に光るものを浮かべながらも晴れやかな様子。
もう、何処にも陰りなどありはしなかった。

「シュテル様、準備が整いましたので此方へ」
「了解しました。それでは皆さん、どうかお元気でー！」

御者の呼びかけに応え、大きく手を振り別れの挨拶を言う。
そして、一斉に返ってくる声援。

この依頼を受けてよかった。
ここで働けてよかった。
皆の役に立ててよかった。

この世界に来てよかった。
改めて、そう思った――

町へ出て暫くは安全と言う事で、俺はアルシャさんに呼ばれて一番後ろの馬車の近くへと来ている。
何やら大事な話があるそうだ。

「シュテル、今回の依頼の事だけど、街に戻った後も他言無用、一切の情報を与えてはダメよ」
「それは……何故です？　解決したのなら、もう口止めをする理由もないのでは？」
「いえ、病の事だけじゃないの。今回私達は、アクラスへの定期視察へと向った。貴方はたまたま、同じ方向への護衛依頼を受けていただけ。これが今回の筋書きよ」

どうやら、この依頼にはまだ裏がある様だ。

「今回の事は教団ギルドと冒険者ギルドの独断。ほかのギルドには一切話を通していないのよ。それを快く思わない連中だっているの。

だから、今回の事は他言無用ってわけ」

ギルドの上層部も、どうやら一枚岩では無いようだ。

「それでも、やっぱり人伝に伝わってしまうんじゃないですか？治療団だと町の皆にも名乗っていましたし」

「私達がどこでなんと名乗ろうとも関係ないわ。たまたま行った町で病が流行っていたから、そういう活動をした。それだけよ」

「なるほど……」

随分徹底している様だ。もしかして、案外ガルヴェウスは危ういバランスの上で成り立っているのかもしれない。

今回の事でその均衡にズレが生じてしまう可能性があるのなら、俺も今回の事はどんな事があっても口にしない誓おう。

「それにしても、ほんっとうにいいのかしら？　そのランクなら間違い無く部隊長クラスから始められるわよ？」

「アルシャさん、あんまりしつこいともう一緒に仕事しませんよ？」

あの巨大な魔物は、なんとBランク相当だったらしく、あの証明部位を渡す事で俺はB－ランクへと昇格した。

最初は「倒したのはアルシャさんだから」と遠慮したのだが「二人で倒したんじゃない。分けられるものじゃないし、貴方が貰っておきなさい」と言われ、そのまま俺のポイントになったのだ。

「まぁ、さすがに貴方みたいな人を引き抜いたら幾ら温厚な冒険者ギルドも黙ってはいないだろうし、しょうがないわね……」
「相談くらいには乗れますから、それで我慢して下さいよ」
「はぁ……せめてもう少しウチの団がしっかりしていたら……」
彼女はまたまたぼやき始める。それ程までに神聖騎士団の団長は困った人なのだろう。
また暫く、ここで愚痴を聞かされるハメになりそうだ。

その後、アクリヴァーの村にも立ち寄ったのだが、商人や旅人の規制が解除された為、以前とは比べ物にならない賑わいを見せていた。
そこで一泊し、その後も野営を繰り返してガルヴェウスを目指す。
道中は魔物が襲ってきたりもせずスムーズに行軍する事が出来た為、アクラスを出て五日目で、もうガルヴェウスが見えてきた。

「依頼を受けてから、今日でもう五週間か……皆元気にしてるかな」
街に残された仲間との再会を心待ちにしながら、徐々に大きくなっていく塔を眺めるのであった。

## 第二十八話「帰還」（後書き）

この後は、短い閑話を数話と、二章後半で出てきた登場人物から、ここまでの主に活躍した登場人物の紹介をしたいと思っております。

第四章の連載は、また新たにプロットを練り直すので、少し時間がかかってしまいます。

ここまでの感想、評価等、頂けましたら、これからの活動のエネルギーにさせて頂きます。

## 閑話「ある親子の事情」

緊張してきた。
自分の家なのに、どうしてこんな思いをしなきゃいけないんだろう。

僕は、実家の玄関の前で震えている。
別に季節外れの寒気なんて事ではないし、雨だって降っていない。
恐いからだ。

家族が心配だからと、少々強引な手段で治療団に入ったものの、
自分は殆ど家出同然で飛び出した身。
一年以上も連絡も入れていないんだ、お父さんになんて言われるか……。

「あー！　お兄ちゃんだー！！！！」

突然の大声に、身体がビクリと震え上がってしまった。

「あ、ヴィニー！　久しぶりだね！」
とは言っても、声の主が自分の妹だと分かって心を落ち着かせる。
何処かに出かけていたのかな？

「ヴィンス……おめぇなのか……」

安堵していた所に聞こえてくる、もう一つの声。
今の僕にとっては、どんな魔物よりも恐い、お父さんだった。

「お、お父さん……ただいま」

無言。妹は既に家へと入ってしまい、援護を得るのは無理みたいだ。
お父さんも、今にも怒鳴りだしそうな感じで此方を睨み付けてくる。

「なんで帰ってきやがった！！！！」
「ひ！」

それは、心配をかけた所為の怒りではなく、勝手にいなくなった事への怒りでもなく――

「帰ってきちゃ、いけないのかよ！？」

帰ってきた事への、怒りだった。

僕はそのまま、診療所へと走った。
宿に戻ろうとも考えたけど、シュテルさんにこんな顔を見せたくない。
それに、自分は実家で寝泊りするってもう言っちゃったし。

「僕の事、もう家族だと思っていないのかな……」
さっきの言葉の事を考えると、そうとしか思えなかった。

走る勢いも失せて、まるで体がなにか錘でもつけられたみたいに重くなってしまい、とぼとぼと歩き始める。
そして、ようやく診療所へと辿り着いた。

僕も、仕事に打ち込んで嫌な事を忘れよう。
こんな気持ちで治療に当たるなんて良くないって分かってるけど、
それでも……。

「おや？　君はヴィンス君ではないかね？」
「あ！　院長先生」
「この町に戻ってきたのかね？」
「は、はい。実は、僕も治療団の一員なんです」

ここで暮らしていた時に、何度もお世話になった院長先生が僕を
見つけた。
やっぱり、何人も子供を見てきても、全員の顔を覚えてるらしい。
それがなんだか、今の僕にはとても嬉しくて……。

「おや、どうかしたのかね？」
「先生……僕……」

もう、堪えられそうになかった。

「なるほど。ダインの奴め、言葉が足らん男だ」

僕はこの町に来た経緯と、一連の出来事を全て話した。

「あやつはな、恐らく『この状況の町』に君をが帰ってきた事を怒っておるんじゃよ」
「え？」
「今、あやつの、君のお母さんが入院しているのだよ。さっきまで君の妹とお見舞いにきていたよ」
「お母さんが！？　大丈夫なんですか先生！」

告げられた事実。やっぱり、僕の家族も被害にあってたんだ……。
やっぱり、ここに来て良かった。

「あやつは、『息子が今この町にいないのがせめてもの救いだ』と言っていたよ。君の事を思ってね」

その言葉で、さっきのお父さんの言葉の真意が分かった。

「だから、そんな事を言ったんだろう。どうか許してあげておくれ、そしてもう一度キチンとあって話をするんだ」
「はい！　でもその前に、お母さんの様子を見てきます」

本当に、よかった。お父さんは僕の事をちゃんと考えていてくれたんだ。
だったら、僕だってキチンと自分の考えを伝えなきゃ！

思えば、僕は町を飛び出す前に、真剣にお父さんと向き合っただ

ろうか？
一方的に自分の言葉をぶつけただけじゃなかっただろうか？

僕の夢を、ただの子供の戯言としか思わなかっただけで、本当はキチンと話していたら……。

そんな、別な未来の事を考えながら、過去の自分を振り返っていたら、いつの間にか玄関まで着いていた。
さっきとはまた、別な理由で入る難いなぁ……なんて言えばいいんだろう。
さっきみたいに、後ろから声でもかけてもらえればいいのに……。

「ヴィンス！」

はは、驚いた、本当に声が掛かってきた。
振り返らなくても、お父さんがどんな顔をしているか、簡単にわかりそう。

「違うんだ！　俺はそういうつもりで言ったんじゃ」
「お父さん、分かってるよ。家に入ろう……話したい事が、沢山あるんだ」

きっと、心配して町中を駆け回っていたんだろう。
もう夕方になるのに、ヴィニー一人置いて行くなんて無用心だなぁ。
僕は背を向けたまま、家へと促す。早く入ってしまわないと、濡れた目がさすがに冷たいや。

「あ、ああ。その前に、よく戻ってきたな、ヴィンス」
「ただいま、お父さん」

ようやく振り返る。
ほら、やっぱりお父さんも僕とおんなじ顔してるじゃないか。

## 閑話「その力とは」（前書き）

今回、短いです。

## 閑話「その力とは」

深い闇の中に広がる、無限とも言える書庫。
一冊一冊が、まるで百科事典の様に分厚く、一冊読むだけで常人なら投げ出してしまいそうな程だ。

ここは、知識の泉の一角。
これまで得てきた知識や経験を、全てまとめてある図書館の様な場所。

そこで俺は、一人過去の記憶や知識を読んでいた。
思い出すのではなく、客観的に読む。それがどれほど便利であるか、どれほど常人より有利であるかは、恐らく持ってみないと分からないだろう。

今日も、そこで俺は考える。
今の状況を好転させる方法を、上手く世界を見る方法を。

「俺の経験と力……ね。随分と皮肉な事を言ってくれた物だな神様は。俺の経験なんて、戦いの歴史より、策略と裏切りの歴史の方が多いじゃないか」

本当の意味で、俺に全力で事に当たれと言うのなら、人の身に抑える必要などなかったはずではないか。
毒を取り上げられたのなら、新たな毒を作ればいい話だ。

尤も、毒が毒として使われるとは限らない訳だが。

「ふむ、やっぱり自分の一度得た知識をいつでも見れるのは便利だ。これなんて中々面白かった」

まぁ、殆ど毎日ダラダラと物語を読んで過ごしている訳だが、そろそろ飽きてきたな。

「この、木馬の話は面白かった。中々興味深いしな」

こうも孤独で暇を持て余すと、自然と独り言も多くなってしまう。身体を返してもらった時、妙な癖になりかねないな……。

今、アイツは何をしているのだろうか。

時折新しい本棚に本が増えていくが、それを読んでも中々状況が掴めない。

「これなんか、また新しい食材の知識じゃないか。それにこっちは……なんだアイツ、人間関係で悩んでいるのか？　人に恐がられない方法だと？」

お前は思春期のガキか！　折角少しは成長したと思ったのだが、本当に不安定な奴だな。

「まぁ、最初から完全な人間なんていたら、そりゃ化け物だ。化け物は人の世界じゃ暮らしていけないからな」

本当、人生何がプラスになるか分からない物だ。今はもう暫く、ここで読書を楽しませて貰うとしようか――

「お、また増えた。なになに？　一から始める大工仕事？　何やってんだ本当」

## 閑話「その力とは」（後書き）

未だに、何を考えてるかよくわからない男（主人公）
次回更新は遅れてしまうと思います。
申し訳ありません

## 閑話「バカンスを楽しめない人々」（前書き）

今回は余り本編に関係のないお話です。
合いも変わらず自由に過ごす、カノンの仲間達。

## 閑話「バカンスを楽しめない人々」

「リオちゃ～ん！　ゲームしてる暇があるなら、少しは手伝って下さいよ～！」
「んーんー揺らすなー！　今ルシ兄に合流するとこなのー」

もう、リオちゃんったら全然仕事しないんだから。
たしかに、今は休暇中ですよ？　それでも一応幹部なんだから、色々する事だってあるでしょう。
それにルシフェルさんもルシフェルさんです。そりゃあ今まで働きすぎだとは思うけど、どうせ休暇を過ごすなら、もっと有意義に過ごしてもらいたいものです！

「ちゃんと聞いてくださいってば。予定が延びたって言っても、またすぐに出発するんですから。ちゃんとメディカルチェック受けて下さいね？　それと、引継ぎ用の資料も作っておいて下さい」

私の誠意がようやく届いたのか、頭に機械を着けたままこちらを振り返り……。

「リヴァルスは真面目だねー。そんなに働いたって、誰も給料なんてくれないのに」
「そういう問題ではありません！　もう、頼みのユエさんもレナさんと一緒にどこかいっちゃうし、カノンさんも勝手に予定を変更するし」

やっぱり私の言葉程度で簡単に心を動かしたりはしないでしょう

ね、わかってましたよ、ええ。
本当、上の不始末は全部中間の私に来るんですよ？　少しは私やベリスの苦労を考えて欲しい物です！

「でもさー。今回の世界で、リヴァルス待機組だったじゃん？　その分がんばんなよー」
「待機中サボってたとでも思ってるんですか！　情報操作も、作戦指示も、私とユエさんが二人でやってたんですよ!?　失礼な事言わないで下さい！」
「おーコワ！　もう、わかったよー。ルシ兄と少し話したらログアウトするから、先にメディカルルームに行ってて」
「はい、待ってますからね」

本当、子供の姿のリオちゃんはだらしなくていけません。
早く大人の姿に戻ってくれませんかね？
せめてカノンさんが居れば少しは締まりもよくなるのに、本当何処に行ってしまったんですか、もう！

「はい。コールドスリープ申請を受理しました。次の召集はまた別

な世界へと到着してからでしょう。それでは、良い眠りを」

また一人、永い眠りに着く。

人は、この装置を使わないと自分の意識を止める事が出来ない。

それが不便だと思うのは、きっと私が機械だからなのだろう。

「ベリスーお待たせー」

「リヴァルス。リオ様の姿が見えないのですが」

「もう少ししたら来るそうでーす」

だらしなく、私のデスクを占領しだす。

何故、私にだけこんな態度なのですか。

「今度は誰が眠ったのー？　折角の休暇なのに」

「ケイアス様です。『休暇を過ごす相手がいねぇ』と言葉を残していきました」

休暇とは、誰かと共に居なければ過ごせない物ではありません。

あの方は、どこか故障しているのでしょうか。

「あーケイアス君は”リオさん”一筋だからさ、しょうがないんじゃない？」

「私には理解しかねます」

どちらも同一人物ではないですか。

造形にこだわりでもあるのでしょうか？

「ベリスもそろそろ、ラズル爺みたく感情用のメモリー増設したらー？」

「ラズルは戦闘特化型なので、拡張の余地があっただけです。私は

演算特化型です、その様なスペースはありません」
「あはは、サラリと爺の事馬鹿にしたでしょ今」

馬鹿、知能が自分より劣っている者、言動に知性を感じられない相手への蔑称の事。
という事ならば。

「その通りになります」
「うーわ。爺が聞いたら泣くぞ～」
「涙腺を再現していたと記憶していませんが」

そこまで完全に再現する必要性を感じません。
人に擬態するのならば、最低限の容姿だけで十分の筈。

「そういうとこ、やっぱり拡張した方いいと思うんだけど」
「必要ありません」

休暇というものが、私にはイマイチ理解出来ません。
いつもと何も変わらない時間を過ごすだけです。

## 閑話「バカンスを楽しめない人々」（後書き）

登場人物紹介を投稿した後は、暫く間が開く事になります。
なるべく早い再開を目指しておりますので、今しばらくお待ち下さい。

## ここまでの主な登場人物（前書き）

第二章後半で出てきた人物と、第三章での主な登場人物の紹介になります。

## ここまでの主な登場人物

カノン・シュテルン
種族　人間？（ヒュマリア？）　年齢不明

殆ど出番が無くなってしまったが、一応本来の主人公である。
シュテルを観察してる内に、何やら新たな計画を思いついた模様。
彼が何を考えているのかまだ明かされはしないが、どうして自分が世界に呼ばれたのか、神は自分に何を期待しているのかを、薄々ながら感づき始めている様子。

シュテル
種族　人間？（ヒュマリア？）　年齢　２３歳（？）

自分のベースになった人格から、徐々にシュテルとしての人格を形成し始めた、この物語のもう一人の主人公。
知識量と、ベース人格の差から言動が少々不安定だったものの、徐々に自分の持つ力、知識を生かすために自我を強め始める。
生来の人の良さに加えて、何か人に役に立ちたいと言う思いが強くなる。
そして、段々と増してくる本来の力を受け入れながら、その強さに磨きをかけて行く事になる。

ファルクス
種族　半竜人（ハーフケイル）　年齢　２６歳

余り多くはないリザケイルの内、さらに珍しいヒュマリアとの間に生まれた青年。
人懐っこく、誰からも好かれやすい性格なのだが、少々おっちょこちょい。
竜人特有の膨大な魔力と、人の得意な魔力操作を兼ね備えた、まさに魔術師になる為に存在しているかの様な特性を持つ。
しかし、本人がその操作を苦手としていて、大規模な魔術を多様している所為も有り余り他人と組む事がない。
相棒と一緒に頻繁に魔術の修行をしているのだが、制御の方はまだまだと言った様子。
ちなみに、竜の血を引く種は総じて他の種よりも長命である。

ガーラント
種族　獣人（ワウファング）　年齢　２４歳

犬を祖に持つ獣人の青年。
この種族の特徴である耳は、祖になった種で幾つかパターンが存在しており、彼の場合は真っ直ぐ下に垂れ下がり、髪と見分けがつかない物だ。
冷静沈着、しかし時には突っ込み役としても機能する。
それでいて仲間思いの人物。
得の両端に刃を持つ短槍を使い、接近戦を得意とする。
また、水の魔術にも適正があり、少しの傷程度なら治療する事も出来、まさに万能である。

現在はファルクスと共に、首都を越えて王都まで足を伸ばしている。

ミステ
種族　獣人（マウティル）　年齢　１６歳

ガルヴェウスの冒険者ギルドに所属している女魔術師。
”雛鳥の学び舎”の卒業生で、現在は自分より少し年上であるが、サラとスフィアと共に行動している。
また、学者ギルドの資料館の受付の仕事もしているが、この時は人当たりもよく、ただのかわいらしい少女と言った様子。
土と水の魔術を独自に合成し、様々な特性を持つ霧を発生させるという戦法を取るのだが、敵の近くにいる前衛まで一緒に巻き込んでしまうため、ギルド内では『前衛泣かせ』と呼ばれていた。
今では制御も上達し、自由自在に霧を発生させるという非常に優秀な魔術師に成長しつつある。

サラ
種族　獣人（バニティル）　年齢　２０歳

ガルヴェウスの冒険者ギルドに所属している弓闘士の女性。
バニティルには基本、黒い体毛を持つものと、白い体毛を持つもの、そして耳が垂れているか否かと４種族に別れている。
また、バニティルは基本的に温厚で芸術を愛し、特定の食物をこ

よなく愛すると言われている。
その反面、そんな偏見で見られるのを酷く嫌う者も多く、サラもそんな一人である。
スフィア同様に風の魔術に適正があり、矢に風を纏わせて射るという技術を使いこなし、飛距離、制度共に一流と言ってもいい。
露出の高い服を好み、自慢のプロポーションを誇示するものの、決して男性関係にだらしないわけではない。
これも一種の種族への反抗である。

レイニー
種族　不明　年齢　不明

ガルヴェウスに住む錬金術師の女性。
どうやら普通の人間ではないらしく、錬金術ギルドの今の長よりもさらに高齢らしい。
少なくとも、鍛冶ギルドの先々代とも交流があった模様。
深い知識を持ち、シュテルの剣を一目見ただけでその異常さを見抜き、そしてシュテルの正体を追求するなど、中々侮れない女性。
また、やはり錬金術師としても超一流で、あっと言う間に剣の魔力路を開通させたり、いとも簡単にシュテルの鎧を完成させ、改良まで加えてしまう。

アルシャ・リーズロート
種族　竜人（ハーフケイル）　年齢　２９歳

ガルヴェウスにある教団ギルド総本山、その中でも秀でた能力を持つ者達だけで構成されているクラン『神聖騎士団』そこの副団長を務める女騎士である。

不満とまではいかないが、仕事を放り出して教団を抜け出す教皇と、自由奔放に各地を飛び回る団長の代わりにあらゆる仕事をこなさねばならなく、いつも気苦労の絶えない人物である。

戦闘の実力は、二つ名を与えられた事から分かる様に、ガルヴェウス屈指の強さを誇る。

熟練された神聖術に、さらにユニークウェポンに備わっている生来の技能（インヒレントスキル）を使いこなし、常人では考えられない様な強さを持つ。

イクシー
種族　人間（ヒュマリア）
年齢　２１歳

神聖騎士団に所属している小柄な女性。

まだ歳若い彼女だが、その実力は分隊長を務める程である。

一般教団員からの人望も厚く、戦闘能力も申し分無い人物で、次に二つ名を拝命するのは彼女だろうと呼び声も高い。

また彼女はフォースヒルトと言う、発動具と剣の融合の一種の完成形の武器を使いこなす数少ない人物で、氷の刃を作り出しレイピアの様に使う事も出来れば、そのまま魔術に変化させて戦う等、その戦い方は変幻自在そのもの。

そして、彼女はそのスペックを完全に引き出す剣技と魔術操作を持っている。

## プロローグ「嵐の前のなんとやら」（前書き）

章分けの為、プロローグのみを先に投下させて頂きます。

## プロローグ「嵐の前のなんとやら」

騎士ギルドの最上階。
ある意味、己の地位を体言したような間取りにあるギルド長の執務室。
私は今日も、ここで自分の胃を痛めねばならんのだ。

「ここ半月近く、妙な事が続くな。街道の舗装だったか？　万年金欠の教団がそんな事をするとはとても思えんが」
「は、はぁ。作用で御座いますな。どこか優秀な出資先でも見つけたのやもしれません」

何故、私がこんな若造の顔色を伺わねばならんのだ。
王国騎士団を退職した後は、騎士ギルドで若造をこき使って面白おかしく余生を過ごそうと思っていたものを！
そもそも、何故ギルドの長がこんな若造なのだ。話が違うではないか！

「ところでアルギス。例の冒険者が長期任務を受けて街を離れたそうだが、それが何時ごろか知っているか？」
「い、いえ……」

例の新人、あの小生意気な男か。コイツといいあの男と良い、どいつもこいつも私を馬鹿にしくさってからに！

「丁度、そう丁度だ。教団が街道の舗装箇所を探る視察に出た辺りだそうだ」
「そ、それが何か？」
「ふむ、君は年の功と言う言葉を知らないのか。君の意見を聞いて

みたかったのだが」

なんと傲慢な物言いか！　どこの馬の骨ともわからない分際で、カームホルン家の当主である私を無能呼ばわりするか！

思えば、私がこんな立場になったのもあの男の所為だ。

私があの日、あんな男にコケにされたのがケチの付き始めではないか。

あの後、他のギルドの連中に向けられたあの目！　そしてこの若造の言葉！

何が『やはり貴様ではなく、私自らが出向くべきだったか』だ、あの男の何処にそんな価値があると言うのだ！

「恐らく、またあの貧乏人連中が何かでしゃばった真似をしたのだろう。大方、冒険者ギルドの爺様と組んで、な」

「そ、そうでございますか」

さっきから、何を言いたいのだこいつは！　くそ、どうして私がこんな思いをせなばならんのだ！

「私達の駒になりえないのならば、下手に接触しない方がいいか。それとも――」

ふん、随分と御執心じゃないか。男色の気でもあるのかこいつは。

それとも、あの男がそんなに危険だとでも言うのか？　それならば、そうだな……。

「まだ居たのか。もう下がって良いぞ」

「了解致しました」

今は、大人しく従っていてやろう。
その横暴な態度も、鼻につく物言いも、全部、全部だ。
貴様をその地位から引きずり落とし、目に物見せてくれる！

まずは、そうだな。たしか最近牢に入れられた盗人共があの男と関わりがあったはずだ。
今に見ておれ、若造共めが……。

## プロローグ「嵐の前のなんとやら」（後書き）

本編の方は少しづつ執筆を開始していますが、まだ少し時間がかかってしまいます。
もう少しストックが溜まり次第、少しずつ投下していきたいと思っています。

# 第一話「依頼達成」

五週間ぶりの鞘は、以前と変わらない様子でこの場所にある。
相変わらずレンガには所々ヒビが入っているし、一部の窓が板で塞がれていたりだ。
コレじゃ教団ギルドの宿舎と良い勝負かもしれないな、見たことは無いけど。

それにしても、今月でここから出なきゃいけないのか。
まさかこんな短期間でここまでランクが上がるとは思っても見なかった。
正直、最初の判定をもっと厳正な物にして、限界まで実力を見る物にしたら、案外もう少し上のランクから始まっていたかもしれない。
いや、でもそうなっていたら、下手に調子付いて躓いていたかもしれないな。

「よし、とにかく帰宅だ帰宅。久しぶりにあの大きな湯船にも浸かりたい」

意気揚々と凱旋だ。別に出迎えてくれる人がいるわけではないが、気分的に、だ。

「おやアンタ！　最近見かけなかったけど、どこ行ってたんだい？」
「ご無沙汰してますオーリエさん。ちょっと長期の依頼だったんですけど、もしかして鞘にも連絡を入れておいたほうがよかったですか？」

「うんや、別にそんな決まりはないさ。ただ、アンタ色々と面倒事に巻き込まれただろ？　ちょっと気になってたのさ」
「そういえば、そうでしたね。心配かけてしまったみたいですみません」

たしかに、何だかんだで結構色々やらかしてるんだよなぁ。
まだ露呈はしていないけど、いずれ鍛冶ギルドの方の発表だってあるのだし。

挨拶もそこそこに自室へと戻ったのだが、まだ二人は戻ってきていない。時間的に、もうそろそろ夜の依頼を終えて街に戻ってくる頃だと思うのだが。

「ありゃ、部屋の時計止まってるのか。後でオーリエさんに言っておかないと」

こういう時、自分の時計が欲しくなる。
なんでも、そこそこな贅沢品に分類されるらしく、持ってる人間は余り多くないとか。
ヨザークさんもレストさんも持っていたから、案外一般に普及してると思ったのだが、そうでもないらしい。

ともあれ、装備を外して保管し、着替えを持って共同入浴場へと向う事にした。
もしかしたらまだ時間じゃないかもしれないが、少しくらいなら待ったって構わない。
それだけ、広い浴槽に飢えているのだ。
やはりシャワーや小さなバスタブが一般的で、足を思いっきり伸ばせる浴槽なんて余り無いようだ。

「おや、ちょっとまだ早いぞシュテル君。もう二十分程待ってくれんかね」
「ガンドールさん！　只今戻りました、依頼の方も無事――」
相変わらず清掃員として働いているガンドールさんに、思わず敬礼と任務の達成報告をしてしまう。
ここで働いているのは分かっていたのに、やはり不意打ちと言うか、突然だと頭が混乱する。
「おっと、ここでは唯の清掃員のじじいだからの。その件については後日呼び出すことになるから、今はナシじゃ」
「そうですね。すみませんでしたお爺さん。じゃあ早くお風呂に入りたいので、俺も手伝いますよ」
態度を改め、自分も一緒に浴室の掃除を始める。
念のため上半身の服を脱ぎ捨て、一緒にブラシで床を擦る。
「そういえば、ここのお風呂って浴槽が大きいですよね、他じゃ余り見かけませんでしたが」
「そうじゃろう？　これはこの鞘の建築に関わった職人がの、独断で作ったのじゃよ」
なんでも、その職人が『大きな風呂に入って身体を伸ばすのが一番にきまってる。それにシャワーだけじゃ会話も生まれねぇからな』と、そんな拘りから作り上げたそうだ。
うん、ナイスな拘りだぞ職人さん。

「実際、ここでリラックスして浸かり、のんびりと周りの様子を眺めるのが好きな冒険者も多いからの。ここを出て行った者も、たまに浴場だけ利用しに来るくらいじゃよ」
「へぇ、なら俺もそうしようかな。俺、今Ｂ－ランクになったんですよ。これで晴れて一軒家と契約出来ます」
「ほう！　随分頑張ったみたいじゃの。ここを卒業するまでの期間の最短記録だのう」

そのまま掃除を済ませ、浴槽にお湯を満たしていく。
随分な勢いでお湯が溜まって行くのだが、どこから来ているのだろうか？

そんな疑問はさておき、服を脱ぎ身体を洗い、浴槽へと浸かる。
朝ではなく、夜の一番風呂というのも中々乙なものだ。
外の依頼を終えた人達も、きっと疲れを癒しに殺到してくるだろう。

「湯加減はどうかね？」
「最高ですよ、ガンドールさんもどうです？」
「嬉しいお誘いじゃの。どれ、たまにはワシも若者と裸の付き合いでもしようかの」

二人で湯船に浸かり、特に会話もなく、穏やかに浴場を眺める。
ガンドールさんもやはり歴戦の戦士なのだろう。一瞬見えた体は、とても老人とは思えない鍛えられた物であり、同時に刻まれた古傷も、俺と比べても遜色のない、歴史を感じさせる物だった。

「ふむ、そういえば、シュテル君はどうして冒険者になろうと思ったんかの？」

静かにその静寂を破り、ガンドールさんが語りかけてくる。

冒険者になった理由、か。最初に勧められたというのもあるが、なんでだろう。

改めて聞かれると、どう答えて良いか迷ってしまう。

「……人に勧められた、というのもあります。でも、そうですね……他にも理由はある様な気もするんですけど、今は良く分かりません」

理由はともかく、入ってよかったとは思っている。

まだ余り時間はたっていなくとも、それでも俺にとってはかげがえのない時間だ。

「そうか……そんなものかもしれんの。いつか、その理由が分かる日が来るといいの」

「ええ、案外、もう答えは出来ているのかもしれませんけどね。出てこないだけなのかも」

そして、また場を沈黙で支配される。

しかし、やがて浴場の外が騒がしくなってきた。

「なんでぇ、もう誰かはいっちまってらぁ」「おっさん、一番風呂なんかに拘ってもしょうがねぇだろ」「ダルベっさん本当風呂好きだよな」

聞きなれた声も一緒に聞こえてくる。久しぶりの再会になりそう

だ。

「さて、それじゃあワシは先に失礼するかの。爺がいつまでも独占していたら、嫌な顔されるかもしれんからの」

「そんな事きっとないですよ。皆、いつも掃除してくれているお爺さんに感謝してる筈ですよ」

その言葉に笑みを浮かべ、静かに浴場を去っていくガンドールさん。彼もきっと、沢山の人を見てきたのだろう。そして、当然様々な言葉、思いを今の様に聞いてきたのだろう。

「お、爺さんが入ってったのか。いつもご苦労さん」「あ！　あの時の爺さんじゃねぇか！」「爺さんいつもありがとよー」

ほら、やっぱりそうだ。

## 第二話「不穏な知らせ」（前書き）

第四章、昨日から開始させてもらいました。
ですが、昨日は投稿ミスで、最後の一文を掲載しわすれてしまい、すぐに追加したのですが、もしかしたら見ていない人もいるかもしれません。

また、第二章の閑話「女魔術師と元騎士ギルド？」において、最初の回想シーンで重大な誤表記を発見しましたので、修正しました。

## 第二話「不穏な知らせ」

浴場に入ってきたのは、アルヴァストさん、そしてもう一人、始めて見る男性だ。

「うお！　シュテルもいるじゃん！」

「お、アルヴァスの知り合いか？」

「俺とおっさんと同じ部屋の剣士だよ。結構有名だぜコイツ」

年の頃、３０前後といったところだろうか、若々しさを感じはしないものの、中肉中背、程よく引き締まった身体だ。

穏やかな顔付き、ブラウンの髪、全体的に優しそうな感じがする。

「二人とも久しぶり。さっき帰ってきた所だよ」

「おう、あんまり遅ぇから死んじまったかと思ったぜ」

「ねぇよ。んで、どんな依頼だったんだよ、教えてくれよ」

ああ……改めて帰ってきたんだなって実感する。

「そうだなぁ、行きと帰りの契約だったから、その商人の仕事が終わるまで、俺も町で仕事を請けたりしてたんだよ」

アルシャさんとの約束もあり、事実を多少捻じ曲げ、それでも体験した事の一部を語る。

俺のランクが急成長した事については、やはりアルヴァスが悔しそうに「俺もその町にいきゃよかった！」なんて言っている。

たしかに、あの程度ならアルヴァスだって十分に戦えるだろうし、もし一緒にいたらきっとＣ－ランクにはなれただろう。

「ところで、そちらの方は？　たぶん始めまして、ですよね？」
「おっと、俺はフリーキーだ。ダルベっさんとはよく組んで仕事をしてたんだ。最近は、このアルヴァスも一緒に組むようになってな」
「最近おめぇいなかったろ？　だからたまには3人で組もうってな」
アルヴァス達も、この半月程様々な依頼を受けたそうだ。お互いの近況報告をしながら、湯船で疲れを癒す。
「そういやシュテルが街から出て三週間くらいだったか？　例の盗人達、脱走したらしいぜ？」
「脱走って、騎士ギルドの牢獄からか？」
「ああ、でもその後すぐに、街の外で惨殺されてたって話だ」
すぐに惨殺……追っ手に殺されたって事なんだろうか？
「その話なら俺も聞いたぞ。ほら、俺って普段冒険よりも仕事の仲介多いだろ？　ダルベっさんにも話したが、今も殺害した犯人を騎士ギルドで捜してるらしいぞ」
「ああ、でも懸賞金がつくでもねぇし、情報を買い取るって話もないから関わらない事にしたんだったな」
という事は、たとえ犯罪者でも殺害は罪になるのか。
いや、当然と言えば当然だけど、この世界の様に人が簡単に命を落としかねない世界ならもしかして、なんて思った訳だ。
「一応、騎士ギルド預かりの事件に手を出したって事になるしな。ほんっとう、面倒な連中だぜ。俺が止めなかったら、シュテルだってあの時殺してたかもしんねぇし」
「ははは……あの時は頭に血が昇ってたんだ。止めてくれて助かっ

たよ」

俺は皆よりも先入っていたし、そろそろ人も増えてくるだろうと先に上がる事にした。

風呂上りに一杯飲みにいかないか、と誘われたのだが、さすがに今日はゆっくりと休みたいのでその誘いを遠慮する。

そういえば、以前もダルベストさんの誘いを断ってしまったし、今度は自分から誘うのもいいかもしれないな。

「殺人犯、か」

部屋で一人、先ほどの話を思い返す。

この世界だって、しっかりとした法律があるのだ、当然人を殺すのは罪なはずだ。

そんなの事は人として当たり前なのに、こんな疑問を持つ事や、あの時盗人を本気で殺そうとしてしまった事を思い出すと、自分が何処か壊れてしまっているんじゃないかと不安になる。

まだ、心が不安定なのか、浮ついているのか。

それでも、少しずつ俺は自分の事を分かって来たと自負している。

人に言われて、初めて気がつくような未熟者ではあるが……。

翌日、結局昨日はダルベストさんやフリーキーさん、そしてアルヴァスの三人だけで飲みにいったらしい。
目が覚めた段階で、部屋中にアルコールの臭いと大きなイビキが鳴り響いているのだ、恐らく間違いないだろう。

俺は、今日は依頼を受ける予定もないので、剣も鎧もロッカーに保管して、クロースアーマーもオーリエさんに渡した。
今日は長い間空けていた工房の掃除と、手に入れたカイルーンやトーパラスの生態素材を保管する予定だ。
工房には一応、素材を保管するための蔵が備え付けられており、劣化する速度を緩やかに出来る。
これも、ある意味冷蔵庫の様なものなのだから、食材も一緒に保存してみようか……いや、やっぱりやめておこう。

「あら、シュテルじゃない！　いつ戻ったのよ？」
「あ、サラじゃないか、久しぶり。昨日の夜に戻った所だよ」

受け付けまでやってきた所で、女性寮へと続く西の階段からサラが降りてきた。
相変わらず大胆な服装だ。まぁ、これからの季節は多少皆も薄着になるだろうが、さすがにここまでは……。

「あら？　シュテルもこういうのに興味ある？」
「一応男だからね。サラもあんまり挑発とかしてると、危ないぞ？」

胸を強調する様に腕を組み、身体を傾げて見せ付けてくるが、う

ん。これは良い物だ。
ちょっと失礼かもしれないが、バニーガールと言う文化を思い出した。

「今日は工房の掃除に行くんだ。だから依頼は受けないんだけど、もしスフィア達と行き会うことがあれば俺が戻ってきた事伝えておいてくれないかい？」
「……以外と反応薄いわね。そうね、午後から何か依頼を受けるつもりだし、その時に話しておくわ。覚悟しなさいよ？　ミステなんて自分の所に報告に来るべきだ！　なんて言いかねないわよ？」
「ははは……そうかもしれない。覚悟しておくよ。じゃあまた後で」

そういえば、ミステも鞘に住んでいるのだろうか？　見かけた事は一度もなかったが。

街を眺めながら歩き、何事も無く工房まで到着した。
やはり、この街の賑わいはアクラスとは比べ物にならない。久しぶりなせいか、少し圧倒されたというか、居心地が悪い様な、変な感じだ。
自分は田舎暮らしの方が向いているんだろうか？

「ううむ、外観は褒められたものじゃないけど、仕事には影響がないからなぁ」

自分の工房を見上げながら、改めてそんな感想を漏らす。
別に不満ではないが、やはりもう少し、綺麗にというか、舗装したいと言うか……。

扉に付けられている大きな南京錠を外し、重たい扉を開く。
少し金属が軋む音が不快だ、油でも差しておかないと。

「ありゃ？　意外と綺麗……っていうか、まったく埃がつもってないじゃないか」

もしかして、親方が工房の管理をしていてくれたんだろうか？
ここの鍵を持っているとしたらそ親方くらいしか……。

「ん？　なんか物が増えてないか？」

よく見ると、今まで何も無かった工房の一角に、作業用の机や、薬品棚、それにガラス機材や大きな金属の箱が運び込まれていた。
これは一体……？

「あら、工房が開いていると思いましたら、シュテルさんでしたのね。合同任務、お疲れ様でした」

背後からの声に驚いたが、それよりも驚いたのはその言葉の内容だ。

「レイニーさん？　どうしてここに……いえ、それよりも合同任務ってなんですか？」
「ふふ、隠さなくてもいいですわ。ガンドールから聞いておりましたので」

呼び捨て……いや、先々代の鍛冶ギルドの長や、錬金術ギルドの長とも関わりがあるくらいだし……。

「それでも、余り言わないで下さいね？」

「分かっていますわ」

軽い調子で答え、工房の一角で作業を始めるレイニーさん。

テキパキと言った様子で、どんどん周りを整理して行く。

って。

「そうじゃなくて、どうしてレイニーさんがいるんですか？　それにその荷物は……」

「……バレてしまいましたか。不可視紋章を刻むのが遅すぎてしまったようですわね」

不可視紋章って、秘密の工房でも勝手に作ろうとしてたのかこの人は！

「いえね、これから先、恐らく大規模な錬金術を使う事になりますでしょう？　その為に道具を移動してきたんですわ」

「たしかに、魔術剣を作るならそれなりの設備は必要になりますね」

「でしょう？　それに、私もその剣の研究を長に依頼されたんですの。シュテルさん、簡易的な発動剣の研究も依頼していたでしょう？」

そういえばそうだった。

これが一般的になれば、今よりも戦いやすくなるだろう。

「研究分野は私達錬金術師の畑ですもの。しかし、機密である魔術剣を研究できるのは私だけ。私の工房には来客も多いので、こうしてこちらを使わせてもらう事になったんですのよ」

なるほど……事後承諾になるけど、別にいいか。それに留守中の掃除までしてもらったみたいだし。

「そういう事でしたか。でもなんで不可視紋章なんて……」

「それは勿論、シュテルさんを観察する為ですわ」

「ええ！？」

この人、もしかしてまだ俺の事を疑って……？

「どんな独り言を言うのか、どんな作業風景なのか、もしかしたら、ここで情緒溢れる光景を……」

「もういいです。冗談でも恐い事言わないで下さい！」

お茶目を通り越して、若干引いてしまうような事を言う人だ。案外はっちゃけた性格なのか？

「そうそう、勝手に掃除をしてしまいましたが、大丈夫でしたか？物の位置はなるべく変えないように心がけたのですけど」

「あ、それは大丈夫です。有り難う御座いました」

「いえいえ、私も通い妻の様な経験をさせてもらい、心が若返る思いでしたわ」

……やっぱりこの人苦手だ。

## 第三話「輝く瞳」（前書き）

日常的な話となります。

## 第三話「輝く瞳」

「よし、とりあえずこれでいいか」

カイルーン水晶体を七つ、トーパラスの巨大な水晶体を一つ倉庫にしまい込んだ。

何やらレイニーさんが物欲しそうな目で見てた気がするが、見なかった事にしよう。

「シュテルさん……つれないですわ」

「欲しいなら欲しいって言ってください」

「欲しいです」

「早っ」

錬金術で装飾用に作り変えるとの事だし、見本を見せてもらえるなら、という事で一つ渡す。

この水晶体は主に海の向こうへと輸出されるらしく、加工前の状態では余り此方には流れてこないそうだ。

「あちらの大きな水晶体はどうするんですの？　あの大きさですと、加工して売りに出せばかなりのお値段になると思いますわ」

「そうなんですか？　でも、そんなにお金に困ってるわけでも無いんですよね……今は腐らせないように加工だけでもしておいた方がいいですよね？」

彼女の言うとおり、あれほどの大きさの水晶体なんて普通は出回らないだろうし、加工してしまえばその扱いは宝石と変わらないらしい。

直径３０センチもある宝石なんて、たしかに値段の想像がつかな

い。

「水晶体は保存溶液に付けてあげれば劣化を防げますし、そのままでも大丈夫ですわよ。後で調合しておきますわ」
「それは助かります。お願いしますね」

そして、早速彼女は自分用の作業机で何やら溶液の調合をし始める。

これは保存溶液ではなくて、恐らく加工に使う物なのだろう。すぐ横に色鮮やかな粉末が用意されている。

「これは、ブライトランプの発色にも使われる着色料ですのよ。これで染め上げて、さらに結晶化させて硬度を保ちますの」
「へぇ、じゃあこれも光ったりするんですか？」

何気なく、そう聞いてみたのだが――

「……今なんと？」
「ですから、これもブライトランプみたいに光らせたりとかするのかなぁ、と」

珍しく、ベールで隠れてる顔がポカンとしている様に見える。口なんて本当に開いている。

そんなにおかしな事を言っただろうか？

「ちょっとやってみますわ。色は……紫にしましょう」

やおら手の動きを早め、淀みなく、まるで精密機械の様に調合を勧めていく。
途中で邪魔になったのか、レイニーさんはローブのフードを脱ぎ、顔を露出させた。

（隠してたわけじゃなかったのか……）

漸くはっきりと見る事が出来たその顔は、やはりどうみても三十代、いや、二十代でも十分通用する若々しい物だった。
今は調合に夢中なのか、いつもの妖艶な雰囲気は消え、楽しそうに瞳を輝かせて調合を進めている。
髪はローブと同じ紫で、瞳も同じく紫だ。
今調合している色も紫だし、きっとこの色が好きなのだろう。

「後はこれで少し置いて、その後魔力を流し込めば完成ですわ」
「以外と簡単なんですね」
「ここまでなら、誰でも出来ますのよ？　問題なのが次の工程。魔力を流し損なえば当然歪な形になってしまったり、中にヒビが入ったり。最悪の場合、爆発なんて事にもなってしまいますのよ？」
「それは、恐いですね……」

爆発だけは勘弁してもらいたい。しかし、レイニーさんに限ってそんな失敗はしないだろう。

「初めての試みですし、どうなるか見ものですわね？」
「なんですか、その笑みは」

ベールに隠れていないその顔は、とても落ち着いた大人の女性そのもの。
その顔で、にんまりと悪戯心たっぷりで笑う姿がなんだ可愛らし

い。

「そろそろですわね」

懐から懐中時計を取り出し、水晶体を溶液から取り出す。
そして、そのまま魔力伝導率の高い小さな容器に移し、海霊水を注いでいく。

「あ、そうだ。時計ってどこに行けば買えますか？」
「ちょっと待ってくださらない？　今集中している所ですの」

おっと、そうだった。爆発なんてされたら大変だ、邪魔をしてはいけない。

溶液の中の水晶体は既に紫に色づいていて、まるでアメジストの様だ。
それが徐々に縮まって行く。
結晶化すると言うよりは、圧縮させるといった所か。

「無事、完成しましたわ。今回は一緒にブライトストーンの混合液を浸透させたのですけど……」
「じゃあ、反応液に入れてみましょうか」

ブライトランプは、鉱石を砕いた溶液と、それを反応させる薬品を混ぜる事で、初めて発光する物だ。
その反応させる薬品の効能が時間経過で弱まるため、永遠に光らせる事が出来ない訳なのだが。

「では、ちょっと試してみますわね」
「じゃあカーテン閉めますね」

窓以外から光を取り込む場所が無いため、この工房は昼でもブライトランプを点けている。
今回はそのブライトランプも一旦消して、完全な暗闇を作り出す。

「入れますわよ？」
「ちょっと待ってください、今いきますから」

急に暗くなったため、まるで前が見えないが、声を頼りに恐る恐る進んでいく。
すると、ポッっと小さな明り灯る。どうやらレイニーさんが小さな明りをつけてくれた様だ。

「それでは」

すると、今度はチャポンという液体に落ちる音と、底に到達したコツンという音が聞こえてくる。しかし、一向に明りがつく様子がない。

「失敗、ですかね」
「まだ分かりませんわ。浸透している分反応が鈍いのかもしれません」

その言葉を信じて、ただじっと前を見つめる。すると、ぼんやりとだが、俄かにビーカーの輪郭が浮かび上がってくる。

「これは、成功と言って宜しいかと思いますわ」
「そうですね、凄く、綺麗です」

ビーカーの中で、次第に光を強めていく水晶体。
うっすらと紫の光を放ちながら、ビーカーを照らし出している。
その光景が幻想的で、思わず見とれてしまう。

横を見れば、同じく光り輝くオーブを見つめているレイニーさん。
幻想的な光を浴びているその横顔が、彼女の妖艶さをより一層引き立てている。
ただ、オーブと同じ輝きの瞳が、どうしても悲しそうな色に見えるのは、何故なのだろうか……？

「さて、実験も成功しましたし、そろそろ明りをつけましょう」

彼女がランプに明りを点し、俺もカーテンを開ける。
先ほどの表情はもうどこにも残っていなく、満足した様子でオーブを眺めている。

「これ、頂いても宜しくて？　錬金術ギルドに提出して、新たな商品として売り出せないか掛け合ってみようかと思いまして」
「構いませんよ、それはあげた物ですし。それにしても綺麗でしたね、残りの水晶体も同じように加工しようかと思うんですけど」
「でしたら、今度やり方をお教え致しますわ。そんなに難しい技術でもありませんもの」

願っても無い提案だ。レイニーさん程の使い手から直に手ほどき

を受けられるなんて。
　ちょっと不思議でよく分からない人ではあるけど、少なくともこの人は悪い人間ではない気がするし。

「そうそう、時計でしたわね？　購入するならガルラント通りが宜しいかと。あの通りは貴族の方や裕福層の方々が訪れる通りですし」
「あ、そうなんですか。まだあの通りには余り行った事がなかったんですよ」

　そうと分かれば早速行って見よう。
　どうやらその通りの商店はどこも早く店を閉めるらしい。

「私はもう少しここで調合しますので、後始末は任せてくださいまし。保存溶液の方も作っておきますわ」
「有り難う御座います、それじゃあ後はお願いしますね」

　空を見れば、やや太陽が下がり始めていた。季節がかわっても、この世界の日照時間は余り変化がないのだろうか？

「さて、お金は足りる……だろうな」

　お金を入れる小袋にはたっぷりと中身が詰まり、大きく膨らんでいる。
　これでも鞘に置いて来た方なのだが、それでも２０万メルスが入っている。
　あの、アクラスで大量のカイルーン狩った時の報酬と、部位を清算した結果だ。

「どんな時計を買おうか迷ってしまいそうだな」

そんな嬉しい悩みを想像しながら、俺は魔術講習以来足を運ぶ事が無かった通りへと向うのであった。

## 第三話「輝く瞳」（後書き）

次回から、ようやく物語は動き出します。
展開が遅くて申し訳ありません。

## 第四話「出る杭は切り落とされる」

以前来た時と変わらず、通りには貴族風の人物や、裕福さを現しているかのよう豪華な馬車が行き交っている。
他の通りの様な賑やかさは無く、店からの呼び声や口上、客引きの店員も一切見当たらない。
ただ、優雅に時が流れているその有様に、一瞬別の街に迷い込んでしまったかのような錯覚に陥る。

「参ったな、せめてあの鎧でも着ていた方がよかったか？」

今の自分の服装は、ただのカーゴパンツに薄手のシャツと、一般人丸出しの格好だ。
なんとなく、浮いてしまっていると言うか、豪華な店構えをしている商店に入るのが躊躇われてしまう。

幸い、ショウウィンドウを見ればその店で取り扱っている商品がすぐに分かるので、入って聞いてみたり、間違って入ってしまう心配はないのだが。

「ここも、装飾品の店か。やっぱり宝石類はどの世界でも一種のステイタスなんだな」

高級そうな服から装飾品、特に煌びやかな細工の施されたアクセサリーを取り扱う店が多い様だ。
中には美しい木目の浮かぶアンティーク調の家具や、実用性があるかはわからないが、豪華な甲冑や剣を飾る武具店まである。

「ふぅむ、俺の作った鎧も負けてないな。今度同じ製法でフルプレートアーマーでも作ってみるか？」

こうしていると、女性がよく行うウィンドウショッピングの面白さを理解出来る。

見て周るだけで、心が満たされて行くからだ。

「お、ここだな」

漸くお目当ての店を見つける事が出来た。看板には”刻む時の柱”と書かれている。

ショーウィンドウには細やかな意匠の黄金の懐中時計や、琥珀の様な、透明感のある鼈甲色の腕時計、そして木の年輪が美しい、大きな柱時計まで展示してある。

「随分、高そうな物ばかりだな……」

正直、２０万メルスでも買えるか不安になってきた。

「いや、しかし展示用って事もあるからな」

意を決して扉を開くと、カランカランと来客を知らせるベルが鳴り響く。

「いらっしゃいませ、どうぞ、ごゆっくりとご覧下さい」

愛想良く、好きに店内を見ていいと言う店主と思しき老齢の男性。

とくにおかしな反応もなければ、怪訝そうな顔もしていない。

一般人でも時計を求める人は多いという事だろう。

手に取る事は出来ない物の、すぐ近くで見る事が出来るように展示されている品々。
中には値札の付いていない、値段を聞くのが恐ろしくなってしまうような物まであるのだが、逆にリーズナブルな値段の商品もしっかりと取り扱っている。

「４万メルスか。たしかに４万あれば宿に一週間以上は裕に泊まれる金額だ」

目に留まった一つの懐中時計。
贅沢品と呼ばれるだけはある値段設定だが、それでも買えない値段では無い。
武具だってこれくらいの値段の物はいくらでもある。
尤も、自分の命を守ったり、稼ぎの手段となる武具の値段と比べるのもお門違いかもしれないが。

改めてこの時計を観察する。
鎖ではなく、編みこまれた皮紐が取り付けられており、金属製の本体も皮のカバーで保護してある。
これは、野外で活動する人向けの商品なのかもしれない。

「店主さん、これを買おうと思います。大丈夫ですか？」
「おお、お客さんはそれを買って下さるのですか。それは最近私が作った物なんですよ。なんでも今、皮や柔軟性のある物で保護するというのが、鍛冶業界でも流行っているようでして」

……思わぬ所でも流行り始めているようだ。
個人的に、金属質な物と、自然素材が組み合わされた物は好きだし、この時計は好みにドンピシャっといった感じだ。

「４万メルス、金貨で構いませんか？」
「はい、たしかに。では、此方のメンテナンス器具もどうぞ」
小箱に入ったネジ回しと、きめの細かい布、革紐の手入れの為の油も一緒に渡された。
４万でこれら一式が手に入るのなら、良い買い物をしたと言えるだろう。

早速革紐を首にかけ、本体を胸のポケットにしまい店を後にする。
折角この通りに来たのだし、たまには魔術師ギルドの方にも行って見ようか。

なんでも、俺が留守の間にレストさんが引率依頼の護衛を頼みに来たらしく、俺の変わりにアルヴァスが引き受けたそうだ。
レストさんにも、街を離れる旨が伝わるようにしなかった俺の落ち度だ。なので、もし居たら一言謝ろうとも思い、向かう事にした。

「そういえば、騎士ギルドもこの付近にあったんだよな……」

昨日の話や、これまで聞いてきた話から、どうも敬遠し勝ちだった所だ。
そういえば、初日にバッサリと言葉で切り伏せたあの男性、もしかしたらあれが原因で何か面倒事に――

「そこの男、少し止まれ」

背後からかかる男性の声。
周りを見渡して、付近には俺の他に歩いて移動してる人なんて居

ないのを確認して、ゆっくりと振り返る。

「もしギルドカードを所持しているのなら、情報の開示をして貰おう。捜査の一環だ」

男は全身鎧を着ていて、ヘルムの所為で若干声がくぐもっていた。鎧のデザインや、装飾に使われている布から、騎士ギルドの人間だと察しがつく。

事を荒立てる必要もないので、素直にギルドカードの情報を開示し、相手へと見せる。

「冒険者ギルドのシュテル……間違いない」

しかし、どうやらお目当ての人物は俺だった様だ……。

「このままお前には同行して貰う。拒否権はない、大人しく付いてくることを勧めるぞ」

「……分かりました」

まだ、悪い事になると決まった訳ではない。大人しく指示に従う。もしかしたら、先日の脱走の件で俺に用があるだけかもしれない。

連れてこられた騎士ギルドの本部は、冒険者ギルドに勝るとも劣らない大きな建物だった。

それでいて、魔術師ギルドの様な立派な門構えをしており、両サイドには槍を持った騎士が門番をしている。

ロープや手枷といった物はつけられてはいないが、大人しく先導する騎士に追順して建物内へと入って行く。
他のギルドとは違い、ギルドウィンドウ等はロビーに設置されてはいなく、受付窓口で事務をする人達も、ただ書類と顔を向き合わせ、時折小型のウィンドウを操作しているだけで、こちらを見向きもしない。

「こっちだ」

男はそのまま、ロビーの奥にある通路へと進む。そしてその先にある扉にも、また見張り役の騎士が付いている。

「ここは、地下へと向かうのですか？」
「いいから付いて来い」

無駄口を叩くな、と言わんばかりだ。
そして到着したのは、紛れも無い牢獄。

「入れ」
「何故ですか。入れられるような事をした覚えは無いのですが」

ここまで来てしまえば、さすがにこっちも黙ってはいられない。

「お前には殺人の容疑がかけられている。しかるべき取調べが始まるまで、ここにいろ」
「何を根拠に！」

先日戻ってきたばかりだと言うのに、何を言っているんだ？
しかし、それでも牢に押し込められてしまう。

その気になれば逃げる事も簡単だが、そんな事をする訳にもいかない。

今は大人しく、その取調べを待つしかないと言う事か……。

それから三時間程経った。

幸い時計を没収される事はなかったので、時間を正確に知る事が出来た。

今は夕方六時を少し過ぎた所。薄暗い地下では日の光が差し込む事もないので、もし時計がなければ時間などわかりはしなかっただろう。

「折角買ったのに、最初の活躍がこんな事だなんて……」

「ふん、何の活躍だって？　最近随分と働き者と評判ではないか」

地下室に反響する、人を小馬鹿にするような声。
時計から目を離すと、そこには先ほどの騎士よりも、幾分豪華な装飾を施された鎧を着込み、ヘルムを外した中年の男性が此方を見下ろしていた。

「貴方はたしか、診断所で会いましたね」
「ふん、覚えていたか。貴様の様な無礼な男、こちらは二度と会いたくはなかったのだがな」

だったら、担当を変わってもらえばいいんじゃないか？
こちらとしても願い下げだ。

「で、これはなんのつもりですか？　突然こんな所に入れられて、こちらとしても穏便に済ませる訳にはいかなくなりますよ？」
「貴様は自分の立場が分かっていないようだな。貴様は七人もの囚人を殺害した凶悪犯という事になっているのだぞ？」
「なんの証拠がある。それに俺は昨日この街に帰ってきたばかりだ」

もう言葉に気をつける気も失せる。
どういうつもりなんだ本当に。

「殺害動機もあれば、お前がこの近くに潜伏していなかったという証拠もない」
「俺は港町で仕事をしていただけだ。ギルドに問い合わせればすぐに分かる」

どうやら、今の一言は予想していなかったのだろう。一瞬怯んだ様に見える。
ここは畳み掛けるべきだろう。

「俺はアクラスの商人ギルドとも仕事をした。そっちにも問い合わせてみるんだな」

言い訳の一つである、行商人の護衛。
先に商人ギルドの話を言ってしまえば、後で証言した時の信憑性だって増す筈だ。

「事実などどうとでもなる。このままお前を追放処分にする事も、牢屋に閉じ込めておく事も可能なのだぞ？」

随分と強引だ。事実は関係ないとも言う。
目的は他にあるという事か？

「その気になれば、メイルラント砦の監獄に移して、全て無かった事にも出来る。お前は大人しく言う事を聞いていれば良い」
「……何が言いたい」

それとも、もしかしてただの私怨なのか？　いや、それだけでここまで人員を動かしたり、こんな――
成る程、そういう事か。

「そうか、例の七人もお前が」
「そこまでだ。黙ってこちらの質問に答えてもらおう」

間違い無い。あの七人は恐らくこいつの差し金で殺されたのだろう。
それも、今のこの状況を作り出すためだけに。

「何が聞きたい」

一体、何が目的なんだ、コイツは……。

## 第四話「出る杭は切り落とされる」（後書き）

順風満帆だったシュテル君に訪れる大きな障害。
今まで事が上手く運びすぎだったんです。余りに目立つ人は、目をつけられ易いものなのです。

感想やご指摘等、いつでも歓迎しております。
また、最近誤字が目立ってしまい、よく指摘してもらっています事を、この場をお借りして感謝申し上げます。

# 第五話「見当違いな男と場違いな男」（前書き）

シュテル君の獄中生活。

## 第五話「見当違いな男と場違いな男」

「貴様の所属を吐け。手に入れた情報を渡せ。そうすれば今回は見逃してやろう」
「冒険者ギルド。情報とは何の事だ？」

一体、何を言っているんだ？　まさか、今回の合同任務の裏に何かあったのだろうか？

「とぼけるな！　貴様が首都から送り込まれた人間なのは分かっている！　何を探っていた！？」

探る？　送り込まれた？　コイツは何を言っているんだ。

「随分と上が貴様を警戒していた。お前は何を握っている？　冒険者ギルドで何をしようとしていた」
「知らないな。俺はただの冒険者だ」
「まだ白を切るつもりか！　ならばこれでどうだ」

腰に差していた剣を抜き、切っ先を此方へと向ける。
脅しのつもりなのだろうが、こっちは牢屋の中にいる。
それに気がついたのか、慌てて声を上げる。

「おい、誰か鍵を持って来い！」
「ア、アルギス様！　何を！？」

看守はどうやら良識のある人間だったらしく、取調べ前に剣を突きつけるこの馬鹿の指示に難色を示している。

「何、これが取調べだ。いいから大人しく手械と鍵を持って来い！」

牢屋越しに手枷をつけられ、そのまま牢から別な部屋へと移される。

周りを石のブロックで囲まれた、これぞ取調室！　といった圧迫感を感じさせる小さな部屋。

「さて、これでもまだ口を噤むつもりか？　見上げた忠誠心ではないか」

「だから、何の話だ。俺はここに冒険者になる為に来ただけだ」

「まだ言うか！　その冒険者になれと指示したのは誰かと聞いている！」

……何かを知りたがっている？

それに、明確な情報やどんな目的を持っているか、何も検討がついていないと見える。

もし、本当にそんなスパイがいるとして、何故コイツはその情報を欲しているんだ？

「仮に、お前は何を知りたいと言うんだ」

「ふん、知れた事を。貴様の雇い主と同じ、この街の覇権を手に入れる為の礎よ！」

野心、権力、金。

それに順ずる情報や人の弱み、って所だろうか。

コイツを見る限り、上の指示と言うよりも私利私欲といった自分の為の様に見えるが……。

「アルギス様、そろそろお時間です」
「ふんっ、今日はこの辺りにしておいてやろう。だが、このままでいられると思うでないぞ！」

騎士に引き取られる様に去っていくアルギスと呼ばれた男。
これから、どうなってしまうのだろうか……。

牢に戻されてさらに二時間。時刻はもう九時を回りそうだ。
そろそろお腹も減ってきたのだが、食事は出されるのだろうか？

いや、出されたとしても、ちゃんとした食事と呼べる物かはわからない。
こんな状況なのに食事の質を心配するなんて、何処まで行っても性分と言うのは変えられない物だと実感する。

「囚人生活なんて、カノンも経験した事ないだろ絶対……（あるぞ）え！？」

「どうした行き成り、それよりも食事だ、食え」
「ああ、有り難う」

空腹の余り幻聴が聞こえてしまった様だ。
とにかく、どんな物であれ、出されたもの全部食べなければ――

「やっぱりこんなものなのか」

トレーの上に、皿が一枚と底の深い器が一つ。
皿の上には、硬パンを切り分ける時に出た端の硬い部分のみを集めた物。
器の方には何やら濃い緑のドロリとした液体が注がれていた。

「お世辞にも食欲が沸きそうにないなこりゃ……」

硬いパンをひたすらかじる。
スープをしみ込ませれば多少は食べやすくなるかもしれないが、問題のスープが、むしろポタージュの様な粘度を持っている為しみ込んでくれない。

「噛んだ分満腹感を得られます。って事か……」

不本意ながら、たしかに食欲は満たされる。
それでも、こんな楽しみのない食事なんて……。

「お、このスープは結構おいしいな」

意外な事に、この緑のスープはそこそこ美味しい物だった。
どうやら野菜がドロドロになるまで煮込んだ物らしい。もしくは、スープを作る時に沈殿した物なのかもしれないが。

俺は、この侘しい食事にも、僅かな希望を見出した自分がなんだか哀れに思えてきてしまい、思わず天井を仰いでしまう。

目に映るのは、照明の明りで揺らめく影だけ。それを見て暇でも潰せと言うのだろうか。

……ん、揺らめく？

「良い事を考えたぞ」

俺は、照明をケチって蝋燭のランプにしているこの牢獄に、この時だけは感謝した。

「なんだ、この臭いは」

マズい、看守にバレてしまうか！？

「おいお前！　何をしている！」

く、言い訳が出来ない、現場を押さえられてしまった！

ここは覚悟を決めて正直に話すしかないか……。

「パンを炙ってました」
「なぜそんな事をする！」
こちらを警戒し、少しでも怪しい動きをしたら、その手に持つ槍で刺し殺しそうな勢いだ。
何故そんな事をするかって？　そんな事決まっているだろう。
「こうすると、カリカリになっておいしいんだ。ポタージュに付けて食べると中々馬鹿に出来ない」
「……はぁ？　お前ここが何処だか分かっているのか？」
「牢獄だ。少しでも食べ物を美味しく頂こうとする努力も認めてくれないのか」
今蝋燭を取り上げられる訳にはいかない、まだ沢山パンが残っていると言うのに……。
「はぁ、好きにしろ。まったく、こんな場所で何をやってるんだコイツは……」
呆れた様子で持ち場へと看守が戻る。
こんな場所だからこそ、少しでも自分の生活環境を向上させようと思うのは当然だろう。
「それにしても、随分な量だ。もしかして、残させるのが前提なのかな？」
このまま全部食べようと思ったら、さすがに俺も顎が疲れてしま

う。
もしかして、廃棄する前に食えるだけ食わせるという事だったのだろうか？

何にしても、量だけは満足行く食事だ。
俺は引き続きパンを炙っていく。
こうして、俺の囚人生活最初の夜は更けて行った。

牢獄生活を始めて、今日で三日目の夜を迎えていた。
さすがに毎日取調べを受ける訳ではないが、それでもあのアルギスという男は執拗に攻めてくる。
『口を割らないのなら、割りたくしてやる』と言い、ついには身体的痛みを伴う取調べが増えてきた。

だが厄介な事に、俺の身体に刻まれた無数の傷を見て『やはりな、

相当な場数を踏んできたと見える。これは痛みで口を割らせるのは手間取りそうだ』と、見当違いだが、この状況なら仕方のない推論をしはじめた。

そのお陰で、余り傷を増やされるような事はしなかったのだが、この生活がいつまで続くのだろうと気が滅入って来てしまう。

唯一の暇つぶしである時計磨きももう飽きてしまい、革紐など、既に何年も使い込まれているくらい滑らかで柔らかくなってしまった。

食事は相変わらずあの大量のパンクズだったのだが、看守が気を利かせて大きめの蝋燭に変えてくれた。

そのお陰で捗りはするものの、自分がなんでこんな事をしているのかという、哲学めいた疑問を持つようになり、いよいよ精神が参ってきてしまっているのだと痛感する。

このままだと、最後には痺れを切らされて街の外に追放されるかもしれない。

そうなってしまえば、ギルド登録も抹消され、この街に出入りも出来なくなってしまう。

ただ、肉体年齢を操作してなんとかカラーチンンジャーを手に入れて、髪や瞳の色を変えれば、別人としてまた活動する事は出来る。

だが、それは最後の手段。

俺として生きて、出会った仲間達との繋がりを失う事になってしまう。それだけではなんとしても避けたい。

俺がいなくなった事にそろそろ疑問を持ち始めてもおかしくない頃合だが、果たして助けなど来るだろうか？

俺は唯、この状況を変えてくれる何かが訪れるのを祈っていた。

## 第五話「見当違いな男と場違いな男」（後書き）

次回はシュテル以外の視点となりますが、閑話ではなく本編扱いです。

# 第六話「捜索願い」

「え～シュテル戻ってたんじゃなかったの～？」
「ああ、昨日俺が起きたらもう居なかったんだよ。サラが最後に会ったんじゃねぇのか？」

昨日、サラからシュテルが街に戻っていると聞いて、今日朝一番で鞘に来たのに、昨日からシュテルが戻ってないと言う。
もしかして、昨日そのまま工房に泊まったりしたのかな？

「たぶんそうなんじゃねぇか？　もしかしてまた何か作ってるのかもな」
「むぅ～顔くらい出してくれたらいいのに～」

夢中になると周りが見えなくなっちゃうのかな？　うちのお父さんもムーンダストの事になるといつもそうだし、男の人はそんなものなのかもしれない。

「工房の場所もわかんないし、戻ってくるの待つしかないね～」
「だな。あ！　そ、そうだ！　俺レストさんにシュテルが戻ってる事教えにいってくるわ！」

突然閃いたのか、嬉しそうな顔で鞘を飛び出していったアルヴァス。
あれって絶対、レストさんに会う口実だよね？　なんだか子供だな～。

「しょうがないな～、午前中はサラとミステと何か仕事しようっと」

さすがに二日連続で外に泊まるとは思えないし、今日の夜には鞘に戻ってくるでしょ、きっと。

「依頼より、シュシュを見つけ出す方が先決。シュシュ捜索命令を発令する」

「ミステったら、そんなにシュテルに会いたいのかしら？」

「あはは～」

冒険者ギルドに集まり今日の予定を話し合ってたら、突然ミステがこんな事を言い出す。

でも、たしかに少し面白そう。シュテルの職場っていうのかな？工房にも興味があるし。

「じゃあ鍛冶ギルドに言って見る～？　私お父さんの付き合いで行ったことあるから、たぶん大丈夫だよ～」

「そういえばそうだったわね。うーん、私も今度スフィアの所で弓を新調しようかしら？」

「私はそろそろ新しいブーツが欲しい。蹴りの威力が上がるような奴を……」

ミステが誰を想像しているのか、しきりにローキックの練習をし始める。

なんだか微妙に洗練された動きだけど、これも特定の相手の脛を蹴っている所為なのかな？

「じゃ、鍛冶ギルドに行こっか～」

「あら、この洋服店、品揃えをかえたのかしら?」
「うん? あ、ここ来た事ある〜。女の子に人気なんだよね」
「でも、ショーウィンドウの展示が変わってる。前は男物はおまけ程度だったのに」

職人通りを冷やかしながら進む。やっぱり他の通りより変わったものが多くて、見ていて飽きないし面白い。
そういえば、私の剣もこの通りの職人さんに作ってもらったんだっけ。

「ここ、私の幼馴染の三兄妹がやってるのよね。お兄さんはもういないけど」
「あ〜そういえばそっか。店長、かなり強烈な人だよね〜」
「もう、兄妹じゃなくて姉妹と言った方がしっくりくる。バニティルの革命」
「そんな期待を込めた目で見ないで頂戴ミステ。私は男になるつもりなんてないから」

本当、何が人を変えるかわからないよね。
ちょっとしたきっかけで、その後の人生が大きくかわっちゃったりする事ってあるもんね。

久しぶりに来た鍛冶ギルドは、今日もモクモクと煙を上げて、鉄の打つ音がここまで響いてくる。
本部で作られる武器は、どれもユニークウェポンになる可能性のある、超一流の物ばかりだ。
私もいつか、そんな武器で戦ってみたいな～。

「ここがシュシュを奪ったギルド……」
「奪ったって……シュテルが学者になる姿、想像出来る？」
「……雑用？」

あはは、たしかにちょっと想像出来ないかも。
でも、シュテルって凄く物知りなんだよね。随分偏ってるけど。

「こんにちは～ちょっと聞きたいことがあるですけど～」
「おう！　ちょいとまっとくれ！」

その大きな声に、思わず耳を折り曲げてしまう。
私より耳の大きなミステとサラは、さらに辛そうに両手で耳を押さえている。
ここの人達は皆声が大きいから、慣れていないと驚いちゃうんだよね。

「お、誰かと思えば、レオフィスさんとこのお嬢じゃねぇか！」

「お嬢はやめてってば～。今日はちょっと聞きたいことがあって来たんだ～」
「ほう、なんだいそりゃあ」

幼い頃から顔を出していた影響もあり、受け付けのおじさんも好意的に接してくれる。
小さい頃は、ここの声や雰囲気が恐くて泣き出したりもしたけれど、そんな私をここの職人さん達は必死にあやしてくれたのを覚えている。
もしお父さんの影響で砕月を好きにならなかったら、もしかしたら私もここに入っていたかもしれないな～。

「私の友達がここで工房貰って働いてるって聞いたんだけど、その友達に用があるから、工房の場所を教えて欲しいんだ～」
「工房を貰った……？　ああ！　ひょっとしてシュテルの事かい？」
「うん、シュテルの事。おじさんしってるの？」
「ああ、新人で工房一つ与えられるなんざ今まで聞いた事もなかったからな。結構注目されてんだぞ？」

そっか。たしかにどこか工房に所属するんじゃなくて、自分の工房を与えられるなんて凄い事だよね。
でもあんな鎧を作るくらいだもん、工房をもらえるのも納得かも。

おじさんに工房の場所を教えて貰った私達は、そのまま三人で工房を探して歩く。
この辺りは道が狭く入り組んでいて、四方八方から鉄を打つ音や熱気が噴出していて、正直用が無ければ余り来たく無いくらいだ。

「私達はここで働くのは無理そうね……耳がダメになってしまいそう」

「学者ギルドの静けさとは真逆……私の耳が犠牲になってしまう……」
「今度からフード付きの服でも着なきゃだね～」
お互いに声を張り上げながら、なんとか会話を成立させ、その場所を目指す。
渡された地図を見る限り、どうやらこの一帯の最深部にシュテルの工房があるみたい。
なんでも、大昔に特別な武器を作るために用意された場所らしくて、今ではギルドの裏でそういう武器が作られているから、誰も使わなくなったとの事。

「大きいわね」
「でも、凄くボロ」
「なんだかお化けでも住んでそうだね～」

到着した工房は、そこだけ周りの建物を切り取られたかの様な空き地になっていて、そこにポツンと、忘れられた空家の様に建っていた。
入り組んだ迷路の様な道の果てにある所為か、なんだかこの場所が人を寄せ付けないみたいな、隔絶された世界の様な気さえしてくる。

「鍵は外れてるみたいだね～中にシュテルがいるっぽいね」
「扉が重たい……サラ、手伝って」
「はいはい、それにしても、本当大きいわねぇ」

ミステは一人、扉に手をかざして、ゆっくりと扉を押し始める。

それに習い、私もミステと一緒に扉を押し始める。
蝶番が錆びている訳でもなく、油も差されてるみたいだけど、扉自体の重さの所為で中々開かない。
ミステの腕力じゃ開かないのも無理もないかな。

「シュテル～居る～？」

工房の中には、大きな炉と作業机、それに金床や大きな水槽、それに恐らく倉庫に続く扉があるだけで、ガランとしていた。
炉には火も入っていないし、作業代にも何も置かれていない事から、何かを作っていた様にはとても見えない。

「随分と物が少ないわね。それに、シュテルの姿も見当たらないし」
「……人の気配がする。誰か居る」
「「え？」」

私とサラが同時に声を上げ、改めて周りを観察する。でも、どこにも人なんて見当たらない。もしかして倉庫の中にいるのかな？
そう思って、私は倉庫の扉に手をかけようとした。

「さすがにそこまで探られる訳にはいきませんわ、その手を離して下さらない？」
「誰！？」

突然、何も無い工房の一角から声が飛んでくる。
ミステとサラの二人も、その見えない声の主を探そうと警戒している。

「今そちらに行きますわ」

その声と同時に、何もない空間から突然ローブ姿の人、声から察するに、恐らく女の人が現れた。
まるで、見えないカーテンを潜ってきたかのように、ゆっくりと……。

「おかしいですわね。ここには人避けの紋章を刻んでいたはずでしたのに」
「わ、私が解除し、しました。シュシュが、友達が隠れてるかと思って……」

どうやら、本当にこの場所は隔絶された場所だったみたい。
でも、あのミステが怯えている……？

「そう……。そういう事は勝手にしてはいけませんわよ？　もし、貴方達がシュテルさんの名を呼ばなければ、そのまま消えて頂く事になっていたかもしれませんのに」
「ごめんなさい……ごめんなさい……」
「ちょ、ちょっとどうしたのミステ！？　貴方何者なの？　シュテルをどうしたのよ」

そうだ、シュテル！　この人が何者であれ、シュテルと関わりがあるのは間違いないはず。
だったら、きっとなにか知ってると思う！

「私達は、友達に会いに来ただけなんです。何処にいるのか、教えてくれませんか」
「シュテルさんでしたら昨日の昼過ぎには工房を出た筈ですわ。今何処にいるかまでは私にも分かりませんわ」

「昨日から戻ってきていないみたいなんです。心当たりはありませんか？」
「そうですわね、時計が欲しい様でしたので、恐らく工房から出た後、ガルラント通りに行ったと思いますわ」
時計……じゃあ次の手がかりはガルラント通りって事なのかな？
なんだかたらい回しにされてる様な気もするけど、段々面白くなってきたかも。
でも、なんだかこの人、少し不気味というか、不思議な雰囲気がする。
「それより、貴方は何者なの？　ここはシュテルの工房だと聞いたんだけど」
「私ですか？　ここで一緒に仕事をする事になったレイニーと申します。まぁ、通い妻のような物ですわ」
え？　え？　え？
「妻～～～～～！？」
シュテルって奥さんいたの？　いや、違う違う、通い妻って事は、本当の妻じゃなくて、あれ、でもそれって恋人のような物で？
「自称、ですけどね」
「自称って、それじゃあ押しかけ女房じゃない」
「そうとも言いますわね」

なんだ、ただのお節介焼きのお姉さんって事なのか～。
シュテルって女の人の知り合いが妙に多いよね、本当。

「ともあれ、シュテルさんを探すのでしたら、時計を取り扱っている商店に行って見ては？」
「うん、有り難うレイニーさん。もしシュテルがここに来たら、スフィアが探しているって伝えてもらえませんか？」
「分かりました、伝えておきますわね。そうそう、余りここで私に会った事や、ここに工房がある事を他言しないようにして下さいませんか？」
「うん、わかったよ～」

色々あったけど、次の手がかりも分かったし、結果オーライなのかな？
シュテルは工房に寝泊りした訳じゃないっていう事は、どこで夜を明かしたんだろう？
とにかく私達は工房を後にして、ガルラント通りへと向かう。

「ねぇミステ、どうしたのよ？　さっきからおかしいわよ」

ミステはさっきのレイニーさんの警告が恐かったのか、未だに顔を俯かせて震えている。
冗談だと思うけど、真に受けちゃったのかな？

「二人とも、ごめん。不用意に結界を破った所為で、危ない目にあわせてしまった……」
「何言ってるのよ、あんなの冗談でしょう？　何を恐がっているのよ貴方らしくもない」
「そうだよ～レイニーさんそんなに恐くなかったよ？」

二人でなだめる様に、ミステと頭の高さをあわせて語りかける。
それでも、目の前の顔は未だに蒼白と言っていいくらい、恐怖に彩られていた。

「違う、本当に危なかった！　わからないけど、本当に殺されてもおかしくなかった！　同じ魔術師だから、私には分かる！」
「ちょっと落ち着いてミステ。貴方のカンがよくあたるのは分かるけど……」

いつもはこんな風に声を荒げたりしないミステが、今は一番仲の良いサラにまでそんな声をぶつけている。
もしかして、本当に危なかったの……？

## 第六話「捜索願い」（後書き）

シュテル捜索は進んで行く。
でも本人たちは軽い気持ちで遊びみたいな物だったりします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2257t/

異世界への人材派遣

2011年10月10日00時05分発行